三雲遺跡

Ⅲ

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

第６３集

１９８２

福岡県教育委員会

三　雲　遺　跡

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

序

この報告書は，福岡県教育委員会が糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業に際し，前原町土地改良区と協議の結果，遺跡の大半を保存することができましたが，やむなく破壊される埋蔵文化財を昭和49年度から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は，前原町大字三雲地区の昭和49年度から昭和54年度までに実施した予備調査と圃場整備で削平あるいは道路敷となる部分の調査の一部を内容とするもので，『三雲遺跡』Ⅲとして公刊することになりました。

発掘調査の記録としては，満足のいくものではありませんが，本報告書を通して埋蔵文化財に対し，一層の御協力をいただければ幸いです。

なお，遺跡の保存と調査に対して御協力いただいた前原町土地改良区と地元の方々をはじめ，関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和57年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　　言

1．本書は，昭和49年11月25日から昭和54年３月31日までに，福岡県教育委員会が国庫補助を受けて，前原町三雲地区圃場整備事業のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した３冊目の報告書である。

2．本書の執筆分担は次の通りである。

第１章……柳　田　康　雄

第２章……柳　田　康　雄

第３章　第１節……柳田康雄・森田　勉・児玉真一

第２節……柳田康雄・小池史哲・丸山康晴
川村　博・平田定幸

第３節……柳田康雄・児玉真一

第４節……柳田康雄・小池史哲

第５節……柳田康雄・児玉真一・馬田弘稔
小池史哲

第６節……柳田康雄・橋口達也・森田　勉
馬田弘稔・小池史哲

第７節……柳田康雄・橋口達也・森田　勉
小池史哲

第８節……森田　勉・小池史哲

第９節……小　池　史　哲

3．遺物の整理・復原は岩瀬正信，図面作成においては担当者の外に平田春美・荒武麗子・豊福弥生・須山富子が従事し，掲載の写真のうち遺物撮影は九州歴史資料館の石丸洋主任技師の指導のもとに平島美代子が担当した。なお，写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次・挿図目次に示す通りである。

4．本書の編集は，柳田と小池が担当した。

本　文　目　次

序

第１章　調査組織と調査の経過 …… 1
１．調査組織 …… 1
２．調査の経過 …… 1

第２章　糸島の古墳文化 …… 7
１．糸島の古墳文化研究史 …… 7
２．古墳の分布と古墳群 …… 9
３．糸島の古式古墳 …… 13
４．横穴式石室の導入 …… 15

第３章　三雲遺跡の遺構と遺物 …… 17

第１節　サキゾノ地区の調査 …… 17
１．はじめに …… 17
２．Ｉ－１の遺構と遺物 …… 17
(1)　住居跡 …… 17
３．Ｉ－６～８の遺構と遺物 …… 40
(1)　住居跡 …… 40
(2)　その他の遺構 …… 44
４．Ｉ－８～10・14・15の遺構と遺物 …… 56
(1)　Ｉ－８の調査 …… 56
(2)　Ｉ－９・10・14・15の調査 …… 57
５．小　結 …… 61

第２節　イフ地区の調査 …… 62
１．はじめに …… 62
２．イフ－７の調査 …… 63
３．イフ－３の調査 …… 77

(1) 大　溝……77
(2) 石棺墓群……88
4．小　結……94

第3節　番上地区の調査……95
1．はじめに……95
2．II－5の調査……95
(1) 遺　構……95
(2) 土器溜出土の遺物……97
3．小　結……163

第4節　五反間地区の調査……164
1．はじめに……164
2．遺構と遺物……164
3．小　結……168

第5節　端山・築山古墳の調査……169
1．はじめに……169
2．端山古墳……169
(1) 古墳の位置……169
(2) 墳　丘……170
(3) 周　濠……174
(4) 甕棺墓……178
3．築山古墳……180
4．塚廻りII－6の調査……184
(1) 住居跡……184
(2) 土　壙……190
(3) その他の遺構と遺物……190
5．小　結……192

第6節　八反田地区の調査……193
1．はじめに……193
2．I－1の大溝……193

3．II－3の住居跡…… 196
(1) 住居跡…… 197
(2) 出土遺物…… 198
(3) まとめ…… 222
4．II－6のトレンチ…… 225
5．小　結…… 228

第7節　中川屋敷地区の調査…… 229
1．はじめに…… 229
2．I－7の調査…… 229
3．I－8・9・11の調査…… 231
4．小　結…… 240

第8節　下西地区の調査…… 241
1．はじめに…… 241
2．II－10の調査…… 241
(1) 住居跡状遺構…… 241
(2) 周　濠…… 247
3．小　結…… 254

第9節　屋敷地区の調査…… 255
1．はじめに…… 255
2．I－10の調査…… 256
(1) 縄文時代の遺構と遺物…… 256
(2) 甕棺墓…… 259
(3) 大溝状遺構…… 260
(4) その他の遺構と遺物…… 261
3．小　結…… 262

図　版　目　次

本文対照頁

図　版　1　　三雲遺跡中心部と端山古墳・築山古墳（パシフィック航業株式会社撮影）
図　版　2　1　サキゾノⅠ－1　1～4号住居跡（柳田康雄撮影）……17
　　2　1～5号住居跡（柳田撮影）……17
図　版　3　1　サキゾノⅠ－1　1号住居跡（柳田撮影）……17
　　2　2・3号住居跡（柳田撮影）……31
図　版　4　1　サキゾノⅠ－1　4号住居跡（柳田撮影）……36
　　2　5号住居跡（柳田撮影）……37
図　版　5　　サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器（平島美代子撮影）……19
図　版　6　　サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器（平島撮影）……24
図　版　7　　サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器（平島撮影）……29
図　版　8　　サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器（平島撮影）……29
図　版　9　　サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器・土製品（柳田・平島撮影）……31
図　版　10　　サキゾノⅠ－1　2号住居跡出土土器（平島撮影）……31
図　版　11　1　サキゾノⅠ－1　2～5号住居跡・住居外出土土器（平島撮影）……37
　　2　サキゾノⅠ－1・7出土玉類（柳田撮影）……39
図　版　12　1　サキゾノⅠ－1　出土鉄器（柳田撮影）……37
　　2　Ⅰ－1出土石器（柳田撮影）……39
図　版　13　1　サキゾノⅠ－7全景（柳田撮影）……40
　　2　1・2号住居跡（柳田撮影）……41
図　版　14　1　サキゾノⅠ－7　2号住居跡（柳田撮影）……41
　　2　3号住居跡（柳田撮影）……41
図　版　15　1　サキゾノⅠ－7　4～6号住居跡（柳田撮影）……41
　　2　7号住居跡（柳田撮影）……44
　　3　P10付近遺構（柳田撮影）……47
図　版　16　1　サキゾノⅠ－7土器溜（柳田撮影）……41
　　2　壺棺墓（柳田撮影）……50
　　3　柱穴群（柳田撮影）……47
図　版　17　1　サキゾノⅠ－7古墳時代祭祀（柳田撮影）……55
　　2　鉄剣出土状態（柳田撮影）……55
　　3　滑石製品と土器出土状態（柳田撮影）……50

図　版　18　　サキゾノⅠ－７土器溜出土土器・壺棺（平島撮影）……44
図　版　19　　サキゾノⅠ－７出土陶質土器（児玉真一撮影）……50
図　版　20　1　サキゾノⅠ－７・８出土石器（柳田撮影）……51
　　2　Ⅰ－７出土鉄器（柳田撮影）……51
図　版　21　1　サキゾノⅠ－７出土砥石（柳田撮影）……51
　　2　古墳時代祭祀出土土器（平島撮影）……51
　　3　滑石製品（柳田撮影）……55
図　版　22　1　サキゾノⅠ－８鉄刀・鉄矛出土状態（柳田撮影）……56
　　2　鉄刀・鉄矛（柳田撮影）……56
　　3　Ⅰ－８～15遠景（柳田撮影）……57
　　4　Ⅰ－10南北断面（柳田撮影）……57
図　版　23　1　サキゾノⅠ－15トレンチ（柳田撮影）……59
　　2　Ⅰ－15トレンチ（柳田撮影）……59
　　3　Ⅰ－14トレンチ（柳田撮影）……59
　　4　Ⅰ－８・14出土鉄器・土器（柳田撮影）……59
図　版　24　　イフ－７大溝中層出土土器（平島撮影）……59
図　版　25　　イフ－７大溝上層出土土器（平島撮影）……63
図　版　26　　イフ－７大溝上層出土土器（平島撮影）……66
図　版　27　　イフ－７大溝上層出土土器（平島撮影）……75
図　版　28　　イフ－７大溝上層出土土器（平島撮影）……75
図　版　29　　イフ－７大溝上層・最上層出土土器（平島撮影）……75
図　版　30　1　イフ－３大溝（柳田撮影）……77
　　2　大溝上層出土土器（平島撮影）……80
図　版　31　1　イフ－３大溝上層出土鏡片・小玉（柳田撮影）……84
　　2　鉄　器（柳田撮影）……85
　　3　石　器（小池史哲撮影）……86
図　版　32　1　イフ－３石棺墓群（柳田撮影）……88
　　2　石棺群（柳田撮影）……88
図　版　33　1　イフ－３　１号石棺墓（柳田撮影）……88
　　2　２号石棺墓（柳田撮影）……88
　　3　２号石棺墓（柳田撮影）……88
図　版　34　1　イフ－３　３・４号石棺墓（柳田撮影）……88
　　2　３・４号石棺墓（柳田撮影）……90

図　版　34　3　3・4号石棺墓（柳田撮影）……90
図　版　35　1　イフ－3　5・6号石棺墓（柳田撮影）……92
　　2　5号石棺墓（柳田撮影）……92
　　3　6号石棺墓（柳田撮影）……92
図　版　36　1　イフ－3　7号石棺墓（柳田撮影）……93
　　2　鏡片・鉄器・土器出土状態（柳田撮影）……84
　　3　鉄鎌出土状態（柳田撮影）……85
　　4　鏡片出土状態（柳田撮影）……84
図　版　37　1　番上II－5発掘区全景（柳田撮影）……95
　　2　中央部第3層土器出土状態（柳田撮影）……95
図　版　38　　番上II－5出土土器（平島撮影）……97
図　版　39　　番上II－5出土土器（平島撮影）…… 102
図　版　40　　番上II－5出土土器（平島撮影）…… 108
図　版　41　　番上II－5出土土器（平島撮影）…… 111
図　版　42　　番上II－5出土土器（平島撮影）…… 130
図　版　43　　番上II－5出土土器（児玉・平島撮影）…… 139
図　版　44　　番上II－5出土土器（平島撮影）…… 145
図　版　45　　番上II－5出土土器（児玉撮影）…… 149
図　版　46　　番上II－5出土土器・土製品（児玉撮影）…… 157
図　版　47　　番上II－5出土朝鮮系外来土器（児玉撮影）……152
図　版　48　　番上II－5出土朝鮮系外来土器（児玉撮影）……152
図　版　49　　番上II－5出土石器（児玉撮影）……158
図　版　50　　番上II－5出土石器・鉄器（児玉撮影）……161
図　版　51　1　五反間III－5北トレンチ（柳田撮影）……165
　　2　南トレンチ（柳田撮影）……166
　　3　南トレンチ（柳田撮影）……166
図　版　52　1　五反間III－5北トレンチ埋甕（柳田撮影）……165
　　2　埋　甕（平島撮影）……165
　　3　石　器（小池撮影）……167
　　4　古　銭（小池撮影）……168
図　版　53　　端山古墳・築山古墳・茶臼塚古墳周辺航空写真
　　（パシフィック航業株式会社撮影）……169
図　版　54　1　端山古墳と築山古墳（柳田撮影）…… 169

図　版　54　2　端山古墳（柳田撮影）…… 169
図　版　55　1　端山古墳の前方部（柳田撮影）…… 170
　　2　端山古墳遠景（柳田撮影）…… 170
　　3　端山古墳前方部葺石（柳田撮影）…… 170
図　版　56　1　端山古墳前方部1段目葺石（柳田撮影）…… 170
　　2　前方部1段目葺石（柳田撮影）…… 170
図　版　57　1　端山古墳東くびれ部1段目葺石（柳田撮影）…… 172
　　2　東くびれ部1段目葺石（柳田撮影）…… 172
図　版　58　1　東くびれ部葺石（柳田撮影）…… 172
　　2　東くびれ部葺石（柳田撮影）…… 172
　　3　西くびれ部葺石（柳田撮影）…… 174
図　版　59　1　八反田Ⅰ－1ｂトレンチ（柳田撮影）…… 178
　　2　甕棺墓（柳田撮影）…… 178
　　3　甕棺口縁付近（柳田撮影）…… 178
図　版　60　1　八反田Ⅰ－1ｂ甕棺（平島撮影）…… 178
　　2　周濠出土小形仿製鏡（柳田撮影）…… 180
図　版　61　1　築山古墳（柳田撮影）…… 180
　　2　築山古墳（柳田撮影）…… 180
図　版　62　1　築山古墳全景（柳田撮影）…… 180
　　2　Dトレンチ東くびれ部（柳田撮影）…… 180
図　版　63　1　Mトレンチ西くびれ部（柳田撮影）…… 180
　　2　Ⅰトレンチ石組（柳田撮影）…… 180
　　3　Lトレンチ後円裾部（柳田撮影）…… 180
図　版　64　　築山古墳出土埴輪・石器（児玉撮影）…… 181
図　版　65　1　周濠出土土器（児玉撮影）…… 183
　　2　周濠出土鉄滓（児玉撮影）……181
図　版　66　1　塚廻りⅡ－6北トレンチ（小池撮影）…… 184
　　2　南トレンチ（小池撮影）…… 184
　　3　1号住居跡（小池撮影）…… 186
　　4　2号住居跡（小池撮影）…… 187
図　版　67　1　1号住居跡出土土器（平島撮影）…… 186
　　2　2号住居跡出土土器（平島撮影）…… 189
　　3　陶質土器（小池撮影）…… 186

図　版　67　4　鉄　器（小池撮影）…… 187
図　版　68　1　石　器（小池撮影）…… 187
2　磁　器（小池撮影）…… 191
3　石　臼（平島撮影）…… 191
4　鉄　滓（小池撮影）…… 192
図　版　69　1　八反田Ⅰ－1ａ大溝（柳田撮影）…… 193
2　大　溝（柳田撮影）…… 193
3　大溝土層（柳田撮影）…… 193
図　版　70　1　八反田Ⅰ－1ａ大溝出土青磁（小池撮影）…… 195
2　大溝出土白磁（小池撮影）…… 195
3　大溝出土小形仿製鏡（柳田撮影）…… 195
4　大溝出土石器（小池撮影）…… 196
図　版　71　1　八反田Ⅱ－3住居跡土器群（柳田撮影）…… 197
2　住居跡内土器群部分（柳田撮影）…… 197
図　版　72　1　八反田Ⅱ－3住居跡内土器群（柳田撮影）…… 197
2　住居跡内土器群断面（柳田撮影）…… 197
3　住居跡（柳田撮影）…… 197
図　版　73　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 198
図　版　74　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 198
図　版　75　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 200
図　版　76　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 203
図　版　77　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 204
図　版　78　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 206
図　版　79　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 209
図　版　80　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 209
図　版　81　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 216
図　版　82　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 218
図　版　83　八反田Ⅱ－3住居跡出土土器（平島撮影）…… 220
図　版　84　石　器・土製品(小池撮影)…… 220
図　版　85　1　八反田Ⅱ－6ａトレンチ（橋口達也撮影）…… 225
2　Ⅱ－6ｅトレンチ（橋口撮影）…… 227
3　Ⅱ－6ｇトレンチ（橋口撮影）…… 227
4　石　器（小池撮影）…… 228

図　版　86　1　中川屋敷Ｉ－７東西トレンチ（柳田撮影）……229
2　南北トレンチ（柳田撮影）……229
3　Ｐ６・Ｐ７ａ・Ｐ７ｂ（柳田撮影）……231
図　版　87　1　中川屋敷Ｉ－８ａトレンチ（橋口撮影）……231
2　Ｉ－８ｃ住居跡遺物出土状況（橋口撮影）……232
3　Ｉ－８ｃ住居跡（橋口撮影）……232
図　版　88　1　中川屋敷Ｉ－９ｅトレンチ（橋口撮影）……232
2　Ｉ－９ｇトレンチ（橋口撮影）……232
3　Ｉ－９ｊトレンチ（橋口撮影）……235
4　Ｉ－９ｌトレンチ（橋口撮影）……235
図　版　89　1　中川屋敷Ｉ－11ｑトレンチ（橋口撮影）……237
2　Ｉ－11ｏトレンチ（橋口撮影）……237
3　Ｉ－11ｏ木棺墓（橋口撮影）……237
図　版　90　1　中川屋敷Ｉ－11ｏ木棺墓出土白磁壺（石丸洋撮影）……239
2　中川屋敷出土石器・土製品(小池撮影)……239
図　版　91　1　下西II－10全景（小池撮影）……241
2　II－10全景（小池撮影）……241
図　版　92　1　住居跡状遺構上層（小池撮影）……241
2　遺物出土状況（小池撮影）……242
3　鉄器出土状況（小池撮影）……242
4　下層完掘後（小池撮影）……242
図　版　93　1　周　濠（小池撮影）……248
2　周　濠（小池撮影）……248
3　周濠土層断面（小池撮影）……248
図　版　94　1　下西II－10住居跡状遺構下層出土土器（平島撮影）……243
2　住居跡状遺構上層出土土器（平島撮影）……243
図　版　95　1　下西II－10出土石器①（小池撮影）……243
2　住居跡状遺構上層出土鉄器（小池撮影）……245
3　周濠出土鉄器（小池撮影）……253
図　版　96　下西II－10周濠出土土師器・磁器（小池・平島撮影）……248
図　版　97　下西II－10周濠出土磁器（小池撮影）……251
図　版　98　1　下西II－10出土石器②（小池撮影）……253
2　周濠出土石鍋（小池撮影）……253

3　周濠出土鉄滓（小池撮影）……253
図　版　99　1　屋敷Ⅰ－10全景（小池撮影）……255
2　屋敷Ⅰ－10全景（小池撮影）……256
3　1号土壙（小池撮影）……256
図　版　100　1　甕棺墓（小池撮影）……259
2　甕棺墓（小池撮影）……259
3　大溝状遺構（小池撮影）……260
図　版　101　1　屋敷Ⅰ－10出土縄文土器（小池撮影）……256
2　石　器（小池撮影）……258
3　甕　棺（小池撮影）……259

挿　図　目　次

第　1　図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡……2
第　2　図　三雲遺跡地形図……3
第　3　図　三雲遺跡地籍及び地区割図……折込み
第　4　図　糸島の主要古墳分布図（柳田康雄作成）……10
第　5　図　サキゾノⅠ－1遺構配置図（柳田・池辺元明・小池史哲・小林義彦・内田恵三・赤川正秀・高田一弘実測，豊福弥生製図）……折込み
第　6　図　1号住居跡実測図（柳田・池辺・小池実測，豊福製図）……18
第　7　図　1号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武麗子実測，柳田製図）……19
第　8　図　1号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）……20
第　9　図　1号住居跡出土土器実測図③（柳田・荒武実測，柳田製図）……21
第　10　図　1号住居跡出土土器実測図④（柳田・荒武実測，柳田製図）……22
第　11　図　1号住居跡出土土器実測図⑤（荒武実測，製図）……23
第　12　図　1号住居跡出土土器実測図⑥（荒武実測，製図）……24
第　13　図　1号住居跡出土土器実測図⑦（荒武実測，製図）……25
第　14　図　1号住居跡出土土器実測図⑧（荒武実測，製図）……26
第　15　図　1号住居跡出土土器実測図⑨（柳田・荒武実測，柳田製図）……27
第　16　図　1号住居跡出土土器実測図⑩（柳田・荒武実測，柳田製図）……28
第　17　図　1号住居跡出土土製品実測図（柳田実測，製図）……29
第　18　図　2・3号住居跡実測図（小池・池辺実測，豊福製図）……30

第 19 図　2号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）……31
第 20 図　2号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）……32
第 21 図　2号住居跡出土土器実測図③（荒武実測，柳田製図）……33
第 22 図　2～5号住居跡出土土器実測図（荒武実測，製図）……34
第 23 図　4号住居跡実測図（柳田・内田実測，豊福製図）……35
第 24 図　5号住居跡実測図（柳田・内田実測，豊福製図）……36
第 25 図　住居跡外出土土器実測図（荒武実測，柳田製図）……37
第 26 図　Ⅰ－1出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……38
第 27 図　Ⅰ－1出土石器実測図（柳田実測，製図）……39
第 28 図　Ⅰ－1～7出土玉類実測図（柳田実測，製図）……39
第 29 図　サキゾノⅠ－6～8遺構配置図（新原正典・川村博・小林実測，豊福製図）……折込み
第 30 図　Ⅰ－7　1号住居跡実測図（新原・渡辺健二実測，平田春美製図）……折込み
第 31 図　Ⅰ－8　2号住居跡実測図（新原・渡辺実測，平田製図）……折込み
第 32 図　Ⅰ－7　3号住居跡実測図（柳田・川村実測，平田製図）……41
第 33 図　Ⅰ－6・7住居跡・ピット内出土土器実測図（平田・荒武実測，荒武製図）…42
第 34 図　Ⅰ－7　4～6号住居跡実測図（川村・小林実測，平田製図）……43
第 35 図　Ⅰ－7　7号住居跡実測図（川村・小林実測，平田製図）……44
第 36 図　Ⅰ－7　土器溜出土土器実測図①（平田・荒武実測，荒武製図）……45
第 37 図　Ⅰ－7　土器溜出土土器実測図②（平田・荒武実測，荒武製図）……46
第 38 図　Ⅰ－7　P10付近遺構実測図（川村・小林実測，平田製図）……47
第 39 図　Ⅰ－7　3層出土土器実測図（平田・荒武実測，荒武製図）……48
第 40 図　Ⅰ－7出土壺棺実測図（荒武実測，製図）……49
第 41 図　Ⅰ－1・7出土陶質土器拓影（児玉真一実測，手拓）……50
第 42 図　Ⅰ－7・8出土石器実測図（柳田実測，製図）……52
第 43 図　Ⅰ－7出土砥石実測図（柳田実測，製図）……53
第 44 図　Ⅰ－7出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……53
第 45 図　Ⅰ－7古墳時代祭祀遺物出土状態実測図（小林実測，豊福製図）……54
第 46 図　Ⅰ－7土師器実測図（荒武実測，製図）……54
第 47 図　滑石製品・ガラス小玉実測図（柳田実測，製図）……55
第 48 図　土師器椀実測図（森田勉実測，製図）……56
第 49 図　Ⅰ－7・8出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……57
第 50 図　Ⅰ－9・10付近地形実測図（柳田・小林実測，豊福製図）……58

第 51 図　Ⅰ－8・10・14土層断面図（平川敬二・清水聖子実測，豊福製図）……折込み
第 52 図　Ⅰ－8～10・14・15出土土器実測図（平田・荒武実測・荒武製図）……60
第 53 図　Ⅰ－8・14出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……61
第 54 図　イフ－7大溝断面図（平川実測，豊福製図）……63
第 55 図　大溝中層出土土器実測図①……64
第 56 図　大溝中層出土土器実測図②……65
第 57 図　大溝上層出土土器実測図①……67
第 58 図　大溝上層出土土器実測図②……68
第 59 図　大溝上層出土土器実測図③……69
第 60 図　大溝上層出土土器実測図④……70
第 61 図　大溝上層出土土器実測図⑤……71
第 62 図　大溝上層出土土器実測図⑥……72
第 63 図　大溝上層出土土器実測図⑦……73
第 64 図　大溝上層出土土器実測図⑧……74
第 65 図　大溝上層・最上層出土土器実測図……76
第 66 図　大溝最上層出土土器実測図……77
第 67 図　イフⅠ－3遺構配置図（平川・諫山実測，豊福製図）……78
第 68 図　大溝断面図（平川・清水実測，豊福製図）……79
第 69 図　大溝中層・上層出土土器実測図……81
第 70 図　大溝上層出土土器実測図①……82
第 71 図　大溝上層出土土器実測図②……83
第 72 図　鏡片実測図（柳田実測，製図）……84
第 73 図　鏡片復原図（柳田作成）……85
第 74 図　鉄器実測図（柳田実測，製図）……85
第 75 図　石器実測図（小池実測，製図）……87
第 76 図　1号石棺墓実測図（岡部和己・川村実測，豊福製図）……89
第 77 図　2号石棺墓実測図（平川実測，豊福製図）……90
第 78 図　3・4号石棺墓実測図（小池・平田定幸・川村実測，豊福製図）……折込み
第 79 図　5号石棺墓実測図（川村・平田実測，豊福製図）……91
第 80 図　6号石棺墓実測図（川村・内田実測，豊福製図）……92
第 81 図　7～9号石棺墓実測図（平川・諫山実測，豊福製図）……93
第 82 図　番上II－5トレンチ実測図（木下修・小林実測，豊福製図）……95
第 83 図　II－5トレンチ土層図（内田実測，豊福製図）……96

第 84 図　土器溜出土土器実測図①（荒武実測，児玉製図）……97
第 85 図　土器溜出土土器実測図②（児玉・平田実測，児玉製図）……98
第 86 図　土器溜出土土器実測図③（児玉・平田実測，児玉製図）……99
第 87 図　土器溜出土土器実測図④（平田実測，児玉製図）…… 100
第 88 図　土器溜出土土器実測図⑤（平田実測，児玉製図）…… 101
第 89 図　土器溜出土土器実測図⑥（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 102
第 90 図　土器溜出土土器実測図⑦（児玉実測，製図）……折込み
第 91 図　土器溜出土土器実測図⑧（平田・荒武実測，児玉製図）…… 103
第 92 図　土器溜出土土器実測図⑨（児玉・平田実測，児玉製図）…… 104
第 93 図　土器溜出土土器実測図⑩（平田・荒武実測，児玉製図）…… 105
第 94 図　土器溜出土土器実測図⑪（児玉・平田・荒武実測，児玉製図）…… 106
第 95 図　土器溜出土土器実測図⑫（荒武実測，児玉製図）…… 107
第 96 図　土器溜出土土器実測図⑬（児玉・平田・荒武実測，児玉製図）…… 108
第 97 図　土器溜出土土器実測図⑭（平田・荒武実測，児玉製図）…… 109
第 98 図　土器溜出土土器実測図⑮（平田・荒武実測，児玉製図）…… 110
第 99 図　土器溜出土土器実測図⑯（荒武実測，児玉製図）…… 111
第 100 図　土器溜出土土器実測図⑰（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 112
第 101 図　土器溜出土土器実測図⑱（児玉実測，製図）…… 113
第 102 図　土器溜出土土器実測図⑲（児玉実測，製図）…… 114
第 103 図　土器溜出土土器実測図⑳（荒武実測，児玉製図）…… 114
第 104 図　土器溜出土土器実測図㉑（荒武実測，児玉製図）…… 115
第 105 図　土器溜出土土器実測図㉒（平田・荒武実測，児玉製図）…… 116
第 106 図　土器溜出土土器実測図㉓（平田・荒武実測，児玉製図）…… 117
第 107 図　土器溜出土土器実測図㉔（平田実測，児玉製図）…… 118
第 108 図　土器溜出土土器実測図㉕（平田実測，児玉製図）…… 119
第 109 図　土器溜出土土器実測図㉖（平田実測，児玉製図）…… 120
第 110 図　土器溜出土土器実測図㉗（平田・荒武実測，児玉製図）…… 121
第 111 図　土器溜出土土器実測図㉘（平田・荒武実測，児玉製図）…… 122
第 112 図　土器溜出土土器実測図㉙（荒武実測，児玉製図）…… 123
第 113 図　土器溜出土土器実測図㉚（荒武実測，児玉製図）…… 124
第 114 図　土器溜出土土器実測図㉛（平田・荒武実測，児玉製図）…… 125
第 115 図　土器溜出土土器実測図㉜（荒武実測，児玉製図）…… 126
第 116 図　土器溜出土土器実測図㉝（荒武実測，児玉製図）…… 127

第 117 図　土器溜出土土器実測図㉞（荒武実測，児玉製図）…… 128
第 118 図　土器溜出土土器実測図㉟（平田・荒武実測，児玉製図）…… 129
第 119 図　土器溜出土土器実測図㊱（常松幹雄実測，児玉製図）…… 130
第 120 図　土器溜出土土器実測図㊲（児玉実測，製図）…… 130
第 121 図　土器溜出土土器実測図㊳（平田・荒武実測，児玉製図）…… 131
第 122 図　土器溜出土土器実測図㊴（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 132
第 123 図　土器溜出土土器実測図㊵（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 133
第 124 図　土器溜出土土器実測図㊶（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 135
第 125 図　土器溜出土土器実測図㊷（平田・荒武実測，児玉製図）…… 136
第 126 図　土器溜出土土器実測図㊸（荒武実測，児玉製図）…… 137
第 127 図　土器溜出土土器実測図㊹（荒武実測，児玉製図）…… 138
第 128 図　土器溜出土土器実測図㊺（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 139
第 129 図　土器溜出土土器実測図㊻（荒武実測，児玉製図）…… 140
第 130 図　土器溜出土土器実測図㊼（荒武実測，児玉製図）…… 142
第 131 図　土器溜出土土器実測図㊽（荒武実測，児玉製図）…… 143
第 132 図　土器溜出土土器実測図㊾（平田・荒武実測，児玉製図）…… 144
第 133 図　土器溜出土土器実測図㊿（平田実測，児玉製図）…… 146
第 134 図　土器溜出土土器実測図(51)（平田・荒武実測，児玉製図）…… 147
第 135 図　土器溜出土土器実測図(52)（平田・荒武実測，児玉製図）…… 148
第 136 図　土器溜出土土器実測図(53)（荒武実測，児玉製図）…… 150
第 137 図　土器溜出土土器実測図(54)（荒武実測，児玉製図）…… 151
第 138 図　土器溜出土土器実測図(55)（児玉実測，製図）…… 153
第 139 図　土器溜出土土器実測図(56)（児玉実測，製図）…… 156
第 140 図　土器溜出土土製品実測図①（児玉実測，製図）…… 157
第 141 図　土器溜出土土製品実測図②（荒武実測，児玉製図）…… 157
第 142 図　土器溜出土石器実測図①（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 158
第 143 図　土器溜出土石器実測図②（児玉実測，製図）…… 159
第 144 図　土器溜出土石器実測図③（児玉実測，製図）…… 160
第 145 図　土器溜出土石器実測図④（児玉実測，製図）…… 161
第 146 図　土器溜出土鉄器実測図（児玉実測，製図）…… 162
第 147 図　五反間Ⅲ－５遺構配置図（柳田実測，豊福製図）……折込み
第 148 図　北トレンチ埋甕実測図（小池実測，製図）…… 165
第 149 図　埋甕使用土器実測図（小池実測，製図）…… 165

第150図　五反間Ⅲ－5出土石器・土製品実測図（小池実測，製図）…… 168
第151図　五反間・柿木出土古銭拓影（小池手拓）…… 168
第152図　端山古墳墳丘測量図（石山勲・児玉・高田・三津井知廣測量，豊福製図）
……折込み
第153図　端山古墳前方部実測図（宮崎貴夫・桑田和義・平島勇夫・丸山康晴・川村
実測，豊福製図）……付図
第154図　端山古墳前方部土層図（宮崎・桑田・丸山・川村実測，豊福製図）…… 171
第155図　端山古墳東側くびれ部実測図（桑田・川村実測，豊福製図）…… 173
第156図　端山古墳西側くびれ部実測図（宮崎・丸山実測，豊福製図）……折込み
第157図　端山古墳周濠区画復原図（柳田作成）…… 175
第158図　端山古墳出土土器実測図（荒武実測，小池製図）…… 177
第159図　八反田Ⅰ－1ｂトレンチ（宮崎・桑田実測，豊福製図）…… 177
第160図　八反田Ⅰ－1甕棺墓実測図（宮崎・桑田実測，荒武製図）…… 178
第161図　八反田甕棺実測図（荒武実測，小池製図）…… 179
第162図　周濠出土小形仿製鏡（柳田実測，手拓）…… 180
第163図　築山古墳墳丘測量図（石山・児玉・高田・小林美孝測量，平田製図）……折込み
第164図　築山古墳トレンチ土層図（児玉・高田実測・豊福製図）……折込み
第165図　築山古墳Mトレンチ（高田実測，豊福製図）…… 181
第166図　築山古墳周濠出土石器実測図（児玉実測，製図）…… 181
第167図　築山古墳周濠出土土器実測図（児玉・平田実測，児玉製図）…… 182
第168図　築山古墳周濠区画復原図（柳田作成）…… 183
第169図　塚廻りⅡ－6北トレンチ土層図（小池実測，豊福製図）…… 184
第170図　塚廻りⅡ－6遺構配置図（小池実測，豊福製図）…… 185
第171図　1号住居跡出土土器実測図（小池実測，製図）…… 187
第172図　2号住居跡・土壙出土土器実測図（小池実測，製図）…… 188
第173図　Ⅱ－6出土石器実測図（小池実測，製図）…… 189
第174図　Ⅱ－6出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 190
第175図　Ⅱ－6出土石臼実測図（馬田実測，小池製図）…… 191
第176図　八反田Ⅰ－1ａ大溝実測図（馬田・宮崎・桑田・小田雅文実測，豊福製図）
…… 194
第177図　大溝出土小形仿製鏡（柳田実測，手拓）…… 196
第178図　八反田Ⅰ－1出土石器実測図（小池実測，製図）…… 196
第179図　八反田Ⅱ－3住居跡実測図（柳田実測，豊福製図）…… 197

第180図　II－3出土土器実測図①（平田実測，小池製図）…… 199
第181図　II－3出土土器実測図②（平田実測，小池製図）…… 200
第182図　II－3出土土器実測図③（平田実測，小池製図）…… 201
第183図　II－3出土土器実測図④（馬田・平田実測，小池製図）…… 202
第184図　II－3出土土器実測図⑤（平田実測，小池製図）…… 203
第185図　II－3出土土器実測図⑥（平田実測，小池製図）…… 204
第186図　II－3出土土器実測図⑦（平田実測，小池製図）…… 205
第187図　II－3出土土器実測図⑧（平田実測，小池製図）…… 206
第188図　II－3出土土器実測図⑨（平田実測，小池製図）…… 207
第189図　II－3出土土器実測図⑩（平田実測，小池製図）…… 208
第190図　II－3出土土器実測図⑪（馬田・平田実測，小池製図）…… 210
第191図　II－3出土土器実測図⑫（馬田・平田実測，小池製図）…… 211
第192図　II－3出土土器実測図⑬（荒武・平田実測，小池製図）…… 212
第193図　II－3出土土器実測図⑭（荒武・平田実測，小池製図）…… 213
第194図　II－3出土土器実測図⑮（荒武・平田実測，小池製図）…… 214
第195図　II－3出土土器実測図⑯（平田実測，小池製図）…… 215
第196図　II－3出土土器実測図⑰（平田実測，小池製図）…… 216
第197図　II－3出土土器実測図⑱（平田実測，小池製図）…… 217
第198図　II－3出土土器実測図⑲（平田実測，小池製図）…… 218
第199図　II－3出土土器実測図⑳（平田実測，小池製図）…… 219
第200図　II－3出土土製品・石器実測図（小池実測，製図）…… 221
第201図　II－3出土石器実測図（小池実測，製図）…… 221
第202図　住居跡出土砥石実測図（小池実測，製図）…… 222
第203図　八反田II－6トレンチ実測図（橋口達也・森田勉実測，豊福製図）…… 226
第204図　八反田Ⅰ－1b，II－6g出土鉄器実測図（橋口実測，製図）…… 227
第205図　II－6g　3層出土土器実測図（平田実測，橋口製図）…… 227
第206図　II－6g出土砥石実測図①（小池実測，製図）…… 227
第207図　II－6g出土砥石実測図②（小池実測，製図）…… 227
第208図　八反田出土石器実測図（小池実測，製図）…… 228
第209図　中川屋敷Ⅰ－7遺構配置図（柳田・小田実測，豊福製図）…… 230
第210図　Ⅰ－7，P12出土土器（荒武実測，小池製図）…… 231
第211図　中川屋敷Ⅰ－8aトレンチ実測図（橋口実測，豊福製図）…… 233
第212図　中川屋敷Ⅰ－8c住居跡実測図（橋口・森田実測，豊福製図）…… 234

第213図　Ⅰ－８ｃ住居跡出土土器実測図①（平田・荒武実測，豊福製図）…… 234
第214図　Ⅰ－８ｃ住居跡出土土器実測図②（荒武実測，小池製図）…… 235
第215図　Ⅰ－９ｊ，Ⅰ－11ｇトレンチ出土土器実測図（平田・荒武実測，小池製図）‥ 235
第216図　中川屋敷Ⅰ－９トレンチ実測図（橋口・森田・平島実測，豊福製図）…… 236
第217図　Ⅰ－11ｇ，Ⅰ－11ｏトレンチ実測図（橋口・森田実測，豊福製図）…… 237
第218図　Ⅰ－11ｇ住居跡出土土器実測図（荒武・平田実測，小池製図）…… 238
第219図　Ⅰ－11ｏ木棺墓実測図（森田実測，豊福製図）…… 239
第220図　木棺墓出土白磁壺実測図（森田実測，小池製図）…… 239
第221図　中川屋敷出土石器実測図①（小池実測，製図）…… 239
第222図　中川屋敷出土石器実測図②（小池実測，製図）…… 240
第223図　下西Ⅱ－10遺構配置図（小池実測，豊福製図）……折込み
第224図　住居跡状遺構実測図（小池実測，豊福製図）…… 242
第225図　住居跡状遺構下層出土土器実測図（小池・平田実測，小池製図）…… 244
第226図　住居跡状遺構上層出土土器実測図（小池実測，製図）…… 245
第227図　住居跡状遺構上層出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 245
第228図　Ⅱ－10出土石器実測図（小池実測，製図）…… 246
第229図　周濠断面土層図（小池・新開誉之実測，豊福製図）…… 247
第230図　周濠出土土師器実測図①（平田実測，小池製図）…… 249
第231図　周濠出土土師器実測図②（平田実測，小池製図）…… 250
第232図　周濠出土磁器実測図（森田実測，小池製図）…… 252
第233図　周濠出土鉄器実測図（小池実測，製図）…… 253
第234図　屋敷Ⅰ－10遺構配置図（柳田・小池・新開実測，豊福製図）…… 255
第235図　１号土壙実測図（小池実測，豊福製図）…… 256
第236図　Ⅰ－10出土縄文土器拓影（小池実測，手拓）…… 257
第237図　Ⅰ－10出土石器実測図（小池実測，製図）…… 258
第238図　甕棺墓実測図（小池実測，製図）…… 258
第239図　甕棺実測図（小池実測，製図）…… 259
第240図　大溝状遺構断面土層図（新開実測，豊福製図）…… 260
第241図　大溝状遺構等出土土器・土製品・石器実測図（小池実測，製図）…… 261

表 目 次

表 1　糸島の前方後円墳地名表（柳田康雄作成）……折込み
表 2　糸島の主要円墳（墳丘墓）地名表（柳田作成）……折込み
表 3　サキゾノⅠ－1・5・7ガラス小玉計測表（柳田作成）……40
表 4　サキゾノⅠ－7　3層祭祀臼玉・小玉計測表（柳田作成）……55
表 5　八反田Ⅱ－3出土壺Ⅰ類法量表（馬田弘稔作成）…… 222
表 6　八反田Ⅱ－3出土甕Ⅰ・Ⅱ類法量表（馬田作成）…… 224
表 7　中川屋敷Ⅰ－7竪穴一覧表（柳田作成）…… 231
表 8　下西Ⅱ－10周濠出土小皿・杯法量表（森田勉作成）…… 248

第1章　調査組織と調査の経過

1　調査組織

昭和53年度の発掘調査構成

福岡県教育委員会

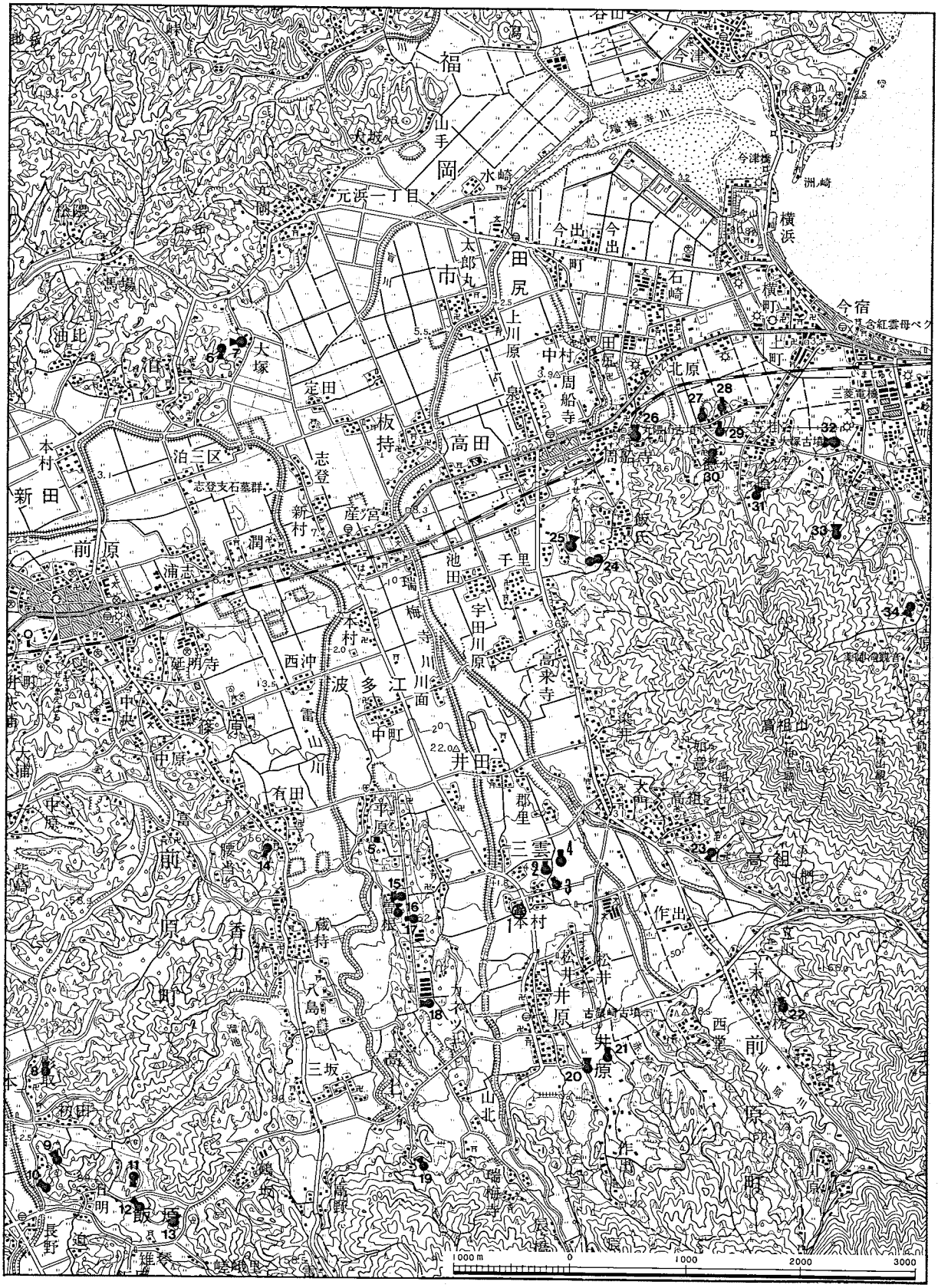
総　括	教育長	浦山太郎
	管理部長	岩下光弘
	文化課課長	藤井　功
	同課長補佐	武久耕作
	同参事補佐	松岡　史
	調査第1係長	宮小路賀宏
庶　務	庶務係長	大渕幸夫
	主任主事	入江智徳
発掘調査	主任技師	柳田康雄
	〃	井上裕弘
	技師	副島邦弘
	〃	児玉真一
	〃	新原正典
	〃	馬田弘稔
	〃	小池史哲
	〃	池辺元明

調査補助員として，川村博・日高正幸・丸山康晴・平田定幸・桜井康治・岡部正巳・平川敬治・諫山佳明・大石　昇・新開誉之・樗木弘明・内田恵三・清水聖子が参加した。

なお，調査においては下記に示す方々の協力があった。

豊島禮蔵・山崎信行・西孝明（前原町教育委員会），中村敬次郎・井上克己・吉住誠（町土地改良区），三島正己・浅田健一・水崎国雄（三雲地区調査協力者），糸島高校歴史部員。

2　調査の経過



第 1 図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

1	三雲南小路遺跡	2	端山古墳	3	築山古墳	4	茶臼塚古墳	5	平原遺跡	6	御道具山古墳
7	泊大塚古墳	8	横枕古墳	9	日明11号墳	10	日明３号墳	11	日明13号墳	12	日明16号墳
13	日明17号墳	14	有田１号墳	15	先山古墳	16	ワレ塚古墳	17	銭亀塚古墳	18	高上大塚古墳
19	屋敷１号墳	20	井原２号墳	21	井原１号墳	22	向上４号墳	23	高祖古墳	24	飯氏１号墳
25	子捨塚古墳	26	丸隈山古墳	27	山の鼻２号墳	28	山の鼻１号墳	29	若八幡宮古墳	30	下谷古墳
31	小松原１号墳	32	今宿大塚古墳	33	谷上古墳	34	本村５号墳				

第 2 図　三雲遺跡地形図(1/6,000)

第５次（昭和53年度）の調査

第５次調査は，昭和53年10月２日から昭和54年３月31日まで実施した。

10月２日　発掘用具を三雲南小路の現地に運搬する。

10月３日　第５次調査の最初は，南小路Ⅰ－５から始める。住宅を破壊した後に，周辺の樹木が伐採されたまま残っていたので，この焼却作業から始める。小型ユンボによって表土剥ぎを行ったが，コンクリート敷の破壊から行い，小型ダンプによって土砂の搬出を行った。

10月４日　本日でユンボによる表土剥ぎを終り，遺構の検出を始める。隅丸方形の掘方が２基検出されたが，南側は中世の遺物が出土し，北側は中央に円形の中世の遺構が重複していた。２号甕棺の北側に隣接するところから，また甕棺が中世に攪乱されているものと思われた。

10月10日　堺地区から測量杭を移動する。現場は，３号・４号としていた方形遺構の掘り下げを続行したが，甕棺墓の望みは断たれ，中世の住居跡状の遺構であった。

10月16日　平面実測のための割付を行い，実測を始める。遺構内の遺物も高さを記入して取上げを行う。遺物の取上げ後の遺構の写真撮影も並行して行う。

10月18日　南小路Ⅰ－５の埋戻しを始めたが，土地所有者の要望を入れて，全部マサ土によって埋めることとし，土の手配のため南小路の作業を中止した。サキゾノⅠ－９・10の石塚といわれる盛土らしきものも伐採を行い，その焼却と測量のためのトラバー杭打ちを行う。

10月20日　本日は地元役員，町土地改良区，業者，県文化課で圃場整備着工前の打合せを行う。県から柳田が本地区の文化財の重要性を説明すると，町土地改良から客土による土地削平面積縮少を行う旨説明があり，23日に再度町と県で打合せし，最終的に水田面高を決定することにした。さらに業者には着手に際し，道路・水路予定地の表土剥ぎを先行し，早く文化財の有無を確認することとした。地元からは，八龍・堺地区は早期栽培があるので早く着工し，早く完了するように要望があった。

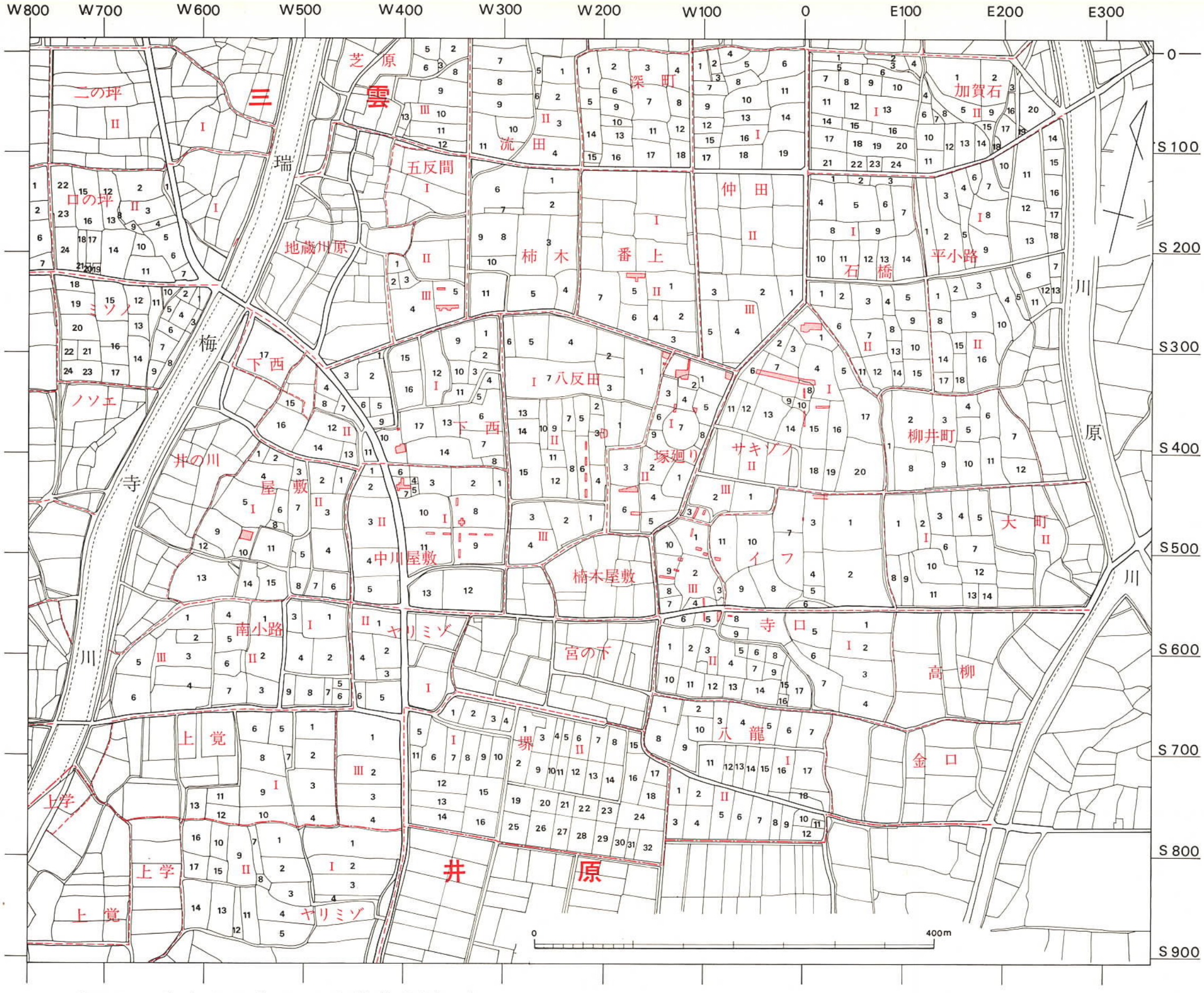
10月24日　サキゾノⅠ－９・10の周囲の表土剥ぎを行う。Ⅰ－13・14は表土下の第２層が深いので，ユンボにより南北方向のトレンチ掘りに変更した。Ⅰ－15の東西トレンチは整地層がなく，床土の下で遺構を検出した。

10月25日　南小路の埋戻しを午後から始める。イフ地区の道路部分の試掘を行う。寺口Ⅱ－17も削平されるため表土剥ぎを始める。

10月26日　南小路の埋戻し終了。サキゾノⅠ－14・15の遺構検出続行。寺口Ⅱ－17も表土剥ぎと遺構検出続行。破壊された石棺や小児甕棺があるが，白磁片や須恵器片も見られる。

11月７日　寺口Ⅱ－17の遺構検出続行。１号石棺の鉄器に続いて，２号石棺内の攪乱内から後漢連孤文鏡片や管玉も出土した。

11月11日　サキゾノ地区は実測続行。寺口Ⅱ－17は遺構検出続行。１・２号石棺墓の西側に石



第 3 図 三 雲 遺 跡 地 籍 及 び 地 区 割 図 (1/4,000)

棺に平行する溝状遺構があり，これには完形土器が多く，赤色顔料の塗布や底部穿孔から1・2号石棺墓の祭祀と思われる。

11月18日　寺口の大溝を掘下げたところ，上層には布留古式土器と下には西新式土器が出土。イフ－7の東端を地下げするのでブルドーザーに立合ったところ，弥生終末頃の土器が一括して多量に出土したので，この部分のみ調査することにした。

11月25日　寺口地区は遺構検出続行。イフ地区の東西水路の床土剝ぎに立合う。イフ－7の大溝の続きと石棺1基をイフ－3地区で発見。

11月27日　午前は雨のため作業中止。八反田地区の整備作業が荒く，いたるところで削りすぎて，弥生前期甕棺群を破壊したりしたので，一部の計画変更と業者に注意をした。

12月1日　寺口は大溝北側の遺構検出続行。イフ－3は大溝上層の土器取上げ，成人用石棺（3号）も発見。八反田II－3の丹塗土器群の検出続行。森貞次郎氏と藤井課長来訪。

12月8日　寺口は住居跡と5号石棺の掘上げ続行。イフ－3では3号石棺北側の鉄鎌や鉄鏃と同レベルで後漢連弧文鏡片を発見。鏡片は摩滅しているので鏡片副葬の可能性あり。

12月17日　寺口は石棺墓と祭祀遺構の写真撮影。イフ－3は春日市の現場から応援があり実測を始める。八反田II－3も応援があったので上部の土器を取上げ始める。

12月19日　寺口は大溝の写真，イフ－3も石棺群全景写真，八反田II－3は土器群中層の写真撮影のための清掃を行う。八反田II－3の北側の表土剝ぎの結果，多量の土器群出土。

12月29日　イフ石棺群は実測続行。八反田II－3の土器群取上げ続行。寺口は石棺実測と祭祀土器実測，東から総見透図作成。

12月30日　本年最後の日として，年末年始の休み期間中の現場の確保と保護のため，遺物の取上げと重要遺構のシート覆いを行う。

1月8日　寺口の土器取上げ後の遺構掘上げを行ったが，祭祀遺構内では床面でも土器や赤色顔料が出土。町土地改良や区長と今後の調査対策について打合せ。

1月11日　寺口の平面実測続行。午後から文化課で代表者会議をし，応援をたのむ。

1月17日　寺口・イフは実測続行。八龍I－3・11の水路予定地の立合いで，中世遺構や古式土師器群に当り，これを調査することになった。

1月22日　イフ－3石棺群下の大溝の写真撮影をして，調査完了。寺口II－17も石棺掘方の写真と実測を行い、調査完了する。八反田II－3の土器群取上げ再開。八龍I－18割付。I－3・11の土器群取上げ続行。古式土師器は完形品が多く，大形砥石もある。

1月31日　八反田II－3は中層土器群の取上げ，土製投弾・石鏃出土。八龍I－3の土器群清掃。I－18は遺構検出続行。午後から雨がひどくなったので現場作業中止。

2月2日　現場は積雪があるので，八反田のみの作業にした。土器群は方形住居跡であったが，下層は土器片しか含まれていない。実測のための割付を行う。

2月6日　八反田II－3は住居跡の写真と実測を完了し，調査終了。

2月7日　八龍Ⅰ－3の古式土師器群の下は大溝となり，下層中部はほとんど土器を含まないが，底面近くには弥生中期土器片が少量ある。Ⅰ－18は実測続行。堺Ⅰ－6・7・11の道路敷の調査にかかる。弥生終末らしき甕棺と石棺2基を検出する。

2月14日　堺Ⅰ－6～11に実測杭を移動し，割付を行う。堺II－31・32の土壙墓・甕棺墓の検出と掘上げを続行。土壙墓で石剣切先出土。八龍Ⅰ－18は石棺の写真撮影の準備。

2月28日　八龍Ⅰ－18は1号住居跡の床面ピット検出と土器群の清掃，2号住居跡プラン検出。堺II－31・32は丹塗土器出土地点の遺構検出を行い，方形プラン内を土層断面を残して掘り始める。雪が降り続く。

3月16日　八龍Ⅰ－18の4・6号住居跡の床面検出続行。堺II地区は写真撮影と実測続行。南小路南側道路の側溝掘下げに立合う。ＮＨＫ話題の窓の録画どりを八龍で行う。

3月18日　八龍Ⅰ－18は全景写真と各住居跡を順次撮影し，土器取上げも行う。

3月22日　八龍Ⅰ－18は住居跡の土器取上げ，写真，床面のピット・周溝検出を行う。堺地区は1・2号木棺墓と6号甕棺墓の写真と実測を完了し，調査終了。

3月25日　八龍Ⅰ－18はエレベーションと実測図の最後の点検，ピット内の土器取上げ，発掘区南壁の土層実測を完了し，調査終了。八龍II－10の甕棺墓群の検出と掘出し続行。小児10号棺まで検出する。

3月27日　八龍Ⅰ－18東端に赤色顔料が検出されていたが，その再確認調査を行ったところ，プランが確定しないままに水晶玉や管玉が出土した。遺構は重複しているらしい。

3月29日　八龍Ⅰ－18の玉類の実測を完了し，玉を取上げる。II－10は甕棺墓群の清掃を行い，写真撮影を進めたが途中で雨天となり作業を午後から中止し，図面の整理を行う。

3月31日　八龍II－10の甕棺墓群の調査を完了しないままに，昭和53年度の調査を一応終了し，昭和54年度に続行する。　（柳田）

第2章　糸島の古墳文化

1.　糸島の古墳文化研究史

ここで扱う糸島地方とは，明治29年の郡制施行に際し，怡土郡と志摩郡が合併して成立した糸島郡の範囲を指すもので，現在福岡市西区となっている青木・今宿・周船寺地区も含まれる。

この糸島地方で古墳文化に関する文献は，丸隈山古墳の発掘由来について妙正寺丸隈家所蔵古記録（『周船寺丸隈山古墳関係古記録（仮題）』）（註１）と貝原益軒の『筑前國續風土記』（「福岡県史資料続四」，1944）などがある。『筑前國續風土記』には、丸隈山古墳のほかに古墳（塚）名が記録されているものがある。『筑前國續風土記』巻之二十二，「怡土郡」—三雲—には，「村の東に築山といへる小山あり。此山陰に，むかしは権現の社有しとかや。今はなし。又村の東北の外に茶臼塚とて，茶臼の形に似たる大塚有。南北十四五間，東西七八間あり。上に石佛あり。其北に端山といへる塚あり。茶臼塚よりは甚小なり。上に権現の社とてあり。」とあり，築山・茶臼塚・端山の三古墳があったことがわかる。現在は茶臼塚の墳丘が消滅しているが，端山古墳（墳丘全長約80ｍ）より大きな古墳であったことがわかる。「茶臼の形に似たる大塚有」から，当然のこととして前方後円墳である。

又，「怡土郡」には，多久村の条に「夫婦塚」，神有村の条に「鬼塚」，田中村の条に「神有村の西にあり。此所に大なる塚穴有。塚の内方三間程あり。南の方に口あり。内は石垣なり。人入る事なし。内には人の骨多し。」などの記述もある。

『筑前國續風土記附録』（加藤一純・鷹取周成著，川添昭二校訂）の「怡土郡」には，「徳永村」の条に「村の西に塚あり。寶暦の頃，いかなる者か此塚を發きしに石棺を得たり。其内に骸骨並鏡一面ありけるを，おそるゝ事ありしにや，其儘にすて置けるを土人もとのことくに埋め，石棺の蓋を塚上に立置り。いかなる人を葬りし所なるにや。」とある。

「飯氏村」の条には，「マツヲヤマという所に丘あり。里民ハ兜塚といふ。寛文の年村民此塚より骸骨・鎧の金具・鏡一面（径り五寸）金佛等を掘出せりといふ。又小塚多し。」とあり，この兜塚は現存する径約40ｍの円墳と思われる。これはかってマツヲ古墳として分布図に示したもので（註２），墳頂に古式横穴式石室があり，後に円筒埴輪も出土しているという（註３）。

「高祖村」の条に，「村の西北ケンジャウといふ所に周り六間，高一間半許の塚あり。黒坊塚といふ。其由詳ならす。」とある。

「井原村—曽根原古戦場—」の条には，「原のに十三塚とて小き塚南北に相並へり。（其内平残れる地に名もあり。）其外にも穴塚（鬼塚ともいふ。）十二三，三雲村に境へる所にあり。口ハ南に向う。其内鐘撞塚と

て穴のなき塚あり。孤塚・ツルベ塚・ゼニガメ塚なといふもあり。」とあり，孤塚と銭瓶塚が現存する。又，戦前は三雲村の内にワレ塚・銭亀塚・念仏塚・狐塚・十三塚などの字名が残っており，現存するワレ塚・銭瓶塚・狐塚は昭和56年に国指定史跡となった。

「三雲村」の条には，

築山　本編（四八二）に詳也。樹木繁茂せる麓に観音堂一宇あり。佛軀二ツ安置せり。清賀作といふ。

茶臼塚　本編（四八二）に見ゆ。石佛今もあり。

端山　本編（四八二）に見えたり。今山上に權現の社なし。端山ハ南にあり。茶臼塚ハ北にありと里民いへり。本編と方位違へり。

このことから現存しない茶臼塚が，3基の古墳中最も北側に位置し，塚廻りやサキゾノ地区のトレンチ調査結果からも，茶臼塚がサキゾノ地区に所在したことは明らかである。

以上のような古記録は，古墳文化研究の直接資料とはならないかもしれないが，消滅して現存しない重要古墳の存在が明らかになることによって，古墳の分布状態を研究するには有益な資料である。

次に糸島における前方後円墳分布図歴をあげて見る。

糸島の重要古墳として，考古学的発掘調査が実施された最初の古墳は銚子塚古墳である。これは昭和25年に発掘調査し，昭和27年に「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」小林行雄・有光教一・森貞次郎『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第十六輯，史跡之部』として報告された。本報告書には，「糸島郡前方後円墳分布図」も掲載され，糸島郡最初の主要古墳分布図となっている。この分布図には，総数18基の前方後円墳が見られるが，内訳は今宿・周船寺地区5基，高祖1基，三雲2基，曽根丘陵6基，一貴山村2基，泊2基となっている。この分布図で問題となるのが，周船寺村の4基中，飯氏地区の3基である。図中で東側を向いた1基は双円墳とした飯氏第Ⅰ群1号墳であろうが，北側を向いたものが字名マツヲに所在する兜塚古墳だとすると，昭和45年に確認したところによると前方部は存在しなかった。

さらに曽根丘陵上にある6基も，昭和56年度などの調査によると，先山・ワレ塚・銭瓶塚・高上大塚古墳以外は前方後円墳としての確証はない。このように18基の前方後円墳中，3基は今後の発掘調査などによる再確認が必要であろう。

次に分布図が公表されたのが，昭和45年の福岡市教育委員会「丸隈山古墳」（註4）である。本書によると，青木・今宿・周船寺地区8基，高祖2基，三雲2基，曽根丘陵4基となっている。これによって，青木・今宿・周船寺地区に4基が追加され，マツヲの兜塚古墳は除外されている。曽根丘陵も4基となり，昭和56年の調査と同様である。高祖地区にも1基が追加されているが，昭和55年に確認したところ前方後円墳ではなかった。

第3番目の分布図は，昭和46年に公表した福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財

調査報告』第2集である。これは，若八幡宮古墳を発掘調査した際に柳田らが分布調査したもので，青木～飯氏間に11基の前方後円墳を図示することができた。これには兜塚古墳の南側にある双円墳は前方後円墳としていない。

第4番目の分布図は，原田大六氏監修の昭和49年『前原町文化財地名表』・『二丈町文化財地名表』と昭和50年『志摩町文化財地名表』である。これによると3町内（福岡市西区除外）の総数21基の前方後円墳が記入されている。ところが，第5番目の分布図である昭和55年以後の確認調査で，泊大塚2号・曽根5号・高祖3号墳は前方後円墳ではなかったので，この時点での確実な総数は18基ということになる。これに青木～飯氏間の11基を加えると29基となる。

第5番目の分布図は，昭和56年の福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図』（糸島郡編）である。これには前原・志摩・二丈の3町で総数21基となり，前原町に3基追加できた。

第6番目の分布図が本報告書で，福岡市西区の青木～飯氏間を含めて総数39基となり，5基を追加できた。これは昭和56年度の狐塚古墳や井原・三雲遺跡発掘調査に際し，付近の分布調査を実施して発見できたものである。

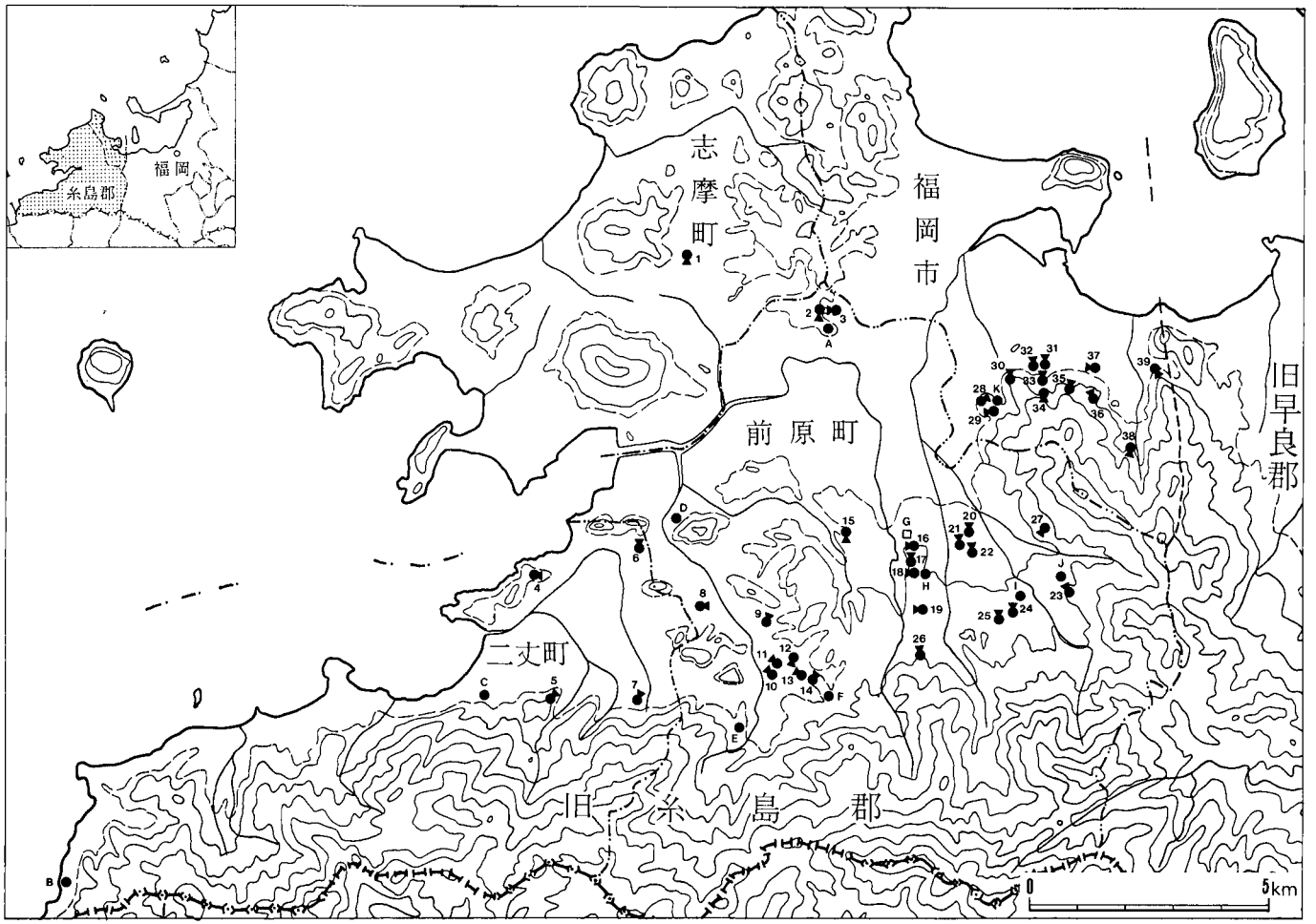
糸島の古墳の発掘調査は，先に述べた銚子塚古墳が最初であり，当墳の報告書では第1に石室の特珠性について，第2に鏡をはじめとする副葬品の配列，第3に鉄製素環頭大刀について，第4に三神三獣鏡についての研究があり糸島の古墳文化研究の先駆けとなった。

第2番目の古墳の発掘調査は，昭和40年の平原遺跡である。ところが平原遺跡は，調査団長の原田大六氏が2世紀前半の『平原弥生古墳』として発表したのみで，正式な報告書が刊行されず(註5)，研究は停滞した。これは2度と得られないような重要資料であるから，客観的な正式報告書が早急に望まれる。

第3番目は，福岡県教育委員会が発掘調査した若八幡宮古墳である。これは昭和46年に報告書を刊行した(註6)。若八幡宮古墳では，第1に墳丘の復原を通して，九州における古式古墳の墳丘の築造法を，第2に二神二獣鏡について，第3に九州古式古墳における年代的位置の検討を行った。

その後，糸島地方にも開発の手が伸び，大小の発掘調査が続くようになった。このような中で，注目に値いするのが三雲遺跡の一連の調査であろう。三雲遺跡は，昭和49年以来調査を継続中であるが，報告書も昭和54年から刊行し，本書で第3冊目である。第3冊目には，端山・築山両古墳の試掘調査結果と畿内の庄内式土器を含む古式土師器の資料を多く紹介することができる。同時に，弥生後期後半から古式土師器にいたる土器の編年と伴出鏡による年代観を別に示しておいた(註7)。これらによって糸島の古墳文化研究もその緒についたものと言わしていただきたい。

2. 古墳の分布と古墳群（第4図）



第 4 図　糸島の主要古墳分布図（1/150,000）

表1　糸島の前方後円墳地名表

番号	名称	所在地	主体部	出土品	備考
1	開1号	糸島郡志摩町大字井田原字開		後漢連弧文鏡・鉄器・墳丘に円筒埴輪	墳丘半壊・段築・葺石
2	御道具山	糸島郡前原町大字泊字大塚643/645			前方部バチ形，長約55m
3	泊大塚	糸島郡前原町大字泊字大塚626		円筒埴輪	前方部削平
4	立野	糸島郡二丈町大字松末字立野			帆立貝式(前方部平坦)
5	徳正寺	糸島郡二丈町大字上深江字徳正寺			長約50m，葺石
6	銚子塚	糸島郡二丈町大字田中字大塚	竪穴式石室	方格規矩四神鏡(鍍金)・長宜子孫連弧文鏡 仿製吾作明竟三角縁三神三獣鏡2面(同型) 仿製三角縁三神三獣鏡6面 硬玉勾玉2・碧玉管玉33・素環頭大刀3・直刀3 短刀1・鉄剣6・剣形鎗身14・鉄鏃14・土師器片	長103m
7	長石二塚	糸島郡二丈町大字長石字西原			長約50m，後円径23m
8	東二塚	糸島郡前原町大字東字二塚87			段築
9	横枕	糸島郡前原町大字本字横枕1329-4/1335-2	横穴式石室		長約40m
10	日明3号	糸島郡前原町大字飯原字日明2317-1	横穴式石室	円筒埴輪	長約35m
11	日明11号	糸島郡前原町大字飯原字日明417/421-1	横穴式石室	(前方部に主軸方向に開口)	長約40m
12	日明13号	糸島郡前原町大字飯原字日明2249	(竪穴式石室)	(後円部西側)	長約45m，前方長約20m
13	日明16号	糸島郡前原町大字飯原字日明2139-1/2140	横穴式石室		長約25m
14	日明17号	糸島郡前原町大字飯原字日明2032-1外		(帆立貝式，前方部平坦)	長約30m，段築，葺石
15	有田1号	糸島郡前原町大字有田字塞ノ本567-1	竪穴式石室？		
16	先山	糸島郡前原町大字曽根字中460外	横穴式石室？		消滅
17	ワレ塚	糸島郡前原町大字曽根字中340/341			長約42m，葺石・段築
18	銭瓶塚	糸島郡前原町大字曽根字中359		家形埴輪・円筒埴輪	帆立貝式，葺石・段築
19	高上大塚	糸島郡前原町大字高上字開坂4		鹿角装刀(直弧文)	関西大学蔵
20	三雲茶臼塚	糸島郡前原町大字三雲字サキゾノ		(鉄刀・鉄矛)	墳丘消滅
21	端山	糸島郡前原町大字三雲字塚廻り		土師器(墳丘・周濠)	周濠・葺石・段築
22	築山	糸島郡前原町大字三雲字寺口		土師器・壺形埴輪(墳丘)	周濠・葺石・段築
23	向上4号	糸島郡前原町大字末永字向上243			
24	井原1号	糸島郡前原町大字井原字赤崎179-1	大型箱式石棺？		
25	井原2号	糸島郡前原町大字井原字赤崎179-1			消滅
26	屋敷1号	糸島郡前原町大字高上字屋敷341	横穴式石室		
27	高祖	糸島郡前原町大字高祖字ヤマイヌノヲ			消滅
28	子捨塚	福岡市西区大字飯氏字鏡原	横穴式石室？		
29	飯氏第I群1号	福岡市西区大字飯氏字鏡原	横穴式石室2		双円墳
30	丸隈山	福岡市西区大字周船寺字ウエノ	古式横穴式石室 箱式石棺	仿製神獣鏡・仿製六獣鏡 巴形銅器・硬玉勾玉・碧玉管玉・ガラス小玉 鉄剣・鉄刀・鉄鏃，円筒埴輪	長約80m 段築
31	山の鼻1号	福岡市西区大字徳永字山ノ鼻	竪穴式石室？		葺石
32	山の鼻2号	福岡市西区大字徳永字山ノ鼻			墳丘消滅
33	若八幡宮	福岡市西区大字徳永字下引地	舟形木棺	三角縁二神二獣鏡(陳是作) 碧玉管玉・ガラス小玉2・鉇・刀子 竪矧板革綴短甲・環頭大刀2・鉄剣・鉄鏃 革製盾・土師器・銅製有孔円盤	長約47m 3段築成 葺石
34	下谷	福岡市西区大字徳永字下谷	横穴式石室？		消滅
35	小松原1号	福岡市西区大字女原字小松原	横穴式石室	須恵器	墳丘半壊
36	谷上	福岡市西区大字今宿字谷上	横穴式石室(単)		墳丘主軸方向に開口
37	今宿大塚	福岡市西区大字今宿字大塚	横穴式石室？	形象埴輪・円筒埴輪・須恵器	二重周濠・段築
38	本村5号	福岡市西区大字今宿字本村	横穴式石室(単室)		消滅
39	鋤先	福岡市西区大字今宿字鋤先		家形埴輪	

表2　糸島の主要円墳（墳丘墓）地名表

番号	名称	所在地	主体部	出土品	備考
A	泊城崎	糸島郡前原町大字泊字城崎283		周濠—鉄斧・鎌・陶質土器・土師器	径32m以上，葺石
B	長須隈	糸島郡二丈町大字鹿家字長須隈	舟形石棺	夔鳳鏡	径約30m，段築
C	塚田古墳群	糸島郡二丈町大字深江字万蔵ノ下	竪穴式石室	琴柱形石製品・楯，周溝—須恵器	径11～20m，3基，葺石
D	釜塚	糸島郡前原町大字神在字堂山405	古式横穴式石室	円筒・形象埴輪	径56m，段築・葺石
E	長嶽山1号	糸島郡前原町大字川付字長嶽山784	古式横穴式石室？		径約30m，段築・葺石
F	鶴ヶ坂古墳群	糸島郡前原町大字飯原字日明2026/鶴ヶ坂414	古式横穴式石室？		径約20m，段築・葺石，3基
G	平原	糸島郡前原町大字有田字平原2	割竹形木棺	虺龍文鏡・方格規矩鏡35・長宜子孫連弧文鏡 仿製連弧文鏡5・ガラス勾玉3 ガラス管玉・メノウ管玉・コハク丸玉600以上・ 鉄製環頭大刀・刀子 周溝—ガラス小玉多数・鉄鏃5・鉄斧・鉇・ 土器	方形周溝墓 周溝内に土壙墓
H	狐塚	糸島郡前原町大字曽根字中	古式横穴式石室 小石室	鉄鏃・刀子 滑石白玉・鉄剣(石室外に鉄矛2)	径32m，周濠径48m 3段築成，葺石・土師器
I	古賀崎	糸島郡前原町大字西堂字ウラノダ909-2	横穴式石室	環頭大刀・馬具・装身具・須恵器等	
J	向上2号	糸島郡前原町大字末永字向上243	古式横穴式石室		径約40m，段築・葺石
K	兜塚	福岡市西区大字飯氏字マツヲ	古式横穴式石室	円筒埴輪，(鏡1(径5寸)・鎧の金具)	径約40m

旧糸島郡内の前方後円墳は，志麻には少なく（３基），怡土に多く（36基）分布している。志麻では，中心的位置にある井田原に１基が独立し，旧糸島水道に面した泊地区に２基がある（泊古墳群）。怡土では，東から旧水道に面した今宿・周船寺地区に12基（今宿・周船寺古墳群），糸島平野中央部の瑞梅寺川・雷山川流域の13基（有田・井原・三雲古墳群），長野川流域の８基（長野川流域古墳群），深江平野周沿地区の３基（環深江平野古墳群）がある。

これらの前方後円墳群には，主要な円墳（方形周溝墓などの墳丘墓も含む）も含まれている。志麻の泊古墳群には，泊城崎古墳のように葺石を持ち，周溝から鉄鎌・鋳造鉄斧・陶質土器を出すもの（註８）や大日山古墳のように箱式石棺から鏡２面などを出したものがある（註９）。今宿・周船寺古墳群は，５世紀前半の丸隈山古墳を盟主とするが，円墳では古式横穴式石室で円筒埴輪のある兜塚古墳，古墳所在地の不明な周船寺の金鎖付勾玉首飾（白鶴美術館蔵）の出土した古墳，碧玉製車輪石（糸島高校蔵）出土の飯氏山古墳などがある。有田・井原・三雲古墳群は，有田地区に属する平原の方形周溝墓，旧三雲地区に属する竪穴系横口式石室で３段築成・葺石・周濠を備える狐塚古墳（註10）。井原地区に属する向上（むかえ）２号墳は，墳丘に段築・葺石を備え，墳頂部に古式横穴式石室らしきものがある。古賀崎古墳は，６世紀の小古墳ではあるが，環頭大刀や馬具など副葬品の一式が判明するものとして重要である（註11）。長野川流域古墳群は，銚子塚古墳を盟主とするが，銚子塚古墳は環深江平野古墳群の盟主の座も併せ持つ。長野川流域では，銚子塚と対峙する釜塚古墳は径56ｍの糸島最大の円墳で，５世紀前半の竪穴系横口式石室を有し，段築・葺石・埴輪を備えている。上流にある長嶽山（ながたけやま）１号・飯原古墳群も径20～30ｍの円墳で，段築と葺石を有し，周囲の古墳から５世紀代の古式横穴式石室と思われる。環深江平野古墳郡では，昭和54年に福岡県教育委員会が調査した塚田古墳群がある。塚田古墳群は，砂丘に営まれた径11～20ｍの葺石をもつ３基の円墳で，竪穴式石室を持つものがあり，３基から琴柱形石製品・刀・刀子・櫛が出土している（註12）。さらに，以上の古墳群に属さないが，行政区では糸島の西端にあるのが長須隈古墳である。長須隈古墳は，径21ｍの円墳であるが，松浦砂岩製の舟形石棺を主体部としており，古墳の立地も唐津湾に面するところから，経塚山古墳や谷口古墳を含む古墳群と見てよい（註13）。

全長100ｍ前後の規模の墳丘を持つ盟主的な古墳は，各古墳群に１～２基存在するが，糸島全体を通して見ると，その時期は共存することが少ない。墳丘のみの規模で比較すると，103ｍの銚子塚古墳の次にくるのが90ｍクラスの井田原開古墳である。80ｍクラスのものは三雲の端山・築山古墳と丸隈山古墳であるが，三雲の２基は周濠を含めると100ｍクラスとなり，銚子塚の規模に匹敵する。これらを築造年代順に並べてみると，御道具山→端山→銚子塚・若八幡宮→築山（泊大塚）→開→丸隈山古墳という順番となるであろう。したがって，怡土・志麻の首長権はこの順番に移った可能性が強い。

各古墳群内で見てみると，志麻では御道具山→泊城崎→泊大塚→開古墳の順になる。泊大塚

の時期が不明であるが，4世紀末から5世紀初頭として，開古墳が5世紀前半としておく。

今宿・周船寺古墳群は，山の鼻1号→若八幡宮→飯氏山→丸隈山→鋤先→兜塚→今宿大塚（子捨塚）→小松原1号・谷上などの順となる。丸隈山と鋤先の前後関係が不明ながら鋤先には家形埴輪がある点から後に位置づけ，両者を5世紀前半から中頃としたい。今宿大塚古墳は，二重の周濠を持ち，墳丘に葺石と武人・馬などの形象と円筒埴輪をめぐらした6世紀前半のものである。

有田・井原・三雲古墳群は，三雲の茶臼塚が位置的に古く思えるが，消滅しているので不明。端山（平原）→築山→ワレ塚→銭瓶塚→狐塚→高上大塚・向上2号・4号などがある。築山古墳が4世紀末から5世紀初頭の時期，ワレ塚・銭瓶塚・狐塚が5世紀前半から中頃，それ以後が5世紀後半と思われるが，6世紀代の大・中型古墳が不明である。沖積平野である三雲地区には，弥生時代の伊都国王の墓地があって4世紀代の大型古墳までこの地に墳墓が営まれるが，5世紀代になると曽根丘陵（旧三雲村）上に首長墓が移り，次のクラスの墳墓は平野縁辺の小丘陵上に営まれる。したがって，もし平原方形周溝墓が弥生時代に属するのであれば，累代の伊都国王の眠る三雲・井原地区の沖積微高地上にあらねばならない。

長野川流域古墳群は，銚子塚以外は小型古墳が多く内容も不明であるが，銚子塚→日明13号→日明17号・鶴ヶ坂古墳群→東二塚・横枕・日明3号・11号・16号古墳などの順が考えられる。日明13号墳は，後円部の西側寄りに小竪穴式石室らしきものが露出しているが，中心部は盗掘を受けておらず主体部が完存するものと思われる。時期は4世紀末から5世紀初頭のころであろうか。日明17号墳は帆立貝式で1段目の平坦な段築・葺石から鶴ヶ坂古墳群と同様に5世紀代であろうし，横枕古墳以後は6世紀代の横穴式石室を持っている。

環深江平野古墳群は，銚子塚古墳を除外すると他の古墳群に匹敵するのは長石二塚古墳のみである。塚田古墳群は，主体部の竪穴式石室と副葬品の琴柱形石製品や櫛などから5世紀代のものと思われるが，周溝から6世紀代の須恵器も出土しているという。前方後円墳として確定できないものが立野古墳で，帆立貝式の前方部は平坦で広い。雑木の繁茂が著しく，墳丘全体が確認できないが，日明17号墳の墳丘がこれに近いものとして帆立貝式前方後円墳として認定できる。徳正寺古墳は，丘陵尾根頂部に位置するが，墳丘と周囲の地山の比高差が著しく，古墳とすれば大きさの割に著しく墳丘の高いものとなる。

このほかに，前方後円墳として原田大六氏監修の志摩・二丈・前原町の文化財地図（昭和6年～50年調査）には，泊の大塚2号・初田3号・曽根5号・高祖3号古墳があげられている。このうち現存しているのが，泊大塚2号・曽根5号・高祖3号墳であるが，現地確認の結果では前方後円墳とは考えられない。曽根5号は，昭和56年度に前原町教育委員会が発掘調査した狐塚古墳で，周濠をめぐらす円墳であった。平原・ワレ塚・銭瓶塚古墳と共に国指定史跡となった。初田3号墳は，消滅して前掲の『前原町文化財地図』以外に確認がとれなかったので，

一応今回は除外したが，確認がとれれば今後追加できるであろう。

また，この分布図も空白地帯には前方後円墳が完全に存在しないのではなく，分布調査をしていない地域やすでに消滅しているものも多いと思われる。とくに，前原町多久の南側，長野川中流東岸の丘陵地帯は全く分布調査を実行していない。糸島郡は，現在でも北部九州の旧郡単位の前方後円墳の数は最高であるが，今後もさらに追加されることであろう。

3. 糸島の古式古墳

糸島地方における古墳の発生は，本報告書の主題の1つでもある。糸島地方で古式古墳として知られているのは，発見順にあげると銚子塚古墳・平原遺跡・若八幡宮古墳である。これらは発掘調査されたもので，副葬品の全容が明らかであるが，平原遺跡のみ報告書がない。銚子塚は，副葬品に後漢の方格規矩四神鏡と長宜子孫連弧文鏡があるが，これらは伝世されたもので，他に仿製吾作明竟三角縁三神三獣鏡2面（同型）のほか仿製鏡6面がある。これに対し，若八幡宮古墳は，陳是作三角縁二神二獣鏡を持つが，両者から出土した土器はほぼ同型式の土師器IIb式（註14）で，4世紀後半のものである。平原遺跡は方形周溝墓で，前漢末の虺龍文鏡1と後漢の方格規矩鏡35・長宜子孫連弧文鏡1及び仿製連弧文鏡5を持っている。このうち後漢鏡で最も新しいのは2世紀後半から3世紀初頭の長宜子孫連弧文鏡で，日本では弥生後期後半から古墳時代前期に出土している。ところが，仿製鏡は，弥生中期末に前漢の日光鏡などを模倣した小形仿製鏡があるが，精巧な大形鏡を仿製するのは古墳時代になってからである。従来から舶載鏡といわれている三角縁神獣鏡を日本製だとすると，これらを副葬する古墳が庄内式土器の新しい段階（土師器Ib式）（註15）であるから3世紀末から4世紀初頭頃，従来から仿製鏡といわれている三角縁神獣鏡・連弧文鏡・珠文鏡などは布留式の古段階（IIa式）であるから4世紀の前半から中頃の時期となり，平原遺跡の年代も決ってくる。平原遺跡から出土した鉄器や玉類は，仿製鏡から判明する年代より古い要素もあるが，長い鉇やメノウ製管玉・コハク製丸玉は新しい要素でさえある。連珠ガラス小玉は，藤崎6号方形周溝墓のようにIIa式から5世紀代に見られるものである。

このようにして見ると，銚子塚や若八幡宮古墳と平原遺跡は同時期か，平原遺跡がやや古く位置づけられることがわかってきた。ところがさらに，銚子塚古墳や若八幡宮古墳より古く，平原遺跡と同時期と思われるのが，今回報告の端山古墳である。端山古墳の主体部や副葬品は不明であるが，くびれ部葺石付近などから出土した土師器はIIa式である。土器は小破片であるから古墳に確実に伴うとは言いきれないが，周堤付近から出土した二重口縁の甕棺などからこの時期は不動のものであろう。

古式古墳として，内容は不明であるが墳丘形からすると，最も古式の要素を持つのが泊古墳

群中の**御道具山古墳**である。御道具山古墳は，全長約55m，後円径約31m，前方部幅約25m，くびれ部幅約7.5mの規模で，数値からも明らかなように著しく「バチ形」の前方部を備えている。このように前方部が「バチ形」を呈するのは奈良県石塚古墳や箸墓古墳のように庄内式土器以前といわれる時期の古墳特有のものである。御道具山古墳は，糸島郡の前方後円墳中最も墳丘の保存のよいもので，開墾等による変形とは考えられない。

平原遺跡と同時期かそれより古い前方後円墳が存在するのは確実となったが，ではどうして平原遺跡の被葬者は前方後円墳以上の副葬品を持ちながら，前方後円墳に埋葬されなかったのだろうか。方形周溝墓は，前方後円墳より早く受入れられたであろうが，墓制としては広域支配者のものとはなり得ず，前方後円墳発生後は小地域の首長層に4世紀代まで受継がれている。大和政権進出前は多量の鏡を管理し，配布してきた平原被葬者一族（伊都国王族か）は，政治的理由によって一定身分の保障はされたものの，前方後円墳には埋葬されず，小地域首長層と同じ方形周溝墓に葬られ，鏡も破壊せざるを得なかったのである。三角縁神獣鏡を持たない理由もここにある。しかし，鏡の量を見るとき，伊都国のかつての繁栄ぶりがうかがわれると同時に一朝一夕では解決できない多くの問題を含んでいる。

古式古墳には，意図的方向性がうかがえる。糸島地方は，南側の背振山脈を背に，玄界灘に面する北側に開けた地理的条件を備えている。この地理的条件に合わせたように，5世紀前半代までの古式古墳の大半が前方部を北側に向けている。例外は泊古墳群の御道具山古墳と開古墳で，南側を向いている。両古墳は志麻にあり，北側を丘陵で塞がれ，南側が当時としては重要な交通路である旧糸島水道に面している。すなわち，古式古墳は北側を向くように意図されたものではなく，被葬者の支配地を向くように企画造営されたものであることが明らかである。銚子塚古墳は，糸島郡最大の古式古墳であるが，深江・長野川流域の小平野を治めると同時に，糸島水道の入口である加布里湾を管理する権利を有する地位にあったことがわかる。糸島水道の入口は，対外交渉の拠点である怡土の玄関を意味し，泊古墳群と同様に重要な位置を占めている。糸島で最も古いと思われる御道具山古墳が，水道の狭窄部を眼下に見下す丘陵上に位置することは，農業的生産地域より対外交渉の交通路を重視した性格がうかがえる。

次の段階になると，今宿・周船寺古墳群では山の鼻1号や若八幡宮古墳，有田・井原・三雲古墳群では端山古墳，長野川流域では銚子塚古墳がほぼ同時期に造営される。この時期には志麻に前方後円墳がないので，水道の管理権は銚子塚に移り，生産地を背景とする三雲古墳群と共存する。この点今宿・周船寺古墳群の山の鼻1号や若八幡宮古墳は，生産的後背地が少ないところから，水道の出口と怡土から早良平野への陸上交通の管理を任とした集団の首長墓である。

前方後円墳が発生する前後には，平原遺跡のような方形周溝墓や方形墳が数例確認されている。調査されたものでは，平原のほかに井原正恵古墳群（註16）と伏龍遺跡がある。これらは平

原と同様に弥生時代の方形周溝墓ではなくIIa・IIb式の土器を伴うもので，4世紀中頃以後のものである。平原は割竹形木棺を主体部としている点から新しく，井原正恵は箱式石棺を主体部としている点から，その小地域内では古い方形周溝墓ということができる。平原は有田・井原・三雲古墳群の中心的位置を占地する点からするとこの地域の首長墓といえるが，弥生時代に属さない点で前方後円墳の被葬者より「物」は持てども「地位」は低くかったものと思われる。正恵や伏龍のように平野の縁辺部ではなく，平原のような中心部で箱式石棺を主体部とする，前方後円墳より古い方形周溝墓(墳丘墓)が存在する可能性が秘められている。墳丘や周溝は確認されていないが，前原向原遺跡の大形石棺墓（蓋石大石1枚）から長さ120cmの素環頭大刀が出土しているが，付近から別に二重口縁の土師器甕棺墓が調査されており(註17)，IIa～IIb式の時期の墳墓があったものと思われる。素環頭大刀も長大なことと環頭が角張っている形態のものは弥生時代には見られない。おそらく箱式石棺を主体部とする周溝墓（墳丘墓）が存在したのであろう。

4．横穴式石室の導入

糸島の古墳は，若八幡宮や銚子塚古墳でわかるように，4世紀後半までは竪穴式石室や木棺直葬を主体部としている。4世紀末から5世紀初頭と思われる築山・ワレ塚・泊大塚・開古墳などの主体部が不明であるのが残念であるが，この時期の隣接地域の古墳で主体部の明らかなものがある。福岡平野では，安徳大塚古墳がこの時期に属し，主体部は礫槨か礫床の木棺らしい。安徳大塚古墳の円筒埴輪と壺形埴輪は築山古墳のそれよりは新しい。5世紀初頭ではないかと言われている老司古墳は，竪穴系横口式石室4基を主体部としている。

唐津平野では，谷口古墳が4世紀末から5世紀初頭の時期であるが，後円部の最も古い竪穴式石室は天井の高い合掌式で，内部中央に長持形石棺を安置している。後円部西側にも単独の長持形石棺があり，ほぼ同時期と思われるが，前方部には舟形石棺が直葬されていた。谷口古墳は副葬品やくびれ部発見の二重口縁壺などから上記の年代とした。さらに舟形石棺を主体部とする長須隈古墳は，谷口古墳前方部舟形石棺と同時期の5世紀初頭と思われるが，竪穴系横口式石室は採用されていない。

このようにして比較して見ると，4世紀末から5世紀初頭の時期には，まだ竪穴系横口式石室は採用されていないといえる。老司古墳が確実に5世紀初頭であるなら，玄界灘沿岸の大型古墳のみ竪穴系横口式石室を導入できたことになる。津屋崎町奴山5号墳は，径26mの円墳で5世紀前葉と報告されている(註18)が，大型箱式石棺が主体部であった。老司古墳以外に5世紀前半と考えられている竪穴系横口式石室を持つ古墳は，唐津平野の横田下古墳，糸島の丸隈山古墳が知られているが，丸隈山は石室前面の構造が不明な点で資料不足である。糸島では時

期的に近い大型古墳が井田原開古墳であるが，全長約90ｍの墳丘に円筒埴輪と葺石をめぐらしている。主体部は石室状の構造物ではなく，大きな板石があったという。主体部付近の出土品として，後漢の連弧文鏡片と鉄器が採集されている（福岡市歴史資料館蔵）。後漢鏡などから5世紀初頭を下らないと思われるが，これが正しいとすれば，糸島では少なくとも5世紀初頭には竪穴系横口式石室は導入されていないことになる。

昭和54年に調査された釜塚古墳と昭和56年に調査された狐塚古墳は，同一形態の石室構造をした竪穴系横口式石を主体部としているが，長野川流域古墳群に属する釜塚古墳は5世紀中頃と報告されている。一方，現在報告書作成中の三雲古墳群に属する狐塚古墳は，墳丘出土の土師器高杯や副葬品などから5世紀前半と考えられる。両古墳の石室は南側に入口を備える点，北側の平野の開けた方向に開口する丸隈山古墳より新しい要素といえる。

今後石室の完存すると思われる築山・銭瓶塚・泊大塚・鋤先古墳などの調査が進めば，よりいっそう横口式石室の導入時期とその性格が明らかになることと思われる。（柳田）

註1．下條信行ほか「丸隈山古墳」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』10，1970）

2．柳田康雄「若八幡宮古墳」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2，1971）

3．福岡市教育委員会（『埋蔵文化財遺跡地名表』1，1969）

4．註1に同じ。

5．原田大六『実在した神話』学生社，1966ほか。

6．註2に同じ。

7．柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡―「伊都」の土器から見た北部九州―」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982）

8．福岡県教育委員会（担当柳田）が，昭和56年から調査中。

9．原田大六監修『前原町文化財地名表』前原町教育委員会，1974

10．前原町教育委員会「曽根遺跡群」（『前原町文化財調査報告書』7，1982）

11．前原町立伊都国資料館に展示。

12．福岡県教育委員会「福岡県遺跡等分布地図」（糸島郡編）1981

13．柳田康雄「長須隈古墳」（『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会，1982）

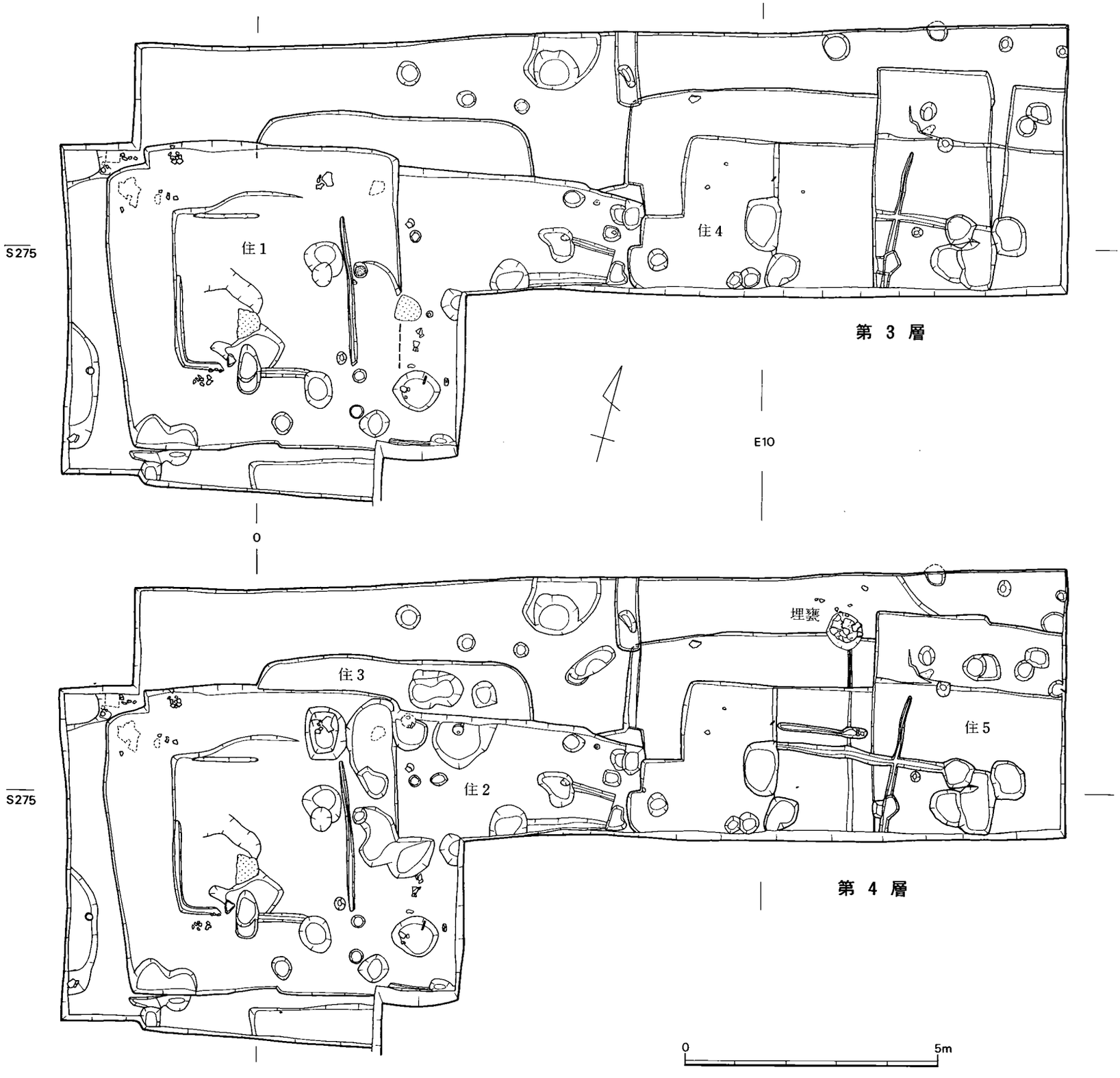
14．註7に同じ。

15．註7に同じ。

16．川村博「正恵古墳群」（『前原町文化財調査報告書』2，1980）

17．渡辺正気「福岡県糸島郡旧糸島女学校校庭出土の甕棺」（『史淵』81，1960）

18．佐々木隆彦「奴山5号古墳」津屋崎町教育委員会，1978。報告書では，径26ｍの円墳と報告されているが，実際は東側に前方部のある全長約37ｍの帆立貝式前方後円墳である可能性が強い。



第5図 サキゾノⅠ—1 遺構配置図(1/100)

第3章　三雲遺跡の遺構と遺物

第1節　サキゾノ地区の調査

1．はじめに

サキゾノ地区の調査は，昭和52・53年度の新設道路工事に伴う事前調査で，Ⅰ—1・4～10・13～15地区を実施した。

今回報告するのは，『三雲遺跡』Ⅱで報告したⅠ—4・5地区以外の地区で，Ⅰ—1では弥生終末から古式土師器の一括資料のある住居跡群，Ⅰ—6～10・13～15は弥生前期から古墳時代の住居跡及び古墳の痕跡を調査した。

なお，サキゾノ地区の縄文関係の遺構・遺物は，前回報告したので本報告では除外した。

サキゾノⅠ—1・6～8の調査は，柳田康雄・小池史哲が担当し，高田一弘・川村博・小林義彦・赤川正秀が参加して，昭和53年のⅠ—8～10・13～15地区の調査は柳田が担当，平川敬治・清水聖子が参加した。

2．Ⅰ—1の遺構と遺物

サキゾノⅠ—1は，新設道路とその東側の地下げ部分を130㎡調査し，複雑に重複した住居跡5軒分を検出した（第5図）。

(1) 住　居　跡

サキゾノⅠ—1の5軒の住居跡は，弥生後期中頃から古式土師器に至るもので，重複した1・2号には豊富な遺物があるが3～5号については重複の前後関係による時期決定となる。

各住居跡の切合いは下記のとおりである。

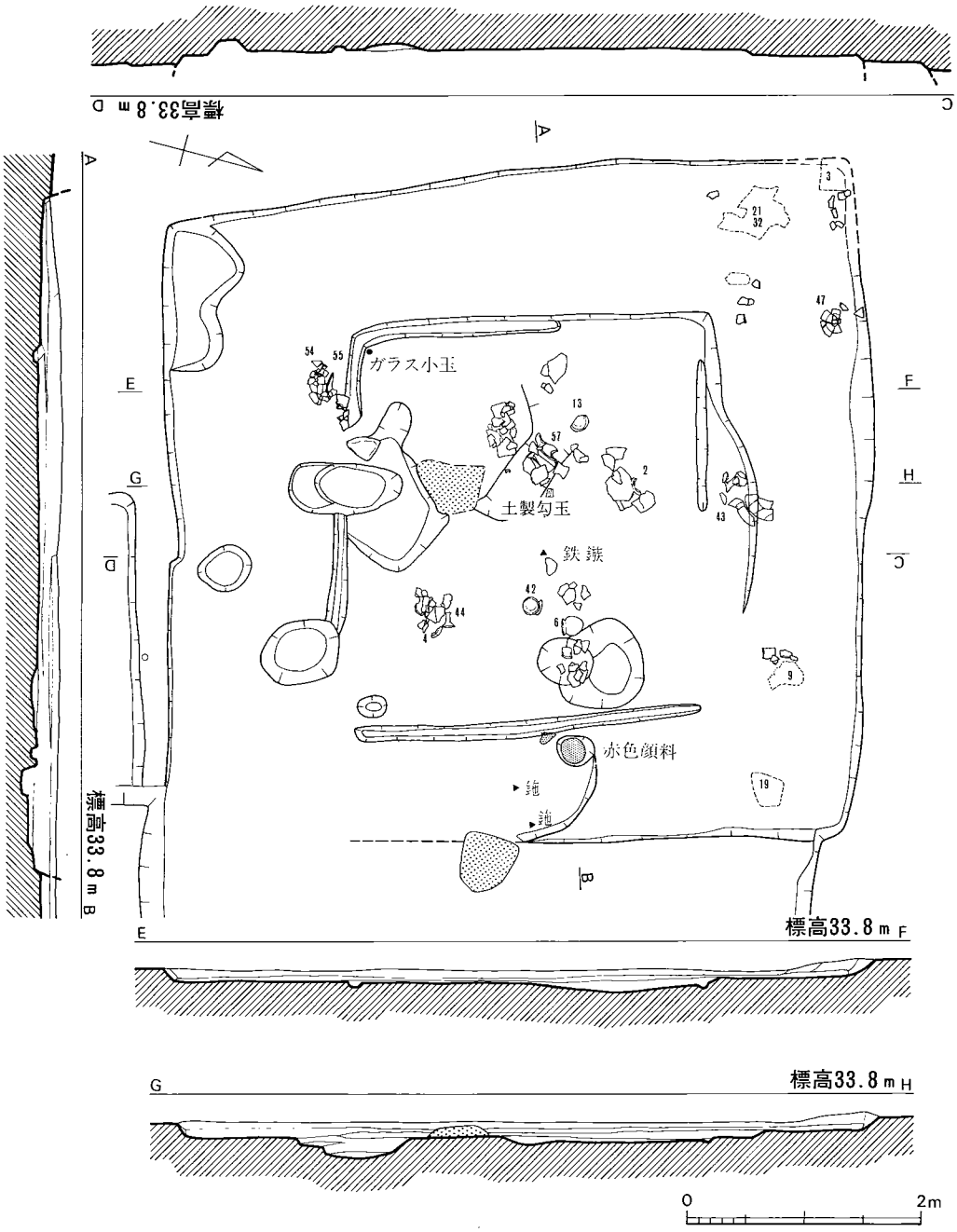
3号
↙　↓　　（古→新の関係を表わす）
1号 ← 2号 → 4号 → 5号

なお，住居内出土の鉄器・石器・玉類は後にまとめて説明する。

1号住居跡（図版2・3－1，第6図）

サキゾノ

北側の3号，東側の2号住居跡を破壊して造り，西側と南側にも1号より古い遺構が存在する。住居跡は南北6ｍ，東西 5.8ｍの方形竪穴住居跡で，最終検出面から床面までの深さは約

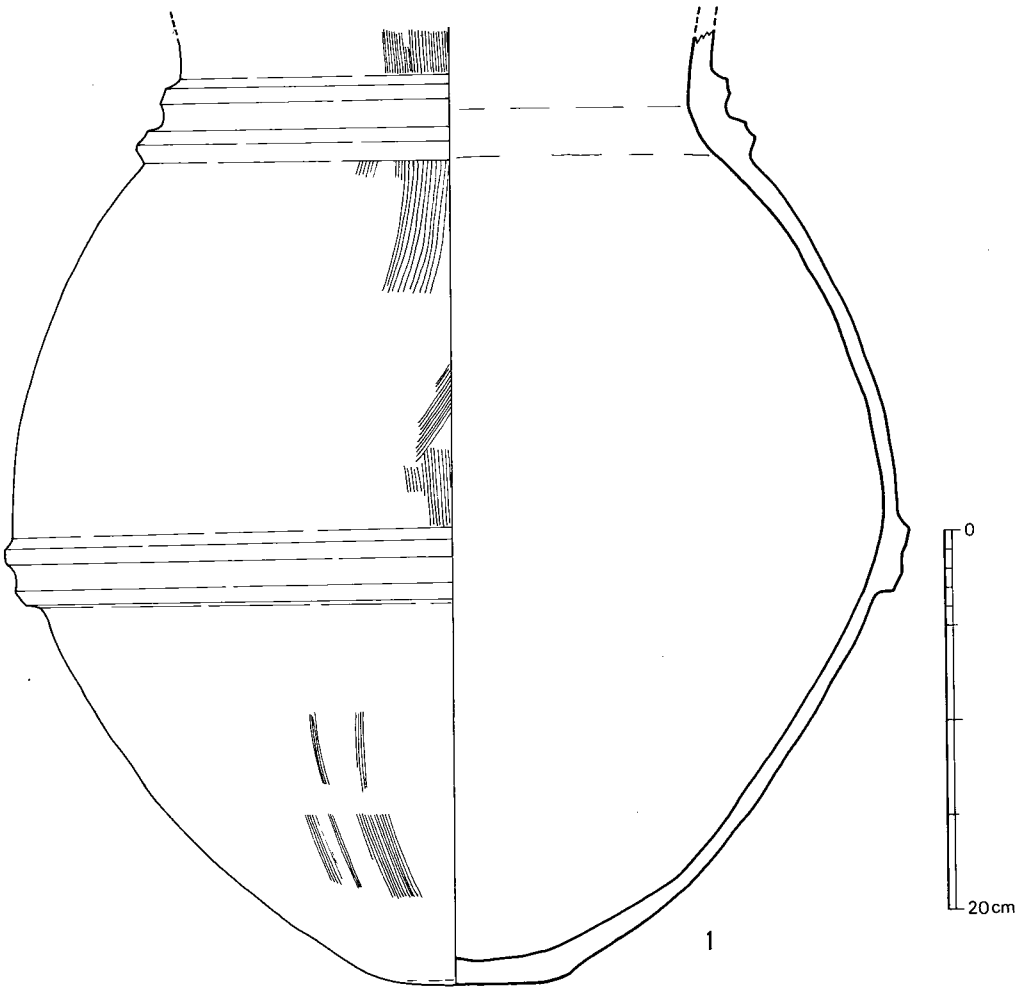


第 6 図　1 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

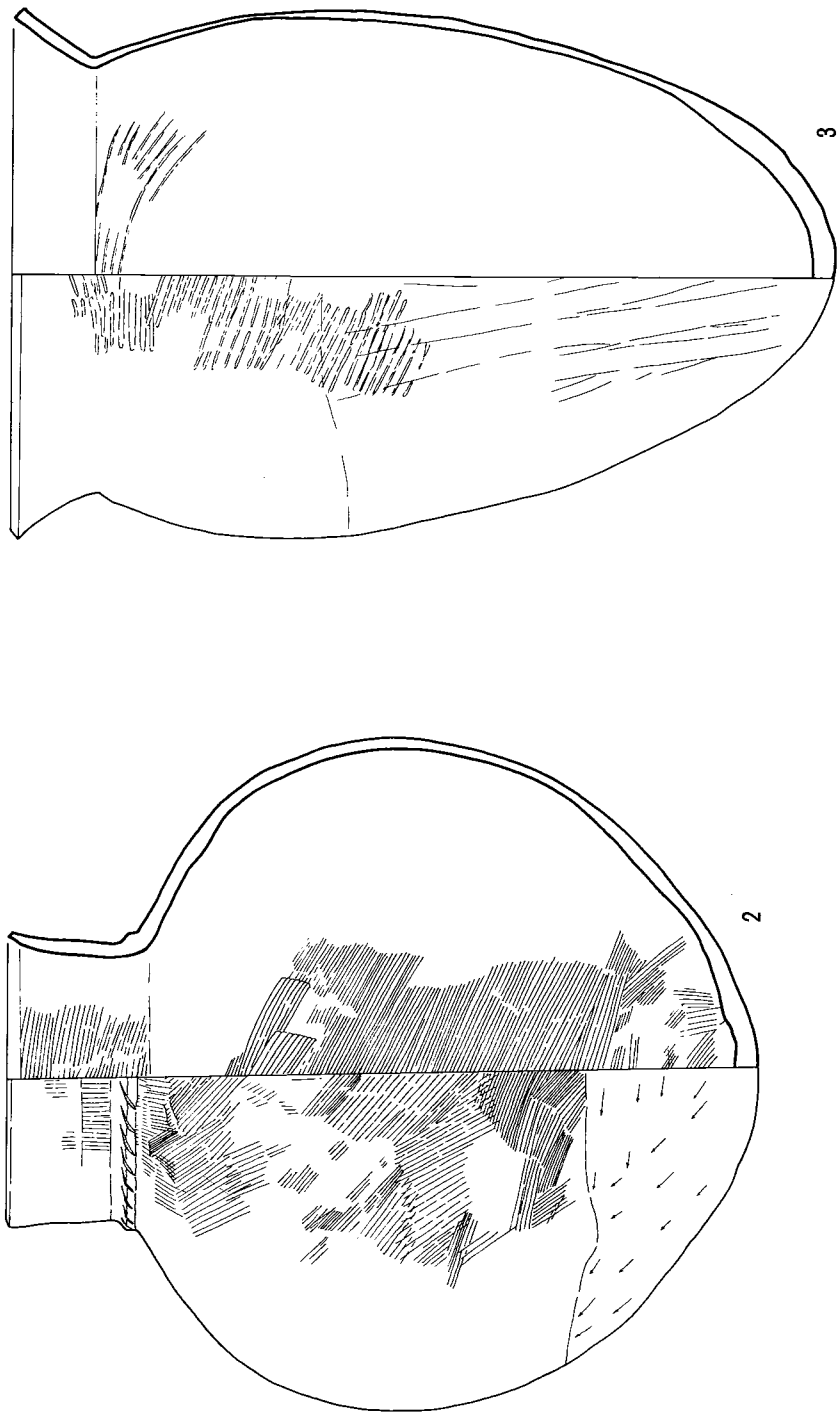
20cm強でしかなかった。床面には，住居跡壁面から1～1.5m幅の間隔をおいて小溝と段築があり、中央部分がわずかであるが1段低くなっている。1段低い中央部のやや南寄り床面に焼土塊が検出されたが，床面を掘りくぼめた炉ではない。柱穴は，深い掘込みのあるものがなく不明であるが，東側ベット上の小穴内とその周辺に赤色顔料が散布していた。

住居内には，とくに中央部分の床面に一括土器群があり，庄内式甕などは無傷のまま出土した。そのほかに周縁のベット上からも一括土器が出土し，大型の土器は多少床面から浮いて出土した破片があるが，床面などから出土した手捏土器・玉類・鉄器などと共に住居に直接伴う遺物とすることができる。手捏土器・土製勾玉・赤色顔料などから，祭祀的な住居遺構といえる。

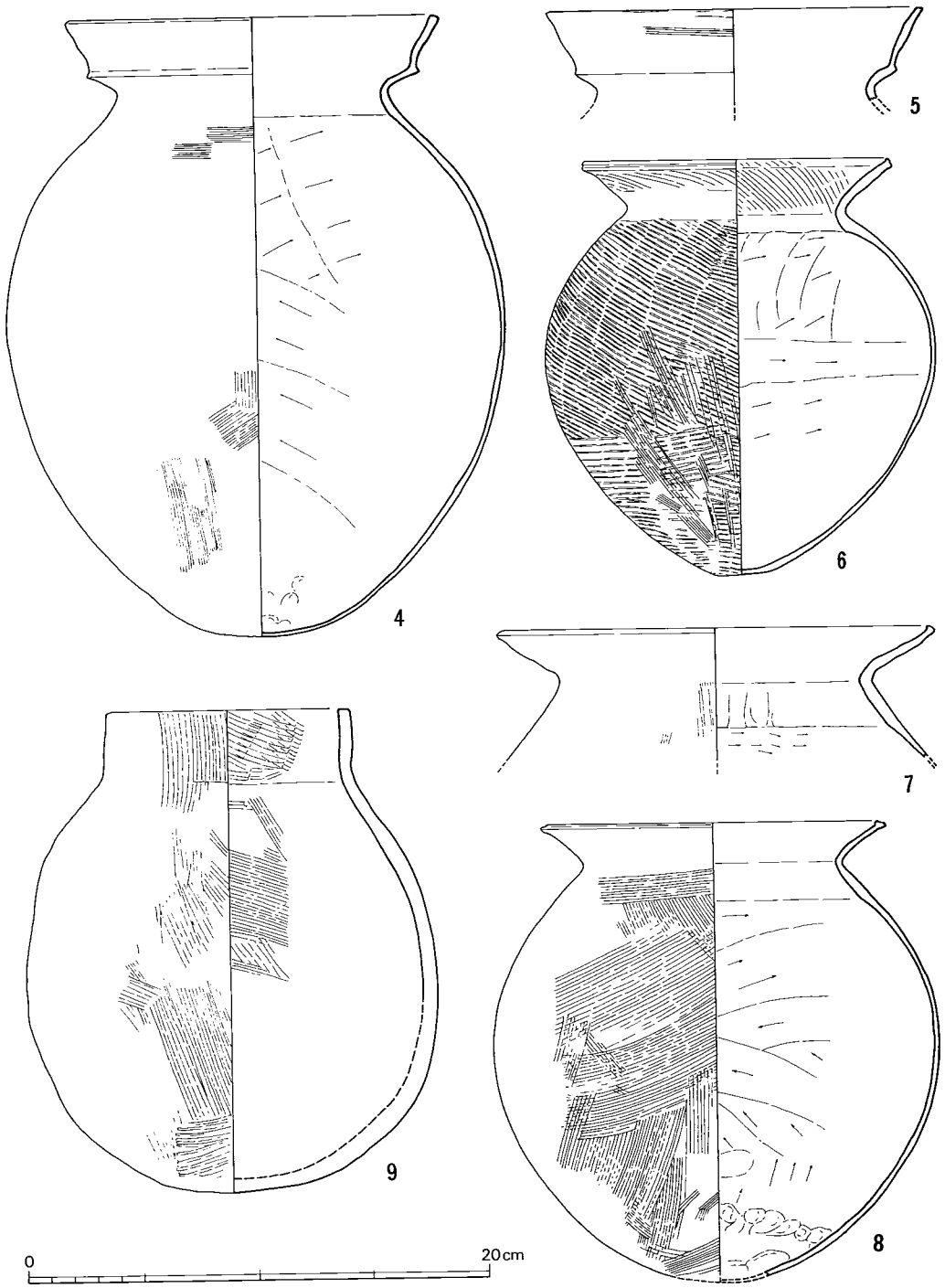
土　器（図版5～9，第7～16図）　1は広口大形壺で，頸部以上が欠損している。頸部



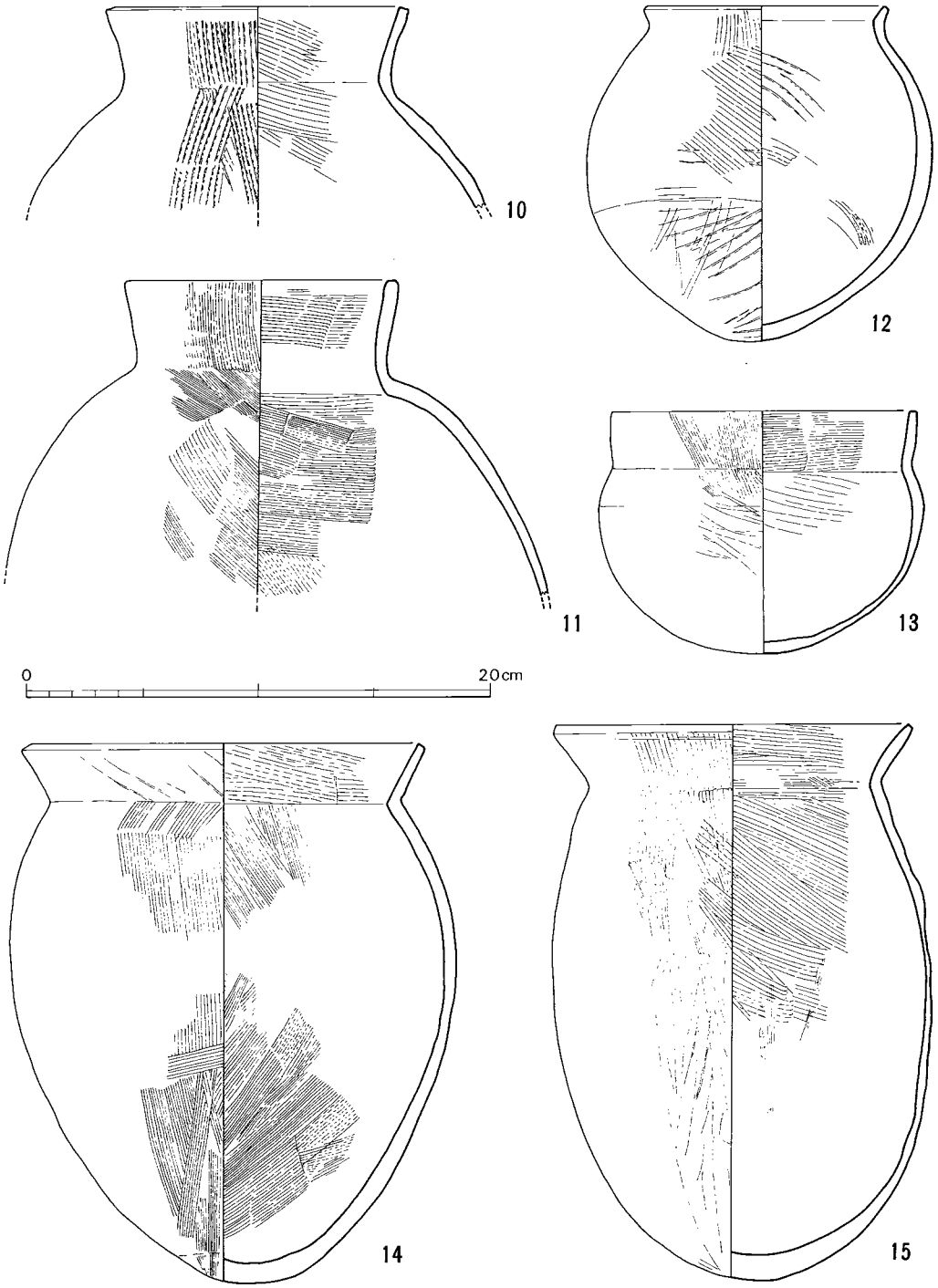
第 7 図　1号住居跡出土土器実測図①（1/4）



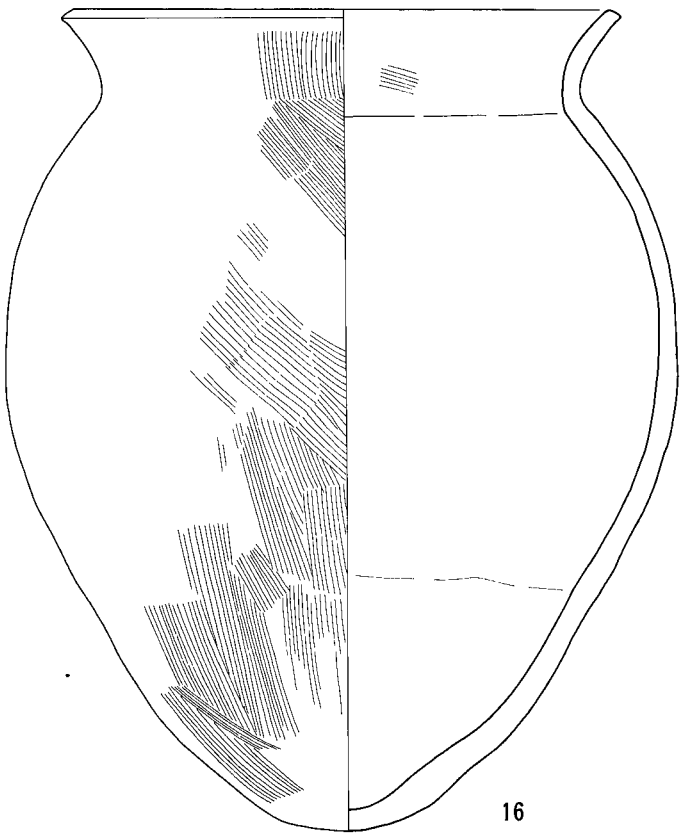
第8図　1号住居跡出土土器実測図②（1/4）

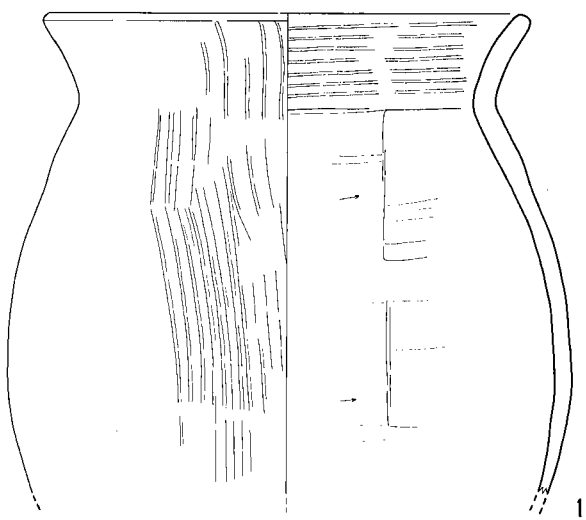


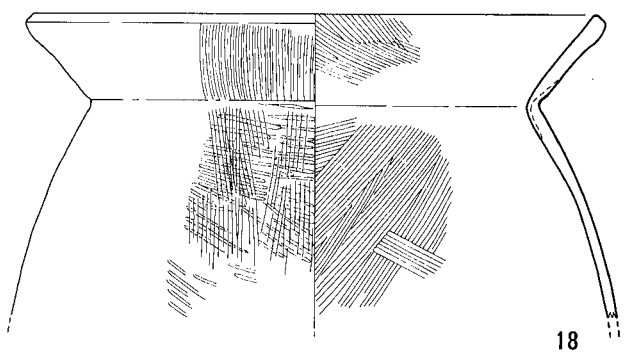
第9図　1号住居跡出土土器実測図③（1/3）



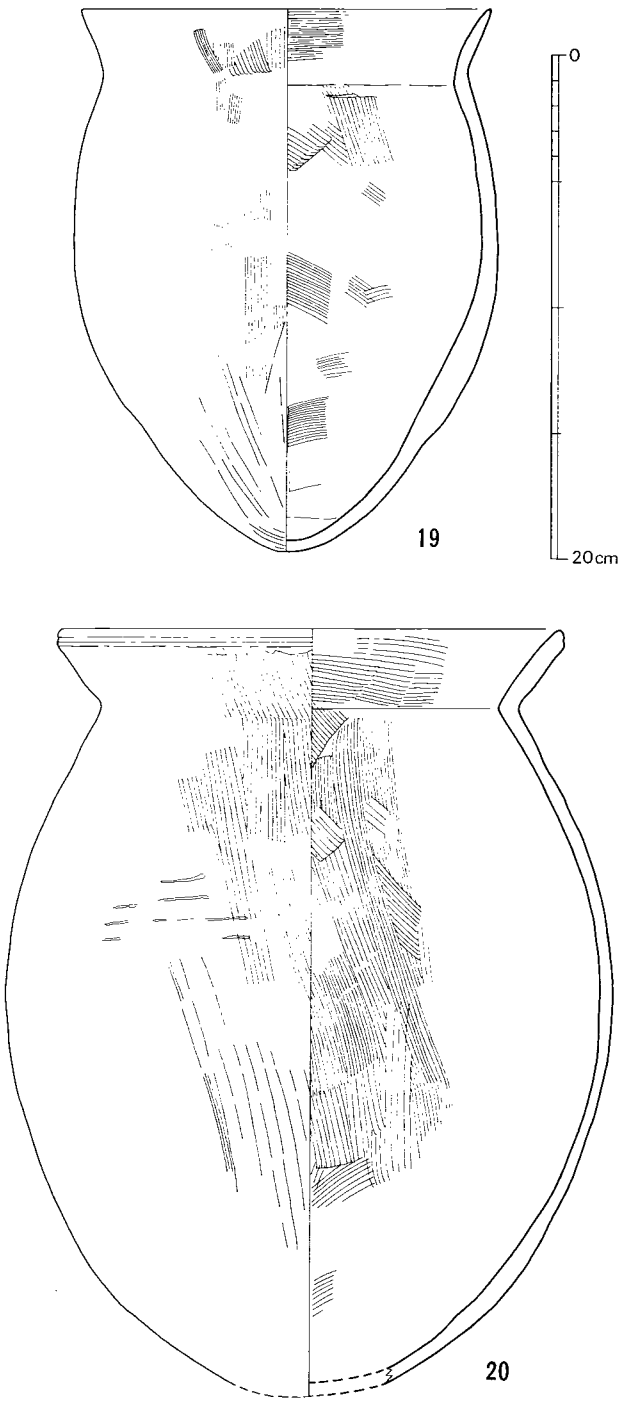
第 10 図　1 号住居跡出土土器実測図④（1/3）







第 11 図　1 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 ⑤ (1/3)



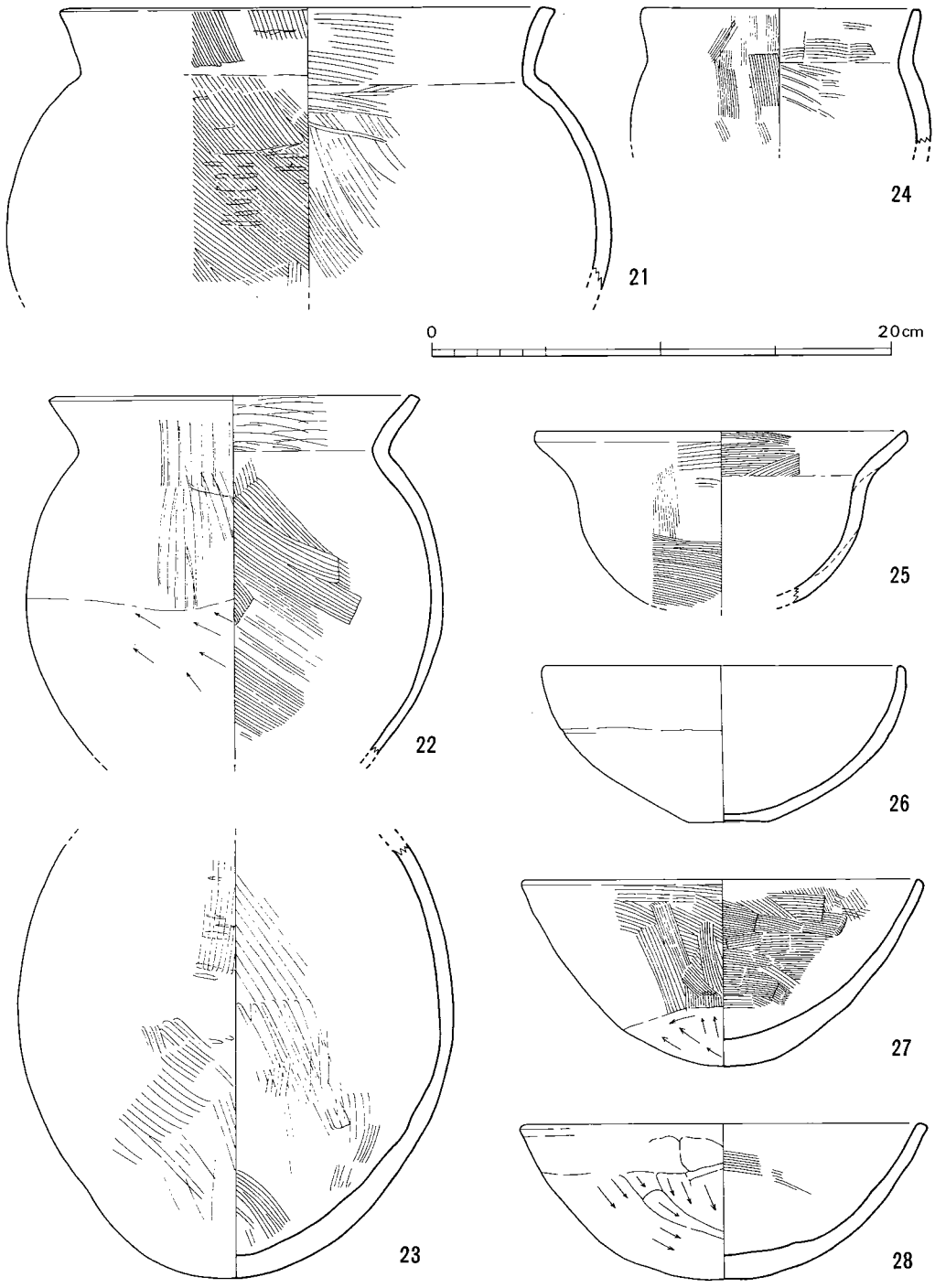
第 12 図　1号住居跡出土土器実測図⑥（1/3）

と体部中央に2本1組の台形凸帯がめぐるが，とくに体部の凸帯は1本化しつつある。内面はナデ調整である。体部最大径47cmの大きさ。2は直口壺で，頸部下端にキザミ目のある低い三角凸帯をめぐらす。内外面共ハケ目調整であるが，外面底部付近のみヘラケズリで丸底としている。

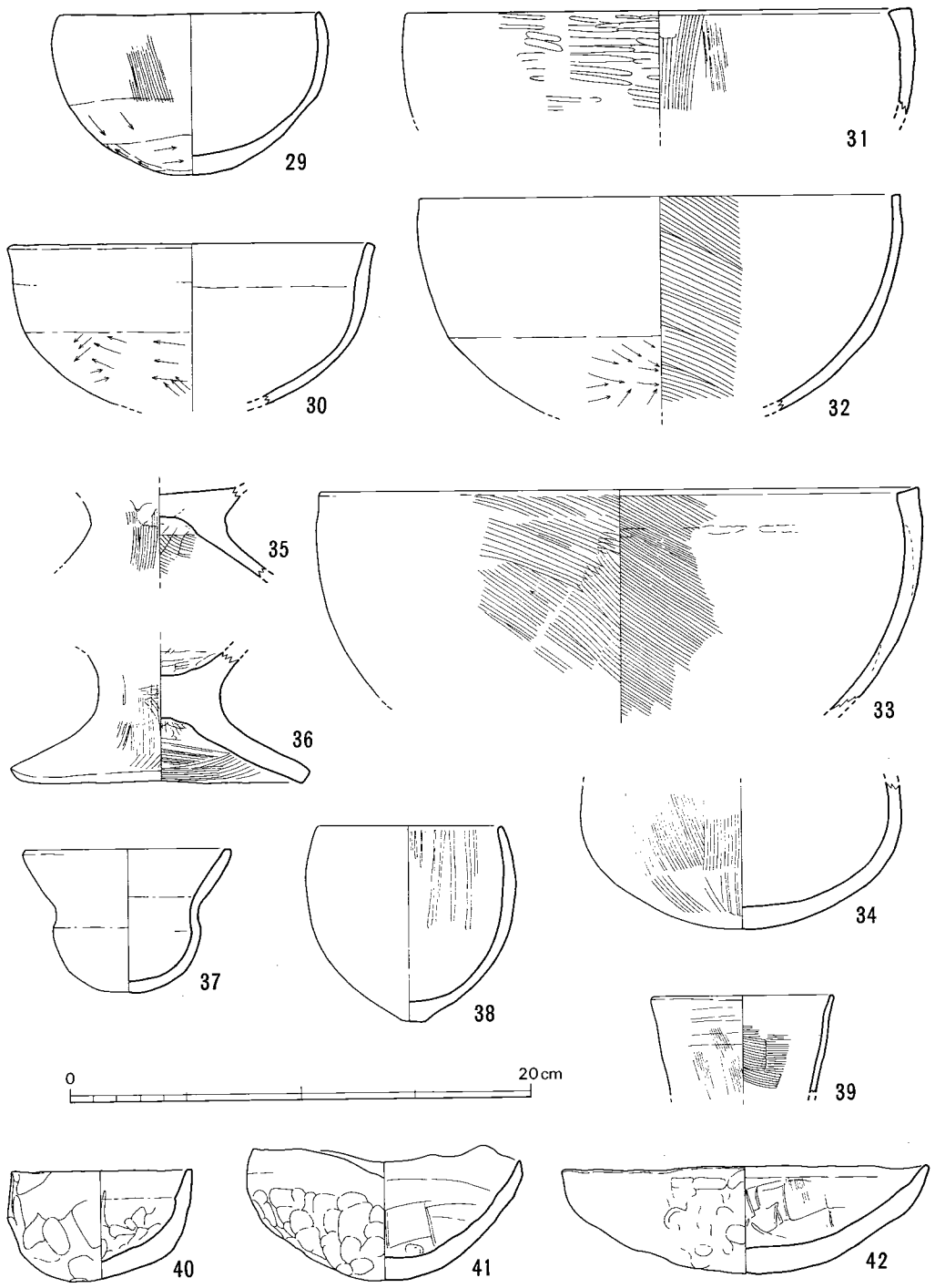
3は中形甕であるが，凸帯がないところから小形甕のうちの大形といえる。くの字形に外反する口縁は長く，長胴の体部外面上半は粗いタタキ目が残る。外面下半は，タテにケズリ状のナデがあり丸底となっている。

4～8は外来系の甕で，4・5は山陰系の二重口縁，6～8は畿内系の庄内式土器である。5と7は，住居跡検出前の第3層からの出土。4は口縁が割合立ち，先端が肥厚するのが特徴で，体部最大径は中位より上にあって肩が張る。頸部と口縁はヨコナデ調整であるが，体部外面は細目のハケ調整。体部内面はヘラケズリによって，器壁を極薄に仕上げている。胎土は細砂と赤褐色粒子を多く含み，淡黄褐色の良好な焼成で仕上っている。

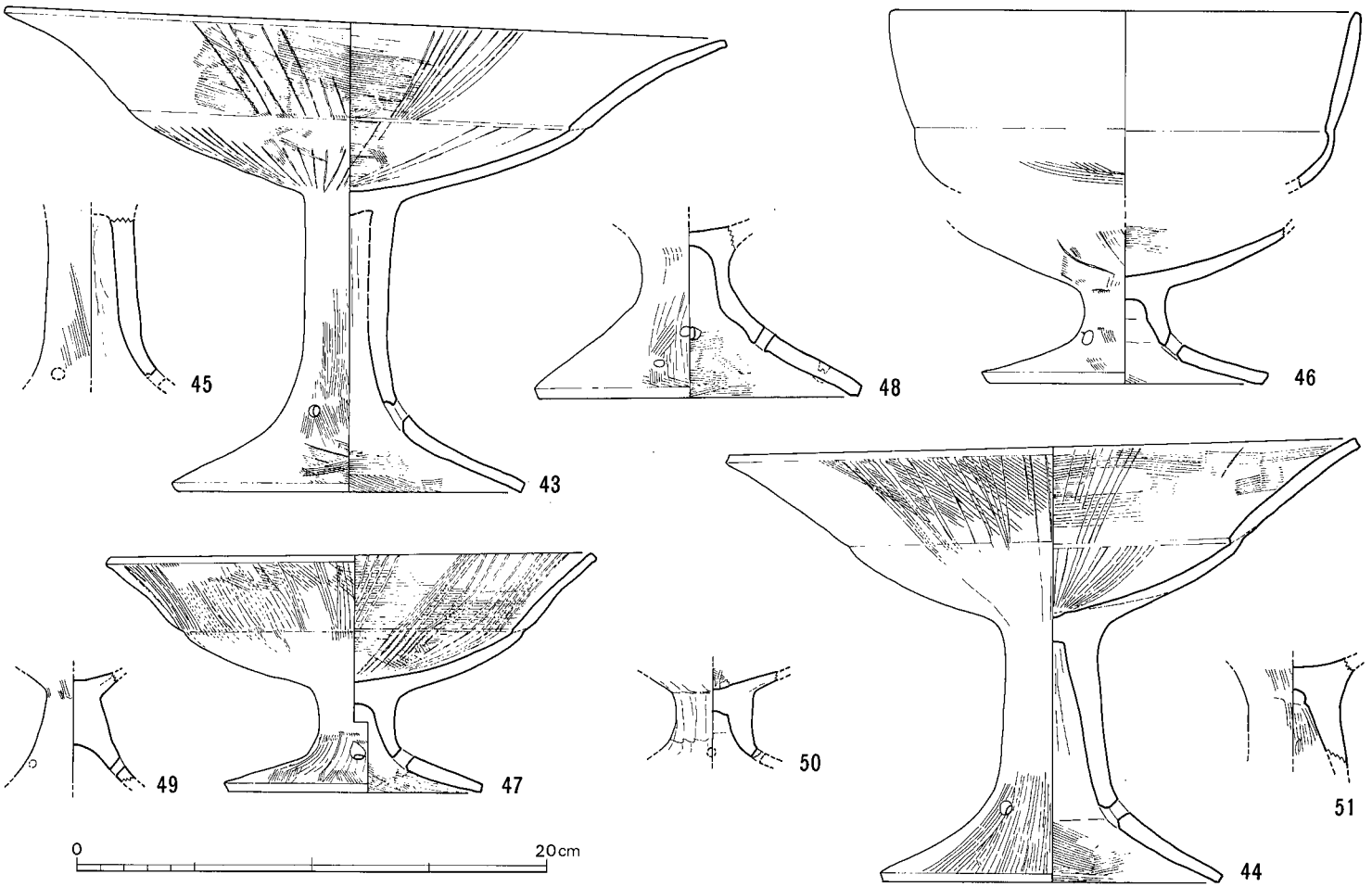
6は無傷の完形品で，外反した口縁と先端の抓上げ，体部の肩の張り，小さな底部など器形の特徴



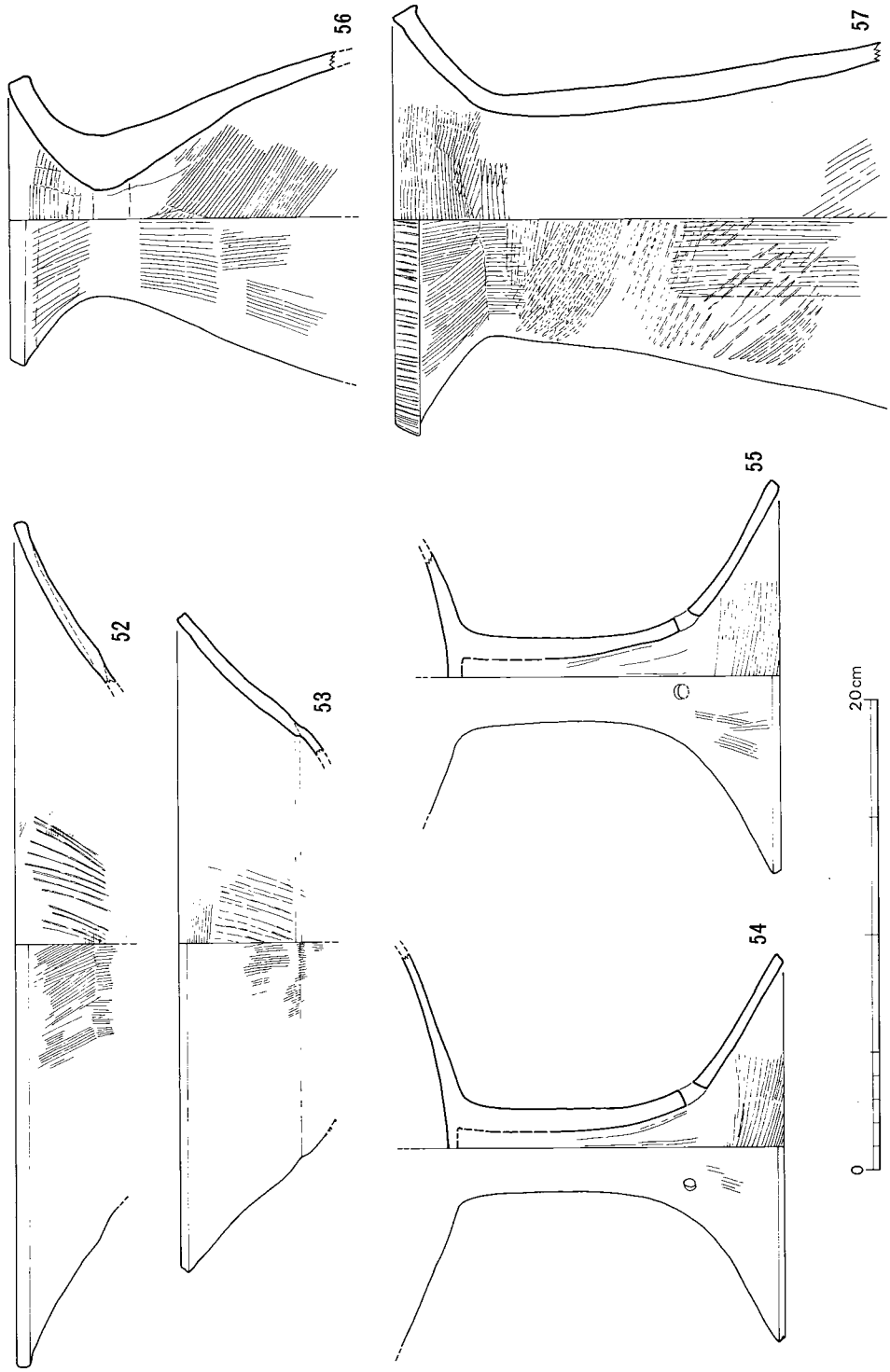
第 13 図　1号住居跡出土土器実測図⑦（1/3）



第 14 図　1 号住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)



第 15 図　1 号住居跡出土土器実測図⑨ (1/3)



第16図　1号住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

と，外部外面上半の右下りの細いタタキ目，下半の水平のタタキ目，下半の部分的なタテのハケ目など調整法の特徴は畿内庄内式土器そのものである。体部内面のヘラケズリが，口縁屈曲部よりやや下にあるところから，庄内式では新しい特徴といわれている。外面には煤が付着しているが，胎土に微細な雲母が目立つが砂粒をほとんど含まず，灰色ぎみの暗褐色の良好な焼成となっている。器壁は極薄。

8は外反する口縁に，先端は内側を上に抓上げる。体部は球形で，外面がハケ目調整，内面は屈曲部から2㎝程下からヘラケズリによって器壁を極薄に仕上げている。8より新しい特徴ばかりであるが，7は口縁部上位が内湾するところがさらに新しい。

9～11は直口壺で，9は内湾ぎみ，10・11は外反ぎみの口縁部をもつ。全体に粗いハケ目調整であるが，外面はさらに粗い。12・13も直口壺に近いものであるが，13は鉢ともいえる。調整は9～13は同じであるが，12の外面下半はヘラケズリによって丸底とした後ナデたものと思われる。

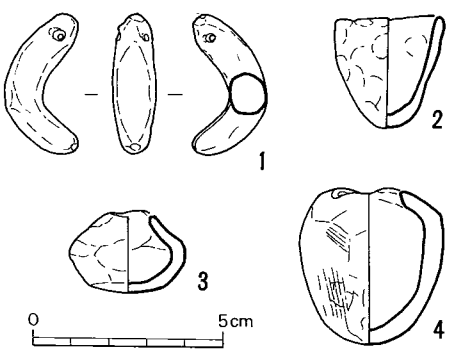
14～24は小形甕であるが，器形の特徴は一定していない。口縁部の外反角度はほぼ一定しているが，21のみ直立に近く肩も張る。口縁先端は，角張るものが多いが，丸みのあるものもある（19・24）。器面調整は全体に内外面共粗いハケ目であるが，体部外面下半はヘラケズリで丸底とした後にタテナデをするものが多いが，ヘラケズリのままのもの（22）やハケ目調整するもの（14）も，上半にタタキ目が残るもの（18～21）もある。

25～34は鉢である。25・30は口縁部がわずかに外反し，29・31～34は内湾する。器形は全体に半球形の丸底であるが，26のみ平底を有す。26は器面が荒れて調整が不明であるが，外面の沈線から下位はケズリ状の痕跡がある。外面下半のケズリは27～32に見られ，他の内外面は粗いハケ目調整である。大形の31～33のみ，口縁端を水平に近く仕上げている。25・30・31・33・34は住居跡上層出土。

35・36は脚台で，25のような鉢や小形甕に付設するものである。住居跡上層出土。

37は，注記ミスで所属遺構が不明なものであるが，1号と5号のどちらかに属するもの。厚手の小形丸底坩で，底部がわずかにくぼむ。胎土は精製で，淡褐色を呈す。38は住居跡検出前の3層出土。外面は磨き，内面はナデ後にタテの暗文状調整を行っている。39も住居跡上の3層出土で，長頸壺であろう。

40～42は手捏土器で，椀形を呈する。第17図より大形の製品で，指痕が著しい。

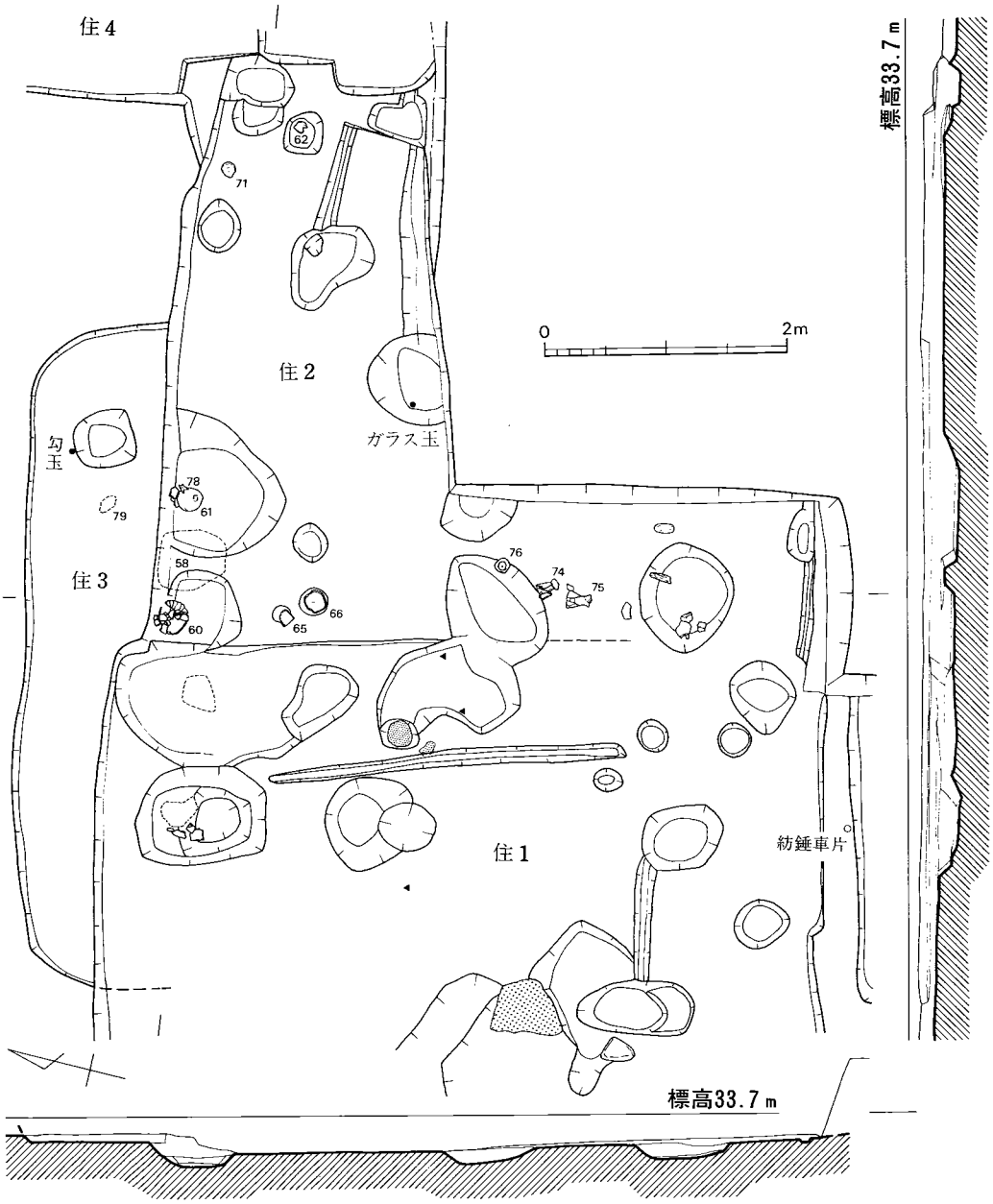


第 17 図　1号住居跡出土土製品実測図（1/2）

43～55は高杯である。46・49は外来系で，46は

サキゾノ

東瀬戸内のものであろう。43・44は在地の西新式の代表的なもので，45・52～55も同様である。47・50は外来系の短脚を模倣した折衷様式である。ここでの在地系高杯の特徴は，杯部の外反部と下半部の長さがほぼ同じ長さで，内外面とも細かいハケ目調整の後，暗文を施している。



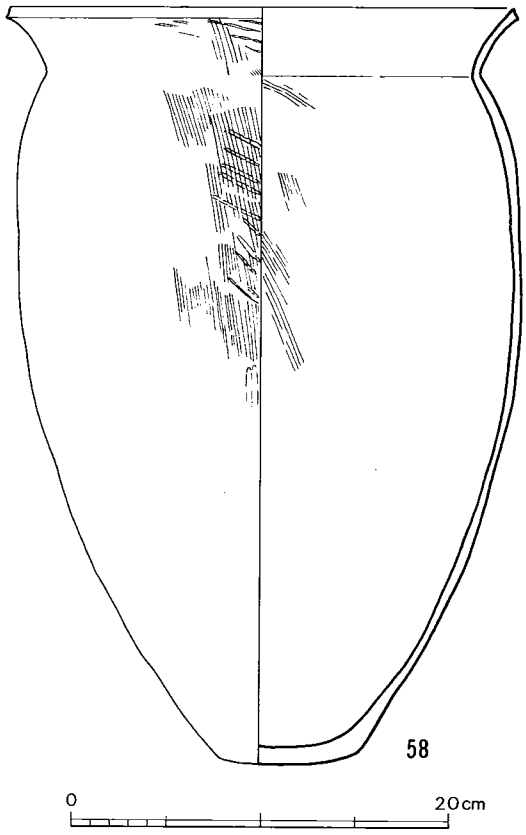
第 18 図　2・3号住居跡実測図 (1/60)

脚は44のように多少短かいものもあるが，大半が長脚である。脚柱状部はタテのヘラ状用具による磨きがあり，裾部にわずかな内湾が残っているものがある（43）。47は以上と同形式のものを短脚にしただけである。46の杯部と脚部は直接接合できないが，胎土や焼成上りが同一であることから，同一個体とした。これは高杯というより，岡山地方で見られるように脚付小形壺といえるもので，胎土や焼成仕上りが在地系の土器と違っている。ただし，胎土に赤褐色粒を含むところは在地系と同じ。

56・57は在地系の器台で，56は上位が強くくびれ，57は口縁にキザミ目と体部にタタキ目を残し，弥生終末のものと区別がつきにくい。

この1号住居跡出土の土器を一括資料として，最古式土師器の標式とする。

他に陶質土器片も出土している（第41図）。



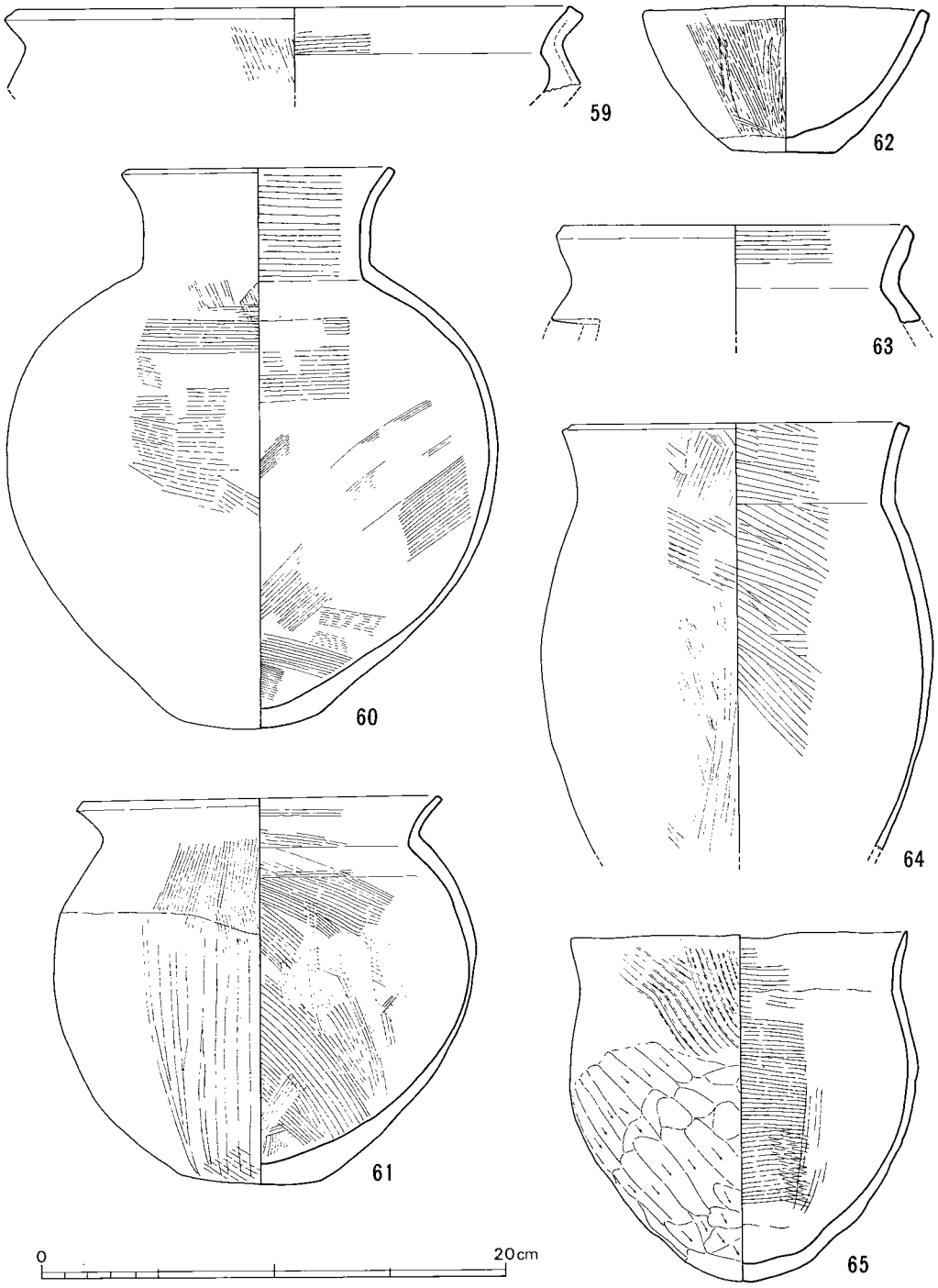
第 19 図　2号住居跡出土土器実測図①（1/4）

土製品（図版9，第17図）　1号住居跡から出土した小形手捏土製品の4点である。1は長さ37㎜，最大径11.5㎜の大きさの土製勾玉で，頭から尾までさほど太さに変化がないが，粘土紐を湾曲させた時に内側を押えたために中央部の幅が多少広くなっている。2は甕形，3・4は壺形の形態をとるが，4は小孔さえあれば陶塤の形に似ている。高さは4.2cmの大きさ。

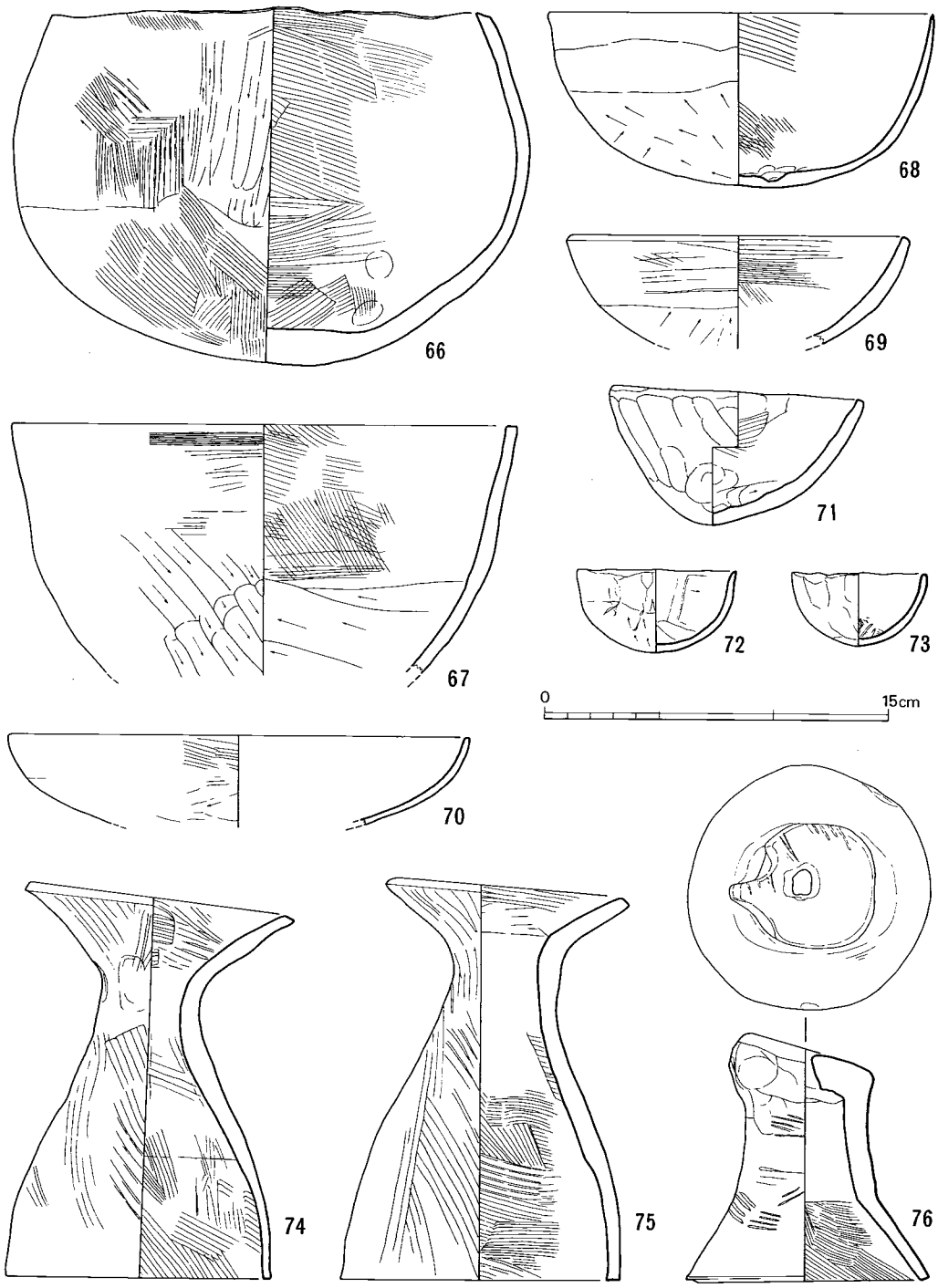
2号住居跡（図版3－2，第18図）

北側の3号を破壊して造られているが，埋没後1号に西側を，東側を4号に破壊されている。また，住居跡は方形であるが，南側と東南側が未掘であるため住居跡の規模は確定できない。床面には多くのピットがあるが，柱穴として特定できるものはない。住居内床面の西側には，完形になる土器が多くつぶれていた。

土　器（図版10・11－1，第19～22図）　58は小形甕であるが，中形に近いものである。口縁は長く外反し，体部は長胴で凸レンズ状の底部を有する。外面は口縁部におよぶタタキ目が残るが，上半はハケ目調整，下半はタテにナデ消してある。口縁先端が肥厚し，わずかに抓上げぎみのところが特徴となる。



第 20 図　2 号住居跡出土土器実測図②（1/3）



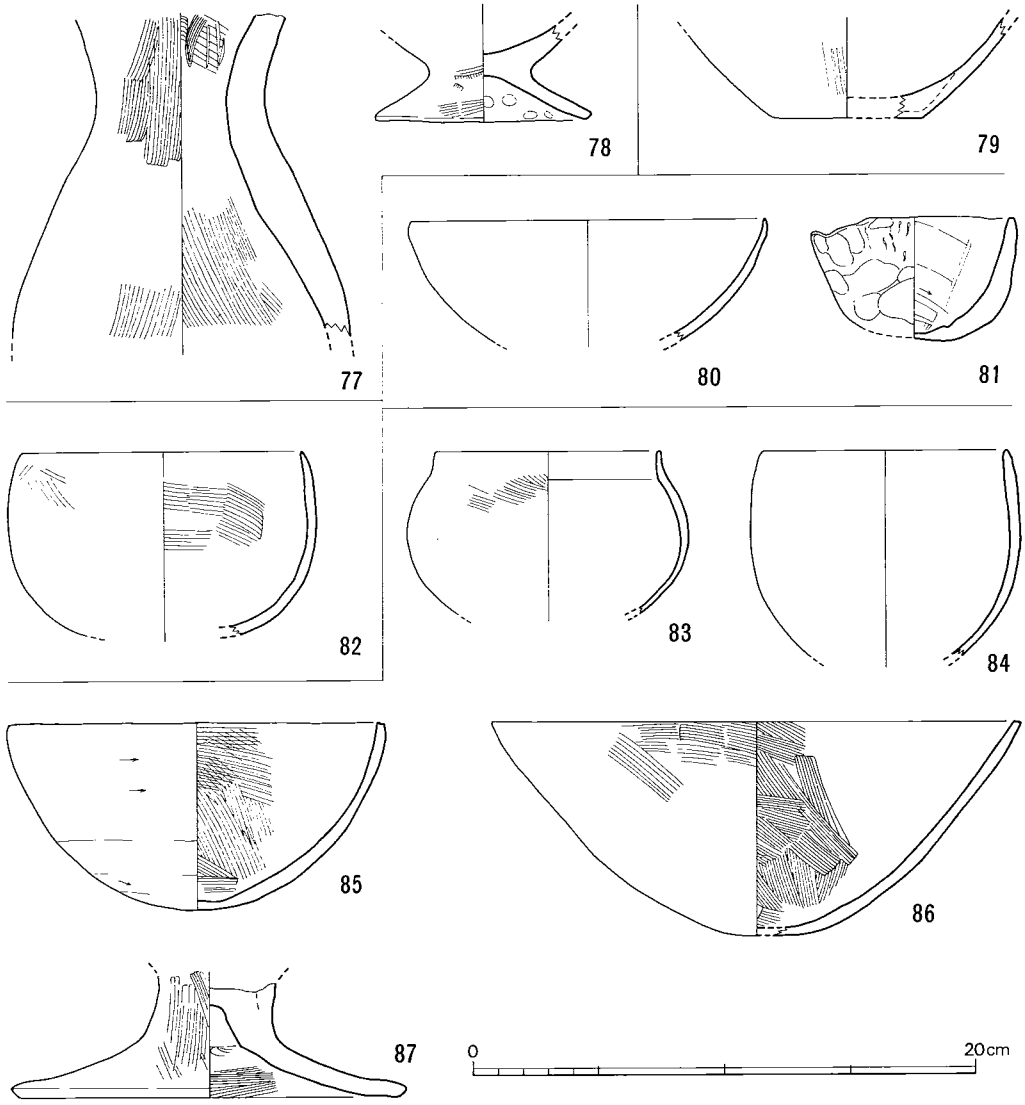
第 21 図　2号住居跡出土土器実測図③（1/3）

サキゾノ

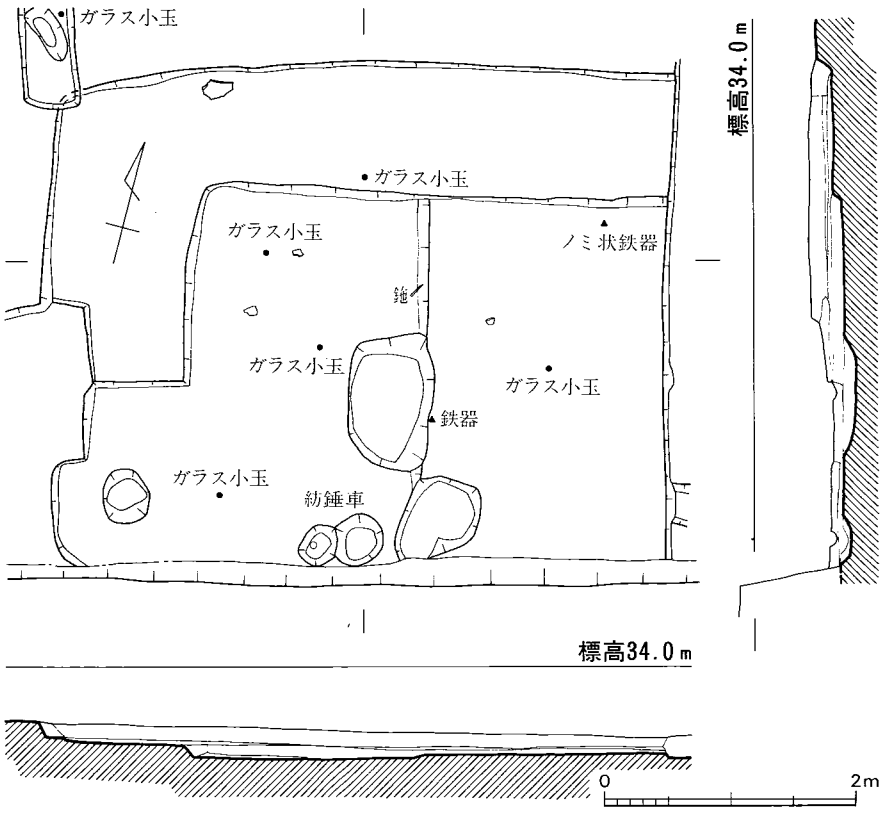
59は器形が不明だが，袋状口縁の大形壺とすれば混入品の可能性がある。

60は直口壺であるが，口縁上半は外反する。肩部が張って凸レンズ状の底部を有するが，在地の弥生中期からの系統ではたどれない器形である。

61は壺と甕の区別がつきにくいもので，ここでは短頸壺としておく。わずかに外反したくの字口縁に球形の体部であるが，体部中位以下はケズリの後にタテにヘラナデしているが，底部を丸底とはしていない。



第 22 図　2～5号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 23 図　4 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

62は平底の鉢で，床面東端ピット内出土。2号住居より古い可能性がある。

63～65は小形甕で，63は体部に方形の窓付，65は手捏の粗製土器である。

66～73は鉢形で，71～73は手捏小形土器。66～70は外面下半をヘラケズリし，66はその後粗いハケ目調整している。

74・75・77は器台，76は支脚である。74・75は同形で，上位にくびれがあり，裾部は内湾する。内外面共に粗いハケ目調整，76は上面が傾斜し中央に孔が貫通する。上端の高い一方がくちばし状に抓まれている。外面にタタキ目が残る。

78は台で，鉢形土器に付くものであろう。

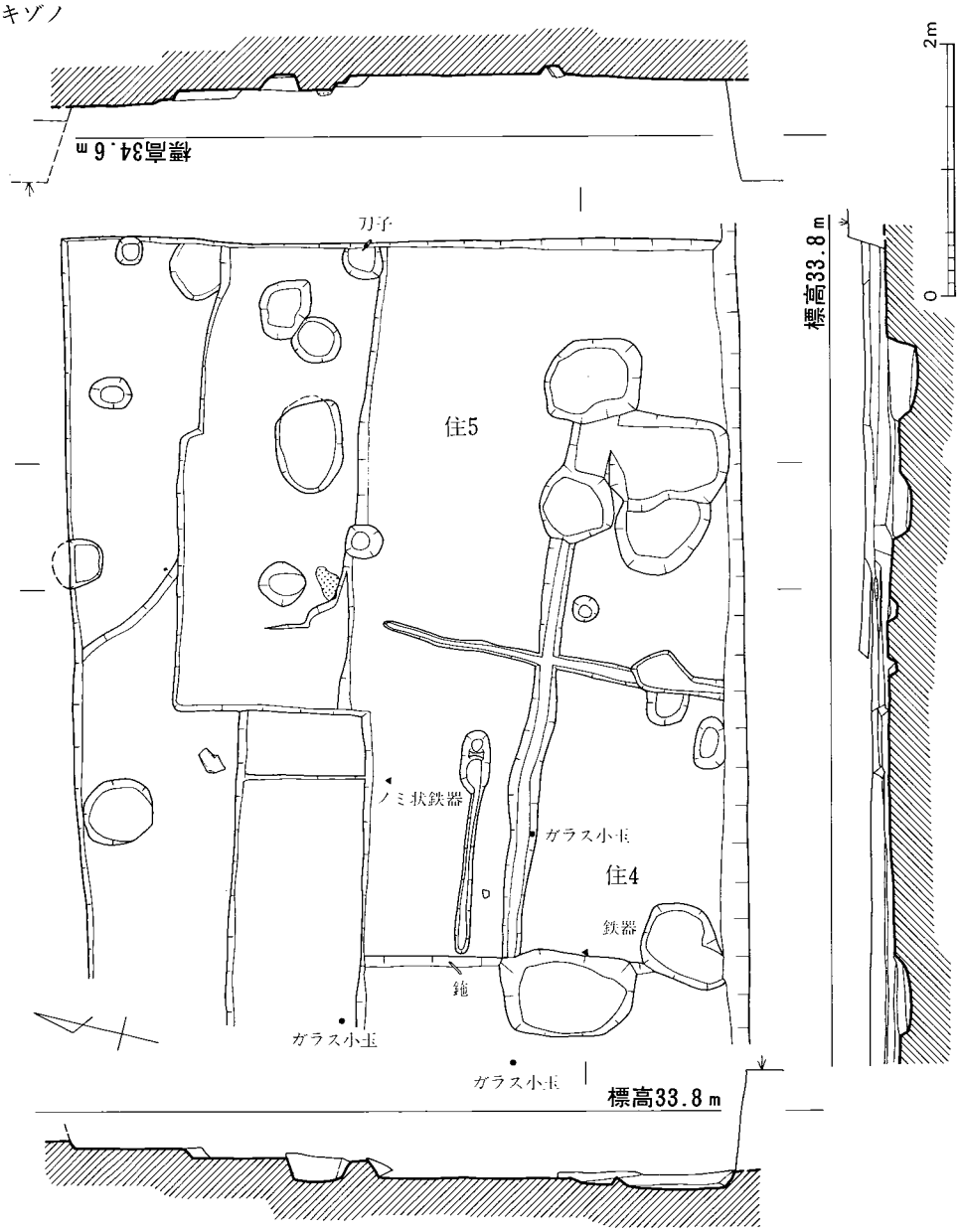
2号住居跡の土器は，弥生終末のものである。

3号住居跡（図版3－2，第18図）

1・2号住居跡によって大部分を破壊されているため，北側の一辺のみを残している。東西の長さ5.5mの大きさの隅丸方形竪穴住居跡である。北東隅に1個のピットがあるが，柱穴とは思えない。ピット北側床面でガラス勾玉が出土した。

土　器（第22図79）　壺と思われる底部片で，平坦な平底と，外面の粗いハケ目から，弥

サキゾノ



第 24 図　5 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

生後期中頃のものと思われる。

4号住居跡（図版４－１，第23図）

住居跡は，西側の２号を切って造られているが，東側を５号によって破壊されている。住居跡の南側を発掘していないので，住居の規模は不明であるが，住居内には地山整形のＬ字形ベッド状遺構がある。ベッド南側の中央部も東側がわずかであるが高い床面となっている。柱穴

は，西壁に近い1個が床面から約20cmの深さで，やや浅いかもしれないが可能性のあるもの。

住居内には，土器は少ないが，ガラス小玉・鉄器・紡錘車などが床面から出土している。

土　器（第22図80～82）　3個共に鉢形であるが，81は手捏，82は丸みのある椀形である。80は調整が不明だが，82は内外面に粗いハケ目が残っている。弥生終末のものであろう。

5号住居跡（図版4－2，第24図）

遺構の重複がはげしく，検出が困難であった住居跡で，第24図の東半が5号，西半が4号としているが，床面のピットや小溝は，4・5号住居跡以前のものであろう。5号は北側にベッド状遺構を備えている。柱穴は不明。

遺物は，刀子と土器が出土したが，確実に住居跡に伴うとはいえない。

土　器（第22図83～87）　83は直口壺，84～86は鉢，87は脚部である。全体に内外面共に粗いハケ目調整であるが，85・86の外面下半はヘラケズリの痕跡がある。弥生終末頃のもの。

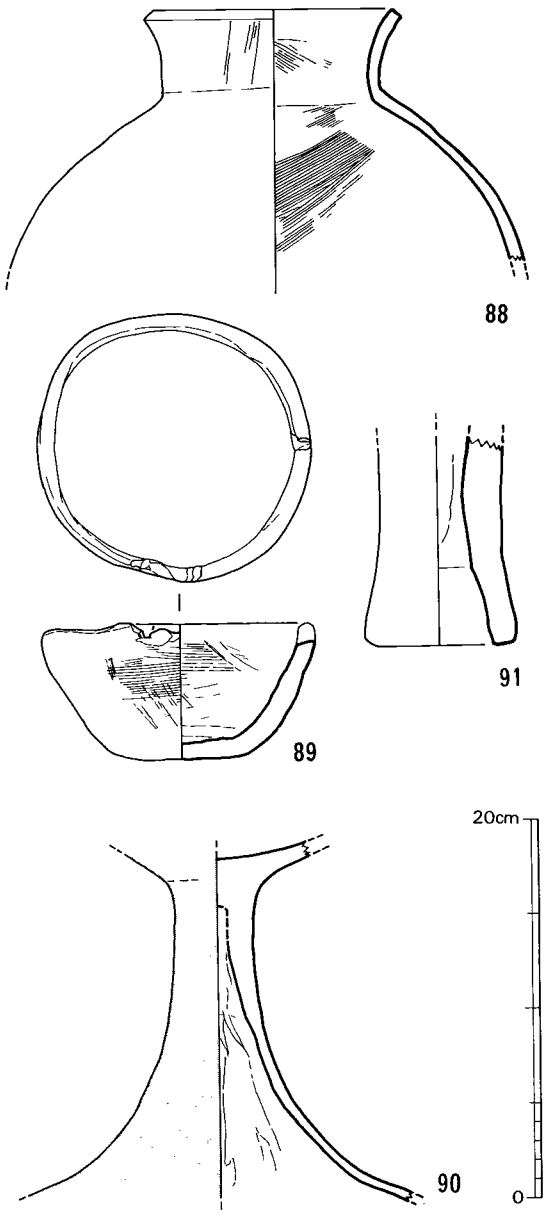
住居外の土器（第25図）

88・89は，1号住居跡西側の住居跡状遺構出土の土器で，直口壺と鉢である。88の壺の口縁部は少し外反し，体部は球形になると思われる。外面は荒れて不明であるが，内面は細かいハケ目調整されている。89は口縁の2ヶ所に切口があり，坩堝状の容器であろうか。88は弥生終末頃のもの。

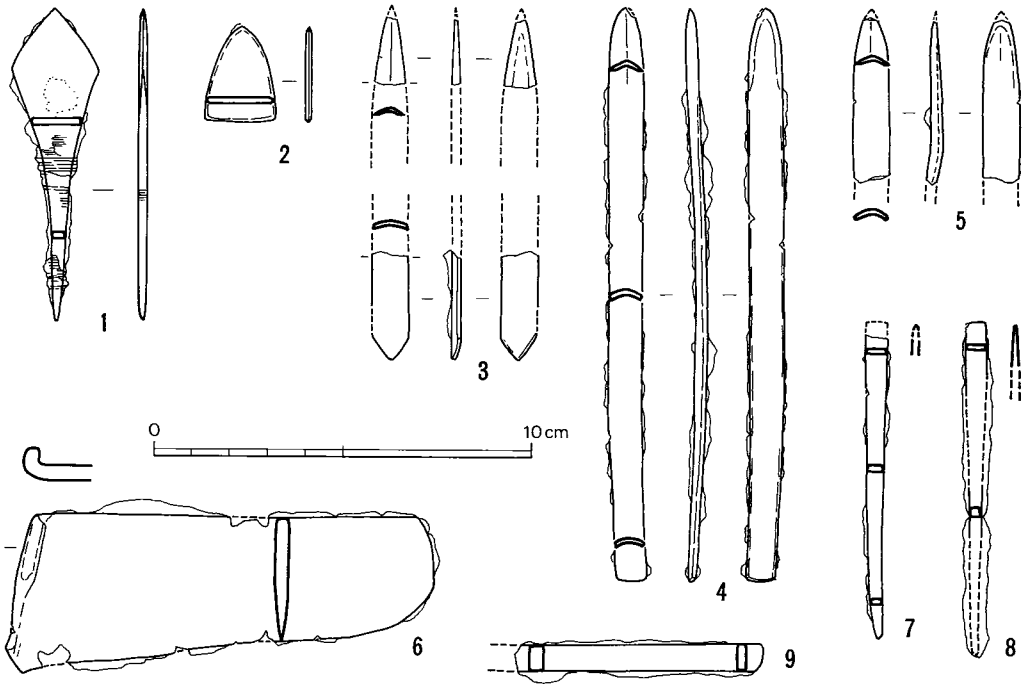
90は，1号住居跡の上面の3層から出土した丹塗磨研高杯。裾部端がわずかに内湾するところから中期末のものである。

91は，やはり3層から出土した支脚。厚手で外面ナデ調整されているところから中期のもの。

鉄　器（図版12－1，第26図）



第 25 図　住居外出土土器実測図（1/4）



第 26 図　I－1 出土鉄器実測図（1/2）

鉄　鏃（１・２）　１は，庄内期の１号住居跡出土で，各所に赤色顔料が付着している。鉄鏃は，有茎式で作りには身と茎の明瞭な区別がなく，木質のわずかな痕跡によりそれとわかる。大きさは，全長8.2cm，最大幅2.3cm，厚さ２mmあり，茎の長さは3.4cmのようだ。鏃の片面には，主軸に直行する方向に木目が走る木質があり，埋没時に木質に密着していたことがわかる。平根式のととのった形をし，先端のみ刃を有するものである。

２は，E16・S272の3層から出土したもので，時期は層位からは終末であるが，中期以前のものであろう。大きさは，長さ2.55cm，幅1.9cm，厚さ1.8mmの扁平なもので，前期末から中期前半の扁平磨製石鏃のモデルとなるものであろう。

鉄　鉇（３～５）　３は，終末期の２号住居跡上層から出土したもので，中央部を発掘時に破損して失った。先端部は，片面に鏑を有し，片面はくぼんで，刃は両方共に平坦に研ぎ出されている。茎部尻は尖がるが，刃を持たず，側面に平坦面を作っている。幅は１cmである。

４は，終末期の４号住居跡埋土中から発見された完形品。大きさは、全長15.1cm，幅0.95cm，厚さ0.18cmで，全体にゆるいU字形をしている。刃部は，長さ２cmで片面に鏑を有し，３と同様に鋭利な刃を有する。

５は，５号住居跡上層から出土したもので，終末期のものであろう。刃部は，３・４と同様で，長さ約２cmある。

鉄　鎌（６）　鉄鎌は，終末期の４号住居跡上層から出土した。全長11.1cm，最大幅4.1cm，厚さ0.4cmの大きさで，とくに短かいものである。基部の屈曲は，背側の上半のみで，身は先端にゆくほど幅狭くなり，短かいことからも破損品の再利用の可能性がある。

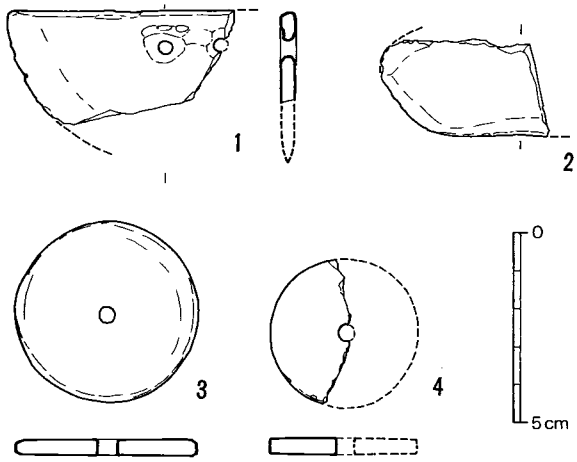
ノミ状鉄器（７・８）　これは４号住居跡上層から出土したもので，両方共同様な工具であろう。８は，長さ8.8cm，刃部幅0.55cm，厚さ0.15cmの大きさで，茎と身の区別がない。

９は，３層の排土中から採集されたものであるが，刀子等の茎にしても長すぎるので，用途不明の鉄器である。

石　器（図版12－２，第27図）

石庖丁（１・２）　１は庄内期の１号住居跡出土の破片。小破片で，しかも上層出土であるから１号住居跡の時期とはかぎらない。灰色頁岩質砂岩で扁平である。

２は，E10・S274の小溝上層の出土で，終末期以前のものであるが，細片であるため時期は決定できないであろう。



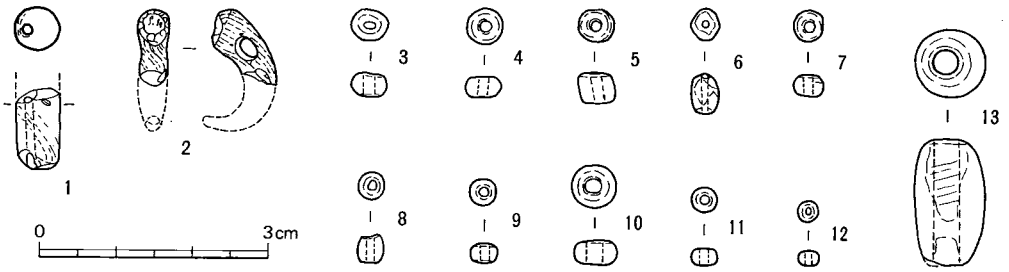
第 27 図　Ⅰ－１出土石器実測図（1/2）

紡錘車（３・４）　３は，終末期と思われる４号住居跡の出土。大きさは，径4.85cm，厚さ4.3mm，孔径4.8mm，重さ21.4ｇの白雲母片岩製。

４は，１号住居外の南側から出土したもので，１号住居より古いもの。径約3.9cm，厚さ4.45mm，孔径4.4mmの大きさで，白雲母片岩製。

玉　類（図版11－２，第28図１～９，表３）

１の管玉は１号，２の勾玉は３号，３の小玉は２号，４の小玉は４号住居外北，５～９の小玉は４号住居跡の出土。



第 28 図　Ⅰ－１～７ 出 土 玉 類 実 測 図（実大）

管　玉（１）　青緑半透明のガラス製で，現存長11㎜の半欠品。中央部の径は6.0～5.6㎜，端部の径は5.3～5.15㎜であるから多少中ぶくらみの管玉である。孔は中心から外れて貫通しているが，径1.35㎜の均一した円孔である。ガラス体内には気泡が見られるが，孔を中心に螺旋状に伸びており，製作法がうかがえる。

勾　玉（２）　空色半透明のガラス製で，現存長12㎜の半欠品。頭部径が最も大きく5.8㎜，中央部径4.6㎜，孔径2.7×3㎜の大きさ。体部全体に縦に走る突細線があり，これは頭を起点にすると右廻りの螺旋状に伸びている。これも製作法によるもので，鋳型を使用した製作法ではなく，頭部を固定しひねりながら伸す引延法にによって製作したものである。最後に頭部を原体から切離しているが，仕上研磨はしていない。

小　玉（３～９）　７例共にガラス製小玉で，『三雲遺跡』IIの仲田Ｉ－16地区のところで述べたように，ガラス小玉に観察できる気泡が，孔と平行方向に連なることから吹きガラス技法か引延法によって製作したことがわかる。

表３　サキゾノ１・５・７ガラス小玉計測表

（単位：㎜）

No.	出　土　遺　構	径	厚	孔径	分類	色
3	Ｉ－1　2号住居	4.85 4.2	3.2	1.5	C	スカイブルー
4	Ｉ－1　4号住外	4.7	2.65	1.45	C	コバルトブルー
5	Ｉ－1　4号住ベッド	4.45	3.95	1.35	A	スカイブルー
6	Ｉ－1　4号住床	3.9 4.3	5.1	0.95	B	スカイブルー
7	Ｉ－1　4号住上層	4.9	2.6	1.3	C	スカイブルー
8	Ｉ－1　4号住居	3.55	3.7	1.25	B	スカイブルー
9	Ｉ－1　4号住居	3.6	2.55	1.3	C	スカイブルー
10	Ｉ－5　1号土壙	5.8	3.1	2.15	C	スカイブルー
11	Ｉ－5　1号住居	3.4	2.3	1.3	C	スカイブルー
12	Ｉ－7　4号住居	2.8	1.9	0.9	C	スカイブルー

サキゾノＩ－５の遺構は，『三雲遺跡』IIに報告した。

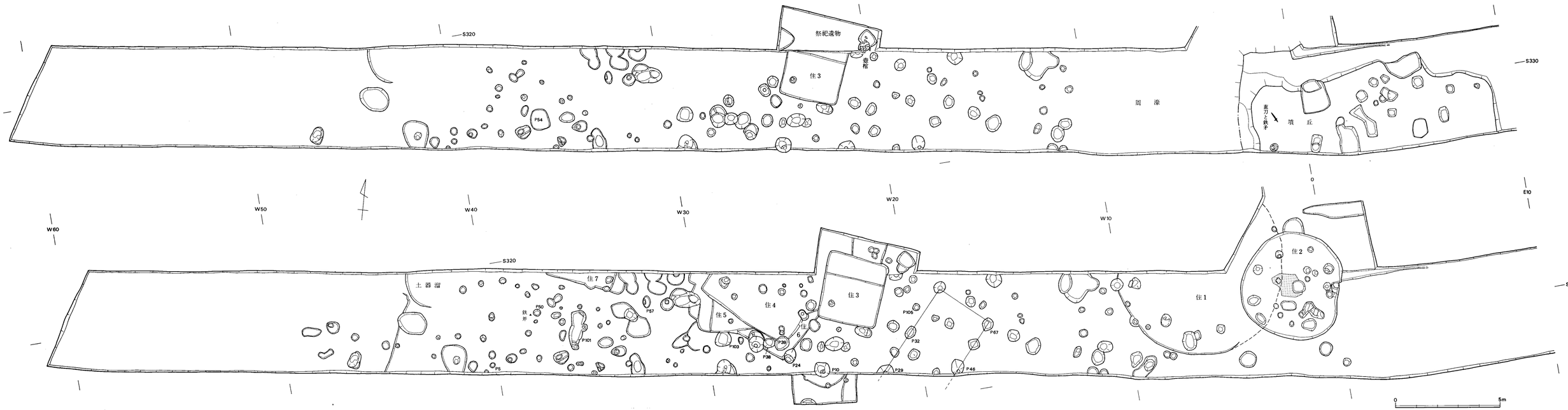
ガラス小玉の計測値と特徴は表３のとおりで，分類も前回に従った。

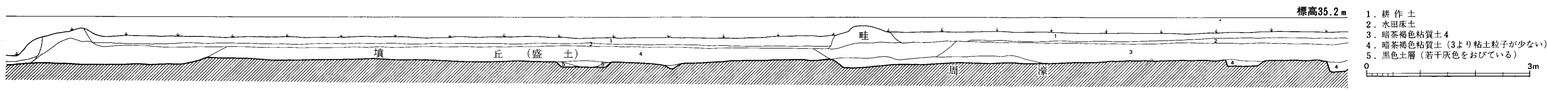
3.　Ｉ－6～8の遺構と遺物

サキゾノＩ－6～8は，新設道路敷内の調査であるため幅５ｍ，長72ｍのトレンチ調査となった。この道路は，『三雲遺跡』IIで報告したサキゾノＩ－４・５と石橋II－11・12に続くものである。Ｉ－８地区はＩ－１から来る南北道路と交差する地点となる。

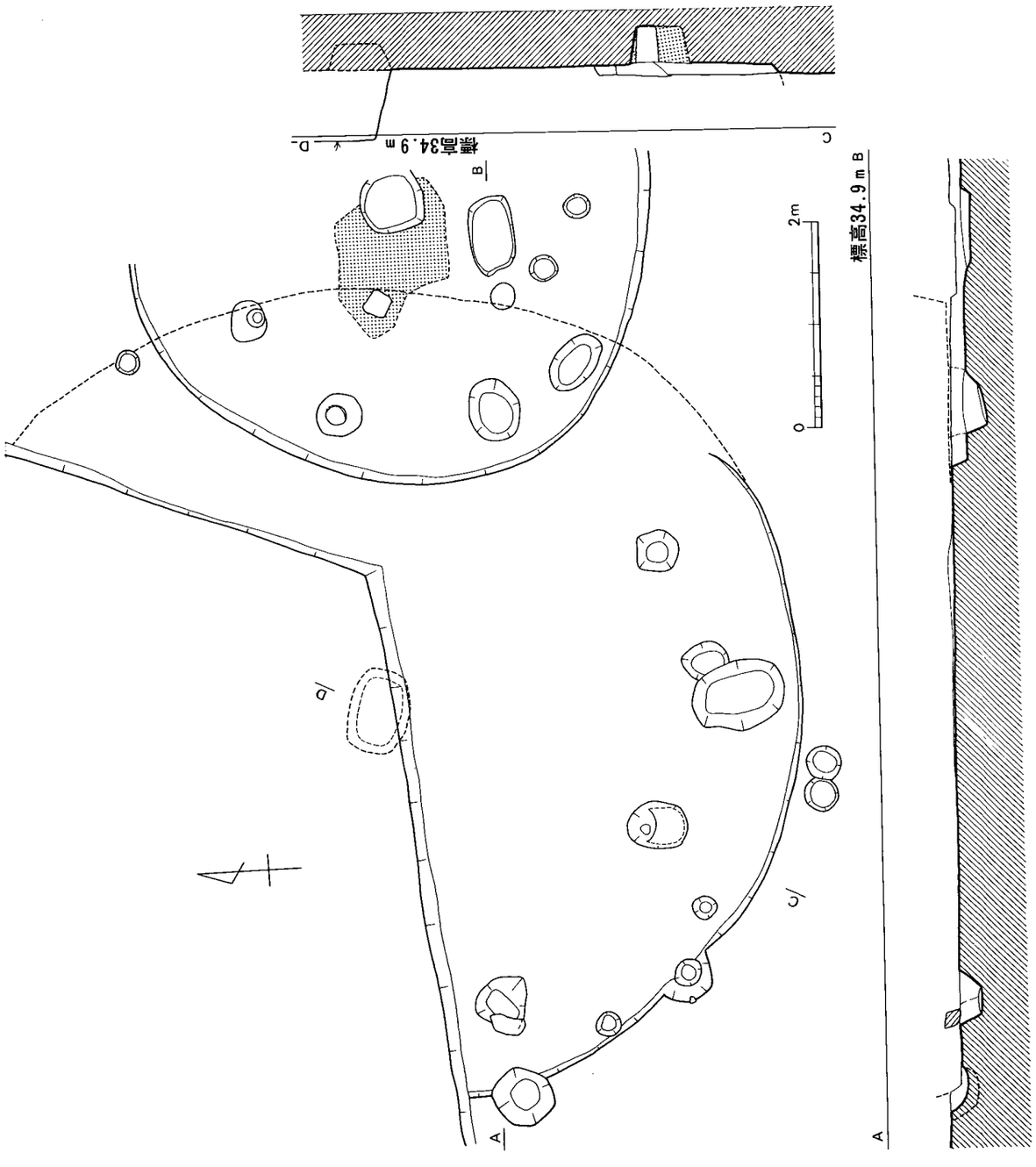
(1)　住居跡

住居跡は，Ｉ－７・８地区で弥生前・中期の円形竪穴住居跡２軒，弥生後期の方形竪穴住居跡５軒以上が検出された（第29図）。

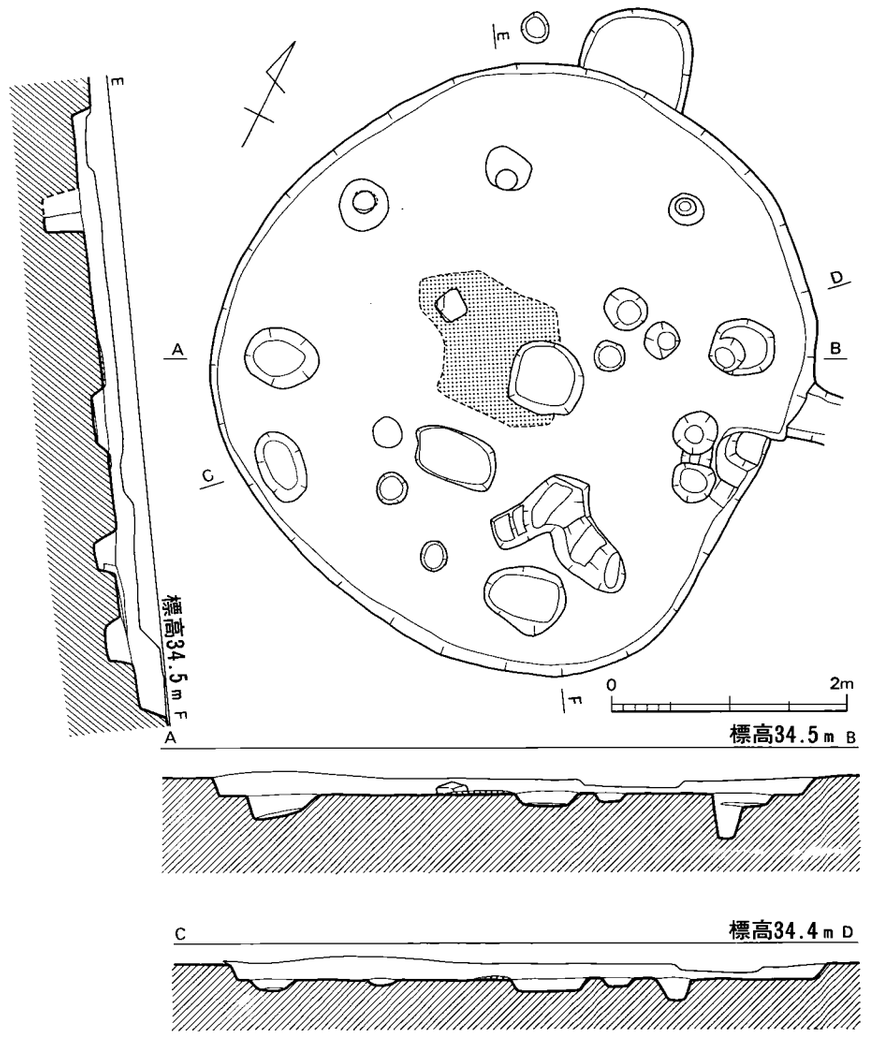




第29図 サキゾノⅠ－6～8遺構配置図（1/100）・土層（1/60）



第 30 図　Ⅰ－7　1 号住居跡実測図(1/60)



第 31 図　Ⅰ－8　2 号住居跡実測図(1/60)

各住居跡の切合いは下記のとおり。

1号⋯2号　　3号 ← 6号　　7号
↑　↙　↓
4号 → 5号　　（古→新の関係を表わす）

なお，住居内出土の玉類・石器・鉄器は後にまとめて説明する。

1号住居跡（図版13－2，第30図）

Ⅰ－7東端で検出されたもので，東側の一部に2号住居跡が重複するが新旧関係は不明。位置的にサキゾノⅠ－8～10の位置に存在したと思われる古墳の周濠状遺構の下にあたるため，上部を著しく削平されている。住居跡は復原径約8mの円形竪穴住居で，周壁に沿って4個の柱穴が検出されている。中央に土壙状遺構があると思われるが，北側を調査していないので不明。住居跡からは床面から弥生前期の石庖丁片，埋土から土器細片が出土した。

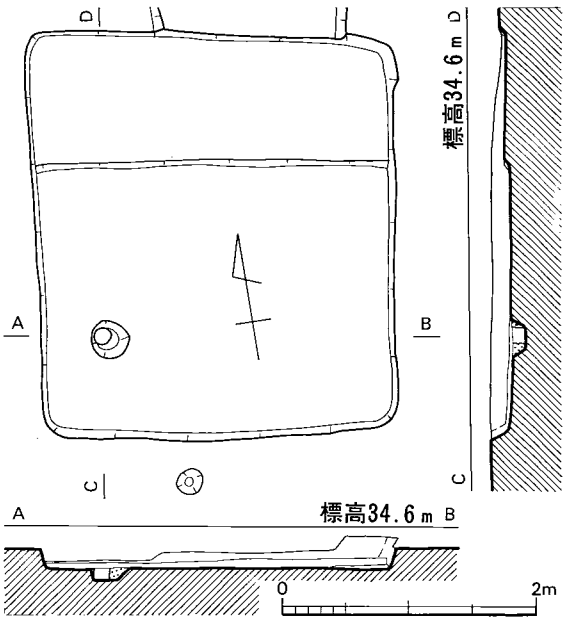
土　器（第33図1）　壺の底部細片で，弥生中期頃のものであろう。

2号住居跡（図版14－1，第31図）

Ⅰ－8の墳丘状盛土下から検出された円形竪穴住居跡で，直径5.2mの大きさ。住居跡の中央には，径52×60cm，深さ13cmの浅い隅丸方形の土壙があるが，柱穴は南西側に不明なところがあり，5～6本ではないかと思われる。中央の土壙西側付近に炭化物と灰が広がっている。出土遺物はなく，中央に作業台らしき石があるのみ。

3号住居跡（図版14－2，第32図）

西側の4・6号住居跡と重複し，これらより新しい方形竪穴住居跡。住居跡は，南北3.2m，東西2.2mの小形で，北側に1段高いベッド状遺構がある。住居内の南西側に柱穴状のピットがあるが，他は不明である。遺物は，土器片と埋土から鉄手鎌片が出土した。

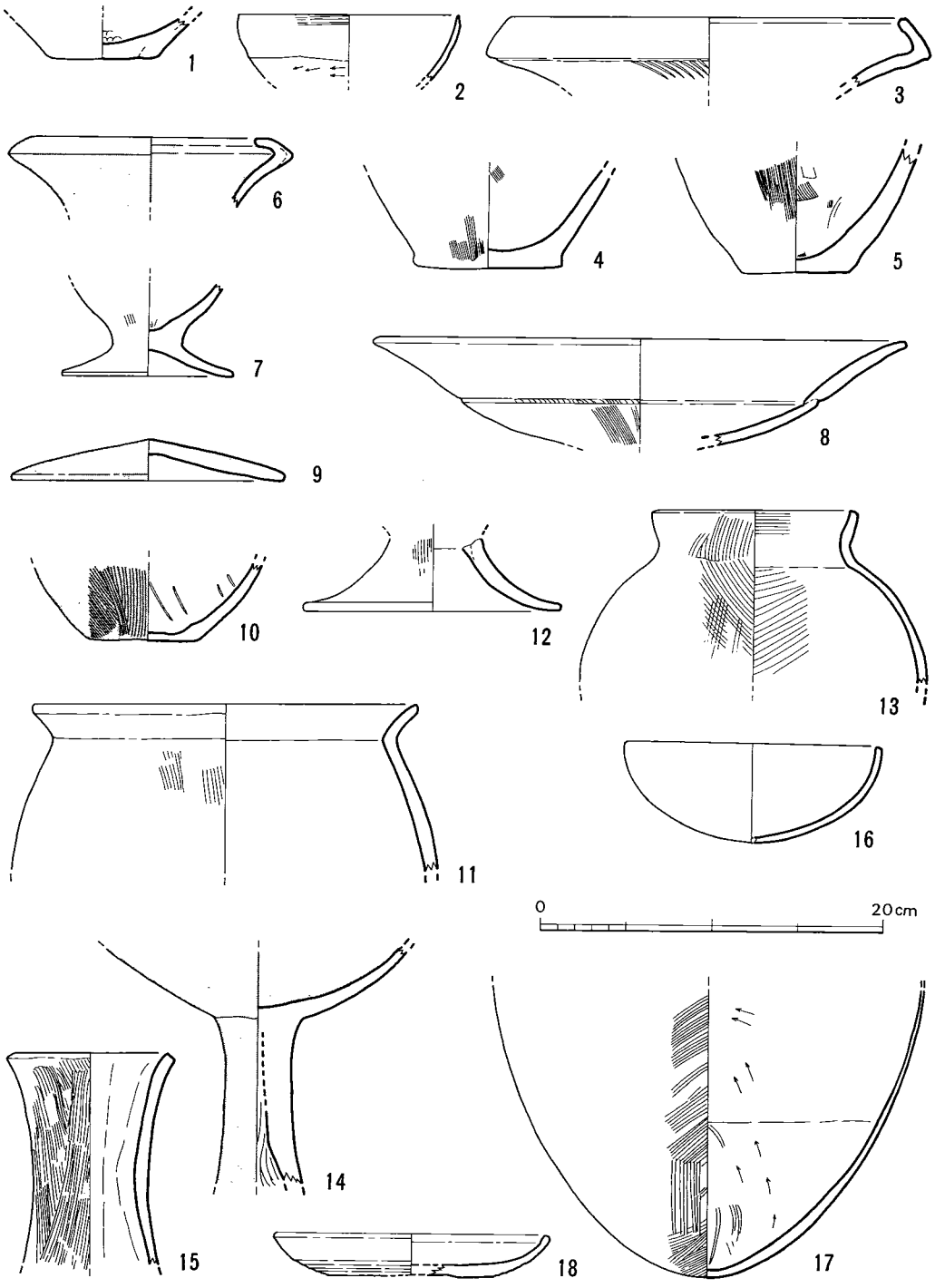


第 32 図　Ⅰ－7　3号住居跡実測図（1/60）

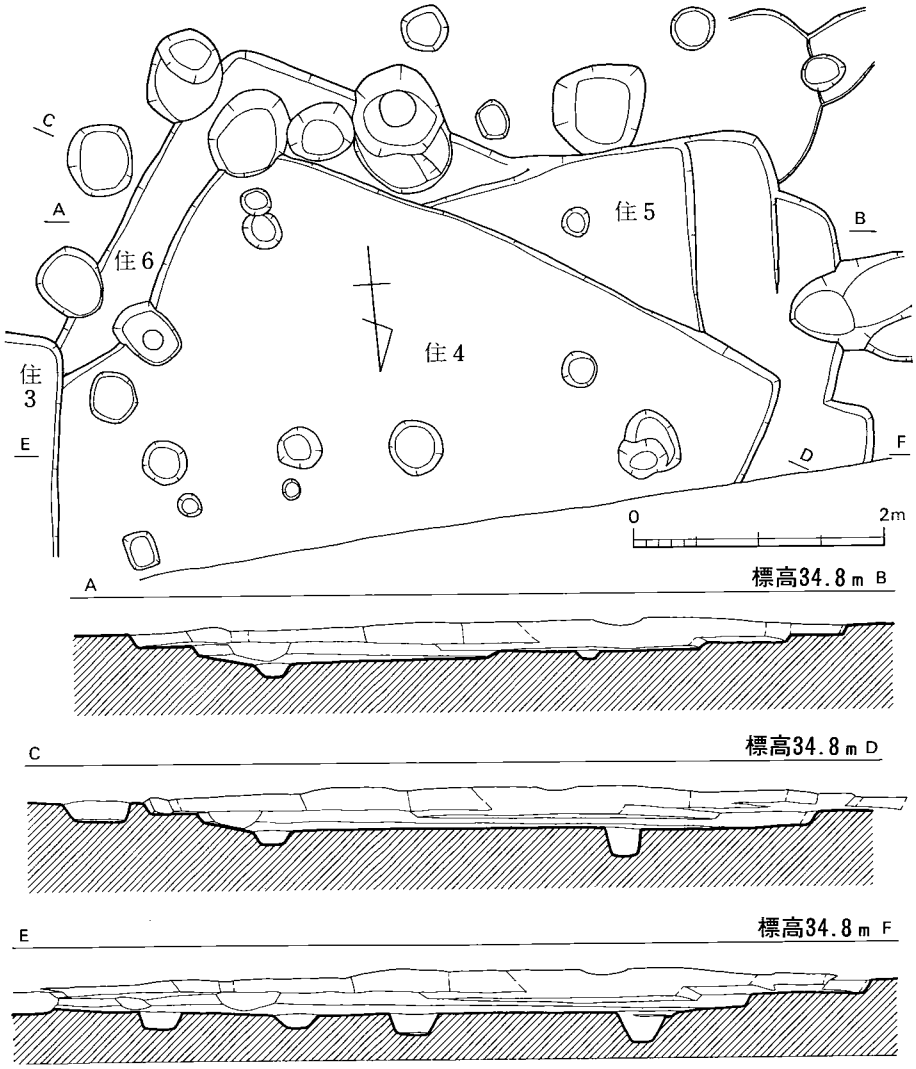
土　器（第33図2）　小形鉢の破片で，外面下半をヘラケズリした弥生終末以後のもの。他に古式土師器らしき細片あり。

4号住居跡（図版15－1，第34図）

3・5・6号住居跡と複雑に重複しており，3号より古いことは確実であるが，5・6号とは切合いとしてはつかめず，掘上った結果で遺物などで5・6号より古いことが判明した。4号は北側が未掘であるが，南側の一辺の長さ4.9mの方形竪穴住居跡である。確実な柱穴は不明。



第 33 図　Ⅰ－6・7　住居跡・ピット内出土土器実測図（1/4）



第 34 図　Ⅰ－7　4～6号住居跡実測図（1/60）

埋土内からの土器は出土しているが，床面のものは底部片と陶質土器片及び玉類だけである。

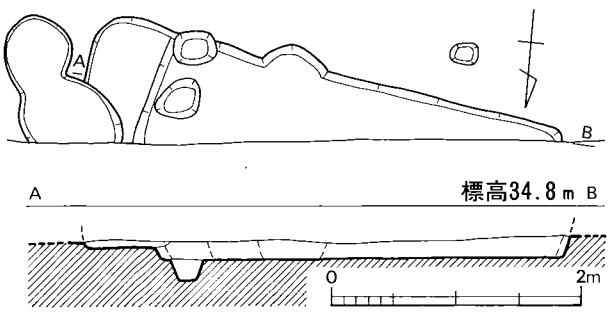
土　器（第33図３～５）　３は住居跡埋土上層であるため，５・６号住居跡に伴う可能性もある。後期前半の袋状口縁壺である。４・５は甕の底部であるが，４は後期前半以前，５は後期中頃の特徴を持っている。これらから，４号住居跡は弥生後期中頃といえる。

５号住居跡（図版15－１，第34図）

住居跡の大半が４・６号住居跡と重複し，新旧関係がつかめなかったことから，住居跡の大きさと遺物がつかめなかった。ただ，住居跡は方形で西側にベッド状遺構を伴うことから４号住居跡より新しいと思われるが，４号より浅く掘られているため規模はつかめなかった。ベッ

ドの幅は約60cmと狭い。石庖丁・紡錘車出土。

土　器（第33図6～8）　住居跡に確実に伴うとはかぎらないが，5号住居跡の位置の埋土から時期の判明するものが3片出土している。6は丹塗磨研袋状口縁壺で，後期前半のものである。7・8は弥生終末から古墳初頭のもので,7は台付小形壺，8は高杯である。7・8が5号住居跡に伴うものであろう。6は6号住居跡のものであろうか。



第 35 図　I－7　7号住居跡実測図（1/60）

6号住居跡（図版15－1，第34図）

住居の大半が3～5号住居跡と重複し，住居跡の規模も出土品も不明である。ただ，P24・P38・39が住居跡より新しいので，P24出土の土器片（第33図10）から，住居跡は弥生後期前半以前であろう。すなわち，3～5号住居跡の中で最も古い住居跡となる。

7号住居跡（図版15－2，第35図）

発掘区の北壁に一部が検出された方形竪穴住居跡で，東西の長さ3.8mの規模。東側に幅55cmの狭いベッド状遺構が付設するが，柱穴・遺物などは不明。

(2)　その他の遺構

サキゾノI－7では，住居跡のほかに弥生中期土器溜・ピット群・壺棺墓・古墳時代祭祀遺物などがある。

土器溜（図版16－1，第29図）

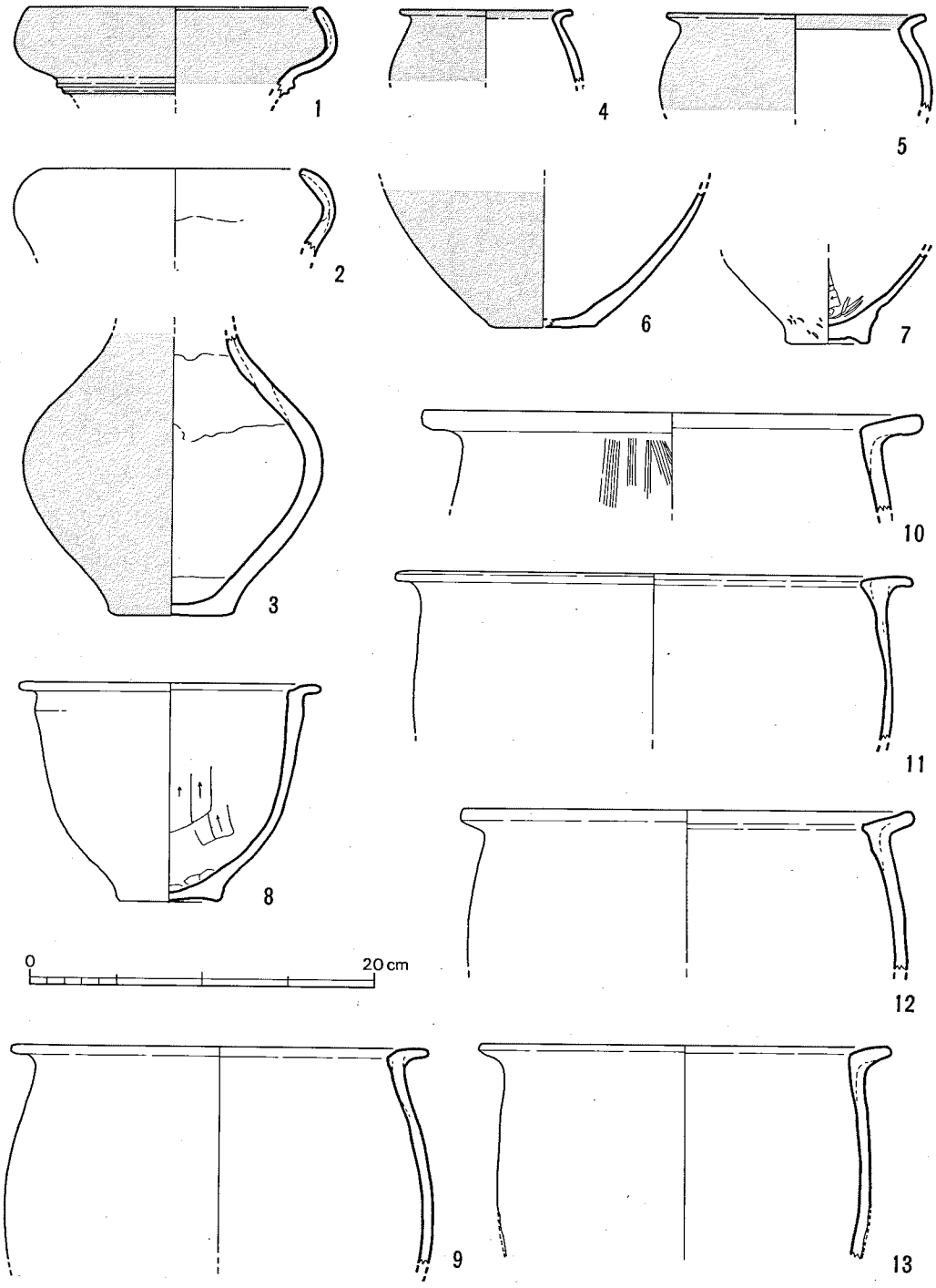
W40区にある浅い竪穴状遺構内に土器片が詰っていたもので,遺構の性格は不明であるが，祭祀用土器の可能性がある。遺構の北半が未調査であるが,東西約2m,南北1.7m以上の広さである。

土　器（図版18，第36・37図）　1～7は壺であるが，1～3は袋状口縁壺，4・5は短頸壺である。1・3～6が丹塗磨研土器。8～17は甕で，8は鉢形。14・15は口縁下に低くにぶい三角凸帯1本をめぐらすが，他はない。甕は口縁の内側がわずかに突出するものがある（12・15）が，角に丸味のあるものが多く，中期の最も新しい様相を示している。

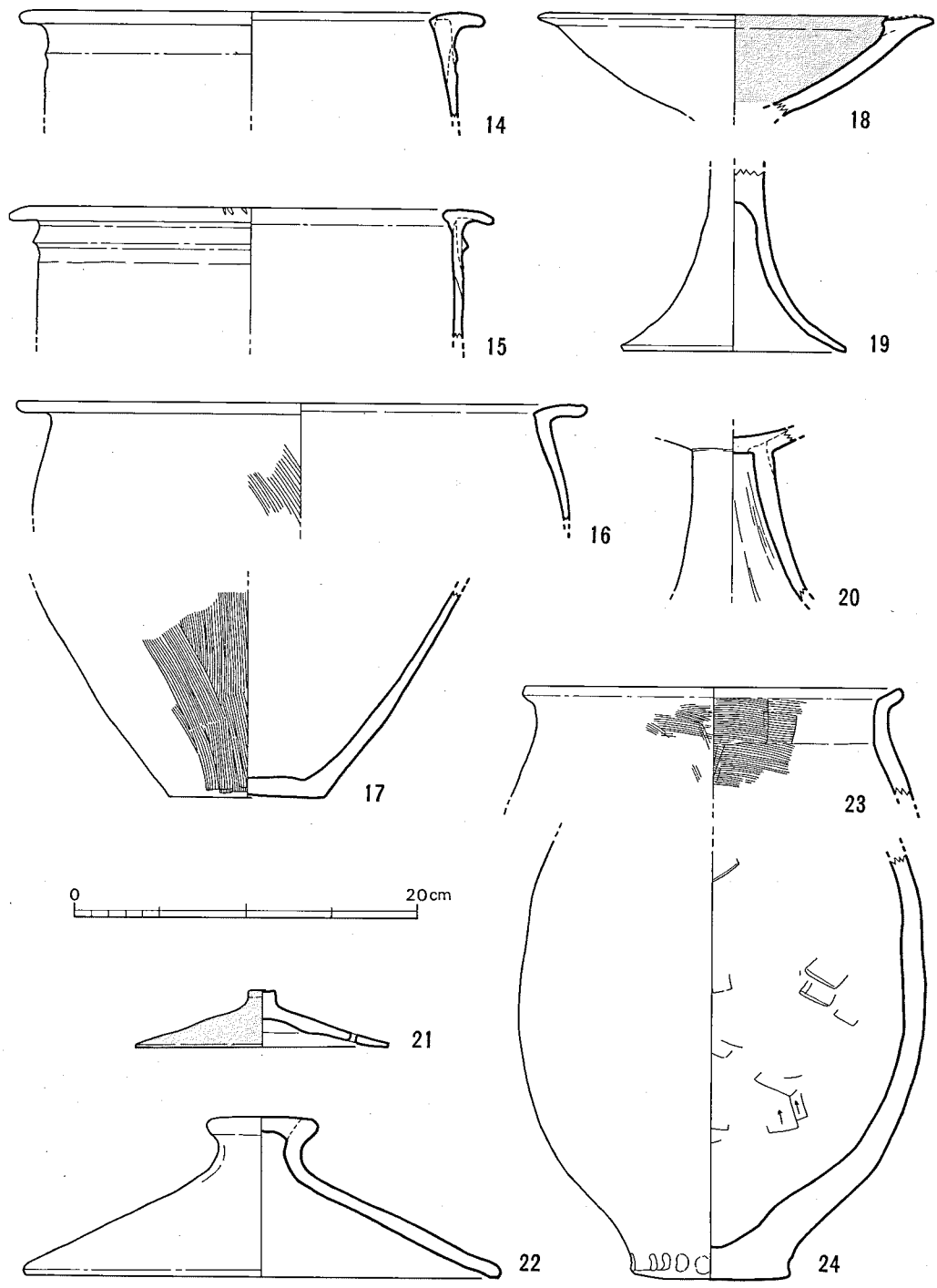
18～20は高杯で，18のみ内側に丹塗の痕跡がある。脚は短脚になりつつあり，中期より後期に近いものである。

21・22は蓋で，21は小形無頸壺用，22は小形甕用である。21は外面が丹塗磨研で，2個2対の焼成前の穿孔がある。

23・24は粗製甕で，遺構の床面から出土した。器内外面に指圧痕やハケ具痕が多く残って，



第 36 図　Ⅰ－7 土器溜出土土器実測図①（1/4）



第 37 図　Ⅰ－7　土器溜出土土器実測図②（1/4）

器壁も厚く仕上げられている。

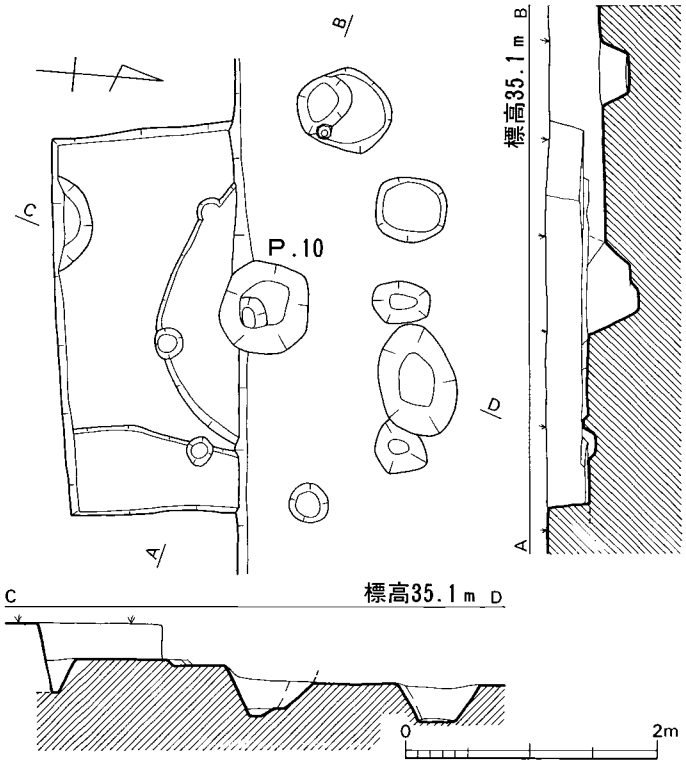
これらの土器は，23・24は時期が不明なところがあるが，他は統一して中期末の特徴を持つ。

ピット群（図版16－3，第29図）

調査区は幅5mであったために，住居跡以外の遺構も全掘できないものが多く，柱穴状のピットなどはとくに遺構の性格がつかめなかった。ところが，P10のように弥生終末頃に伴う陶質土器片が数点出土したり，時期の伴明する土器片を伴うピットもある。また，3号住居跡東側には弥生後期と思われる掘立柱建物がある。

P10（図版15－3，第38図）

3号住居跡の南側で，発掘区南壁に検出したP10は柱穴と思われたが，埋土には土器細片が多く，この中に陶質土器8片が出土した。この付近の南側を拡張して精査したところ，竪穴住居跡状の浅い遺構の残りが検出できた。P10内には弥生後期前半の土器片もあるが，後期後半らしい細片が含まれている。この遺構が後期後半とすれば，竪穴住居跡は角のある方形となることから，P10南側に検出できた遺構は住居跡の可能性はない。



第38図　I－7　P10付近遺構実測図（1/60）

土　器（第33図9～18）　9はP5から出土した丹塗の小形蓋形土器で，弥生中期のものであるが，表面が荒れて調整は不明。径16cmの大きさ。

10は6号住居跡より新しいP24出土の丹塗壺の底部。底部は平底で，体部外面はハケ目調整されているが，その上から丹塗を施す。弥生後期前半頃のもの。

11は7号住居跡の南側にある不整形のP101から出土した弥生後期前半の甕上半部。口縁はくの字形でゆるく外反し，体部外面にタテのハケ目が残っている。

12・13は，5号住居跡南側に接するP103の埋土上部から出土している。12は台付小形壺の台部，13は直口壺である。13など内外面の粗いハケ目調整は弥生終末頃の特徴。

サキゾノ

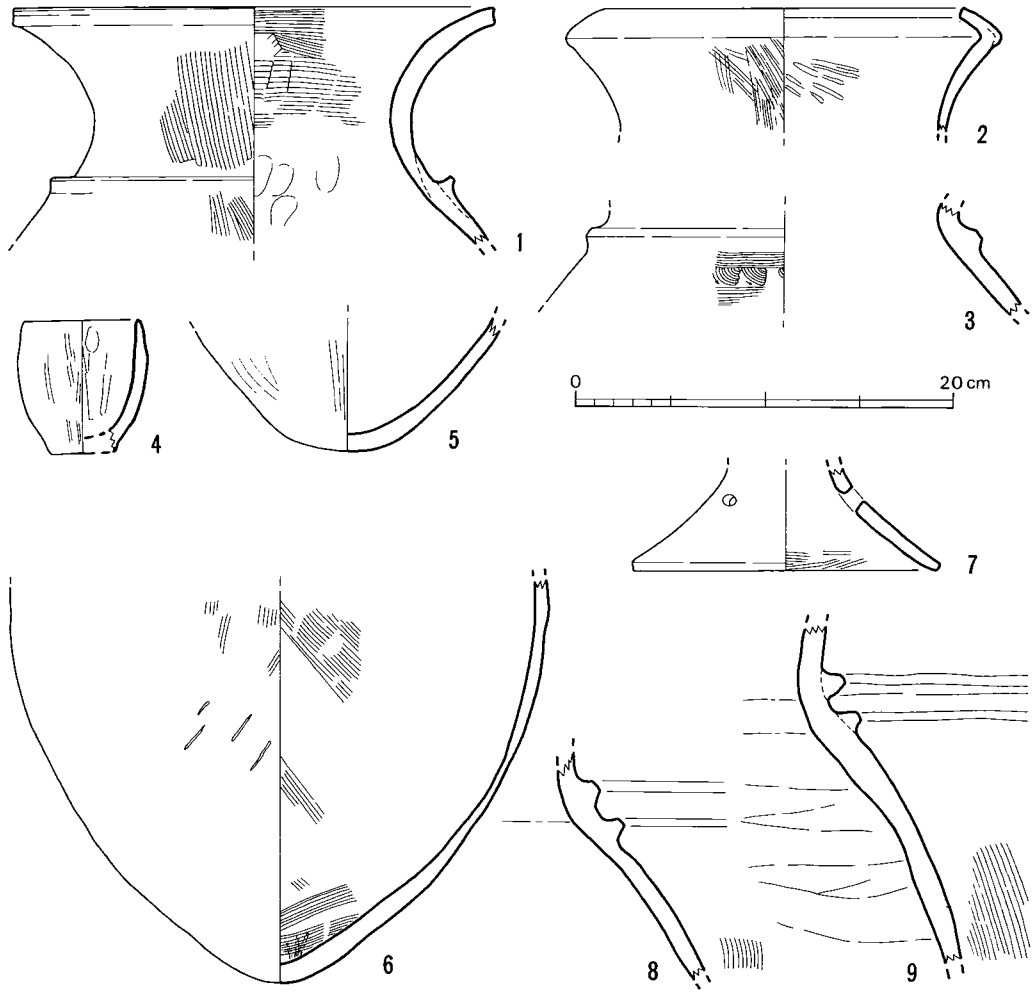
14・15は3号住居跡東側の小ピットであるP105から出土した弥生中期中頃の土器。14は丹塗磨研の高杯で，脚内面にしぼり痕がある。15の器台は外面に細かいハケ目調整があり薄手。

16はS328・W24の3層出土の椀で，内面はヨコナデ，外面はナデ調整されている。

17は3号住居跡北西側の3層出土で，布留古式甕と思われる体部下半。内面のヘラケズリによって器壁を薄く仕上げている。

18は7号住居跡の南側で，P101の上層で検出されたP54出土の土師器杯。径16cm，高さ2.5cmの大きさで，糸切底に板目圧痕がある。形態からは丸底の杯に類似しているが，「押し出し技法」がみられないことから杯の範疇に入れた。特異な土器である。12世紀中頃かと思われる。

3層の土器（第39図）

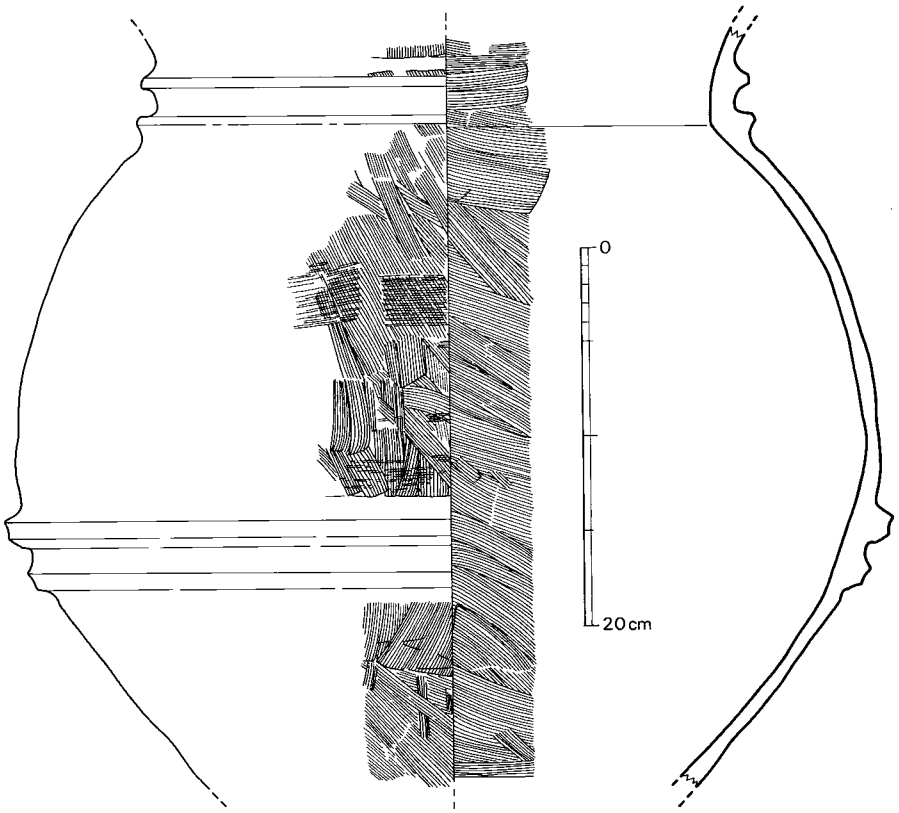


第 39 図　Ⅰ－7　3層出土土器実測図（1/4）

サキゾノⅠ－7はとくに遺構検出の困難な地区であったが，包含層として取上げた遺物の中には，小範囲内に同時期のものが集中しているものがある。これらの中から実測可能な例を示したのが第39図である。

1～5はS324·W38の3層出土の土器片であるが，5のみ3層上部であるから除外できる。1は広口壺であるが，さほど口径の大きくないもので，肩部に細身の台形凸帯をめぐらす。2は袋状口縁壺であるが，頸部が太い。3は肩部に台形凸帯1本をめぐらす壺片であるが，凸帯下の肩部に櫛描文帯がある。櫛描文帯は，上段にヨコの直線文，中段に扇形文，下段にヨコの直線文の組合せとなっている。細片であるからこの下部に文様が続くものか不明で，文様は九州にないものであるが，凸帯は九州的である。胎土には細砂（石英・雲母）を含む褐色を呈し，九州に多い淡褐色のものとは違っている。4は小形のカップ形土器でハケの後ナデ調整されている。

1～3の土器片は，1・2の特徴から弥生後期前半のものであるが，1のハケ目が粗いのと2の頸部が太いところから3の凸帯と同様に後期初頭には上らない。櫛描文は畿内地方のⅡ～Ⅳ様式に見られるが，中期といわれているⅣ様式に伴う櫛描文としても，九州の後期前半と畿



第 40 図　Ⅰ－7出土壺棺実測図（1/4）

内Ⅳ様式は併行するものである。同地区下層に鋳造鉄斧がある。

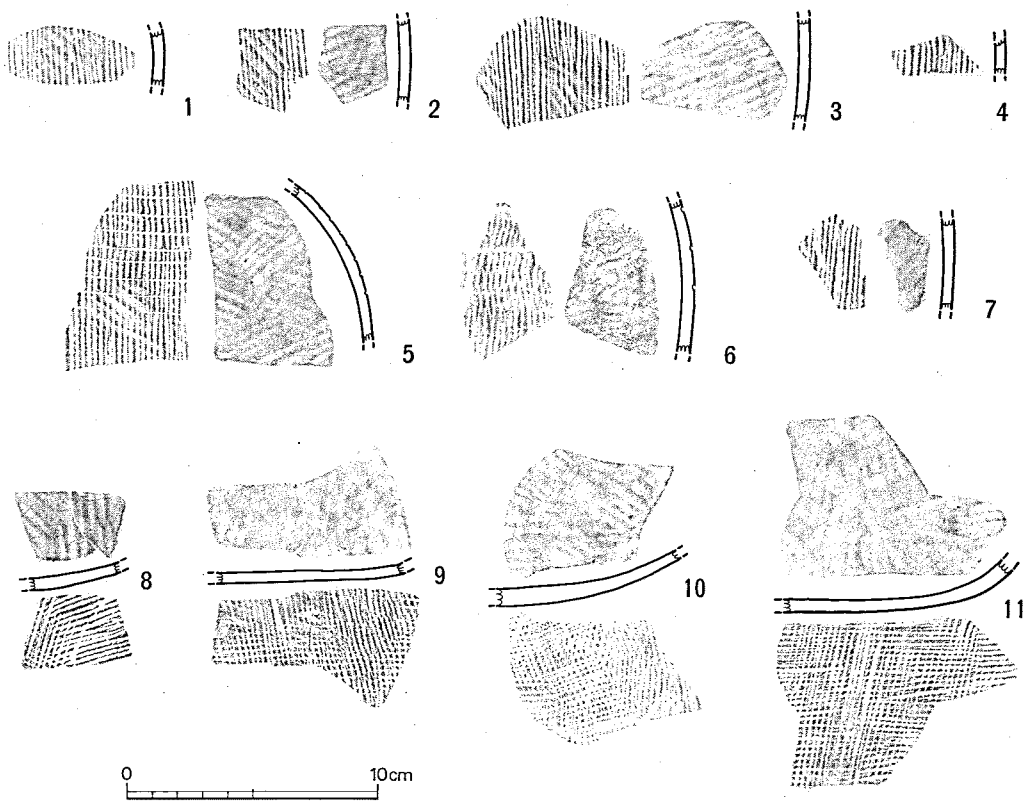
6～9はS322・W38地区の3層出土破片で，6は尖底甕，7は高杯の脚，8・9は中形壺の肩部片である。6のみ尖底から弥生終末以後であるが，8・9の肩部の台形凸帯2本が明らかに分離しているところから，終末まで下らず，後期前半といえる。

壺棺墓（図版16－2，第45図）

3号住居跡の北東側で発見したもので，古墳前期の祭祀遺構らしきものに著しく破壊されている。壺形土器を利用した小児用と思われるが，頸部以上を打欠き，底部は後世の柱穴で失なっている。棺の頸部はほぼ東側を向き，東側を多少高く埋置している。棺は荒されているので，棺内埋土中に滑石臼玉が混入していた。赤色顔料も認められない。

土　器（図版18，第40図）　土器は全形が知れないが，胴最大径45.7cmの大形壺である。頸部と胴部に2本一組の台形凸帯をめぐらすが，まだ2本一組の凸帯として識別できることから，サキゾノⅠ－1の1号住居跡の大形壺より古いことが明らかで，弥生終末のものとすることができる。（柳田）

陶質土器（図版19，第41図）



第 41 図　Ⅰ－1･7　出土陶質土器拓影（1/3）

すべて甕の破片資料である。4・6は古墳時代初期のサキゾノⅠ—1地区1号住居跡から，7は弥生時代後期のサキゾノⅠ—6・7地区4号住居跡から，その他は弥生後期後半頃のサキゾノⅠ—6・7のP10から出土した。すべて細片のため図示した傾きは正確ではない。1～4・7は胴下半部，5は肩部付近から胴最大部付近，6は胴部中位付近，8～11は縄蓆文が交錯しており，その断面形等より底部あるいは底部付近と思われる。また，8・10と9・11はそれぞれ同一個体の可能性が強くP10出土の土器片は少くとも2個体分はある。1号住居跡出土の4・6は別個体である。全て外面に縄蓆文があり，2・5は縄蓆文の下に右下がりのタタキの痕跡を観察できる。5・6は沈線がはいり，5は沈線の間隔が狭く約4.8cmの間に8本の沈線が巡るのに対し，6は沈線の間隔が5のおよそ2倍と広く沈線自体も鈍い。内面は全て同様の浅い凹線状のタタキ目が鈍く残っており，叩いた後に軽くナデているようである。胎土は精良で焼成は6がやや軟質である他は全て硬質堅緻である。色調は内面灰色，外面暗灰色を基調とするが6だけ外面は黄灰色である。（児玉）

石　器（図版20－1，第42・43図）

石庖丁（1～4）　1は1号住居跡出土の黒色頁岩製で，最大幅6.7cmの大形品。2はS326・W36の3層上部出土の輝緑凝灰岩製。背も刃と同様に弧状を呈し，最大幅4.7cmの大きさで，弥生後期のもの。3は5号住居跡埋土上層から出土しているが，住居跡に伴うものとはかぎらない。灰色安山岩質のもので，背は直線で厚みがあるところから弥生中期のものであろう。4はS324・W38の3層出土の灰色凝灰岩質のもの，厚みや形態から後期のものであろう。

石　剣（5）　3号住居跡北側で出土したが，遺構や時期は不明。灰色凝灰質頁岩。

紡錘車（6～9）　6・7は4号住居跡の上層であるから，実際は5号住居跡に伴うもの。8は6号住居跡埋土中，9はS324・W38の3層出土。4例共白雲母片岩製で，7・8は19.3g，9は11.1gの重さあり，7は未製品。4例共弥生後期の紡錘車。

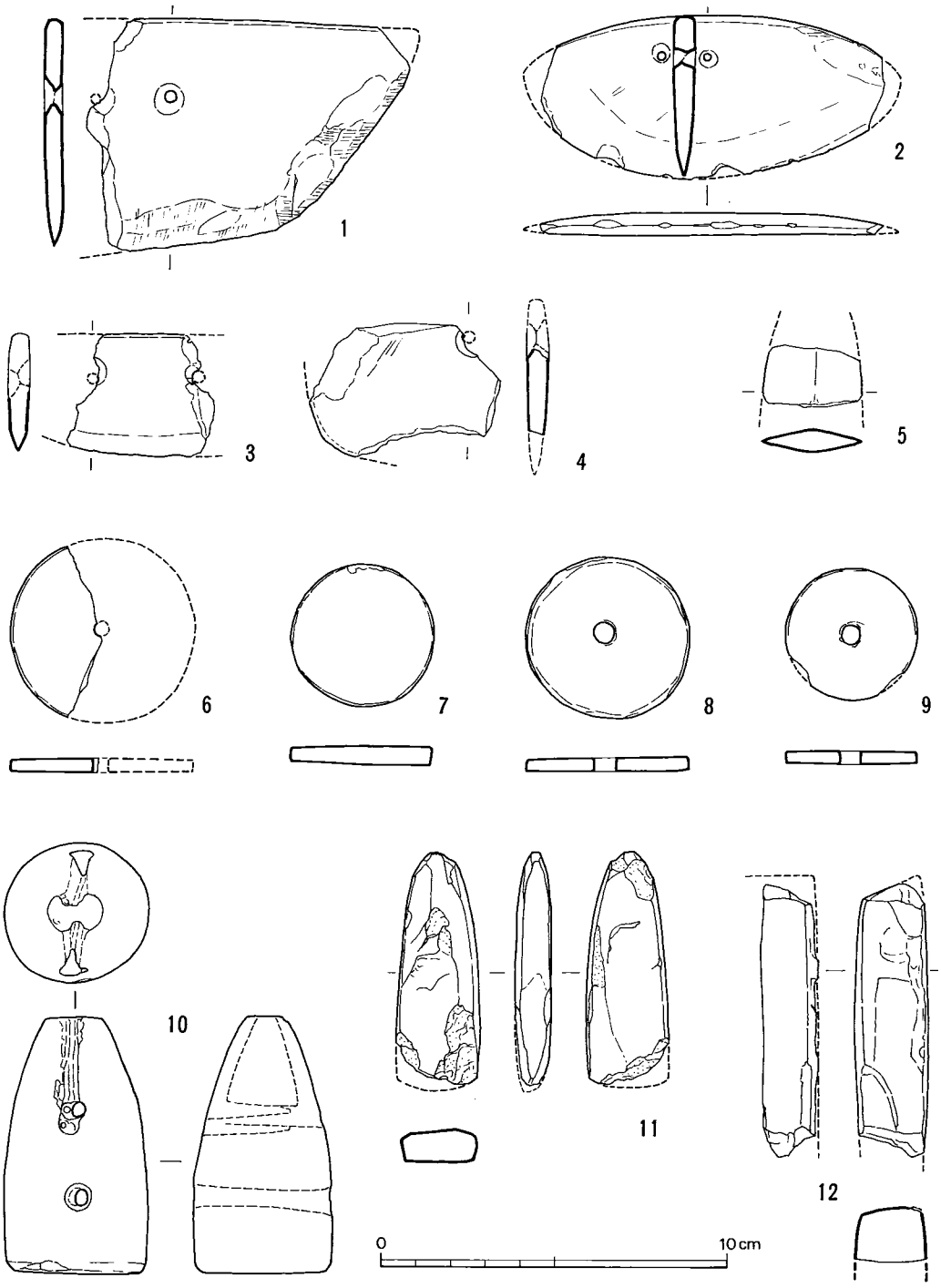
石　錘（10）　Ⅰ－8の3層下部出土で，高さ7.4cm，最大径4cmの砲弾形。上下2個の円孔が横に貫通しているが，上段の孔は2度失敗している。また上段の孔の両側から先端におよぶ溝もあり，上段の孔に通した紐は先端で結束するようになっている。下段孔は横に連結する孔となる。石材は白雲母片岩で，193gの重さあり，弥生後期後半以後のもの。

石　斧（11・12）　11は陶質土器片が出土した弥生後期後半のP10から出土したもので，小形石斧とすれば混入品であろう。灰黒色頁岩質のもので砥石の可能性もある。現存長6.7cm。

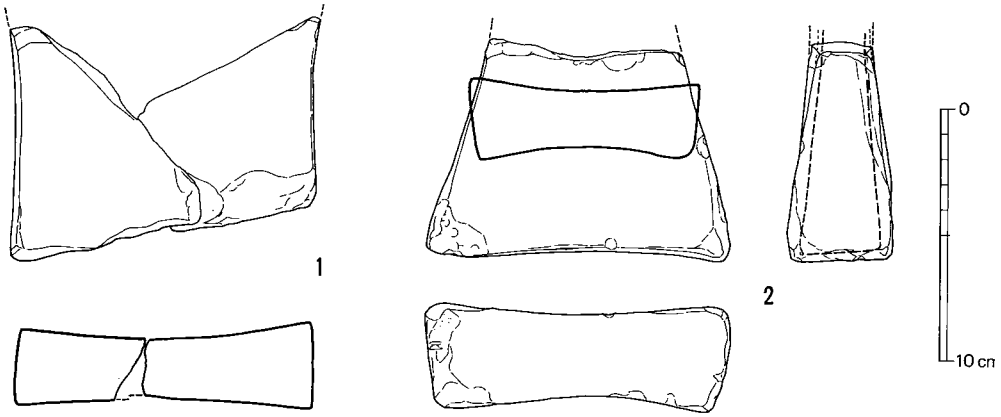
12は3層上部出土で，灰黒色片岩製柱状片刃石斧である。弥生前期から中期前半のもの。

砥　石（第43図）　1は古墳初期の3号住居跡埋土上層（左側破片）とS324・W38の3層出土のものが接合できた。この2片は分離した後も若干使用されている。4面を使用した灰褐色砂岩製砥石。2は2層出土であるから時期など不明。灰褐色砂岩。

鉄　器（図版20－2，第44図）

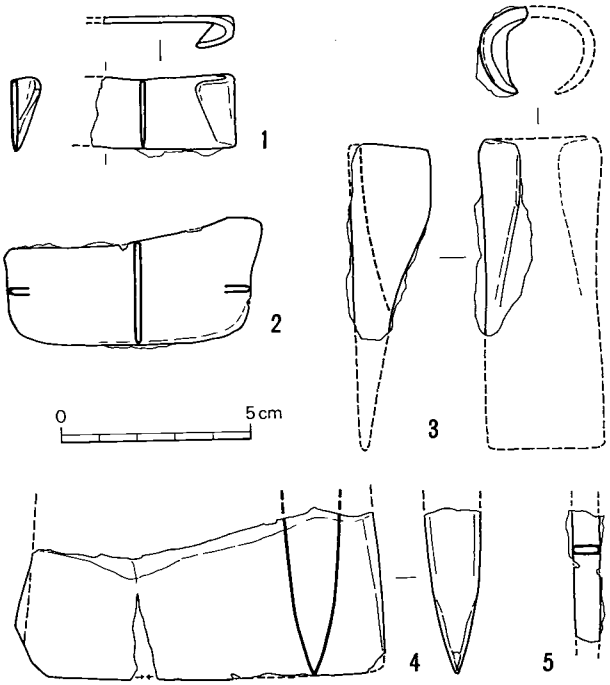


第 42 図　I－7・8 出 土 石 器 実 測 図 (1/2)



第 43 図　Ⅰ－7　出土砥石実測図（1/3）

1は3号住居跡埋土上層出土の手鎌片。幅は不明だが，刃から背までの長さは1.9cm。木質は残っていない。2は7号住居南側で，P57の西側出土の鉄片。図下方に規格性があるので部分品かもしれないが，厚さが均一なことなど鉄素材かもしれない。付近の同一層から布留古式土器片出土。3は5号住居上層にあたる3層出土の鉄斧片。復原袋部径は3.2cmとなるが長さは不明。

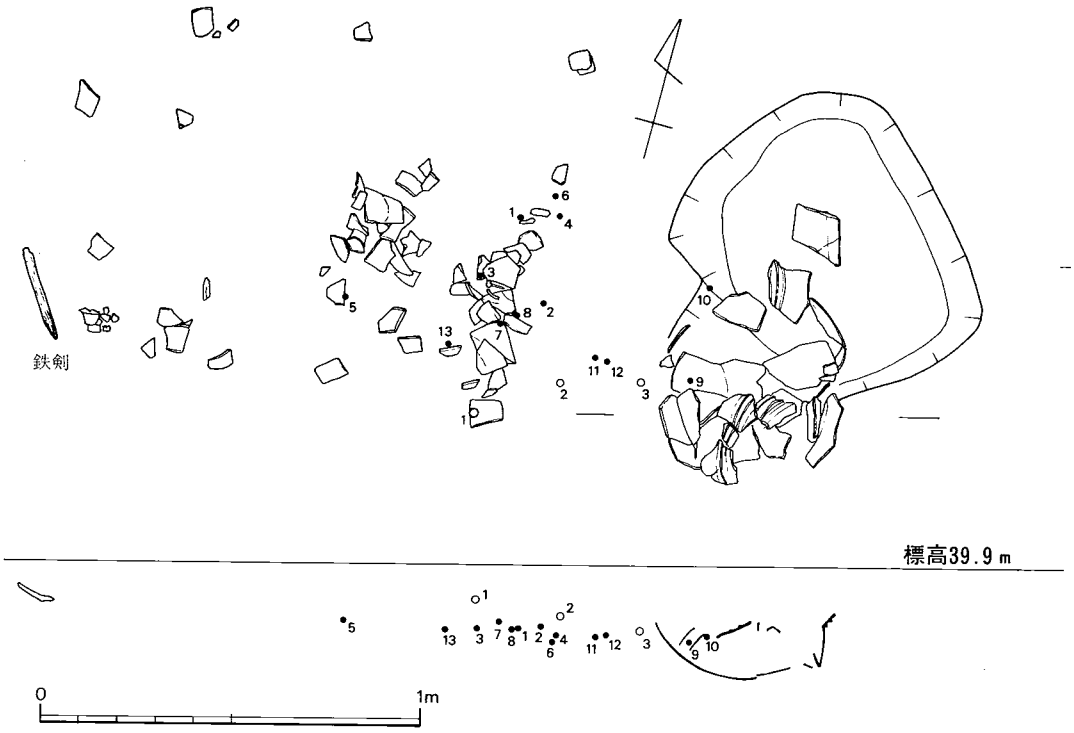


第 44 図　Ⅰ－7出土鉄器実測図（1/2）

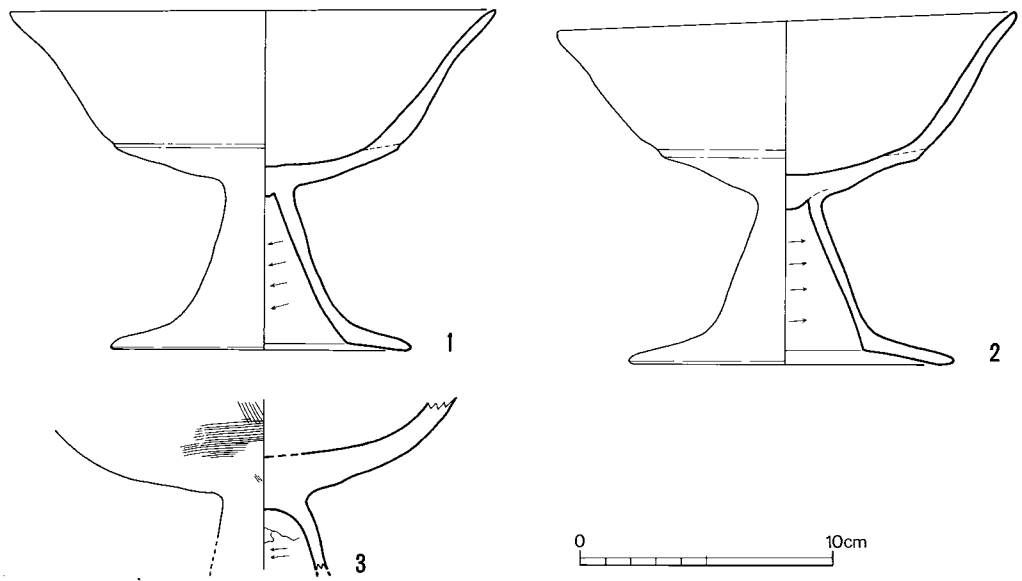
4はS324·W38地区の4層出土の鉄斧片。刃部に亀裂を生じ広がっているが，復原刃部幅約9cm，現存最大厚さ1.5cmの大型鉄斧で，亀裂の生じ方や錆から鋳造品と考えられるが，これは大きさや類品から言っても妥当であろう。この鉄斧の時期は，前述したようにこの地区の上層である3層が櫛描文を含む後期前半の時期であり，隣接する地区の3層には中期後半の丹塗磨研土器も含まれていることから，中期に含まれる可能性が強い。

5は3号住居跡北側の3層出土で，近くで第39図6の布留式土器が出土しているので，この時期の鉇片であろう。幅7mm，厚さ2.5mm。

サキゾノ



第 45 図　Ⅰ－7 古墳時代祭祀遺物出土状態実測図 (1/20)



第 46 図 Ⅰ－7　土 師 器 実 測 図 (1/3)

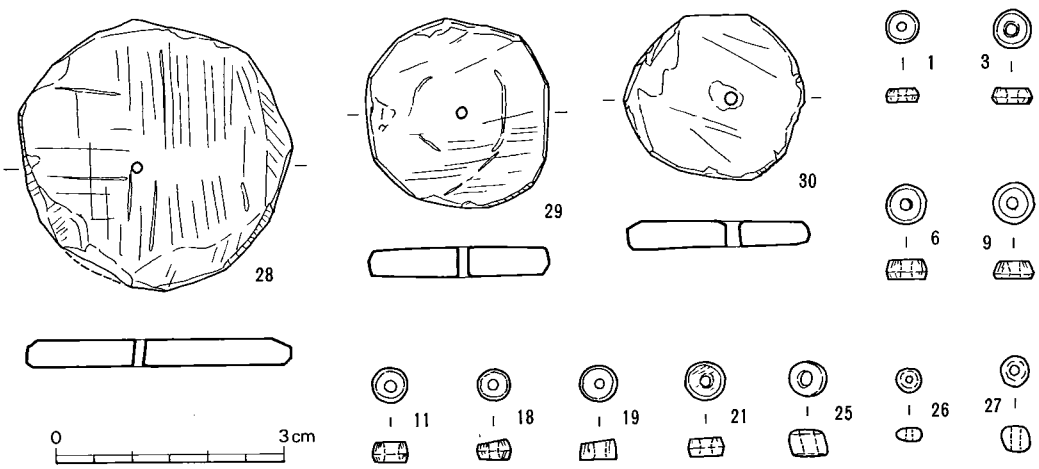
玉　類（図版11－2，第28図12・13，表3）

4号住居跡床面から出土したガラス玉で，12は小玉，13は棗玉である。棗玉は長さ17㎜，最大径9㎜，孔径3.2㎜の大きさで，白色に風化しているところから鉛ガラスと思われる。時期は住居跡の土器から後期中頃と思われる。

古墳時代祭祀（図版17－1，第45図，表4）

S324，W20・22地区の3層上部で検出した遺物群で，発掘区が東西5m，南北1～2mと狭いので遺構の形態は不明。遺物は，土師器高杯3個体以上・鉄剣・滑石製品が散布していた。滑石製品には，有孔円盤3個と臼玉24個以上があり，ガラス小玉3個も伴っている。

土　器（図版21－2，第46図）　高杯が3個で，1・2は杯部の屈曲した立上りが高いため



第47図　滑石製品・ガラス小玉実測図（実大）(計測表の番号に同じ)

表4　　Ⅰ－7　3層祭祀臼玉・小玉計測表

（単位：㎜）

No.	厚	径	孔　径	質・色	No.	厚	径	孔　径	質・色
1	2.0	4.4	1.3	滑石　灰	15	2.5	4.45	1.35	滑石　白
2	2.65	5.05	1.35	滑石　灰	16	2.8	4.9	1.8	滑石　白
3	2.3	4.85	1.5	滑石　白	17	2.4	4.95	1.7	滑石　灰
4	1.6	4.55	1.55	滑石　灰	18	2.75	4.2	1.5	滑石　灰
5	2.05	4.25	1.4	滑石　灰	19	2.8	4.8	1.4	滑石　灰
6	2.75	5.05	1.45	滑石　灰	20	2.8	4.55	1.4	滑石　灰
7	2.55	3.5	1.4	滑石　灰	21	2.55	5.25	1.8	滑石　白
8	1.6	3.65	1.4	滑石　灰	22	2.3	5.2	1.45	滑石　灰
9	2.3	5.4	1.65	滑石　白	23	1.6	4.2	1.5	滑石　白
10	2.25	5.15	1.75	滑石　白	24	2.05	4.8	1.3	滑石　白
11	2.8	4.8	1.8	滑石　白	25	3.35	4.8	2.4	ガラス　空
12	2.25	4.25	1.25	滑石　白	26	1.9	3.25	0.85	ガラス　紺
13	2.65	4.6	1.75	滑石　白	27	3.3	3.95	1.3	ガラス　空
14	2.6	4.0	1.8	滑石　灰					

杯部が深く，脚部の柱状部が直線的に開き，裾部は強く屈曲する。これに対し3は，杯部の屈曲に丸みがあり，脚部もふくらみを持っている。これらの特徴から5世紀前半のものといえる。

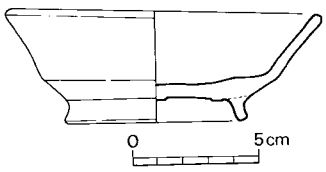
鉄　剣（第49図1）　全長27cm，関部幅2.7cm，茎長1.8cmの短剣と思われるが，錆化が著しく，関部から茎の形態が不明。茎は欠損しておらず短かいが，切先から22cmのところでわずかに剣身幅が広がるようで，このあたりまで木柄が着装されるようだ。目釘穴も不明。

滑石製品（図版21－3，第47図）　28～30は有孔円盤で，径は4.8～7.3cmの大きさ。平坦な板には仕上げているが，周縁の仕上げは粗くて角を有し，円孔も中心にくるとはかぎらない。石材も28は青白色，29は灰黒色，30は灰白色を呈するところから，石質に違いがある。

1～24の臼玉は，径3.5～5.25mm，厚さ1.6～2.8mmの大きさで，外面中央付近に算盤玉状の稜を有する。全体に丁寧な作りで，材質もよく5世紀前半の特徴的な臼玉である。　（柳田）

土師器椀（第48図）

3層上部から出土した土師器椀である。口径12.5cm，器高4.4cm，高台径7.2cmを測る。内底部はナデ，外底部には幅の広い板状圧痕が認められる。胎土中には細い砂粒が比較的多く，また焼成は良好で堅く，乳茶色を呈する。体部下位に若干の屈曲を有するが，直線的に外上方へ延びるタイプのものであり，また高台も低いことから大宰府編年S K 678段階に比定でき，その年代を10世紀前後に求めることができる。　（森田）



第 48 図　土師器椀実測図（1/3）

4.　Ⅰ－8～10・14・15の遺構と遺物

この地区は，道路新設とⅠ－9・10の高地（盛土）削平のために，高地の遺構確認を目的とした調査である。したがって，Ⅰ－9・10を中心にⅠ－8の南北トレンチ，Ⅰ－10の南北断面，Ⅰ－14の南北トレンチ，Ⅰ－15の東西トレンチを設定した。別に前年度の調査でⅠ－4～8地区の東西道路を調査しているので，合わせて報告する。

(1)　Ⅰ－8の調査

昭和52年度の道路敷の調査は，Ⅰ－8地区の北端部分の調査となったが，この部分の下層遺構である弥生の円形住居跡は前項に報告した。第29図の上層遺構配置図に示すように，Ⅰ－8上層では第2層の床土下に砂質土による墳丘らしき盛土が確認された。この盛土には，埋土の状態から中世以後としか思われない土壙やピットがあるが，古墳時代以前の遺構は確認されない。ところが，盛土西端で盛土直上に完形の鉄刀と鉄矛が組合せた状態で置かれていた。(図版

22－1）。また，この鉄刀や鉄矛の直上は第2層の床土であるから遺構として確認することはできず，まさに盛土上に置かれた感がする。

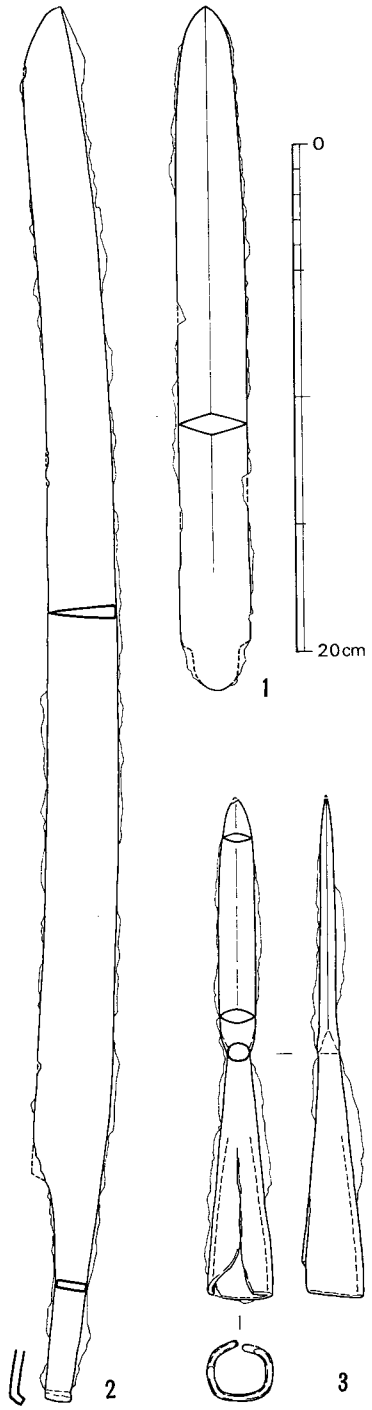
盛土は，東西12.4m，南北4.3mの範囲に確認されたが，南側は南北トレンチによって確認したところによると，現在高地となっているⅠ—9・10に続いている。Ⅰ—8での盛土の高さは，西側の周濠底と思われるところから41cmしかないが，東西トレンチ内のみで見るかぎりでは前方後円墳の前方部か方形のように見える。さらに，1段低いⅠ—7の東端では，それ以外の地区では同レベルで遺構が検出できるのに，東西幅約5mの間のみ盛土とは違った埋土状の堆積土で遺構が検出できなかった。この堆積土は東側の盛土が墳丘とすれば，幅約5mの浅い周濠の可能性が強いものである。

鉄　器（図版22－2，第49図2・3）

鉄　刀（2）　全長55cm，刀身46cm，関幅3cmの内反の鉄刀である。茎は錆で目釘穴など不明であるが，端部ほど幅が狭く先端が屈曲している。刀身の厚さ6mm弱，茎の厚さ3.5mm。

鉄　矛（3）　全長19.7cm，身長10cm，身最大幅1.5cm，身厚さ6mm，袋部最大径2.6cmの大きさで，身が短かく細いのが特徴。

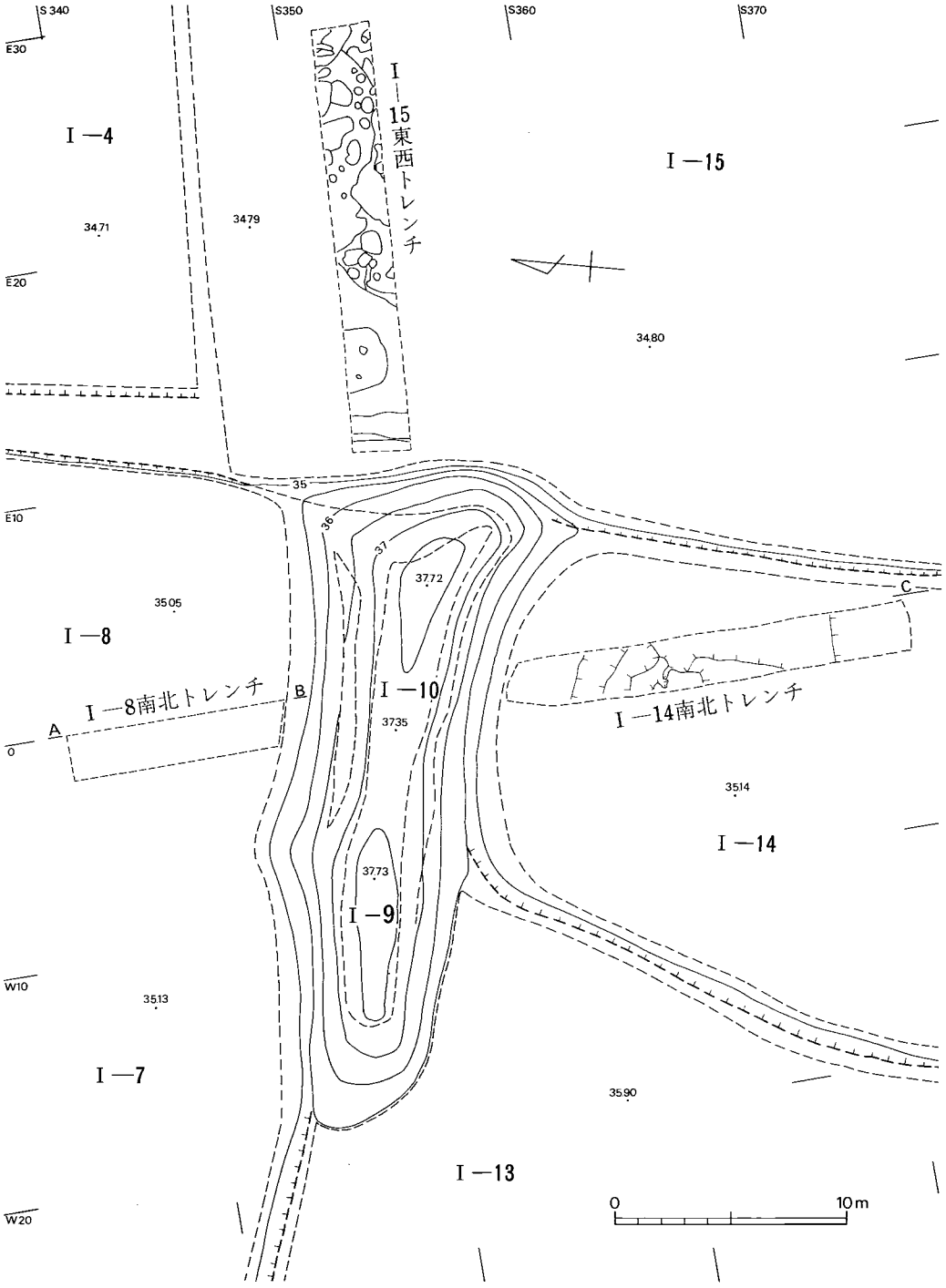
この刀と矛は，墳丘に伴う遺物であることは確実であるが，その性格は不明で，時期決定のできる土器が伴わない。鉄器で見るかぎりでは5世紀代のものであろうが，鉄刀は茎端屈曲から滋賀県新開1号墳南遺構出土素環頭大刀の細身茎のように環頭が折れたものである可能性もある（註1）。



第49図　Ⅰ—7・8出土鉄器実測図（1/3）

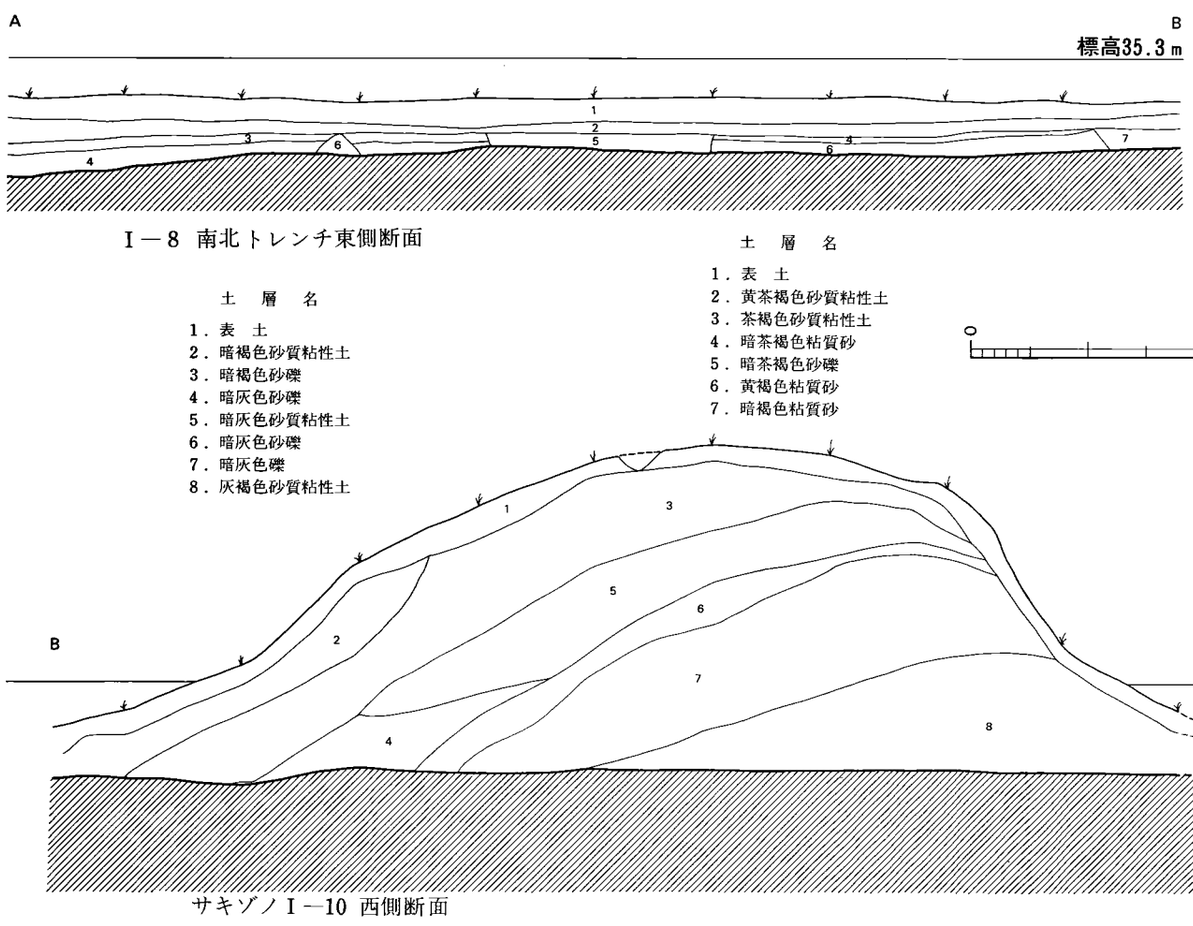
(2)　Ⅰ—9・10・14・15の調査

Ⅰ—8・10・14に続く南北のトレンチによると，Ⅰ—8北端からⅠ—10まで墳丘と思われる盛土が続くが，



第 50 図　I－9・10 付近地形実測図 (1/300)

第51図　I—8・10・14 土層断面図（1/60）



I—8 南北トレンチ東側断面

サキゾノI—10 西側断面

I—14南北トレンチ 東側断面

51図土層断面図でわかるように，Ⅰ—10の盛土はさらに南側に続く大きな墳丘の一部分でしかないことがわかる。しかも，この盛土が単なる土捨場や砂利集積盛土ではないことは，規則的な層序から明らかであろう。ただ，墳丘盛土としては大幅層序である点が気になるが，これは盛土の大半が地山下層の砂利層を使用したために層序を細分できなかったことにもよる。サキゾノ地区の西側に位置する端山古墳の盛土や周濠底の多くの部分が砂利である点からも，これはうなずけることである。

Ⅰ—14の南北トレンチの観察によると，現存盛土裾から南側に約3ｍのところから地山が急に傾斜し，溝状遺構が存在する。この大溝は幅3.5m，深さ65cmの大きさで，北西—南東方向に走り，Ⅰ—9・10の墳丘裾に沿っていると思われる。ところが，この大溝はトレンチ内で分岐して南側にも伸びているような状況である。幅2ｍ，長さ17ｍのトレンチ内では不明なところが多いが，溝内にあたる5・6層からも中世の陶磁片などが出土し，Ⅰ—10の土層とも合わせて，後世に墳丘を削平して溝を掘ったことがわかる。

Ⅰ—9・10の盛土内には多くの土器片が含まれていたが，盛土内には弥生式土器しかなく，現地表面にあった多くの土器片は第52図のように弥生から5世紀前半の陶質土器片や近世の陶磁器片もあった。

Ⅰ—15トレンチは，Ⅰ—10盛土の東側に東西方向に設定したが，古墳に関連すると思われる遺構は存在せず，直接弥生後期遺構が検出されたので，遺構を深く追求せずに埋戻した。

出土遺物

土　器（図版23－4，第52図）　1・2はⅠ－8の3層出土。1は小形の壺か甕の台で，外面はハケ目調整。2は手捏土器。1・2は共に弥生終末頃のもの。

3～9はⅠ—9盛土内出土で，3は弥生後期，他は古式土師器である。3は後期中頃の袋状口縁壺と思われるが頸部三角形凸帯の上の頸部にヘラ描沈線の鋸歯文をめぐらしている。粘土帯の接合具合がよく観察できる。5・6は，サキゾノⅠ—1の1号住居跡に見られるような短脚の高杯である。4・7～9は布留式土器で，7・8は二重口縁大形甕の口縁である。

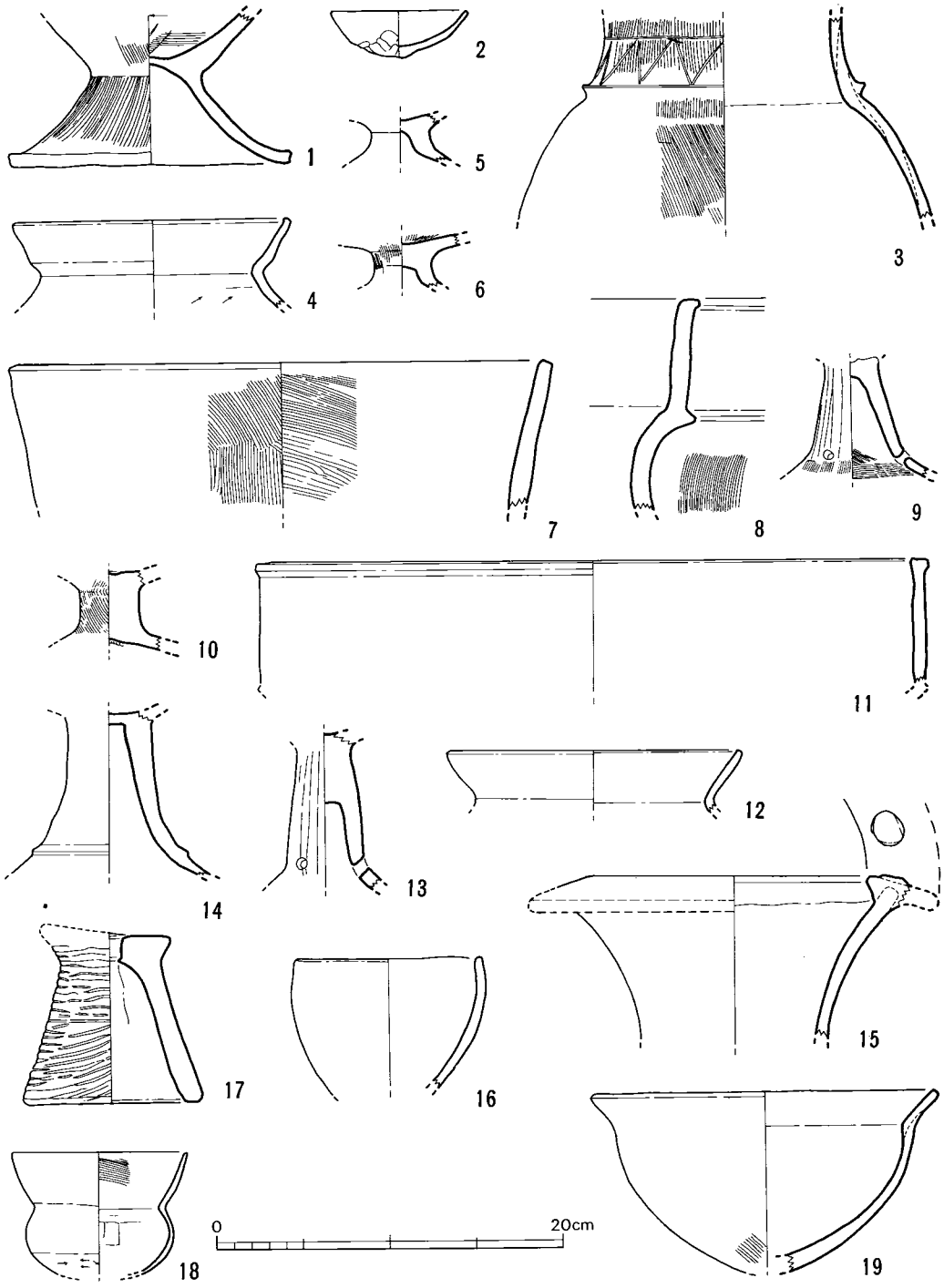
10～14はⅠ—10の盛土内出土であるが，14は表面にあったらしく器面が風化している。10は庄内式などの古式土師器に見られる脚部。11～13は布留式土器で，11は二重口縁大形甕の口縁部である。14は陶質土器の高杯脚部で5世紀前半のものであろう。

15・16はⅠ—12の4層出土で，15は弥生中期の壺の頸部，16は弥生後期後半の椀である。

17・18はⅠ—14出土の支脚と小形丸底坩。17は外面にタタキ痕が著しく，弥生終末頃のもの，18は4世紀後半の布留式土器で，出土した地点は中世以後の溝内ではあるが，茶臼塚古墳の時期に近いものかもしれない。

19はⅠ—15の住居跡出土で，弥生後期後半の鉢形土器。

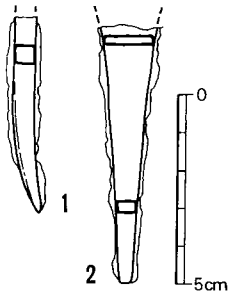
サキゾノⅠ—9・10の盛土内というより表面に多くの土器片が見られたが，これらのうち最



第 52 図　Ⅰ－8～10･14･15出土土器実測図（1/4）

も新しいのが14の陶質土器である。しかし，これは風化が著しいことから，この盛土と直接関連づけることはできず，弥生式土器以外で最も多い布留式土器をこの盛土に関連づけてはどうであろうか。二重口縁大形甕も多いことから，端山古墳周濠外の甕棺のように古墳に関連づけられないであろうか。7などは，二重口縁というより大形円筒埴輪ともすることができる。

鉄　器（第53図）　1はⅠ－8の2層（床土）から出土したもので中世以後の釘であろうか。2はⅠ－14の4層から出土したもので，第53図18の小形丸底坩と同時期の鉄鏃である。



第 53 図　Ⅰ－8・14
出土鉄器実測図（1/2）

5．小　結

サキゾノ地区の調査でとくに重要な点は，Ⅰ－1地区1号住居跡出土一括遺物とⅠ－8～10・14地区で古墳の存在を確認したことの2点であろう。

第1点は，Ⅰ－1の1号住居跡の一括土器の中に畿内系・山陰系・山陽系の土器があり，在地土器群と共伴しているという事実である。1号住居跡の在地土器群は，西新式といわれてきた土器群の範囲内にあり（註2），とくに高杯は宮の前Ⅰ式（註3）の典型的なもので，これまで弥生終末に編年されている。

1号住居跡の外来系の土器は，畿内系の庄内式・山陰系の鍵尾式・山陽系のオの町式土器で，完形品とそれに近いものが含まれている。

庄内式土器は，器形などではその新しい要素はないと思われるが，内面のヘラケズリの位置が低いことから新しく編年されているものである。また，共伴する同様な甕にタタキ目が残っていないことからも新しい要素といえる。しかし，型式的には第9図6と8は区分できるものであるから，遺構によっては分離して出土する可能性があり，土器編年では細分して区別する（註4）。新しい方に3層出土の破片（7）も含まれる。ここでは，庄内式に併行する土器群を最古式土師器として，土師器Ⅰ式を設定するが，前記の細分をIa式・Ib式として表わす。次にくるⅡ式を布留式土器併行とし，同様にIIa式・IIb式と細分する。

『三雲遺跡』Ⅰ～Ⅲで報告した遺構をこの土器編年によって割当てると，

弥生終末～Ia期――仲田18号住居跡出土土器
土師器　Ia期――サキゾノⅠ－1・1号住居跡出土土器
　　Ib期――サキゾノⅠ－1・3層出土土器
　　IIa期――石橋5号石棺墓祭祀土器，番上II－6・2号土器溜出土土器
　　IIb期――加賀石Ⅰ－23・1号住居跡出土土器　　ということになる。

なお，武末純一氏の早良平野における編年と対比すると（註5），Ⅰ期が宮の前期，Ⅱ期が有田Ⅰ期ということになる。また，井上裕弘氏の那珂川流域の編年（註6）と対比すると，Ⅰa 期が柏田Ⅰ期，Ⅰb 期が弥生終末とされている8号・17号住居跡出土土器群，Ⅱa 期が柏田Ⅱ期と7号住居跡の古式の破片資料（5・7・10），Ⅱb 期が7号住居跡内の新式の完形に近い資料（1・3・6・9・13・27～33）と下原遺跡出土土器群となり，逆転している部分がある。すなわち，井上氏が柏田Ⅰ期以前とされている8・17号住居跡出土土器群は，壺・甕・高杯・小形丸底坩においてまったく差がなく，17号住居跡に山陰系の鼓形器台が加わっているにすぎない。とくに，高杯においては三雲Ⅰa 式（宮の前Ⅰ式）より新しいもので，西新町遺跡などでは庄内式の最も新しい土器に伴っている（註7）。

第2点は，サキゾノⅠ－8～10・14・15地区の調査で，この地区に古墳が実在したことは明らかになったが，その規模や時期を解明することはできなかった。第2章で述べたように『筑前國續風土記附録』によって消滅した「茶臼塚」古墳が端山古墳より北側に存在していたことが明らかであるから，その「茶臼塚」の位置がサキゾノ地区であることは確実といえよう。ただ，地元土地所有者などの証言によると，サキゾノⅠ－4内の東側に小さな「塚」が実在したが削平したということであり，複数の古墳が存在した可能性もある。

茶臼塚古墳は，端山古墳より大きい（註8）こともあって，三雲地区の条里制施行時には井田地区から「郡の後」地区を貫通した南北道がサキゾノ地区を貫通せずに二又に分かれている。このことは逆に，サキゾノ地区の大古墳の存在も裏付けているといえる。

茶臼塚古墳は，その規模や時期を明らかにすることはできなかったが，端山古墳と築山古墳を比較した場合に，北側にある端山古墳が古いことから，さらに北側にある茶臼塚古墳が古い可能性もある。ところが，「茶臼塚」の名の起源を求めるとき，「茶臼」そのものの形に似ているからとすれば，帆立貝式古墳の可能性もあり，5世紀代という連想もないではない。ちなみに，5世紀前半代の大古墳とすれば，三雲遺跡全体はこの時期までは繁栄していたことは住居跡の多さからも説明できて妥当な気がする。（柳田）

第2節　イフ地区の調査

1．はじめに

イフ地区の調査は，サキゾノ地区を南北に貫通した新設道路（E0）がイフ－7の東側を通るため，道路幅のみ試掘を行った。ところが，この時点では遺構・遺物は検出されず，この南北道路の東側にイフ－7地区が幅0.5～1mだけ残る結果となり，この幅0.5～1mを1段低い

東側並に地下げすることになった。この部分の地下げに立合ったところ，イフ—7の東端にかろうじて残っていた大溝とその上層の土器群を発見することになった。したがってイフ—7の調査は，大溝の幅と同じ3mと，削平の幅1.5mの範囲となった。

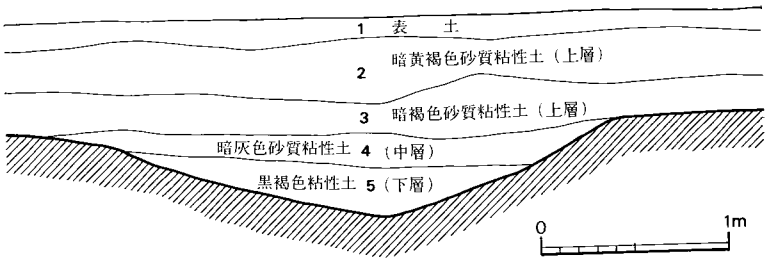
さらに，S 440を中心軸としたサキゾノIII－2からイフ—7・3・1に東西方向の幅3mの水路が新設されるため，この試掘を行ったところ，イフ—3地区で石棺群に当った。したがって幅3mのトレンチ調査となり，幅3m内に5基の石棺墓とイフ—7から続く大溝を検出したが，5基の石棺墓のうち3基が半分露出という結果になった。この3基を完全に調査するためにトレンチの北側壁をさらに1m幅で拡張した。拡張区に新たな3基が検出されたが，この3基は水路で破壊されることがないので，蓋石を除去せずに埋戻して調査を終った。

2. イフ—7の調査

イフ—7では，E＝0を中心軸とする新設道路幅6mを試掘しているが，この部分で遺構が検出されていないので，道路の東側に残るイフ—7地区（幅約1m）の土器群の幅（大溝幅約3m）を調査した。すなわち，道路の東側の表土剝ぎを行ったところ，1m×3mの範囲に土器群が出土したが，表土下の2層（他地区でいう3層）では遺構としては検出されず，土器溜として土器群を取上げた（第54図の2層）。2層下部から3層になると完形に近い土器群があるが，2層と3層は土器群としては区別できず，土器型式も徐徐に下層が古くなる程度である。この傾向は4層まで続くが，4層になると著しく土器量が減少し，土層としても区別できた。したがって，2層の大溝が検出できていない段階の土器群を大溝最上層，大溝が検出できた3層を大溝上層，土器量が減少した4層を大溝中層として処理した。5層は時期の判明する遺物が含まれていなかった。

大　溝（第54図）

大溝は，幅3m，深さ50cmのもので，東側のイフ—3は1段低くなって，土器群のある3層は削平されてしまっていたので，大溝の長さは約1mほどしか調査できなかった。大溝の断面形はゆるいV字形を呈するが，イフ—3地区は逆台形に変化している。



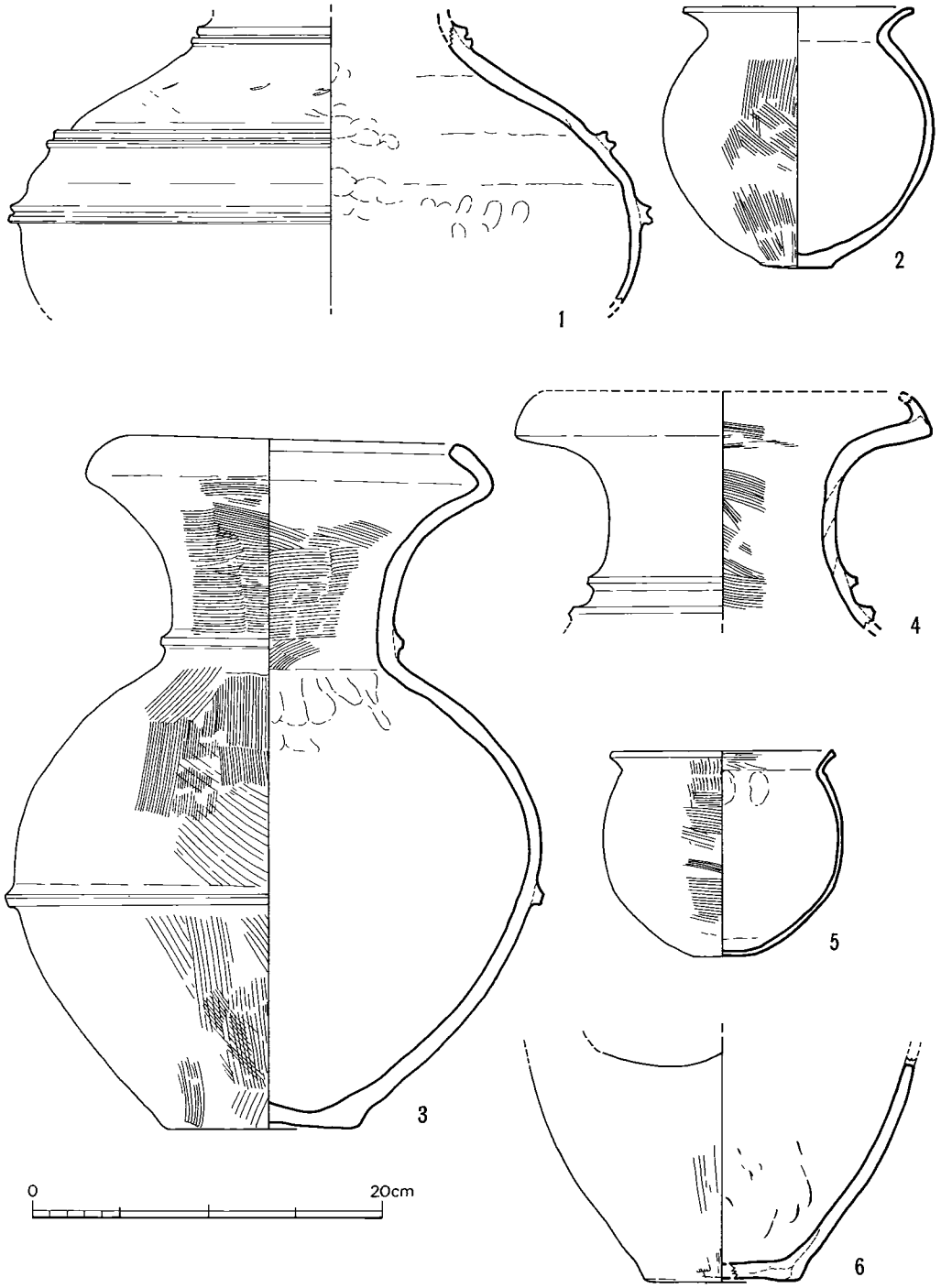
第 54 図　イフ—7大溝断面図（1/40）

土　器（図版24～29，第55～66図）

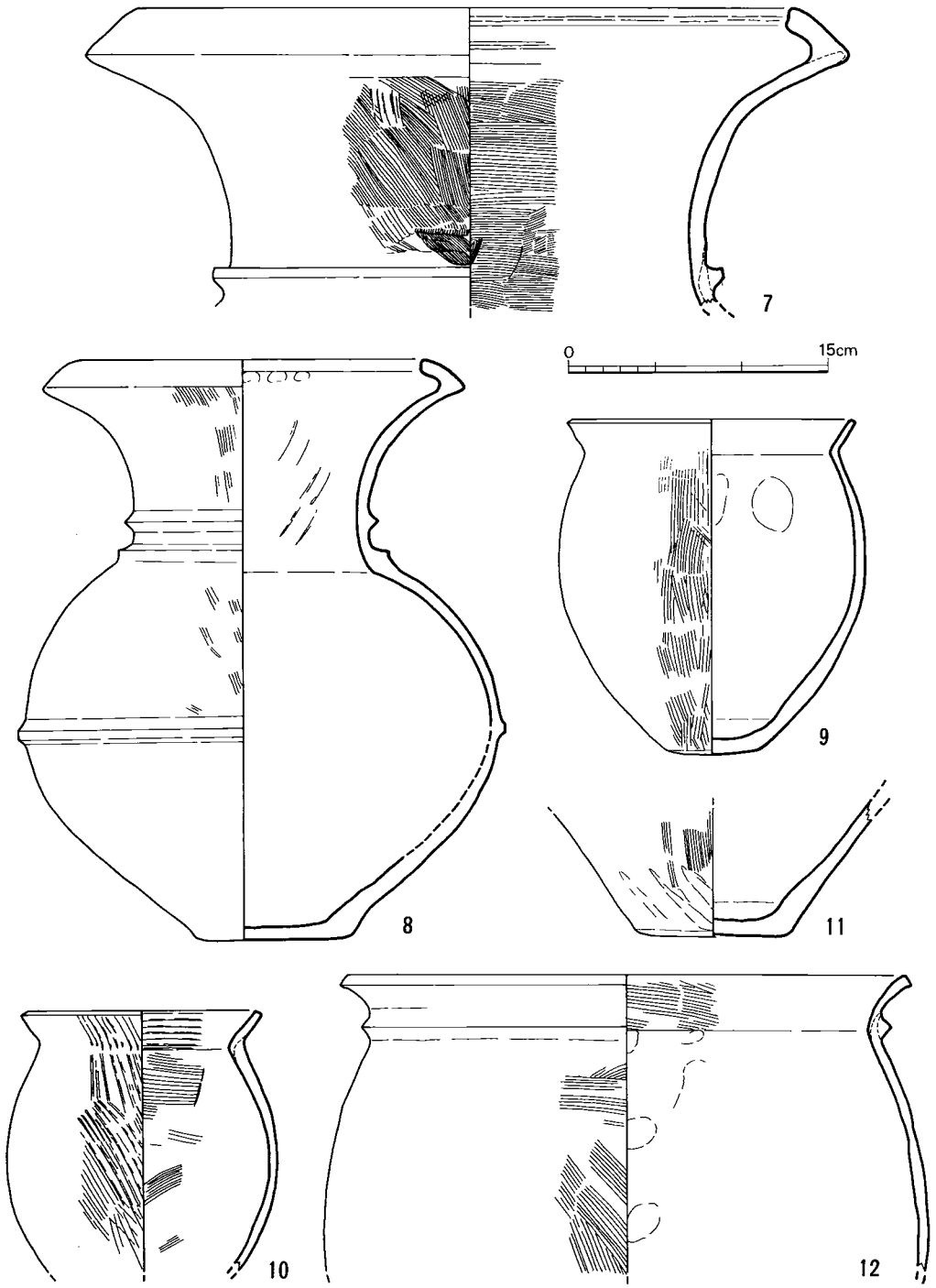
大溝中層の土器（1～12・41・44・46～49）

1～5・7・8は壺で，3・

イ　フ



第 55 図　大溝中層出土土器実測図①（1/4）



第 56 図　大溝中層出土土器実測図② (1/4)

イ　フ

4・7・8は袋状口縁，2・5は短頸，1は鋤先口縁壺であろう。1は中層の中でも上層に近いところから出土しているが，凸帯断面が口唇状を呈するので土器群中では最も古い中期末のものである。鋤先口縁や袋状口縁壺は，後期になるとまず頸部の凸帯が口唇状から台形になり，次第に体部の凸帯も台形となっていく（3・4・7）。さらに後期後半になるとやはり頸部の凸帯が三角形に変化し（8），弥生終末期に引継がれる。鋤先口縁壺は後期前半頃姿を消すが，袋状口縁壺は終末まで存続する。袋状口縁壺は，凸帯の変化より口縁径の変化に著しいものがあり，3は体部径よりかなり小さいが，8は体部径に近くなっている。袋状口縁の屈曲にも変化があり，3より8が外部の稜線が明瞭となる。したがって，3を後期中頃以前，4・7を後期中頃，8を後期後半とすることができる。

2・5は口縁と底部に明らかな差があり，2の底部が突出しているものの，平坦でないことから後期後半，5は終末に近い時期となろう。

6は体部に焼成前の円窓をもつ甕で，底部の形態から後期前半から中頃のものであろう。

9～12・41は甕であるが，9・10・41は小形，12は中形に近いもの。9は上層と中層の区別がつかない位置で出土したもので，くの字口縁が直線化し，底部は凸レンズ状を呈する。底部は壺・甕の区別なく小形のものが先に丸底化するが，9のような小形で丸底になっていないものは後期後半とされる。10はハケ目調整が粗くなっているところから終末に近い。12はくの字口縁が外反して三角凸帯をめぐらすが，口縁の形態から後期中頃に近いものである。41は口縁部を欠くが，底部から後期中頃に近く，外面にタタキ目を残している。

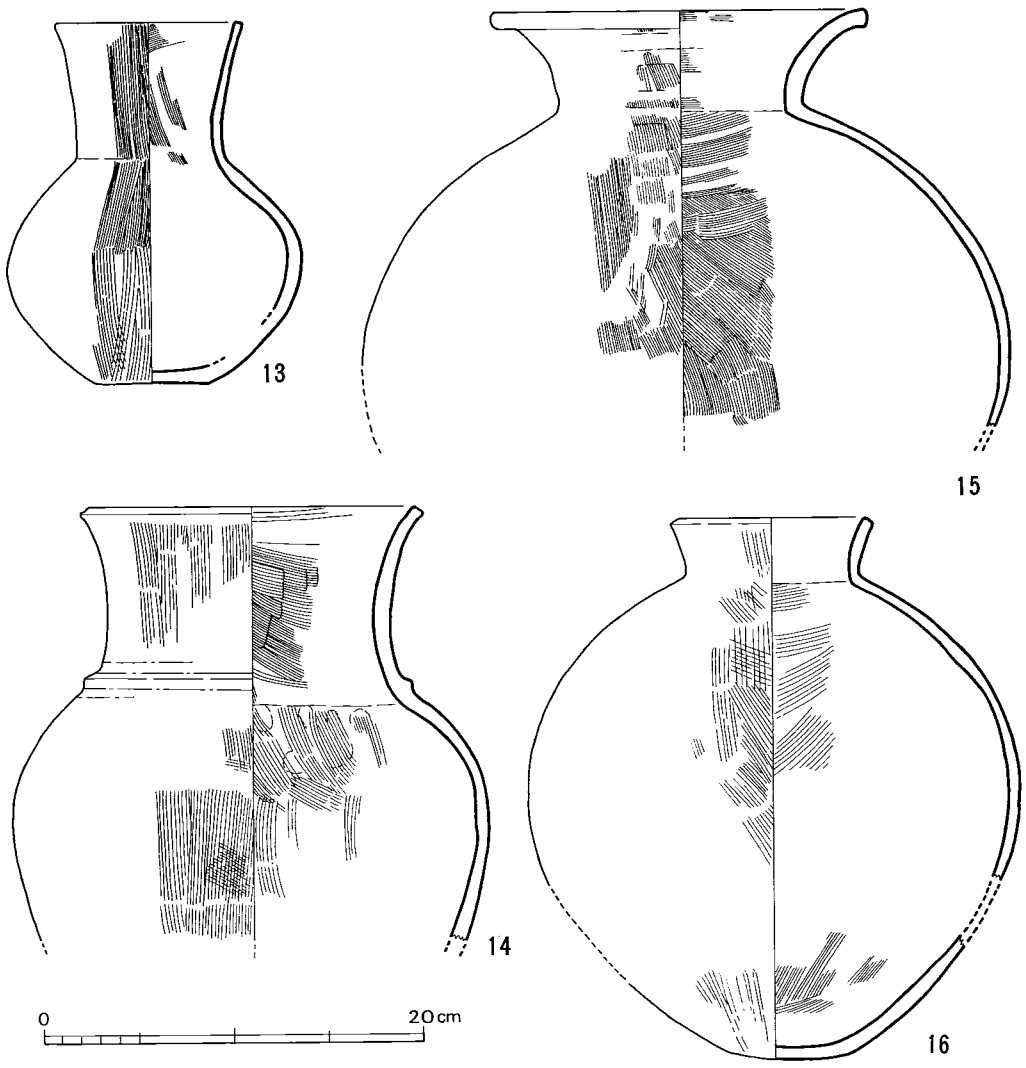
44～49は後期後半の高杯で，後期中頃九州外から移入された系統のもので，杯部立上りの上端に平坦面のある44が古く，45・46に続く。44の脚部は柱状部が細く長いが，後期中頃の移入された当初は太い脚部である。45・46の完形品は仲田17号住居跡（『三雲遺跡』II）に一括資料があり，脚裾部が内湾ぎみとなる。45のみ上層出土であるから，上層と中層で一線を画することができない。

以上のように大溝中層の土器は，後期中頃から後半を主体とし，一部中期末を含んでいる。

大溝上層の土器（13～27・29～40・42・43・50～66・70）　13・14は長頸壺で，九州では系譜がたどりにくいものであるが，中期に稀に見られ東九州ほど多いところから外来系の一種であろう。少し大形のものには凸帯があり，後期後半のものであろう。

15・16も九州では自生しない広口壺と直口壺で，東から伝播したもので体部の張りが特徴といえる。弥生終末頃のものであろう。

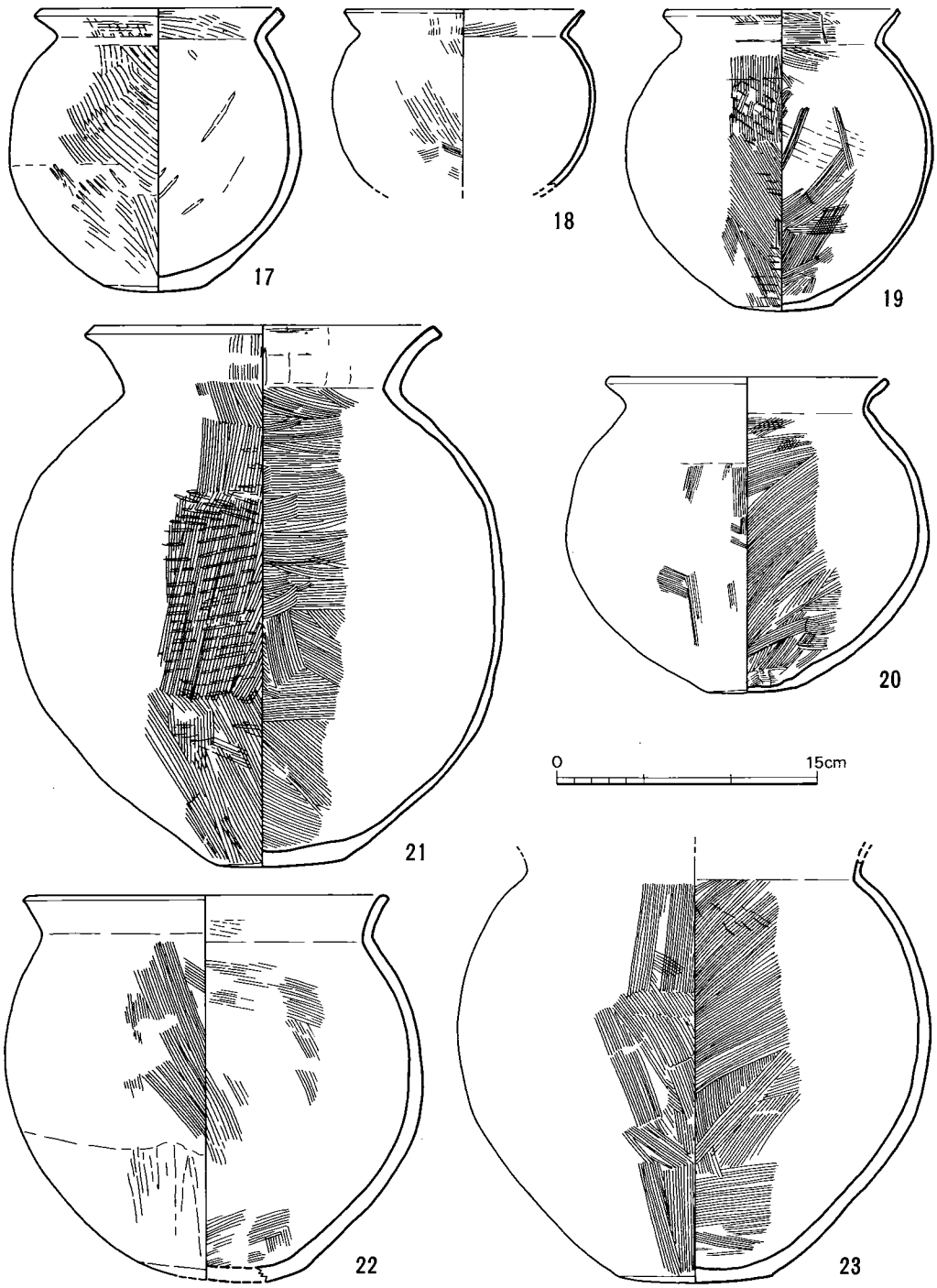
17～23は短頸壺であるが，口径からすると甕との区別がつかないが，体部の丸みから壺とした。口縁部は一様にくの字形を呈し，大きいものほど（21）外反するが，底部は同様に凸レンズ状を呈するところから後期後半に属する。19・21・23にはタタキ目が残り，17・21・22は体部下半をヘラケズリした後にハケ目やヘラナデ（22）を行うところは新しい要素で，終末に近



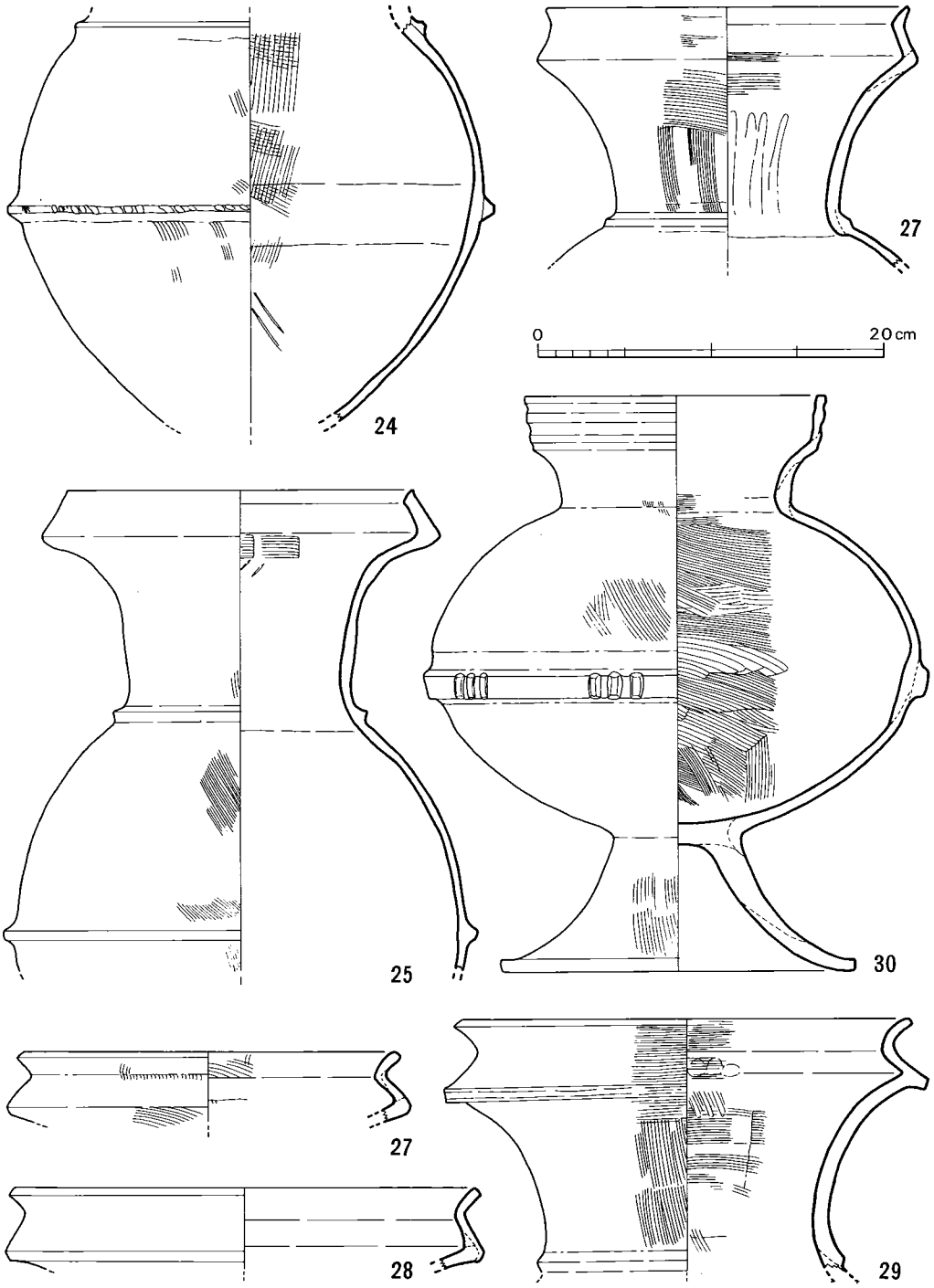
第 57 図　大溝上層出土土器実測図①（1/4）

いものであろう。

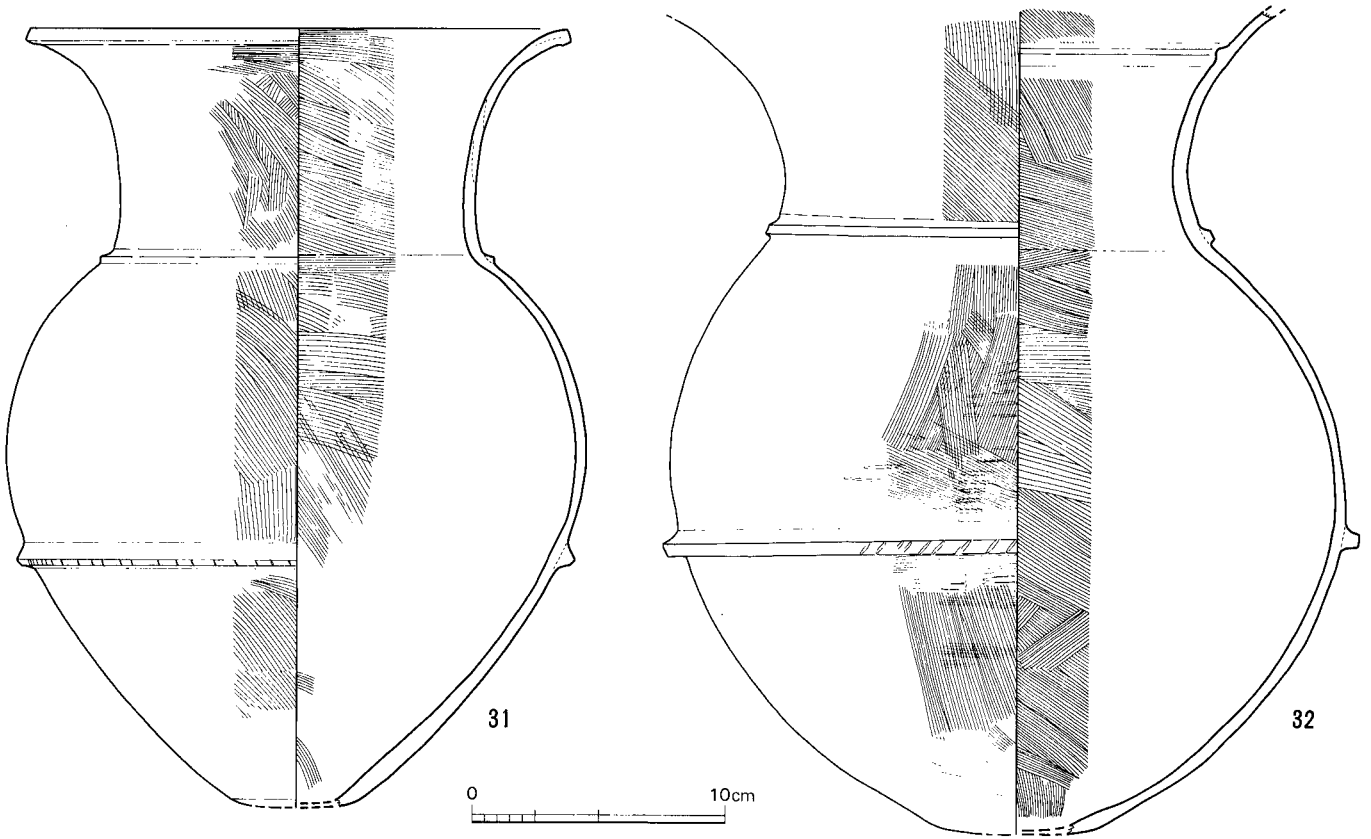
24～29は袋状口縁壺で，中層の８に後続するものである。24は取上げは中層としているが，上層に近いもので，肩部凸帯が台形のところは古いが，頸部が太くなるらしいから新しい要素といえる。大形壺の肩部凸帯は終末まで台形凸帯であることから終末の24は体部凸帯にキザミが施されるのであろう。口径と頸部が太くなった袋状口縁壺は，終末になって口縁端部の変化が始る。口縁の変化は，25～29の順に変化するが時期差はさほどなく，ほぼ終末の時期中の変化と思われるが，34のように２段目が立上って袋状ではなく，二重口縁になると古墳期に含まれる。27は中層に近く，28は最上層出土。



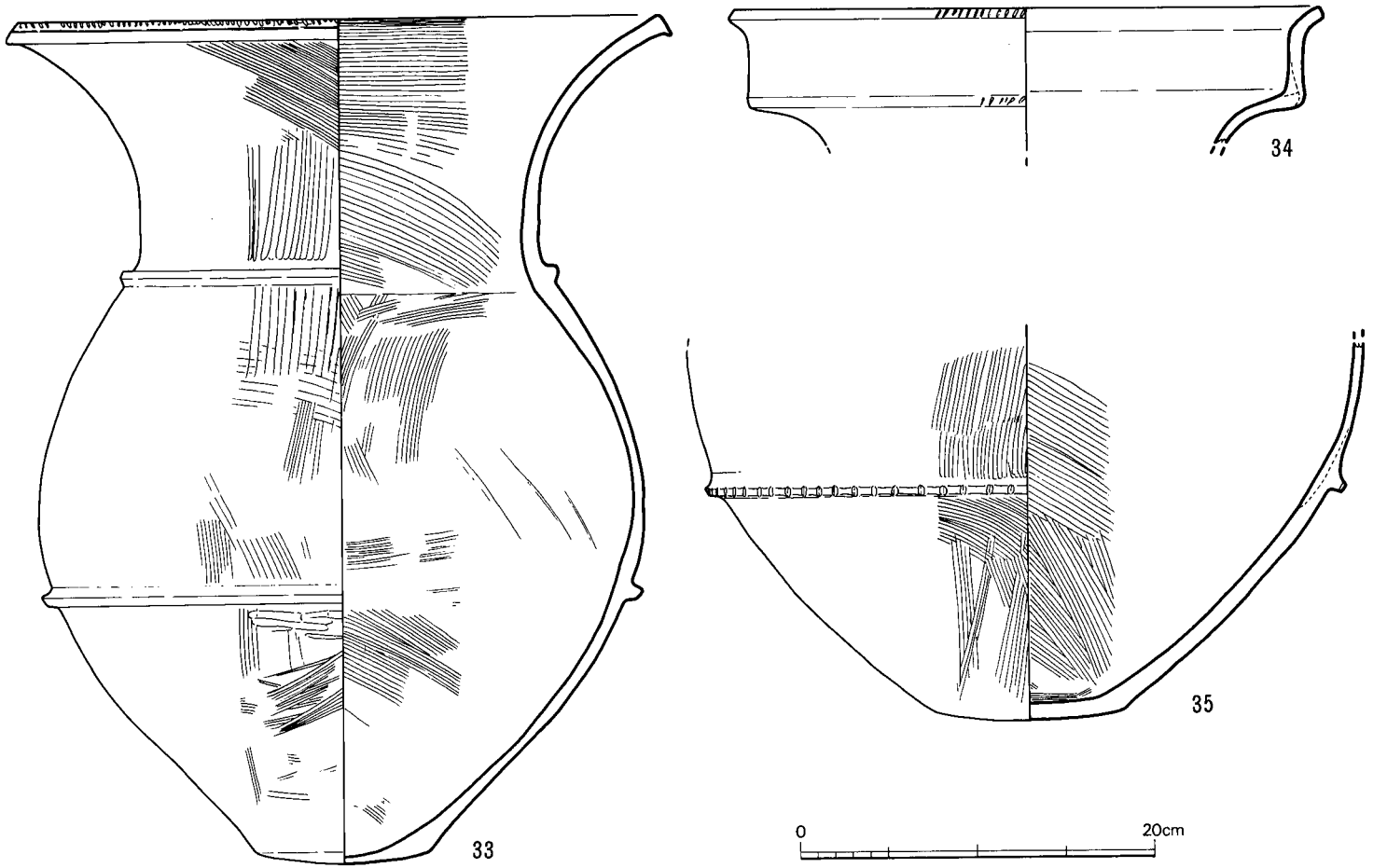
第 58 図　大溝上層出土土器実測図②（1/4）



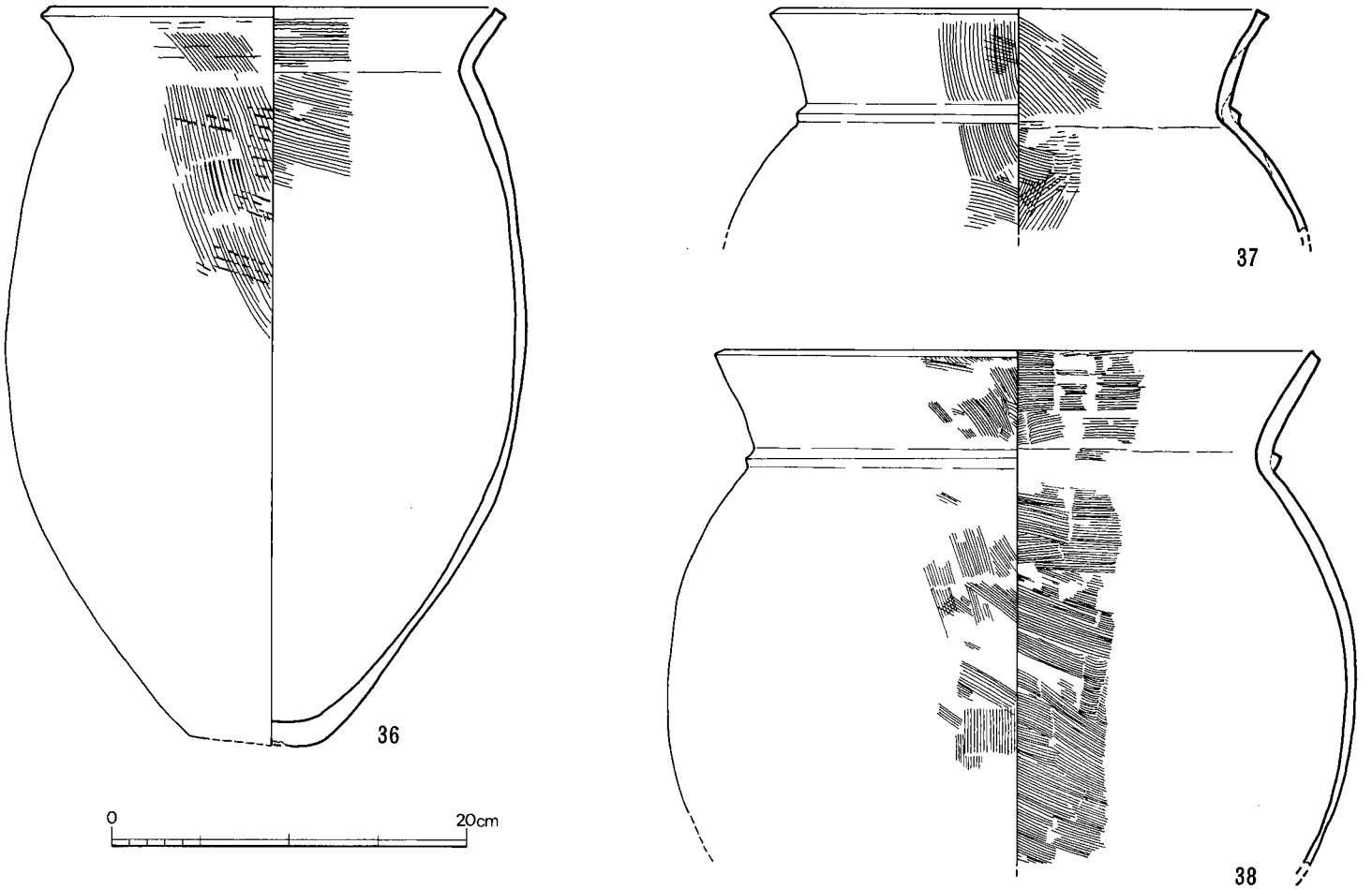
第 59 図　大溝上層出土土器実測図③（1/4）



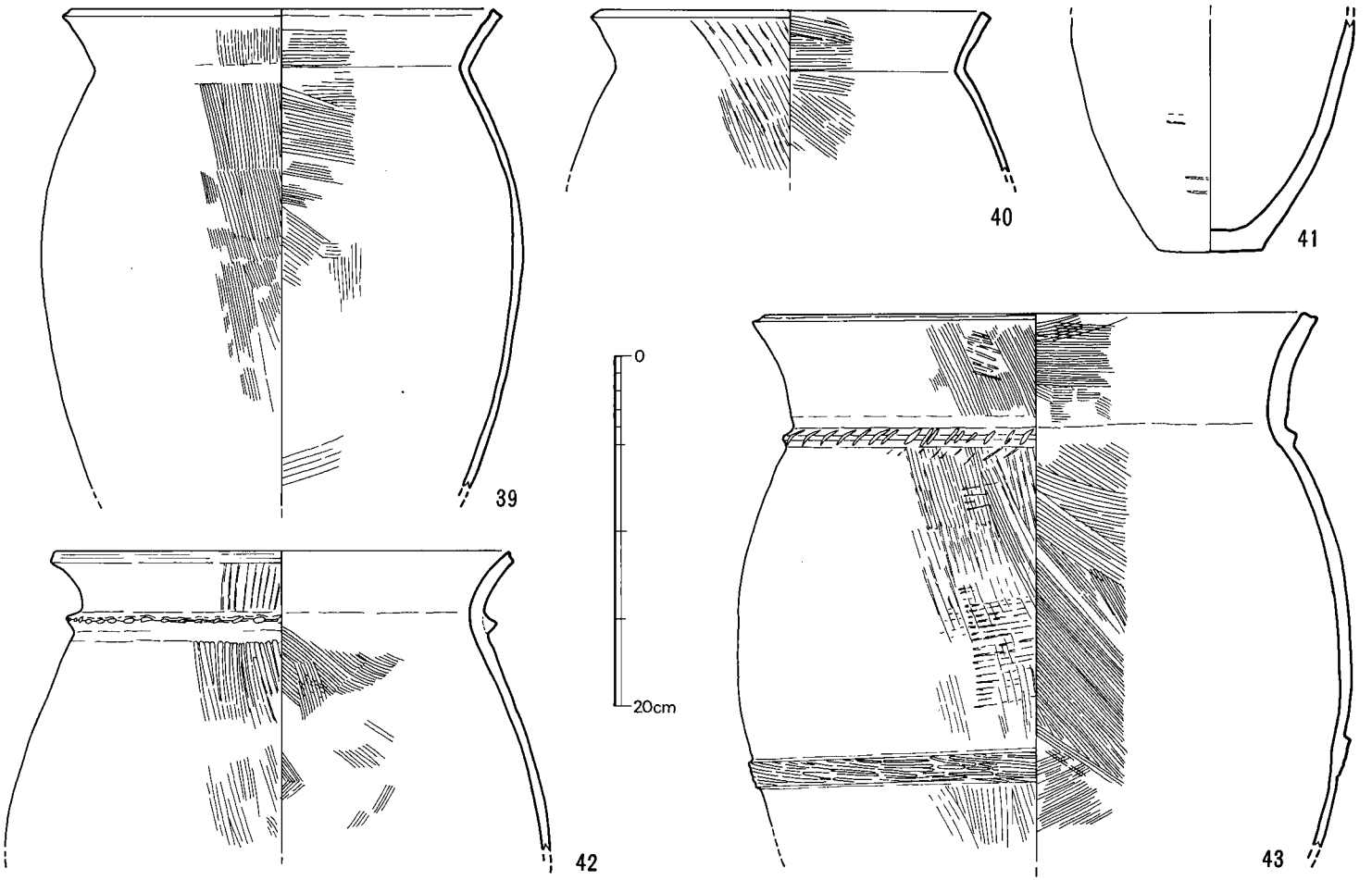
第 60 図 大 溝 上 層 出 土 土 器 実 測 図 ④ (1/6)



第 61 図　大溝上層出土土器実測図⑤ (1/4)

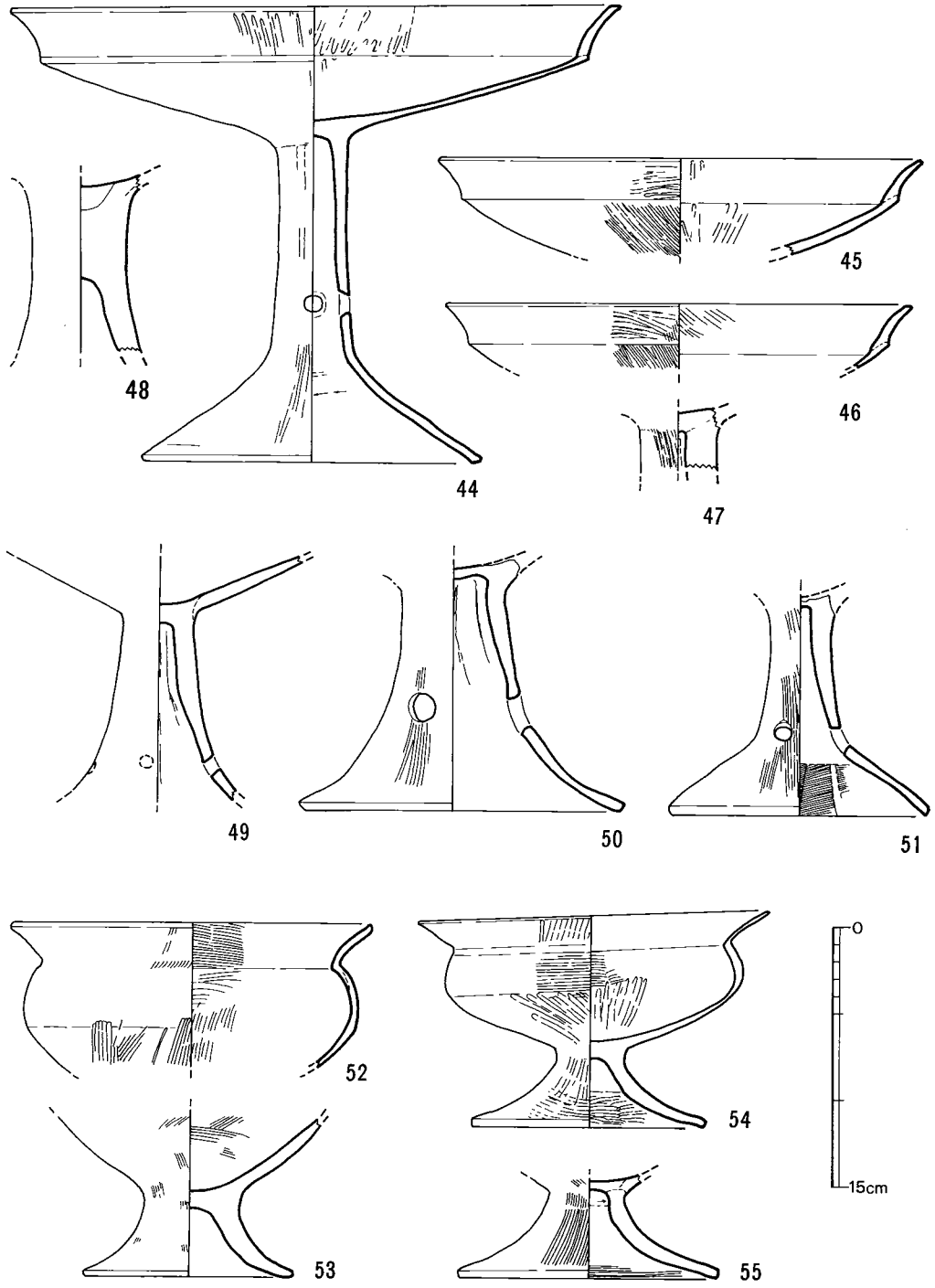


第 62 図 大溝上層出土土器実測図⑥ (1/4)



第 63 図　大溝上層出土土器実測図⑦ (1/4)

イ　フ



第 64 図　大溝上層出土土器実測図⑧（1/4）

30は最上層に近く出土したもので，胎土や焼成・器形から確実に外来系土器である。二重口縁の凹線や体部凸帯の付文は中国地方系と思われるが，体部凸帯そのものは九州に自生しているものである。時期は層位から終末に属するが，伝来先を特定できないので，今後の検討を要する。

31～35は中形壺で，34以外は広口壺になる。口径が体部径と同様に大きく，凸帯にキザミ目が施されるところから終末のものであるが，31のように体部の肩が張り，口径が多少小さいものは古い要素といえる。32のように頸部内側に凸帯をめぐらすのは稀であるが，中期の鋤先口縁が変化して終末まで粘土帯貼付として残るので，鋤先口縁の変化の一種としてとらえられる。

36～43は小形から中形甕で，大きいものほど肩部に三角凸帯をめぐらす。これが同時期の大形甕になると台形凸帯となる。凸帯のない小形甕は，36にはタタキ目が残るが，口縁部の屈曲の強さと先端の角や底部から後期後半のもの。中形甕は，同様に口縁の状況と凸帯のキザミ目の出現から37・38・42・43の順に変化し，最後の43になると口縁部は立ち，凸帯のキザミは粗く，体部凸帯は扁平凸帯となる。時期は，37が後期後半，38が終末，42が終末から土師器Ⅰ期，43が土師器IIa 期となる(註9)。

50・51は高杯の脚であるが，柱状部が太い50は稀で，杯部の形態が不明だが，畿内の5様式前半には見られるので，その影響であろうか。後期後半のもの。51は短脚で裾部が内湾しているところから土師器Ⅰ期に属するもの。

52～55は台付鉢といえるもので，くの字形口縁を有する。弥生後期後半のものであるが，鉢部が湾曲し深いほど古く（52），体部下半に放射状のヘラミガキを行うのが特徴で，同時期の高杯に共通し，後に暗文となるものである。

56は底部に焼成前の穿孔があり，甑として製作したもの。底部の形態から後期中頃のもの。61も焼成前の穿孔で，こちらは終末から古式土師器に伴う甑。

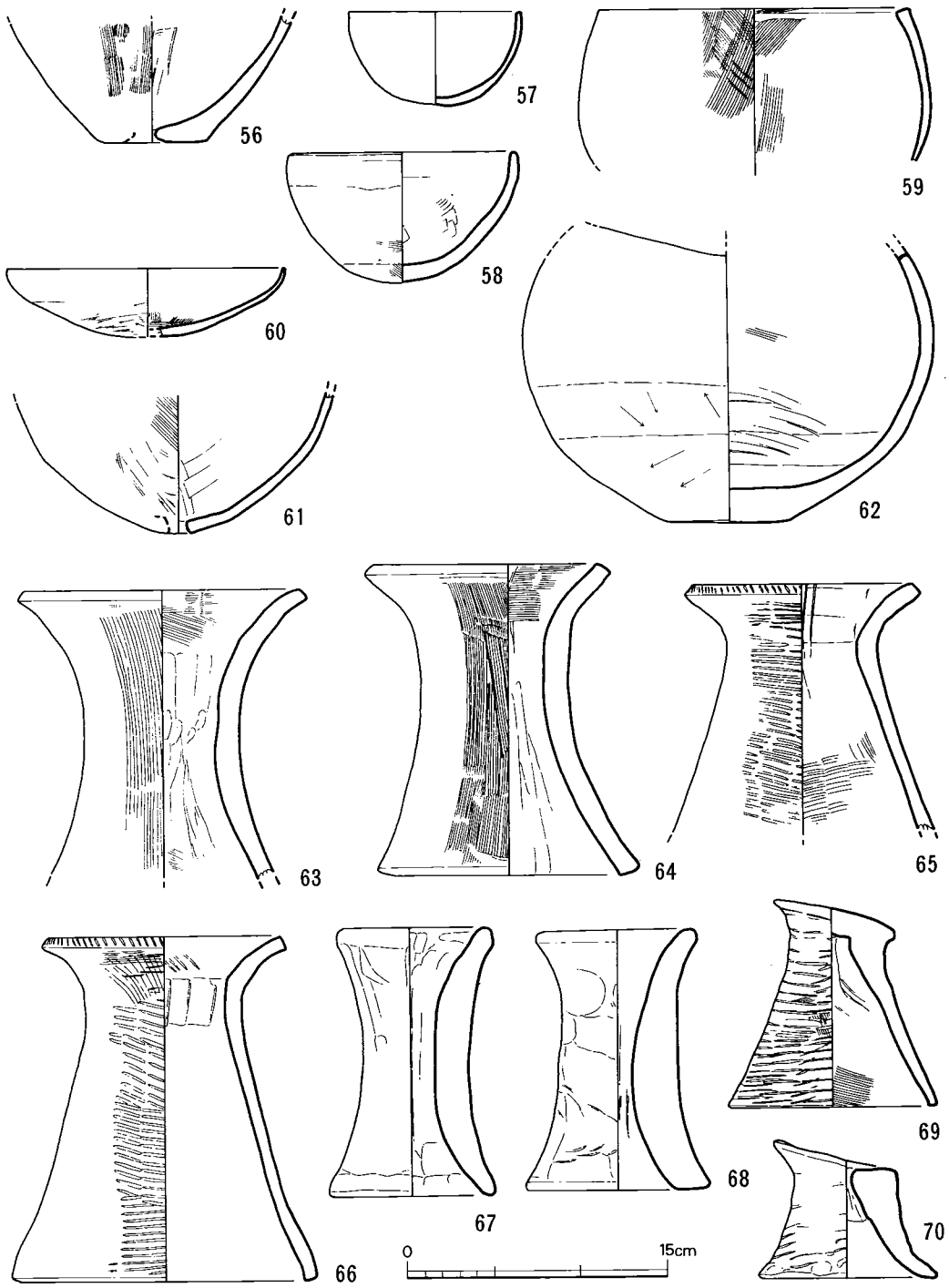
57～60は鉢形であるが，60は皿に近く，他は椀ともいえる。いずれも終末から古式土師器に伴う在地系のもので，大形の59は口縁端部に水平面があり，体部は半球形を呈す。

62は口縁部傾斜する鉢といえるもので，6のような窓付甕や手焙形土器とは別ものであろう。体部下半ヘラケズリで，底部はあるが粗製品であるところは，弥生終末以後のものであろう。

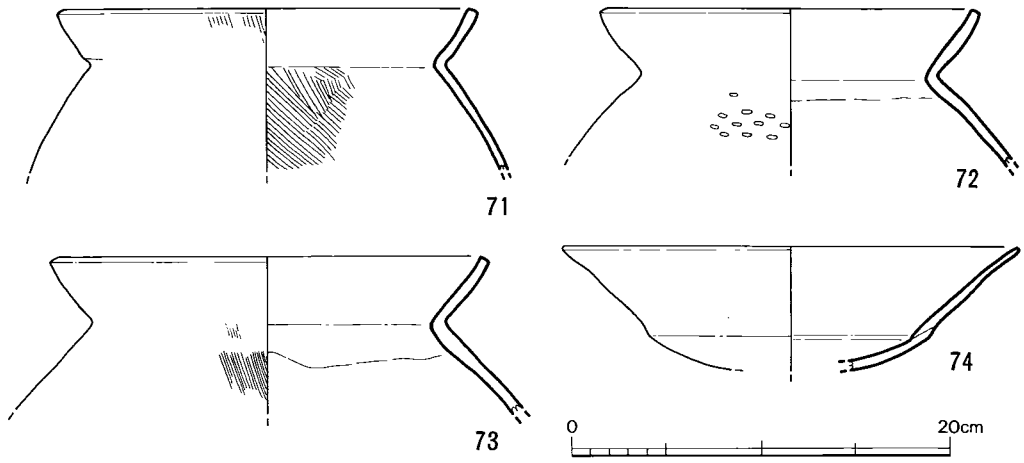
63～66は器台で，63・64はハケ目調整，65・66は体部全面にタタキ目を残し，口縁にはキザミ目を施す。63・64は後期後半，65・66は終末以後のもの。

67～70は支脚で，67～69は大溝最上層出土，70は上層出土のもの。前2例は筒形で外面に指圧痕を残し，後2例は截頭円錐形でタタキ目を残す。時期は終末以後のものであるが，とくに69・70は土師器に伴うものであろう。

71～74は大溝上層と最上層（73）のもので，明らかに外来系の土師器である。甕は71のみ内面にハケ目調整を残しているが，口縁部は他と同様に内湾するところから布留式を意識したも



第 65 図　大溝上層・最上層出土土器実測図（1/4）



第 66 図　大溝最上層出土土器実測図（1/4）

のでIIa 式に属する。74の高杯も51に近い短脚が付くものでIIa 式に属する。

以上，大溝上層は弥生後期後半の新しいものから終末期のものを主体とし，一部古式土師器に属するものを含む。また，最上層は終末からIIa 式を含むことが明らかになった。

イフ—7の大溝は，方向からするとイフ—3石棺墓群下の大溝に続くと思われるので，イフ—3大溝の土器群との対比が必要となる。大溝下層には実測図に示されるような遺物がないが，中層に弥生中期後半の土器があるところから，大溝は中期後半以前に掘られたものである。この点は，石橋II—12地区の大溝は中期前半であるから，イフの大溝も下層に中期前半が含まれる可能性が強い。

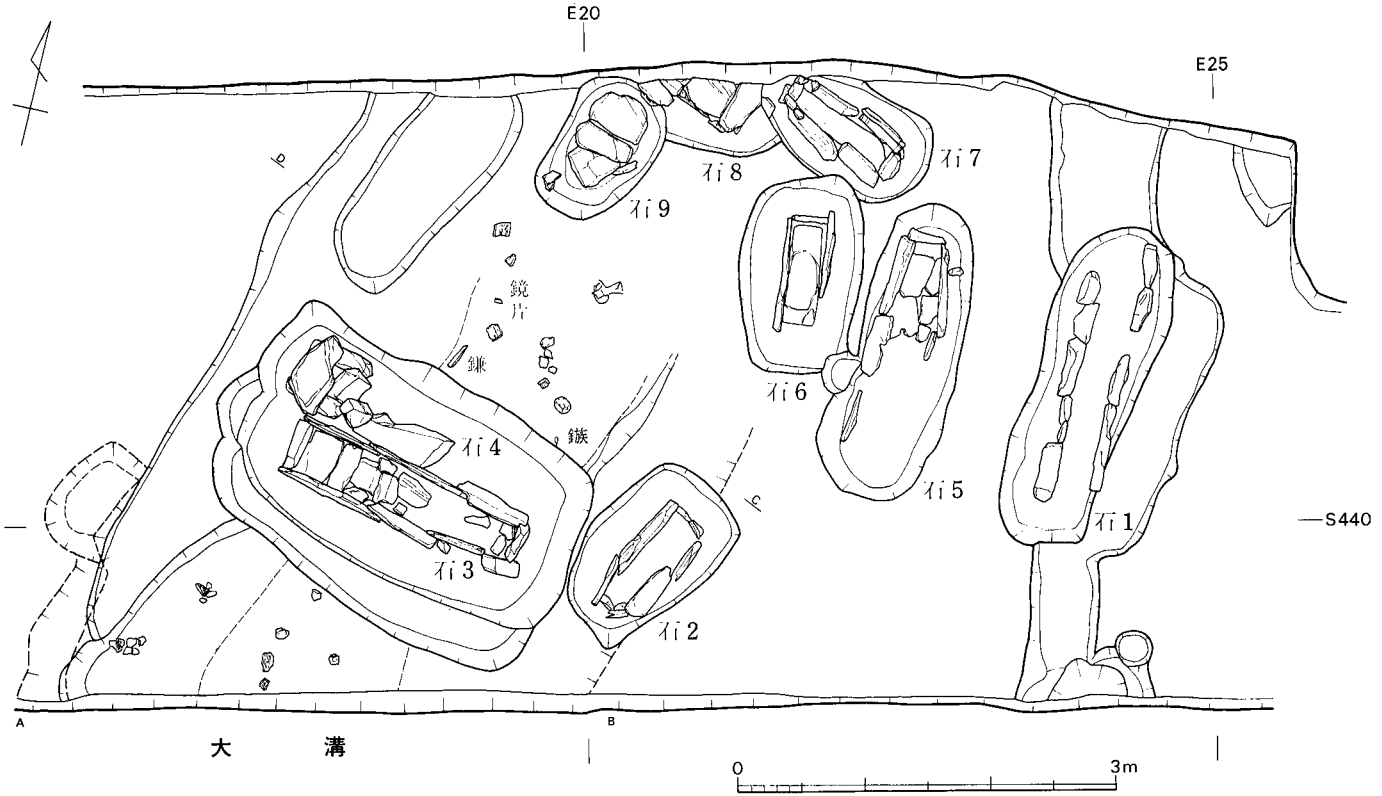
3．イフ—3の調査

イフ—3の調査は，S440を中心とした幅3mの東西水路にかかるもので，E15～E26の範囲を行った。

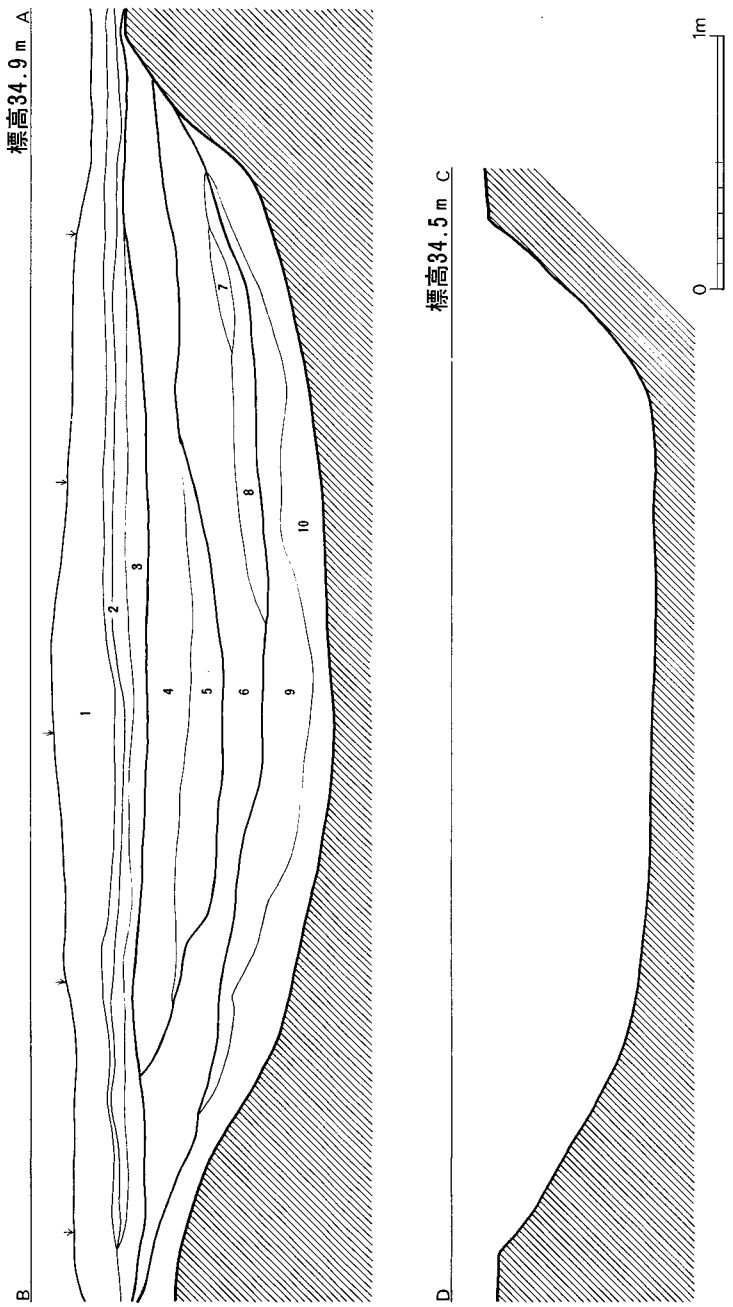
(1)　大　溝（図版30－1，第67・68図）

イフ—3では，9基の箱式石棺墓と大溝が発見されたが，大溝は石棺墓群より古く，大溝埋没後に石棺墓が営まれている。

大溝は幅4m，深さ85cmの規模で，断面形は丸みのある逆台形をしている。大溝は主軸をN 18° E方向に向って流れるよう掘られていることから，イフ—7と石橋II—12の大溝がほぼ同一線上にのるように思える。



第 67 図　イフⅠ－3　遺構配置図（1/60）



第68図 大溝断面図 (1/60)

大溝内に堆積した土砂は，第68図のように表土を含めて1～10に細分した。1は耕作土，2は床土であるから，大溝内の堆積土は3～10であり，遺物の取上げに際しては3を最上層，4・5を上層（第67図に出土位置あり），6～8を中層，9・10を下層とした。遺物は，最上層に多く見られるが，上層では少なくなり，中・下層ではほとんど見られない。

イ　フ

出土遺物（図版30－2～31，第69～75図）

土　器（第69～71図）　1～4が中層から出土したもの。

1は器形からすると弥生前期の小形壺のようであるが，内面にヘラケズリ状の調整があるところから古式土師器の可能性が強い。3号石棺などの掘方は，下層まで達するものがあるところから，混入する可能性はある。

2は，中期後半の鋤先口縁壺の体部で，口唇状凸帯が多いところは後半でも新しいもの。

3は不明土製品で，高杯脚部の柱状部のようだが，先端は平坦面をなし，対角線にくぼみをつける。一方は欠損しているが，中空部があり，先端と多少ずれた方向に円孔が貫通する。4は鉢であるが，台付状の底部を有し，体部下半のヘラケズリから終末のものであろう。

5～39は大溝上層と最上層の土器であるが，このうち7・8・14・16～20・24・30・31は第67図に出土地点を示したものである。さらに図の中で7・14・16・18・24・31は4層に属し，4層には第67図に示すように，鏡片・鉄鏃・鉄鎌が出土している。

5～9は小形甕で，5・7はくの字形口縁の屈曲と体部の肩部の張り具合から後期中頃以前のものであるが，6・8・9は口縁部が直線的になり，体部が肩が張らずに長胴になるところから，後期後半以後のもので6・8・10の順に新しくなり，9のように口縁先端が抓上げられるものは土師器に共伴するものである。

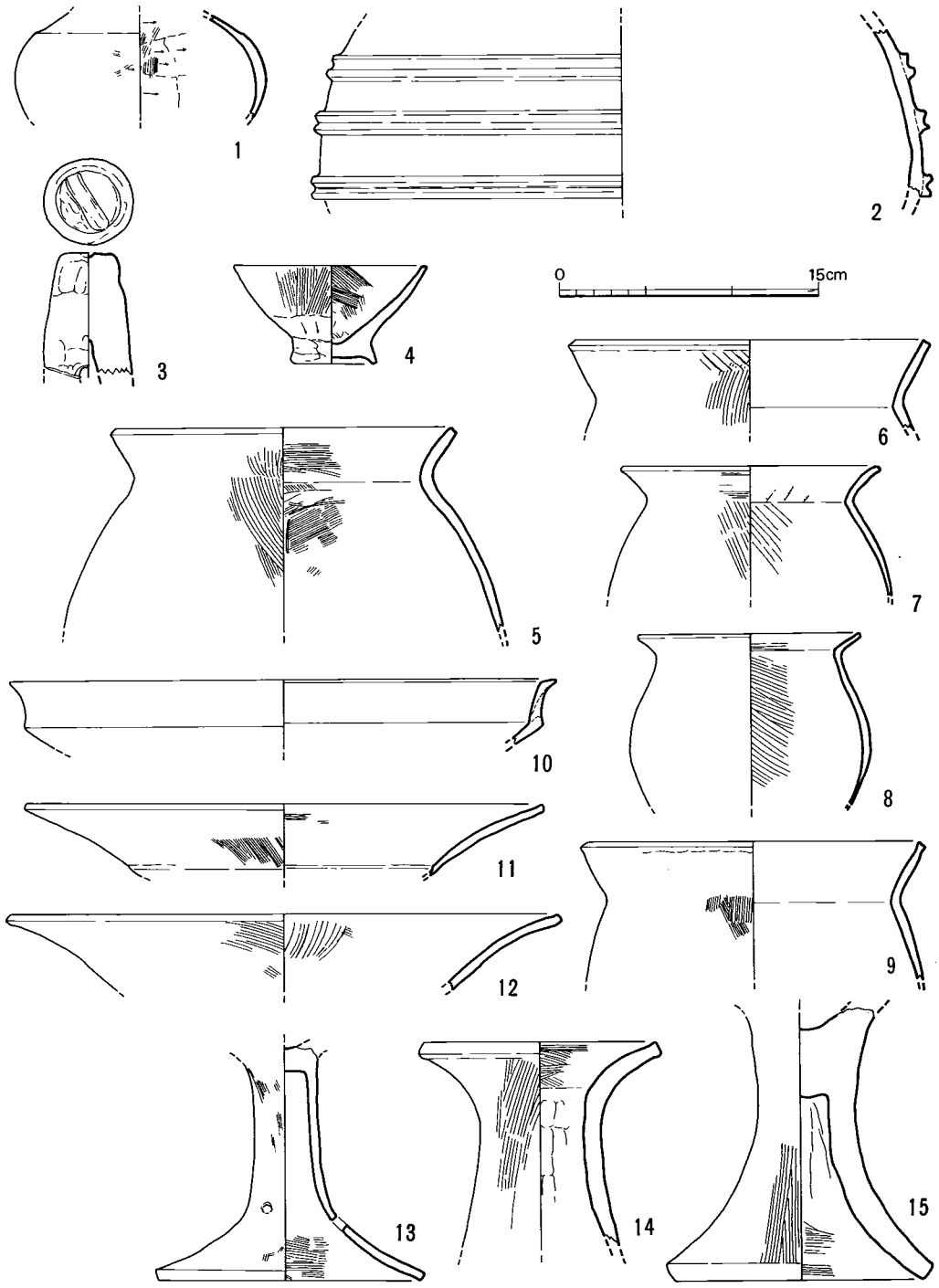
10～13の高杯は，10のように杯部立上りが短かく先端に平坦面を作るものは後期後半でも古い型式のもので，イフ—7大溝中層に完形品が見られる。11～13は杯部の外半がその下部の長さと同じになるところから，サキゾノI－1の1号住居跡に完形品があるように，庄内式土器と共伴するものである。11の表面は荒れているので不明だが，12は内面にヘラ描暗文が施されている。13の脚部は短脚になりつつあるところから，11・12と同様な杯部をもつ高杯である。

14の器台は，くびれ部が上方にあって口縁部が大きく開くが，外面は粗いハケ目調整されてタタキ目が残らないことから後期後半に属するもの。

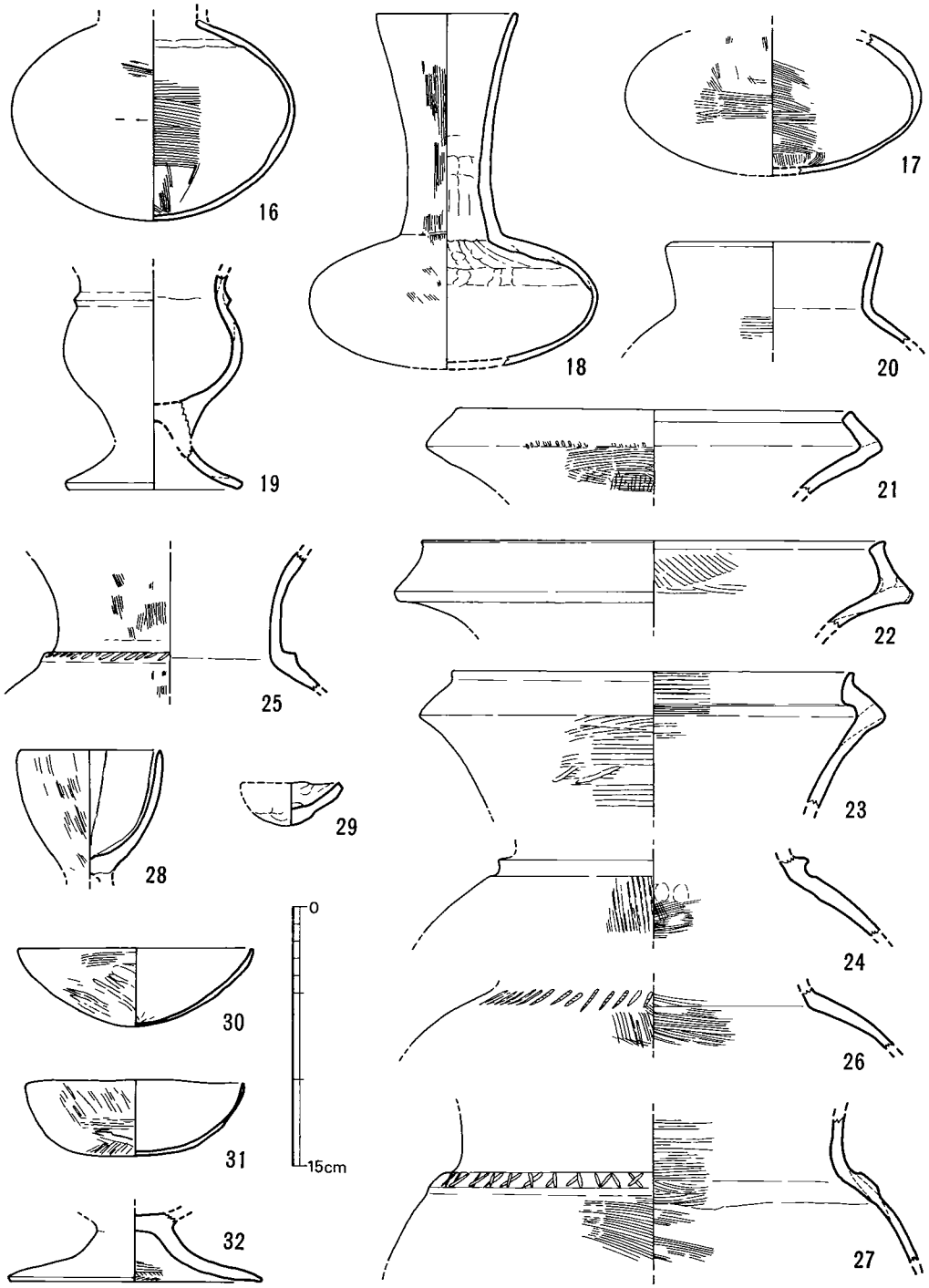
15は高杯形土器の脚部と思われるが，杯部の形態が不明なことと，脚部の形態も特異なもので時期も特定できない。

16～18は細頸壺で，体部の形態から丸みのある16から18の順に新しくなる。細頸壺は，弥生の終りになるほど体部が扁球形になるが，最も扁球となるのは庄内式に併行する時期で，布留式になると再び球形となって頸部直線的に上開きとなる。18は頸部はヘラによるタテの研磨，体部は細かいハケの後でヨコにヘラ研磨している。16・17は弥生終末，18は庄内期に併行する。

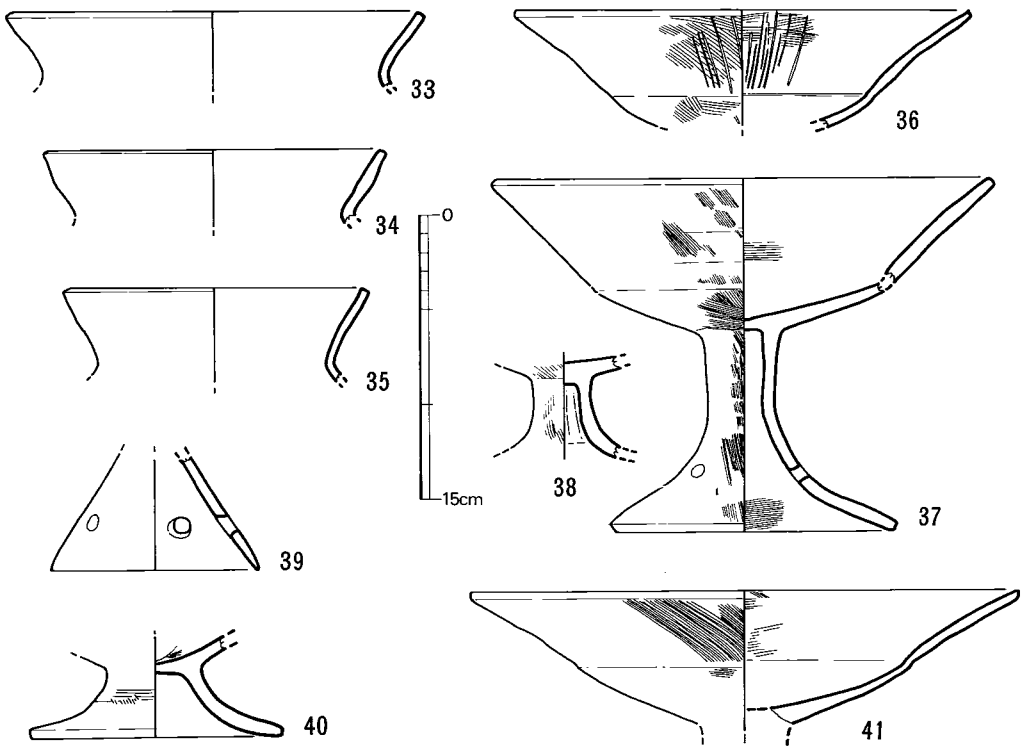
19の台付小形壺は，形態的には弥生中期前半頃のようなものであるが，脚部の長さが不明な点など時期決定ができない。大溝上層では弥生中期の土器片は多いが，中期初頭の城ノ越式に属するものは，上底甕の底部細片1点のみである。器面全体がナデ調整されているところから弥生後期の粗製品とは違っている。



第 69 図　大溝中層・上層出土土器実測図（1/4）



第 70 図　大溝上層出土土器実測図①（1/4）



第 71 図　大溝上層出土土器実測図②（1/4）

20は直口壺で器面が荒れて調整が不明なところがあるが，体部外面に粗いハケ目が残っているところから，弥生終末頃のものであろう。

21～27は袋状口縁壺の破片で，口縁部は中期の袋状口縁に近い21から順に22・23が新しくなっている。21も屈曲が強くてキザミ目を施す点から22・23とさほど時期的には差がなく，3点共弥生終末に属する。24～27はその肩部破片で，やはり24～27に向って新しくなる。24の三角凸帯は後期後半，25のキザミのある三角凸帯は弥生終末，26の肩部キザミ文様は一般に弥生では見られず古式土師器に属するもの。27の扁平凸帯に×印キザミ目のあるものは，庄内式から布留式併行の在地土器に見られるものである。

28は台付鉢とでもいうべきもので，台部の剝離面には接合をよりよくするために板目のあるキザミ目を付けている。体部外面はハケの後にミガキに近いナデ調整を行っている。体部内面には間隔の粗いヘラ描暗文を施す。

29は鉢形の小形手捏土器。

30・31は小形鉢で，30は尖底であるが31は平底に近いもの。30は外面下半をヘラケズリの後でヘラでナデているが，31は粗いハケ調整があり赤色顔料が付着している。弥生終末前後。

32は台付鉢などの台部片。外面は不明だが，内面に粗いハケ目が残っている。

33～39は大溝上層の土器の中で明らかに外来系の土師器とわかるもので，布留古式に属する。

33～35の甕口縁部は，先端部がわずかに内湾ぎみで上方に抓上げているのが特徴で，IIa 式に属する。

36～38の高杯は，脚部においてIIa 式より古い特徴をもち，杯部にもＩ式の特徴が残っているところからIb 式に属するものである。36は内外面にハケ目の後ヘラ描暗文を施すが，37は内外面共に細いハケ目の後ナデによって部分に消している。

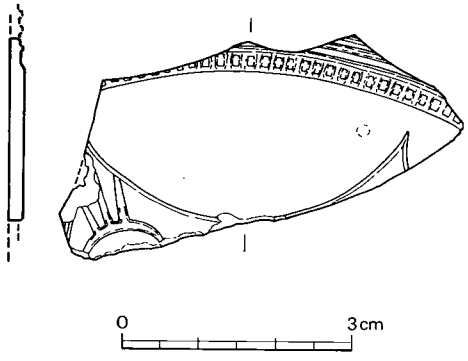
39の器台は小形丸底坩用のもので，脚部に大きめの円孔を4個もっている。IIa 期のもの。

40・41は石棺墓掘方内出土の小破片であるが，石棺墓に直接伴うものではなく，大溝埋土中のものが混入したのであろう。ちなみに，40は2号，41は8号と9号に分かれて出土した。40は終末，41はＩa 期の庄内式に併行するものである。

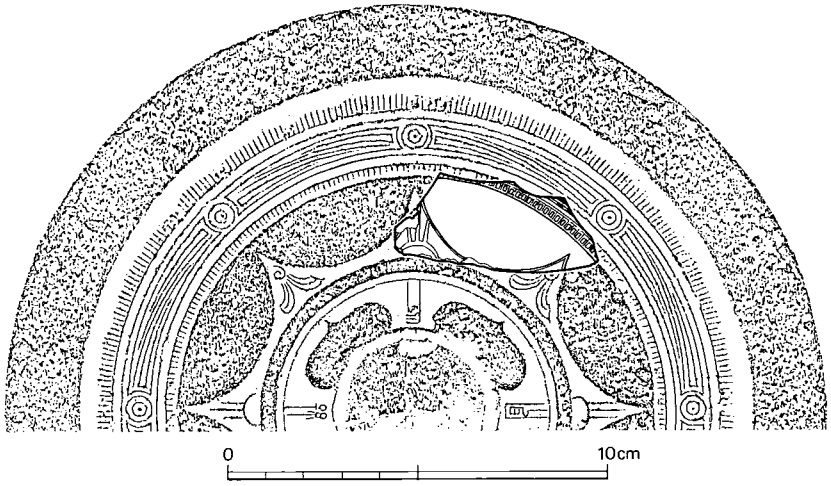
以上，イフ―3大溝内出土の土器は，中層にも弥生終末らしき土器があり，上層以上には確実に古式土師器が混入している。この点イフ―7の大溝と違っているが，イフ―3では大溝埋没後石棺墓や土壙墓らしきもので攪乱されていることは明らかである。さらに攪乱された証拠として，3・4号石棺墓のように後から埋葬した石棺が古い石棺を破壊していることからもわかるし，イフ―7と比較して土器が細片であることもうなずける。

鏡　片（図版31－1，第72・73図）　鉄鏃や鉄鎌と同じ第4層下部で出土したもので，付近には18の細頸壺など古式土師器に伴うものがある。鏡片は，後漢の連孤文鏡の細片で，最大5.4×2.3cmの大きさ。鏡片は，復原すると第73図のような「長宜子孫」系の連弧文鏡となり，直径22cm以上の大型鏡である。鏡片には，連弧文1個分と斜角雷文の一部とその内側の櫛歯文，連弧文内側の山形文が残っている。鏡の厚さは，弧文の上が2.0mm，弧文間の下地が1.5mmの厚さで，大型鏡の割に薄手の鏡である。

鏡片から復原できる鏡は，山形文などが簡略化されていないところから，後漢後半でも古い型式に属するもので，中国の洛陽西郊漢墓10016号（遺物番号18）では方格規矩鏡（19）と共伴している（註10）。鏡自体はこのように古いものであるが，鏡片には斜角雷文帯の部分や弧文と山形文付近に鏡片となった以後の摩滅が見られる。しかも鏡片が出土した地点や層位が，古くて庄内式，新しく見ると布留式に併行する時期のもので，鉄鏃（2）の型式からも時期的には動かせない。鏡片が鉄鏃や鉄鎌と共に3号石棺墓によって破壊された4号石棺墓の副葬品とすれば，古い方の庄内式併行となり，この可能性が強い。鏡片になってからの摩滅がさほどでないところから，鏡片を長く伝世したものではないが，この鏡式は完形鏡であれば弥生後期後半に埋葬されるであろうから，完形



第 72 図　鏡片実測図（実大）

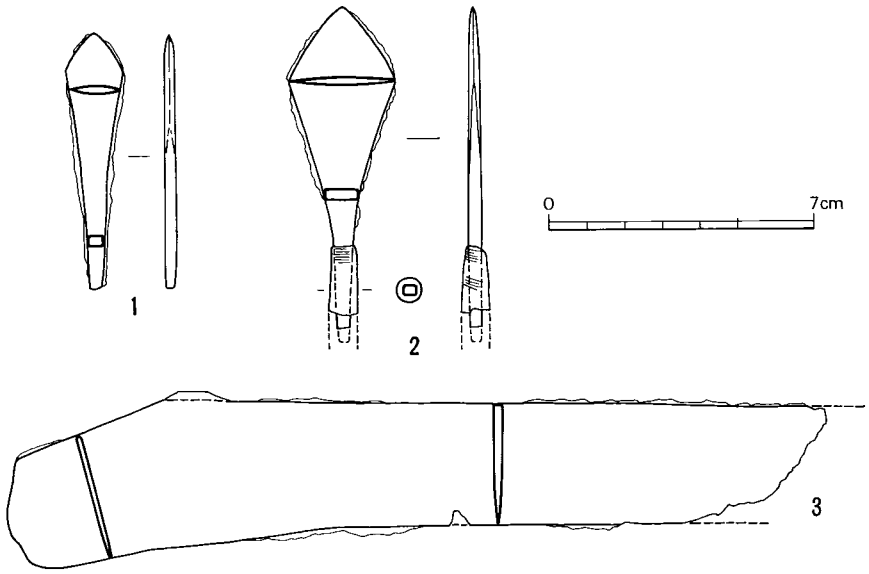


第 73 図　鏡 片 復 原 図 (1/2)

鏡でも一定期間の伝世が考えられる。このように北部九州の中心部でも鏡片が伝世される事実があることから，鏡片をもって絶対年代を言うのは気をつけねばならない。

鉄　器（図版31－2，第74図）　1は大溝上層から出土した鉄鏃で，全長6.8㎝の大きさ。鏃の型式は有茎の尖根式とでもいっておくが，身と茎の区別が明瞭でない。身の最大幅1.5㎝，最大厚さ約3㎜で，稜線もない凸レンズ状の断面形をしている。弥生後期後半のものである。

2は鏡片や3の鉄鎌と同じ第4層下部から出土したもので，4号石棺墓の副葬品であった可



第 74 図　鉄 器 実 測 図 (1/2)

能性が強い。現存長8.5cm，身最大幅2.8cmの大きさで，関部が最も厚く3.5mm。1のような鉄鏃が発達した型式で，三雲では同型式の小型品が加賀石Ⅰ—1とサキゾノⅠ—1の1号住居跡から出土しており，時期は庄内式（Ⅰa 期）から5世紀初頭に見られる。形態からすれば，サキゾノ出土品に近いことから，庄内式から布留古式に位置づけられる。

茎には桜巻の矢柄が残っていることから，大溝内に自然堆積したものではなく，石棺墓もしくは土壙墓の副葬品であった可能性が強い。

3は鉄鎌と思われるが，厚さ2～2.5mmの薄刃のものである。先端を古く欠損しているが現存長21.7cm，身幅3.3cmで，柄着装部には折り曲げがなく背自身が屈折している。身の破損部分が外圧によって屈曲しているので，石棺墓破壊によるものであろう。（柳田）

石　器（図版31－3，第75図）

打製石鏃　（1）黒曜石石刃状剝片の先端部をそのまま鏃の先端部とし，鏃の基部のみに調整を加える狭義の剝片鏃で凹基。先端部を欠失し現存長18.3mm，わたぐりの深さ7.6mm，幅19.4mm，厚さ2.4mm，重量0.6ｇを測る。6号石棺墓壙内出土。

削　器（2）　黒曜石石刃状剝片の両側縁を調整剝離したもので先端の一部が欠損する。現存長39.2mm，幅12.2mm，厚さ2.9mm，重量1.7ｇを測る。1号石棺墓付近出土。

石製紡錘車（3・4）　2点共に白雲母片岩製の完形品。3は，外径48.8～49.1mm，孔径5.3mm，厚さ4.6mm，重量22.2ｇを測る。各面とも研磨される。片面に細い弧線が同心円状にめぐらされるが，いずれの円弧も正確につながらず，各処でズレを生じている。また一部研磨の及ばないわずかな凹みでは細かな敲打痕が観察できる。イフ7表採。4は，全面研磨されており外径39.2～40.0mm，孔径5.5～5.8mm，厚さ4.8mm，重量14.9ｇを測る。イフ3の大溝上層出土。

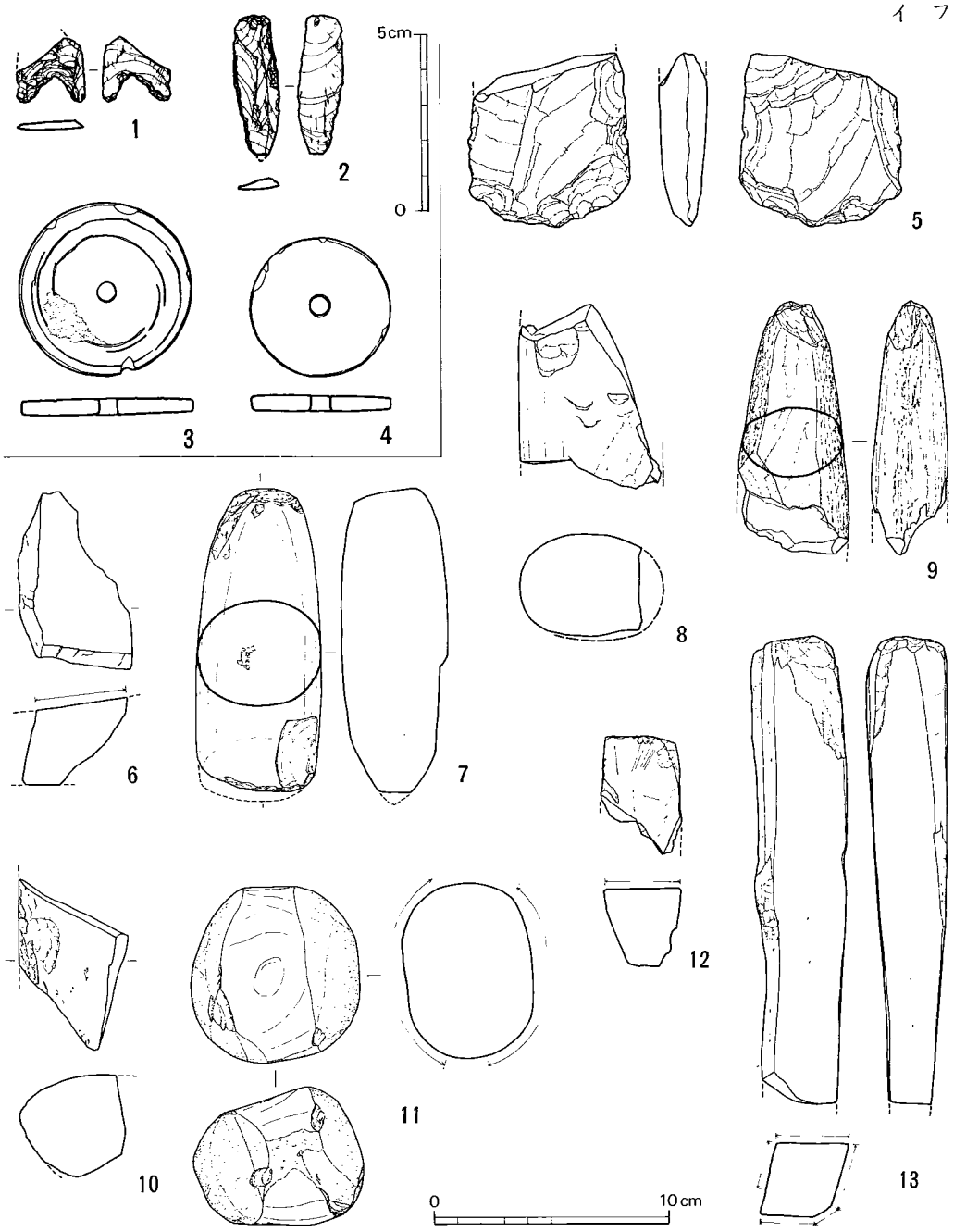
打製石斧（5）　イフ7の大溝中層出土の玄武岩製扁平打製石斧の刃部破片。

石皿片（6）　花崗岩質アプライト製の小破片で，上面はわずかに反り，平滑に磨耗している。イフ7の大溝上層から出土した。

磨製石斧（7～10）　7は蛤刃石斧で刃部先端を欠失する。現存長12.9cm，幅5.4cm，厚さ4.5cm，重量530ｇで，頭部に敲打痕が残る。玄武岩製でイフ7の大溝上層出土。8はイフ7の大溝中層出土の玄武岩製。9は敲打整形痕が多く残る頭部破片で，現存長10.8cm，幅4.7cm，厚さ3.2cm，重量188ｇの輝緑質の玄武岩製で，体部断面はやや扁平。イフ7の大溝上層出土。10は蛤刃石斧片であろう。玄武岩製でイフ3の大溝上層から出土した。

すり石（11）　玄武岩製で敲打によって不整形の球状にし，掌中に握って敲打・磨研に用いたものであろう。上下両面の中央部は帯状に顕著な磨耗があり，両面を継ぐ面は磨耗しているが，敲打痕が若干残る。その他の面は手ずれで磨滅する。4号石棺墓墓壙内から出土した資料で，重量は538ｇを有す。

砥　石（12・13）　2点共イフ7の大溝中層出土の粘板岩製砥石である。



第 75 図 石 器 実 測 図 (1/2,1/3)

これらの石器のうち，1・2・5・6は縄文時代後期後半～晩期の所産と考えうる。11は弥生時代前期頃，3・4の紡錘車は弥生後期以降，12・13の砥石は弥生後期後半頃であろう。磨製石斧は大溝上層出土だが，土器よりも溯る時期の所産かも知れない。（小池）

(2)　石棺墓群

イフ—3では，幅5mのE17からE25の範囲で箱式石棺墓が9基検出された。9基の石棺墓のうち水路工事で破壊される1号～6号石棺墓を完全に調査し，保存できる7号～9号石棺墓は表面的な調査のみで埋戻した。

石棺墓は，弥生中期に掘られた大溝が，弥生終末頃完全に埋没した後に掘込まれている。石棺墓には重複するものがあり，中には古い石棺墓を破壊しているものさえある。

石棺墓の切合い関係は次のとおり。

3号　←　4号　　6号　←　7号　←　8号　→　9号　（古→新の関係を表わす）

（柳田）

1号石棺墓（図版33－1，第76図）

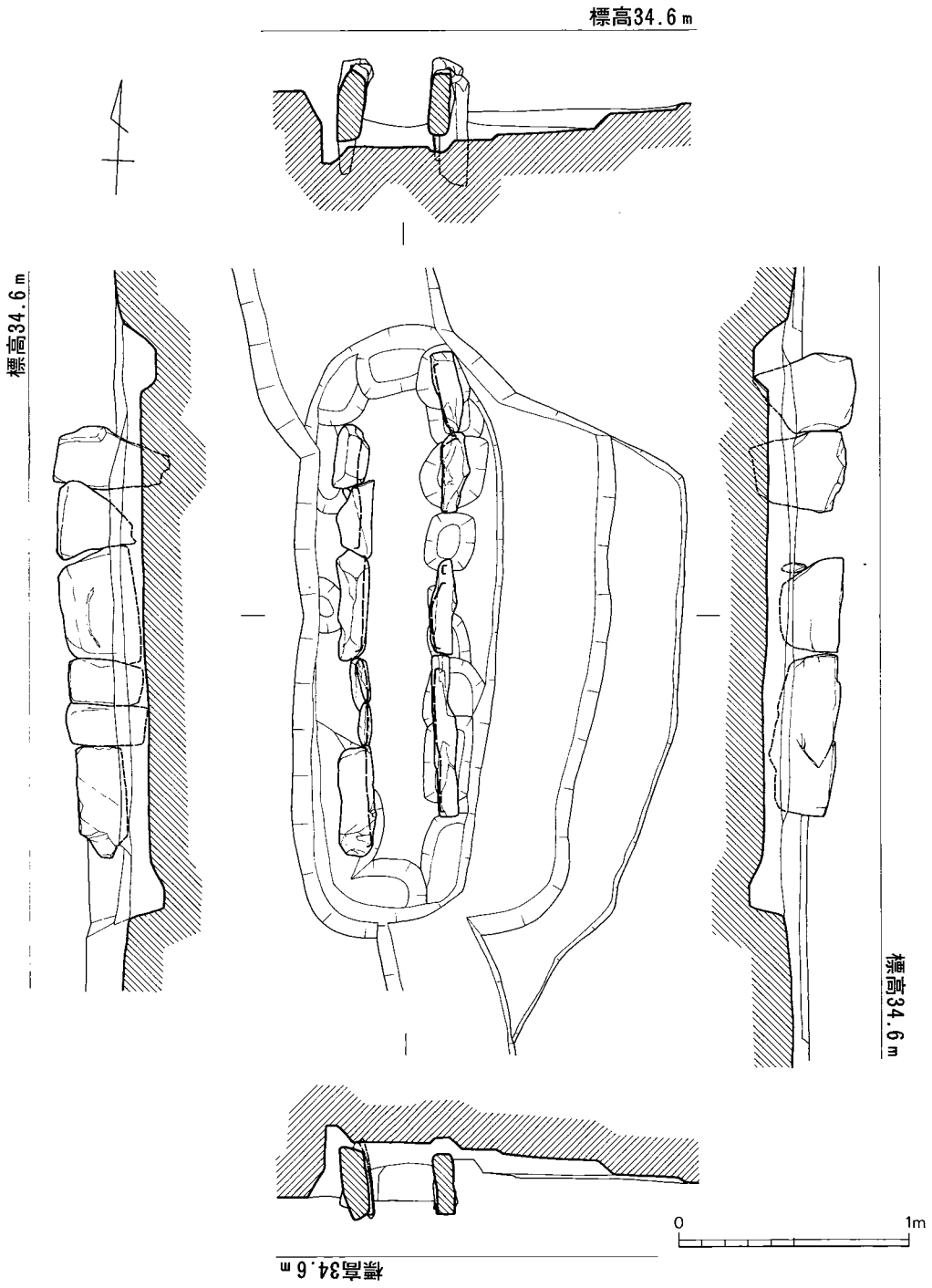
石棺墓群のなかでは東端に位置する石棺で，南北に流れる溝によって削平を受け小口石も欠失する。墓壙の上面については詳かではないが，下部で確認する掘り方からみて長さ2.7m，幅1m前後の長楕円形状を呈していた可能性がある。墓壙内に構築された石棺は両側壁のみ残されていたが，東側に扁平な花崗岩4個，西側に花崗岩4と結晶片岩1個の石材が並び，内法の幅は南側30cm，北側35cmで，主軸方向N1°30′Wを示す。石材の裾え方では北側が南側に比して深いにもかかわらず上面の高さが約10cm北側が高いことからみても，副位は北で棺内の高さは20～30cmを上まわらないであろう。小口石の抜き痕等の配置から，両側壁が各6枚で小口を挟み，内法の長さは約2mであろう。なお東側壁にも結晶片岩の破片が一部残ることからみて，両側壁共に花崗岩と結晶片岩が共存していたと考えられる。

2号石棺墓（図版33－2・3，第77図）

1号石棺墓の南西側約3mのS440・E20に設まれた小児石棺墓で，3・4号石棺墓と近接するが墓壙の切り合い関係はない。石棺は長さ1.45m，幅0.7～0.9mの隅丸不整方形の墓壙に，長さ85cm，幅32cmの結晶片岩板石を敷き，緑簾片岩板石を北小口に2枚，南小口に1枚と，北側緑簾片岩・南側結晶片岩で各2枚の両側壁を配して組み合わされる。組み合せ方は両側壁が小口石を挟む形になるが東壁は寸足らずの状態で，南小口に至っては隙間があるため小さな片岩と淡黄色粘土で充塡している。蓋石は緑簾片岩2と結晶片岩1の3枚が並べられ，棺内は長さ87cm，幅28～33cm，高さ17cmの大きさで，主軸方向N27°30′Eを示す。棺内に流れ込んだ粘土が多く，赤色顔料もみられたが，やや幅広な北側が頭位とみられる。棺内外共副葬品の出土はなかった。（小池）

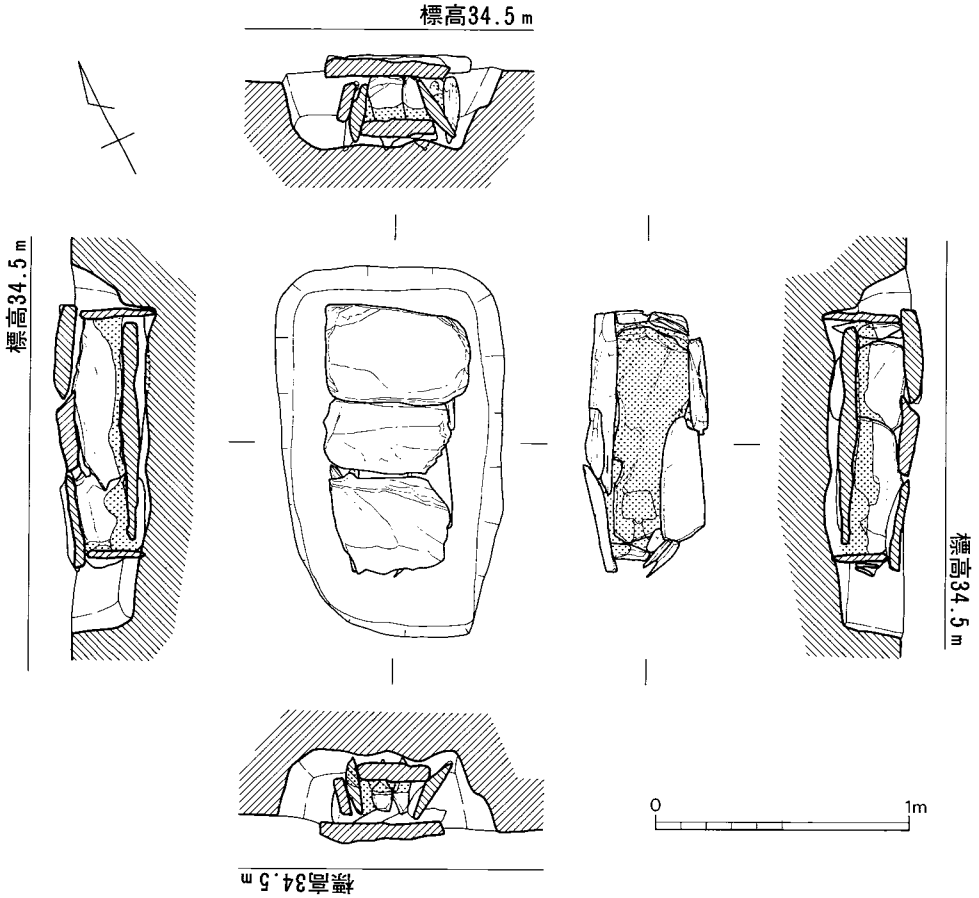
3号石棺墓（図版34，第78図）

調査区南西部に検出した箱式石棺墓で4号石棺墓を破壊して構築したものと思われる。墓壙は4号石棺との切り合いのため明確ではない部分もあるが長さ3mほどの隅丸長方形を呈するも



第 76 図　1 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

イ　フ



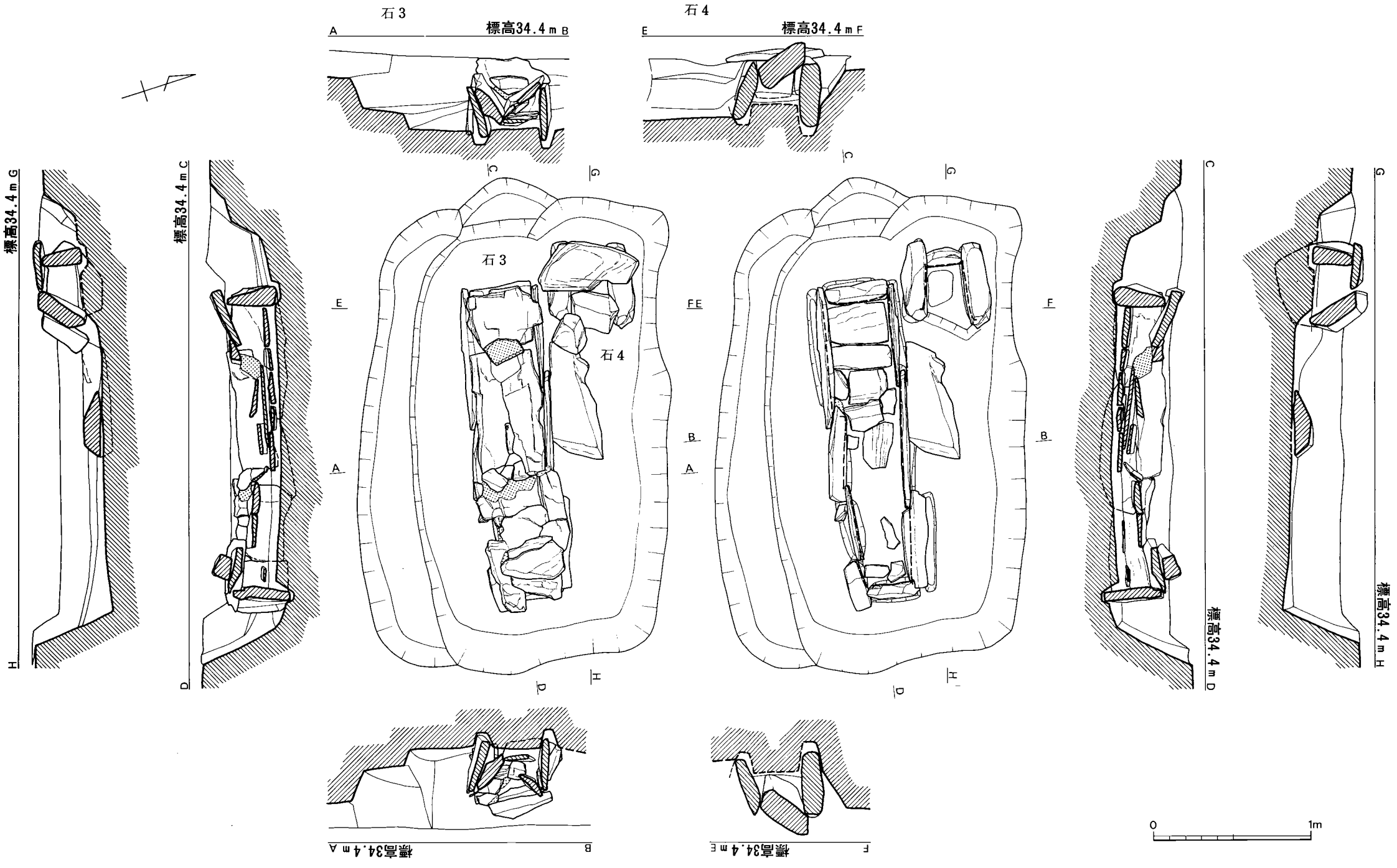
第 77 図　2 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

のと推測される。石棺は東西両小口に各1枚，南側壁に4枚，北側壁に3枚の石材を両側壁が小口を挟み込むように組み合わされている。蓋石には板石4枚が使用され，その間隙は粘土による目貼りが施されている。東西両端の蓋石上に置かれた2個の花崗岩以外は片岩質の石材が使用されている。蓋石は軟弱でもろい材質のため中央部が棺内に落ち込んだ状態となっていた。棺の内法は主軸長179cm，西側幅42cm，東側幅29cm，深さ25cmを測り，主軸方向はN72°Wを示す。床石は西半部分に整然と敷かれており，赤色顔料塗布の痕跡が認められる。頭位は西側と推定される。　（平田）

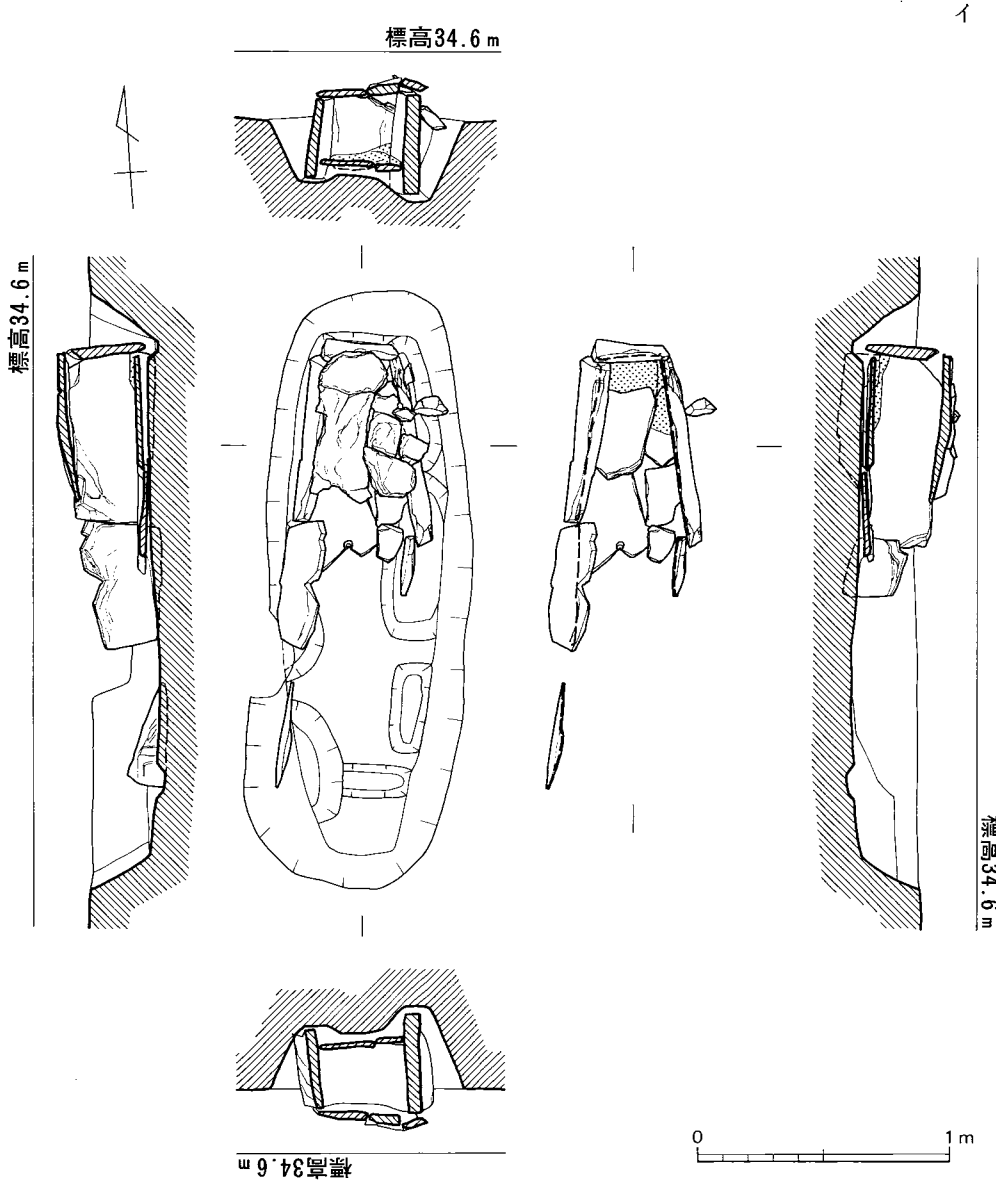
4号石棺墓（図版34，第78図）

4号石棺墓は，弥生終末頃埋没した大溝上に営まれ，その後埋葬された3号石棺墓に大半を破壊されている。墓壙の形態や規模は不明な点が多いが，長さ2.9m，西側幅90cmの大きさであるが，深さは大溝外の地山から石棺床面まで55cmある。

石棺は，西側の小口・両側壁・蓋石・床石の石材各1枚のみが原位置に残っている。そのほ



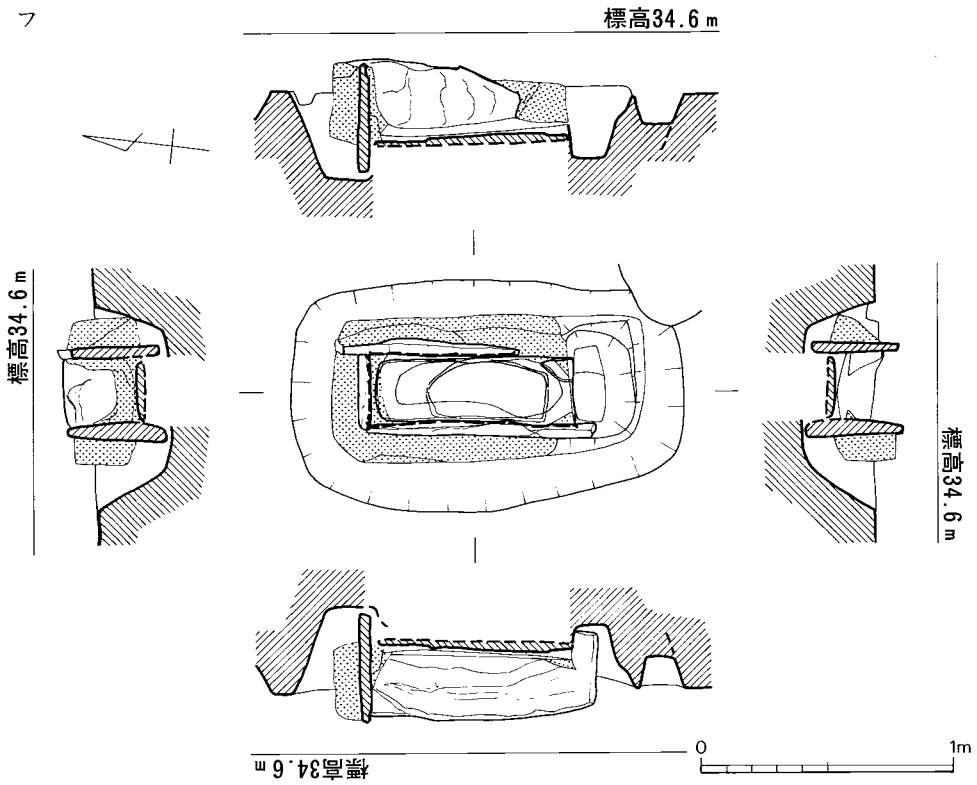
第 78 図　3・4 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)



第 79 図　5 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

か原位置に近く倒れているものに，南側壁の1枚があり，3号石棺墓の北側壁に接している。3号石棺墓構築の際に押倒したものである。4号石棺の石材は，西側小口のみ緑簾片岩質のものを使用しているが他は花崗岩が多く，新しい3号石棺が緑簾片岩を多く使用しているのと対照的である。

残存している石棺は，西小口幅23cm，残存東側幅30cmで，東側程広くなっている。他の石棺墓を参考にすると，現存しているのは足部側と思われ，石枕状に残っている床石も，枕石とは



第 80 図　6 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

置く方向が違っている。すなわち，東の頭部側の大半を破壊されてしまったのである。このように考えてくると，墓壙外の北側で発見された鏡片・鉄鏃・鉄鎌はますます4号石棺墓の副葬品であった可能性が強くなり，断定してもよいだろう。鉄鏃の型式から,サキゾノⅠ—1の1号住居跡より多少新しいIb 期(庄内新式)を4号石棺墓の時期とすることができる。　(柳田)

5号石棺墓（図版35－1・2，第79図）

1号石棺墓の西側に隣接して検出した箱式石棺墓である。石棺は長さ2.35m，幅0.85mの隅丸長方形を呈する墓壙内に構築されている。石材は北小口が1枚，西側壁は一部破壊されているが3枚だと考えられる。東側壁は北半部分の2枚のみ残存し，南半部分の棺材は南小口とともに抜きとられたものと思われる。北側小口は両側壁の外側にあり仕切った状態となっている。蓋石及び床石も北側部のみ残存する。東側壁材固定のために使用したと思われる花崗岩礫のほかは片岩質の石材を用いている。棺の内法は北側幅が25cm，深さ約25cmを測り，主軸長は 170 cm程度であったと推定される。主軸方向はN2°30′Wを示す。棺幅が南側へと広がっていることから頭位は南側だと思われる。　(平田)

6号石棺墓（図版35－1・3，第80図）

6号石棺墓は，5号石棺墓の西側に隣接するが切り合い関係はなく，北側に接す7号石棺墓

とは墓壙の切り合いから7号石棺墓より後出する小児用石棺墓である。石棺は，長さ1.55m，幅0.9mの隅丸長方形の墓壙内に構築されている。石材は結晶片岩若しくは緑簾片岩の板石を用い，西側壁に長い一枚石を，東側壁には2枚の板石を並べて，各1枚の小口石を挟むように組合せられ，更に外側を10cm程度の厚さの粘土で固定されていたが，蓋石及び南小口石と南寄りの東側壁は抜き取られている。棺内には一枚石の緑簾片岩が敷かれ，棺の内法は長さ80cm，幅27cm，深さ25～30cmを有し，主軸方向はN7°30′Wを示す。棺内敷石上に赤色顔料が残存し南寄りが多めで，敷石は南側がやや幅広であることからみて，南側が頭位であったと推定される。棺内外から何らの副葬品も出土しなかった。（小池）

7号石棺墓（図版36－1，第81図）

7号石棺墓は，調査区の北側に位置し8号石棺墓の墓壙の東側を切り，6号石棺墓に墓壙の南側を切られて検出された小児用箱式石棺墓である。

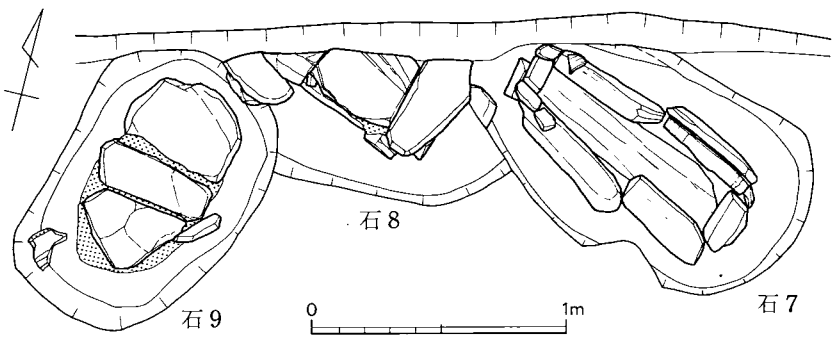
墓壙は北西側が調査区外へ広がるが，ほぼ1.4m×0.75mの大きさの隅丸長方形を呈し，底面はほぼ平坦で12cmの深さが遺存している。石棺は墓壙内のほぼ中央に主軸方向をN67°Wに向け，頭位を南東にとり埋葬されている。

石棺はすでに蓋石が除去されていたが，小口に各1枚，両側壁にほぼ同じ大きさの各2枚の石材が使用されている。床石はなく，わずかに両側壁が小口を挟む形状をなす。石棺の内法は主軸長90cm，西側幅18cm，東側幅25cmを測る。南側壁の西側1枚のみが花崗岩を使用し，他は片岩質の石材を使用している。西側の小口石と側壁石の上には蓋石の調整に使用されたと思われる拳大の石が存在する。石材の組合せは雑で石材間の密封にはわずかの粘土がみられた。

8号石棺墓（第81図）

8号石棺墓は，7号・9号石棺墓に墓壙の東側・南西側を大きく切られて検出された箱式石棺墓である。大半が調査区外に広がり，埋め戻して保存されたため全容を明らかにせず，内部も不明であるが，小児用箱式石棺墓と想定される。

墓壙は南側の一部のみ検出したが，約10cmの深さで遺存し隅丸長方形を呈するようである。



第81図　7～9号石棺墓実測図（1/30）

石棺の主軸方向はほぼN68°Wで，蓋石3枚と東側の小口石1枚，南側壁の側石2枚を確認した。石材は東端の蓋石に花崗岩が使用されている他は片岩質のものである。蓋石は石材の長辺を両側壁に渡すものと，わずかな差ではあるが短辺を渡すものがある。石材間の密封には粘土が使用されている。9号石棺墓の墓壙上端にわずかにかかって存在した石材は，8号石棺墓に付随するものと考えられるが用途は不明である。

9号石棺墓（第81図）

9号石棺墓は8号石棺墓の墓壙西側を切って検出された小児用箱式石棺墓であるが，保存のために蓋石を剝がず内部等は不明である。

墓壙は主軸長1.01m，幅0.69mの大きさの中央部のややふくらむ隅丸長方形を呈し，深さは16cmで底は平坦である。石棺は墓壙のほぼ中央に主軸方向をほぼN19°Eに向け，蓋石等の状況から頭位を北にとるものと想定される。蓋石の全長は0.8mで3枚の石材が使用され，もっとも大きい北側のものが46cm×33cmを測る。石材はすべて花崗岩が使用され，石材間の密封には粘土が多量に使用されている。（丸山）

4. 小　結

イフ地区の調査は，2地区を合計しても45m²たらずの面積であったが，土器編年で不足しがちな弥生後期の壺や高杯を得ることができたし，北部九州の中心地での鏡片の時期もつかむことができた。

弥生後期の土器については，『三雲遺跡』II で報告した仲田Ⅰ—16の17号住居跡一括土器群は後期後半の好資料を提供してくれたが，これ以前の資料が欠けていた。この点大溝中層の土器は後期中頃から後半の古い時期の土器を補ってくれた。とくに後期後半の古手の高杯は，後期前半の「倭国大乱」後搬入される器種として，搬入後の型式変遷を考えるうえで貴重な完形資料となった（註11）。

石棺墓群では，4号石棺墓に副葬されていたと思われる鏡片が，古式土師器に伴うものであることが確認された。鏡片ではなく完形の鏡であったならば，弥生後期後半に副葬されるべき「長宜子孫」連弧文鏡が，鏡片として伝世されて，古墳初期に副葬される例が北部九州の中心地でも明らかになった。これまで宮の前Ⅰ式を弥生終末としていた時点において（註12），野方中原石棺墓副葬の半肉刻式獣帯鏡片を弥生終末に副葬されるとされていたが（註13），これもサキゾノ地区で宮の前Ⅰ式が庄内式土器と共伴したことによって，鏡片資料では弥生時代の絶対年代を明確にできないことが判明した。土器を伴わない鏡の資料は，日本での年代決定は慎重であらねばならない。（柳田）

第3節　番上地区の調査

1. はじめに

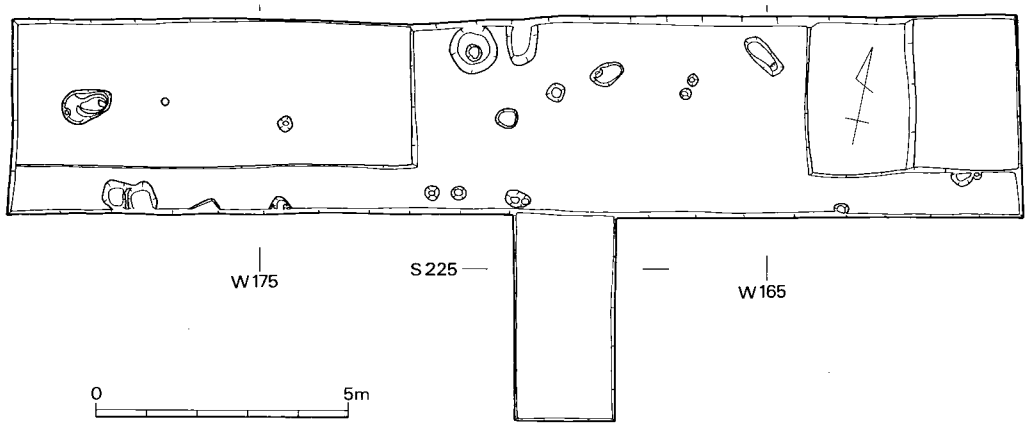
番上地区の調査は，昭和49年度に三雲地区簡易水道工事に伴うII—6地区，昭和52年度の圃場整備の水路新設に伴うII—2・3・5地区を実施している。今回報告するのは，II—5地区の東西水路（中心線S222)にかかるもので，水路は柿木—10地区に始まり，番上II—5を経てII—1で南北水路に合流する。この間約220mの長さを試掘したところ，幸いに他の地区では小ピットや小土壙などが検出されただけであったが，番上II－5地区のW160からW180の間のみ大量の土器群が発見された。水路は幅3mのものであったが，掘削などで多少拡がるものとして，この間長さ20m，幅4mのトレンチ調査を行った。さらに，土器群の広がりを確認するため，さきのトレンチに直交するT字形に幅2m，長さ4mのトレンチを南側に設定した。

調査は，昭和53年2月25日から4月9日まで断続的に実施した。番上II—5の調査は，児玉真一が主体となり，柳田康雄・木下修が担当し，小林義彦・内田恵三が参加した。　（柳田）

2. II—5の調査

(1) 遺　構

88㎡の調査面積にしては莫大な量の土器が出土している。この土器群を包含する部分は大規



第82図　番上II—5トレンチ実測図（1/150）

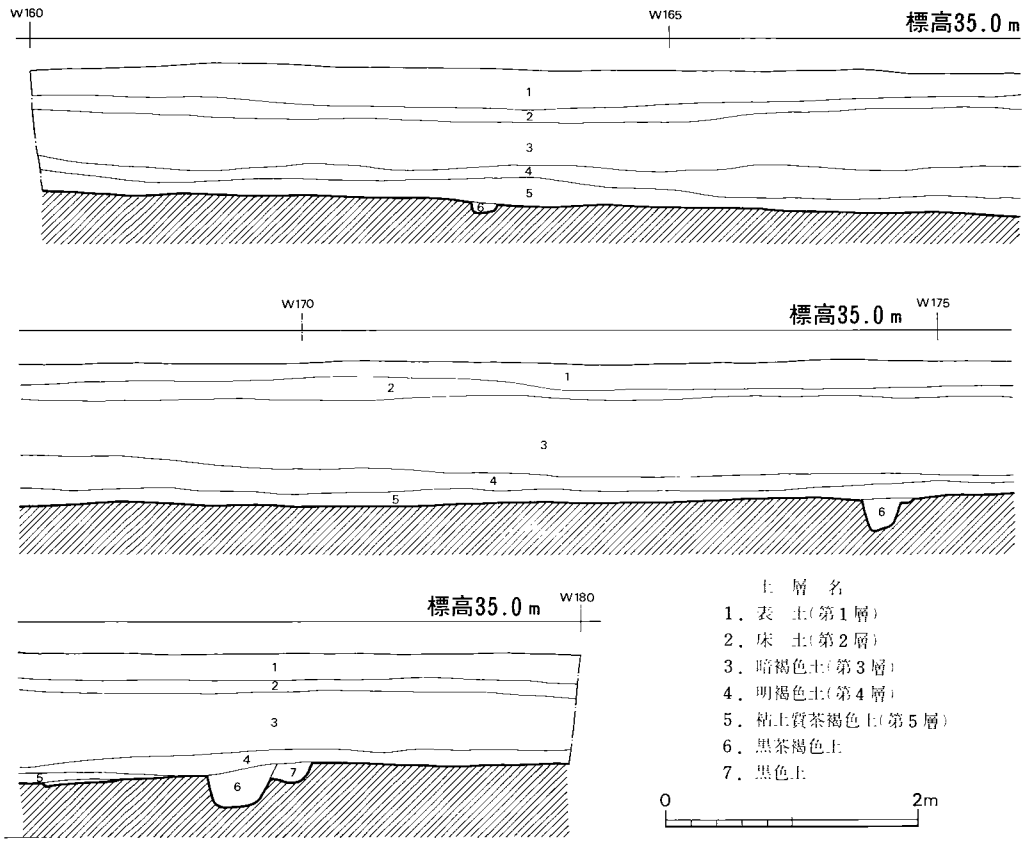
番　上

模かつ長期にわたる土器溜状遺構と考えられ，弥生時代前期から古墳時代初期までの土器が間層をはさまずに順次堆積していた。調査区中央部分を中心に東西10～15ｍの範囲に土器が集中し，土器層の厚味は中央部が最も厚く約50cmであり，東半部に比べて西半部の包含層は比較的薄かった。当時はゆるやかなくぼ地だったと思われる。調査区の土層は５層にわかれ，第３～５層が〝純土器層〟たる遺物包含層である。

第３層は最上層に若干量の土師器を含むが後期を主体とし，後期後半～終末期頃の土器が量的に多い。朝鮮系外来土器・搬入土器・鉄器や砥石を中心とした石器が出土している。

第４層は中期を主体とする層で，最下部にいわゆる亀ノ甲タイプの甕形土器や前期の土器を若干量含む。朝鮮系外来土器を含むが，搬入土器と思われるものはない。第３層の一部・第３層下部としてとりあげた土器はこの層に帰属するとみてさしつかえない。

第５層は上記２層に比べて土層の厚みは薄く，土器の出土量は少ない。前期後半頃の土器を含む層である。



第 83 図　II－5　トレンチ土層図（1/60）

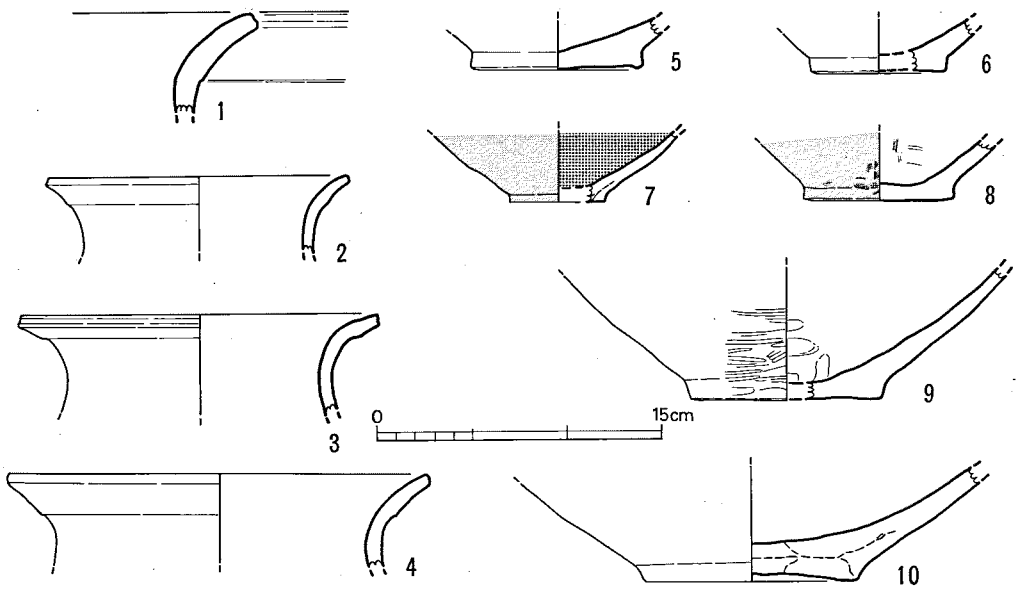
第5層を除去した面でいくつかのピットを検出したが明確な遺構としてのまとまりはない。このピット群の下限は前期後半である。

(2)　土器溜出土の遺物

壺形土器（図版38～40，第84～103図）

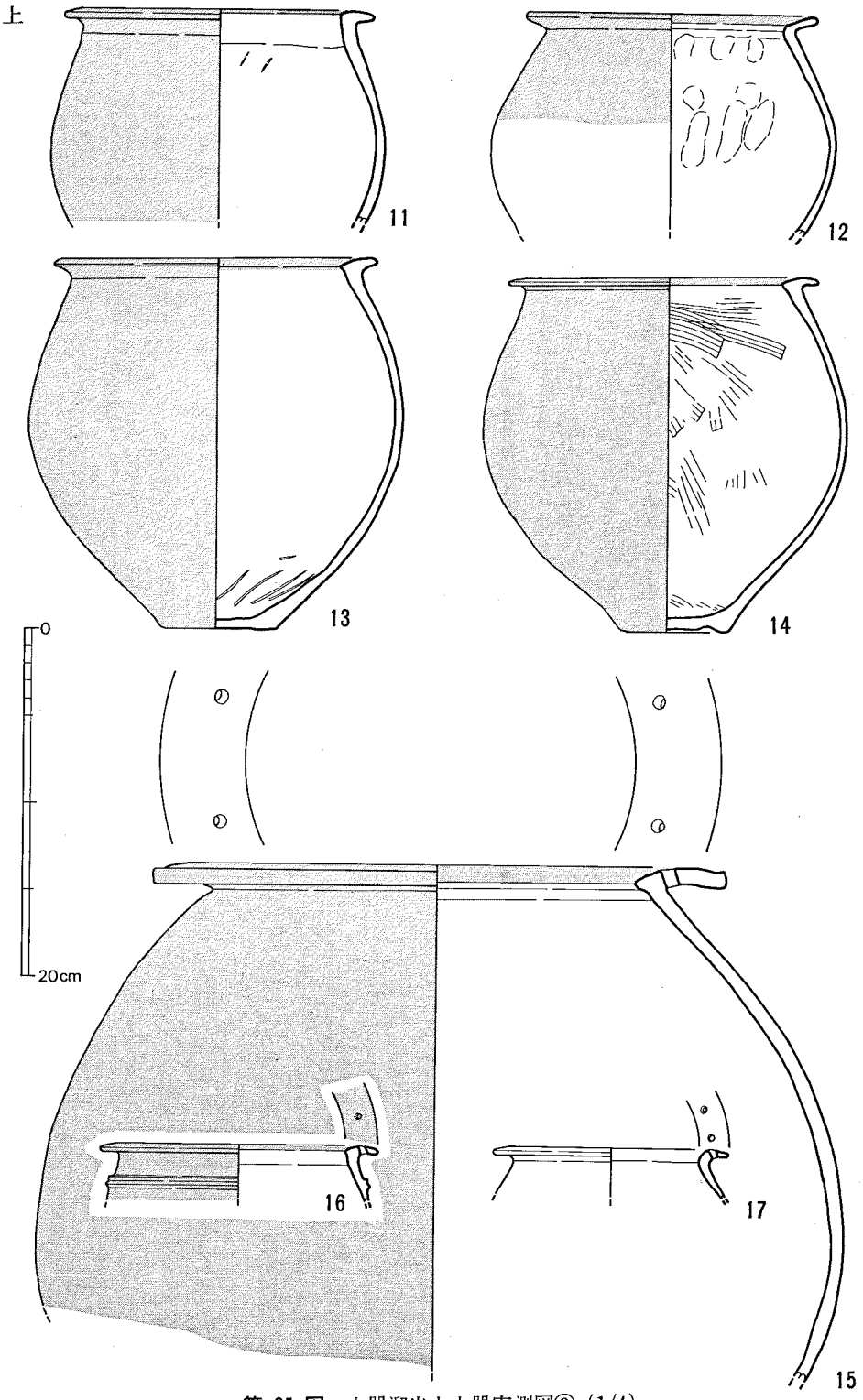
出土した壺形土器は弥生時代前期から土師器に含まれ，量的に多いのは中期と後期の土器で土師器に含まれるものは第3層の最上層から出土したものである。以下，記述の都合上，前期の壺を壺A，短頸壺を壺B，以下器形ごとにアルファベット表示をして説明する。

壺A（1～10）　調査区の中央から東半部で多く出土している。7は第5層から，他は4層としてとりあげた。1・9・10は大型の壺である。1は極小片で口縁部外面の段はそれ程はっきりしてはない。9は底部付近は横方向のヘラミガキを行い，内面はナデ調整である。10は上げ底気味の底部で内外面ともナデ調整を行う。3個体とも細・粗砂粒を含み，焼成は普通程度で淡褐色～褐色を呈する。3・4は中型壺の口縁部で，3の段は4に比して比較的明瞭である。4は内外面とも器壁が荒れているが3は口縁部はヨコナデ，頸部はミガいている。胎土・焼成・色調とも大型壺と同様である。2・5～8は小型壺である。2の口縁部内外面の段はあまり明瞭ではなく4と似ている。5～8の底部は胴部との境がはっきりしている。7・8は外面は丹彩され，7の内面は黒褐色を呈する。胎土・焼成・色調は大型壺と同様である。



第 84 図　土器溜出土土器実測図①（1/4）

番 上

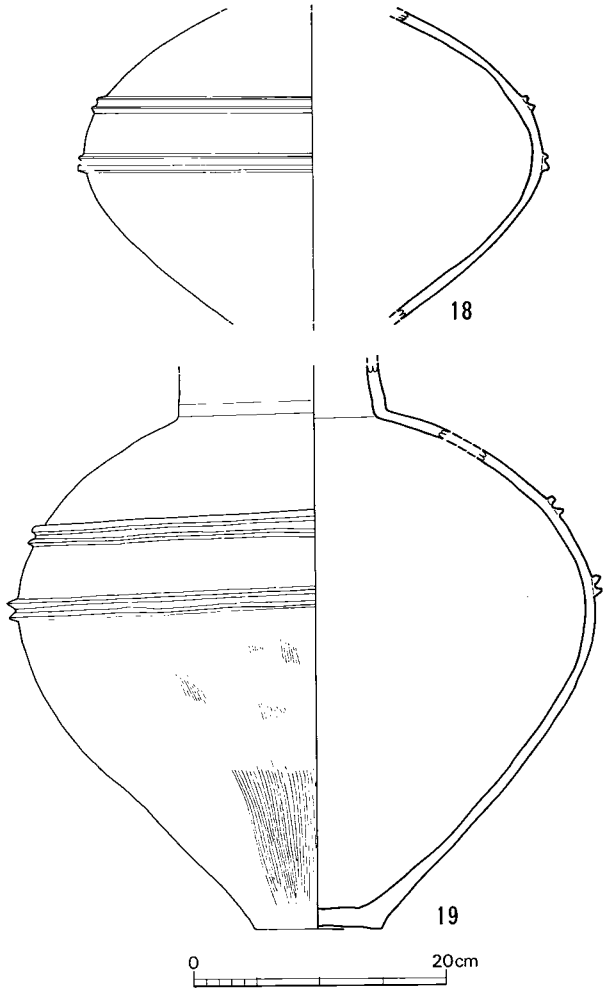


第 85 図　土器溜出土土器実測図②（1/4）

図示した壺型土器は郡の後Ⅳ－4地区（『三雲遺跡』Ⅰ）の土壙状遺構から夜臼系土器と共伴出土した壺形土器よりも新しいものである。

壺B（11～17）　第4層から出土した短頸壺で大型・中型・小型の3種がある。調査区の東半部で多く出土している。16・17は小型短頸壺で扁平な蓋をするための円形の小孔がある。16は口縁部下1cm余の部分に口唇状凸帯が一巡するが17に凸帯はない。17の方が胴部の張りが強いようである。11～14は中型短頸壺で，口縁部下に凸帯はない。15は蓋とセットになっていたようで2個1対円形の小孔がある。

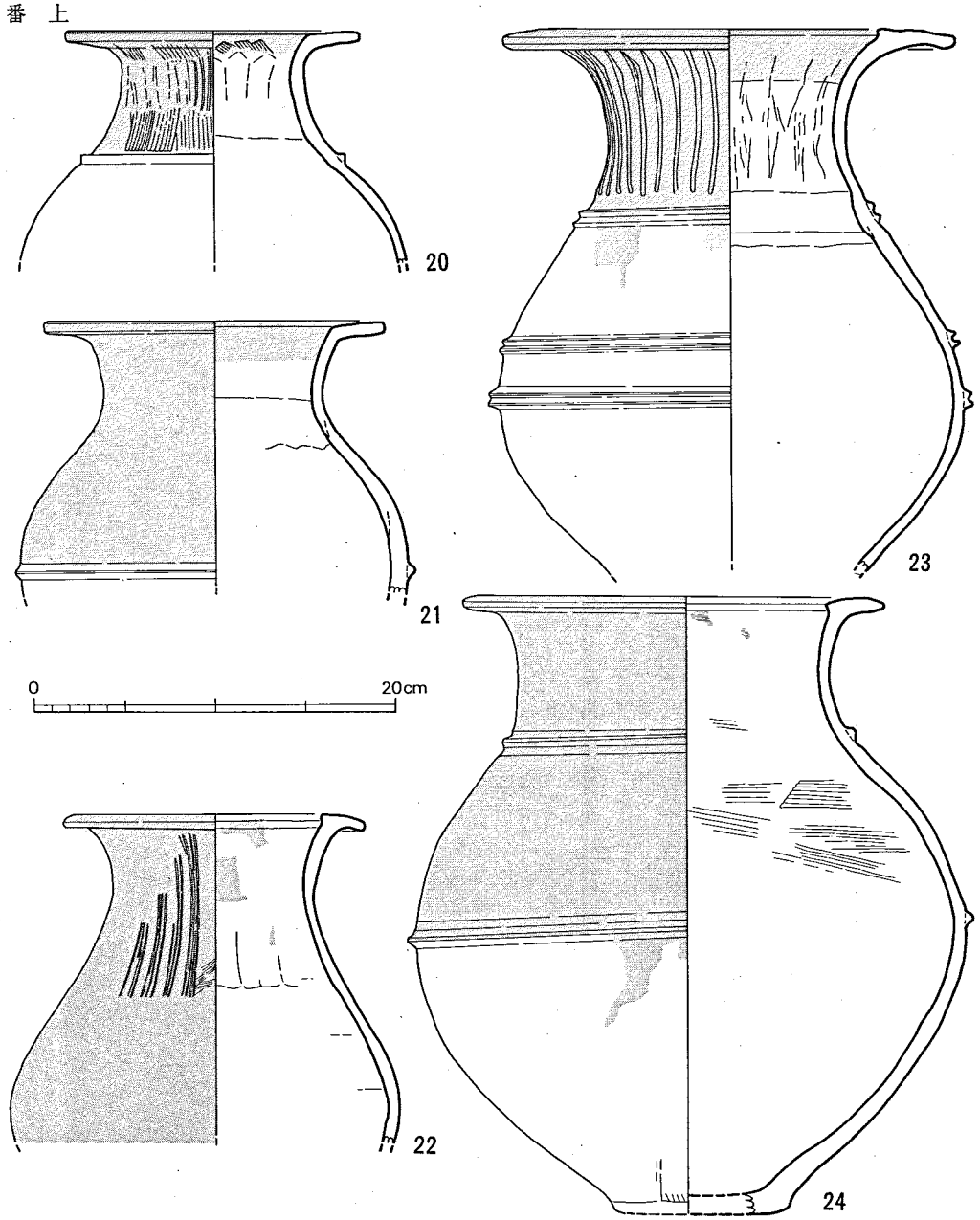
これらの土器は口縁部の形状，胴部の張りの強弱，底部の形態の若干の相違等に多小の形態差が認められ，中期後半～中期末頃のものと思われる。



第 86 図　土器溜出土土器実測図③（1/6）

壺C（18・19）　第4層からの出土である。18は中期中葉頃の壺で胴部は玉ねぎ形を呈し，口縁部の形態が不詳だが鋤先口縁にはならないだろう。19は頸部中位より上を打ち欠かれたような割れ方をしている。大形壺で，あるいは鋤先状口縁になるかもしれない。中期前半に含まれるかと思う。

壺D（20～32）　第4層から出土した鋤先状口縁を呈する壺形土器で，特大・大・中・小型の4種にわかれ，凸帯の付設や装飾の仕方に相違がみられる。20～22は小型の壺である。20は胴部中位以下が欠失して不明だが凸帯はつかないか，総数1～2本程度で，各部位には1条である。丹塗りの範囲は，内面では口縁部直下か頸部上半部まで，外面は胴部中位か凸帯までである。丹塗りの部分はミガキか暗文がはいる。口縁部の形態は，20・21は外方に折り返しただけでやや内傾し，22は外傾して内面に貼り出しを持ち鋤先状に近い。23～26中型の壺である。24は他と比



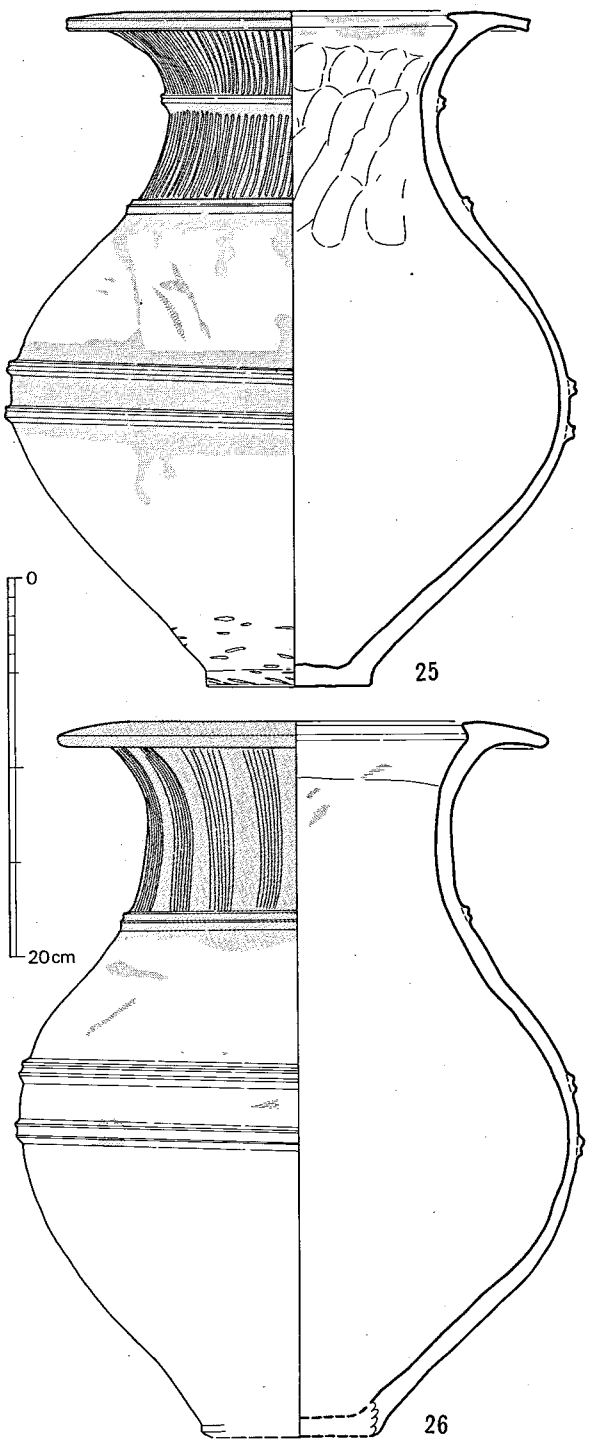
第 87 図　土器溜出土土器実測図④ (1/4)

べて不完全な鋤先口縁で三角凸帯を頸部と胴部中位に各1条巡らす。丹塗の範囲は外面では胴部凸帯までである。23・25・26は発達した鋤先口縁で，口唇状に近い台形凸帯を胴部に2条，頸部に1～2条めぐらす。丹塗りの範囲は頸部に1条の23・26は頸部凸帯まで，頸部に2条の25は胴部凸帯にも丹塗りをするといった相違が見られる。27～29は大型品である。凸帯の形態

やつけ方，暗文の入れ方，丹塗りの仕方は中型品と同様である。30～32は口縁部外径55cm前後，胴部最大径70～75cmで器高は1mに近いと思われる特に大きな壺である。大型の28をのぞいて小型～大型品には見られなかった刻み目が口縁端部に施され，頸部には2～3条，胴部には4条の凸帯をめぐらし，凸帯の数が増える。丹塗りの範囲は，外面では頸部の下位凸帯まで，内面は頸部の上位凸帯付近までである。暗文の施し方は小～大型品と同様である。

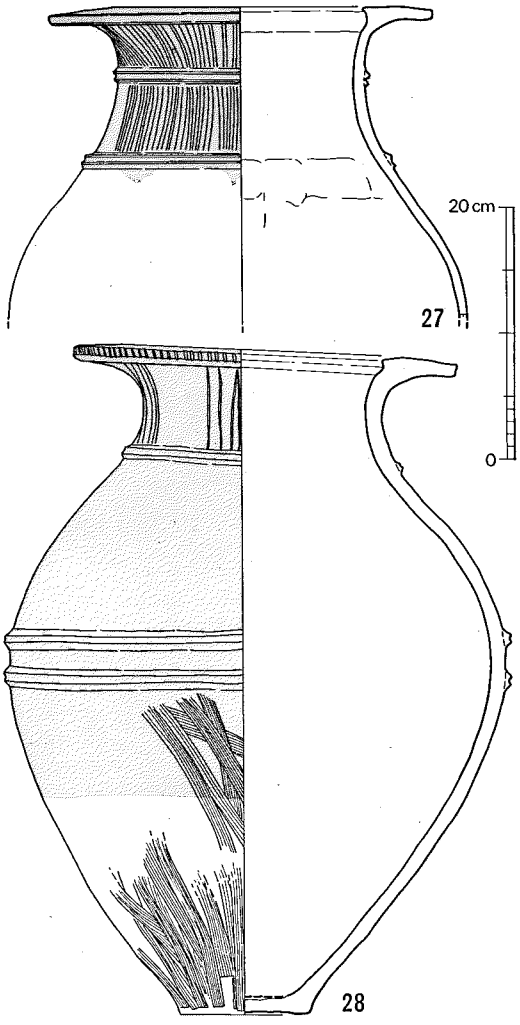
この土器は大小を問わず胎土は精良なものが多く，焼成は良好である。丹の下地の色調は丹塗り土器特有の明茶褐色～赤褐色を呈するものが多い。23・25～32は中期後半に属するが，20～22・24は鋤先口縁として未発達なものか退化したものか判断に苦しむが，22をのぞいて口縁部が内傾する傾向に新しい様相を認めるならば，より後出するものと言えよう。ただ，24は，口縁部が外傾しており，胴部の形態は20・21・24が球胴に近いのに比べてやや長胴になるようで，口縁部の未発達な壺と考えるならば，先行するタイプの壺であろう。

壺E（33）　第4層から出土した直口壺で，体部は玉ねぎ形を呈し，外面全面と内面に丹塗りされている。口縁部から頸部にかけて暗文の痕跡がのこり，それ以下はヘラミガキを行っている。中期後半か。



第88図　土器溜出土土器実測図⑤（1/4）

番　上

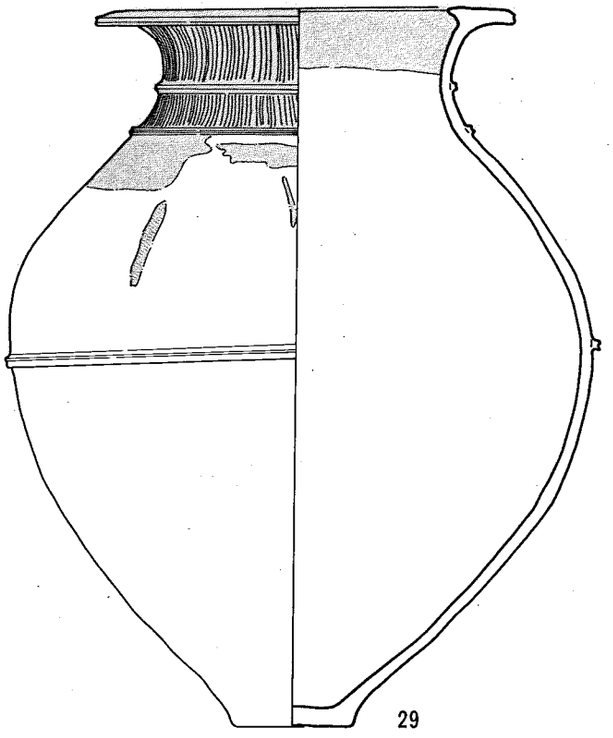


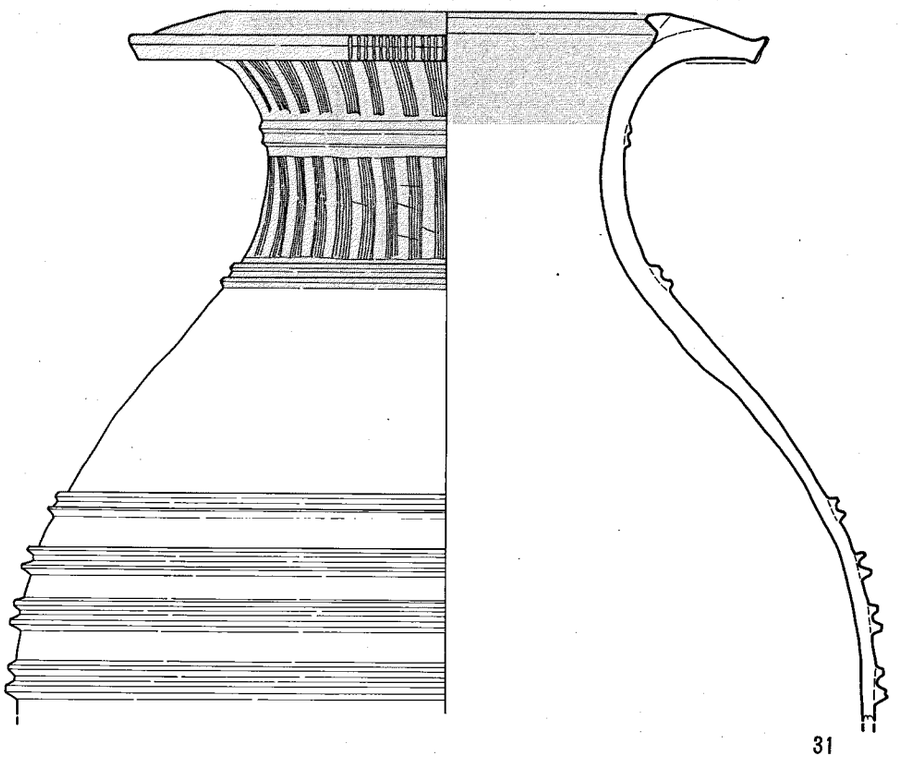
第 89 図　土器溜出土土器実測図⑥ (1/6)

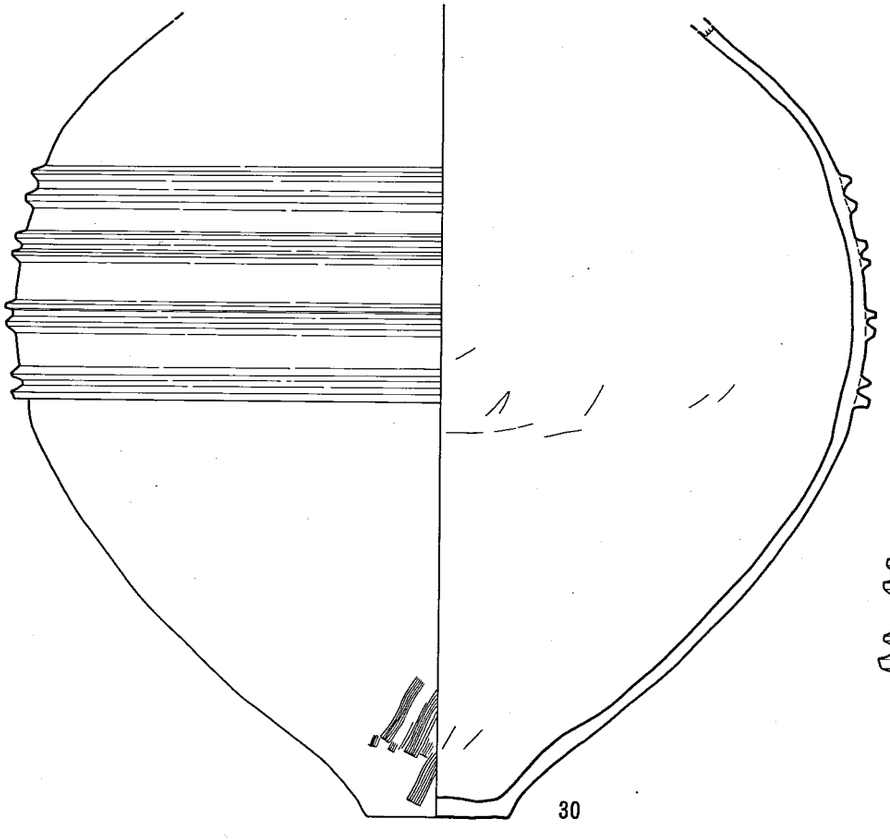
壺F（34・35）　第4層から出土した。34は2つの器種を複合してつくった多重土器の小片である。内外面黒色である。35も記述の都合Fに含める。丹塗り磨研の痕跡がのこり，2条の凸帯がめぐり，中期後半頃のものであろう。

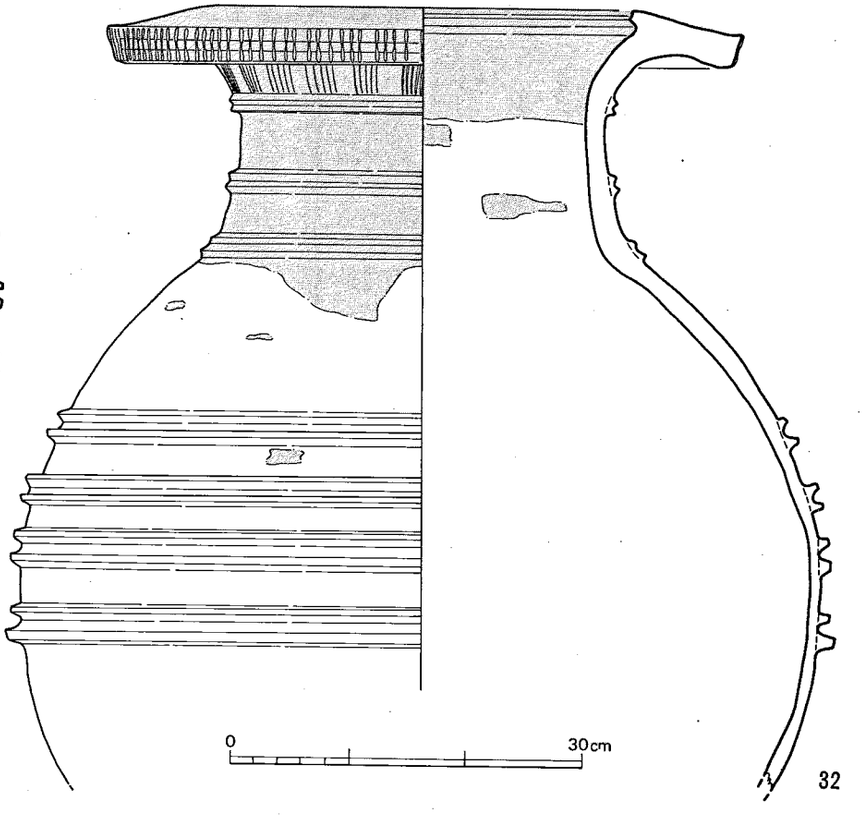
壺G　第4層（36～40），第3層（41～59）から出土している。図示したものは24個体だが，50個体を優に超す量が出土しており，なかでも後期後半以降のものとみられる個体数が圧倒的に多く，中期後半～後期初頭(前半)頃のものは明確なものとして36～40の5個体があるだけである。36・37は底部をのぞいた外部全面と袋部内面は丹塗磨研されている。頸部には3条の口唇状凸帯をめぐらし，その間にヘラ描きの暗文がはいる。37は底部付近の外面に調整具のとまった痕跡がのこり，胴部の張った安定感のある優品である。38は36・37よりも大型品で胴部中位に2本の口唇状凸帯をめぐらす。頸部～口縁部は欠失して詳細は不明であるが基本的には36・37と同様な形のものと思われる。36・37と比べて頸部が短く太くなり口縁部に比べて胴部の大型化が見られる。39は口縁部に袋状口縁特有の丸味を失って「く」状のものにかわり，稜がはいる。外面は口縁部上半は横位の，他は縦位のハケ目調整を行う。器表は化粧土をはっているのか明橙色を呈す。41～59は39で見られた口縁部「く」字化が更に進行したもので，46のように胴部の比重が大きく頸部の比重がわずかなものから，41・44のように頸部の比重が増し，49のように頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口径が胴部最大径と等しいか，凌駕するものへと発展する。

口縁部をみると，端部が丸味をもつものから，45・50のように断面が「コ」字形で面を有するもの，52・57のように端部がわずかながら外につまみ出されるもの，55・56・59のように口縁部が立ち二重口縁状で頸部との境に張り出し状の段を有し，口縁部上半が大きく外反するもの等があ

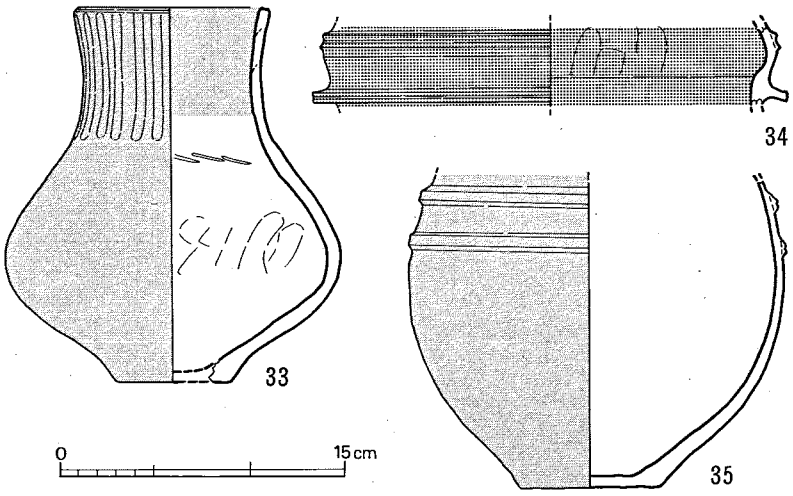








第 90 図　土器溜出土土器実測図⑦ (1/6)



第 91 図　土器溜出土土器実測図⑧ (1/4)

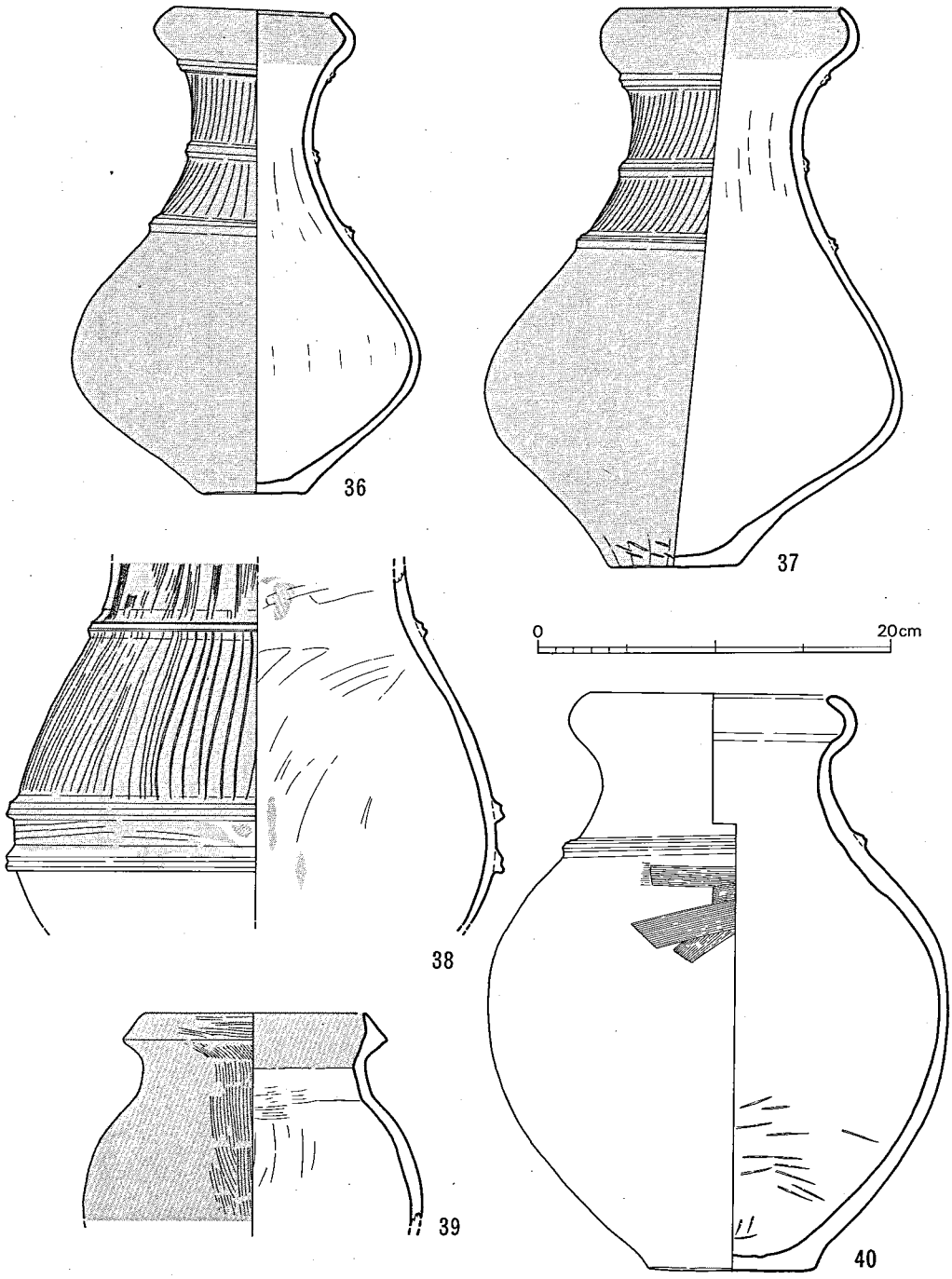
り，時期の推移とともに口縁部のバラエティが増加する。53は頸部のくびれが弱く全体にズン胴形で，石橋II—11・12地区の1号甕棺(『三雲遺跡』II）への接近を思わせる。57は図示した中では形が他と異なり球胴で底部は丸く，頸部にはしっかりとした断面台形の凸帯2本をめぐらすが胴部には凸帯はない。58は底部外面が剝落するがおそらく凸レンズ状の底部になると推定され，口径は胴部最大径とほぼ等しく，頸部より上の割合が胴部のそれにかなり近づいたものである。口縁部の形態は〝コ〟形に近いが端部がくぼむ。59はわずかな底部を有し，丸底への志向過程にある。球胴で凸帯がなく，頸部以上と胴部の割合がほぼ等しい程になっている。これらの土器は内外面ともハケ目調整を行うのが一般的であり，基本的には外面がタテハケ，内面がヨコハケのものが多い。しかし，器形や口縁部の形態の上で後出すると思われる土器のうち56～59は口縁部と頸部の屈接した部分より下位の頸部上半部はヨコハケでその後に頸部中位以下をタテハケ調整を行っている。また，後出する土器群に含まれる18は右下がり斜位のハケ目調整を行っている。

図示した24個体の土器の形態変化を大まかに示せば，36・37→40→39・46→41→50→58→53→55～57・59となるだろう。が，これは必ずしも型式変化としてとらえているわけではない。なお，58は三雲遺跡仲田I—16区17号住居跡一括出土の袋状口縁壺（「三雲遺跡」II，弥生時代後期後半）とほぼ同時期か形態・ハケ目調整の仕方からみて後続するものであろう。

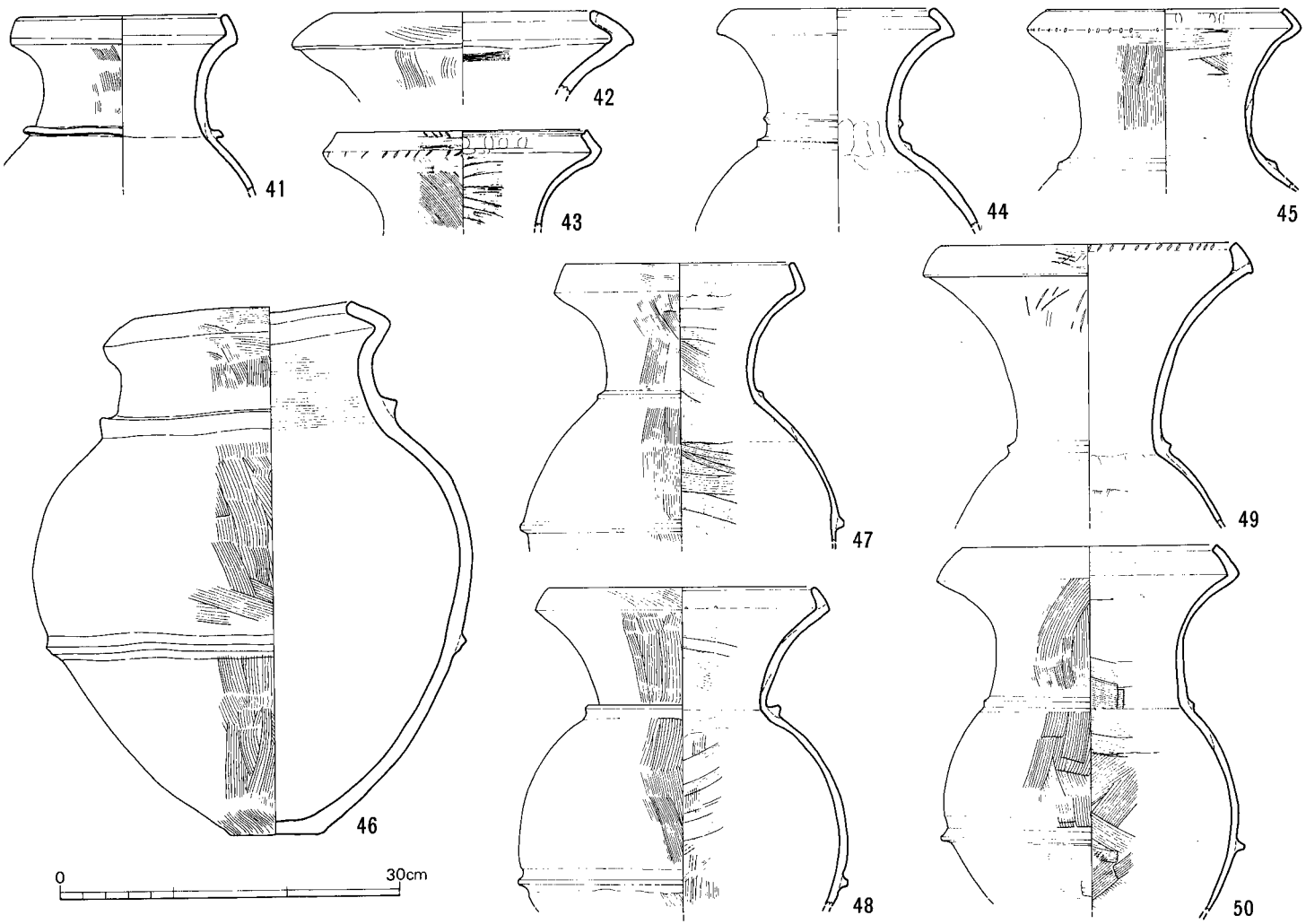
壺H（60～64）　口縁部が大きく外反して開く広口壺である。60・61は第4層，他は第3層から出土した。60・61は中期後半に属する。62は頸部以下は不明だが口縁部が大きく開く。後期後半～終末頃であろうか。63・64は同一個体である。頸部中位で外反の度合いを強め，口縁端部は下半がくぼむ。底部は平底状を呈する。後期後半頃か。

壺I（65～68）　4個体とも各々異なったタイプの壺ではあるが記述の便宜上一括して壺Iとした。すべて第3層出土である。67は2条の，他は1条の凸帯が頸部をめぐる。66は鋤先口縁の退化したものである。67・68は口縁部の肥大化した壺で68は頸部が長大化している。とも

番　上

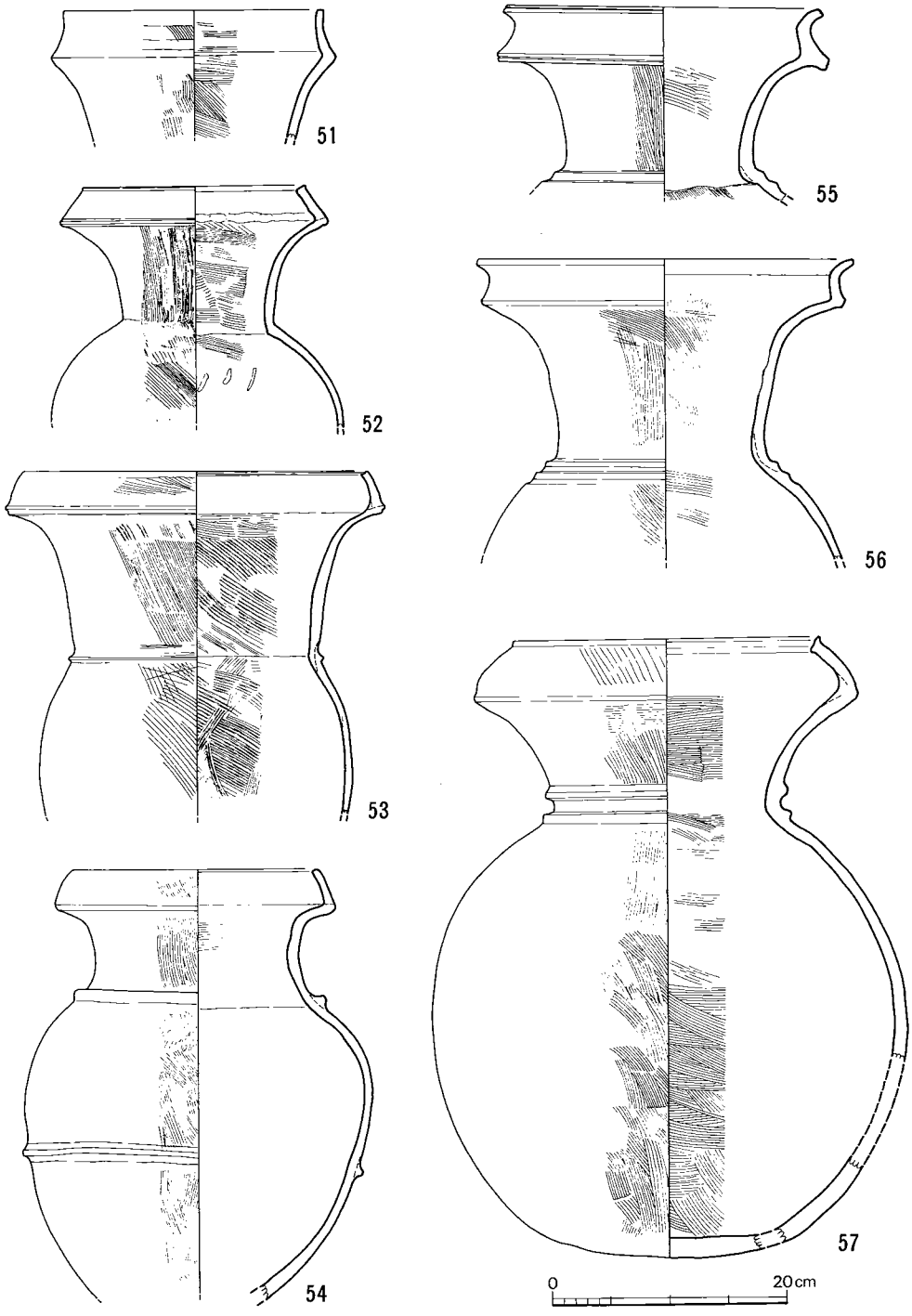


第 92 図　土 器 溜 出 土 土 器 実 測 図 ⑨ (1/4)



第 93 図 土器溜出土土器実測図⑩ (1/6)

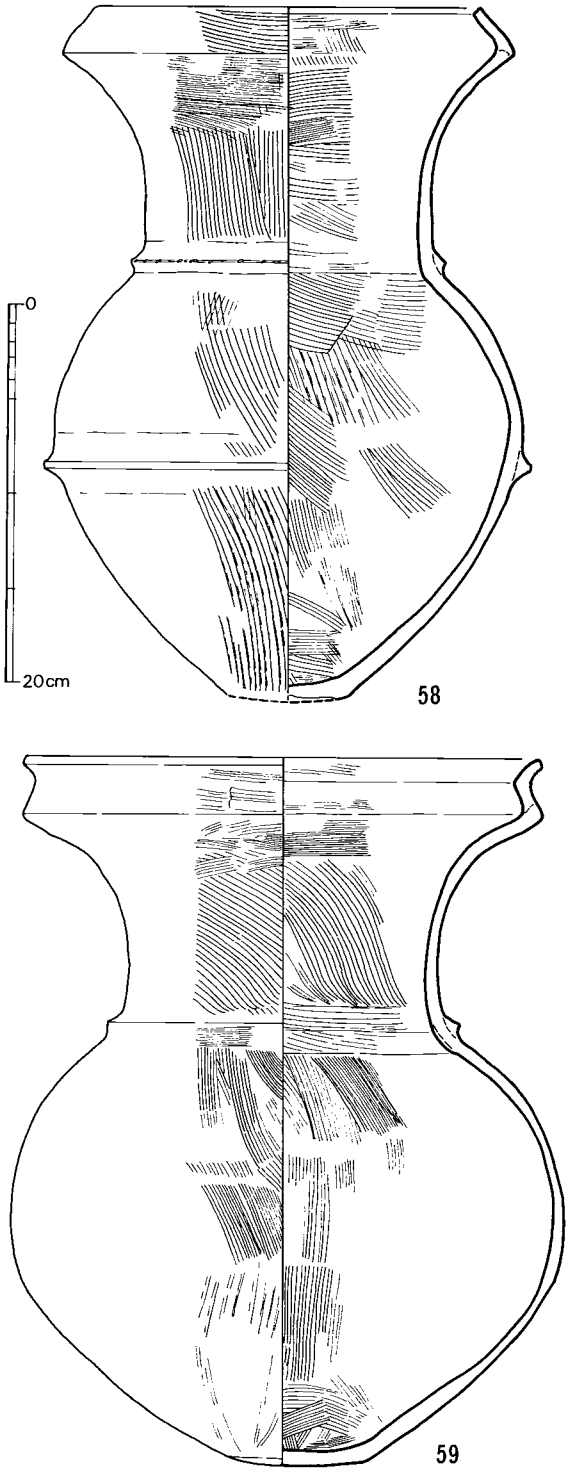
番　上



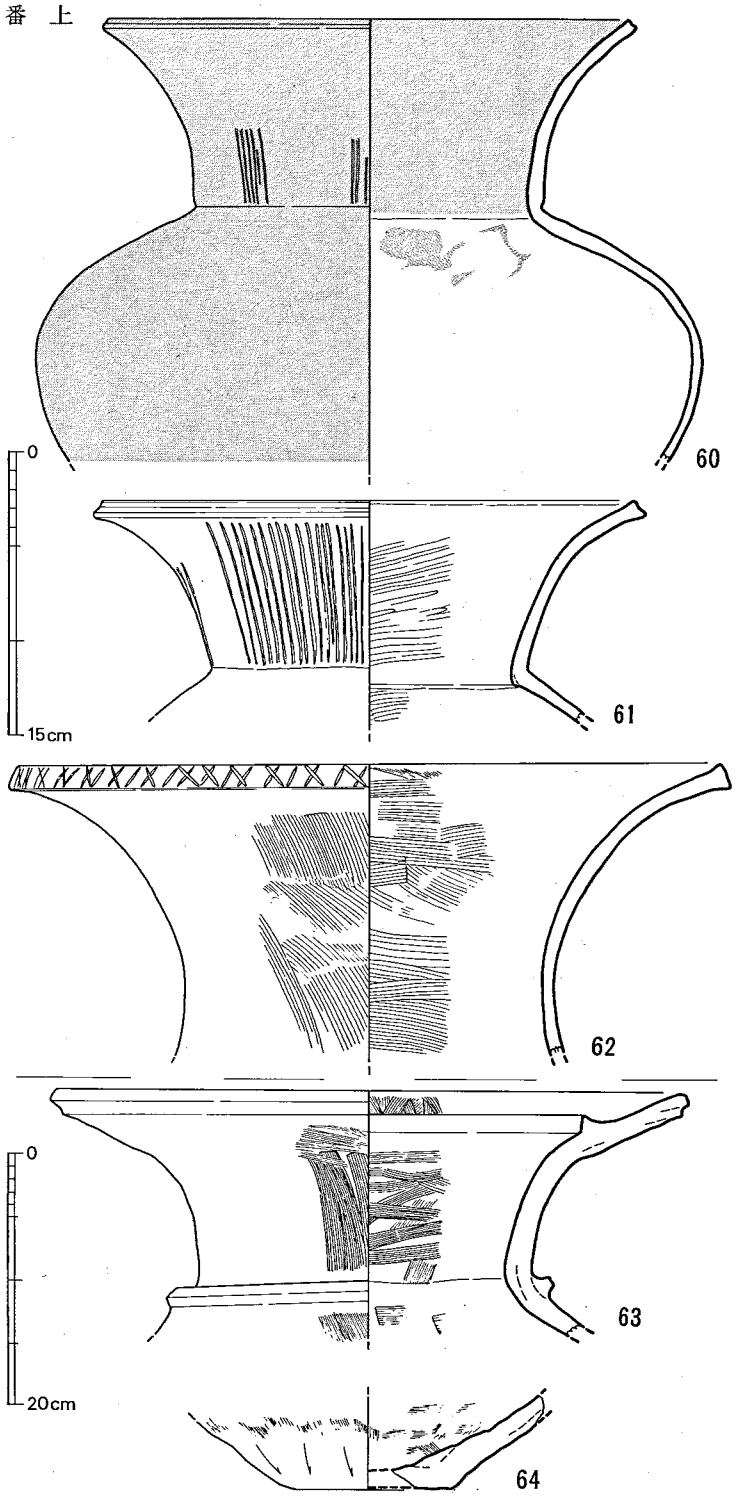
第 94 図　土器溜出土土器実測図⑪（1/6）

にハケ状器具により口縁端部を刻んでおり，三雲遺跡の既応の出土例の中では見られない器形の壺であるが，凸帯の形状については67は先述した袋状口縁壺56や後述する大型開口壺83等に，68は後述する大甕114や大型開口壺82等に近似しており，土器の様相においてはその一部に既応の出土土器の中に類似した要素を見出す事ができる。これらの土器は66がおおむね後期前半頃に，67・68は比較の資料に乏しいが凸帯の形状や刻み目を入れる所から終末頃と思われる。65もおよそその頃であろう。

壺J（69～79）　甕に類似した形態の壺で，すべて第3層から出土している。78をのぞいて口縁端部が中凹みするクセを有している。胴の形態は，78が長胴気味の他は球形に近いものと考えられる。調整は基本的にはハケ目調整を行うが，77は内外面ともナデ・ヨコナデ調整でハケ目は一切見られない。また，69は体部中位以下に右下がりのヘラケズリを行っている。口縁部の形状はバラエティに富み，71·73·77のように頸部が直立気味で中途から屈折気味に口縁部が外反し，視覚的に3～4cmの頸部を有するもの，74のように広口のもの，前記4個体をのぞいて頸部から直接外反して口唇部に至るものと大きく2つに分かれる。後者は69・75のように外反するだけのもの，70・76・79のように中位で少し外折するもの，72・74のように上部で少し外折し寝るもの等小さな相違がある。



第 95 図　土器溜出土土器実測図⑫（1/4）



第 96 図　土器溜出土土器実測図⑬（1/4・1/6）

これらの土器は底部がはっきりしないが，終末期前後の微妙な時期の所産であろう。

壺K（80・81）　80は3層下部から出土した大型の壺で，頸部は直立気味で口縁部は大きく外反し，内外面に丹塗りをする。80は3・4層から出土した大型の壺である。器形的には80が古い様相を呈するが，凸帯は胴部最大径より下位にあって垂れ下り気味であり81より新しい様相を示す。81は後期前半頃，80もそれに近い時期のものであろう。

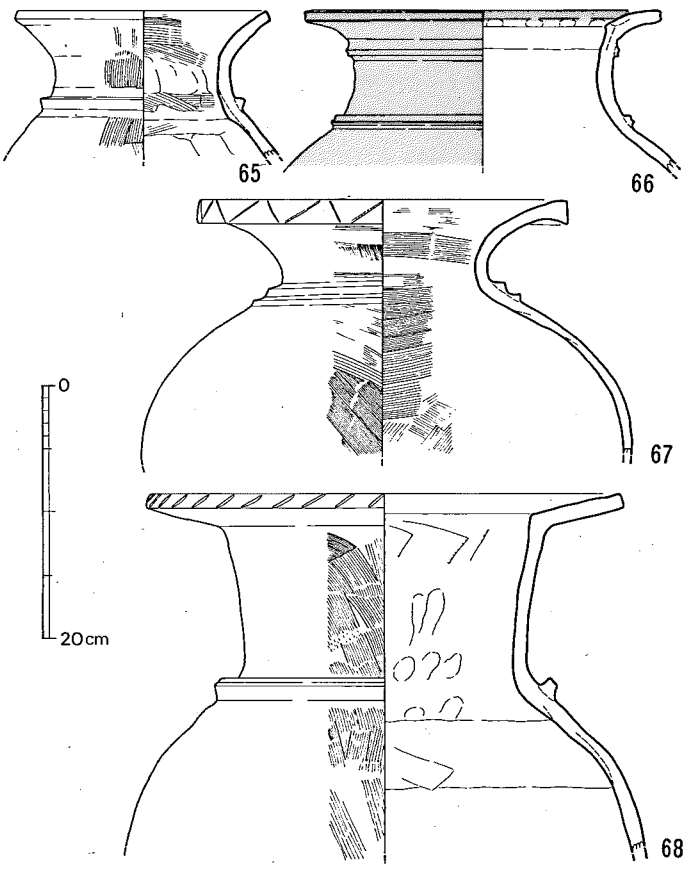
壺L（82～84）　第3層から出土した大型の壺で，口頸部が大きく開き，83・84は胴部最大径を凌駕する。口縁部内面に板状の粘土を貼りつける。82の口頸部は直線的に開口し，端部に板目の刻み目を施す。口縁内面に貼りつけた板状粘土の幅4cmである。頸部と胴部中位に断面台形の凸帯

を2条1組で貼りつける。底部は若干あげ底気味でしっかりとした平底である。83は82と比して土器全体に占める口頸部の比重が増し，口頸部は直線的ではなく中位よりやや上で外反の度合いを強める。口縁内面の粘土板の貼りつけ幅は2cmと狭まり，口唇部が肥厚する。胴部は82程には中位での張りが大きくなく全体に丸味を帯び，底部はレンズ状のものより一歩進んで丸底に近い形態である。凸帯は頸部・胴部中位やや下に各2条の三角形に近い台形凸帯がめぐる。凸帯は，82が2条凸帯であるのに対して83は基本的には一条凸帯で口唇状凸帯の間伸びした形のものであり，刻み目による加飾が82より進行する。ハケ目による調整は82と同様だが，胴部凸帯以下は極めて粗いハケ目調整で底部付近にはタタキ目がのこる。84は基本的には83に準じたもので，口頸部の比重が更に増す。頸部凸帯の断面は明瞭な三角形となり，胴部凸帯は83と同様に台形である。ハケ目は全体に粗く雑で，体部上半にはハケ目の下に右下がりのタタキの痕が残る。また，口唇部下外面にヘラによる山形の施文がうすく残る。これらの土器は82→83・84と形態変化をするが，凸帯の形状と土器全体に占める口頸部の比重に着目すれば，84は83より新しい様相を持っている。82は後期後半頃に83・84は終末期頃におかれよう。

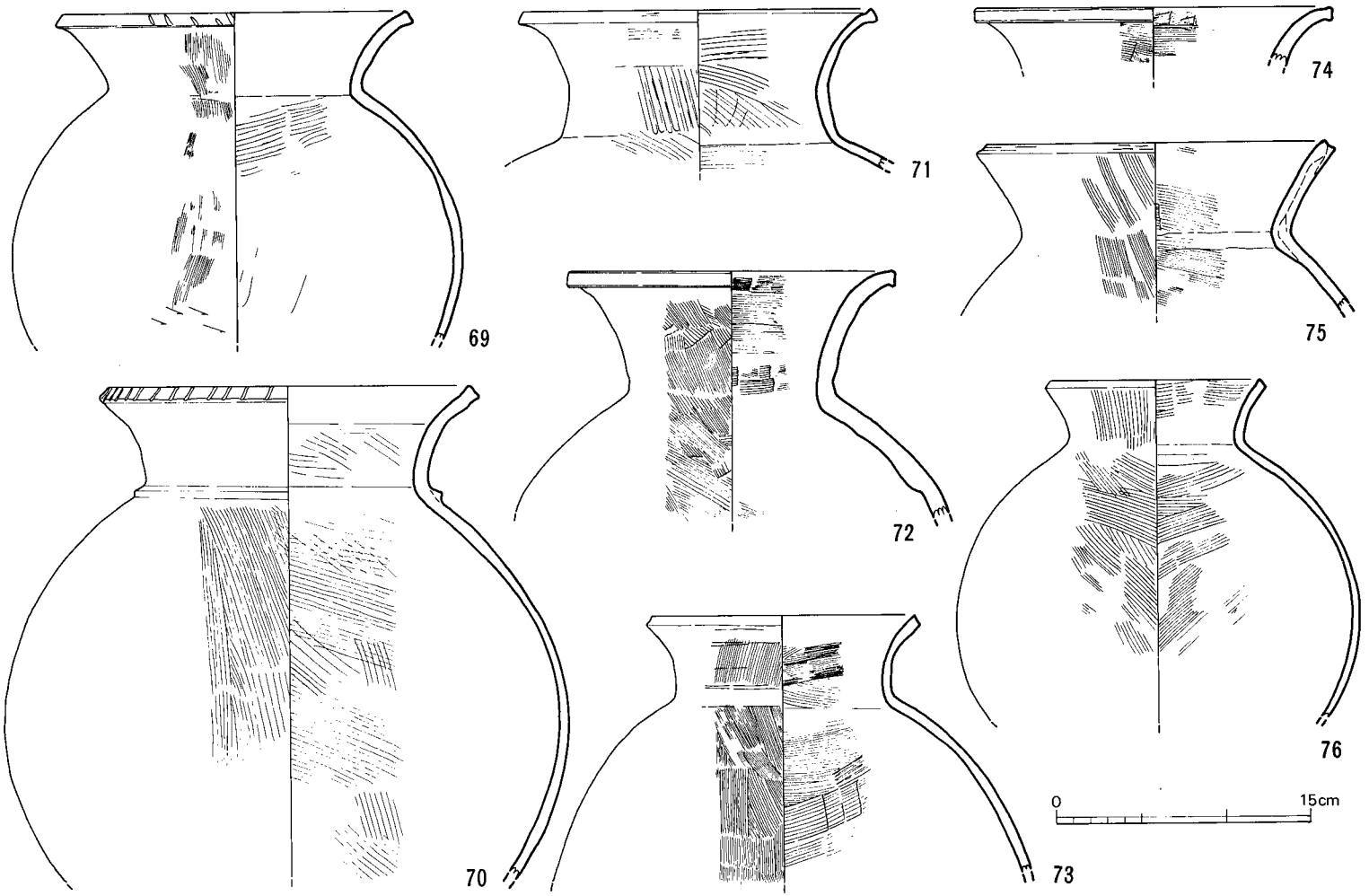
壺M（85～89）　第3層から出土した直口口縁の壺である。85～87は口径11cm前後である。86にはハケ目下に横位のタタキ目が残る。87の肩部内面はヘラによりナデられている。86はナデ肩だが，他は肩が張るようで口縁部の形態も類似する。終末期頃のものであろう。88・89は直口口縁をもつ小壺で，88は窓があく。ともに丸底を呈する。終末期前後のものであろう。

壺N（90）　第3層から出土した長頸の壺で内面は横位ハケ目，外面は縦位のヘラミガキを行う。

壺O（91）　第3層から出土した小型丸底壺で，小片の



第 97 図　土器溜出土土器実測図⑭（1/6）



第98図 土器溜出土土器実測図⑮ (1/4)

ため径は出ない。口縁部外面に暗文がはいる。

壺P（92）　第3層出土の無頸壺で残存部下端が胴部最大径になると思われる。

壺Q（93）　第3層から出土した。壺としたが全体の器形は判らない。図示した下端のヨコナデ部分の形状から判断して，ここで内側に屈折すると思われる。

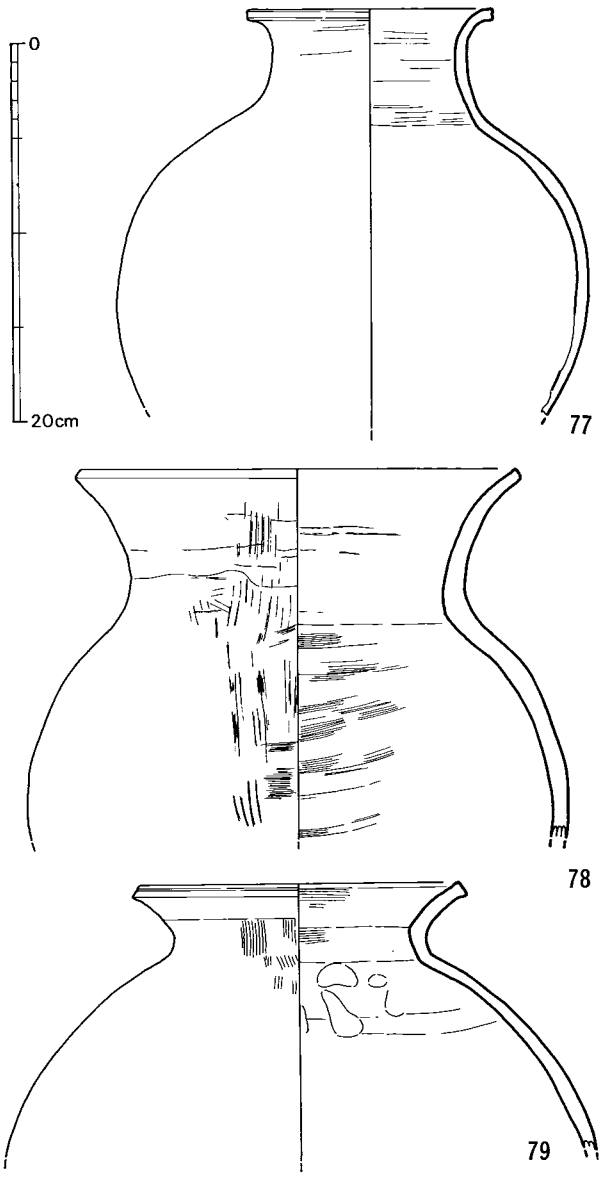
90～93の土器のうち，93は時期を判断するものを持ち合わせないが，その他は土師器に含まれよう。

甕形土器　（図版41，第104～第120図）

出土した甕形土器は前期から終末期（一部に土師器に含まれる可能性のものがある。）まであり，器形にもかなりのバラエティがみられる。

記述の都合上，長胴形のものを甕A，壺に近い器形のものを甕B，鉢に近い器形のものを甕C，終末期の大型甕をD，搬入品をEとする。

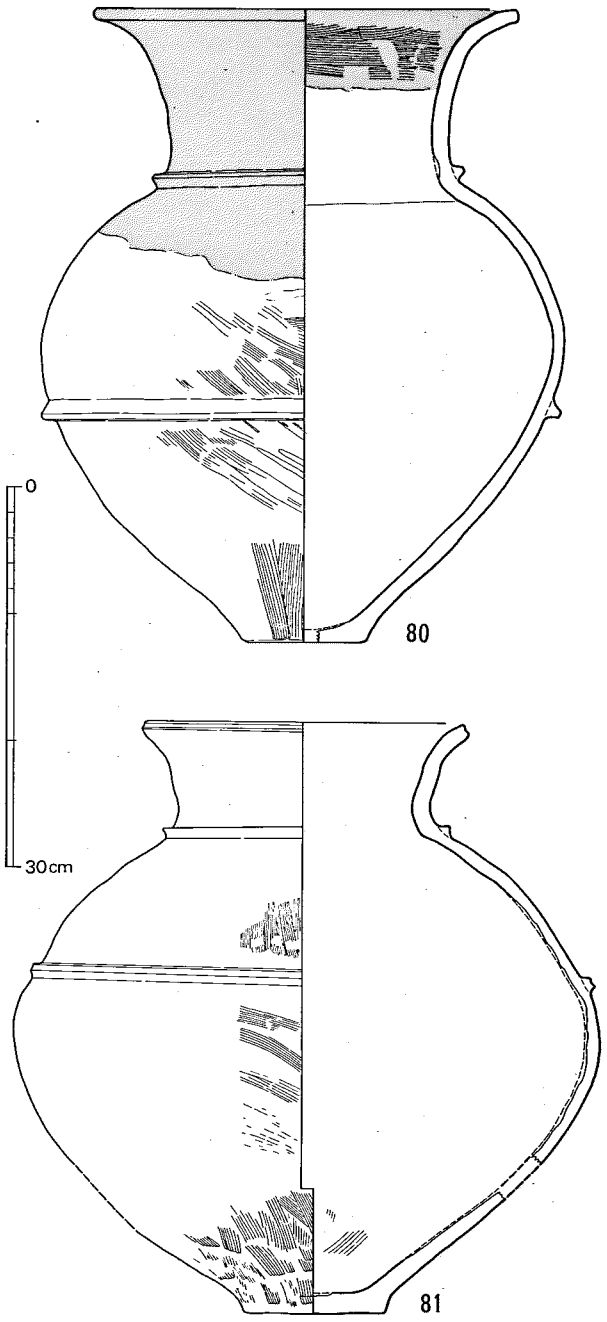
甕A　1～5・8　4層下部・5層から出土した如意状口縁の甕である。口縁部内外面はヨコナデし，胴部内面はナデ，外面はナデあるいは縦位ハケ目調整を行っている。全体に砂粒を多量に含み，焼成はふつう程度で褐色ないし暗褐色を呈する。



第 99 図　土器溜出土土器実測図⑯（1/4）

6・7・9～16　4層から出土したいわゆる〝亀ノ甲タイプ〟といわれている甕である。口縁部外と胴部上半部との凸帯間はヨコナデ，ナデ，横位ハケ目調整の3種がある。内面はナデ調整を行い，口縁部はヨコナデを行っている。胎土に多量の砂粒(石英・金雲母等)を含み，焼成

番　上



第 100 図　土器溜出土土器実測図⑰（1/6）

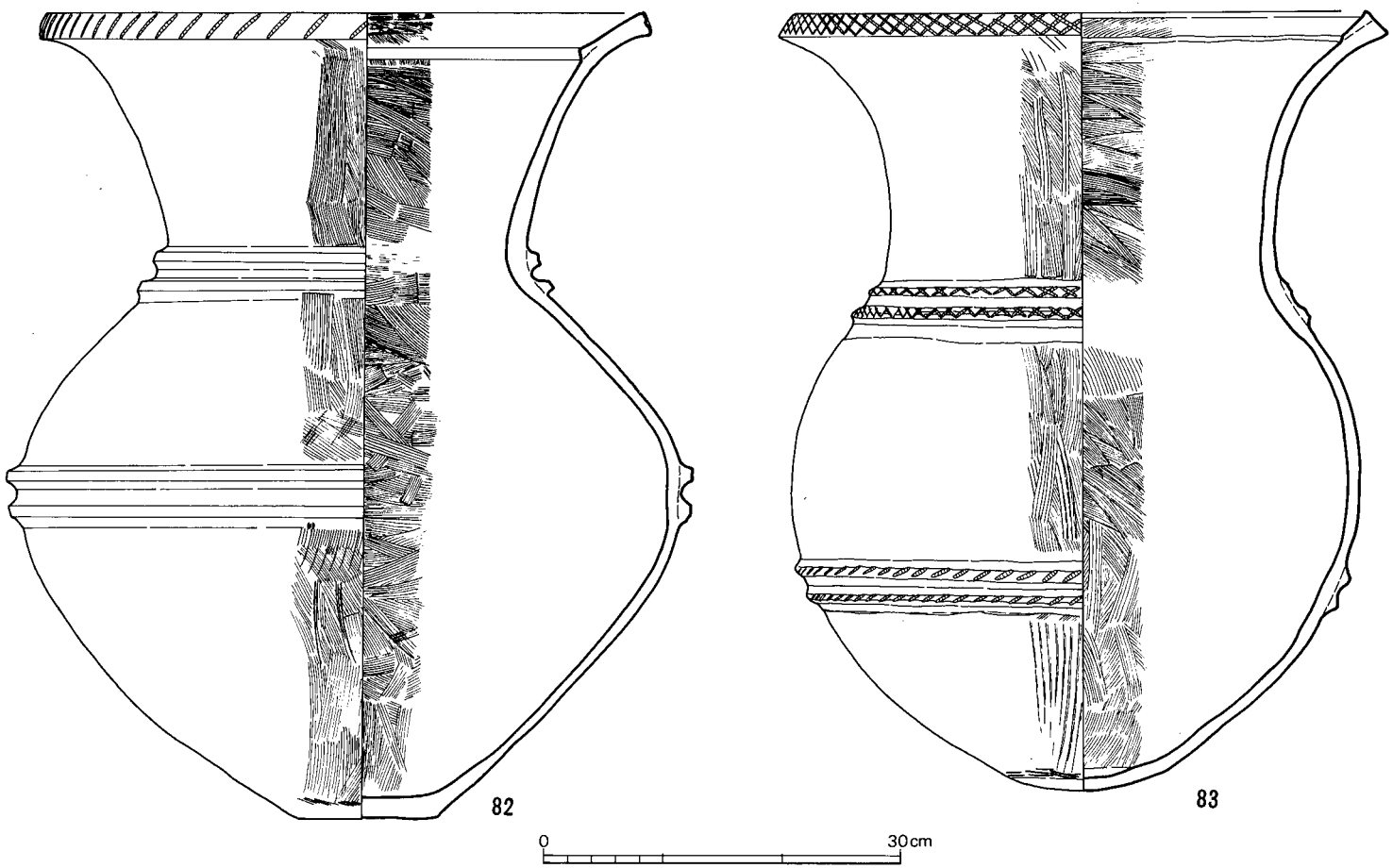
は普通程度で褐色を基調とする。

17・18　未発達な逆L字形口縁部を呈する小型の甕である。

19～29　第4層から出土した逆L字形口縁を呈する甕で，22の口縁は外側に折り返して〝く〟字状を呈する。口縁部外径20cm前後の小型甕と，25cm前後から30cm以内の中型甕とにわかれる。口縁部下の凸帯は22をのぞいて中型甕にはつくが小型甕につかない。19・20はススを塗ったのか内外面は真黒で，23は口縁平坦部下面に整形時の指圧痕が残る。26・27の外底面はナデ調整だが，29はヘラケズリを行う。

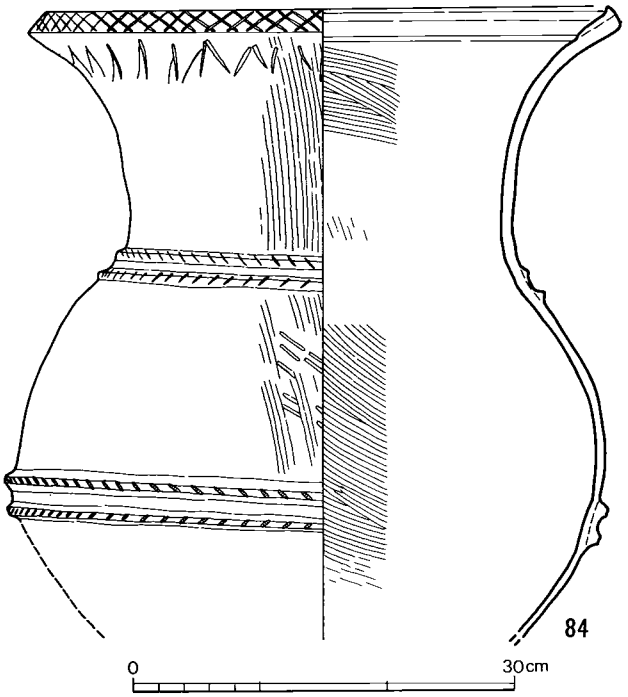
30～42　第4層から出土した甕で33をのぞき，逆L字状口縁を呈し口縁部に刻み目を施している。刻みの施しかたは口縁平坦部につけるもの（A，30—33），内側を刻むもの（B，34—38），外側を刻むもの（C，39—42）の3種がある。刻み目はAが現存部で1～3，Bが1～2，Cが2～9である。これらは口縁部外径25～30cmで，口頸部下に三角凸帯を持つものが多い。

43～57　口縁部の内湾する甕で，52～54・57をのぞいて頸部からやや下がった部分に三角凸帯をめぐらしている。43・44の口縁部はやや内傾するものの比較的水平に近く，45から51になると口縁部の内傾度が強くなる。これらは口縁部外径32cm～36.7cmの間にあ



第 101 図 土器溜出土土器実測図⑱ (1/6)

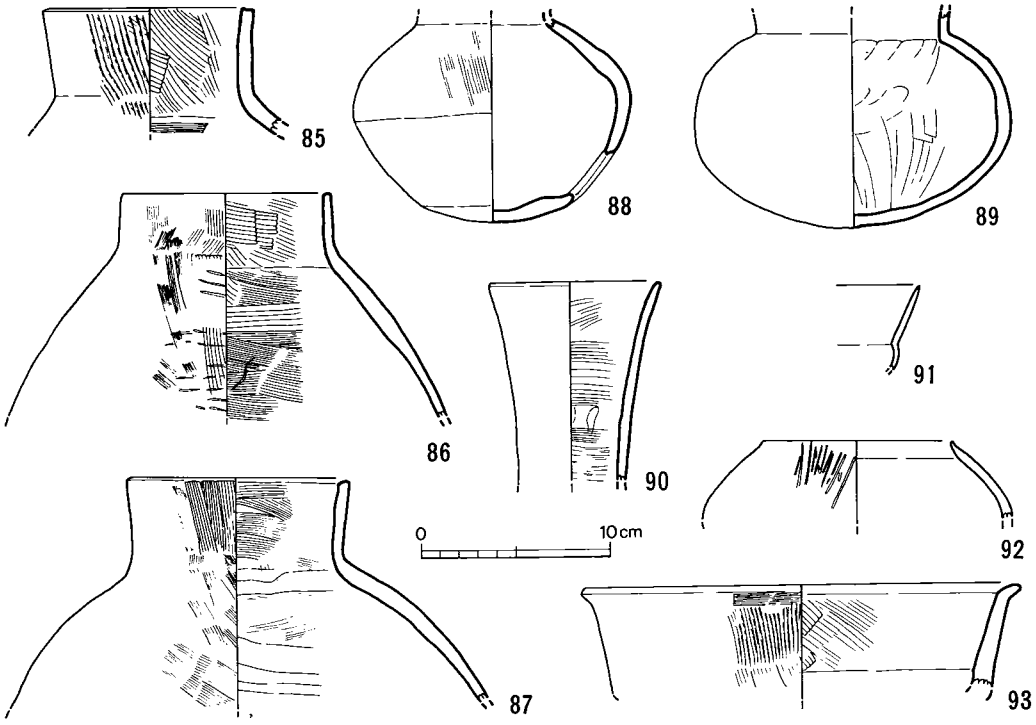
番　上



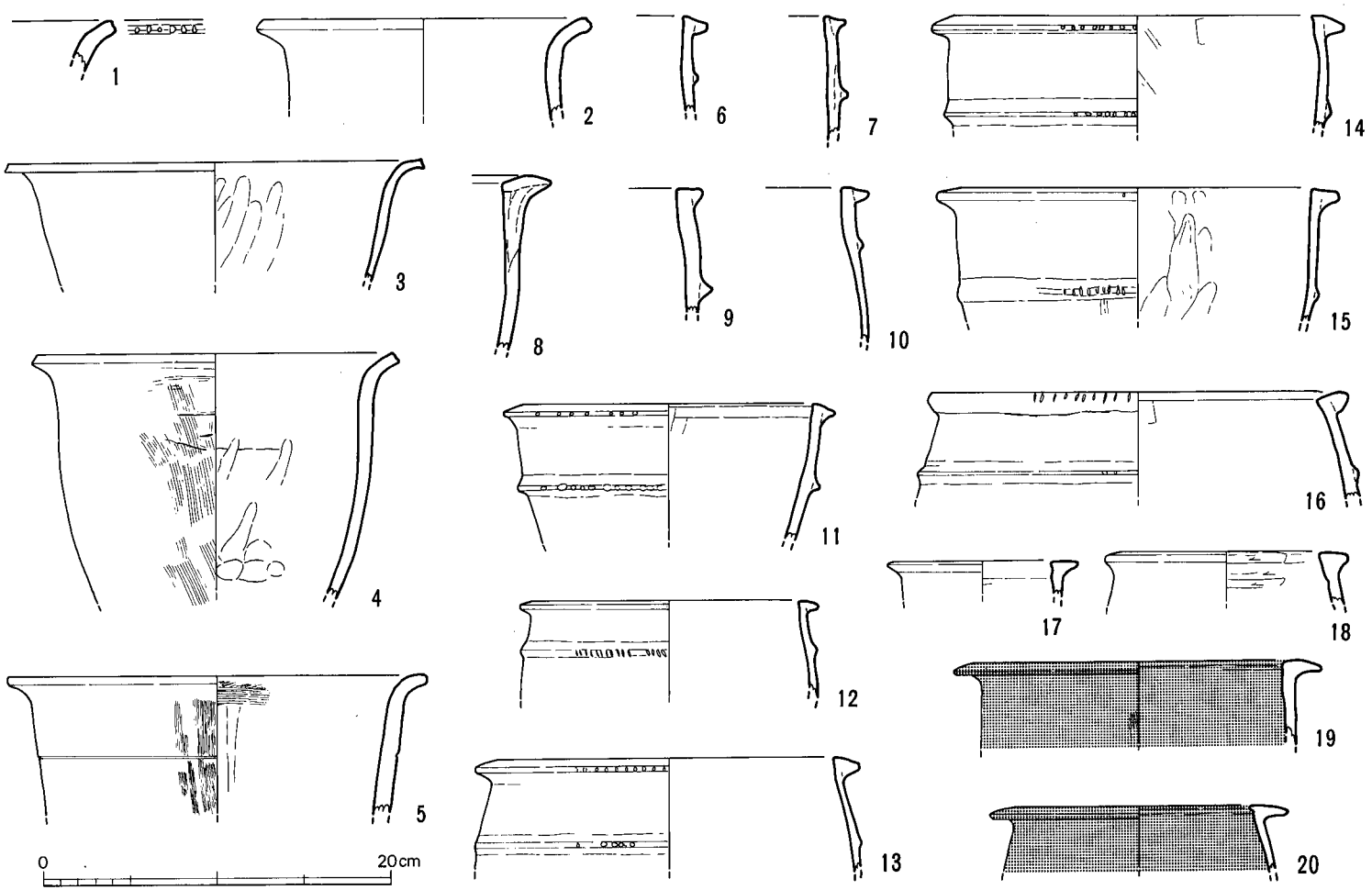
第 102 図　土器溜出土土器実測図⑲（1/6）

る。また，凸帯を有さない52～54・57は凸帯をもつものと比べて小さく，52～54が口縁部外径23cm～25.7cm，57が37cmで，57だけが大き目である。これらは口縁部のつくりが丸味を持っており，53・54・57などの口縁は直立気味である。

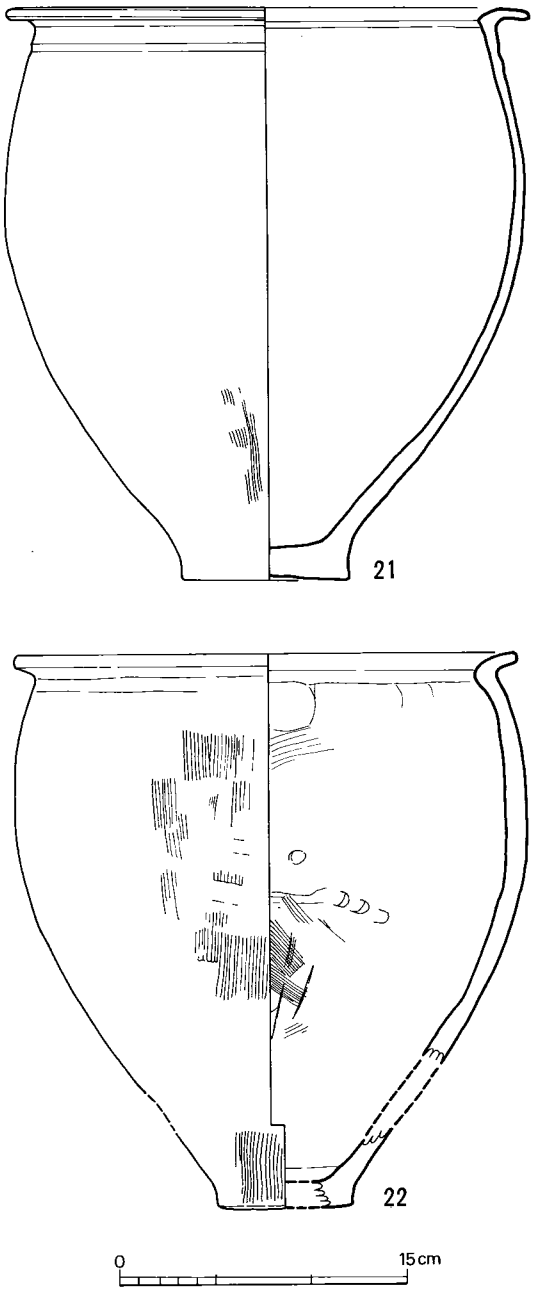
58～70　頸部に凸帯を有する長胴の甕で第3層から出土している。68・70には口縁端部に，61・67・68には口縁端部と頸部凸帯に刻み目を施す。58は60・70と比べて胴部に丸味をもって張りがあり，平底を呈する。また，頸部凸帯の断面は台形を呈する。60は58と比べて長胴化し下半部はヘラケズリを



第 103 図　土器溜出土土器実測図⑳（1/4）



第 104 図　土 器 溜 出 土 土 器 実 測 図 ㉑ (1/4)

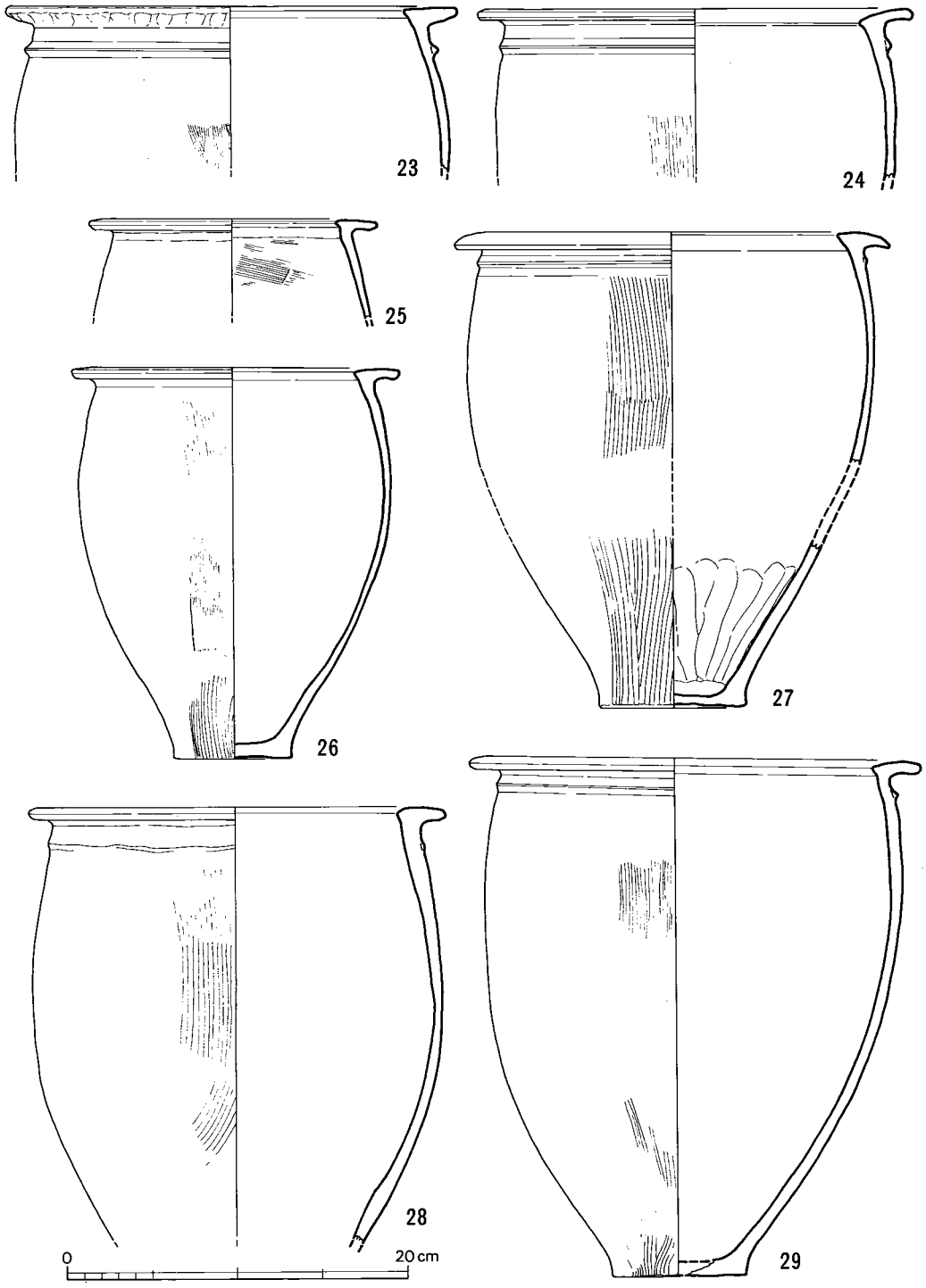


第 105 図　土器溜出土土器実測図㉒（1/4）

行っている。底部は小さくなり，丸底を志向してレンズ状に近い形を示し，頸部は三角凸帯をめぐらす。70は推定復原図であるが，58・60と比べて更に長胴化し，胴部のふくらみは減じて相対的に口縁部が大きくなる。体部下半の現存部は粗いハケ目の上からナデ調整を行っている。頸部は三角凸帯をめぐらし，底部の丸底化は更に進化する。この3個体の甕は58→60→70という形態変化を考えることができ，土器全体に占める口縁部の比重の増化，台形凸帯から三角凸帯への変化，長胴化，底部の小型化と丸底への移行，進化を形態変化の様相として指摘できる。確たる根拠はないが58を後期中葉から後半にかかる頃，60を同後半，70を終末に近い頃と推定する。

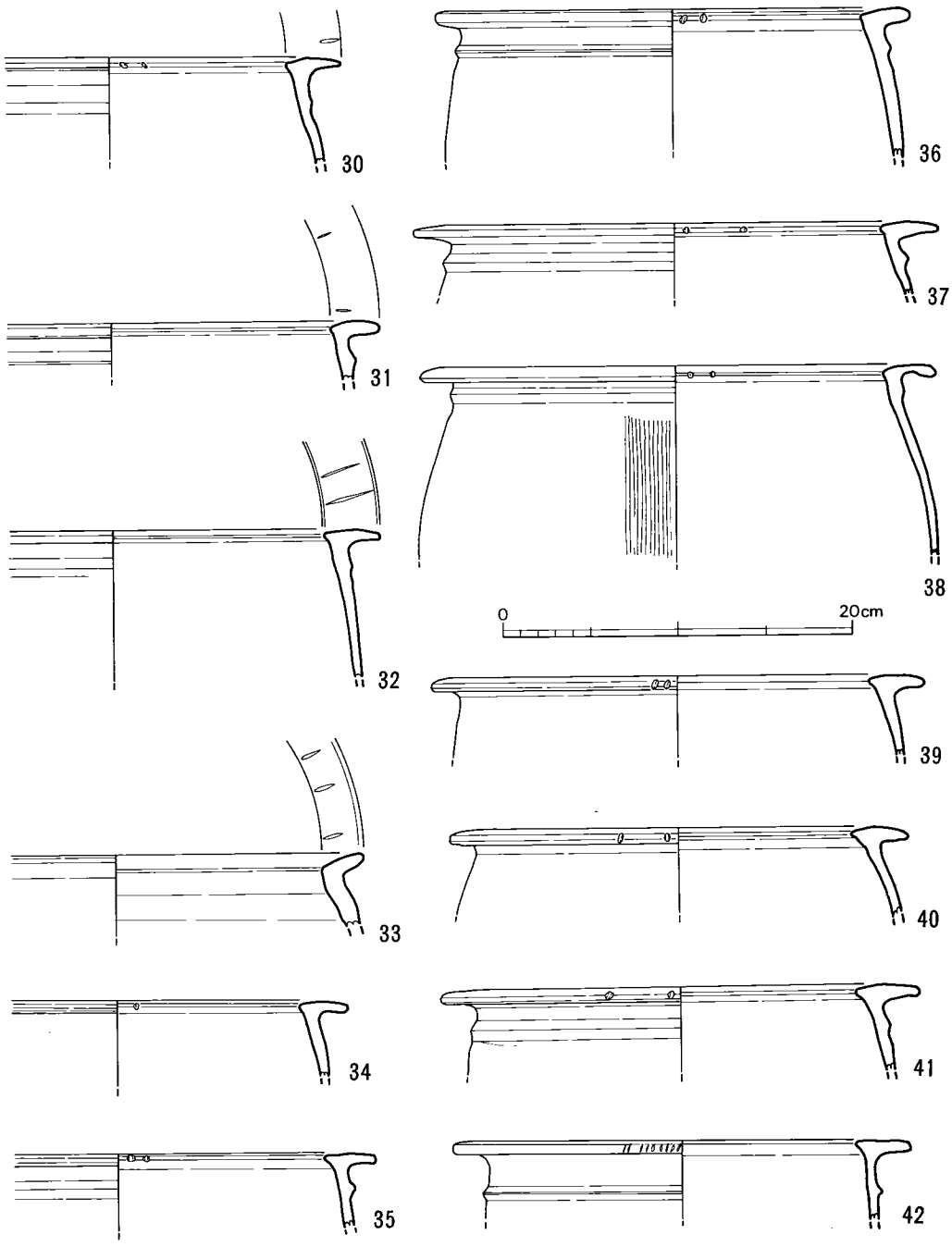
61は口縁部が大きく外反する甕で胴部は不明である。64・68は口縁部が短く胴部最大径が胴上半部にある比較的丸味を持った甕であろうと思われ，68は大きさや細部において小異があるが寺口II—17地区1号箱式石棺墓西側の祭祀遺構（来年度報告予定）から出土した大型甕に近いタイプのものであろう。これらの甕は金雲母や砂粒を多く含み，比較的焼成良好で褐色系統の色調を呈する。所属時期については，刻み目のあるものは他と比べて新しい様相を示していると考えられ，70と同様に終末期かそれに近い頃に，他も後期後半～終末頃に含まれると考える。

71～82　第3層から出土した凸帯のつかない長胴の甕である。71～75はよく似たつくりの甕で，外面にはハケ目の下にタタキの痕跡が残る。71・72・75の頸部付近のハケ目の施し方はダ



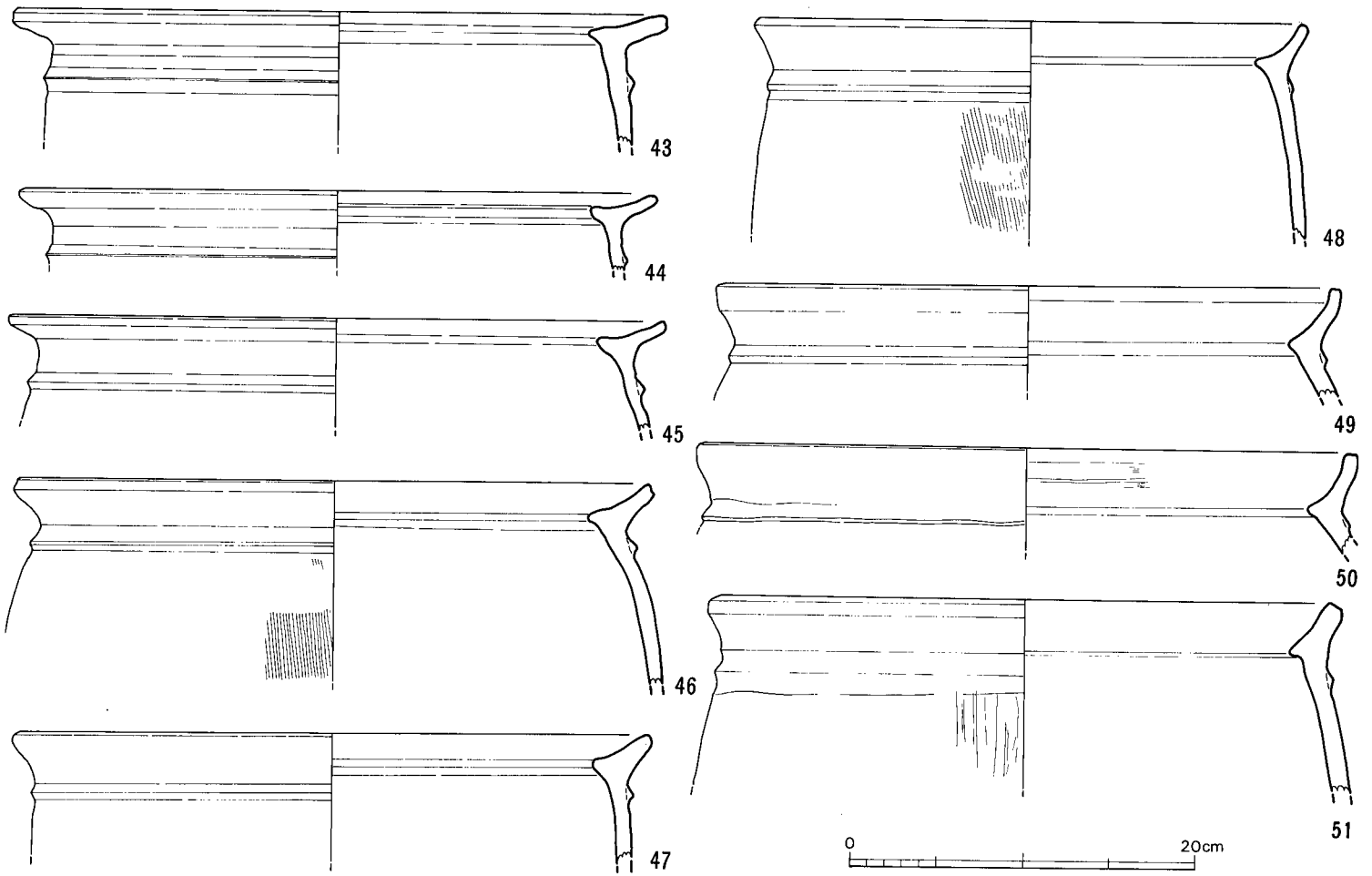
第 106 図　土器溜出土土器実測図㉓（1/4）

番　上

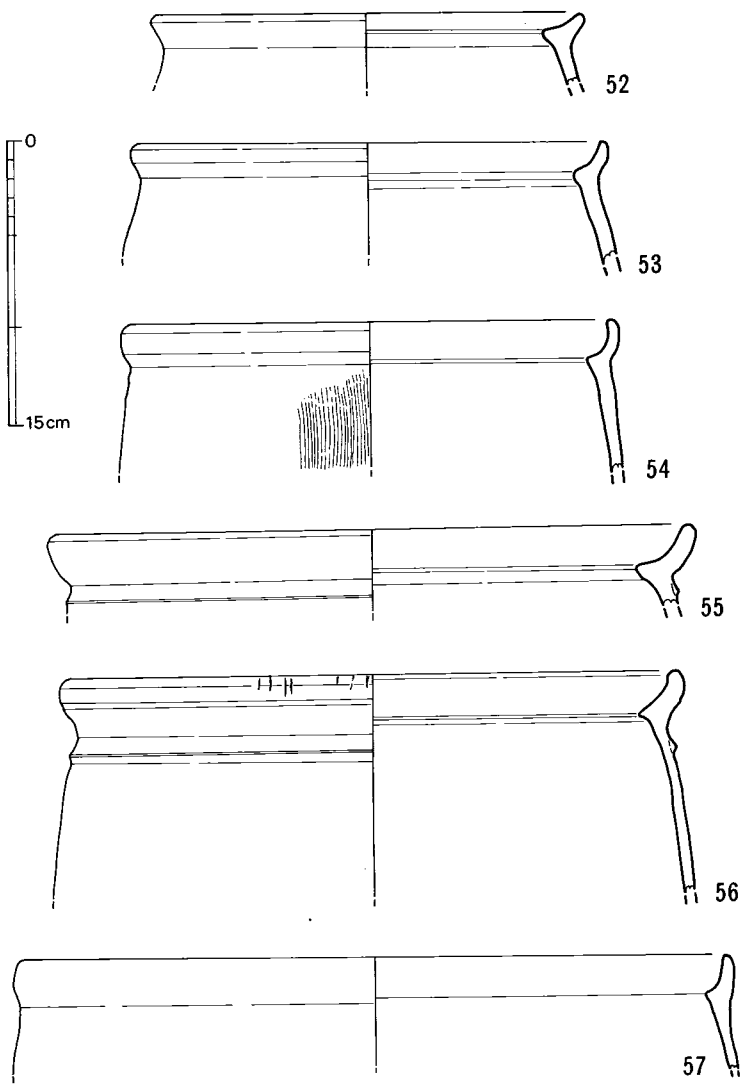


第 107 図　土器溜出土土器実測図㉔（1/4）

イナミックで口縁部下半は横ににぶい段が生じている。76は口縁部が他の土器が立っているの



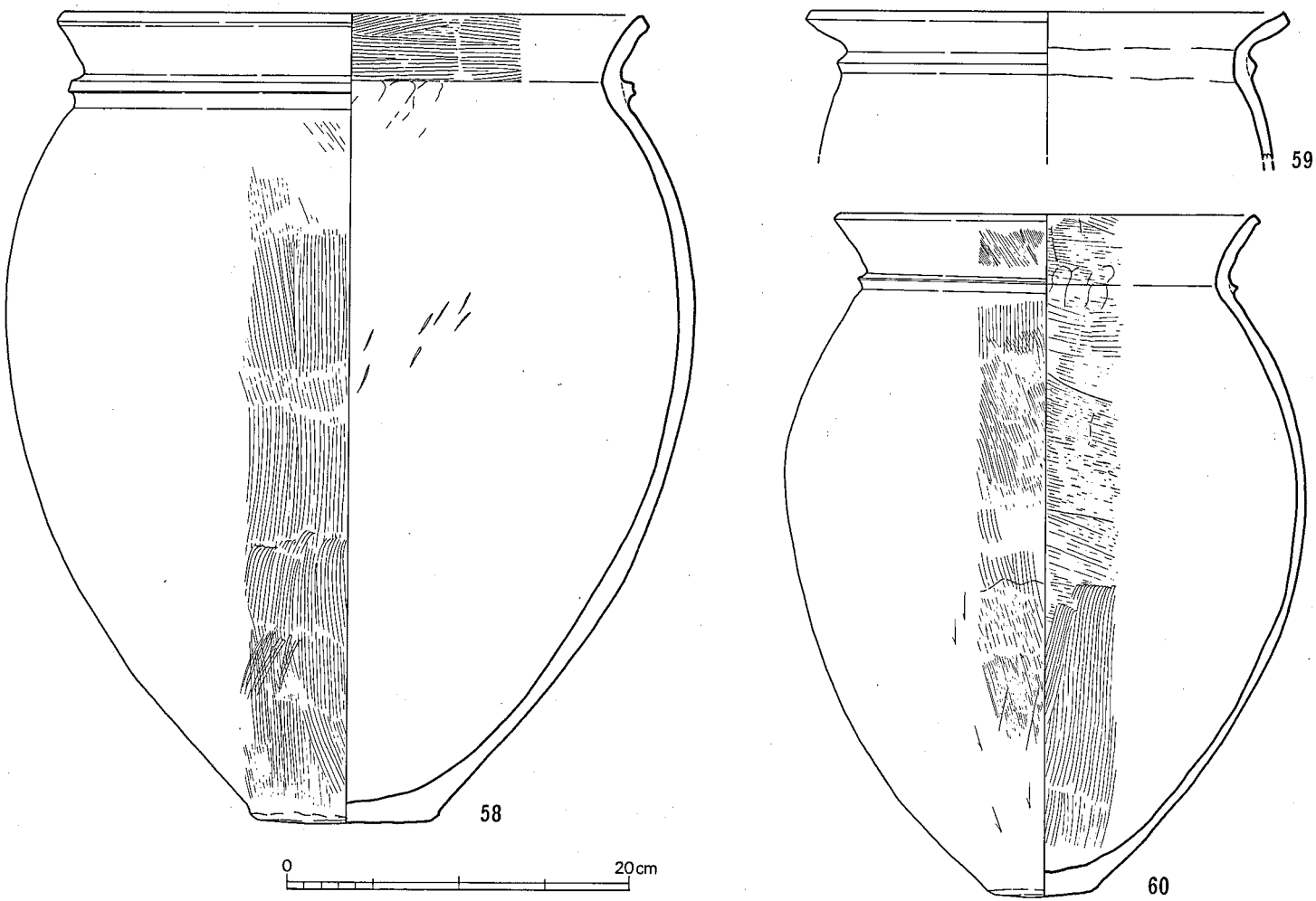
第 108 図　土器溜出土土器実測図㉕ (1/4)



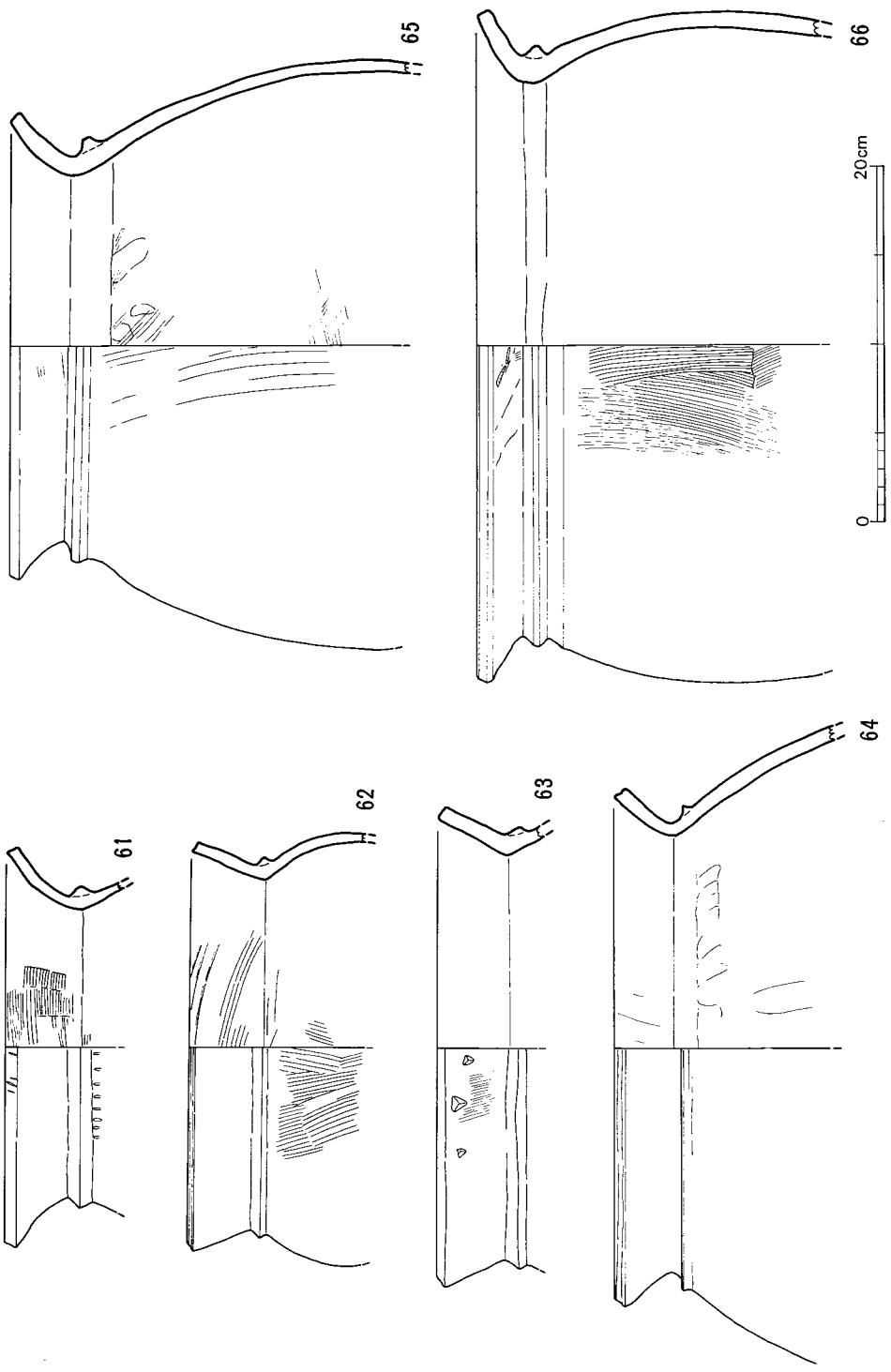
第 109 図　土器溜出土土器実測図㉖（1/4）

と比べて寝ており，端部外面はヨコナデ調整時の指の使用法の相違のためか直立気味で面を持っている。71～75がダイナミックで端部も断面コ字形でしっかりしているのとは対照的である。77・78・80はタタキの痕跡は見られず，77・78は丁寧なハケ目調整を，80はハケ目の上からナデ調整を行っている。82は番上II—5に東接するII—1地区から出土した完形に復原される甕で内外面は粗いハケ目の上からナデ調整を施している。口縁部は外反しながら立ち気味で底部はレンズ状を呈する。79・81も82と同様なつくりの甕である。81は外面下半部にヘラケズリ痕が残り，底部外面に須恵器によくみ受けるヘラ記号状のものがある。これらは胎土・焼成とも先述した終末期頃のものに準じ，褐色・赤褐色を呈する。76～82のうち，79・81・82は終末期に属すると推測され，他もそれに近い時期のものであろう。

甕B　83～87　第3層から出土した。83・84は小片のため径・傾きは不正確だが，口唇部に特徴があり，特に83は直立して口唇部外面に面を有する。84も同様で復原口径18cmをはかる。85は口縁部が著しく「く」字形に外折し，頸部内面に稜がはいる。底部は平底のようである。内外面は細いハケ目調整を行っている。3個体ともやや粗い砂粒を含み，焼成は比較的良好で83・



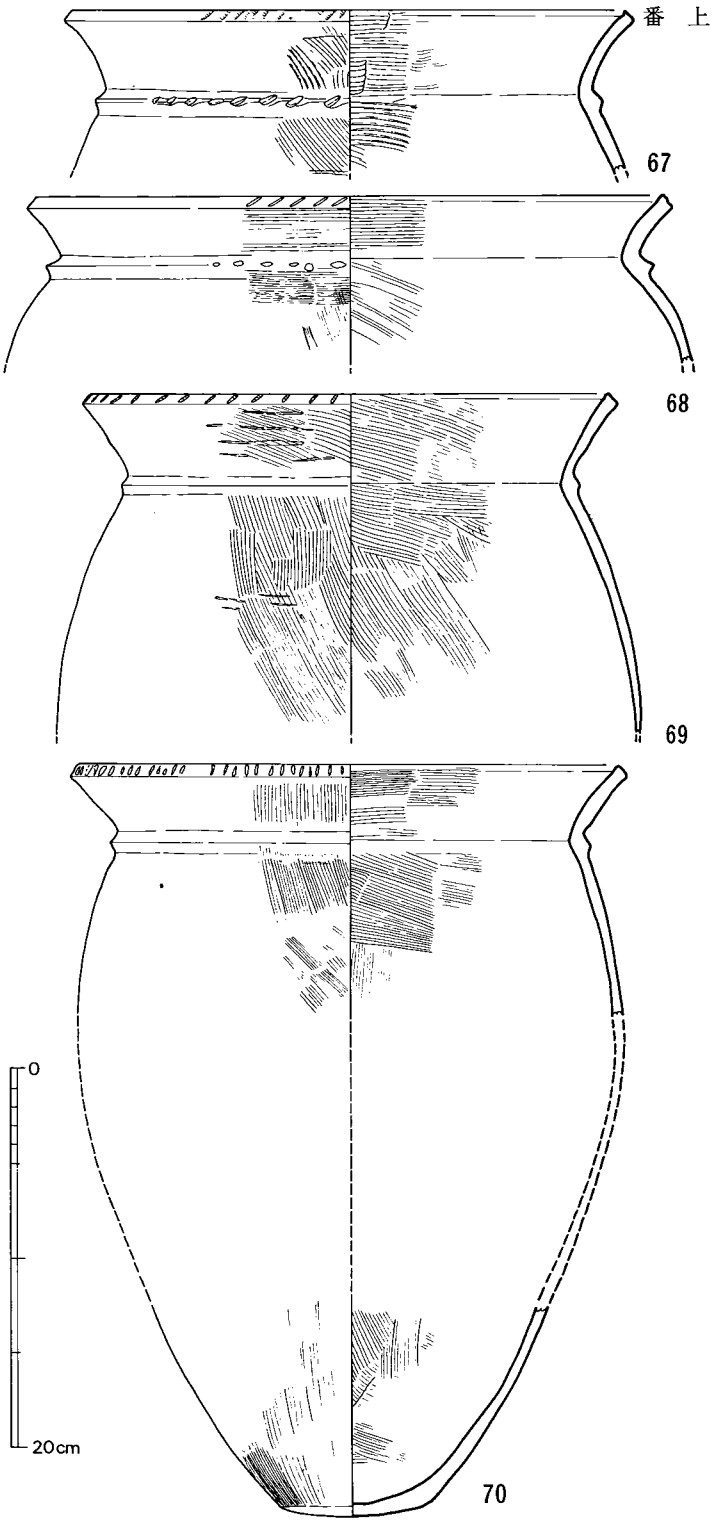
第 110 図　土器溜出土土器実測図㉗ (1/4)



第 111 図　土器溜出土土器実測図㉘ (1/4)

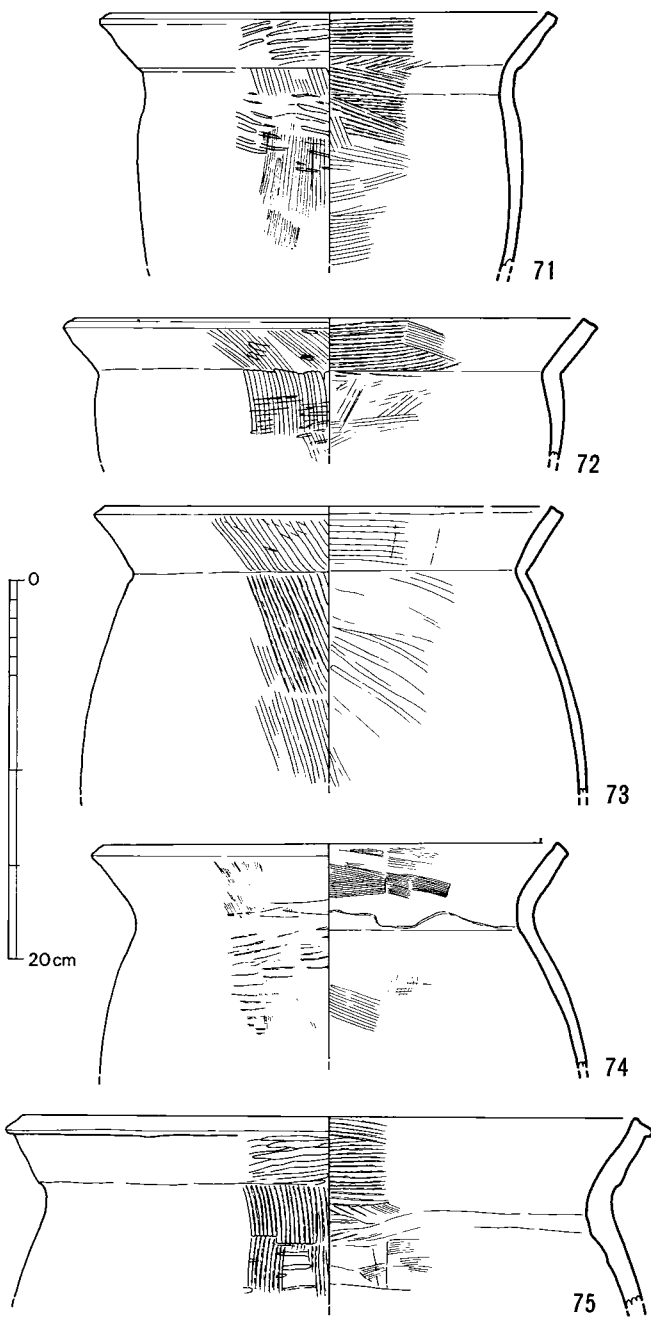
84は明褐色，85は褐～暗褐色を呈する。83・84の口唇部のクセや85の器形は北部九州で系譜の追えないものであり，畿内系のものかと思われ，終末期前後頃のものと推測する。86は85と比べて口縁部は直立気味で頸部内面にはっきりした稜がのこる。また，胴部・底部の器肉は厚く，口縁部は極端に薄くつくっている。胴部外面中位よりやや下位にタタキ目が残り，ハケ目調整を行うが胴部下半はナデ調整によりハケ目がわずかに残る程度である。内面は指で押さえて成形した痕跡が残り，細いハケ目調整を行っている。やや粗い石英粒を含み，焼成普通程度で外面は褐色～赤褐色，内面は灰褐色を呈す。87は甕というより鉢とした方がよいかも知れない。胎土には石英・金雲母等を多く含み，焼良は普通で褐色を呈する。86・87は搬入土器と思われ，後期後半～終末期頃のものと考えられる。

88～91　第3層から出土した。完形に復原されるものはないが，底部は平底か



第 112 図　土器溜出土土器実測図㉙（1/4）

番　上



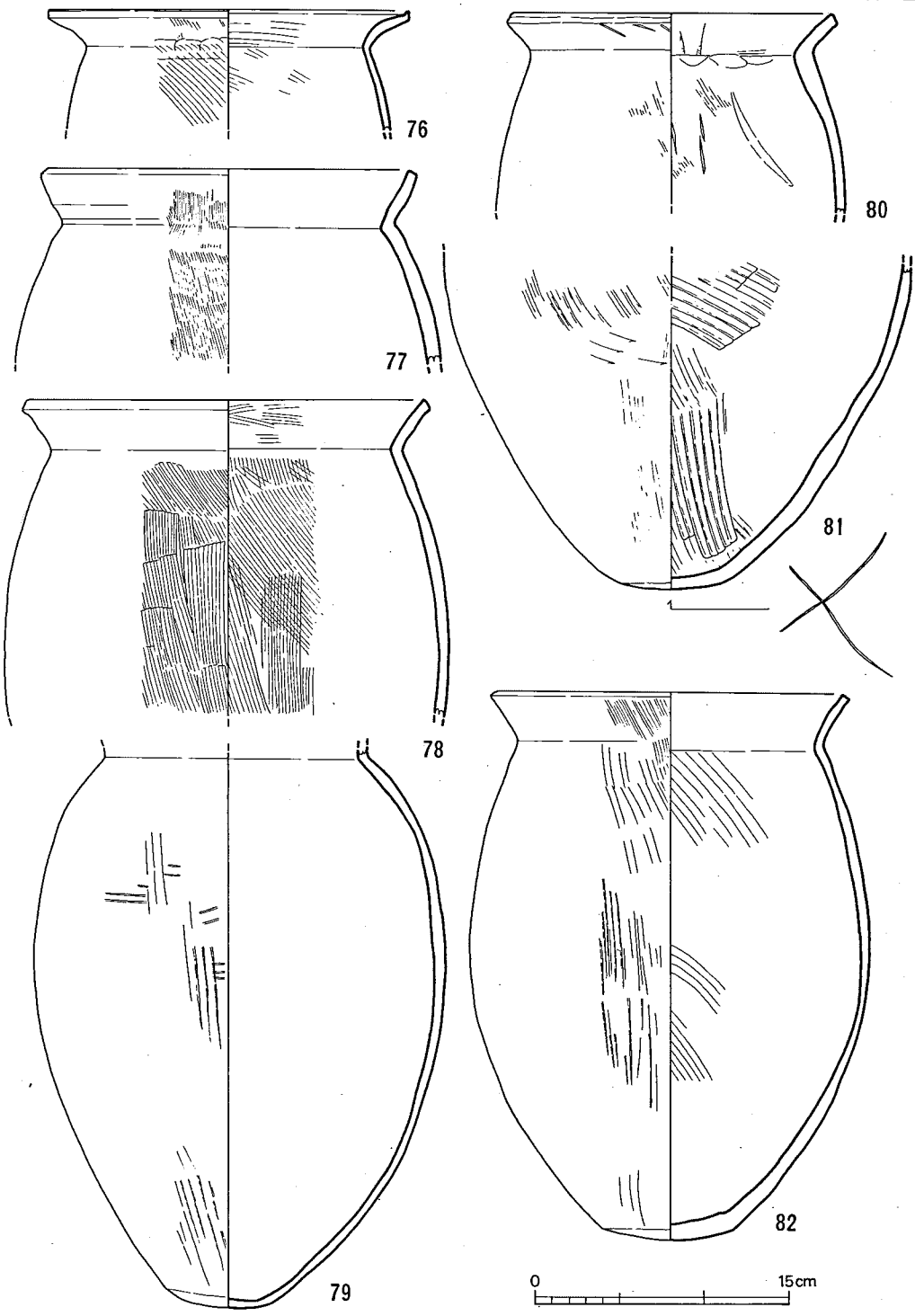
第 113 図　土器溜出土土器実測図㉚（1/4）

それに近い形態をとるようである。85・86と比較して底部の占める割合が大きく，かつ平底に近いことから後期前半～中葉頃と推測する。

92・93　第3層から出土した小型の甕形土器で，92は器面が荒れているが，両者とも内外面はハケ目調整を施している。

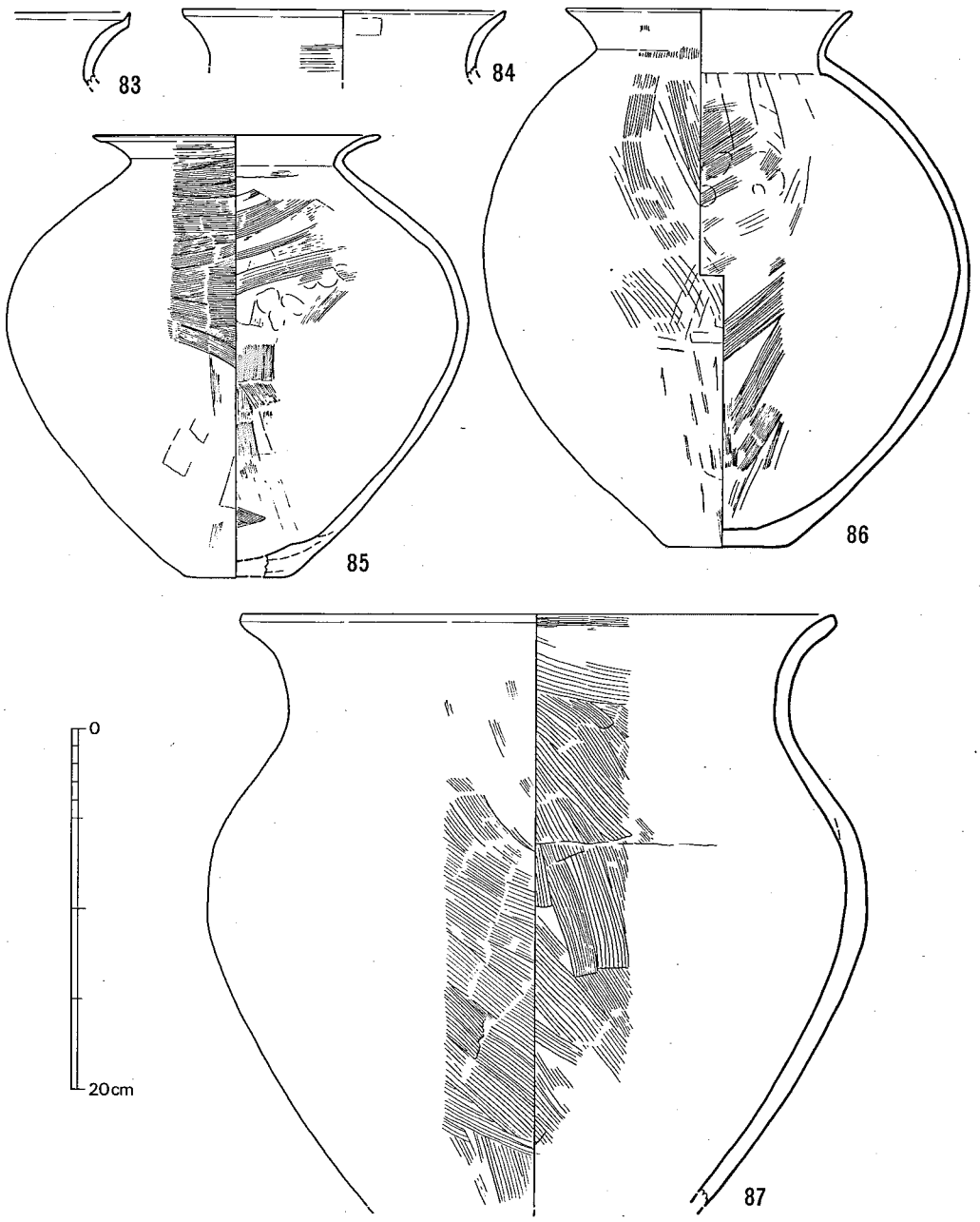
甕C　94・97　94は3層，97は4層から出土している。口縁部を外側に折り曲げたもので，両者とも外面は縦位のハケ目調整を，内面は94がヘラケズリ，97はナデ調整を行う。94は後期のどの辺におくか判断しきれないが，97は後期前半頃と思う。

95・96・98～100　第3層から出土した。98・99は頸部径が広く鉢形を呈する甕だが，他は胴部上半，あるいは頸部以上を欠くので形態は明らかではない。98はレンズ状の底部を呈し，頸部以下の外面は粗い縦位ハケ目調整を，他の部分は比較的細い斜位ハケ目調整を行う。99は，外面は縦位・斜位ハケ目の上から口縁部から胴部上半は横位ハケ目調整を行っている。内面は口縁部は横位ハケ目調整を，胴部下半はヘラケズリの後底部はナデ，胴部中位より上は板状器具でナデている。口縁部



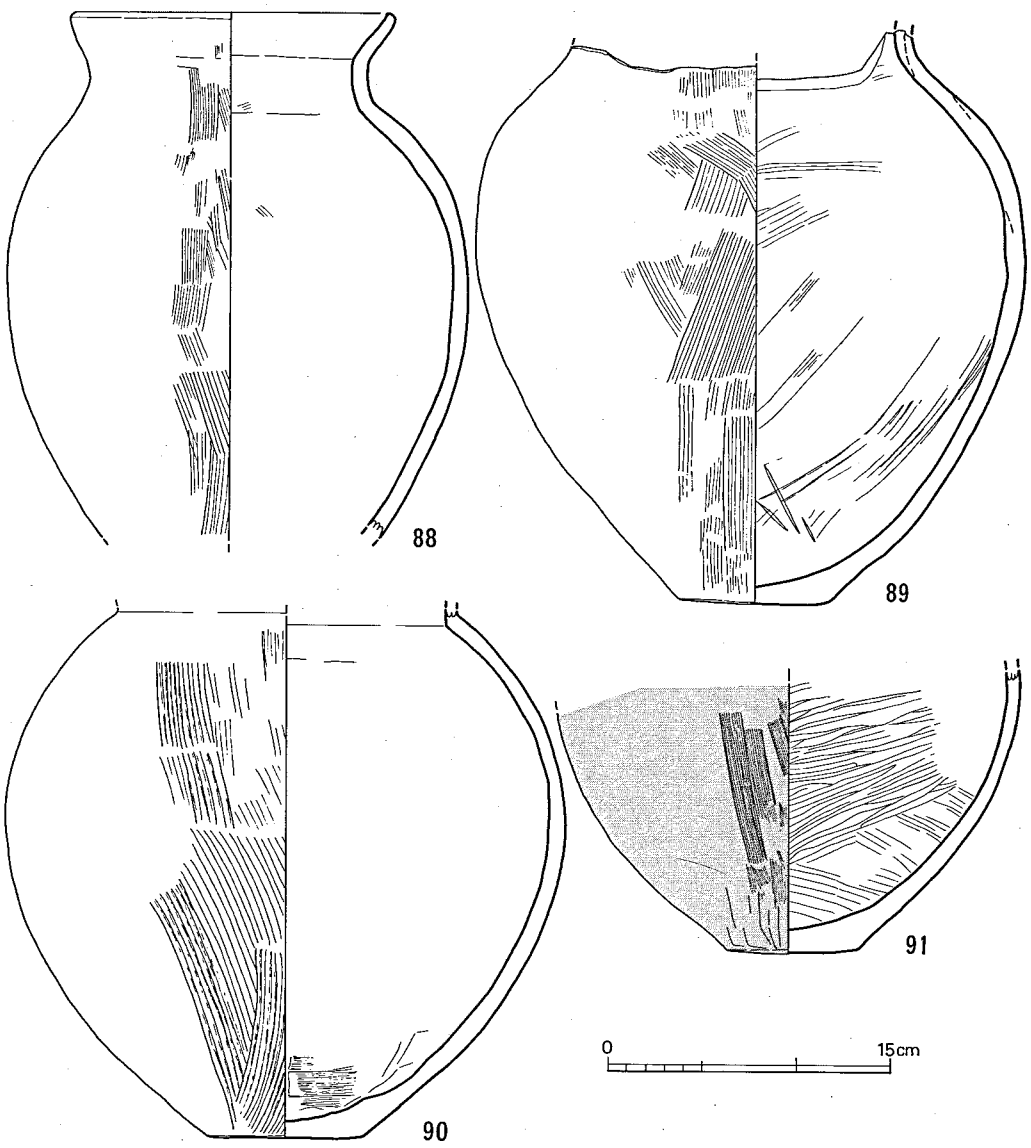
第 114 図 土器溜出土土器実測図㉛ (1/4)

番 上



第 115 図　土器溜出土土器実測図㉜ (1/4)

と底部の形態から99は後期前半～中葉頃に，98は終末期頃の所産と考える。95・96は内外面ハケ目調整後内面はナデ調整を行っている。100は内外面ハケ目調整を行うが胴部下位の外面はヘラケズリを，同内面はナデ調整を行う。3個体とも平底を呈すことで共通するが，100は胴部下位の



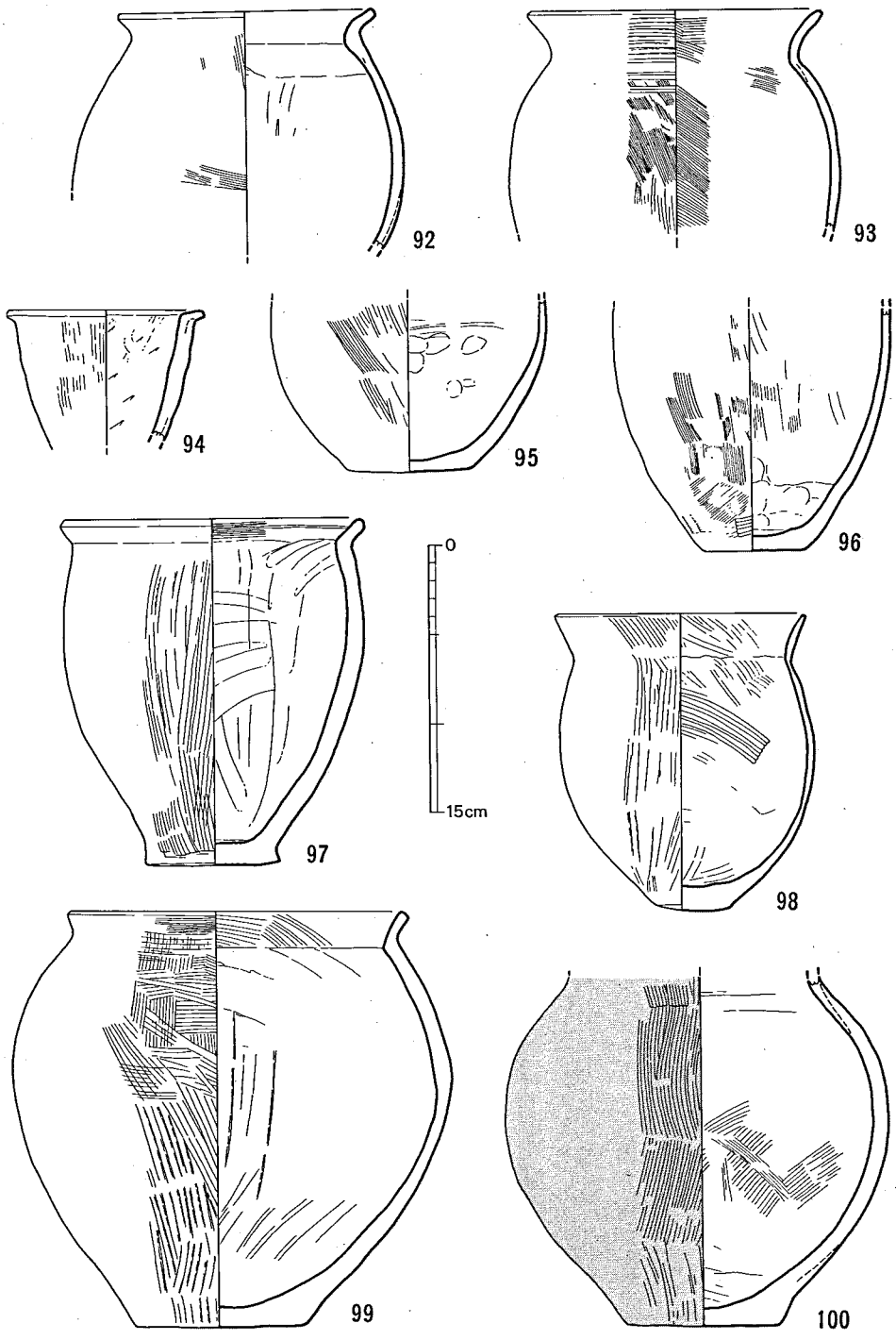
第 116 図　土器溜出土土器実測図㉝ (1/4)

ヘラケズリ手法に新しい様相を認めることができる。

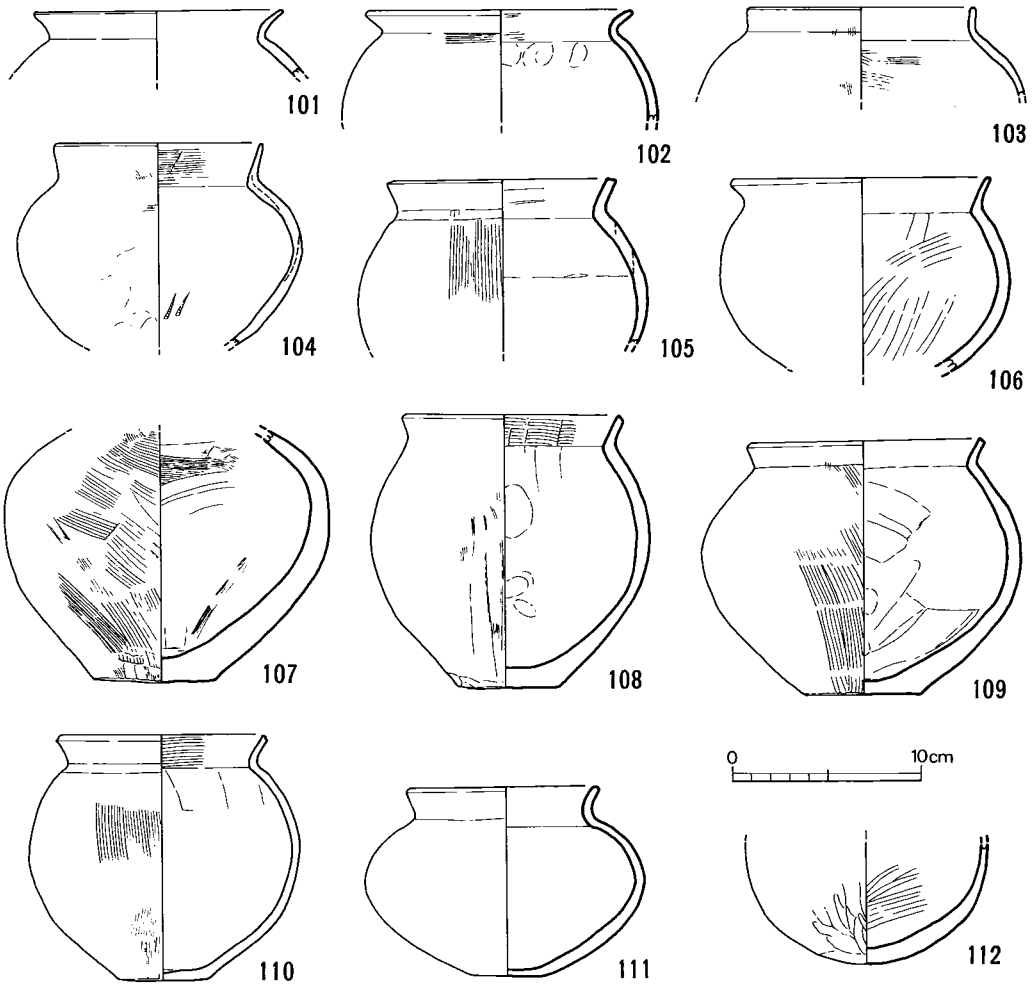
101～103　第3層から出土した小型の甕である。101・102は口縁部が外反するが,103は直立気味である。ともに薄手の土器で最終調整はナデ・ヨコナデを行う。

104～106　第3層から出土した。底部の形態は不明だが口縁部は直立気味に外傾する。口縁部の外反度は108～110とほぼ等しく器形や調整手法もよく似ているので，平底になるかもしれない。

番　上



第 117 図　土器溜出土土器実測図㉞ (1/4)

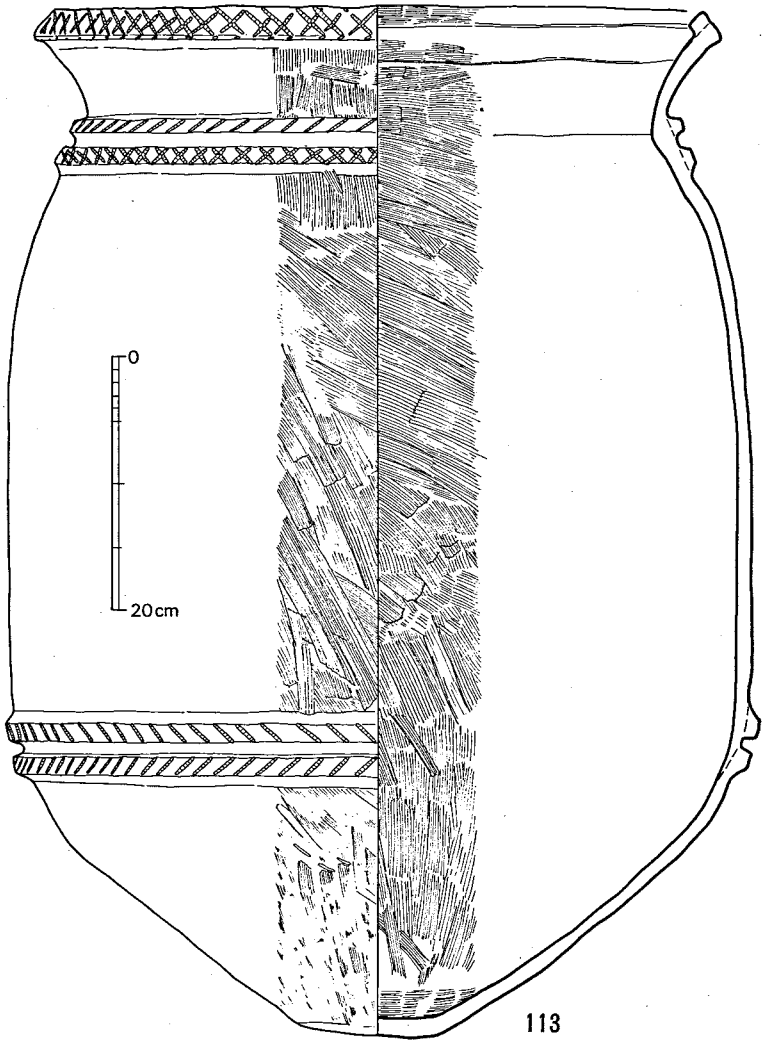


第 118 図　土器溜出土土器実測図㉟（1/4）

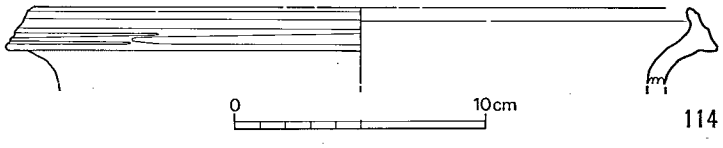
107～110　第３層から出土した平底の小型甕である。ハケ目およびナデ・ヨコナデ調整を基本とする。107は底部外面を不定方向の粗いヘラケズリを行っている。109胴部内面はヘラでナデたような痕跡がある。110は底部が凸レンズ形への過程にありやや新しい様相を示すが，他は後期前半頃に含まれよう。

111・112　第３層から出土した。111は胴部中位下半に幅３～５cmの黒斑がある。底部はレンズ状を呈する。112はここに図示したが壺になるかも知れない。111は後期半ばから後半に，112は終末前後頃と思われる。

甕D（114）　第３層から出土した。大型の長胴形の壺で，口径51.2cm，胴部最大径58.5cm，器高81.5cmをはかる。口縁内面に幅1.8cmの粘土を貼りつけ，頸部・胴部下位に断面台形の２条



第 119 図　土器溜出土土器実測図㊱（1/6）

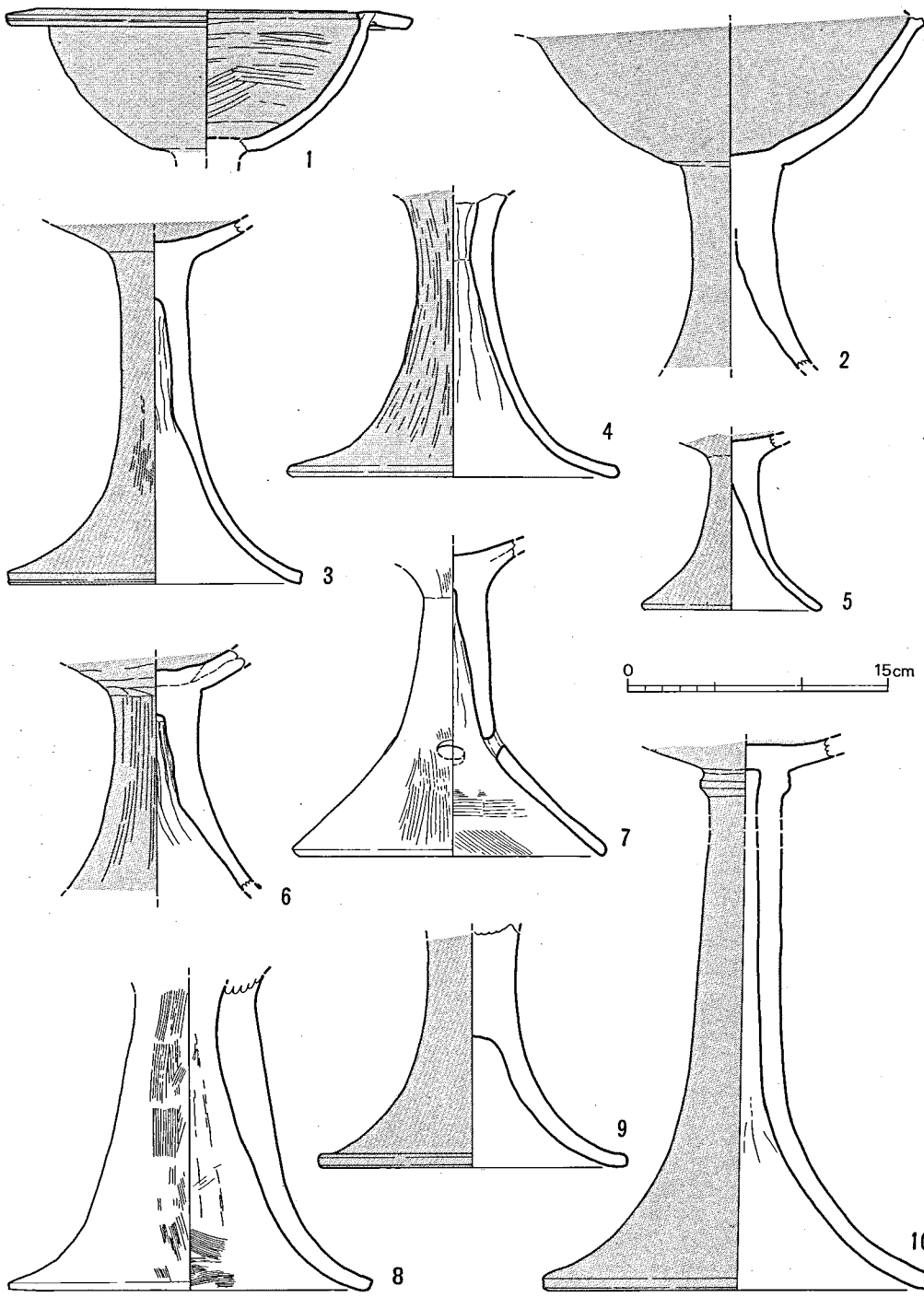


第 120 図　土器溜出土土器実測図㊲（1/3）

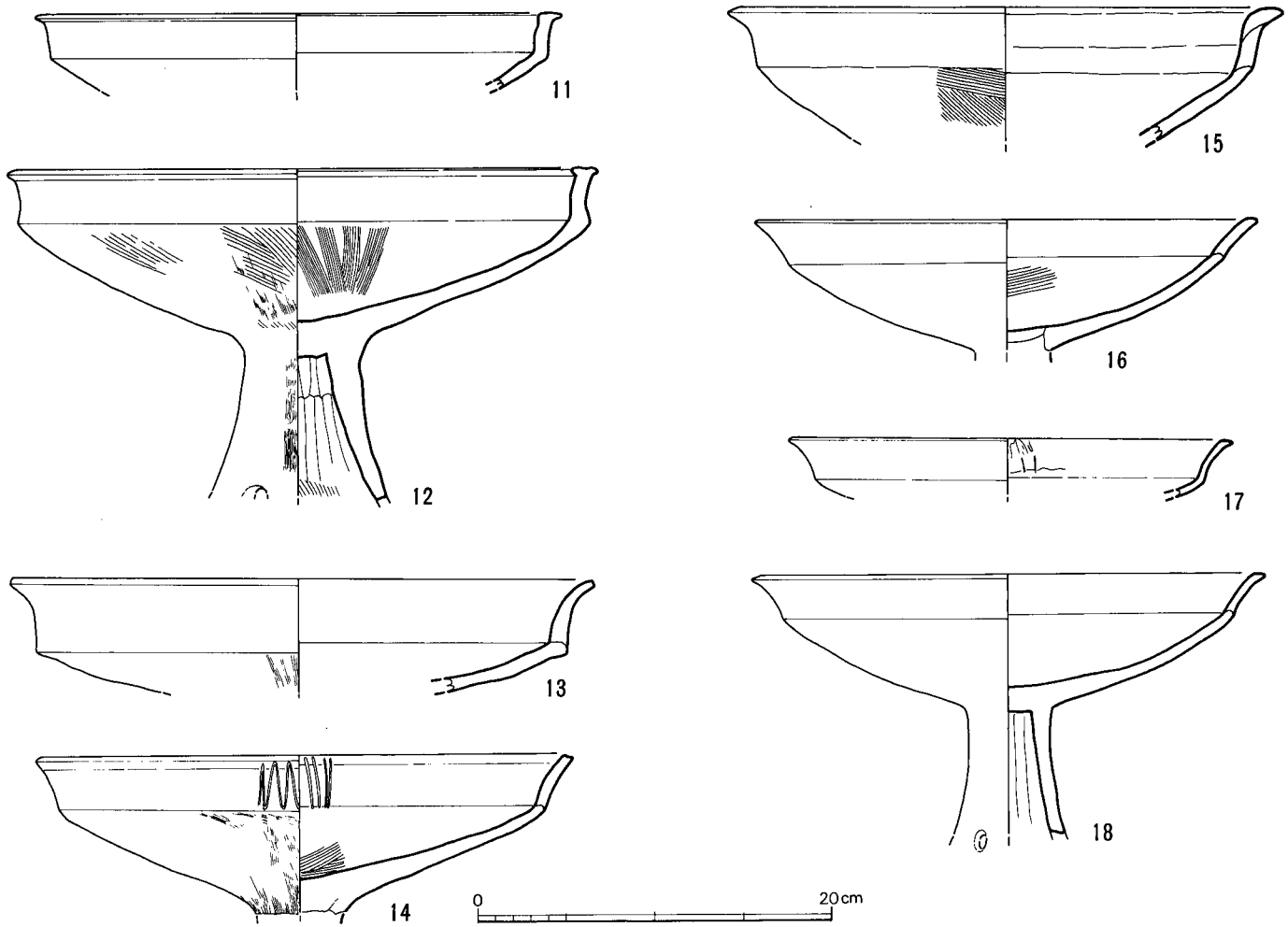
凸帯をめぐらす。凸帯への加飾の仕方は先述した壺K84・85と同様である。ハケ目は外面が縦位・内面は上半が横位・下半が縦位で，底部は横位に入れる。胴部下半のハケ目の下に右下がりのタタキ目が残る。砂粒を多量に含み，焼成良好で暗茶褐色を呈し，胴部に50×35cm程の大きな黒斑がある。底部はレンズ状を呈し，凸帯の形状や加飾の仕方から終末期頃のものであろうと考える。

甕E（113）　番上II－5地区に東接するII－1区の第3層から出土した。小片のため傾き，径は正確ではないが推定復原口径25.6cmをはかる。現存部はヨコナデ調整されている。胎土に金雲母片や石英粒を含み，焼成良好で明茶褐色を呈する。中部瀬戸内産の土器に酷似しており，岡山県川入・上東遺跡の編年によれば「鬼川市III式」を前後する時期におかれる（註14）。

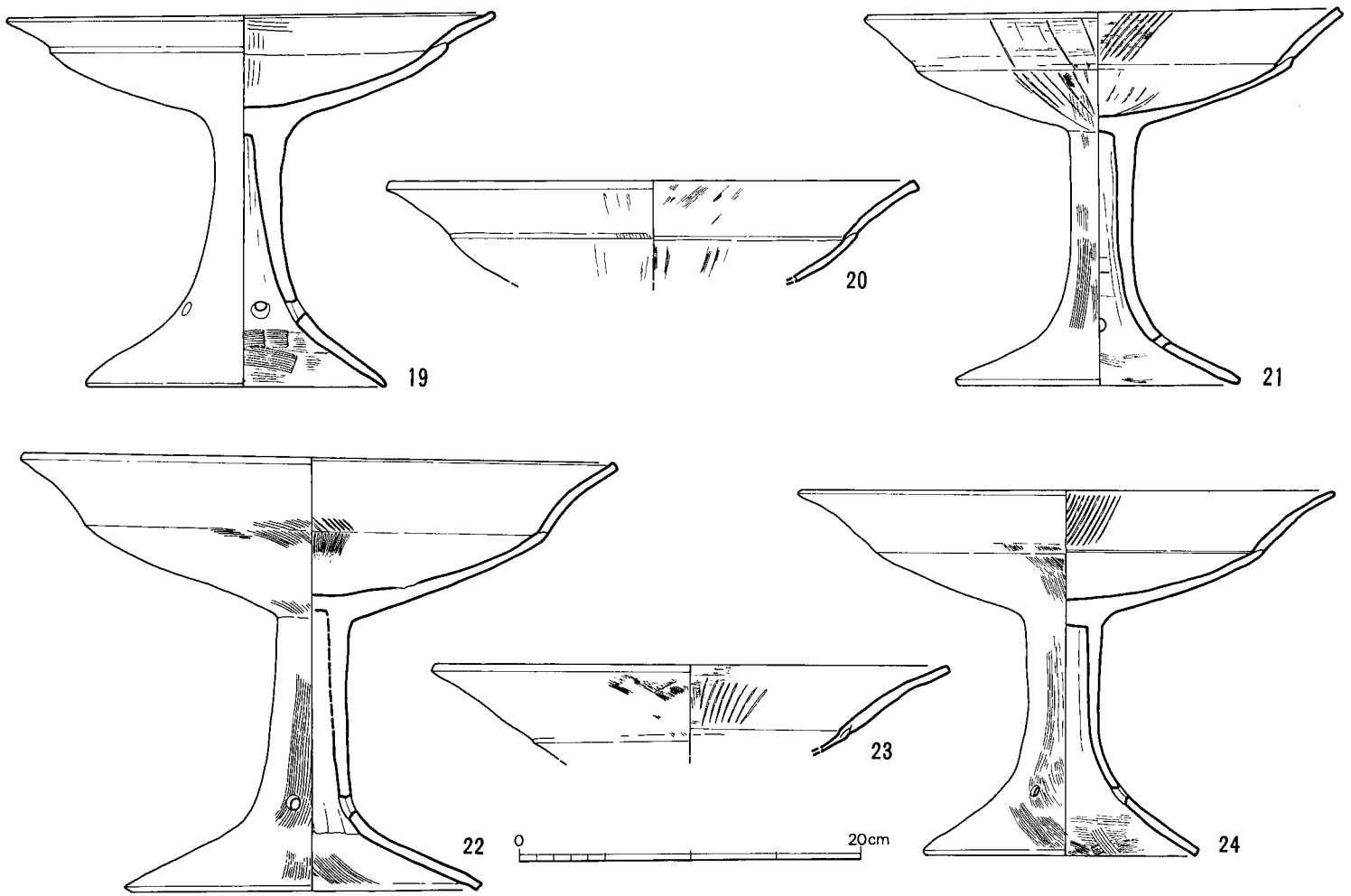
高杯形土器（第121～124図）



第 121 図　土器溜出土土器実測図㊳ (1/4)



第 122 図 土器溜出土土器実測図㊴ (1/4)



第 123 図 土器溜出土土器実測図㊵ (1/4)

番　上

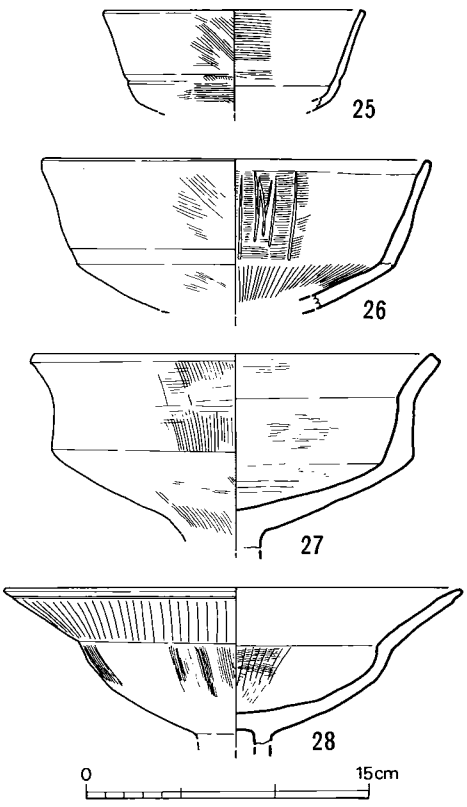
1・2・4・6・10は第4層，他は第3層としてとりあげた。

1～10は中期から後期にかけてのもので，1・2は杯部が半球形で，口縁部はL字形を呈する。器面が荒れているものもあるが，丹塗りされるものが多い。1・2・10は中期中葉頃，4は中期後半，8は後期，7は終末期頃と思う。

11～24は3層出土である。11・12は中部瀬戸内に特有の器形を呈し，「上東・鬼川市Ⅰ式」に設定された高杯の特徴と通ずる部分が多い(註15)。11は⅛程の小片からの復原図で，復原口径30cm，現存高4.5cmをはかる。口縁部は直立し，端部は外方につまみ出されており，上端部は平面で凹線めぐらない。現存部はヨコナデ調整を行い，器面は平滑に仕上げられている。胎土に白色砂粒を多量に含み，焼成良好で白ぽい淡茶色を呈する。12は脚裾部を欠くが口縁径33.4cm，現存高19cmをはかり，現状で略完形である。11に比べて全体に厚手で大振りである。全体的な形は両者とも類似したものであろうが，口縁端部のつくりが若干異なり，12は上端部へ中央がくぼんで凹線状のものが一巡し，そのためにか端部が内・外に2㎜程はり出している。脚部はラッパ状に裾広がりになると思われ，3個の円形透し孔をほぼ等間隔に配している。調整は2種類のハケによって行われ，杯部内面・脚部外面は細いハケ目調整を，杯部外面，脚部内面は粗いハケ目調整を行っている。なお，脚内部上半は逆時計回りのヘラケズリを行い，その後にハケ目調整を行っている。胎土・焼成は11に準ずるが，色調が異なり暗い茶褐色を呈する。13～18は口縁外反部分の短い土器であるが，なかでも，13は口縁部が直立気味に外反するという形態上の点で，14は形態上では口縁部が外方に開く途上にあるが端部が凹むという手法上の点において，11・12の系譜につらなり，古い要素をのこしている。15もそのような中で理解される。16～18は口縁部の長さが短いだけで，口縁部の占める比率が大きくなればスムーズに19～24に移行するタイプのものである。調整は風化が進行して不明瞭な部分もあるが，14の内外面，17内面はヘラミガキが暗文風にのこり，16外面は放射状のヘラミガキが行われており，他の多くはハケ目調整である。なお，14の口縁部外面には部分的に朱かと思われるものが付着している。19～24は後期後半以降通有にみられる高杯である。19は脚柱部上半が厚くなり，杯部口縁の外反部が短い点がやや他と様相を異にする。20・21は杯部全体の中で口縁部の占める比率は⅓以下で短いが，22～24は更に口縁部の占める比率が高まりをみせ，外反の度合いが大きくなる。脚部のつくりは完形品でみる限り上部まで完全な中空で，3～4個の円形透し孔を配し，透し孔の部分で大きく屈折してラッパ状に開く。調整は，ヨコナデ後に杯部内面はヘラミガキを行い，他はハケ目調整を施すのが一般的であるが，21は杯部外面も斜め方向のハケ目の上からヘラミガキを間断的に行っている。三雲遺跡では，11・12は後期中葉頃，13～19を後期後半，20～24を終末期頃に考えている。

25～28は3層出土であるが，27だけはⅠ—3区の南北水路付設部分の調査に際して3層より出土したものである。25は短脚のつく高杯で，外面に浅い凹線を巡らし，内外面にハケ目調整

を施している。26は25より大型であるが全体の器形は25と同様で，調整に，内面ヘラミガキが加わることだけが異なる。両者とも胎土は緻密で，焼成良好で暗褐色を呈する。27は短脚がつくと思れる。全体に厚手で，口縁部が直立気味に立ち，その上半部が外反するクセは13・15に通ずる面がある。ヨコナデ後にハケ目調整を行う。28は小笹遺跡A溝で出土している高杯(註16)に系譜的に連らなると私考されるものである。杯部内面は風化しているが下半部はハケ目調整の後に暗文を入れ，外面は口縁部に縦位の暗文を施し，以下は細いハケ目調整を行う。石英粒を多く含み，焼成良好で明茶橙色を呈する。



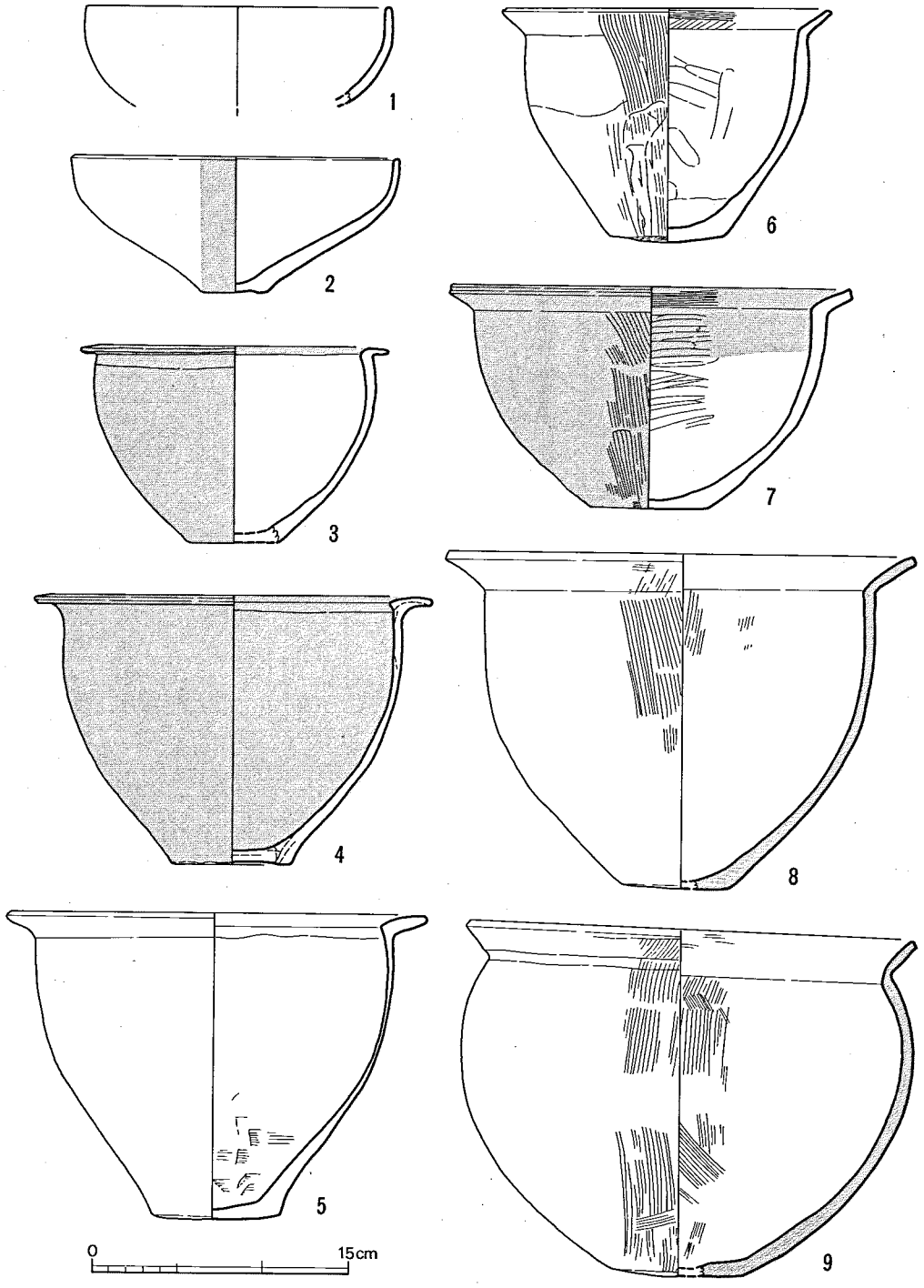
第 124 図　土器溜出土土器実測図㊶（1/4）

鉢形土器（図版42，第125・126図）

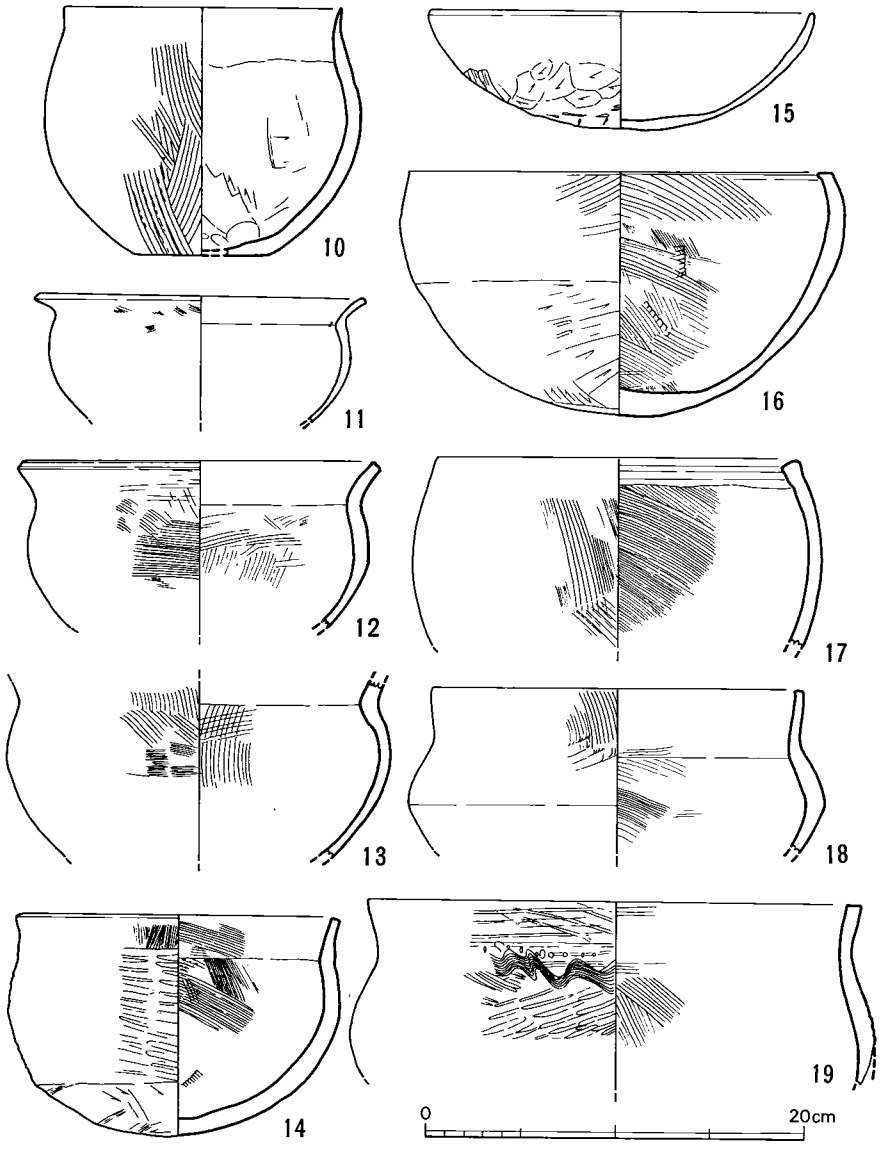
1～5が第4層，6～19は第3層から出土した。口縁部への折返し有無で大きく二種に分かれ，1・16のように椀形を呈するもの，15のように杯形を呈するものがある。

1はあるいは脚台のつくものかもしれない。2は上げ底状の平底から体部はまっすぐに伸びて口縁部で直立する。中期後葉頃のものであろう。3～5は口縁部がL字形を呈する鉢で底部は平底を呈する。口縁部の形状は三者三様で，3は外に折り返しただけで口縁部は水平，4はやや内傾して内側に若干張り出しが見られ，5は内傾して弱い「く」字形を呈する。底部は4がやや上げ底状を呈するが5は平底状で周縁部はナデつけられている。4は中期中葉頃，3・5は後半頃と考える。6～9は口縁部が「く」字形を呈する鉢である。底部は7・8が平底，6・9がわずかに凸レンズ状を呈する。8・9の体部内面には朱が所々に付着しており，それは塗られた後に剝落した状態のものではなく，このふたつの鉢は朱を入れる容器であった可能性がある。7・8は後期前半に，6・9は底部の形から7・8に後続する時期がやや降る頃のものであろう。10は口縁部が外反気味に直立し，口縁部を薄くつくり，端部はとがる。底部は大きな平底である。11～13は口縁部が外反する鉢だが，頸部の稜は6～9に比べてにぶい。体部も丸味を増し，外面は横位ハケ目がはいる。底部の形状が不明だが丸底に近いものと推測され，11は，あるいは脚台のつく可能性がある。後期後半頃のものであろう。14・18・19は外反気味にほぼ直立する口縁の鉢である。14は，形態的に10の系譜上にあるものと考えられる。底

番　上



第 125 図　土器溜出土土器実測図㊷ (1/4)



第 126 図　土器溜出土土器実測図㊸（1/4）

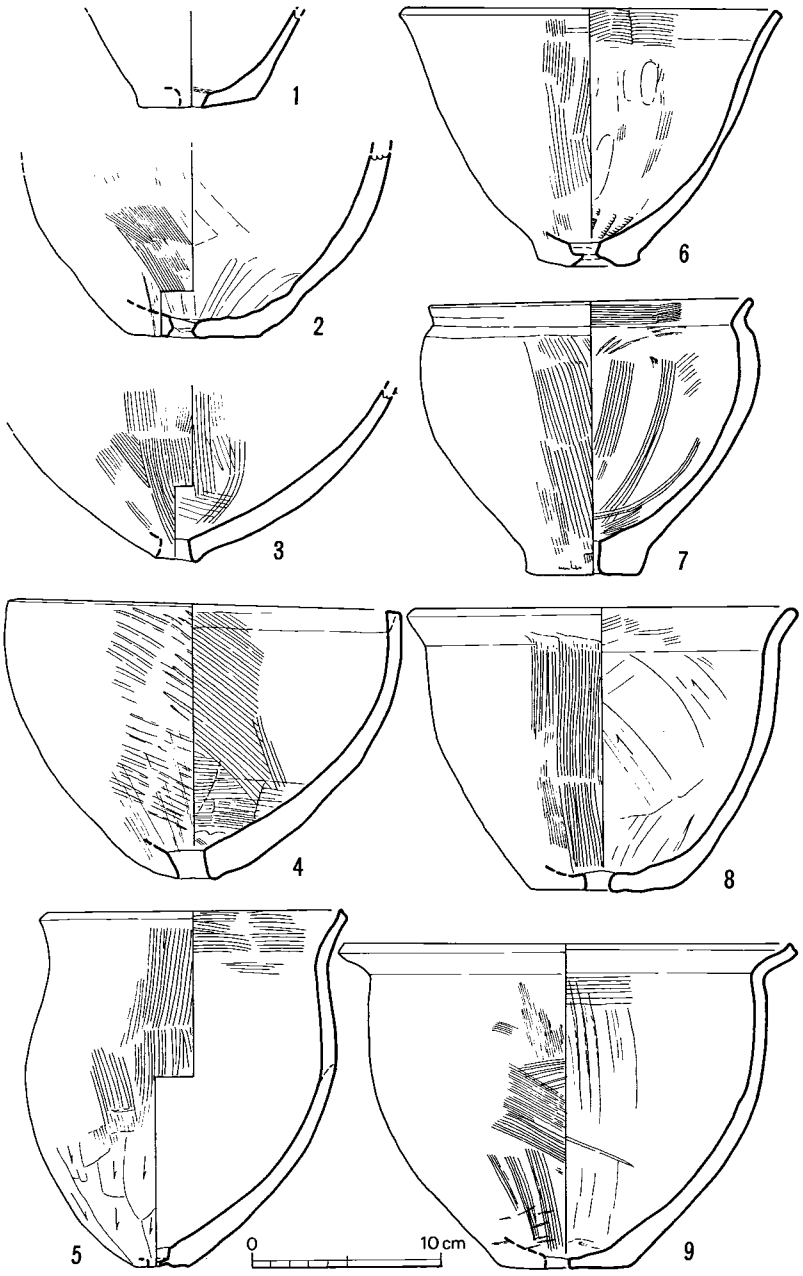
部は丸底でヘラケズリを行い，頸部以下には横位タタキ目が明瞭にのこる。18は体部が角張るが19は丸味を持っている。18は器面が粗れており，ハケ目調整だけしか観察されないが，19の外面は口縁部から以下にタタキ目がみられ，その上から頸部に不揃いな列点文と目の細かい波状文を施す。18・19にみられる形態差は時間差と推定され，調整手法や加飾有無から18は19に先行すると考えられる。タタキ目をそのまま放置するクセは，三雲遺跡では終末期頃以降の土器に多くみられ，14・19は終末期頃に，18はこれらよりやや先行する時期におかれよう。15は

番　上

浅い鉢，17はかなり深い鉢になるだろう。17は下半部を欠失するのでヘラケズリの有無は不明であるが，15・16は体部下半から底部にかけてヘラケズリを行う。この手法は庄内式甕を出土したサキゾノⅠ－1区1号住居跡出土の鉢において普遍的にみられ，15・16は終末期頃から庄内式甕を伴ってもよい時期のものであろう。先述の14についても同様なことが言える。

甑形土器　（第127図）

5は第4層から，他は第3層から出土した。発掘区中央部分から東に寄った所から主に出土している。図示したのは甑と確定できる9個体で，底部と接合しない他の土器片の中にもかなりの甑があると推測される。基本的には鉢の底部に一孔を穿ったものであるが，5のように甕に近い形態のものがある。5・7～9は体部上部を外に折り返して明確な口縁部を形成するが，4・6は前者のような口縁部は持たない。また，底



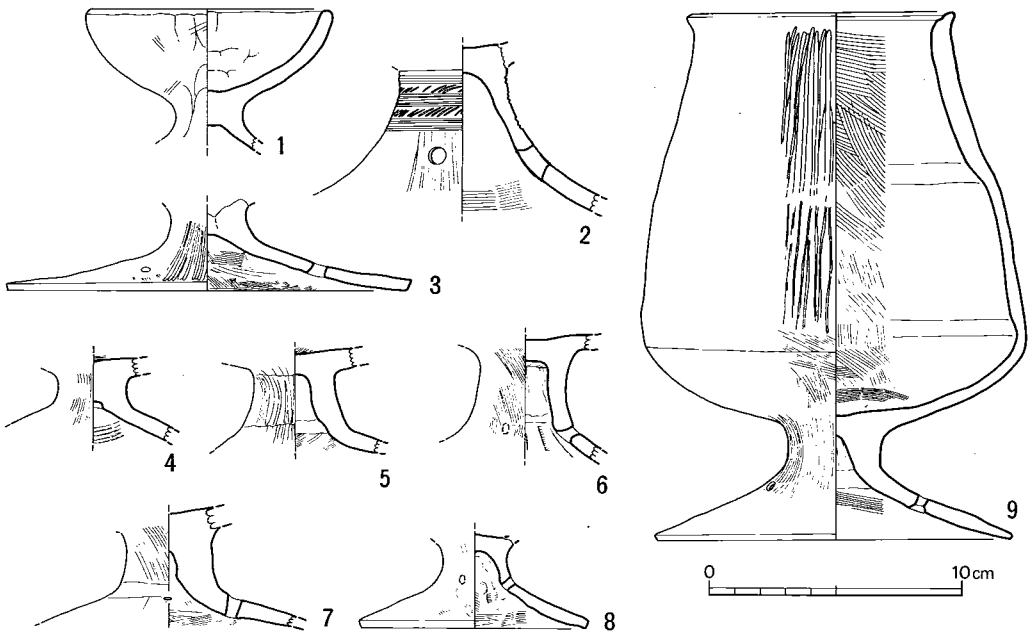
第 127 図　土器溜出土土器実測図㊹（1/4）

部も平底のものと尖底の両者がある。穿孔はすべて焼成前に行っている。2は穿孔後に底部外面に粘土をうすく貼っている。最終調整はハケによって行われるが，5のように体部下半はヘラケズリのままのものや，9のようにヘラケズリの痕跡をハケ目調整で消しきっておらず，ヘラの止まった痕跡のあるものもある。また4は体部外面のタタキ目をそのまま残している。胎土は比較的粗いものが多く砂粒も多く含む。9は後期初頭～前半頃のものと考えられ，4はタタキの上から体部下半に粗い縦位ハケ目調整を，5は体部下半を縦位ヘラケズリを行ってあり，手法的には新しいもので後期後半～末頃と推測される。他はそれらの間にはいると思われる。

脚台付土器（第128～131図）

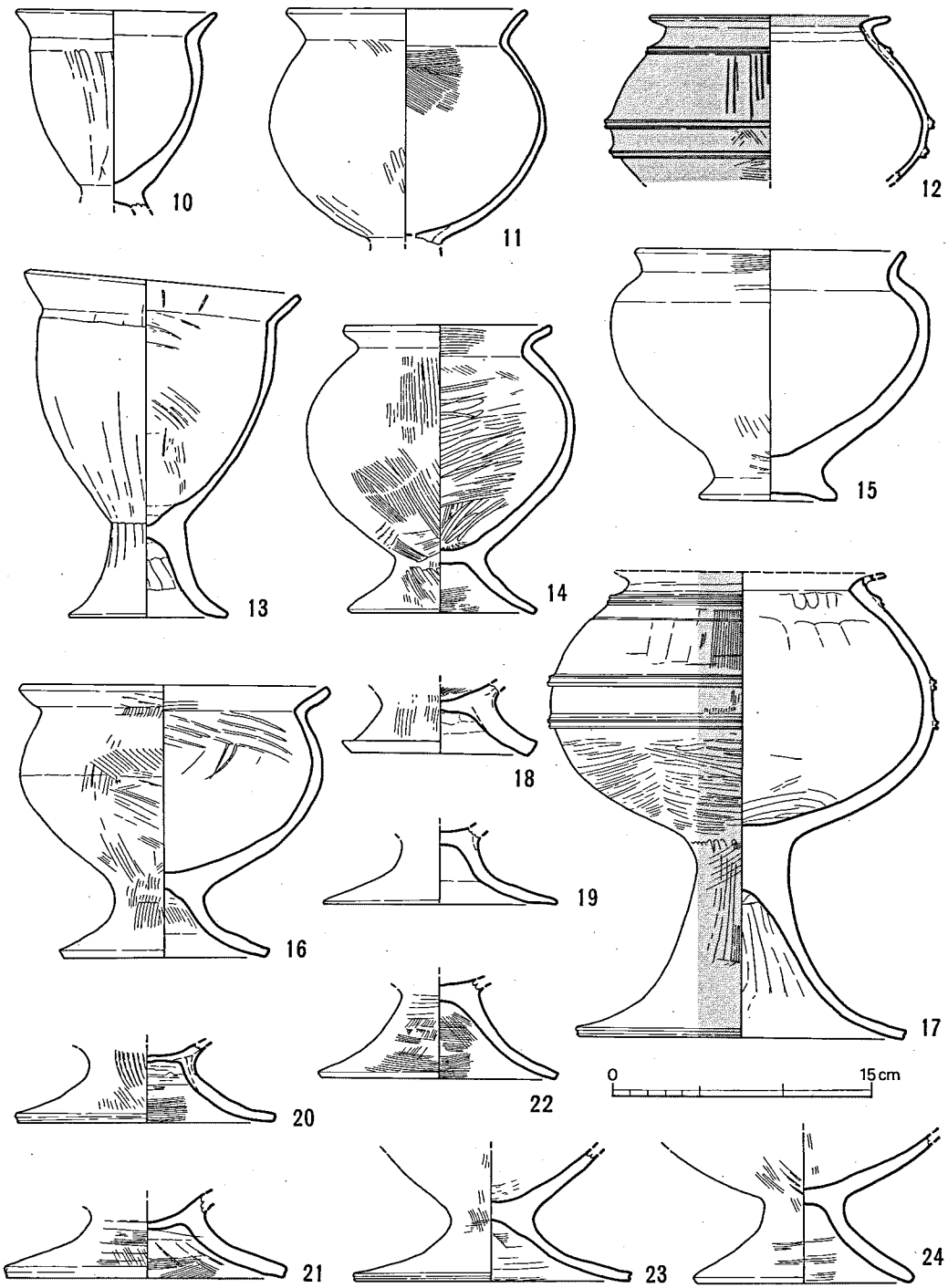
搬入品と考えられるものA，それ以外のものをBとした。

脚台付土器A（1～9）　1は第4層，他は第3層出土の土器である。1は口径9.7cm，現存高5.5cmをはかり，短脚のつく土器である。器面に若干の指圧痕がのこり，ナデ調整を行う。2は脚部上部に3段の沈線をめぐらす。沈線の各段の間に櫛状器具で刺突文を施している。脚部中位に3個の円形透し孔を配する。下段の沈線部以下は縦位のヘラミガキを，内面は透し孔より上はヘラケズリ，それより下位はヨコナデ，ハケ目調整を施す。3はサキゾノⅠ－1区1号住居跡出土土器（46）と同形のものと考えられるもので，3個の円形透し孔を配す。4～8は岡山県女男岩遺跡(註17)等で出土している脚台に類似するもので，上部に壺や鉢形土器がつくものと推定される。4･5に円形透し孔は確認できないが，6･8に3個，7に4個を配している。脚柱部が中実か中実に近



第 128 図　土器溜出土土器実測図㊺（1/3）

番 上



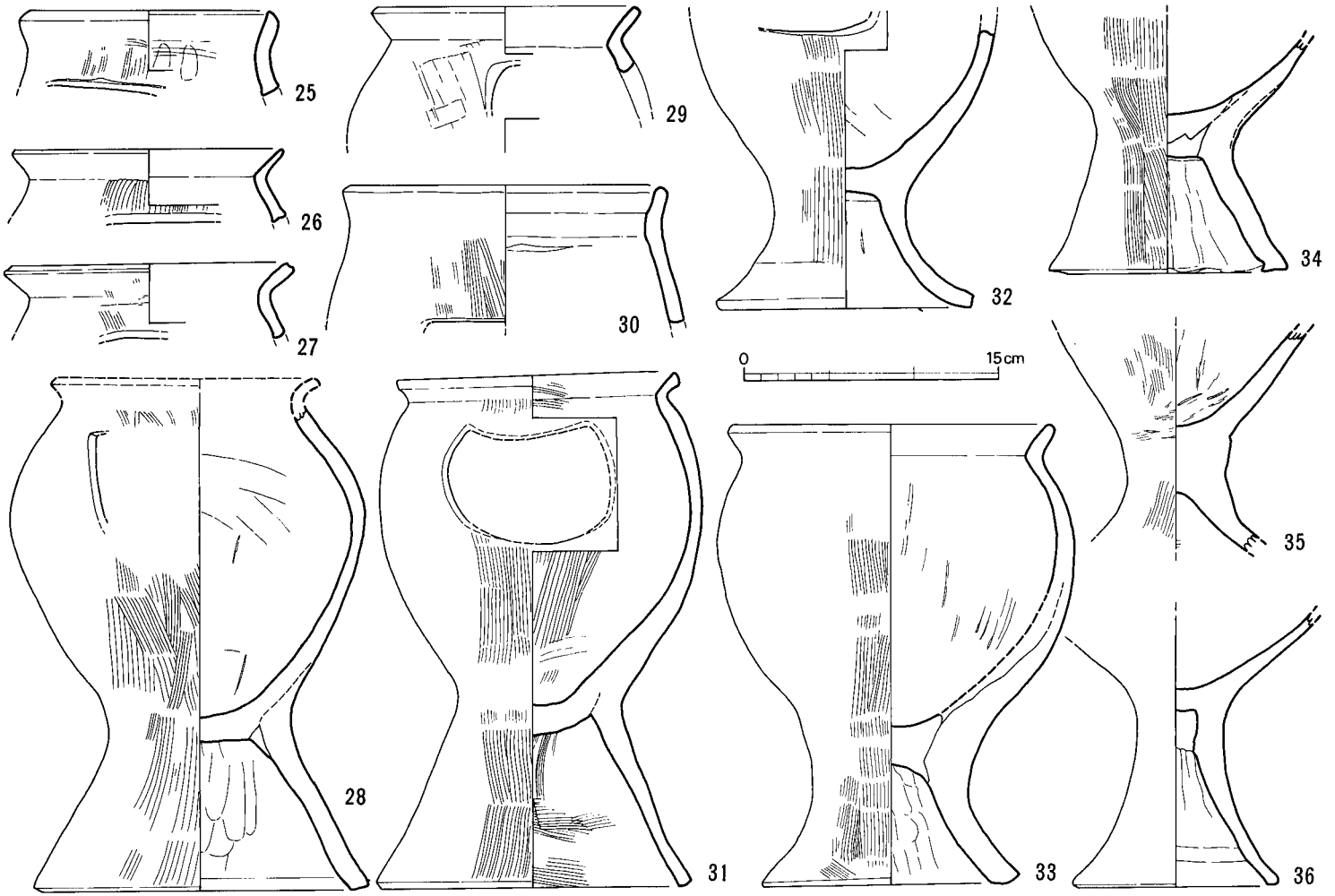
第 129 図 土器溜出土土器実測図㊻ (1/4)

いもの(4・7)と中空のもの(5・6・8)に分かれる。調整は透し孔以上の内面がナデ，他はハケ目調整を行うが，5の外面は縦位のヘラミガキを行っている。全体に細砂粒を多く含み，焼成良好で褐色～赤褐色を呈する。9はほぼ完形の台付壺形土器で，口径9.6cm，器高20.8cmをはかる逸品である。口唇部内面に一条の沈線を巡らし，脚部には小さな円形透し孔を不等間隔に4個配する。脚部内面の上半部はヘラケズリを行い，他はハケ目調整，ヘラミガキを行っている。金雲母片等の細砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶色を呈する細部において多少異なるが類似の形態の土器が岡山県上東遺跡(註18)や女男岩遺跡等の出土資料の中にみられる。以上9点の土器は北九州の土器の中に見られないものであり，主に中部瀬戸内方面からの搬入土器だと思われる。

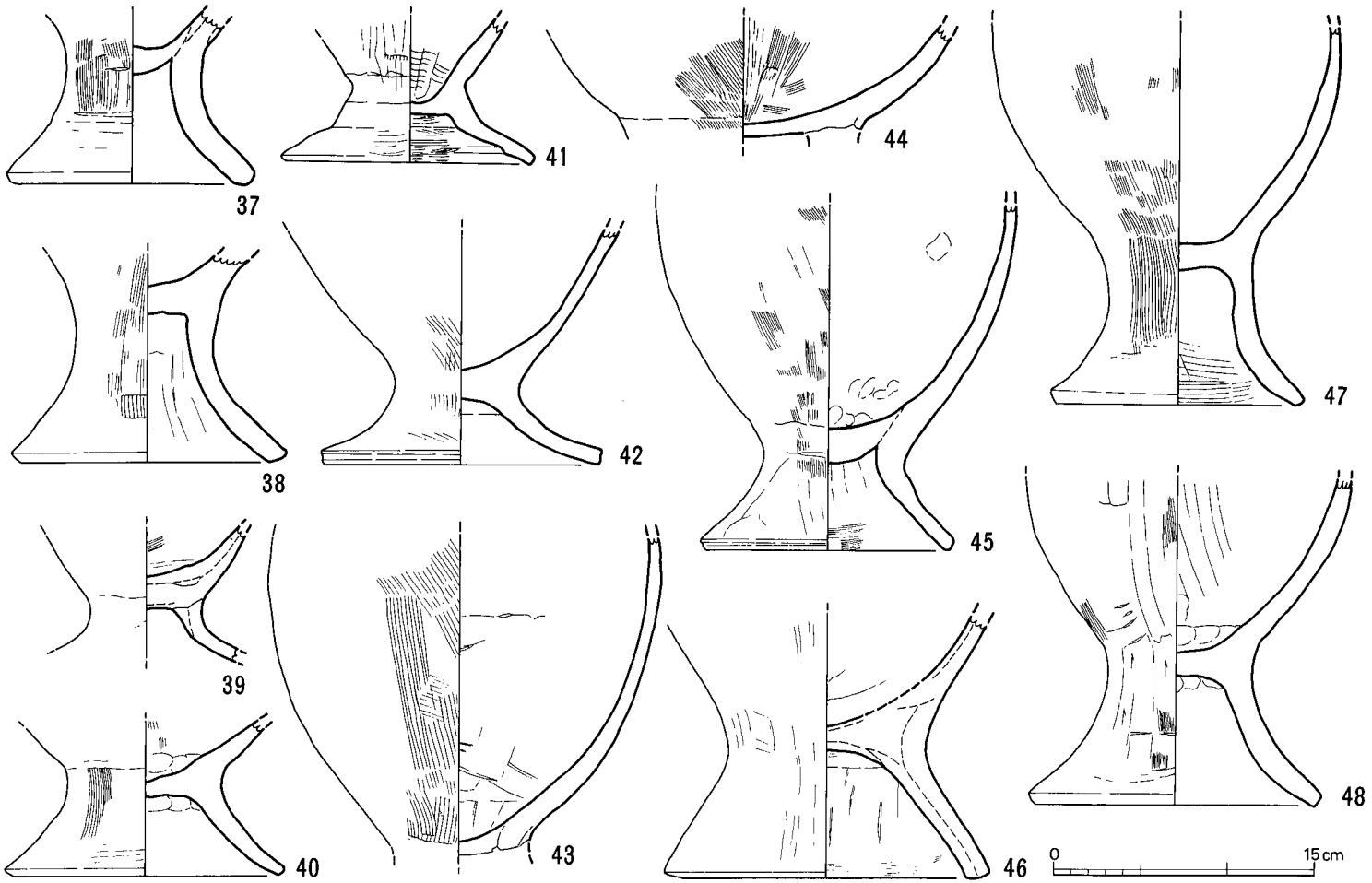
脚台付土器B（10～48）　12・17は第4層，他は第3層から出土している。出土地区は調査範囲の東西両端をのぞく，中央部分より出土し，とくにその東半部から集中的に出土している。25～27・29・30は脚台がつく確証はないが，透し窓があり，28・31・32の脚台付土器に透し窓があるので，ここに加えた。この脚台付土器は上にのる土器に，壺・甕・鉢の三器種がある。また，脚の形態は脚高が脚裾部径を上まわるもの（長脚），脚高が脚裾部径を下まわるもの（短脚）にわかれる。

12・17は短頸壺に脚台のつくものである。17は口縁部に円孔があり，本来は蓋とセットになっていたものであろう。頸部下に1本，胴部中位に2本の凸帯がめぐり，頸部凸帯と胴部下凸帯の間は縦位のハケ目調整を，胴部下段凸帯から低部にかけては横位のヘラミガキを行っている。脚部はハケ目の上から縦位のヘラミガキを行う。口縁部内側と，胴部下段凸帯下から脚上半部に丹が残って本来は外面は全面に丹彩されていたものと推定する。12は17よりやや小型ではあるが残存部の器形は17の相似形であり，長脚の脚台がつくものと推定される。丹塗りされ，頸部凸帯と胴部上段の凸帯の間は縦位の暗文がはいる。胴部凸帯以下は横～斜位のハケ目が観察される。口縁部内側および外面は全面に丹彩されている。12・17ともに胎土が緻密で，焼成は極めて良好で丹の下地は淡茶色を呈している。中期後半であろう。15・16は上部が鉢形になるものである。共に脚台部は短脚で，15は底部自体を厚くつくり，上げ底様にしたもののようで他の脚台付土器とはやや異る。両者とも外面はハケ目調整，内面はナデ調整が基本である。

脚台の上にのる甕は長胴と球胴の二種類がある。11・14は球胴の甕がのり，短脚がつく。10・13・28・31～33は長胴形甕に脚がつくもので，窓状の透しがはいるものがある。完形品に近いものによれば脚は短いものがつくようである。31は幅10cm強，高さ6cm程の⌓形の透し窓がつくが，他に方形～長方形を呈する例もある。次に脚台のつけ方については，28のように上にのる土器をまず作った後に胴部下位に脚台をとり付け隙き間をふさぐもの，33・45のように脚台と上部の土器を共作りにし，甕底部と脚台天井部に相当する部分の空間に後から円柱状の粘土により一度にふさぐもの，34のように基本的には33と同様のつくり方だが空間をふさぐ粘土につぎ目が見られるもの等がある。31は略完形のため不分明な点を残すが，脚裾部から甕底部に相

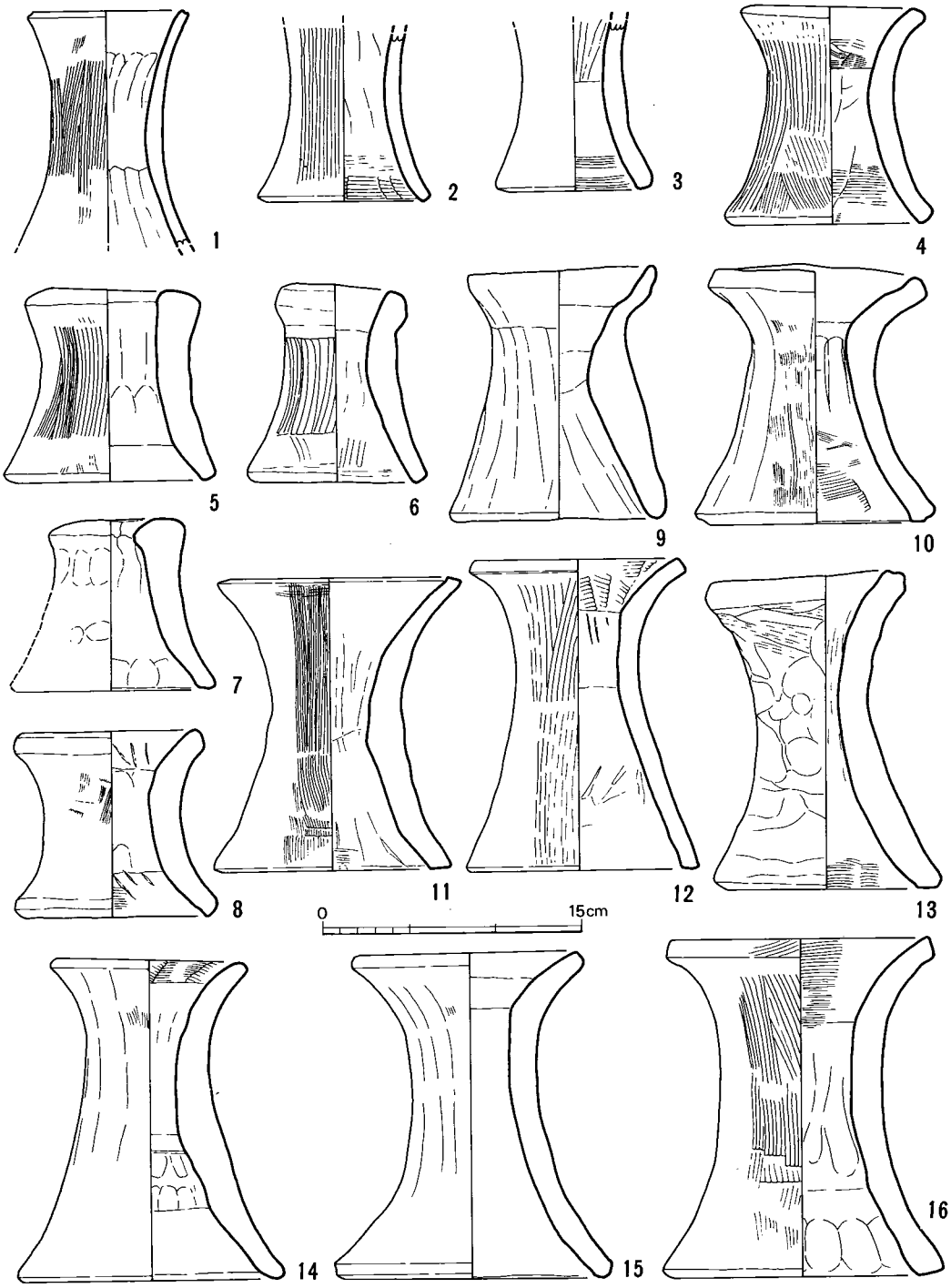


第 130 図 土器溜出土土器実測図㊼ (1/4)



第 131 図 土器溜出土土器実測図㊽ (1/4)

番 上



第 132 図 土器溜出土土器実測図㊾ (1/4)

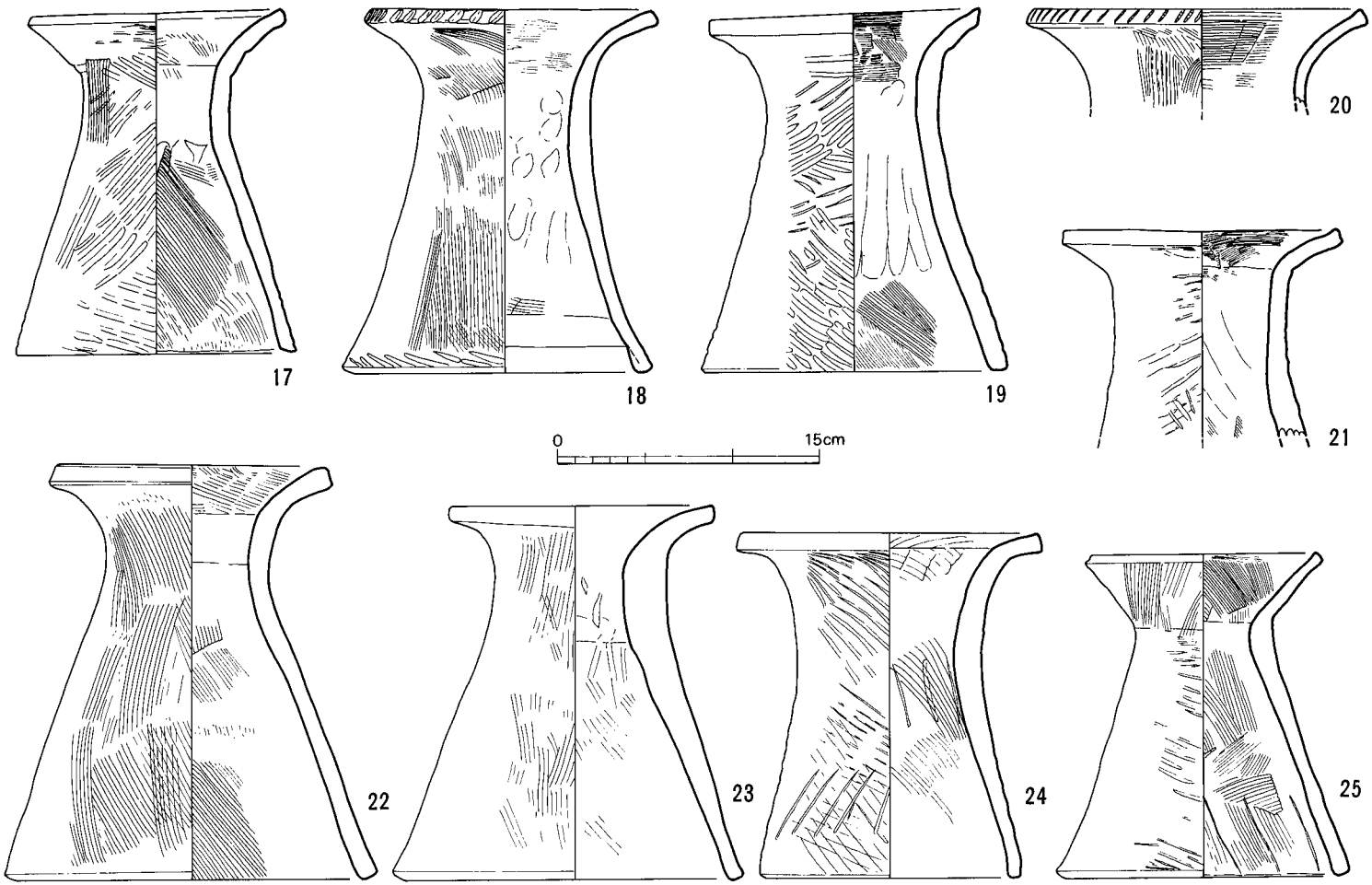
当する部分に粘土をつめこんでおり，33・34と同様な製作技法に依ったものと思われる。またこれら以外にも小形の短脚の脚台部が多数出土しており20・21等のものには鉢が，22・24のようなものには球胴形甕が，35・36には長胴形甕がのったものと思われる。透し窓をあけた土器や長胴甕にのる脚台付土器は一般に胎土が粗く，焼成は普通程度でくすんだ淡茶色を呈するものが多い。これらは10・13は古い様相を呈するが，おおむね終末期頃のものであろう。

器台形土器（図版44，第132～134図）

すべて第3層としてとりあげたもので，大型と小型がある。二次的に火を受けた痕跡が明らかなものは少ない。

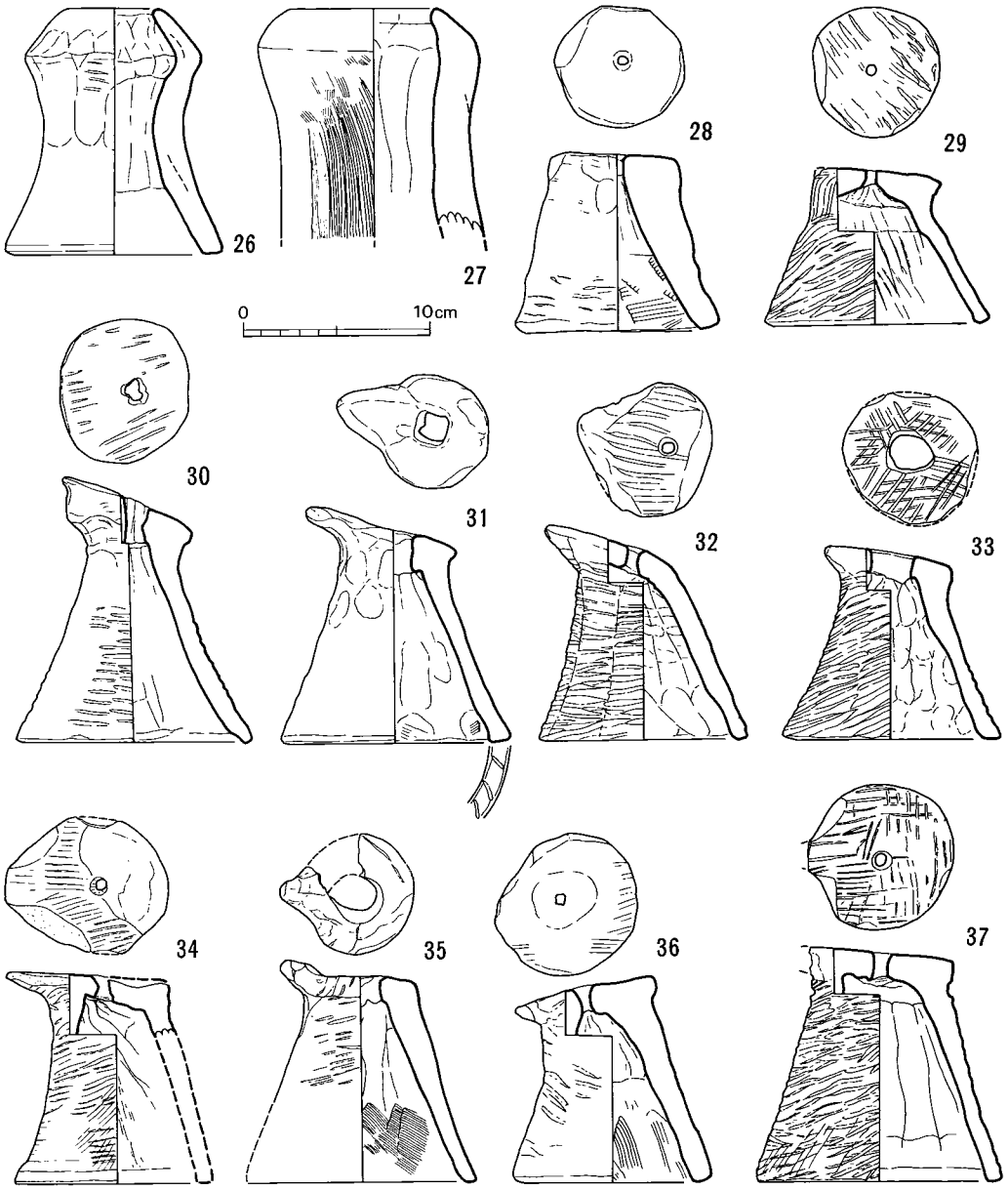
1・2は他と比べて器肉の薄いスマートな器台である。二次的加熱のため変色している。中期末頃のものであろう。3は1・2と比べて器肉が厚く，ボッテリとしており，つくりは雑である。外面はハケをナデ消している。4～8は小型の器台で，4・8は口縁部形と下端部形がほぼ同じで上半と下半はほぼ相似形をなすが，5～7は口縁部と台裾部の形態差がはっきりとし，台裾部径が口径を上まわり安定感がある。口縁部の形態にバラエティがあり，7は後述する27と同じタイプであろう。これらは後期前半から中葉にかけてのものと考えるが，4は全体の器形が端整で，ハケ目調整がしっかりとしていることより，他のものと比べて古い様相が認められる。9・10は器高15cm前後の器台で，口縁部下でくびれて頸部を明瞭に形成する。9は頸部以下に比べて口縁部の器肉が極端にうすく，口縁部が内湾して明瞭な口縁部を形づくるのが特徴である。深町Ⅰ—15包含層出土の器台（『三雲遺跡』Ⅱ）に本例と似た受け口状口縁部をもつ器台があり，同一系譜上にあるものと考えられる。10は頸部下内面にシボリの痕があり，口縁部内外面はヨコナデ，他はハケ目調整である。両者とも明確な頸部が体部上半部にあり，全体のプロポーションは後述する17～24の大型の器台と類似しており，後期後半以降の小型器台かと推定する。

11～16は器高17cm～20cm程度の器台で，9・10程には頸部の存在が明確ではない。口縁部と台裾部が相似した形態を示す中期の器台の形態的特徴を未だ完全には払拭しきっていない。頸部の存在に注目すれば12は17～24に接近した形態を示し，その意味で新しい様相を示している。また，口縁部径に対して台裾部径が上まわる14・15についても同様のことが言える。16はこれらの器台と比較して端整で前記の二つの様相の上からは古い要素の器台である。あるいは先述の4と共存するものかと推測され，小型器台4，大型器台16の二者の使い分けがあったのかも知れない。16は後期前半頃，他は前半～中葉頃で，一部に後半に降る可能性もあると考えるが，確かな根拠はない。17～25は器高20cm前後の大型の器台で，口縁部下でくびれて明瞭な頸部を形づくり，24はその傾向が顕著である。22・23は明瞭ではないが，外面のハケ目調整の下にタタキ目が残り，19はタタキ目だけでハケ目調整はなされない。タタキ目の目立つのがこの器台の一つの特徴である。また1～17の器台にはなかった口縁部への刻み目を施す手法が18・20には見ら



第 133 図　土器溜出土土器実測図㊿ (1/4)

れ，甕・壺形の刻み目手法による加飾の傾向と規を一にすると思われる。器形的にはくびれた頸部以下がほぼ直線的に開いて台裾部に到るタイプ（17～19・22・23・25）と，台裾部付近で内湾気味になるタイプ（24）がある。前者は口径を台裾部径が上まわり，頸部から口縁部がまっすぐに外反するに対して，後者は口径が台裾部径を上まわり，口縁部は途中で外折して寝る



第 134 図　土器溜出土土器実測図㊿（1/4）

番　上

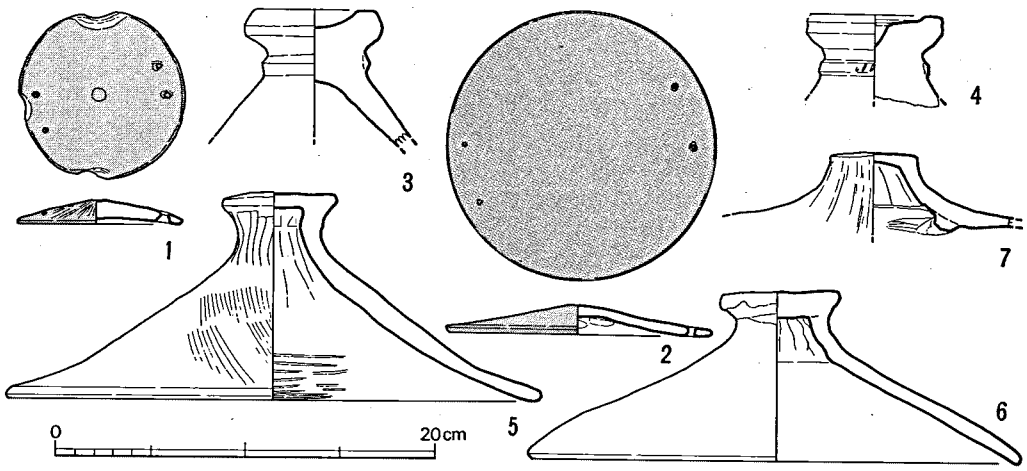
傾向にある。台裾部付近が内湾する傾向にある器台は，本調査区のすぐ南の番上II—6の6号住居跡（『三雲遺跡』I）で終末期の土器群と一括出土した器台は台裾部がわずかに内湾し，同2号土器溜やサキゾノI—1の2号住居跡の布留式併行期の古い時期では台裾部の内湾はさらに強くなっており，この台裾部の内湾化の傾向は新しい様相としてとらえることができる。器台のもう一つの要素である頸部の形態であるが，25は他と比べて頸部での屈曲がはっきりとして「く」字形に近い形を呈する。この種の器台は先述の番上II—6，1号土器溜や，サキゾノI—1の1号住居跡で出土し，前者は後期後半頃，後者には庄内式の甕が伴っている。よって，これらの器台の所属時期は終末期前後の時期幅を考えることができよう。26・27は口縁部が内傾する器台で，26は小型，27は大型のものである。器肉が厚く内面に指圧痕とシボリ目がのこり，外面は26がナデ調整でタタキ目がのこり，27はハケ目調整を行う。28は器肉の厚いぼてっとした感じの器台である。器高は低いが29は30～37の器台とつくりや手法は同様である。30～37は「沓形器台」といわれるもので，31をのぞいて外面はタタキ目がはっきりと残る。頂部平坦面が傾斜するもの（30～33・36）と水平に近いもの（34・35・37）がある。頂部円孔も径5㎜前後のものと1～2㎝のものと大小2段がある。3個が1セットとなって使用されたものであろう。31はつまみの部分の平面観は大きくぼってりとしており，タタキのみられない事は番上II—6の1号住居跡出土例と近似し，後期後半頃かやや降る頃に，他はタタキ目の顕著なことより終末期頃におくことができよう。

蓋（第135図）

7は3層から，他は4層から出土した。

蓋A　（1・2）　短頸壺の蓋である。1は外縁の3ケ所が打ちかかれる。中期後半に属す。

蓋B　（3～6）　3・4は中期前半の甕の蓋で，三角凸帯がめぐり，頂部がくぼむ。5は中



第 135 図　土器溜出土土器実測図㊿（1/4）

型甕の蓋で，つまみの外面はヘラケズリを行う。中期中葉頃であろう。6も中型甕の蓋で中期後半のものであろう。

蓋C（7）　小片からの反転復原である。外面は縦位のヘラケズリ，内面はしぼり目の直下に粘土紐をはりつけているが一巡はしない。粘土紐以下はヨコナデである。何の蓋になるかは不明で，所属時期も後期という以外には明確にしがたい。細砂粒を多く含み，焼成良好で暗褐色を呈する。類似品を見かけないが終末期頃のものであろうか。

その他の土器（図版45・46，第136・137図）

20は表採だが，他はすべて第3層からの出土品である。このうち，1～15は北部九州では系譜の追えない器形の土器で山陰や瀬戸内方面に出自を求められよう。

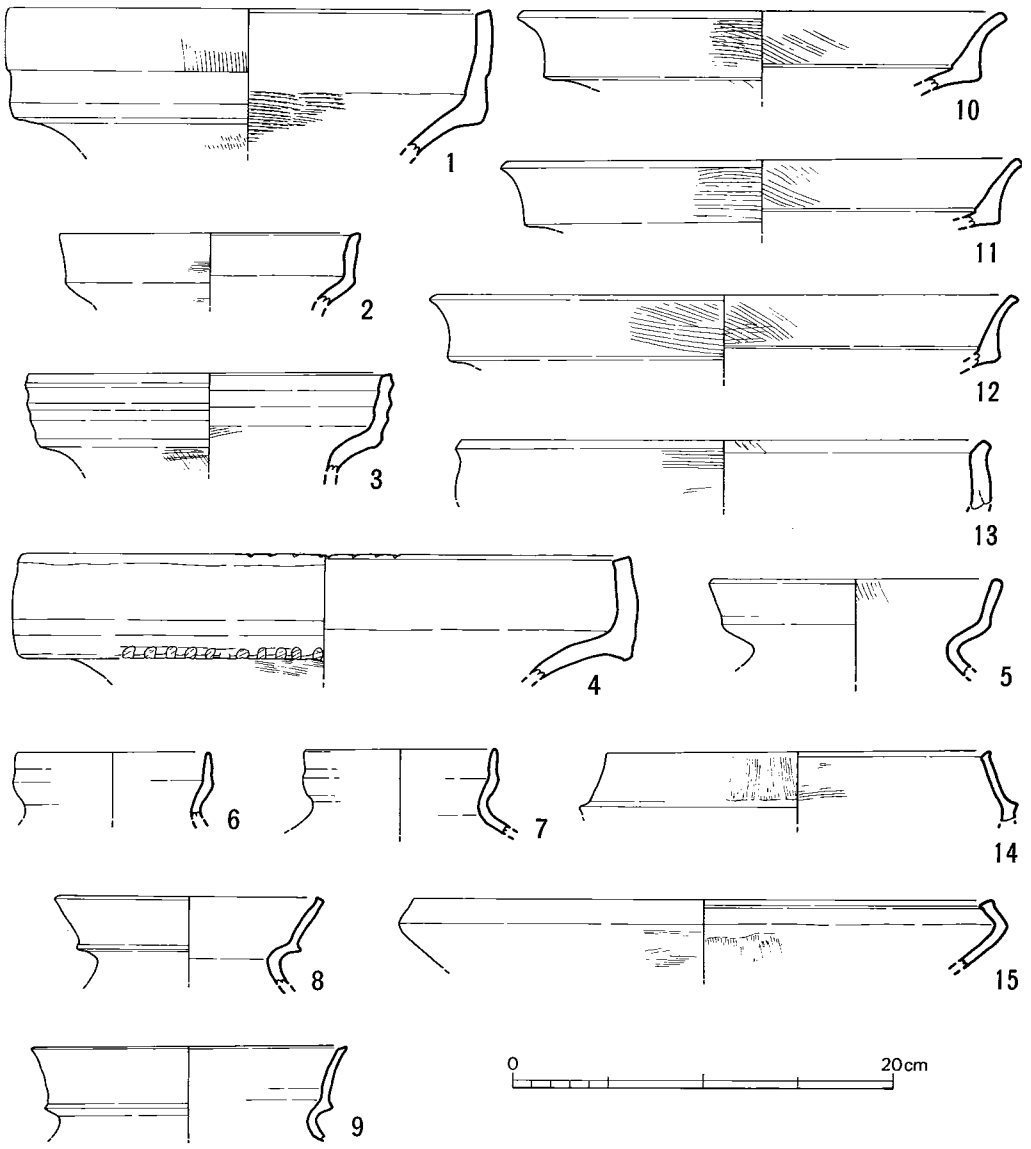
1・3・4は口縁部小片の復原図だが二重口縁の壺形土器になるだろう。1は口縁部が内湾気味に直立する。石英粒や雲母片を多く含み，焼成は普通で褐色を呈する。3はやや外反気味の直立する口縁で外面は強いヨコナデのため凹線状のものが4本巡る。ごく細かい砂粒を含み，焼成良好で淡褐色を呈する。4は内湾気味に直立する口縁部を呈し，口縁端部と屈折部に刻み目を施す。細かい石英・赤褐色粒子や細かい金雲母片を含み，焼成普通程度で赤褐色～灰褐色を呈する。口縁部内外面はヨコナデを施すが頸部はハケ目調整を行う。ただし，1は口縁部外面のハケ目がヨコナデにより充分には消されていない。これらの土器と比較的似た口縁部を有するものが岡山県上東遺跡，下田所調査区（第143図－479，（註18））で出土しており，この方面からの搬入品かと思われ，これらの土器は土師器に含まれよう。

2・5は二重口縁の甕形土器である。2は外反気味のほぼ直立する口縁を呈し，内外面はヨコナデ調整される。細かい石英・金雲母・赤褐色粒子を含み，焼成良好で淡黄褐色を呈する。5は口縁部が外反し，口縁内面上半は縦位ハケ目が残るが，基本的には内外面をヨコナデ調整をする。胎土は細砂粒を含み，焼成はふつう程度で褐色を呈する。

6～9は山陰系の二重口縁の土器で甕あるいは壺になるものである。6・7は極小片で口縁部が外反しながら上半部が直立する。器形はよく似ており，ともに内外面ともヨコナデ調整をする。胎土は金雲母・石英の微砂粒を多く含み，焼成は普通程度で，黄褐色～褐色を呈する。8は口縁部が肥厚し，内外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み，焼成良好で白ぽい褐色を呈する。9は8に比して口縁の外反度が弱く，全体に角ばって端整な土器である。口唇部はわずかに外反して薄くつくる。内外面はヨコナデ調整で，頸部や下位からヘラケズリを行う。石英・金雲母の細粒子を含み，焼成ふつうで淡褐色を呈する。

10～12は大きく外反する口縁部の土器で，屈折部は厚いが口唇部に向かって急速に器肉の厚味を減ずる。外面は横位ハケ目，内面は右下がりのハケ目調整を行うことは共通している。ともに，石英・金雲母・角閃石粒子を含み，焼成は良好で明褐色を呈する。全形を推測する材料を持たないが，口縁部が急速に薄くなっているので，高杯口縁部と考えるよりも二重口縁の壺

番　上

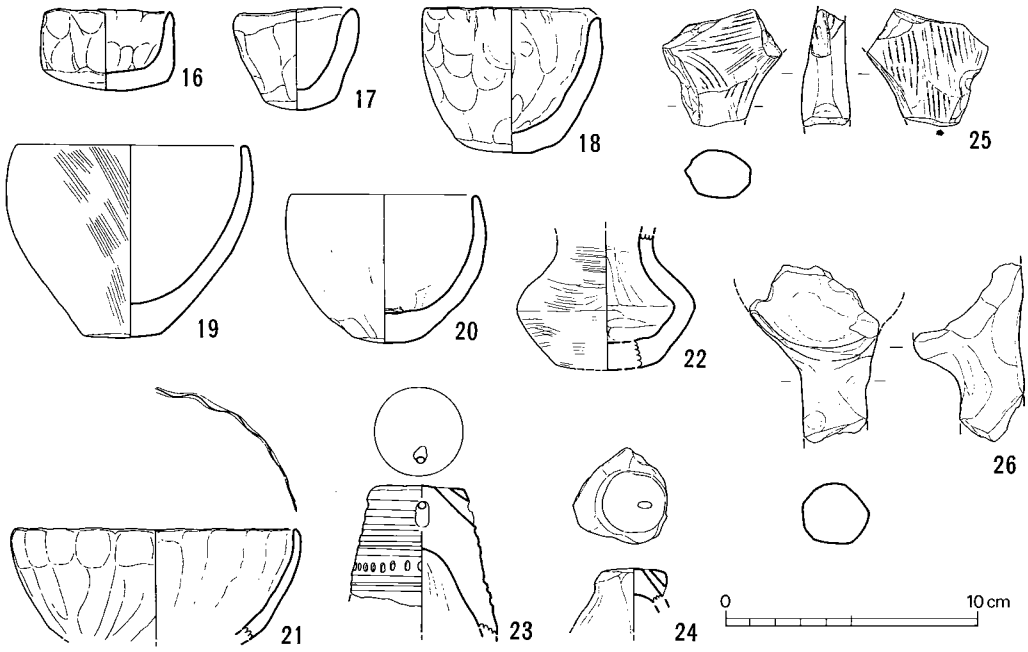


第 136 図　土器溜出土土器実測図㊸（1/4）

形土器になるのではないかと想像する。また，所属時期や搬入母体の地域についても判断しずらいが，恐らくは弥生土器には含まれないのではなかろうか。

13は極小片で，口縁端部付近で外折し，図の下端部は粘土接合面で内面が凹むので内側に屈折しそうである。胎土に砂粒を多く含み，焼成良好で灰褐色を呈する。全体の器形は不明で，後期以降という以外はわからない。

14は二重口縁の壺になるであろうか。粘土の継ぎめで割れており，外面はハケ目調整を行っ



第 137 図　土器溜出土土器実測図㊹（1/3）

ている。白色砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶灰色を呈する。

15は高杯の口縁部片かと推定される。砂粒を多く含み，茶褐色を呈し，焼成良好である。

16～18は手捏の土器で全体に器肉が厚い。口径・器高は16が4.9cm・3.2cm，17が4.4cm・4 cm，18が6.9cm・5.7cmである。16は口径と底径が等しく体部がほぼ直立するが，17・18は底径が狭いため，体部が開く。砂粒を多く含み，焼成普通程度で褐色を呈する。これらの土器の底部はレンズ状を呈し，後期後半以降で終末期を前後する時期のものであろう。

19・20は椀形の小形土器である。口縁部はやや内傾し，底部はレンズ状を呈する。細砂を多く含み，焼成は普通で淡褐色を呈する。体部はハケ目とナデ調整を行い，20は外面中位にヘラ痕がつく。底部の形状からみて，後期後半から終末期頃のものであろう。

21は鉢形の土器で口縁部が波うっている。内外面に強いナデや指圧痕がのこる。

22は小型の壺形土器で器肉が厚い。胴部中位で胴が強く張り，大きな底部はレンズ状を呈する。外面は横位ハケ目調整，内面は頸部にシボリ目が残り胴部はナデ調整をしている。

23・24は天地は不明だが，円孔のある方を天とした。23は外面に7条の凹線があり，体部中位に刺突文を入れる。24は手捏状のものである。両者とも器高や下端部の形状は不明。

25は何になるか不明である。表・裏内とも粗いハケ目調整を施す。細砂粒を含み，焼成ふつうで淡～灰褐色を呈する。

26は手捏の杓子状土製品である。砂粒を多く含み，褐色を呈し，焼成はふつう程度である。

番　上

番上II－6の終末期頃と報告された6号住居跡で本例と同程度の大きさのものが出土している。ほぼ同時期のものであろう。

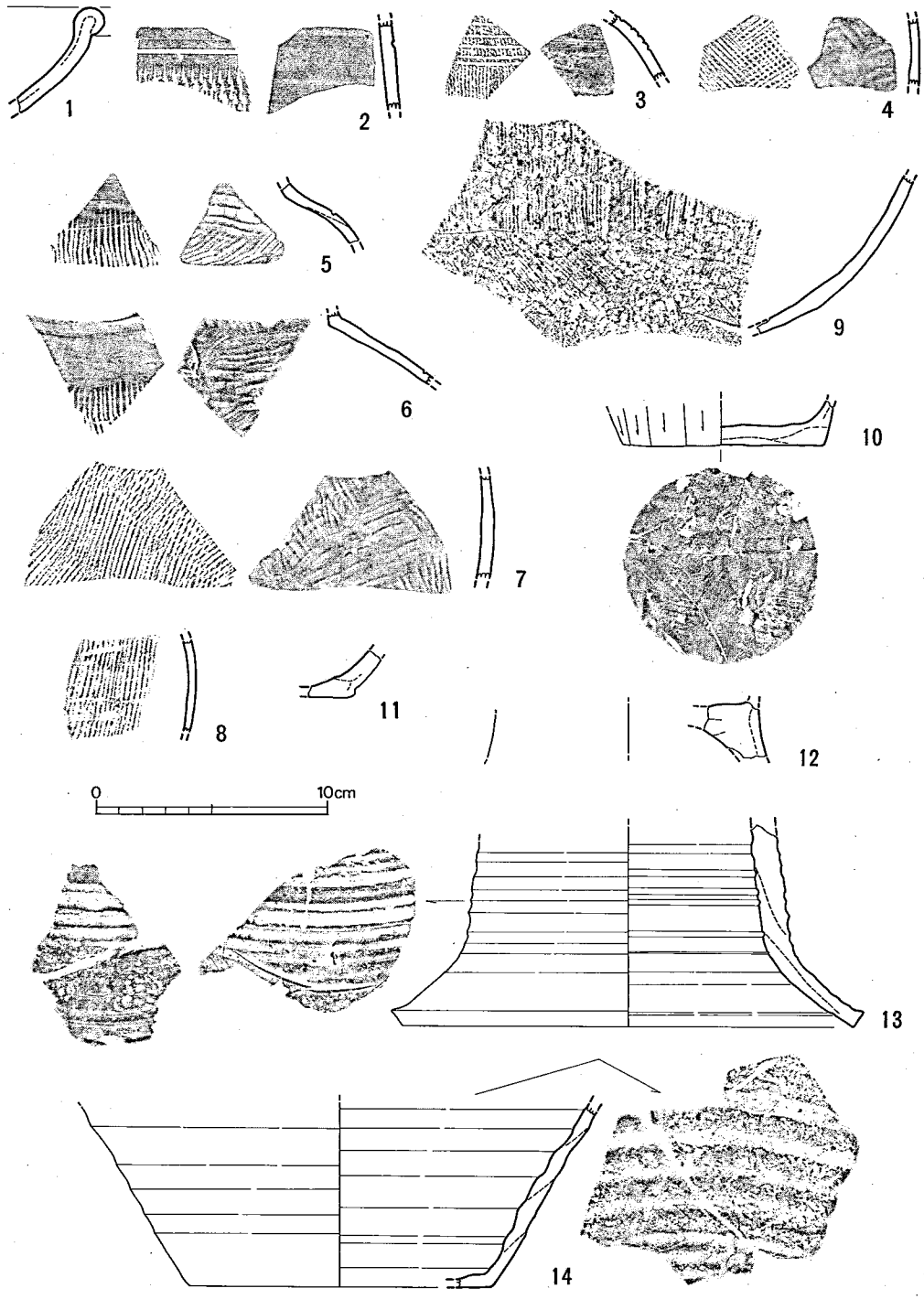
朝鮮系外来土器（図版47・48，第138・139図）

2は新しいと思われるが1は第4層，3以下は第3層，しかも3層下部以下から出土しているものを含む。純土器層からの出土で出土状態がきちっと層位的にとりあげられる状態ではなかったので，3以下はあるいは4層に含まれるものがある可能性もある。発掘区内での出土地点はほぼ全面にわたるが，中央部付近から東半部に量的に多く出土している。無文土器の1や不明の2をのぞいて他は一般には漢式土器と呼ばれているものである。胎土は極めて緻密である。3～7は陶質のものであるが，8以下は軟質のものである。軟質の中でもかなりの差があり，あえてたとえれば8は焼成不良の須恵器に近く，10は中世に見られる火鉢に近い。12・13はたとえに困るが，これら以外のものは軟質か瓦質に近いもので割れやすい。瓦質に近いものは器表がはがれやすく，内外面は暗灰～黒灰色で断面が淡茶灰～灰色を呈するという共通性がある。以下，各個については詳述する。

無文土器　（1）　第4層から出土した鉢形土器口縁部の極小片である。図の傾きに確信はない。口縁部は内側から粘土を外側へ折り曲げることによって成形している。口縁部と体部外面はヨコナデを施す。内面は平滑で部分的に朱かと思われる赤色顔料の付着が見られる。胎土に石英粒や白色砂粒を多く含み，器表に砂粒が目立つ。焼成は良好で器面はしっかりとしており，明茶褐色を呈するが，口縁部付近は淡黄褐色～暗灰褐色を呈する。

漢式土器　（2～29）　2は第3層から出土しているが，3以下の土器と比べて調整や焼成が異なる。焼成は極めて良好で須恵器の焼成が極く良いのと比べて見劣りしない。外面は沈線下にヘラで4㎜間隔に施文している。内面はヨコナデ調整で，ロクロを使用しているように見受けられる。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まない。器形は不明で，図は天地逆かも知れない。

3～9は壺形土器の破片である。4・9は中期後半の土器群が量的に主体をなす層からの出土である。他は中期に含まれる可能性も残すが，おおむね後期の土器を出土する層位からの出土である。9は軟質だが，他は硬質の土器である。3・5・6は肩部の破片資料で外面は縦位の縄蓆文のタタキ目を施し，ヘラ描き沈線をめぐらす。3は口縁部からやや離れた部分と思われ，沈線が多く観察され，各沈線間の間隔は狭い。5・6は各1条の沈線が認められるが，本来はその下位に更に複数の沈線がめぐるものと思われる。内面は，3はヨコナデだが，5・6はあて具の圧痕が明瞭にのこる。4は縄蓆文タタキ目が交錯しており，底部付近の破片であろう。内面にあて具の圧痕が明瞭にのこる。7・8は沈線が見られないこと，縄蓆文タタキ目が並列して交錯しないことから体部の破片であろうと思われる。8は内面が荒れて不明だが，7はあて具の圧痕が明瞭にのこる。9は下半部の縄蓆文のタタキ目が交錯しており，体部から底部にかけての破片であろう。内面は当て具痕はなく，指圧痕が見られる。外面のタタキ目の



第 138 図　土器溜出土土器実測図㊺ (1/3)

番　上

幅は1.5～2cm程度である。これらの土器は胎土が緻密で目につく砂粒をほとんど含まない。3～8は陶質の土器だが9は軟質のため器壁が薄く剝落する。色調は，5・6・7が外面は青灰色，内面および断面は茶褐色である。3の外面はやや黄味をおびた灰色，内面と断面は灰色，4は同様にネヅミ色，くすんだ灰色，8は器壁面がほとんど剝落して黄灰色，9は内外とも器面は暗灰色，断面は淡灰～灰色である。

10は円筒形土器の底部で底径8.8cm，現存高1.9cmをはかる。底面はナデや粗いハケ目かと見られる痕跡がある。体部は縦位にヘラケズリされ，幅1.5cm前後～1cmの面が18個存在する。内面は同心円状の強いナデが施され，回転台かロクロの使用をうかがわせる。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まず，焼成良好で，外面は黒灰色，内面はくすんだ灰色を呈する，器面は平滑であり，楽浪系の軟質の土器である。出土層位は3層であるが，後期前半か中葉よりは降らないだろう。

11は極小片で内外面とも磨滅している。軟質の土器で平底を呈するが器形は不明。胎土は緻密で，焼成は並で色調は淡茶灰色を呈する。第3層から出土し，後期に含まれるだろうと思う。

12・13は共に軟質の土器である。13は器台の脚裾部だと思われる。12も器台になるかと推測するが確証はなく，図の天地にも確信はない。両者とも器肉が厚くて重量感があり，胎土がやや砂質気味で緻密な点が他の出土土器と異なる所である。12は胎土は緻密で金雲母片と白色砂粒を若干含む。焼成は良好で内面は灰褐色，上面は淡茶色，体部外面は器表が剝落しており，器表下は淡灰褐色を呈する。調整痕は明瞭には残らないがヨコナデであろう。13は接合できない2片からの推定復原図である。裾部径19.5cm，現存高8.7cm程である。ヨコナデ調整を施し，内外面に凹線状の凹凸が目立つ。胎土は緻密で金雲母の微粒子を若干含む。焼成良好で，外面器表はくすんだ淡灰茶色，内外面の器表下は灰茶色，断面はネズミ色，内面器表は暗灰色を呈する。つくりはやや粗いが手ざわりがなめらかである。ともに中期後半を下限とする層から出土している。

14は軟質の土器である。底部片で鉢か甕であろう。推定底径13cm，同現存高8cmをはかる。体部は凹凸が顕著で内面は段状をなす。調整痕を観察しずらいが，ヨコナデ調整であろう。胎土は緻密でほとんど砂粒を含まず，焼成はふつう程度である。外面は黒灰色，内面は暗灰色，断面は黄色気味の淡灰茶色を呈する。中期後半の土器を主に含む層からの出土である。

15は軟質の土器で，中期後半頃の短頸壺と全く同じ器形を呈し，口縁部には蓋をするための径2mm程度の円孔がある。孔の所で割れた小砂片なので2個で1対になるか否かは不明。器面が荒れて調整痕が不明瞭だがヨコナデ調整であろう。口縁部は外方に折り返しただけで，体部には粘土の継ぎ目が視認できる。胎土は緻密で白色微砂粒をわずかに含む。焼成良好で外面は黒灰色，内面は明灰色，断面は灰色である。中期の土器に伴う可能性がある。

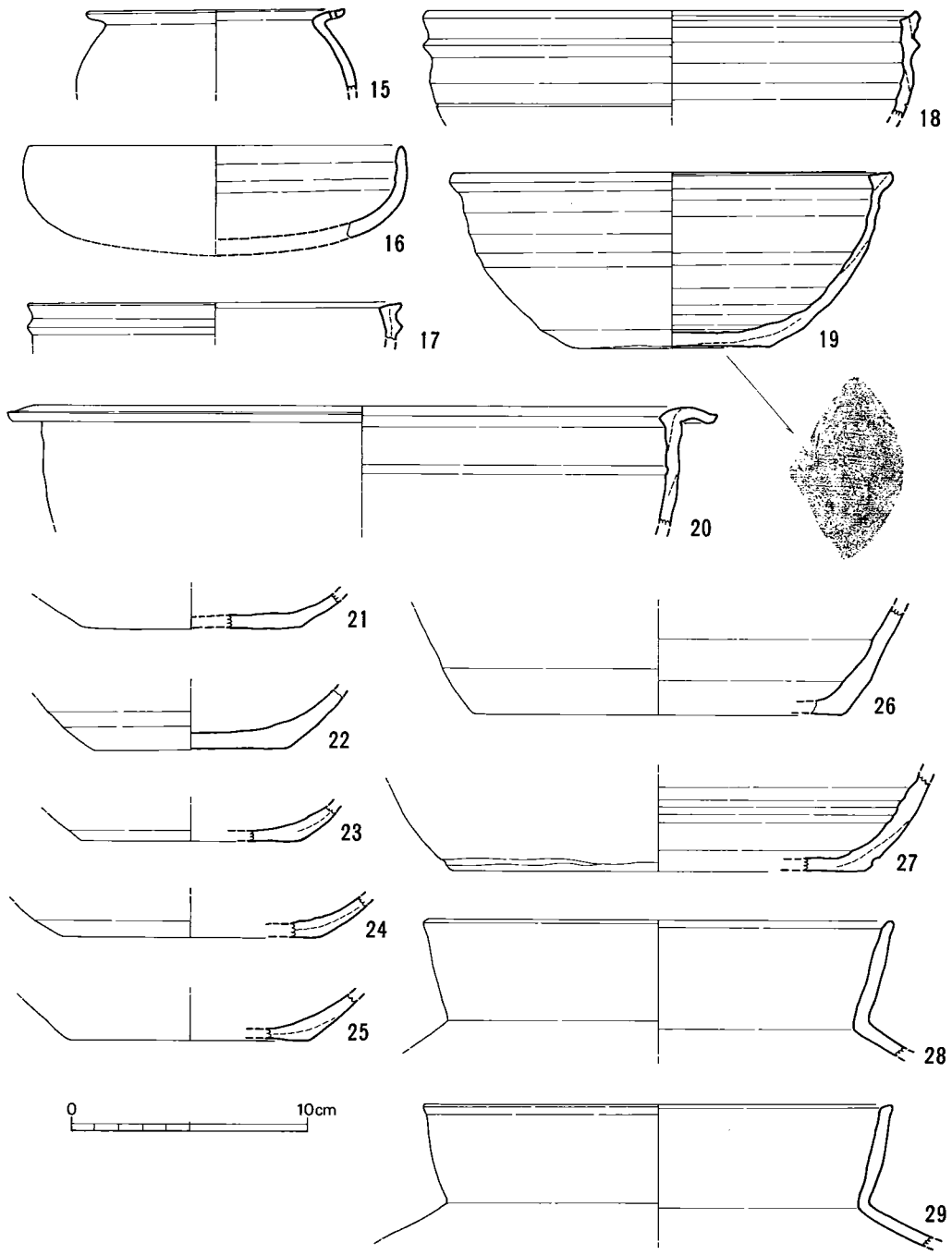
16は軟質の土器で椀あるいは杯形の土器である。推定口径15.8cmをはかる。底部は丸底にな

るであろうと推測され，推定高は4.5～5cmの幅におさまるだろう。器面が荒れるが，調整はヨコナデであろう。胎土は緻密だが他の土器片と比べて白色砂粒の混入が比較的多い。焼成はふつう程度で色調は15と同じである。

17～27は軟質の鉢形土器の破片資料である。17・18・20は極小片からの推定復原図のため，径・傾きは正確ではない。底部は出土資料でみる限りにおいてはすべて大きな平底である。口径の大小で，口縁外径30cm程度に推定復原される大型の20と，同20cm前後の中型の18・19，同16cm程の小型の17とにわかれる。17・18は口唇部に若干の形態差があるが口縁下に三角凸帯をめぐらす等の共通点があり，口唇部付近の粘土の継ぎ目も似ており，ほぼ同一時期のものであろう。19は底部全体の¼程の破片からの復原図で口径20.8cm，器高7.5cmをはかる。14程ではないが18と同様に体部に凹凸が目立つ。内外面はヨコナデ調整で底部外面は周縁部の幅約1cm程の範囲を横にヘラケズリをしたかと見られる微砂粒の移動痕があり，その面は平滑である。この周縁部より内側はやや上げ底状になっており，細いハケ目調整を施している。17～19は器形は相似したものと思われ，胎土は緻密で焼成は良好である。色調は外面黒灰色，内面は暗灰色で断面は器表に近い部分は明淡茶灰色，その内側は淡茶灰色を呈する。20は「須玖式」土器に酷似した口縁部を有する。内面に幅4mm程の凹線をめぐらし，口唇部をやや上方につまみ上げ体部はにぶい凹凸が認められる。器面が荒れるがヨコナデ調整であろう。胎土は緻密で焼成は良い。内外面は暗灰色，断面は淡茶灰色を呈する。中期の土器を含む層から出土している。21～25は19程度の大きさの鉢底部であろう。小片で器面が風化しているので調整痕は視認できない。胎土は緻密で焼成はおおむね良好である。器表は暗灰色を基本とし，断面は淡茶灰色・灰色を呈する。中期後半～後期にかけての時期幅が考えられる。26・27は軟質の大型の鉢底部で極小片からの推定復原図である。体部は器内の凹凸が見られ，26の体部下端の幅2cm程の範囲は，あるいはヘラケズリを行ったかと見られる微砂粒の移動痕のようなものと，ヘラをあてたような面が見られる。共に器面の荒れが著しいがヨコナデ調整をしている。内外面の器表は暗灰色を呈し，断面は淡茶色を呈する。26は中期後半の土器群が主体をなす層から出土している。27は26とほぼ同じかやや降る。28・29は軟質の壺形土器口縁部である。小破片だが図上での復原口径はともに20cmをはかる。調整手法や大きさが同じなので同一個体かとも推測されるが，29は口縁部がわずかに内湾して器肉の厚さや口唇部の形状にわずかな相違があり，別個体とした。器表が風化しているが，内外面にタタキ目がのこる。口縁部外面のタタキ目は縦位，他の部分は横位で，口縁部はつよいヨコナデを施している。胎土は緻密だが，比較的大粒の砂粒を若干含み，焼成はふつう程度で，内外面の器表は暗灰色，断面は淡茶灰色を呈する。後期の土器を含む層から出土しているが終末期までは降らないだろう。

これ以外に図化できない小破片が40片程出土している。軟質のもので器面は風化している。器種の判断はむつかしいが，その多くは鉢の破片であろうと思われる。

番　上



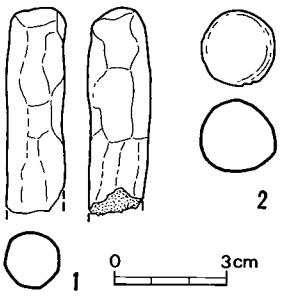
第 139 図　土器溜出土土器実測図㊻（1/3）

土製品（図版46，第140・141図）

把　手（1）　第3層から出土した。器面に指圧痕がよく残る。白色砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶褐色を呈する。

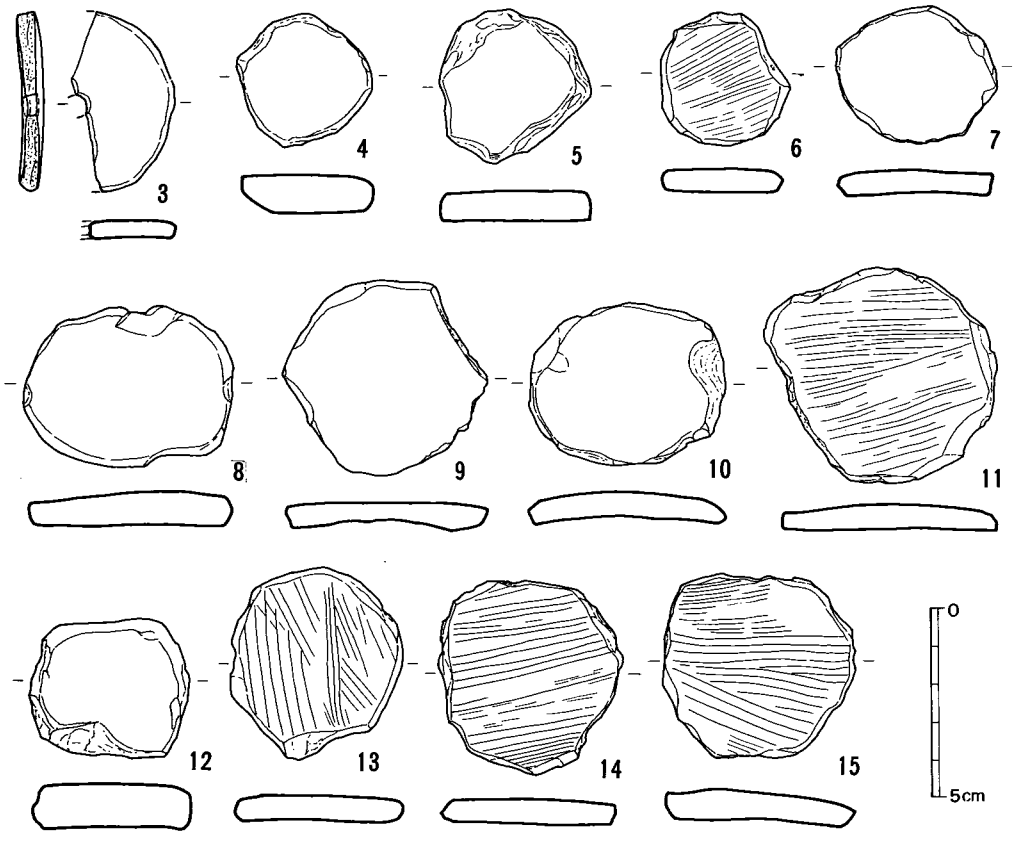
土　玉（2）　径1.9cm程の玉状土製品で第3層から出土している。金雲母・微砂粒を多く含み，焼成良好で暗褐色～黒褐色を呈する。

紡錘車（3）　第4層から出土した。過半を欠失するが径5.1cmに復原される。甕形土器片から作られたものであろう。前期末～中期頃のものであろう。



第 140 図　土器溜出土土製品実測図①（1/2）

円盤状土製品（4～15）　4は第5層，5～9は第4層，10～15は第3層から出土した。いずれも甕形土器片を利用し，周囲を打ち欠いた状態のものである。器面の残りのよいものは，いずれもハケ目を残している。特に3層出土のものはハケ目の状態から後期後半～終末期頃の



第 141 図　土器溜出土土製品実測図②（1/2）

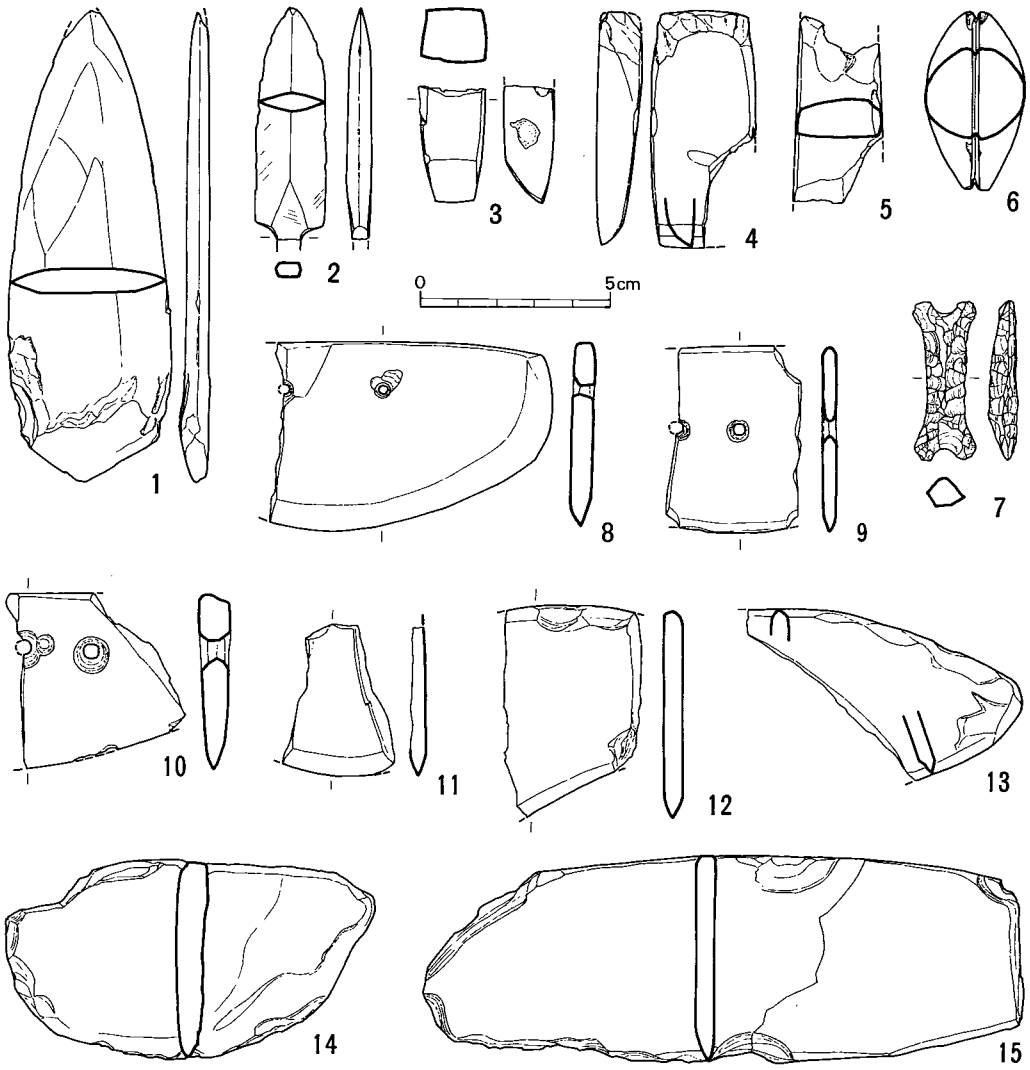
番　上

甕を利用しているようである。

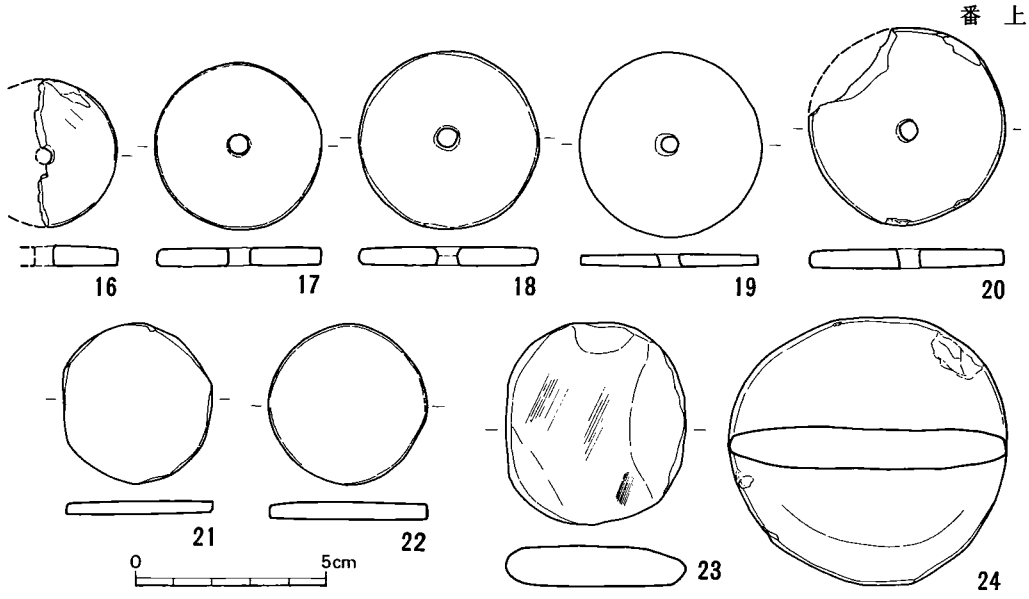
石　器（図版49・50，第142～145図）

石剣・磨製石鏃・石斧・石錘・石庖丁・異形石器・紡錘車・砥石等が出土している。また，腰岳産かと思われる黒曜石原石が出土している。

石　剣（１）　第３層としてとりあげたが，４層に含まれる可能性が強い。剣としたが一般的にみられる石剣とはその形態を異にする。先端を欠くが現存長12.4cm，最大幅4.3cm，厚さ0.6cmである。石材は粘板岩である。表裏面ともザラついており未製の段階のものである。



第 142 図　土器溜出土石器実測図①（1/2）



第 143 図　土器溜出土石器実測図②（1/2）

石　鏃（２）　出土層位は剣と同様である。現存長6.1cm，最大幅1.9cmで，断面は菱形を呈し，厚さ0.5cmをはかる。磨製石鏃である。石材は粘板岩で，8.9ｇである。

石　斧（３～５）　４は第５層から，他は４層からの出土である。石材は頁岩で，４は現存値31.1ｇをはかるが，本来は40ｇ弱の重さであろう。

石　錘（６）　第３層から出土した。長さ4.7cm，長径2.5cm，重さ37ｇをはかる。石材は白雲母片岩である。

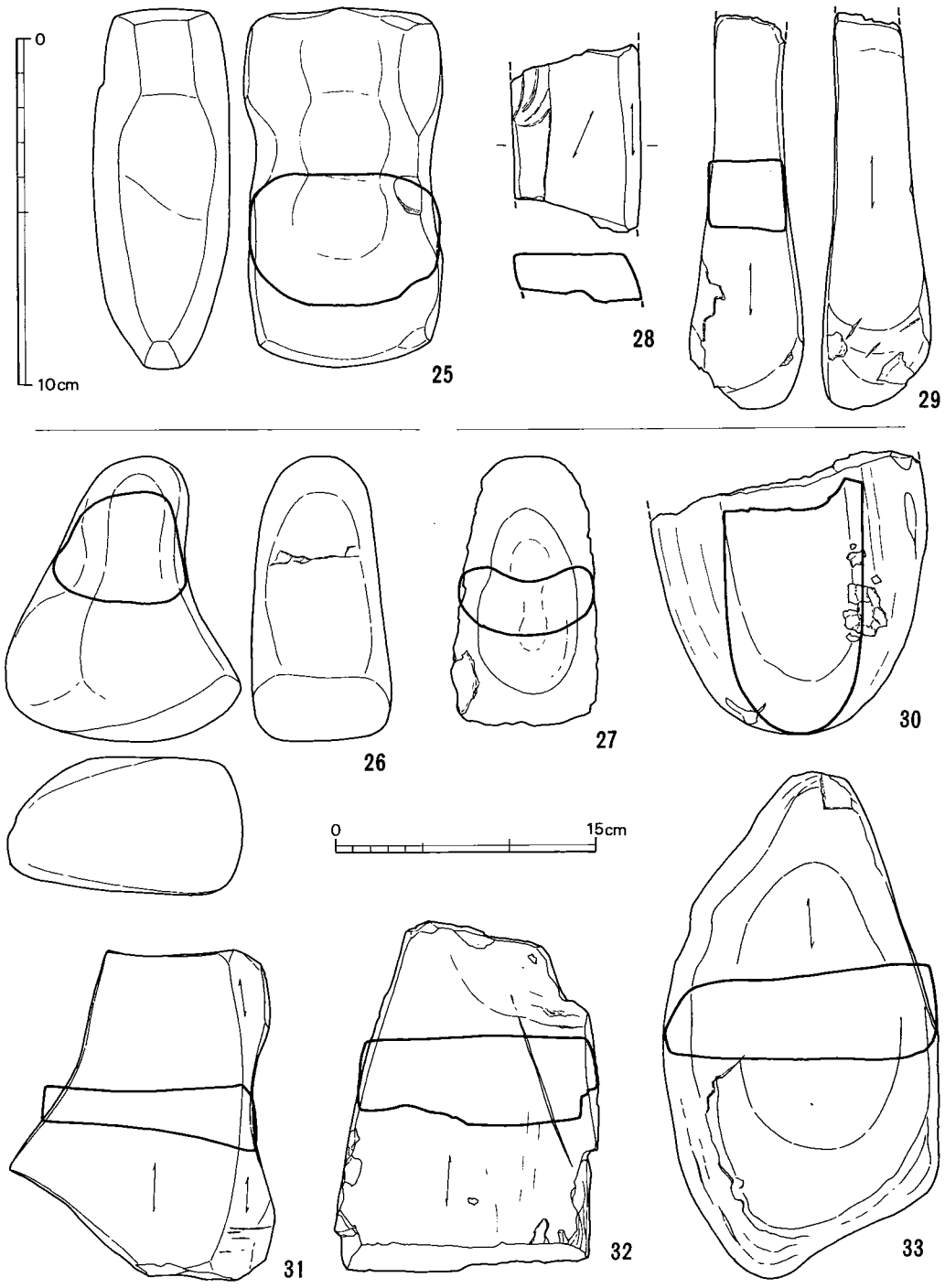
異形石器（７）　第３層から出土した。長さ4.2cm，幅は中央で１cm，厚さ0.8cmをはかる。全体に剝離面が磨滅している。石材は黒曜石で，大分県姫島産のものと推定される。

石庖丁（８～15）　９は３層，他は４層から出土した。完成品の８～12は，断面図でみると刃のつけ方が左右対称ではなく一方にわずかに片寄っている。13～15は未製品である。石材は粘板岩，玄武岩質のもの，角閃片岩等が使われている。14の表面は研磨痕があり，板状剝離の石材を粗割した後の刃部つくり出しの段階で未だ研磨はなされていない。

紡錘車（16～22）　17・20は４層から，他は３層から出土した。21・22は穿孔前の段階のものである。石材は白雲母片岩で，最も薄い19が厚さ3.5㎜で他は5㎜前後である。径は20が5.1cm，16が復原径3.8cmで４cm～５cmのものが多い。重量は完形品でみた場合，19が16.9ｇで最も軽く，20は一部欠失するが25.3ｇで最も重い，図示してないが完形品で径4.7cm，厚さ６㎜で，27.5ｇのものがあるが，おおむね20ｇを少し超えるものが多い。

円盤状石製品（23・24）　23は雲母を多く含む砂岩質のもので３層から出土している。表・裏面の大半は研磨されるが，周縁部は一部に研磨痕がのこる程度である。重さは54.7ｇ。24

番　上



第 144 図　土器溜出土石器実測図③ (1/2,1/4)

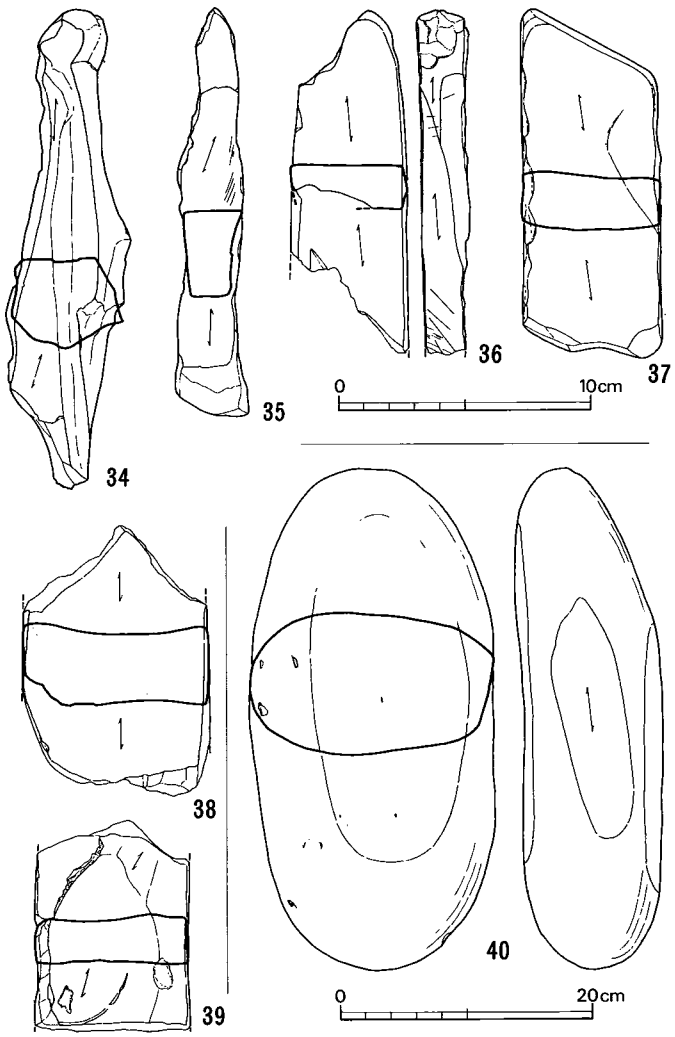
は第4層から出土した白雲母片岩の石材を使用したもので，110.2ｇをはかる。研磨の中途段階のものである。両者とも紡錘車の未製品であろうか。

すり石（25）　花崗岩を使用しており，410ｇをはかる。図の上面と下面付近が磨滅している。

石　杵（26）　第3層から出土した。高さ16.5cm，幅13.3cm，厚さ8cm前後で，重さ2.1kgをはかる。石材は半花崗岩で，使用面である図の下面はツルツルである。

たたき石（27）　第3層から出土した。石材は雲母片岩で重さは720ｇをはかる。図の頂部にも使用痕がのこる。

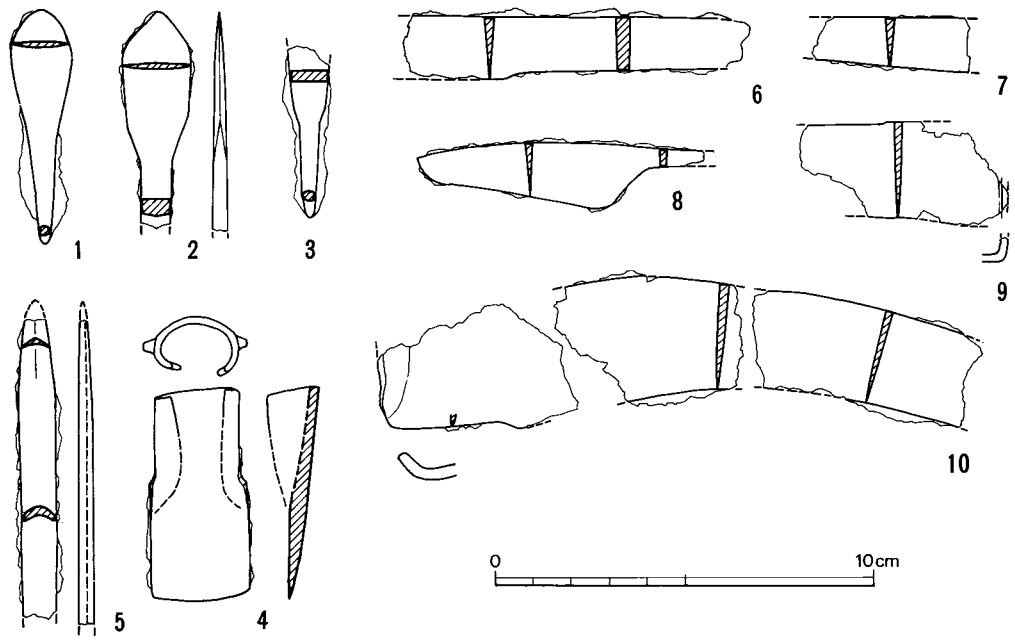
砥　石（28～40）　すべて第3層からの出土品で，38はII－1区から出土している。用途に応じて石材を選択しており，使用石材は粘板岩が多く，砂岩質のものも含む。30・31・38は砂岩質のもので比較的目が粗らく，中砥であろう。他は粘板岩で目が細かく仕上げ砥である。32・36の使用面には条痕状の幅の細い溝があり，刃部を研磨したものであろう。断面が直方体の29は四面を，断面長方形の平たいものは基本的には表裏面と時として側面を，大型で断面が楕円形30・40は表・裏面を使用するが，40は1方の側面も砥面として使用している。これらの砥石は後期から土師器かと思われる土器を含む第3層から出土し，また，この層には鉄鏃・鉇・鉄斧・刀子等の鉄製品をかなり含んでおり，多くの場合は鉄器の研磨に使用されたと考えられる。



第 145 図　土器溜出土石器実測図④（1/3，1/6）

鉄　器（図版67－4，第63図）

番　上



第 146 図　土器溜出土鉄器実測図（1/2）

8の刀子が第2層から，他は第3層から出土した。実測可能なものは鉄鏃3，鉄鉇1，鉄斧1，刀子3，鉄鎌2の10点である。

鉄　鏃（1～3）　いずれも小形有茎の鉄鏃である。1は丸味をもった平面形で長さ6.1，身の最大幅1.6cmで身の断面は薄い凸レンズ状を呈する。身と茎の境は平面的には明瞭ではなく，また鉄錆のため刃部の範囲も明らかではない。2は茎の1部を欠失し，現存長5.7cm，身の最大幅1.8cmをはかる。身の先端は山形を呈し，刃は図の右側で先端から2.7cmの部分までついている。茎はあまり長くはないと推測され，全長8cm以内におさまると思われる。3は身の上半を欠失し，現存長4.5cm，茎の長さ2.5cmをはかる。鉄錆がひどく身の断面と平面形は正確ではない。

鉄　斧（4）　長さ5.6cm，刃部幅2.6cm，袋部長径2.2cmをはかる有肩の鍛造鉄斧である。袋部の上端で1.4cmの間隔がある。

鉄　鉇（5）　刃部先端と茎の下半を欠き，現存長7.9cm，最大幅1cm弱をはかる。断面は蒲鉾形を呈し，茎に裏すきはない。刃部の鏑は現在1.6cm残っており，刃部は2cmを少し超える程度と思われる。茎に木質等の錆着は認められない。

刀　子（6～8）　8は第2層からの出土品で歴史時代のものと思われる。茎の一部を欠失し，現存長7.6cm，身部最大幅1.7cm，茎の幅0.4cmをはかる小型の刀子である。身は関部付近に最大幅があり，全体に内湾気味で，茎は細い。6は身の大半と茎の一部を欠失し，現存長9cm，身幅1.6cm，茎の幅1.4cmでわずかな関を有する。あるいは素環頭刀子になるかもしれな

い。7は現存長4.1cmの刀子の身の部分で先端に向かって幅が細くなり，身の最大幅は1.4cmである。

鉄　鎌（9・10）　ともに破片で全形を知り得ない。9は現存部で幅2.5cm，厚さ2.5mm程をはかる。折り返しの部分はわずかに残り，直立する。背部は，折り返し部から3cm程の所で幅を違え，柄側が1mm弱程幅広となる。木柄に装着した場合，刃は柄と直交する木質は残らない。10は曲刃の鎌で木柄は刃部と90°以上の広角度で斜行するように装着される。木柄が装着される部分の刃部側は2.5mm程せまくなる。身幅は木柄側から次第に細くなるようだが，先端部寄りの身幅は約2.6cmで，一定している。木柄装着部分の折り返しは9程顕著ではない。厚さは全体にに薄く背部で2～2.5mmである。全長は20cmを優に越えるだろう。

3. 小　結

番上II－5の調査区は，一昨年度報告した番上II－6の北方30m，同II－3の北東70mに位置する。番上II－6は弥生時代前期後半頃から古墳時代初期にかけての集落跡で，約600m²の調査区の内に住居跡19軒，土器溜3が検出され，しばらく空白期間をおいて中世の遺構が検出されている。II－3は弥生時代後期の住居跡1軒と中世の遺構を検出している。番上II－5の土器溜状遺構は，前記の両地区に対して至近距離にある点と，出土遺物の示す時期幅が重なり合うことから，番上II－6付近を中心として集落を営んだ人々の生活の残滓の一部を物語るものとみられる。両地区に共通する顕著な出土遺物として，中国地方からの搬入土器や朝鮮系外来土器，鉄器が出土している。

番上II－5の多量の土器は豊富な器種にめぐまれながら，各時期の土器が間層をはさむことなく，あたかも貝塚の純貝層に近い状態で出土しているため，型式編年を行うにあたってのセット関係を良好な状態でおさえることはできない。比較的形態変化をおいやすい高杯については，口縁屈折部の短い14～18は後期後半と報告された仲田17号住居跡出土のものに近似し，完形品ではないが，口縁屈折部が長くなった23は庄内式甕形土器を出土したサキゾノ1号住居跡出土の高杯に対応しそうである。19は来年度報告予定の，終末期頃と考えている寺口の箱式石棺墓の祭祀遺構出土の高杯と対応する。よって，三雲遺跡では14～18を後期後半，19～22・24を終末期頃，23を土師器と考え，明確な根拠はないが，中部瀬戸内方面からの搬入品とみられる11・12は，後期中頃と考えている。その他の弥生土器については，出土遺物の頃で簡単にふれたので省略する。

北部九州の系譜にのらない搬入土器は，中期には明確なものが検出されておらず，先述の高杯11・12が古い例で，終末期頃～古墳時代初期に集中するようである。製作地は，瀬戸内・山陰・畿内地域を考えることができる。量的には前二者の土器が多く，後期中頃以降に瀬戸内系

の土器がはいり，山陰・畿内系の土器に終末期をさらにさかのぼる出土例を見受けない。

朝鮮系外来土器は無文土器を1点含み，無文あるいは縄蓆文のある黒灰色の瓦質を呈するものや，縄蓆文のある陶質の土器である。特に陶質の土器内面に並行タタキ目を残すものがあり，朝鮮民主主義人民共和国の平安南道大洞江頭秋乙美面美林里の表採資料（京都大学蔵— 註19）の中にこれと類似したものがある。また，10は円筒形の土器で，東京大学蔵の楽浪の資料（註20）に完形品があり，底部の大きさ，調整，胎土，色調，焼成とも同一のものがある。13は色調，焼成が他の土器とは異なり，あるいは中国からの舶載品かとみられるが確証はない。他に，北部九州の弥生土器に酷似した形態のもの（15・20）も存在し，番上II—5で出土した朝鮮系外来土器は，朝鮮半島北部のものに共通するものが多く，楽浪系のものと考えている。これらの所属時期は，1は中期前半頃を下限とするが，他は中期後半～終末期の層から出土している。中でも，4・9・10・13～15・20は中期後半からやや降った頃，19は後期後半頃と考えている。17・18は19と同様なものと考えられ，21～25は鉢底部であり，類似のものが対馬の小式崎遺跡や白蓮江浦遺跡（註21）で後期後半～終末期の土器に伴って出土し，おおむねこの時期におかれよう。他の土器は時期の特定はむつかしいが，後期後半を前後する時期であろう。

このように，番上II—5は朝鮮系外来土器や搬入土器が多量に出土し，「邪馬台国」の外交の門戸たる「伊都国」の側面をものがたる重要な資料であるとともに，古墳時代前夜の国内事情や外交関係を推測する上で貴重な資料といえよう。（児玉）

第4節　五反間地区の調査

1. はじめに

五反間III—5地区の調査は，工場用地として売却されたことに起因するが，協議の結果で下部遺構を破壊することがないように客土することになったために，最低限度のトレンチ調査とした。調査は，昭和56年7月13日から7月31日まで実施し，柳田と小池が担当した。なお，前原町教育委員会の協力もあった。

2. 遺構と遺物

トレンチは，S243を主軸に幅2 m，長さ8 m（W356～W364）とS264を主軸に幅3 m，長さ20 m（W345～W365）の2ケ所に設定した。以後，S243を主軸とするトレンチを北トレンチ，S264を主軸とするトレンチを南トレンチと呼ぶことにする。

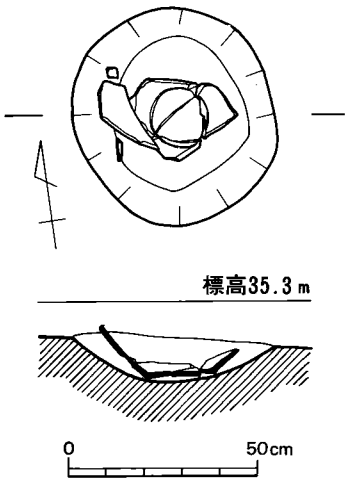
第 147 図 五 反 間 Ⅲ ― 5 遺 構 配 置 図 (1/60)

(1) 北トレンチ（図版51－1，第147・148図）

北トレンチは畑の北側に位置にするために，第2層の床土を除去しても黄褐色の地山層は露出しなかった。地山は第3層の遺構を掘っても見られなかったことから，現地表下60cm以下にあることになる。第3層は褐色土であるが，北トレンチで第3層上面に掘込まれている遺構が第147図の遺構で，大半の遺構内には灰褐色粘質土が詰り，これからしても掘る前から遺構の新しさが明らかであった。

遺構は，略南北方向の小溝2条と小ピットが検出されたにすぎず，遺物も細片ばかりであった。遺物は，混入した弥生土器片のほかに，遺構に伴うものは布留古式土器片少量と12世紀以後の陶磁器細片であった。このような中で，トレンチの中央付近でP10とした遺構から埋甕が出土した。

北トレンチでは，縄文時代から古墳時代初期の遺物が出土しているので，下層にはこれらの遺構が存在すると思われるが，遺構が破壊されることがないので追求しなかった。（柳田）



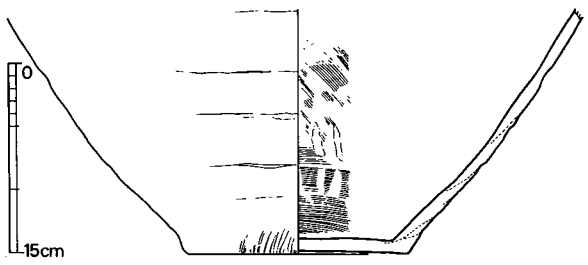
第148図 北トレンチ埋甕実測図（1/20）

埋　甕（図版52－1，第148図）

北トレンチ中央部東寄りのS243・W357に検出された。ピットに甕が据えられるが，上部を大きく削平されているため甕は底部のみが残る。現況でのピットは上縁の南北57cm，東西52cm，深さ10cm程度で皿状になっているが，甕は南北側の欠失が激しくわずかに西に傾く。削平時に傾いた可能性もあり，本来直立していたかも知れない。同一個体の接合しない胴部破片も出土している。

土　器（図版52－2，第149図）　底径17.5cmの大きさで胴部が大きく広がる甕形土器であろう。胴部外面は整形時の粘土帯継ぎ目が残る雑なナデ調整だが粗いハケ目の加わる部分もあり，胴部内面はタタキ痕の残るハケ目調整，底部は内外面共ナデたあと外面のみケズリが加えられる。胎土に砂粒を含む瓦質で灰白色に焼成されている。

時期を判断し難いが，土器自体の



第149図 埋甕使用土器実測図（1/6）

調整手法に古い要素をもっており，周辺の遺構や包含層の平安末～室町期の時期幅に考えたいが，江戸期のピットの存在もあり，江戸期まで下降する可能性もある。（小池）

(2) 南トレンチ（図版51－2・3，第147図）

南トレンチは，頭初幅3m，長さ18mの東西トレンチであったが，トレンチ西側に大型の掘立柱が密集していたために，西側に2m延長すると同時に南側にも任意に拡張して柱穴列を一部追求した。

南トレンチ内の遺構は，概略南北方向の小溝2条と柱穴である。トレンチが畑の南側にあるため，畑地整地によって第3層は削平され黄褐色粘質土の地山が露出しているところが多い。遺構は西側に集中し，東側に希薄であるが，東側ほど地山が高くて地山の黄褐色粘質土が削平され，下層の礫混入黄褐色砂質土が露出しているところから，東側の遺構はかなり削平されているものと思われる。

掘立柱建物

トレンチ幅が狭いこともあって，柱穴が3本以上並ぶ建物は2軒だけであった。明らかに掘立柱とわかる柱穴はそのほかに15本以上が検出されているが，その関連性は不明である。時期的には，P34・P35のように重複していることから，2時期以上の建物があるのが確実であるが，遺構の性格上遺物が伴うことが少なく，土器片などが伴ったとしても，その遺物で上限を示すにすぎない場合が多い。

掘立柱建物2軒のうち，北側に位置するものを建物1，南側に位置するものを建物2としてその概要を述べる。

建物1（P35・P51・P56）　3本の柱穴が約N78°E方向に向って並ぶもので，柱穴は一辺80cm前後の方形掘方である。掘方内には容易に柱位置が検出できるが，柱の直径は25cm前後の大きさである。柱位置から割出される柱間は，P35—P51が2.48m，P51—P56が2.46mの間隔となり，平均すると2.47mとなる。

柱穴は，東側と南側には伸びないことが確実であるから，北側と西側に続くものと思われ，建物の規模は不明である。柱穴の深さは，現地山面からP56で57cm，現地表面から83cmとなっている。柱穴は，P35はP34に切られているが，古いP35からは室町時代後期に属する擂鉢片が出土している。P56では12世紀に属する白磁細片もあるが，より新しい室町時代後期以後がこの建物の時期になる。ちなみに，柱間の平均2.47mを30.72cm(宋・元）と31.1cm（明）で割って見ると，宋・元尺で8.04尺，明尺で7.94尺となり宋・元尺の8尺に最も近いが，時期的には室町後期であることからP35—P51間の2.48mの明尺の8尺をとらなければならない。

建物2（P40～P42・P55～P59）　建物2は，建物1と比較すると柱位置の検出が困難

で，P59でやっと検出できた。建物2の柱穴は明らかに中世の遺構と違って，柱穴内の土は黒褐色土で，含まれる遺物も弥生終末から古式土師器片であり，中世の陶磁器片を含んでいない。ただしP40に中世の陶器とも思える細片が含まれていたが確実ではなく，P41は12世紀の影青合子細片が含まれた溝2より古いことは確実である。P40～P42・P55の間の柱間平均は1.7m前後であるから，柱穴内の最も新しい土器片である布留古式土器（IIa式）の年代の4世紀中頃とすると，魏・晋尺（1尺24.12cm)の7尺（1.69m）に最も近い数値が得られる。

この柱列は北側と西側に伸びないことが明らかなため，東側と南側に一部拡張したが，東側にも伸びず，南側に続くらしいことがわかった。ところが，南側で検出したP59とその間の柱穴は柱間が揃わない。P59のみ柱間が2m前後となり，差がありすぎる。P59が建物2に伴わないものとすれば，建物2は1間3間の建物でしかなくなる。調査に時間的な制約があり，再度の拡張を試みなかったのが残念である。

小　溝

トレンチ内に2条の小溝があり，東側を溝1，西側を溝2とした。双方共に土器細片しか含まれていないが，溝2では影青の合子細片と土師器皿が出土した。合子は12世紀のものと思われるが，溝1も同時期のものであろう。

溝1は，幅70cm，深さ13cmの浅いものでN23°Wに向くが，トレンチ幅内ではどちらに傾斜するか不明だが，地山面は北に傾斜する。

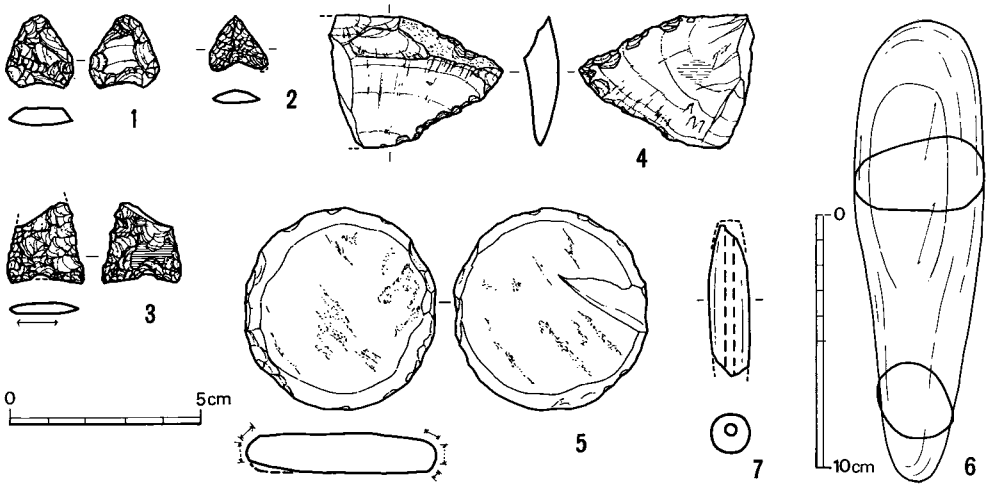
溝2は幅60cm，深さ10cmでかろうじて残っていた小溝である。方向はN17°Wに向くが，これも流れ方向は不明。

南トレンチでは，弥生時代のピットもあり，P57などでは中期の器台なども出土しているが，柱穴以外は原則として掘らなかった。東側の柿木地区では，弥生前期の住居跡や中期初頭の甕棺墓や土壙墓（木棺墓）も発見されているので，下層ではこれらが検出され始めた部分もあった。

五反間で発見された歴史時代の陶磁器は細片で実測不可能であったが，その種類や時期は九州歴史資料館の森田勉主任技師の御教示を受けた。（柳田）

石器・土製品（図版52－3，第150図）

1～3は打製石鏃で，1・2は表土，3は北トレンチP7から出土した。いずれも黒曜石製で，重量1.6g・0.5g・現存値1.3gを測るが，3の片面は平らに研磨されている。4は南トレンチP58から出土した安山岩製削器で重量12.5g。5は北トレンチ包含層出土の白雲母片岩の円盤で周縁を打欠整形したあと一部研磨を加えた段階の紡錘車未製品であろう。直径5.1～5.3mm，重量40.6gを有す。6は南トレンチP63出土の粘板岩製砥石で一端が握り易い棒状を呈し重量406gを有す。7は南トレンチP63出土の管状土錘で両端を欠失するが現存値で長さ4cm，重量3.8gを有し孔径は2.5mm。3.4は弥生終末期のピット，6・7は中世のピットから出土しているが，3の石鏃は弥生前期にみられるもので，全体的にみても7の土錘以外は古式土師器の



第 150 図　五反間Ⅲ－5 出土石器・土製品実測図（1/2, 1/3）

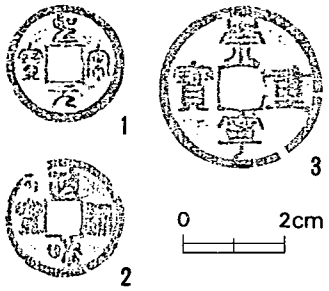
時期迄におさまるであろう。

古　銭（図版52－4，第151図）

1・2の2点は南トレンチのP45から重なって出土した資料で，背面が銹着していた。2点共篆書体の文字があり，1は「聖宋元寶」，2は「政和通寶」で，直径2.3cm・2.4cmを有している。

3は，東方約50mの距離にある柿木5地区表採資料の，直径3.2cmを測る「崇寧重寶」。

初鋳年代では，1が建中靖国元年の1101年，2が政和元年の1111年，3が崇寧元年の1102年と，12世紀初頭期の北宋銭である。（小池）



第 151 図　五反間・柿木出土古銭拓影（2/3）

3．小　結

五反間地区の調査は，とくに緊急的な調査で，全面的に地元の工程に合わせた調査となった。三雲遺跡で掘立柱建物が検出されることは少なく，とくに古墳初期のものは仲田Ⅰ—16地区の弥生終末期のものに続いて2軒目であった。現在の集落に近くなれば中世以後の建物が多いのは当然であるが，「伊都国」の中心地である点からすると，弥生の大型建物が存在する可能性もあり，現在の集落密集地域こそ地理的条件に恵まれた最適地といえる。（柳田）

もあり，現在の集落密集地域こそ地理的条件に恵まれた最適地といえる。　（柳田）

第5節　端山・築山古墳の調査

1　はじめに

端山と築山古墳の名は，貝原益軒の『筑前國續風土記』（1709年）に見られる。『筑前國續風土記』には，現在は消滅して見ることのできない「茶臼塚」についても述べられ，『筑前國續風土記附録』と総合すると，各古墳の大小や位置関係が判明することは第2章で述べた。また，茶臼塚古墳の位置なども「サキゾノ地区の調査」で述べることがあった。この節では，現存している端山古墳と築山古墳について，昭和49年度に墳丘裾確認調査を実施したので，その結果を報告する。調査の目的は，昭和50年度を初年度とする三雲地区圃場整備事業が計画されたことに起因するが，当初の計画図では端山古墳の周濠など無視されたものであった。端山古墳は，昭和40年春に前方部が削平されていたために，国有地である後円部のみを計画から除外していたのである。しかし，その後の前原町土地改良区や地元と協議の結果，周濠の輪郭を保存することで快諾を得た。ところが，築山古墳においては墳丘東側の周濠輪郭が明確でなかったために東側と南側の一部の周濠部分が，圃場整備計画内に含まれることになった。しかし，これも協議の結果，現状の高さを保ち削平しないこととなり，今後の調査によって周濠が確認されれば復原可能な状態を保つことができた。町土地改良区と地元の協力によるものである。したがって，調査は両古墳の前方部を確認する最低限度のものとなった。

2　端山古墳

(1)　古墳の位置（図版53，第2図）

端山古墳は，三雲の東側にあたる字名「塚廻り」に所在する。「塚廻り」の範囲は端山古墳の周濠の範囲のみではなく，さらに南側にもほぼ同じ面積の区画があり，これをも含んでいる。三雲遺跡は，東側の川原川，西側の瑞梅寺川に挟まれて北側に開けた沖積微高地上に位置するため，東西両側と北側方向に緩斜面を形成する。この沖積微高地上に縄文時代から古墳時代前期におよぶ大集落が営まれるが，この遺跡も『三雲遺跡』Ⅰの第14図に示したように，東は石橋・サキゾノ・イフ地区まで遺跡が拡がるが，これより東側では集落や墓地が発見されていない。端山古墳は，このような遺跡群の東側で標高36mの位置にあるが，現地表は周濠外の西側が高

く，東側が低くなっている。したがって，現状では西側ほど周濠の残りがよい。これは築山古墳や茶臼塚古墳にも共通し，周濠区画の復原においても問題になってくる。

(2) 墳　　丘

端山古墳は，昭和40年に前方部が削平されるまで，図版53・55－1のように畑地となりながらも低平な前方部が残っていた。前方部は，くびれ部より前面幅が多少広い「柄鏡形」をしていたが，この輪郭線は昭和49年の調査当時までの地籍図にも残っている（第3図)。現在では，前方部の西側裾線のみ田の区画線としてコンクリートブロックが並んでいる。

後円部は，図版55－2や第152図でわかるように明瞭な2段築成が観察できる。現墳丘表面には，盗掘坑と思われるくぼみが多く見られるが，全体的に見ると整美な墳形を保っている古墳である。

調査は，前方部の形態や規模を確認する目的を持って，前方部先端西側と両側くびれ部にトレンチを設定した。

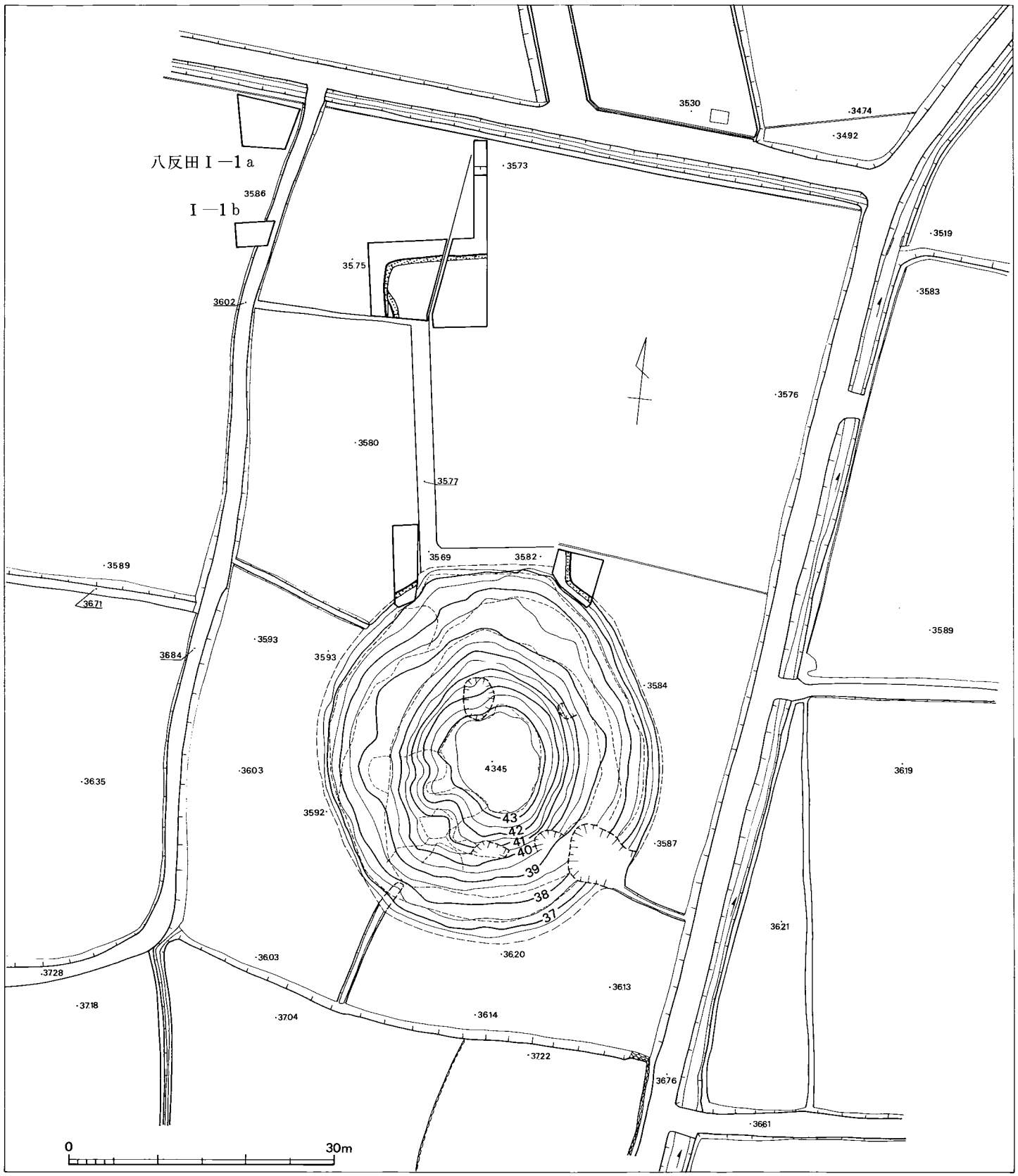
前　方　部（図版53～56，第152～154図）

前方部先端の調査は，墳丘現況図から推定主軸線を割出した主軸線の西側に沿って幅 1.5m のトレンチを設定し，この南北トレンチの観察によって西側に拡張していった。すなわち，主軸線のトレンチによって前方部前面の墳丘裾を確認し，前面裾に沿ってトレンチを西側に拡張して前方部西側角を検出する方法をとった。作物保障などから調査面積に制約があったために，前方部先端のトレンチは約 138 ㎡の面積の調査で終った。

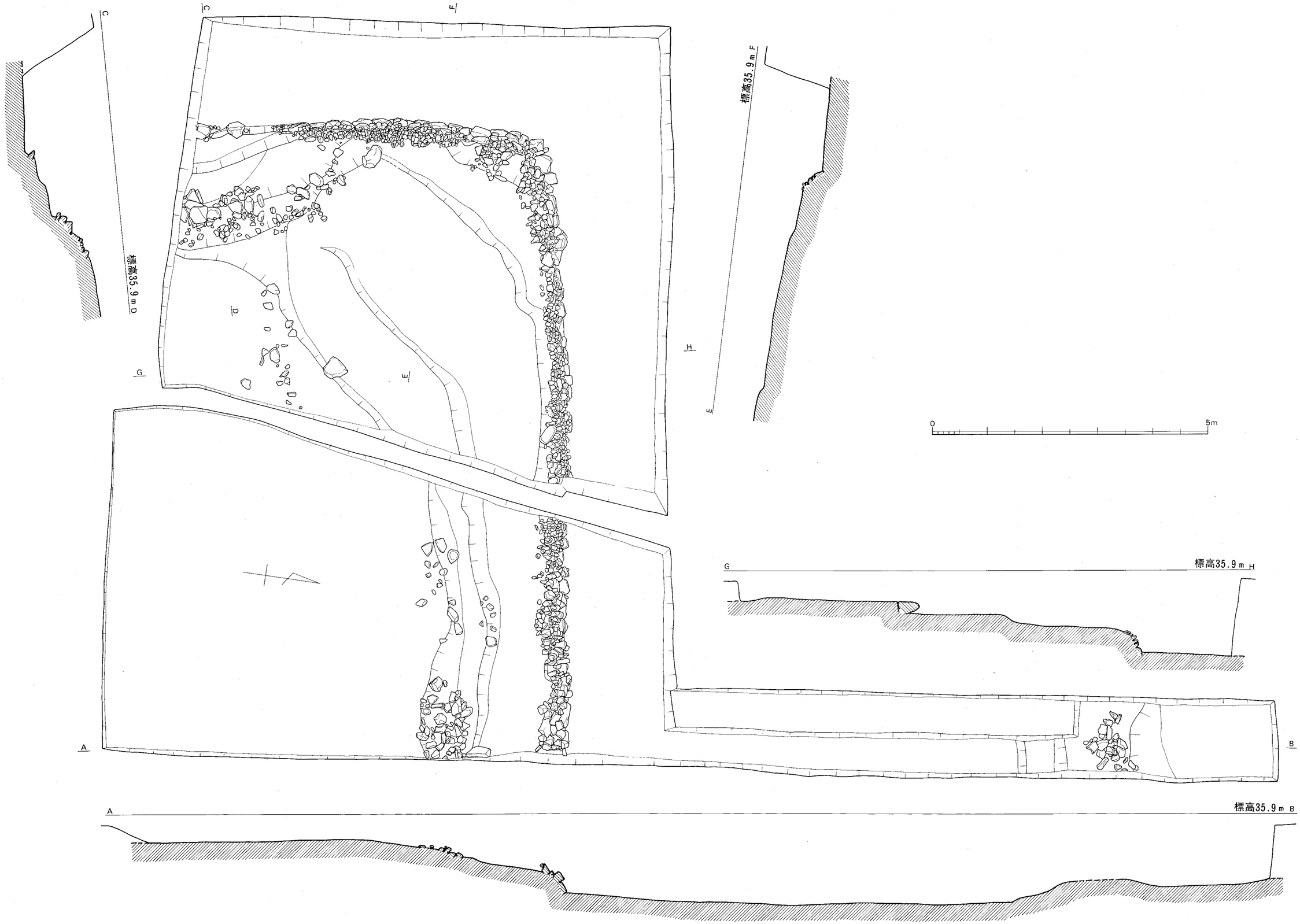
前方部前面と西側面に墳丘裾の葺石列が確認されたが，使用石材が小さく拳大のものも多い。葺石列は，前方部前面が西側角から11.3m，側面が前方部先端角から 6.2m を確認した。葺石の基礎（墳丘裾の周濠底）には，径50cm前後の花崗岩を多く使用しているが，その上段積には拳大の河原石も多く使用されている。

1段目の葺石の高さは，基底部から40～50cm残っているが，葺石上面から続く地山に平坦面があり，墳丘段築の1段目を形成しているかのように見える。現状の1段上面の平坦面は，約1～2mの幅でめぐるが，前方部側面の2段目葺石が湾曲して1段目葺石の角に向っており，現状で2段に見える側面の葺石が1段目の続きであると同時に，前方部側面が撥形に湾曲する可能性が強い。現状の2段目葺石は保存状態が悪く，1段目のような基礎石がないところから，前方部前面に残っている葺石は二次的な集石で，周濠内の度重なる耕作によって，墳丘が緩斜面になっていったものであろう。すなわち，前方部先端トレンチ内に見える墳丘の段築状の段は耕作による墳丘侵蝕の痕跡である。

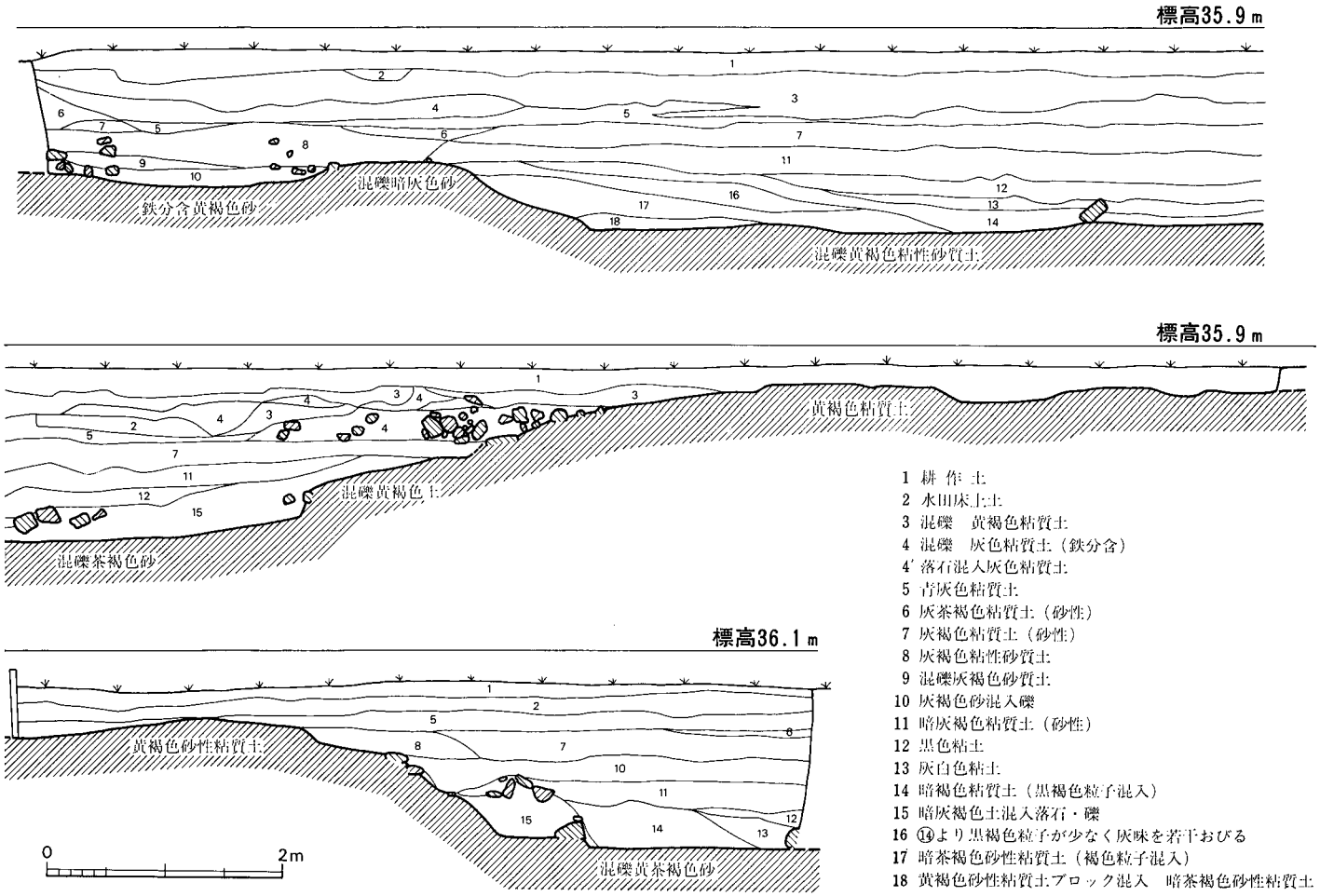
現状の前方部の高さは，葺石基底部から 1.1m が残っているが，昭和40年に削平された約1



第 152 図 端 山 古 墳 墳 丘 測 量 図 (1/600)



第153図 端 山 古 墳 前 方 部 実 測 図(1/60)



1 耕作土
2 水田床土土
3 混礫　黄褐色粘質土
4 混礫　灰色粘質土（鉄分含）
4′ 落石混入灰色粘質土
5 青灰色粘質土
6 灰茶褐色粘質土（砂性）
7 灰褐色粘質土（砂性）
8 灰褐色粘性砂質土
9 混礫灰褐色砂質土
10 灰褐色砂混入礫
11 暗灰褐色粘質土（砂性）
12 黒色粘土
13 灰白色粘土
14 暗褐色粘質土（黒褐色粒子混入）
15 暗灰褐色土混入落石・礫
16 ⑭より黒褐色粒子が少なく灰味を若干おびる
17 暗茶褐色砂性粘質土（褐色粒子混入）
18 黄褐色砂性粘質土ブロック混入　暗茶褐色砂性粘質土

第 154 図　端山古墳前方部土層図 (1/60)

mを加算すると前方部の高さは2m以上ということになる。

前方部前面の周濠は，葺石裾から周堤上肩までの幅 9.1m，現周濠内水田面からの深さ1.55mの規模で，西側周濠外畦道からの深さ 1.9mである。

以上のことから，前方部の平面形は，前面は直線でなく多少湾曲しているので，前方部角から見ると胴張りぎみとなる。側面は，基底部の葺石が残っていないことから，真実性に欠けるが，傾斜面中途に残っている葺石の平面的な湾曲と傾斜角から前方部側面が内湾することは確実である。しかも，この湾曲がくびれ部まで続くものでなく，局部的なものであることは，くびれ部幅と前方部幅に大差がないことでわかる。すなわち，前方部は前方先端部のみ突出部があって幅が広くなっているのである。

くびれ部（図版57・58，第155・156図）

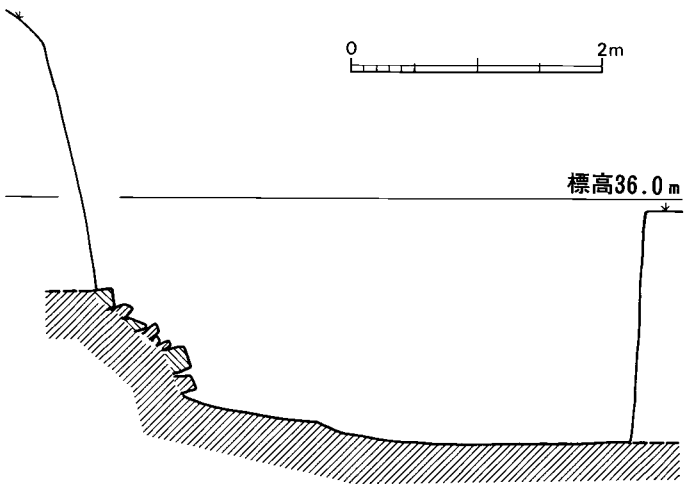
くびれ部では，東側に5×5m，西側に3×9mのトレンチを設定したが，西側には元の前方部裾にあたる部分にコンクリートブロック列があるために，これを避けて掘らなければならなかった。

東側くびれ部では，整然とした葺石積が検出され，現状の墳丘裾の位置がほぼ墳丘の原形を保っていることが判明した。ところが，葺石の傾斜角度から墳丘断面を復原すると，現状で1段目に見える段築の中に食い込み，現状の1段目の中に実は2段の段築があることが明らかである。現状の1段目はかなり平坦部が広いので，この中が2段となれば，最上段との均衡がとれるであろう。

葺石には，基底部や中途に面のある長さ50～60cm，厚さ20cmほどの花崗岩材が使用されているが，拳大の河原石も多く使用されている。葺石の積上げ方は，竪穴式石室の壁面積のように石材の小口面を揃えて積上げる小口積である。

葺石積上げの高さは，墳丘段築の1段目となるはずであるが，調査面積に制約があって確実な数値を得ることができなかった。それでも前方部側においては，葺石基底部から高さ80cmのところで1段目の肩部を確認することができた。後円部側においては，1段目葺石上に大量の土砂が覆いかぶさっているため正確ではないが，葺石基底部から高さ85cmのところで葺石がとぎれているようだ。前方部と後円部の1段目葺石の高さに大差がないところから，墳丘1段目段築の高さは，葺石基底部から1m前後の高さとなろう。これは現状の墳丘の1段目肩に標高37.5mの等高線が通ることからすれば，2段目の高さは，1段目葺石基底部から約 3.1mとなり， 3.1mから1段目の高さ1mを引いた2段目の高さは 2.1mとなる。現状の最上段頂部の標高は42.5mで，これから2段目の37.5mを引くと最上段の高さは約5mとなる。したがって，後円部の段築は3段築成で，その高さは総高 8.1m，1段目は約1m，2段目は 2.1m，3段目は5mということになる。周濠の深さは，現周濠内水田面から 1.8mである。

前方部は，くびれ部付近に現状でも残っている墳丘の張出しから，後円部2段目の高さが前



土 層 名

1 耕作土
2 水田床土
3 淡黄褐色土(若干砂礫混入)
4 青灰色粘質土(若干砂礫混入)
5 混礫灰褐色土
6 (若干礫混入)灰褐色土
〔若干⑤より暗い〕
7 混礫暗灰褐色粘質土
8 混礫黒色粘質土
9 混礫灰白色粘質土
10 落石混礫灰褐色粘質土
11 若干礫混入暗灰褐色粘質土
12 黄褐色砂性粘質土
13 混礫黄茶褐色砂

第 155 図 東側くびれ部実測図 (1/60)

方部に続くことは明らかであるから，その高さも1段目葺石基底部から約 3.1mとなるが，先端部分はこれより高くなることから約 3.5mほどになろう。

西側くびれ部は，東側くびれ部と共にくびれ部幅を確認する意味があったが，残念なことに確実に原位置の葺石といえるものは確認することができなかった。トレンチ設定にも制約があったが，調査前から西側くびれ部付近の墳丘には乱れがあり，後世に手が加わっていることが明らかであった。発掘の結果，図版58－3や第156図のように葺石状の石積が確認されたのであるが，東側くびれ部のような整然とした葺石積ではなく，調査の際に乱れた石積を除去してもいっこうに整然とすることがなかった。後世に周濠内に埋没した葺石を除去してまで墳丘に手を加えることもなかろうが，葺石基底部に基礎石となる大石もなく，東側くびれ部のように規則的な小口積の手法もないところから，原形のままの葺石でないことは明らかであろう。

以上のことから端山古墳の墳丘を復原すると，墳丘全長約78.5m，後円部径42m，前方部長さ38m，前方部先端幅約23m，くびれ部幅約18mの平面形をし，後円部の高さ 8.1m，前方部の高さ約 3.5mの立体形となり，後円部と前方部の比高差約4.6mの典型的な前期古墳である。

なお，両側くびれ部の葺石付近からは，弥生土器以外に古式土師器片も発見されている。

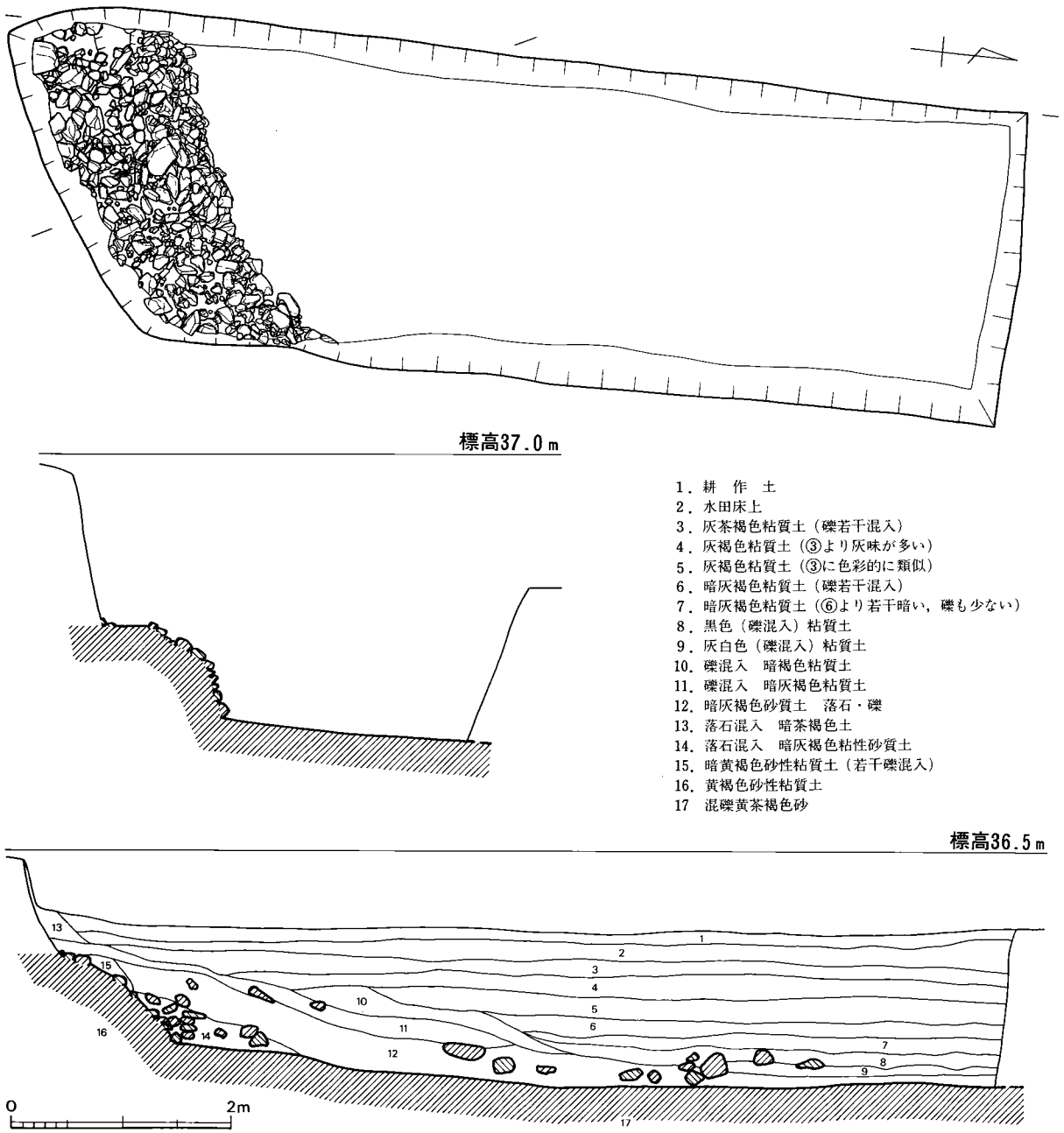
(3) 周　　濠（図版56－1，第152～154図）

端山古墳の周濠は，現在の地籍図にも表われているように，その存在は誰しも疑うことがなかろう。端山古墳の墳丘は古式古墳の形態をしているにもかかわらず，地元町の文化財地名表には中期古墳としてある（註22）のは周濠の存在が明瞭であったことにもよるだろう。

今回の調査では，周濠の存在は確実なものとなったが，その規模や形態は不明な点が多い。調査で明らかになった点は，前方部前面の周濠幅が 9.1m，現在の周濠外西側の畦道面からの深さ1.55m（周濠底標高34.15m），東側くびれ部周濠底の標高は34.1mである。現状の周濠では，前方部では周濠外との標高差はないが，後円部南側では約 1.2mの差があり，このことからもおよそ周濠底は水平であろうことがわかるが，実際に発掘した周濠底は前方部前面と東側くびれ部において差がなかった。このことから後円部南側も水平であろうから，南側周濠外との比高差は 3.1mとなり，周濠の名にふさわしい深さである。

そこで周濠の平面形が問題となる。周濠とは周堤と共に墓域を区画するものであるから，方形周溝墓や方形台状墓が墓の平面形や方形区画を問題とするように，古墳にも周濠による墓域区画に形態や時期差がある。

古式古墳として有名な京都府椿井大塚山古墳や岡山県湯迫車塚古墳は丘陵上にあって，その地形を利用した古墳造営であるが，前方部が撥形に開くことから，より古式の前方後円墳の前方部は「撥形」であるといわれるようになった。この「撥形」の前方後円墳は平地にもあり，

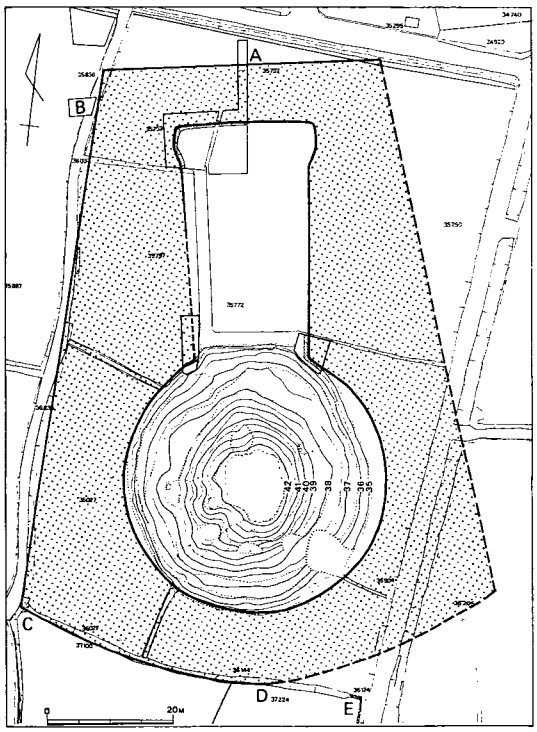


第 156 図　端山古墳西側くびれ部実測図（1/60）

奈良県箸墓がその典型ともいわれるようになった。箸墓古墳では周濠は認められていなかったが（註23），纒向遺跡の調査ごろから周濠の一部を認める動きがある（註24）。この点纒向石塚古墳の周濠は庄内式以前（纒向1式）とされ（註25），帆立貝式前方後円墳にいわゆる「鍵穴形」の周濠が確認された。

九州では，福岡県夜須町焼ノ峠古墳の調査で丘陵尾根上でありながら，周濠が確認された（註26）。焼ノ峠古墳は前方後方墳であるが「鍵穴形」周濠から古式土師器（三雲IIa式）が出土している。また，甘木市神蔵古墳では墳丘断面に周濠の存在が確認されただけであるが（註27），旧地籍図や昭和30年の墳丘実測図によると，いわゆる「盾形」に近い周濠が復原できる。近年には大分県宇佐赤塚古墳にも周濠が確認され，「鍵穴形」周濠が復原されている（註28）。

端山古墳の墳丘形態はいわゆる「柄鏡形」であるから，その典型は奈良県桜井茶臼山古墳に見ることができるが，周濠（空濠または墓域区画）の点においても参考にできるようだ。端山古墳の周濠は，「鍵穴形」あるいは通例の「盾形」になるものと思われたので，周堤の一部を確認する目的をもって八反田I－1地区北東端に2ヶ所のトレンチを設定した。これは端山古墳東側の南北道路が直線の周堤上にあるものとすれば，西側の畦道も直線であろうと考えたからである。もし，「鍵穴形」とすれば前方部と平行してトレンチの位置を通ると思われた。調査の結果は，北側トレンチでは東西方向の12世紀代の石垣大溝が検出され，この大溝は前方部前面の周濠外を周濠に平行して通ることが明らかとなった。南側のトレンチでは，上部を削平されていたが土師器二重口縁大形壺の合口式甕棺墓が発見され，その地山の高さから周濠外であることが判明した。すなわち，端山古墳周濠外西側の畦道は，すくなくとも前方部先端付近で，東側に屈曲しているのは後世の屈曲ではなく原形に近いことが明らかで，畦道の多少の蛇行はほぼ直線と見ることができる。甕棺墓は，土器の型式から端山古墳とほぼ同時期であるから，古墳に従属して周堤上ともいえる位置に営まれたものであり，これを周濠外にはずし，南北の畦道を直線と仮定すると第157図のような推定復原図が考えられる。



第157図　端山古墳周濠区画復原図（1/1,200）

第157図のA地点は，トレンチ調査による周濠外肩線であるから，この線は前方部前面に平行することは誰しも異論はなかろう。このA線と西側の南北畦道と交差するのが，B地点の甕棺墓位置より多少東側であらねばならない。南北畦道を直線に直して南下すると，周濠底から3m以上も高い南側弧状周堤の西端C地点と交わる。この後円部南側弧状周堤は，周濠底との比高差が3m以上あることから，著しく旧状を変えたとは思われない。たとえば「鍵形」の周濠とすれば，C地点の位置は墳丘に近づいて後円部中心を起点とした同心円上に乗るであろうが，後世の周濠内耕作でC地点まで角をつけるような削土は行わないであろう。ちなみに，周濠設計を企画する時，CからD地点までの弧状周堤線は前方部東側角を起点とした円（半径約90m）を描くと，その円周線に一致する。

この周濠区画復原は，第168図のように築山古墳にも同様に通用するが，同様に問題となるのが古墳東側の周濠区画の復原である。両古墳とも古墳東側には周濠の痕跡を残していない。端山古墳では墳丘東側の南北道路が周堤上を走るものと思われていたが，A・B地点の調査結果から根拠のないものとなった。したがって，古墳の周濠は墳丘主軸に対して左右対称であることから図のように復原した。ここで1つ気掛りなのが，DからE地点に伸びる周堤線である。両古墳共にB－C－D地点は確実に近い区画線としたことからすれば，両古墳が同様にD－E線を通ることは無視できないような気がする。築山古墳はとくに墳丘東側が削平されずして地山が低いことから，高い周堤は存在しなかった可能性もある。今後も確認調査が必要である。

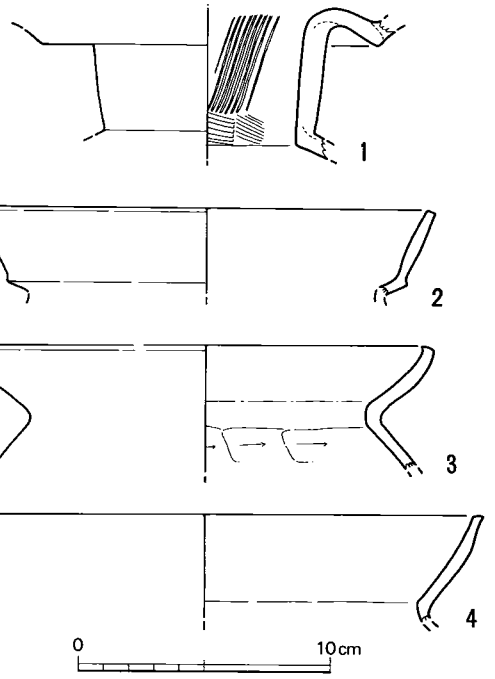
両古墳の周濠区画が一種の「盾形周濠」であることが推定可能となったが、前方部側の狭い「盾形周濠」は類例がない。周濠形態の名称は前方部を下に見た場合の名称が通例であるから，これこそ正に「盾形」であり，強いて類例を求めれば，5世紀代の古墳で前方部の短かいものにある。ところが，これらは後円部の円周と同じ同心円上にあり，墳丘の形態も違っている。墳丘の形態から類例を求めると，先にあげた桜井茶臼山古墳で可能性のある空濠が観察できる。『古墳の航空大観』(註29) などの航空写真を見ると古墳周囲の段々畑（水田）に，前方部側の狭い空濠らしき区画がある。報告では「通じて幅20米内外の空濠がめぐっていたのではなかろうか。」とし，その形態としては「むしろ地形から判断して，濠に当る個所は指を拡げたように延びた丘陵の間の谷であったと考えられる。」と述べられ，地形に制約されながらも「巧妙な自然地形の利用」をした空濠と解釈されているようだ（註30）。桜井茶臼山古墳が地形に制約された空濠であるために，前方部側が狭く，後円部側には現状では濠の輪郭がたどれない。やはり，平地にある端山古墳や築山古墳とは区別すべきものであろう。築山古墳が帆立貝式前方後円墳である可能性が強いことから，「盾形周濠」の典型ともいえるので，端山古墳は前方部の狭い「盾形周濠」が一時期古くなるものと考えればよいであろう。

土　器（第158図）　前方部やくびれ部のトレンチで土器片が出土しているので，弥生土器以外で最も新しく古墳に関係あると思われるものを選定した。

1～3は西側くびれ部から出土したもので，2のみ2層であるため混入の可能性がある。1は落下した葺石の間から出土した二重口縁壺で，上方が少し開く頸部上方の1段目の口縁が垂下る特徴をもつ。外両と口縁部上面はヘラミガキ調整されるが，頸部内面上方は暗文状のヘラミガキ，下方はヨコにハケ目が残っている。

2は二重口縁甕であるが，器面が荒れて調整など不明な点が多い。

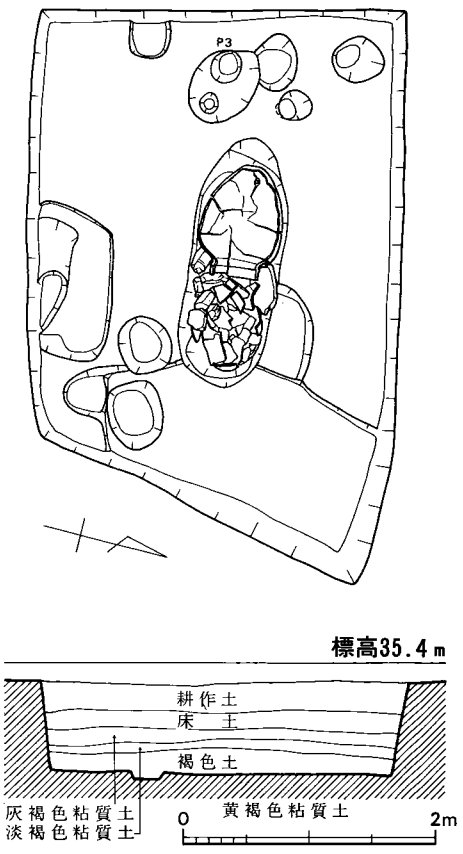
3は口縁が湾曲し，先端を内側上方に抓上げた甕。サキゾノI－1の3層に同型式がある。



第 158 図　端山古墳出土土器実測図（1/3）

4は前方部前面周濠出土の甕口縁部で，口縁先端に平坦面を持っている。

これらの土器片は，細片ながらほぼ同型式に属するIIa式にあたる。3は多少古くてIb式に属する可能性もあるが内湾する口縁部はIIa式の特徴。1の垂下る口縁部は多少新しい傾向もあるが，筑紫野市峠山1号墳（註31）などにも見られIIa式の典型的な二重口縁壺である。これらの土器は確実に古墳に伴うものとはいいきれないが，葺石と同じく墳丘から落下したとも考えられ，これ以上新しい土器は伴わないところから，墳丘の形態からしても端山古墳の時期を決定できるものと思う。端山古墳は，土器と墳丘形態から4世紀中頃の古墳である。



第 159 図　八反田I－1bトレンチ（1/60）

(4) 甕 棺 墓（図版59，第159・160図）

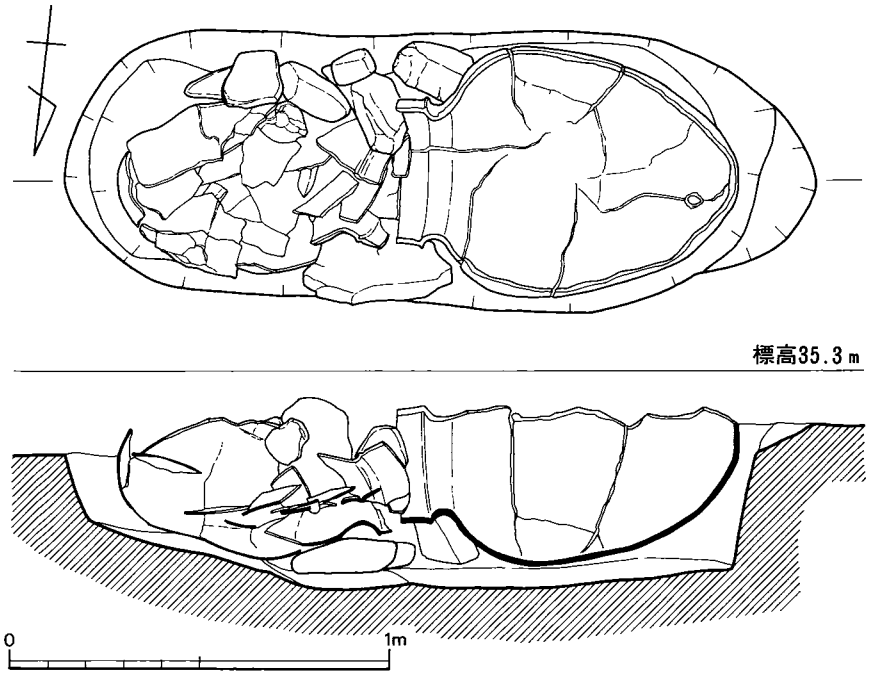
八反田Ⅰ－1地区東端bトレンチで発見されたもので，端山古墳北西側周濠角付近に位置する。地山面が中世にかなり削平されているため，甕棺の上半は破損していたが，小形の上甕(東側）は削平前に陥没していたために破片の大半は棺内にあった。甕棺は二重口縁大形甕で,(主軸をN84°E方向に向けて合口式に組合せ上甕を5°低く埋置している。甕棺の組合せには，口縁下に枕状に平坦な石を配置し，棺を組合せた後には合口から上甕の側面にさらに数個の板石を添えている。

甕棺の掘方は，上部が削平されていることから墓壙といえるほどの広さはなく，棺の周囲をほぼ均等に掘っているだけである。ただ，上甕側が浅く，下甕の底部付近の傾斜が急であるところから，弥生時代甕棺のように横穴状の墓壙が存在した可能性もある。

棺内には，副葬品や赤色顔料は認められなかったが，下甕下面の底部近くに穿孔がある。

甕　棺（図版60－1，第161図）

上　甕　上甕は器高66.1cm，口径34cm，体部最大径50.3cmの大きさの二重口縁大形甕。口縁



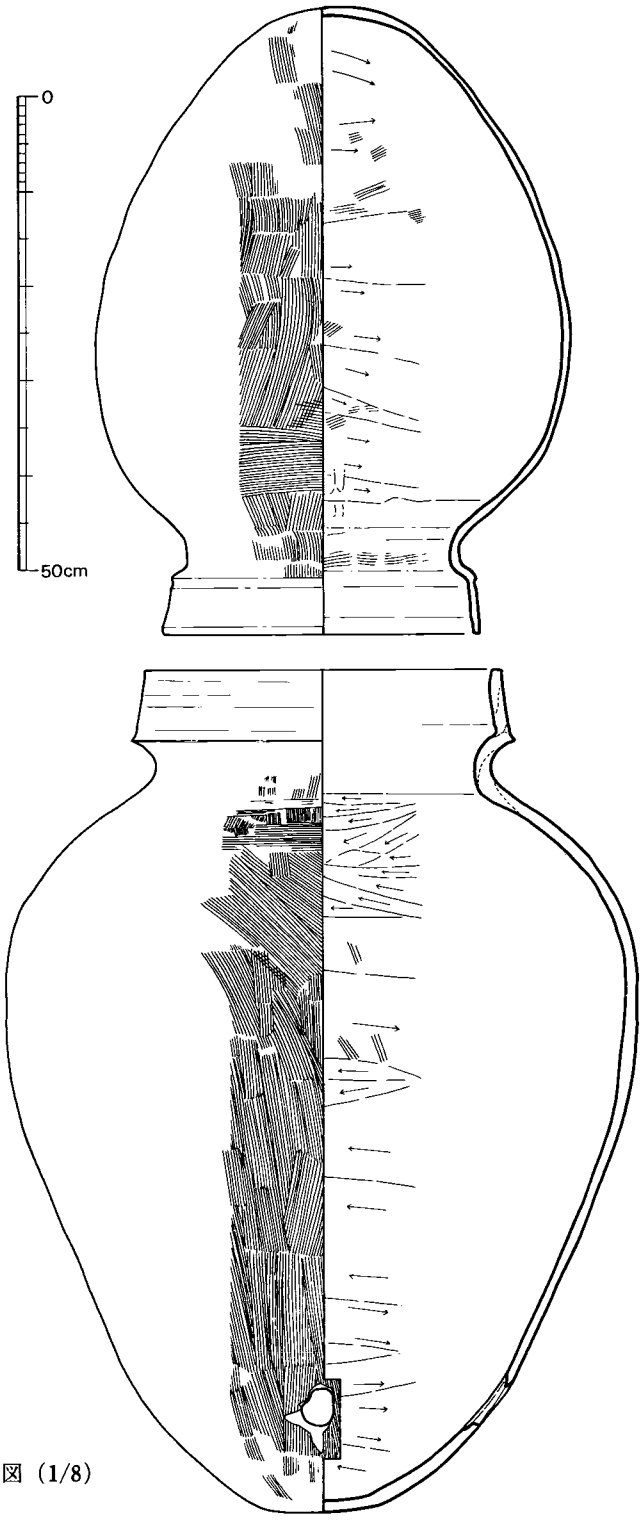
第160図　八反田Ⅰ－1 甕棺墓（1/20）

部の立上りは，わずかに開いて先端部に平坦面を持つ。多少頸部の立上りがあるが，頸部は締らずになで肩の体部に移る。体部の最大径はやや上位にあるが，下甕のように肩部が張らない。丸底である。

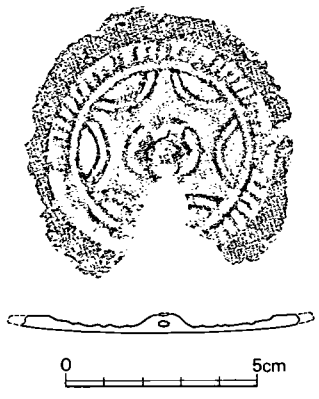
器面調整は，口縁部のみヨコナデで，外面は肩部にヨコのハケ目が見られるが他はタテ方向の粗いハケ目が残っている。内面は頸部にヨコハケがあるが，体部のやや下方からヨコのヘラケズリが行われている。胎土には石英・角閃石・雲母などの細粒を含むが，明褐色から黄褐色の良好な焼成となっている。

下　甕　下甕は器高88.6cm，口径38cm，体部最大径66.2cmの大きさの二重口縁大形甕。口縁部の立上りは内傾し，先端に平坦面を持つと同時に頸部との接合部が外方に鋭く突出する。頸部はなくて直接体部に移るように湾曲するが，体部は大きく肩を張り，下半を細長くする。底部は全体から見ると丸底であるが，わずかに平坦面を残している。

器面調整は上甕と同じで，肩部の一部にヨコハケがある。



第 161 図　八反田Ⅰ－1甕棺実測図（1/8）



第 162 図　周濠出土
小形仿製鏡（1/2）

その他の遺物

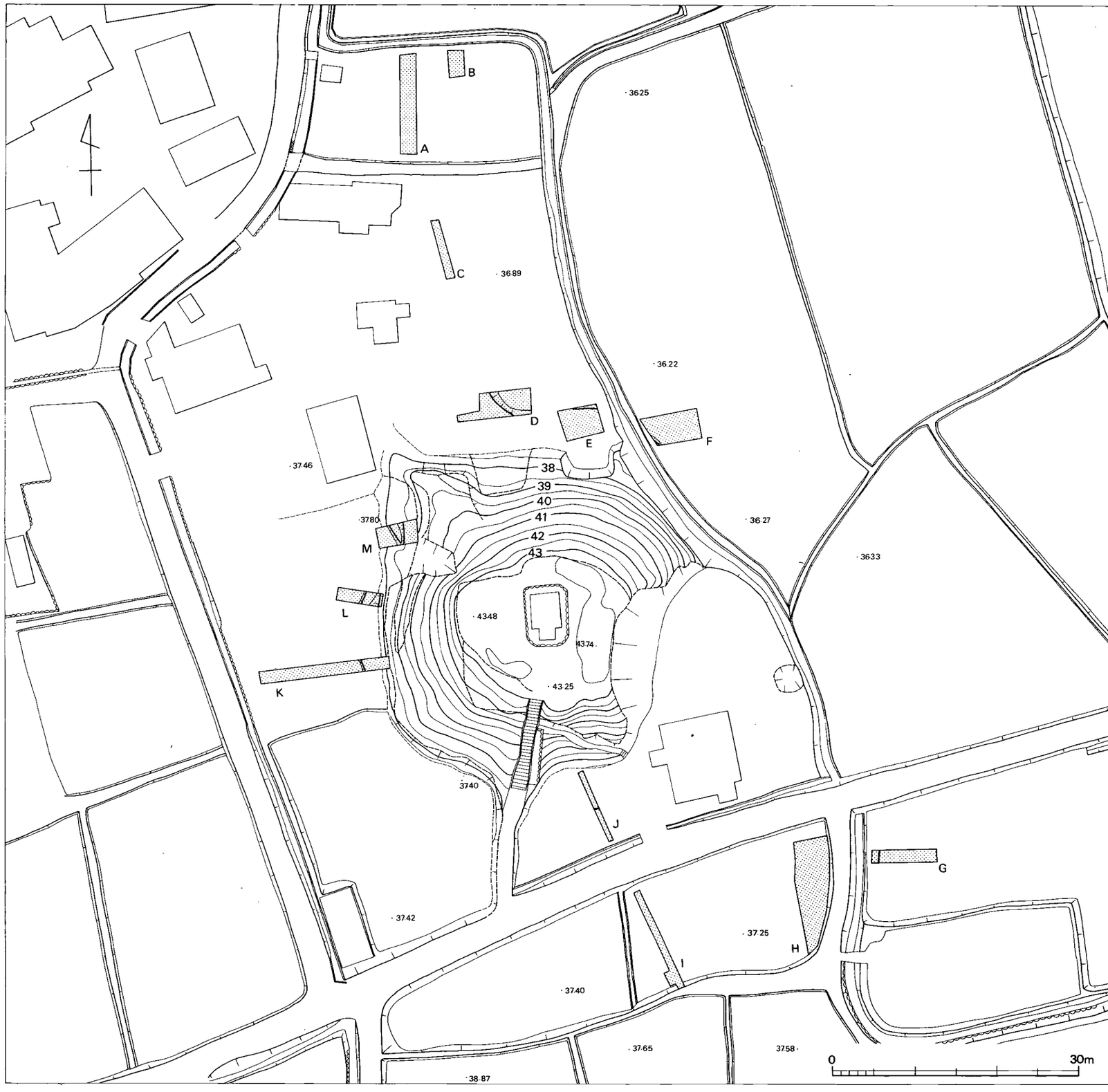
前方部周濠内から弥生時代の小形仿製鏡が1面出土している。西側周濠外の13世紀中頃の陶磁器を出す石垣大溝底面からも小形仿製鏡が出土しているので，弥生後期前半から弥生終末の土壙墓が八反田や塚廻り地区に群集していたものと思われる。

小形仿製鏡（図版60－2，第162図）　周濠内という予想外の場所から出土したため，発掘時に著しく損傷を受け，正確な出土地点さえ不明である。仿製鏡は，復原直径約8.1cm，反り 2.5mm，縁幅約11mm，縁厚3.25mmの大きさで，全体に青緑色に錆ている。破損断面を見ると芯には赤銅色の地金が残っている。鏡の文様構成は，外側から順に，広縁・斜行櫛歯文・複線円圏・複線連弧文・円圏鈕座・鈕となり，高倉洋彰氏分類のIIb型に属する（註32）。弥生終末のもの。（柳田）

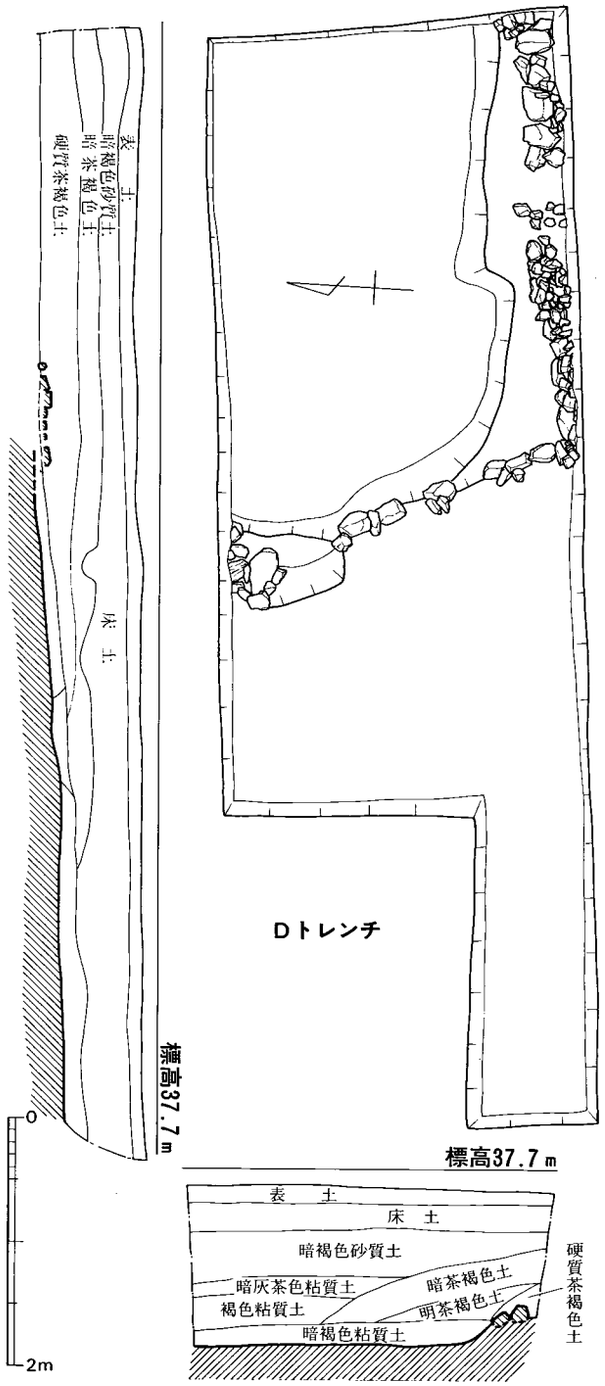
3　築山古墳

端山古墳の南々東約 200ｍに構築された前方後円墳である。破壊がひどく，前方部は宅地となり，後円頂部は観音堂が建ち，南東側裾部は公民館建設で大きく削りとられている。よって，現状は径40ｍ程度，高さ６ｍの円墳状を呈し，くびれ部付近がわずかに残るだけである。墳丘斜面は河原石が散在し，葺石の存在を示している。また，後円部東側斜面で円筒埴輪片を表採した。古墳周辺の環境は築造時からかなり変わり，周濠は埋まって周堤の一部が後円部南側にわずかに残るだけである。

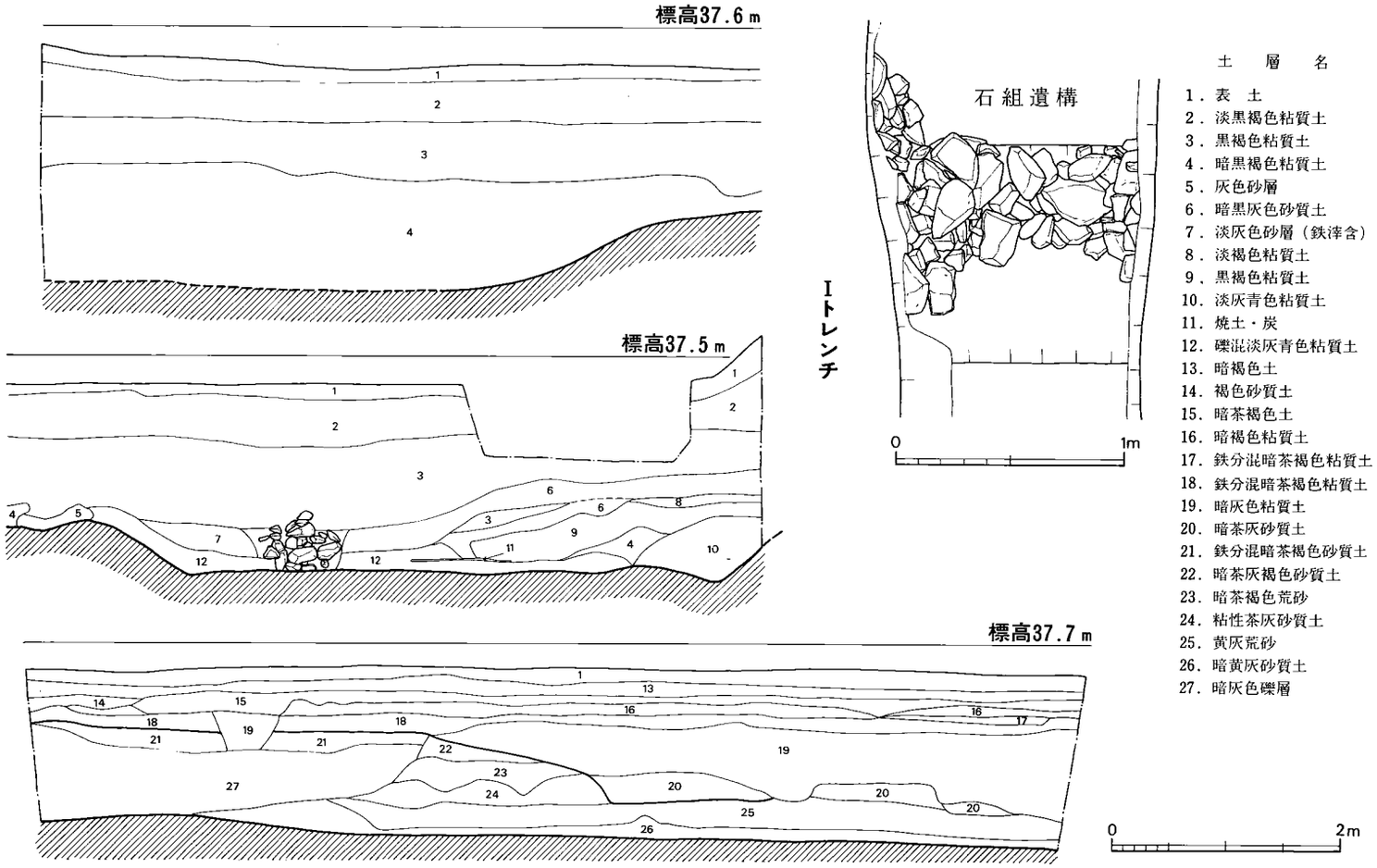
今回の調査は，墳丘の規模と主軸の方向を明らかにする目的で，13ヶ所にトレンチを設定して行った。調査の結果，Ｄトレンチで東側クビレ部を検出し，Ｍトレンチで検出した墳丘裾部の方向と勘案して，北面すると予測していた前方部の向きは北西側に向くことが判明した。後円部側のトレンチ調査の結果，後円部径は48ｍ～49ｍ程度に復原される。墳頂部の観音堂建設にともなって埋葬施設が破壊されたような形跡や言い伝えはなく，後円部の高さは現状よりせいぜい２ｍ前後高かったと考えれば，８ｍ程度であったろう。また，くびれ部幅は20ｍ程度で，周溝幅は後円部側ではＩ・Ｊトレンチの調査結果より，24ｍ程度である。前方部については，古墳の西側を南北にはしる農道が東に曲接する部分が墳丘主軸とほぼ直交し，この部分が前方部先端か，周堤付近に相当する可能性のあることを示している。Ａ・Ｂトレンチでは周濠に関係する遺構や土層は確認されず，表土下40cm程で砂層に達し，両トレンチの位置は周濠の外側にあたると考えられる。よって，先述の農道部分はその向きから周堤に相当する可能性があり，



第 163 図 築山古墳墳丘測量図 (1/600)



第 164 図　築山古墳トレンチ土層図(1/60)



土　層　名

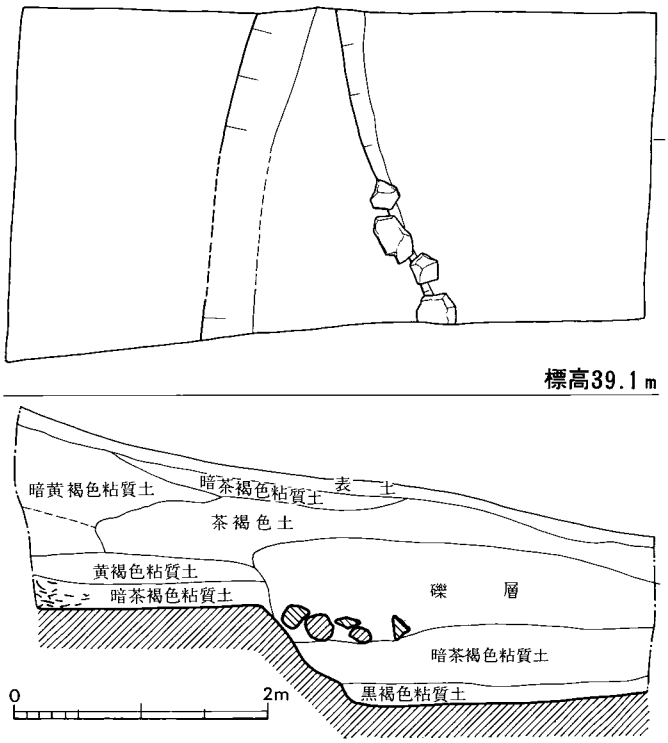
1．表　土
2．淡黒褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．暗黒褐色粘質土
5．灰色砂層
6．暗黒灰色砂質土
7．淡灰色砂層（鉄滓含）
8．淡褐色粘質土
9．黒褐色粘質土
10．淡灰青色粘質土
11．焼土・炭
12．礫混淡灰青色粘質土
13．暗褐色土
14．褐色砂質土
15．暗茶褐色土
16．暗褐色粘質土
17．鉄分混暗茶褐色粘質土
18．鉄分混暗茶褐色粘質土
19．暗灰色粘質土
20．暗茶灰砂質土
21．鉄分混暗茶褐色砂質土
22．暗茶灰褐色砂質土
23．暗茶褐色荒砂
24．粘性茶灰砂質土
25．黄灰荒砂
26．暗黄灰砂質土
27．暗灰色礫層

土　層　名

1．表　土
2．暗黄褐色砂質土
3．褐色砂質土
4．攪　乱
5．礫混茶褐色土
6．暗茶褐色砂質土
7．茶褐色砂質土（赤味をおびる）
8．茶褐色粘質土
9．暗茶褐色粘質土
10．暗褐色粘質土
11．暗褐色微砂質土
12．黄色粒混暗褐色粘質土
13．褐色粘質土
14．茶灰色砂質土
15．礫混暗褐色粘質土
16．礫　層

前方部前面の周濠幅が後円部側のそれと同程度であったと仮定すれば，築山古墳の主軸長は60ｍ前後であろうと考えられ，前方部はあまり長くはなかったようである。平野部に構築された本墳は，墳丘のほとんどが盛土によって構築されているようであり，封土中には弥生土器・土師器片が多量に含まれ，古墳構築直前までの遺構をかなり破壊しているようである。

トレンチ調査の折，後円部南側のＩトレンチで石組遺構を検出した。上端で幅１ｍ，深さ40cmの溝に河原石をつめたもので，東西にのびるようである。周溝底に40cmの厚さで鉄滓や焼土を含む層があり，これを切り込んで石組がつくられていた。この層には糸切底の土師器杯片が含まれており，石組遺構は中世以降のものであり，この時期頃まで周濠は完全には埋まっていなかったようである。



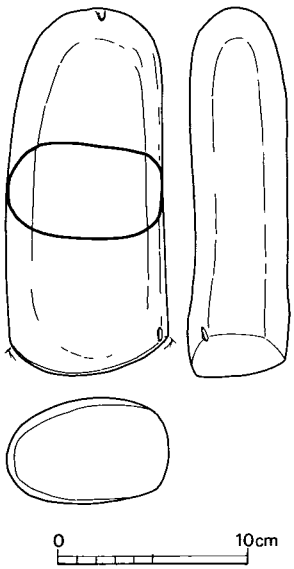
第 165 図　Ｍトレンチ（1/60）

出土遺物（図版64・65，第166・167図）

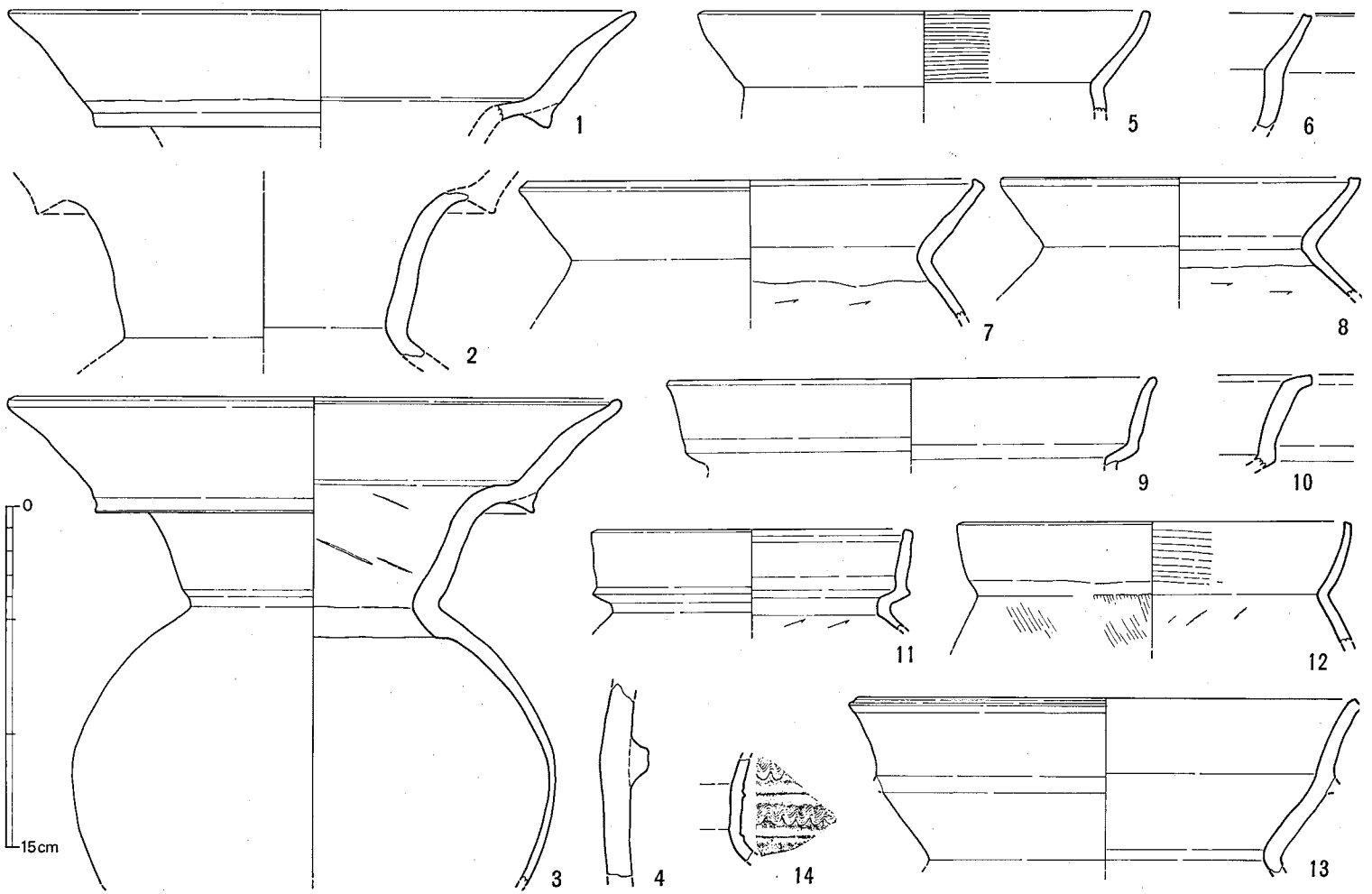
弥生土器・土師器が墳丘裾部の盛土より多量に出土した。他に埴輪片・須恵器片・石器が周濠から出土している。

石　器　西くびれ部墳丘裾部の盛土から出土したすり石である。硬質砂岩製で重量は 1.6kgである。

埴　輪　（１～４）　１～３は壺形埴輪である。１は東くびれ部から，２は西くびれ部から出土し，３は両くびれ部から別々に出土した破片が接合した。３は復原口径27cm，胴部最大径21.1cm，現存高21.5cmをはかる。口唇部はやや肥厚し，頸部との境に三角凸帯をはりつける。体部は球形に近いと思われ，頸部より一段下がった所より下位はヘラケズリを行い，器壁が薄



第 166 図　築山古墳周濠出土石器実測図（1/4）

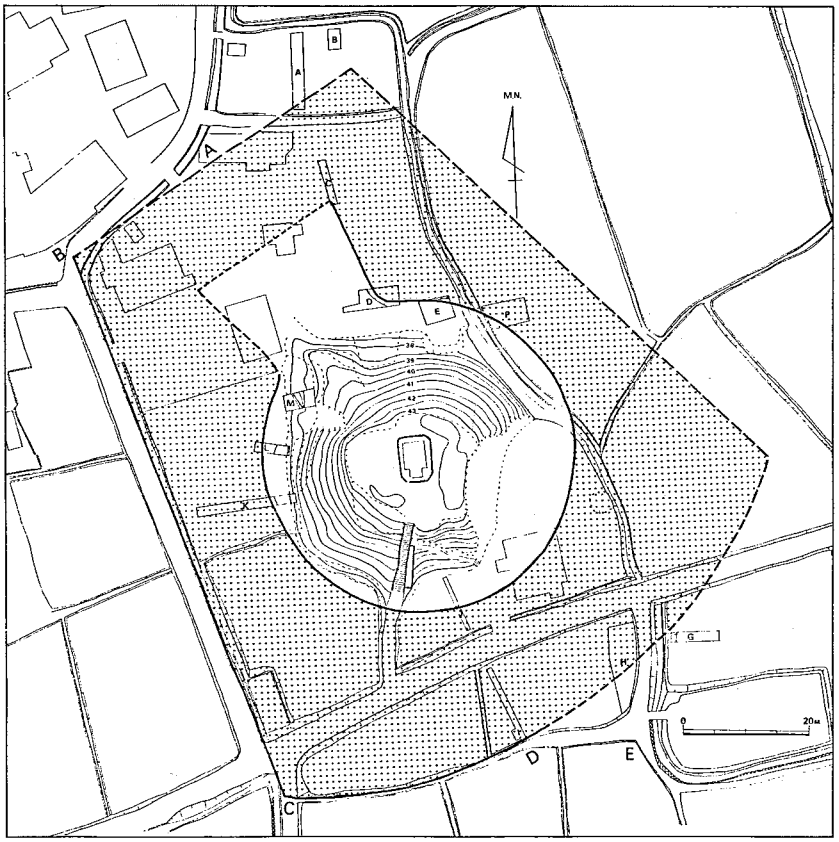


第 167 図 築 山 古 墳 周 濠 出 土 土 器 実 測 図 (1/3)

くなっている。風化が進行し，調整は明瞭ではない。外面には朱が付着しており，本来は朱塗りされていた可能性がある。胎土に砂粒を多く含み，焼成はふつう程度で，器表が剝落して淡茶色を呈する。1・2も3と同様である。4はMトレンチ周濠底で検出した円筒埴輪片で，タガの所で径32cm程度に復原される。器面は風化して調整は不明。砂粒を多量に含み，焼成良好で茶灰色を呈する。

須恵器（14）　Iトレンチ周溝埋土最下層から出土した。器形は明確にしがたいが，壺になるかと思われる。微砂粒を多く含み，焼成良好で硬い。外面は黒灰色，断面はあずき色，内面は灰をかぶり灰色を呈する。

土師器（5～13）　墳丘裾部の盛土出土の土器で，7・8・11は他の土器より古い様相を示す。ただ，10は弥生時代後期の高杯片で山陽系のものと推定される。9・11は山陰系，13は不明だが，他は布留式系統のものである。7・8・11をのぞいた土師器はサキゾノ遺跡の小結によれば，IIbに相当し，4世紀後半代におかれる。また，1～4は確実に本墳に伴い，14もあるいは伴う可能性があるが，1～3の壺形埴輪は福岡市老司古墳(註33)出土のものと比べて，球胴で内面ヘラケズリをして器肉を薄くし，口縁部の形状などに古式の様相を呈している。老司古墳は5世紀初頭を降らないとされている。築山古墳は墳丘内出土のIIb（4世紀後半）の土師器を上



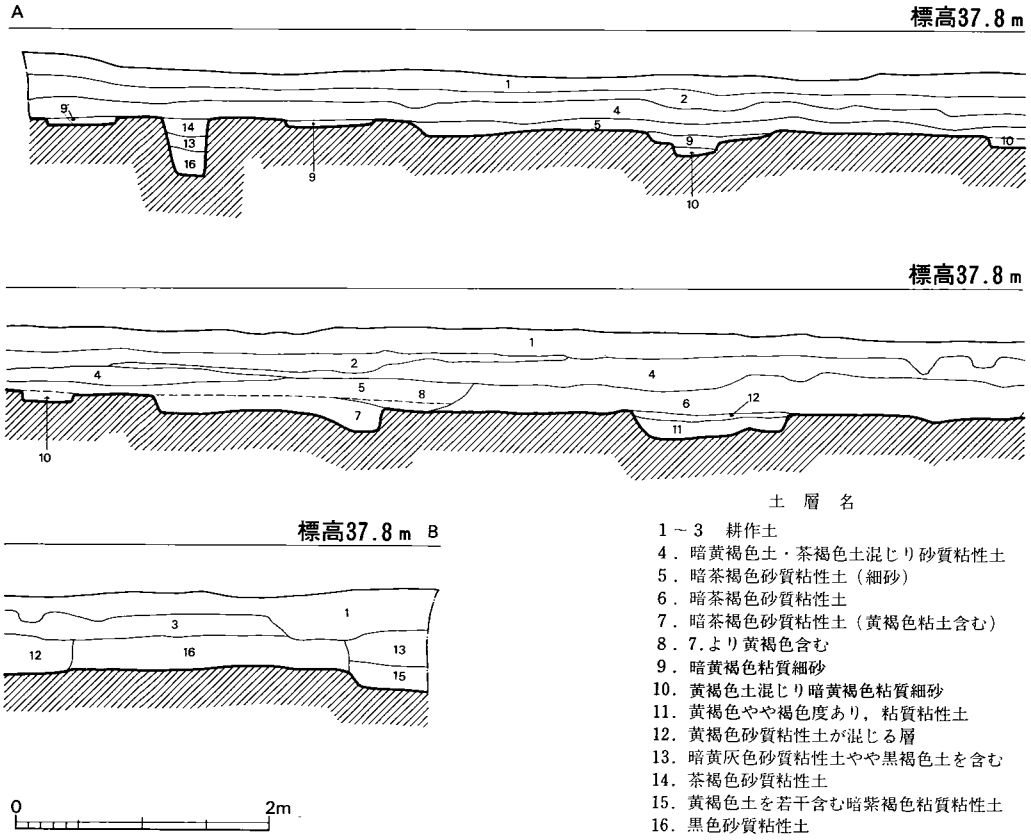
第 168 図　築山古墳周濠区画復原図（1/1,200）

限とし，下限は老司古墳を考えることができる。よって，築山古墳の成立時期は4世紀末前後の頃に求めることができよう。（児玉）

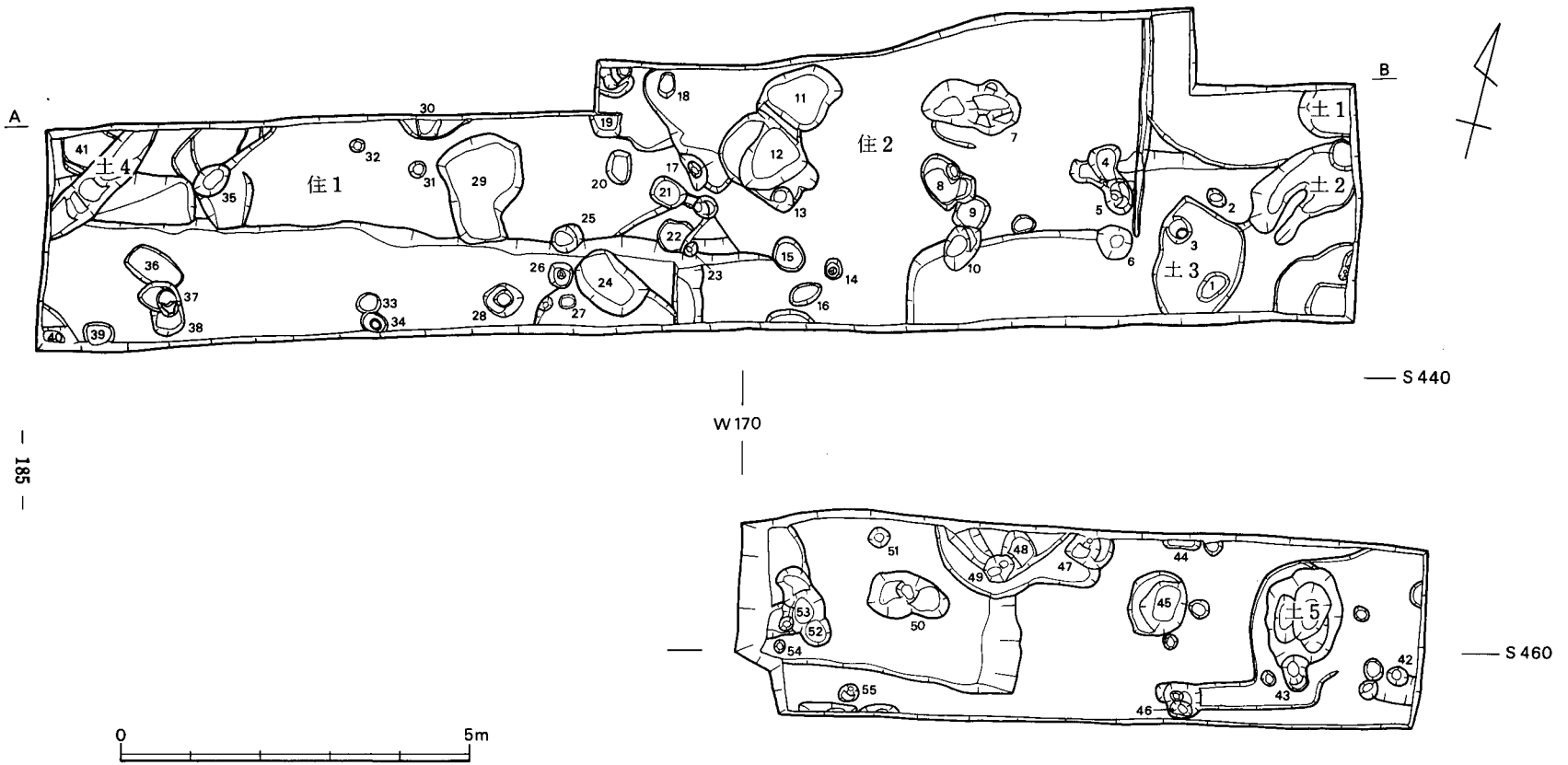
4　塚廻りII－6の調査

塚廻りIIは，端山古墳域以外で字塚廻りの付される区域であり，私達は茶臼塚古墳の存在した可能性もあることから注意していた。昭和55年度の調査にとりかかった折に，II－6が整地され建築資材置場に使用されると知ったので，土地所有者の承諾を得て，昭和55年6月1日から発掘調査を実施した。調査は柳田康雄と小池史哲が担当し，新開誉之が参加した。なお，実施にあたっては前原町教育委員会から種々の協力を得た。

(1)　住　居　跡



第 169 図　塚廻りII－6北トレンチ土層図（1/60）



第 170 図 塚廻り II－6 遺構配置図 (1/100)

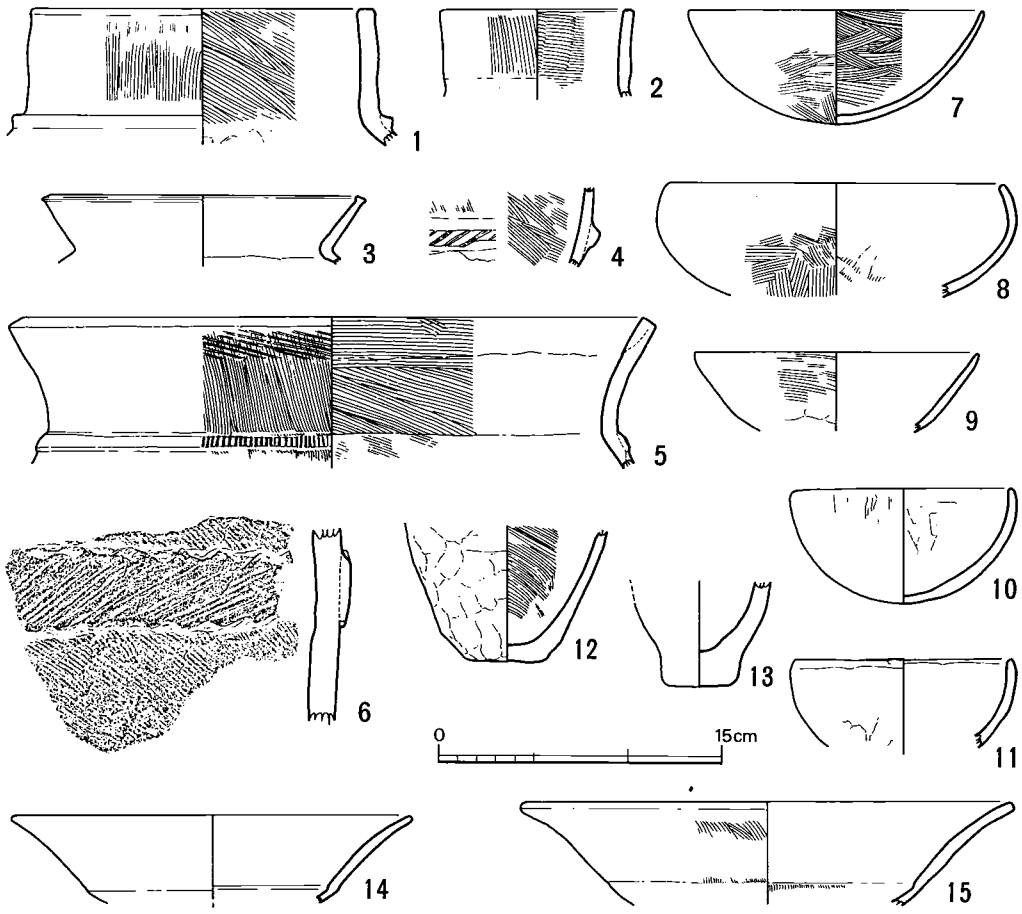
南側トレンチ及び北側トレンチの南半部は攪乱が激しいが，北側トレンチの北半分はさほど削平を受けておらず，確実に住居跡と思われるもの2軒分，住居跡の可能性のあるもの2ヶ所を検出した。

1号住居跡（図版66－3）

北トレンチ西半分のW168～W176に検出された住居跡で，南側は削平され，北半部は調査区域外に及ぶため全体の規模は不明だが，長方形プランを呈すであろう。この場合，S438・W176で確認したコーナー，S438・W170に確認できた周壁と思われる段差，S438・W168の土層断面で確認できた掘り込みを結ぶと，長辺8ｍ＋α 短辺 4.5ｍ前後の規模になり狭長な形状になる。南東側にベッド状遺構の付く可能性も否定し難いが，床面の直上まで耕作土の及んでいることもあり明確ではない。また北寄りでも耕作土と耕作土下の近世遺物も含む遺物包含層が床面の上約10cm迄迫っており，北東部埋土のみやや厚みを有していた。床面は極て堅緻だが，北東部は2号住居跡と重複しており貼り床状になっている。部分的に確認できた周壁は西側で約10cm，南東部で5cm前後，北東部で16cmを有すが，北東部を拡張した際には床面に相当する高さまで攪乱が及んでおり，北東方向に延びるのか北西方向に延びるのかの識別をなしえなかった。W 173～ 174にある木炭・焼土を含む皿状の炉跡が住居跡のほぼ中央に位置すると仮定すれば，確認した南東壁がベッド状遺構の内側であることと，北東部周壁が断面の位置から北西に延びていたことになるだろう。床面を掘り込んだ柱穴としてはP30・P35がしっかりとした柱穴で，削平された部分のP26・P28も住居跡出土土器と時期的に大差のない破片を含んでいるが，P25からは先行する中期の破片のみ出土した。なお，北東部の貼り床より4cm上で鉄鋤先が出土している。

土　器（図版67－1，第171図）　1は直口壺で頸部に凸帯がめぐらされ口縁端部はやや内湾する。2は直口の小形壺破片，3は布留式甕，4～6は刻み目凸帯をもつ破片で，いずれも内外面共ハケ目調整され，6の扁平な貼付凸帯では上端を指押えするのに対して下端は波状にしたままである。7～9は器高の2倍以上になる口径を有す椀形土器で，ハケ目調整とナデが併用されているが，9の下半はケズリに近い。10～12は口径が器高の2倍程度になる手捏の椀形土器。13は底部のみの破片で若干凹凸のある指ナデ調整が施される。14・15は高杯杯部破片で，杯底面からわずかに屈曲して長めの口縁部がゆるやかに広がる形状をなす。3・15は灰色っぽい黄褐色を呈すが，他はおおむね淡褐色～暗黄褐色を呈している。1・7・9・15は床面密着，10～12が西コーナー部分のピット内等から出土した他は，埋土出土資料，これらの土器は3の甕から布留式土器の古い段階に相当するといえる。

陶質土器（図版67－3）　2片共北東部の埋土から出土した小破片である。1は頸部破片で外面暗めの灰色，内面黄灰色を呈すが調整手法は不明。2は外面黄灰褐色，内面灰色を呈し，外面に縄席文が施され内面はナデられる。縄席文の方向が錯綜しており底部に近い部分であろう。



第 171 図　1号住居跡出土土器実測図（1/4）

石　器（図版68－1，第173図1）　炉跡内上層から出土した。白雲母片岩製紡錘車で直径4.2cm，厚さ6㎜，孔径4.8mm，重量22.3ｇを測る。

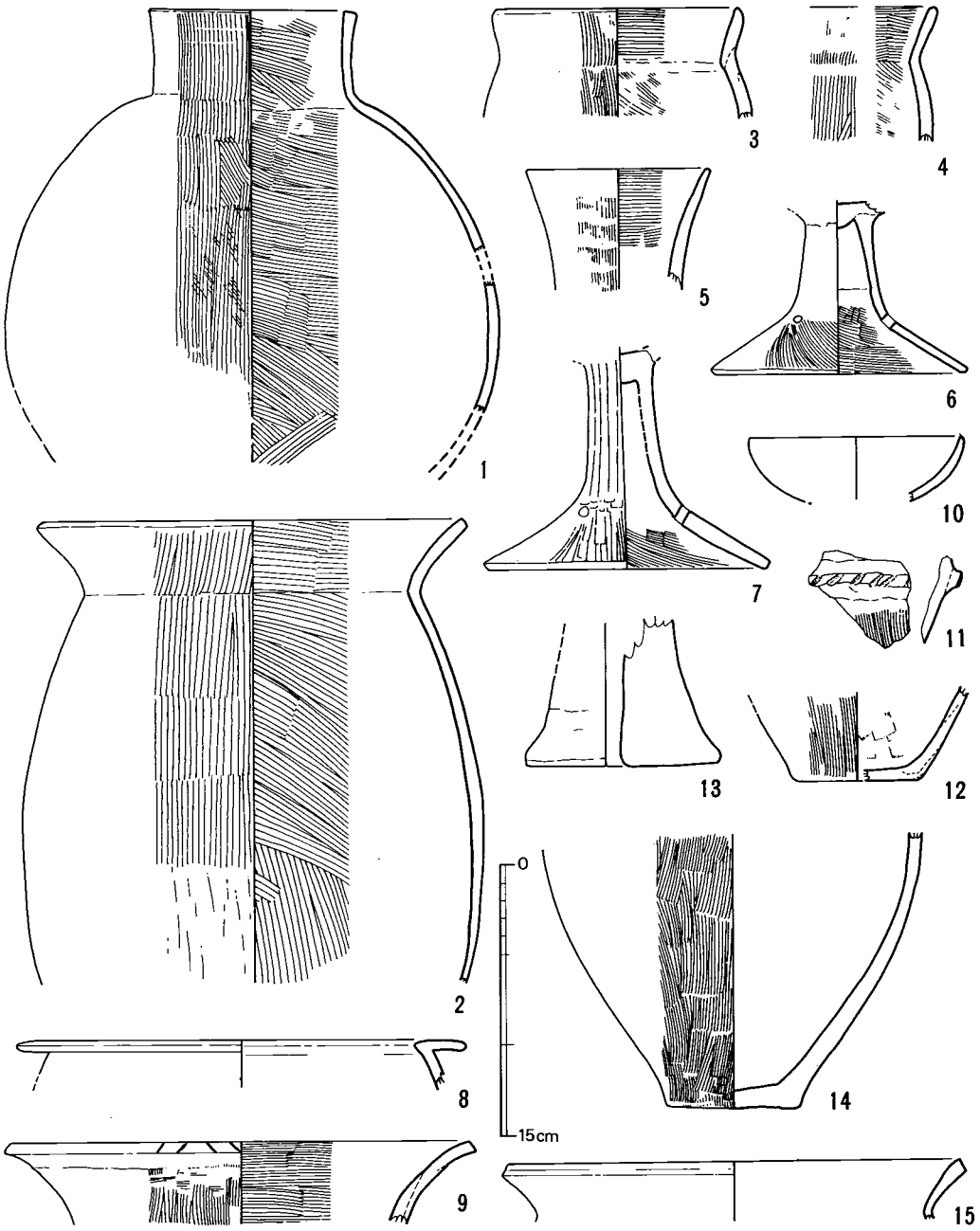
鉄　器（図版67－4，第174図1・2）　1は床面よりわずかに浮いた状態で出土した鋤先片で，半分を欠損するが，U字形の袋部をもつタイプのものである。長さ8.5cmを有すが，幅は7.3cmを残しており本来15cmはあるものと思われる。刃幅は2.1～2.2cmを有し，袋部は5～7㎜の深さを占める。資料の中程で袋部は錆のため不明だが，袋があるために膨らむと思われる表面のわずかな反りが約7㎜の幅に基部から中程までみとめられるので袋部がつづくと考えられる。

2は埋土から出土したが，2本の細い棒状のものが錆着している。1本は幅4.5mm，厚さ3.2㎜の断面隅丸長方形を呈し，端の方では厚みを減じているが，1本は 3.5㎜×3㎜の方形に近い断面を有している。いずれも短い破片のため用途は不明。

2号住居跡（図版66－4）

塚廻り

W 164～W 170の間に検出された住居跡で，西側は1号住居跡と重複する。耕作土を剝ぐとすぐ確認できる東壁は約25cmと厚めで南北方向に延びる。南側は削平されており既に床面より

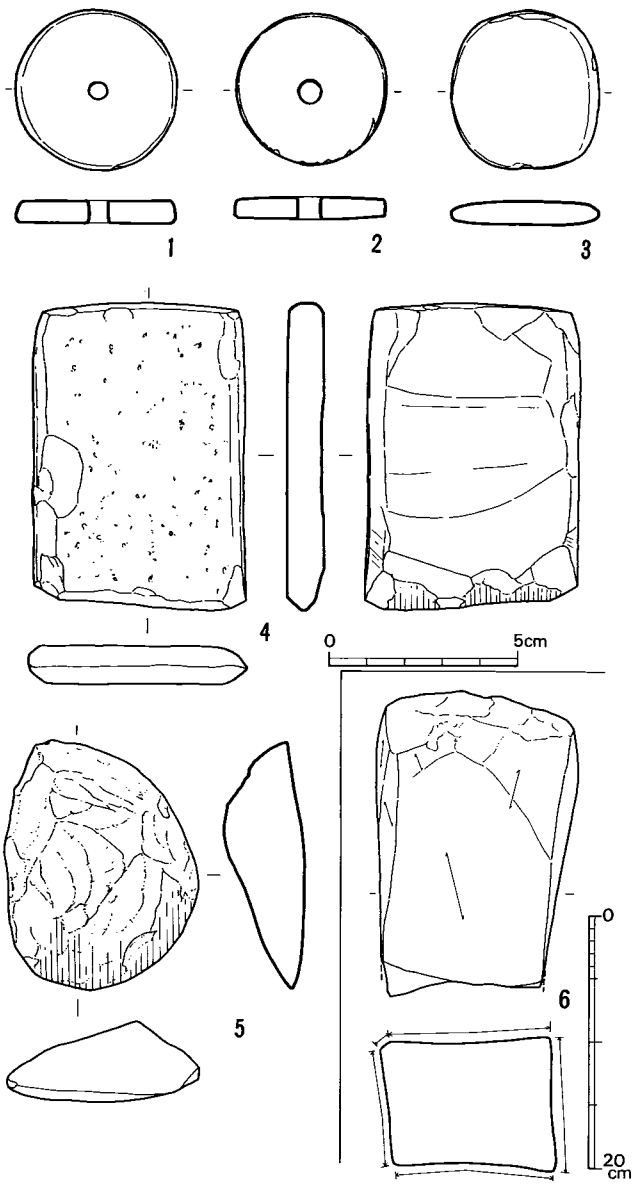


第 172 図　2号住居跡・土壙等出土土器実測図（1/4）

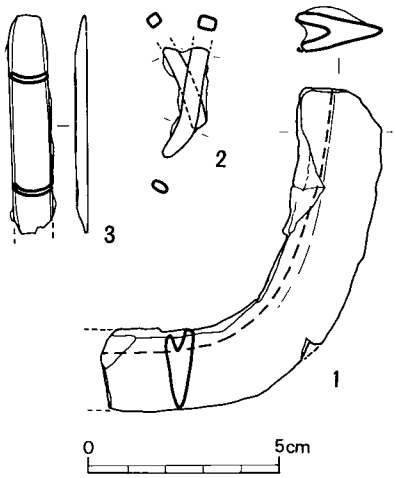
下に達しているが，北側に残る床面は極て堅緻で，木炭・焼土の広がりをもつ部分があること，壺・甕・高杯等の土器が床面に接して出土することから，北側の畦畔ぎりぎりまで発掘区を拡張して掘り下げた。住居跡内の西半部は砂利が多く，砂利の少ない部分はピットを埋めて貼り床にしている等で，床面は堅緻でなく，周壁も東壁の方向に対応しない斜めの方向の段落ちを確認したに留まる。敢て南北方向になる西壁を仮定するとすれば，P13とP15付近のわずかな高低差を考えなければならない。床面を掘り込んだ柱穴様ピットはP4～P18の15基がある。このうちP7・P11・P12は貼り床されており住居跡に先行するもの，P8は炉跡である。また後述するように円形住居跡が構築されていたとすればP15はその主柱穴となり2号住居跡の柱穴からは除外される。

土　器（図版67－2，第172図1～7）

1はP7の上面出土の直口壺で，胴最大径が下位にあるナデ肩を呈し，胴下半はハケのあとナデ消されている。2は東壁に近い床面よりわずかに浮いた位置出土，3・4は北西寄りの埋土から出土した甕形土器で，2の口縁部は外方に開き胴下半ハケ目のあとナデないしはミガキ調整でハケ目を消している。5は細頸壺の口縁部破片でP6から出土した。6・7は床面出土の高杯脚部で，6は裾部内外面をハケ目調整，短かめの柱状部をナデ調整される。7は長めの柱状部をもつが外面をハケ目原体による裾から上に向うナデでケズ



第 173 図　II－6 出土石器実測図（1/2,1/3）



第 174 図　II－6 出土鉄器実測図（1/2）

りに近い状態になっており，裾部内面はハケ目調整され，やや内湾気味で端部は面取りされる。

これらの土器では，内外面共ハケ目調整される手法をもっているが胴下半のナデ消し手法や高杯の形状からみて弥生終末期以降布留式の古段階に相当するものであろう。

石　器（図版68－1，第173図2）　P 7 の上面から出土した白雲母片岩製の紡錘車で，一部欠失するが直径4 cm，厚さ 6 mm，孔径 5.7～6 mm，重量現存値17.5 g を測る。

その他の住居跡状遺構

1・2 号住居跡の重複する部分に貼り床を有す土壙のP11・P12があり，このうちP11を中心として約 2.5 m の位置にP 7 ・P15・P21・P19があり，一定の間隔で配置することから円形住居跡の可能性がある。床面は既に削平されており各柱穴も浅くなっている。土壙内下層の土器は小破片ばかりだが特徴からみて中期中葉頃であろう。また，P12を中心とすれば全て中期の土器片のみを含むP 7 ・P10・P25が約 3 m の距離を有してめぐることになる。これも土壙内の土器片からみて中期中葉頃であろう。また，S 440・W172に検出された落ち込み，S 437・W163付近に検出された落ち込みは，円形プランの周壁である可能性を残している。それぞれ 3 ～ 6 号住を仮称しておくが，3・4 号住に伴うとみられるP 7 の貼り床下から砥石，5 号住から甕形土器の口縁部破片が出土している。

土　器（第172図,8）　逆L字状口縁の甕形土器で中期中葉頃であろう。

石　器（第173図,6）　やや粒のある砂岩製の砥石で，中砥程度の砥面が四面にわたっている。

(2) 土　　壙

住居跡外のピットで比較的大きな掘り方を有す遺構は，攪乱坑を除けば 5 基ある。

1 ～ 3 号土壙は調査区東端部にあるが，主体が調査区外に延びる。1 号土壙からは図示しえる遺物を出土している。凹状で浅い 2 号土壙・3 号土壙から出土した土器片は小破片で図示しえないが，前者は布留式期，後者は弥生中期後半の丹塗り土器が含まれている。

1 号土壙出土の土器（第172図 9 ～11）は，ハケ目原体による刻み目を有す甕形土器・器高の 3 倍になる口径を有す椀形土器片で 1・2 号住居跡とさほど変わらない時期であろう。石器では第 173図－ 3 に示す重量18.4 g を測る白雲母片岩の紡錘車未製品がある。

4 号土壙は調査区西北端にあり溝状に近いが，土器では第172図12に示す底部や丹塗土器片

が出土しており弥生中期後半頃であろう。石器では第173図－5に示す玄武岩製局部磨製石斧が出土しているが，打製石斧の欠損品を再利用して刃部を両刃に研磨したもので，71.5ｇ。

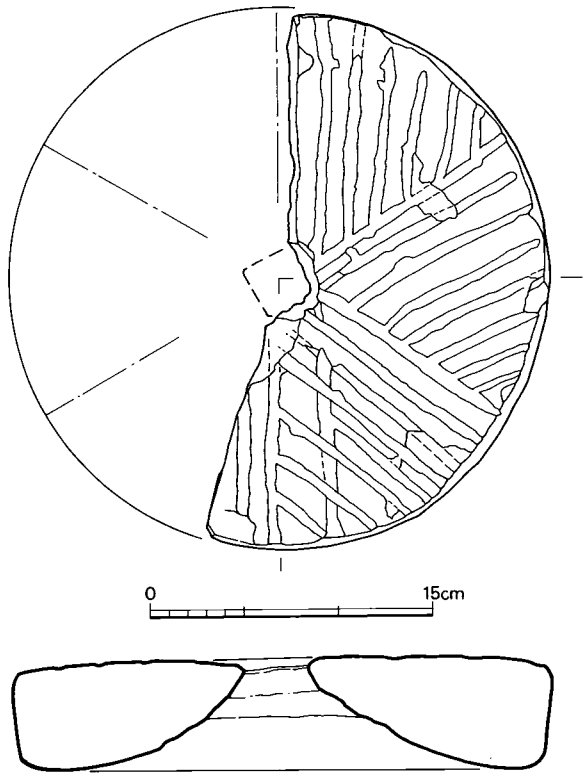
5号土壙は南トレンチの東寄りS 460・162に検出され約0.6ｍの深さを有すが，図版68－2の2に示す端反り椀を含む明白磁・染付等16世紀代の遺物が出土している。

(3) その他の遺構と遺物（図版66－2）

柱穴様のピット等で性格不明のものが多数ある。主な出土遺物を示すことにする。P37からは第172図13のようなやや片寄って孔が穿たれる支脚裾部破片，14の甕形土器底部破片が出土している。甕は弥生中期後半，支脚は弥生後期に属するものであろう。P42からは14世紀代の白磁片・土師器小皿片，P47からは同安窯青磁片，P48からは図版68－2の1に示す玉取獅子染付の破片が出土しており，15～16世紀代であろう。P50やP52等からは近世陶器片等が出土している。

遺物の包含層では，北トレンチの西端部では第172図－15の甕形土器口縁部破片，第173図4の石器などが出土している。甕は口縁端部が稜をもって肥厚し，口唇部外面は浅く凹む。細砂と少量の金雲母・角閃石を含み，均一で細かな気泡をもつ淡明褐色に焼成されている。石器は緑泥片岩質の素材を扁平な矩形に打欠調整した後研磨しているが片面には粗い面を残しており，頭部は平坦面であるのに対し下端部は石斧の刃部の如き擦れ方をしている。重量95.2ｇを測る。（小池）

石　臼（図版68－3，第175図）　北トレンチ上層で出土した下臼の残欠である。内径2.8×3.4cmの中央部の方形孔は，円形に造作しておらず，上臼碾面に突出する中軸棒が下臼孔内で回転するのを防ぐためであろう。碾面は縁部



第175図　石臼実測図（1/4）

が若干下がり気味で，磨られた内容物の臼外への排出効果を保たせている。外径28.6cmで，磨歯は8等分割され，7条の歯で1単位とするが，新たな目たて以前の歯が3条遺存する。歯の使用による磨滅が著しく，歯幅 0.6cm・深さ 0.1cmと浅い。下面の着地部は使用による磨滅で凹凸がないが，中心部に向けて大きく内湾する面は荒削り仕上げのままで，工具痕を多く残す。中央部最小径部から碾面までわずか 0.4cmしかなく，磨歯の複合状態からしても，目たてを数回造作する程に使用されている。現在高は 6.0cmを測る。気孔 0.1cm以下の玄武岩質石材を使用し，淡橙灰褐色を呈する。（馬田）

鉄　鉇（図版67－4，第174図3）　北トレンチの包含層上層から出土した。断面U字形の鉇で，現存長 5.7cm，幅 1.1cmを有す。

鉄　滓（図版68－4）　北トレンチの包含層上層から出土した拳大の椀形を呈すもので，重量 278gを測る。外湾して椀形の背に相当する面には藁灰を含んだ痕跡がみとめられ，側面などに花崗岩質の砂粒を若干みることができる。全体に小さな気泡も観察できる。（小池）

5　小　結

端山古墳・築山古墳は，圃場整備計画から除外できたものの，古墳の調査としては調査面積としても最低のもので調査結果を述べうるべきものではなかった。とくに両古墳の主体部と副葬品が不明な点は致命的ともいえるが，端山古墳では典型的な墳丘型式から，築山古墳では古墳に伴う壺形埴輪が判明したことによって，一応の成果をあげたといえる。

古墳の周濠区画についても，特異な形態となったが，決して存在不可能なものではなく，今後の調査が期待される。

塚廻りII－6地区の調査は，緊急調査によるトレンチ掘りであったが，地区名が「塚廻り」であるだけに，古墳もしくは古墳関連遺構の存在を期待したが，小面積の調査であったためか，弥生終末から古墳初期の住居跡が検出されたにすぎなかった。しかし，大型古墳が存在しないことは確実となった。

塚廻りII－6の1号住居跡出土の鉄鋤先は，U字形鋤先としては最古のものとなった。都出比呂志氏の研究によると，「U字形スキ」は5世紀中葉に出現するといわれるが，同研究の中には「鉄製打ちグワ」の下限が5世紀中頃としながらも「4世紀末以降のものは，小形化し，鉄板は二ミリ程度の薄いものとなる。」として4世紀末に「U字形スキ」に交替する可能性を示唆されている（註34）。1号住居跡のU字形鋤先は，最も新しい土器がIIa式（布留古式）であるから4世紀中頃まで上る可能性をもち，今後の類例を待ち再度の検討を必要とする。（柳田）

第6節　八反田地区の調査

1　はじめに

八反田地区は，昭和49年度の試掘調査でⅠ－1のa・bトレンチとⅡ－6のa・c・e・gのトレンチ，昭和53年度のⅡ－3地区住居跡を調査した。八反田地区は畑地が多く，水田であっても秋の収穫後にビニール栽培を行うため，昭和49年度の試掘は荒地のⅡ－6だけとなっていた。したがって，昭和53年度の圃場整備実施年度には，工事着工後に切盛調整をすることが多かった。しかも，業者によっては荒い表土剝ぎを行なって，大量の遺物が出土することも多かった。この中でⅠ－1の北側では弥生前期小児壺棺（板付Ⅰ～Ⅱ式）群が出土したり，Ⅱ－3では弥生中期祭祀土器群が出土した。Ⅰ－1地区の弥生前期壺棺群は，調査せずに客土による保存が決ったが，Ⅱ－3の祭祀土器群は削平および道路敷となるため（土砂の入替）に調査せざるを得なかった。さらに，Ⅱ－2・3の畑地縁を削るために，表土剝ぎを行ったところ畦下とでもいえるところに大量の土器が後世に集積してあった。耕作等で付近から出土したものであろう。遺物は，弥生中期から終末におよんでいた。

2　Ⅰ－1の大溝

八反田Ⅰ－1では，端山古墳の西側周堤の位置を確認する意味で，a・bのトレンチを設定した。bトレンチでは，端山古墳の項で報告したように二重口縁合口甕棺墓が出土し，端山古墳の周濠外であることが判明した。aトレンチにおいても，この地区は周濠外であることは明らかであるが，13世紀頃の大溝が検出されたので報告する。

八反田Ⅰ－1のaトレンチは，北壁を北側の道路に，東壁を東側畦道に平行させたため不整台形をした調査区となった。

大溝は略東西方向に伸びているが，規模は西側幅3.5m，東側幅4m，深さ70cmの大きさで，底面はわずかに東側が低くなっている。大溝の両側壁には石積があるが，南側はとくに遺存状態が悪く石材が散乱するだけで積方が不明である。北側壁の石積は一部に整然と保存のよい部分があるが，東半側は保存が悪く乱れている。基底部に大きな石材が使用されていないためか基底部ほど保存が悪くなっている。石積法は，長目の石を使用して小口を壁面としてそろえる乱石積であるが，石材には花崗岩など多種の河原石を使用している。大溝の底面は割合に平坦で，堆積土の最下層には鉄分を多く含んだ砂層があるところから，大溝は水路であったことが

明らかである。

検出された大溝は，主軸をS74°Eの方向に流れるように掘られているが，この方向に向うと

第 176 図　八反田Ⅰ—1ａ大溝実測図（1/60）

端山古墳の周濠角に合流することになる。レベル的には周濠底が深くなっているので，合流するとすれば当然大溝の水は周濠に流込むことになる。ところが，周濠内は水が溜った痕跡はあるが，大溝のように底面に砂層が堆積して水が流れた痕跡はなく，両者に含まれる遺物が根本的に違っていることからも，両者は合流していないことが明らかである。端山古墳前方部の南北トレンチ北端では，大溝と同じような河原石が散乱する溝を一部検出しているので，大溝は周濠の直前で北側に迂回しているものと思われ，現在の北側道路下を東進するのであろう。

大溝の堆積土中には，多くの弥生土器片が含まれているが，これらは摩滅したものばかりであるから混入品であることが明らか。大溝に直接伴うと思われる陶磁器は，中位層に大きな破片が多く，最下層の砂層では小片しか出土しない。最下層では，弥生の小形仿製鏡片も出土。

（柳田）

陶磁器（図版70－１・２）

出土した中国陶磁は，越州窯系青磁，龍泉窯系青磁，同安（南安）窯係青磁，江南産の白磁，黄釉陶器，黒釉陶器，無釉陶器である。発掘面積が狭いため，その量はさほど多くはない。しかも，そのほとんどは細片化している。しかし，我国各地から出土する12世紀後半から13世紀代にかけての中国陶器の代表的なものは一応揃っている。

越州窯系青磁（１）は椀の底部片１点が出土した。全面施釉後高台畳付部分の釉を一部削り取り，重ね焼きするもので，内面に目跡が３個（復元すると５個）残っている。胎土は粗く，濃緑色の釉が掛けられている。この種の青磁の量はあまり多くはなく，しかも11世紀代の遺構からたびたび出土していること，また，通例の越州窯青磁と胎土，釉調を異にしていることから越州窯系とするにはいささか躊躇する。高麗青磁かもしれない。龍泉窯系青磁（４～７）は，高台を断面四角形に削り出し，体部に蓮弁文を有するタイプのものが多く，全面施釉後高台畳付部分の釉を削り取るタイプ（いわゆる砧手）のものである６は極めて少ない。同安窯系青磁（２・３）は，龍泉窯系青磁に比して出土量は少ない。２は高台見込み部分に墨書があるが，判読は困難である。

白磁は高台を細く，しかも高く削り出すタイプのもの（13～17）が多く，口縁部を露胎とし，伏せ焼きするいわゆる口禿げの白磁（８～12）がこれに次ぐ。陶器類では，黄釉鉄絵盤が１点，褐釉小壺（茄子型の茶入れ）の出土が注目される程度である。

以上の出土陶磁器から溝の埋没年代は13世紀後半代から14世紀前半代と推定される。また溝全体を覆う層からも14世紀中頃以降のものは１点も出土していないことからも埋没年代観は補強される。

（森田）

小形仿製鏡（図版70－３，第　図）

13世紀頃の大溝最下層から出土した小形仿製鏡であるから，二次堆積した混入品である。

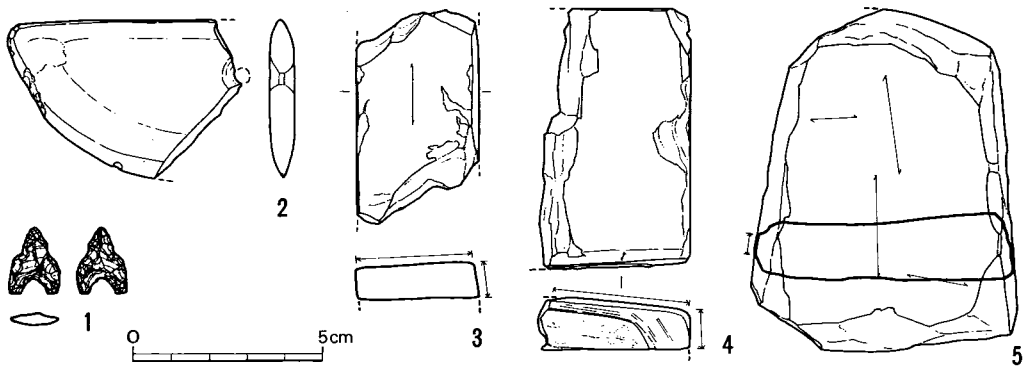
鏡は，復原径 7.6cmの大きさで，現存は約３分の１程の破片となっている。鏡縁は幅が６mm

第 177 図　大溝出土小形彷製鏡（1/2）

の素縁であるが，断面形は蒲鉾形を呈する細縁である。鏡の文様構成は，外圏から素縁・斜行櫛歯文・連孤文・不明文様帯・円圏・鈕座となっているが，連孤文は復原すると9孤文となる。鏡は，細縁であることから古式に属するが，高倉氏の分類ではIb型に属し，製作されたのは弥生後期前半でも古い時期であろう。

端山古墳周濠から出土した小形仿製鏡と比較すると，八反田例は金属質もよく，文様構成もより漢式鏡に近いものであるが，鋳造時の「湯冷え」による文様の鈍さに加えて，著しく表面が摩滅している。「湯冷え」と「摩滅」は区別が困難であるが，「湯」を注入した当初から「湯冷え」が発生すれば製品として完成しないことから，鏡全体に「湯冷え」現象が見られることはなく，「湯冷え」が見られるのは部分的なもので，漢式鏡にも多くの例がある。したがって，小形仿製鏡にも八反田例のように摩滅したものは伝世されたものである。　（柳田）

石　器（図版70－4，第178図）　1は黒曜石の打製石鏃で，先端が細めになり逆棘端が平坦，重量 0.7ｇ，包含層出土。2は溝出土の暗灰白色の頁岩製石庖丁で24.1ｇの現存値。3～5は砥石。3は包含層出土の資料だが卵黄色を呈す軟質の頁岩の素材を切断しており，中途まで擦り切ったあと折断した痕跡がみられる。現存値63ｇ。4・5は溝内出土で，重量の現存値26ｇの軟質頁岩製と 170ｇの砂岩製。なお，砥石の平面図に示す矢印は主な砥研方向，断面図に示す矢印は砥面の範囲である。　（小池）



第 178 図　八反田Ⅰ－1出土石器実測図（1/2）

3　Ⅱ－3の住居跡

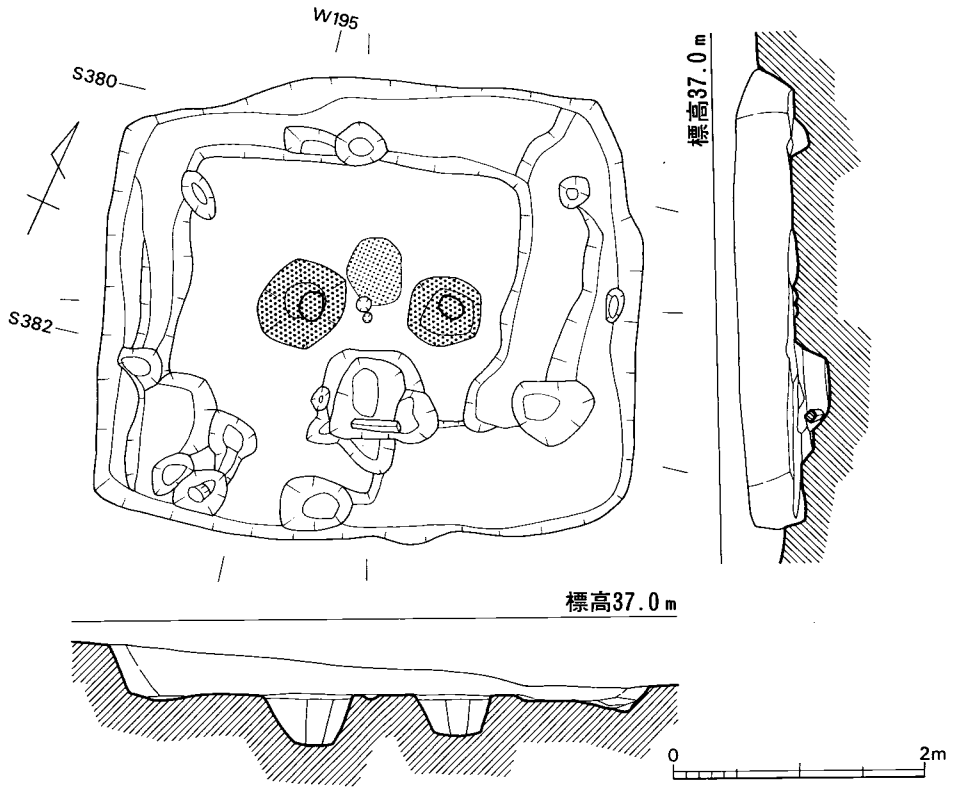
Ⅱ－3地区では，その東端を新設する南北道路がかすめるために表土剝ぎを行ったところ，

部分的に一括の大量の土器が出土したことから調査することになった。II－2・3地区の縁辺は，もともと大量の土器が耕作などで出土したものが集積されていたが，調査した地点のみ他と違った土器群を構成し，プラン的にも遺構として認められるものであった。

(1) 住居跡（図版71・72，第179図）

表土剝ぎで土器群が露出した時は，とてもこの下部遺構が住居跡であるとは思えず，最初は土器溜として遺物を処理した。ところが，遺物は時期的に限定されるものであると同時に，土器群には丹塗磨研土器が多く含まれていることから，次には祭祀遺構として遺物を処理した。このように，土器群のプランは限定できるものの遺構のプランとして確認できたのは，上層として土器群のうちまとまらない破片を取上げた後で，さらに住居跡と判明したのは，プラン内の土器堆積状況を見るため3分の2以上を掘上げてからである。

土器群の出土状況は，住居跡の4分の1程が埋没した後に土器群が一括して投入されており，



第 179 図 八反田II－3住居跡実測図（1/60）

土器群の投入は数次に渡るものではない。住居内が4分の1程埋没したといっても，住居跡全体が一様に埋没するものではなく，周壁部分から埋没していくものであり，土器群の一部は住居跡中央部で床面と接している。土器群投入以前の埋没土を住居跡下層として掘上げたが，この下層には土器片が少なく復原できるものがなかった。しかし，土器片には中期中頃のものも含まれるが，大半は上層や中層土器群と同型式のもので，住居跡も中期後半のものである。

住居跡は，東西 4.3m，南北3.65m，深さ45cmの隅丸方形住居跡で，中央付近で東西方向に並ぶ2本の主柱穴がある。住居跡は中央部の床面がわずかに高く，周壁付近が40～80cmの幅で浅い溝状となる。住居跡の中央には炉跡があるが，焼土の厚さは約4cmで中心程硬く焼けている。また，床面中央よりやや南側の炉跡と対称的位置に不整形の小竪穴があり，竪穴の中途に青銅器の鋳型を思わせるような整美な砥石が置かれていた。

2本の主柱穴は，掘方の径55～80cm，深さ27cm，柱径約20cmのもので，柱間1.15mの間隔に立てられたもの，その他の柱穴は不明。（柳田）

(2) 出土遺物

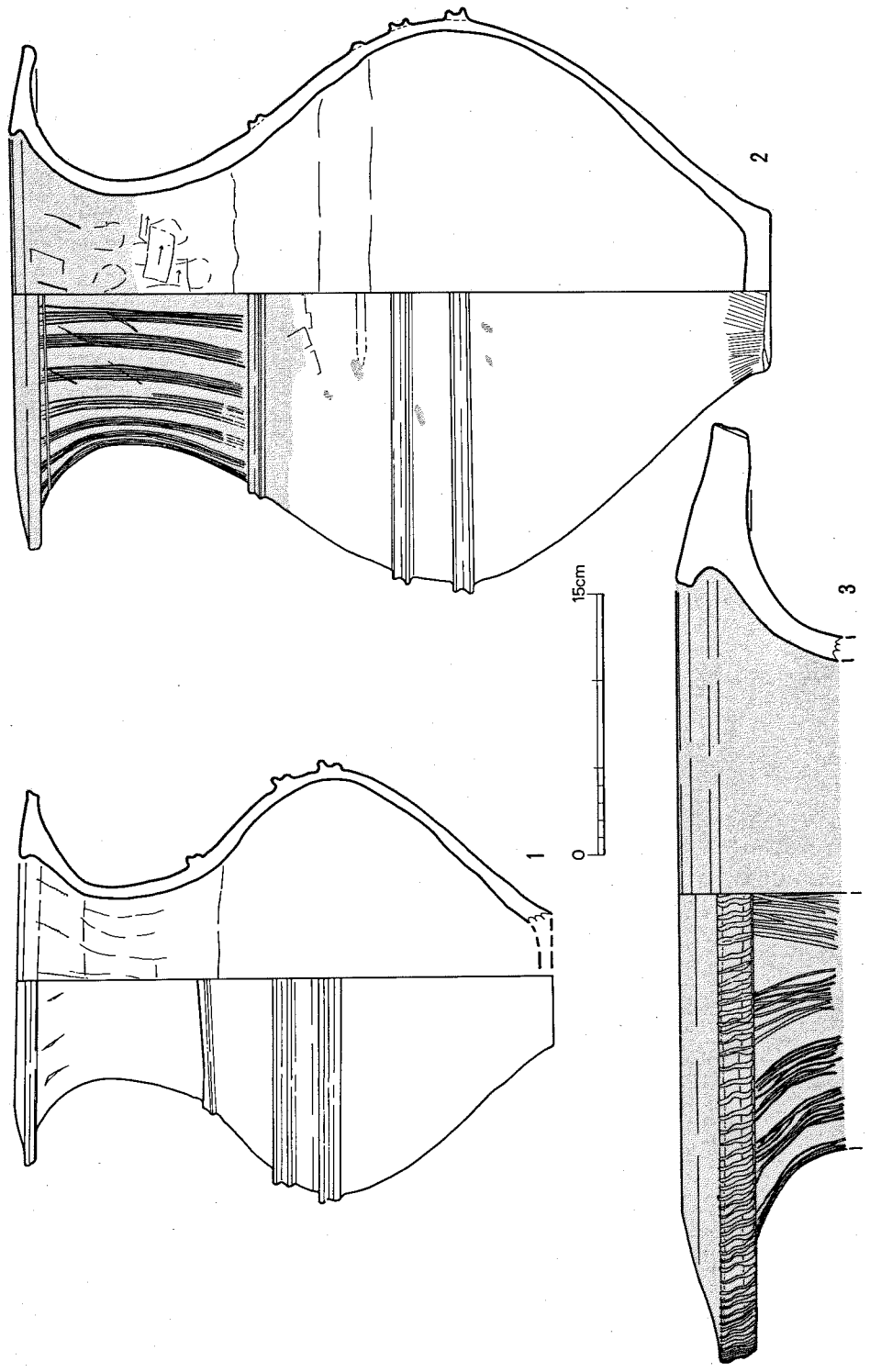
出土した遺物は整理箱 110箱以上にのぼる多量の土器と，若干の土製品・石製品がある。土器の器種・器形はほぼすべてに及んでいるので，その法量で小型はA・中型はB・大型はCの三者に大別し，器種ごとに口縁部などの特徴でこれをⅠ～Ⅴ類までに分類して，更に文様・凸帯の有無などの順で代表的土器について説明し，細部の時期的特徴や遺構・遺物の性格については最後のまとめで補足する。

土器

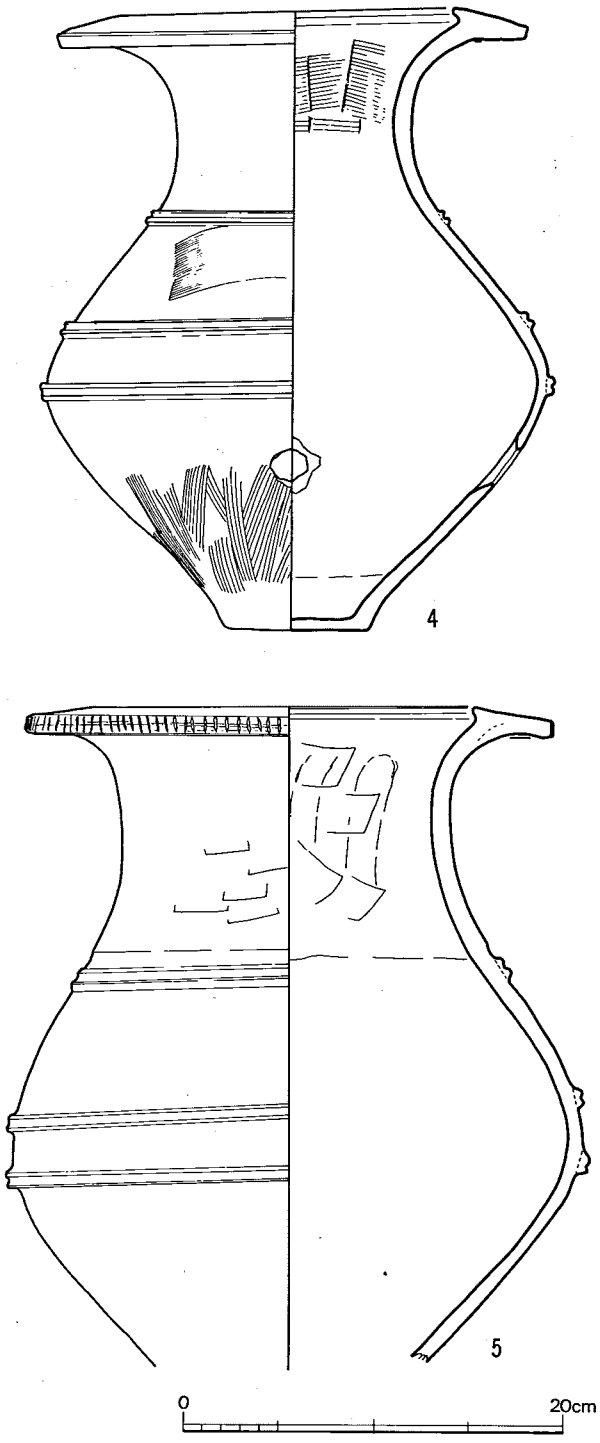
壺Ⅰ類（図版73・74，第180～183図）　口縁部が鋤先状を呈するもので，その法量によってA～Cの三種に分けられる。

A　小型の法量を示すもので，口縁部内径13.8cm・頸部最小内径 9.6cm・胴部最大内径23.2cm・器高30.5cmを測る1に代表される。1は頸部上位にヘラ様ナデ痕を残すが，器外面のナデは丁寧に施し，3条の凸帯は凹凸の差の著しい口唇状をなす。精良な胎土に細砂粒・金雲母片を若干含み，焼成は良く，褐色を呈す。その他に胴下半部に穿孔が認められる4や，口縁部に刻み目文・頸部に暗文と丹塗り・胴上半部に丹班文が認められる11等が含まれる。

B　中型の法量を示すもので，口縁部内径18.5cm・頸部最小内径13.6cm・胴部最大内径30.8cm・器高43.1cmを測る2に代表される。2は頸部をヘラ様工具で丁寧にナデ，5条前後を一単位とする暗文を一周させる。口頸部内面から肩部外面にかけて丹塗りを施す。胴部最上位の凸帯のみは口唇状をなさず，三角形状に近い。砂粒をやや多く含むが精良な胎土で，焼成は良く，黄褐色を呈する。その他に，暗文・丹塗り・凸帯等が類似する6や，胴部の凸帯数が2条であ



第180図　八反田 II－3 出土土器実測図①（1/4）



第 181 図　II－3 出土土器実測図②（1/4）

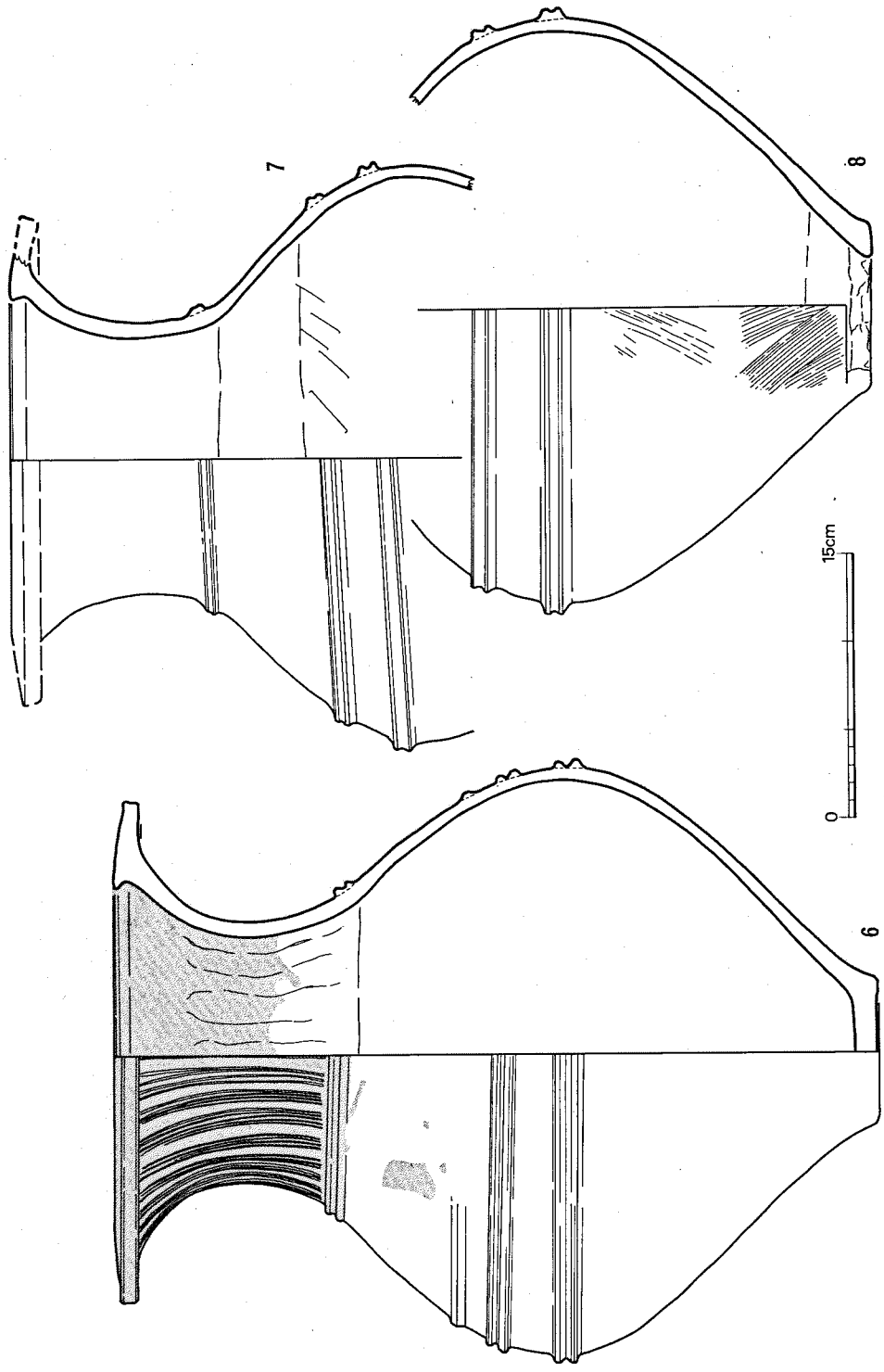
る12等が含まれる。

C　大型の法量を示すもので，頸肩部分の屈折がS字状をなすA・Bとは異なり，同部位は三角状凸帯を付して逆L字状に強く屈折するものと思われる。3は口頸部内径35.3cmを測り，頸部最小内径約27cm前後を有する。口縁部に刻み目文，頸部に8条前後の幅広い暗文を1単位として全周に施す。内外面共に丹塗りが認められ，砂粒を多く含み，焼成は良く，褐色を呈する。

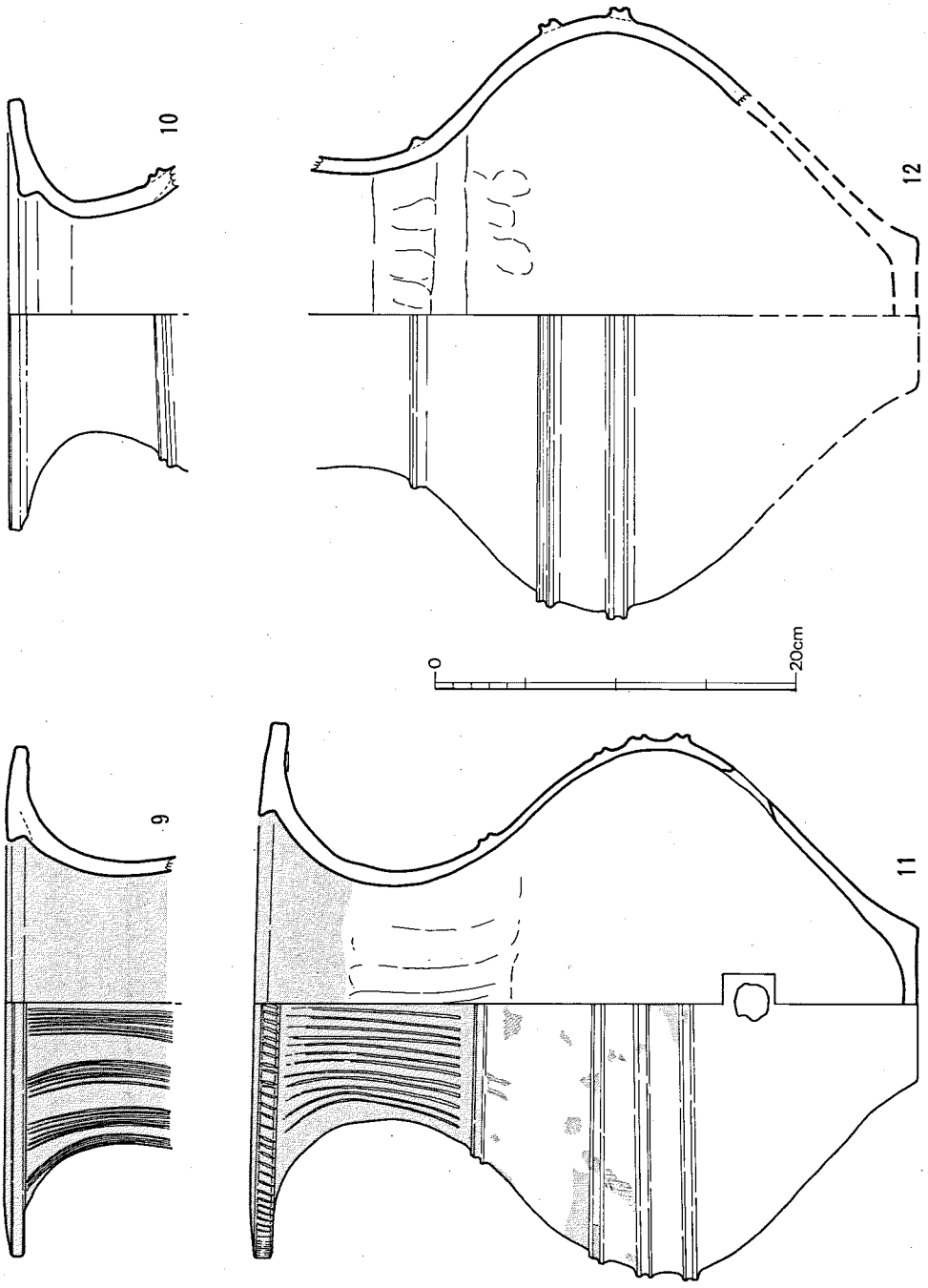
壺II類（図版75・77，第184・185・188図）　口縁部が鋤先状を呈さずに開口するもので，a・bの二者がある。

a　48は口縁部が鋤先状を呈さないこと以外の特徴はI類Aに類似する。

b　上位に最大径のある胴部から内外面に稜線をもって屈折する頸部が，中位までは直立気味で，上位から口縁部にかけて外反するものである。また口縁部径は胴部最大径とほぼ等しく，口頸部高は胴部高よりも小さく，凸帯を有さない17に代表される。17は頸部外面に10条前後を1単位とする暗文を施し，口頸部内面から器外の底部を除く部位にかけて丹塗りが認められる。精良な胎土に砂粒を少し含み，焼成は良く，茶褐色を呈



第 182 図　II－3 出土土器実測図③ (1/4)

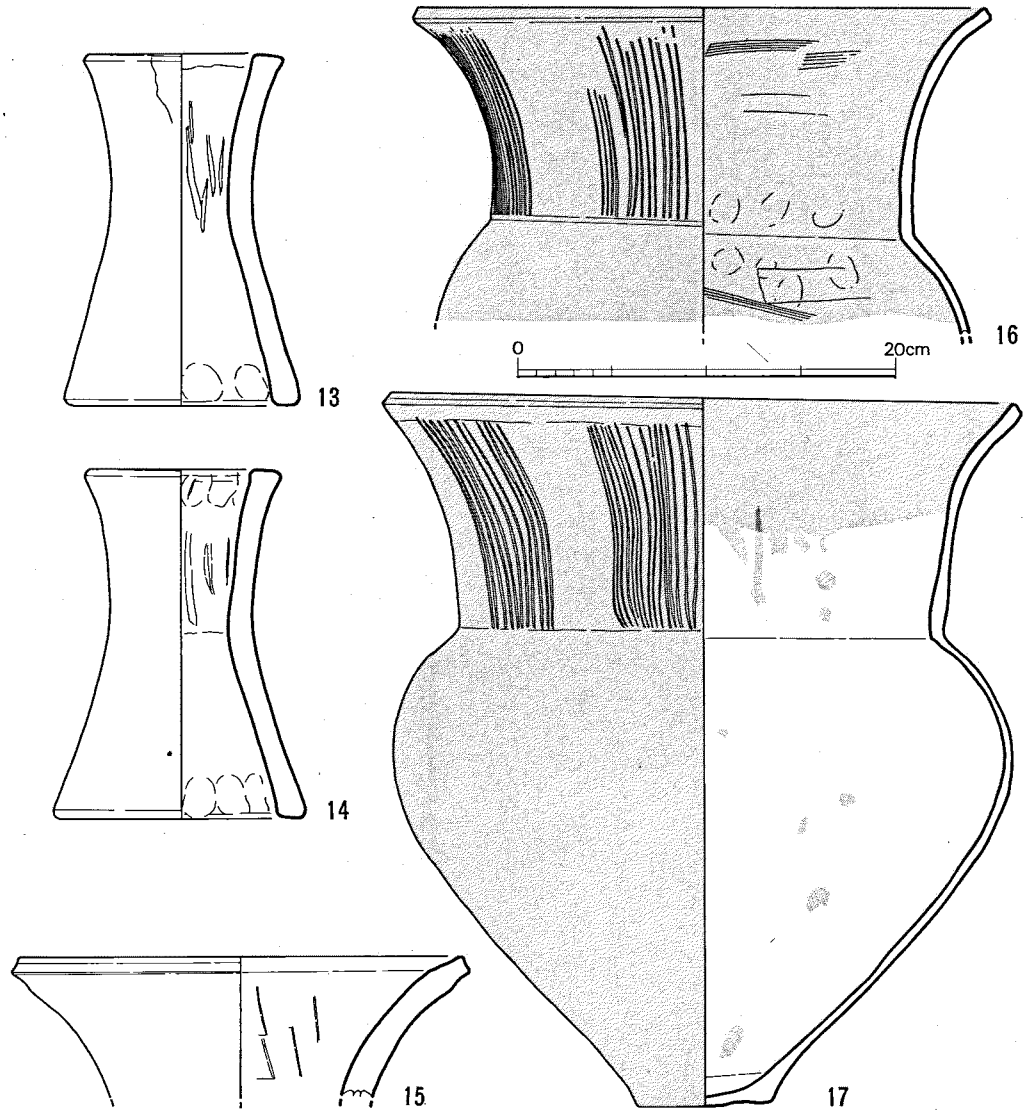


第183図　II－3 出土土器実測図④ (1/4)

する。24・25も同様で，16は口縁部径が胴部最大径よりも若干大きい。

壺Ⅲ類（図版76，第186図）　短かい頸部と口縁部の屈折が逆L字状ないしくの字状を呈するもので，a・bの二者がある。

a　29は胴部に凸帯を一条施し，脚台部を欠損している。精良な胎土に大きめの砂粒を若干含み，焼成は普通で，明褐色を呈する。26は下半分を欠失するが，欠損部は内湾しており，脚が付くものと思われる。

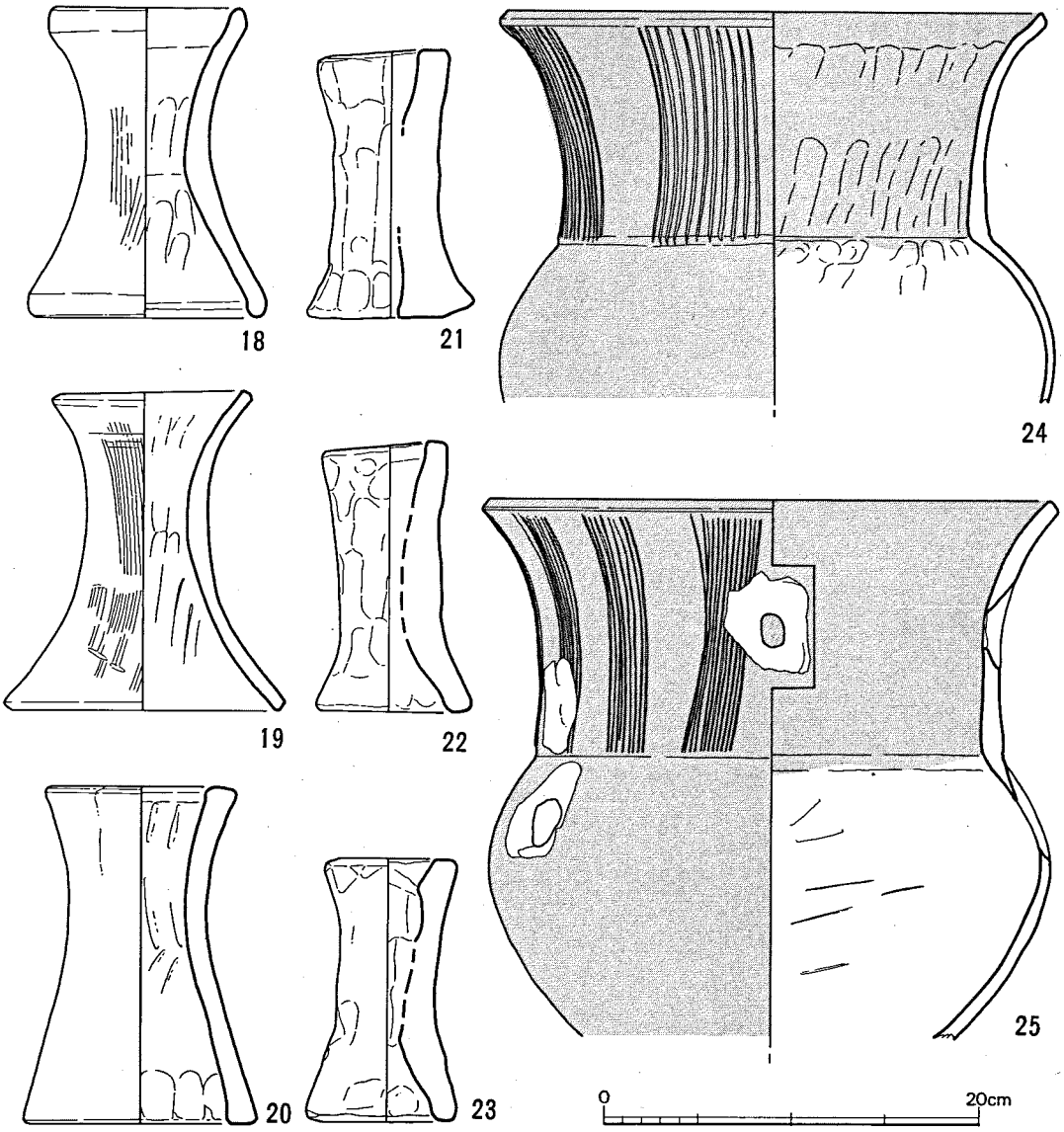


第184図　Ⅱ－3 出土土器実測図⑤(1/4)

b　30～33はいずれも口頸部内面から外面の底部を除く部位に丹塗り磨研を施している。

壺Ⅳ類（図版77，第187図）　口縁部が袋状をなすもので，大きく二者に分けられる。

a　頸肩部の屈折はS字状を呈し，頸部上位は大きく外反して口縁部最大径に至るが，その最大径部から口唇部までの屈折は大きくない36に代表される。36は口頸部にも縦方向の暗文を施し，最上位の凸帯は他が口唇状を呈するのと異なり，三角形状である。精製胎土に細砂粒を

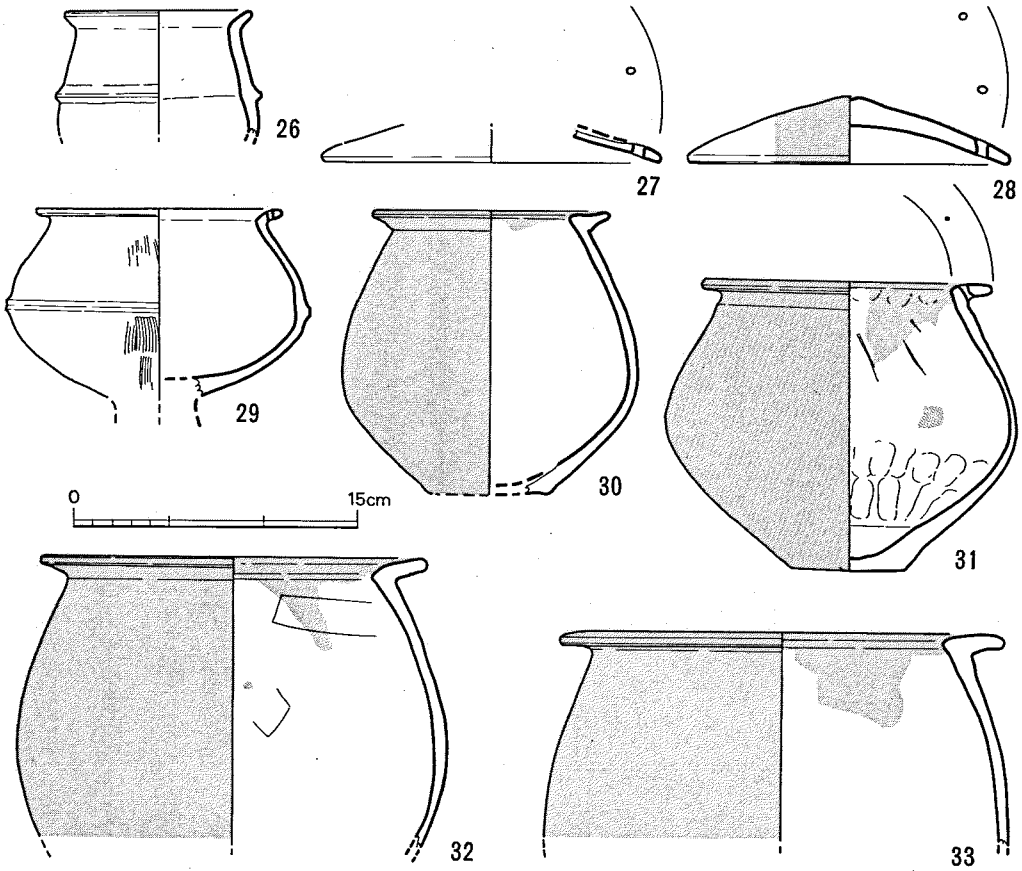


第185図　Ⅱ－3 出土土器実測図⑥ (1/4)

含み，焼成は良く，茶褐色を呈す。34は凸帯を付さず，39は頸部の径が特に小さい。35・37・38・40と共にいずれも単位的でない縦方向の暗文を付し，丹塗り磨研が施されている。

b　前者はいずれも底部を欠失するが，胴部最下位は若干外反したカーブから底部に屈折するものと思われるが，41は胴部下半が直線状のままで最下位に至り，底部へと屈折する。また胴部から直線的に内傾した頸部は最上位が直立気味のままに，内湾度の少ない袋状の口縁部に至っている。内面にはヘラ後のナデ痕を残し，精良な胎土に細砂粒・金雲母片を含み，焼成は良く，茶褐色を呈す。

壺Ⅴ類（第188図）　頸肩部は内面に若干の屈折した稜を認めるが外面では認めず，その区別がつかないまま直線的に内傾した頸部が口縁部に至る46と47である。内面の屈折部に指押え痕を，頸部のシボリ成形後の縦方向の指先によるナデ痕を共に残している点などの技法は，形状と共に前出Ⅳ類aの頸部以下の特徴と一致する。46は砂粒を若干多く含む胎土で，焼成は良く褐色を呈する。

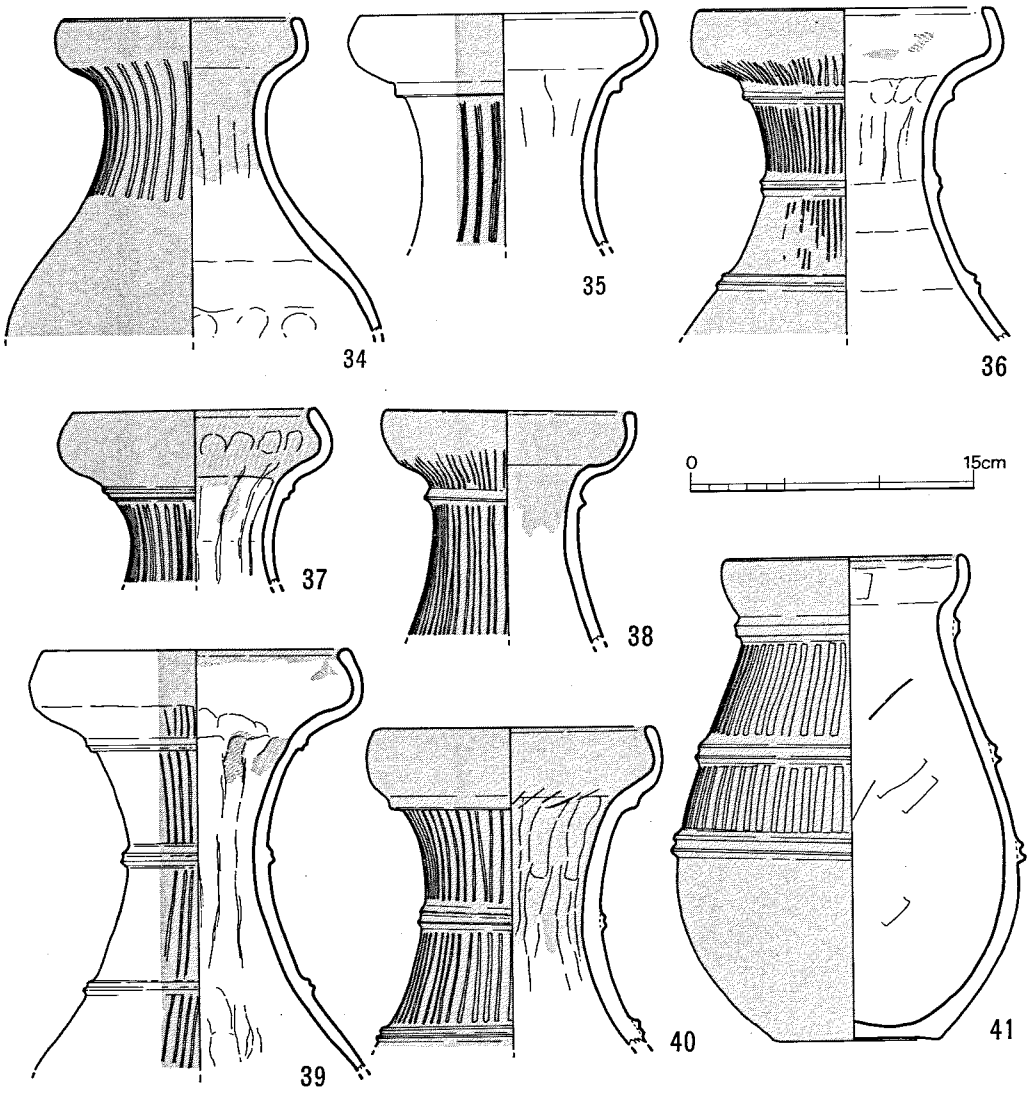


第186図　Ⅱ－3 出土土器実測図⑦ (1/4)

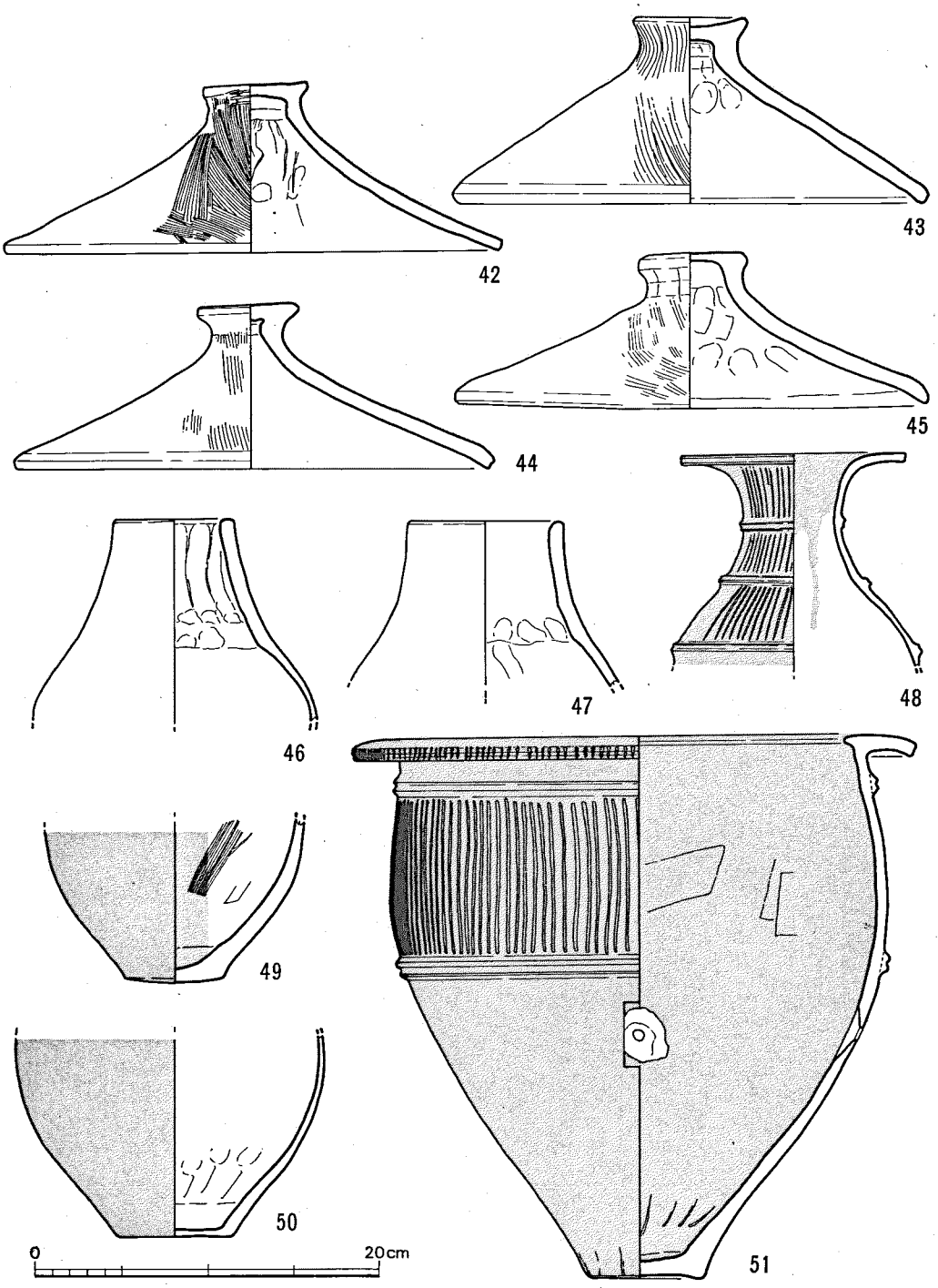
蓋　握り部の有無によって，二者に分けられる。

蓋Ⅰ類（図版78，第186図）　短頸の壺Ⅲ類の蓋で，28は口径17.1cm・器高3.5cmを測り，頂部が若干凹む。細かい砂粒を多く含む精良な胎土で，焼成は良く，明褐色を呈する。内面は丁寧にナデを施し，外面は丹塗り痕が認められる。27は上半部を欠失し，上位は器表が剥離している。

蓋Ⅱ類（図版78，第188・192図）　口縁部の径の差異によって，二者に分けられる。

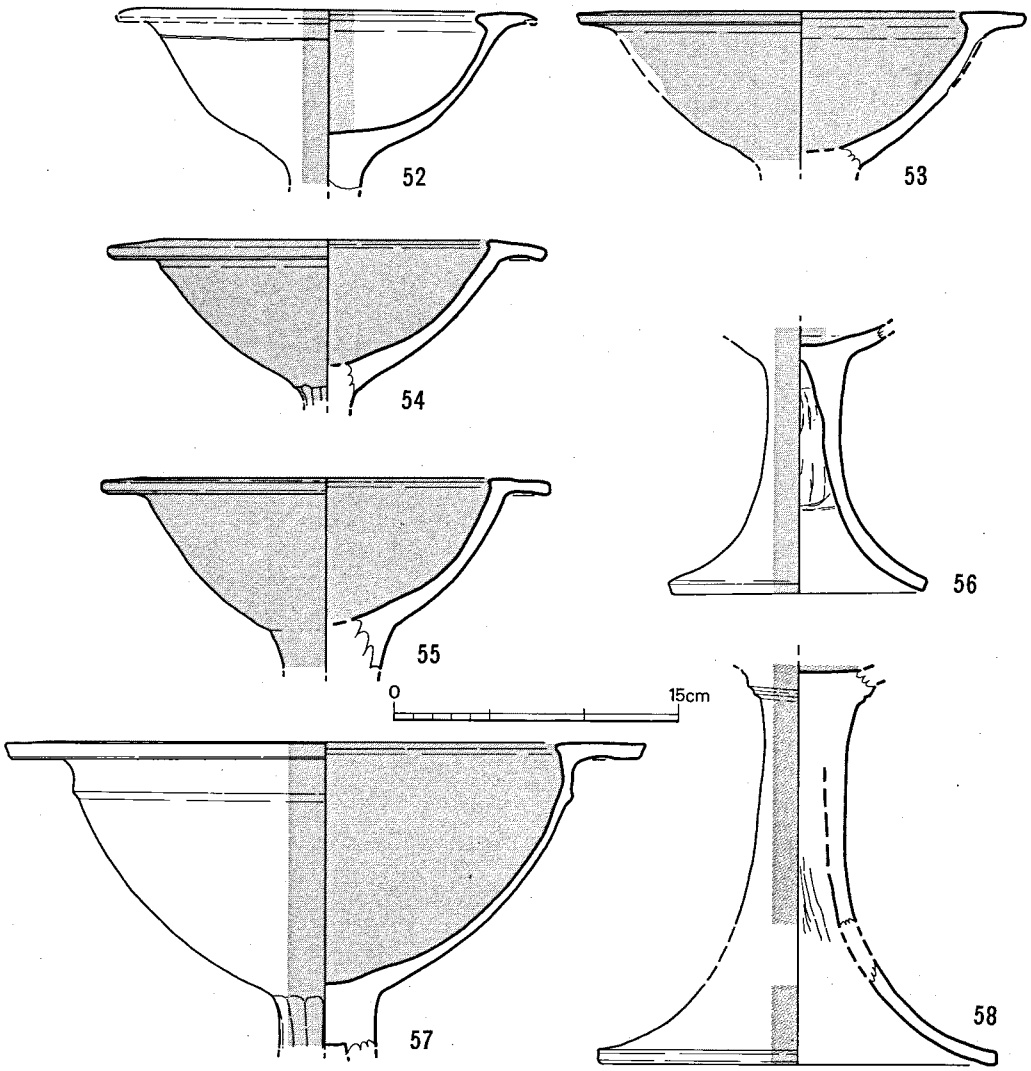


第187図　Ⅱ－3 出土土器実測図⑧（1/4）



第 188 図　II—3 出土土器実測図⑨ (1/4)

A　小型の法量を示すもので，75に代表される。75は握り部最大径 5.8cm・口縁部径28.5cm・器高 8.7cmを測る。細砂粒を多く含む胎土で，焼成は良く，明褐色を呈する。内面上位はシボリ目のままで，中位から口縁部にかけては横方向のナデを丁寧に施し，体部はハケ目のままである。体部はほぼ直線的に口縁部に至り，端部をシャープに仕上げている。42も同様である。45は口縁端部が丸味を呈し，内湾気味に仕上げられている。44も同様である。いずれもその口径は，甕Ⅰ・Ⅱ類Aの口径に近い。



第 189 図　Ⅱ－3 出 土 土 器 実 測 図 ⑩ (1/4)

B　中型の法量を示すもので，77はほぼ直線的な体部から口縁部に至る。口径は約42cmで，同様に甕II類Bの口径に近い。

器　台（図版76，第184・185図）　器径と器高の大・小によって，二者に分けられる。

A　器径・器高が共に小さいもので，最小径部が体部の中位にある13に代表される。13は口径10.5cm・最小外径 7.4cm・裾径12.3cmを測る。細かい砂粒を多く含む胎土で，焼成は良く，明褐色を呈する。口縁部および裾部はシャープに仕上げられている。14も同様であるが，18は共に内湾気味で，丸味を有している。

C　器径・器高が共に大きいもので，15は口径約24cmである。最小径部は体部の上位にくるものと思われる。

支　脚（図版76，第185図）　21～23はいずれも内面にシボリ目を残し，外面はナデているが，凹凸が著しい。21は口径 7.1cm・最小外径 5.5cm・裾径 8.9cm・器高14.3cmを測る。

高　杯（図版79，第189・190図）　杯部高と脚部高および杯部径と脚裾径の法量からa～cの三者に分けられる。

a　脚裾から杯部との屈折部までの高さがb・c類よりも高い58である。58は脚裾径21.6cm，脚部高20.4cmを測り，最上位に口唇状の凸帯を付す。杯部高は器高の⅓よりも少ないものと思われる。

b　杯部高が器高の約⅓のもので，64に代表される。64は杯部高7.8cm，脚部高17.0cmを測る。62・65も同様である。

c　杯部高が器高の½弱を占め，三角状凸帯を有した杯部の口径が脚裾径より著しく大きい57である。

なお，脚裾径が17.2cmと小さく，脚中位から上位にかけて直線的な60は，脚付椀の脚台部であることも考えられる。

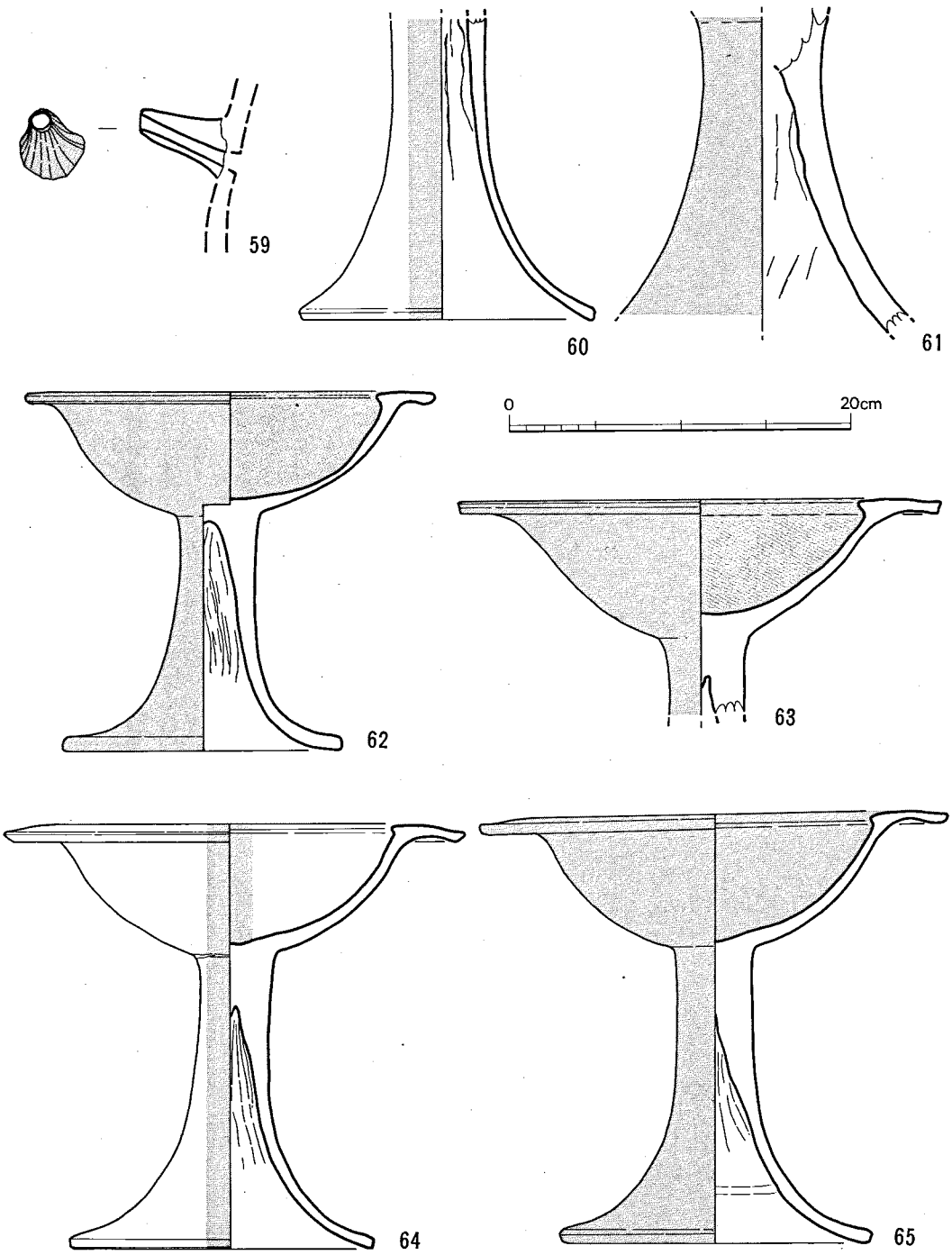
鉢（図版80，第191図）　口縁部は逆L字状を呈するが，法量によってA・Bの二者がある。

A　法量の小さい66に代表される。66は口縁部内径13.2cm，底径7.3cm・器高10.4cmを測る。砂粒を少し含む胎土で，焼成は良く，茶褐色を呈する。内面から口縁部にかけては丹塗り磨研であるが，外面はハケ目のままである。67はやや大きいが，次のBに比べると口径・器高共に若干小さい。

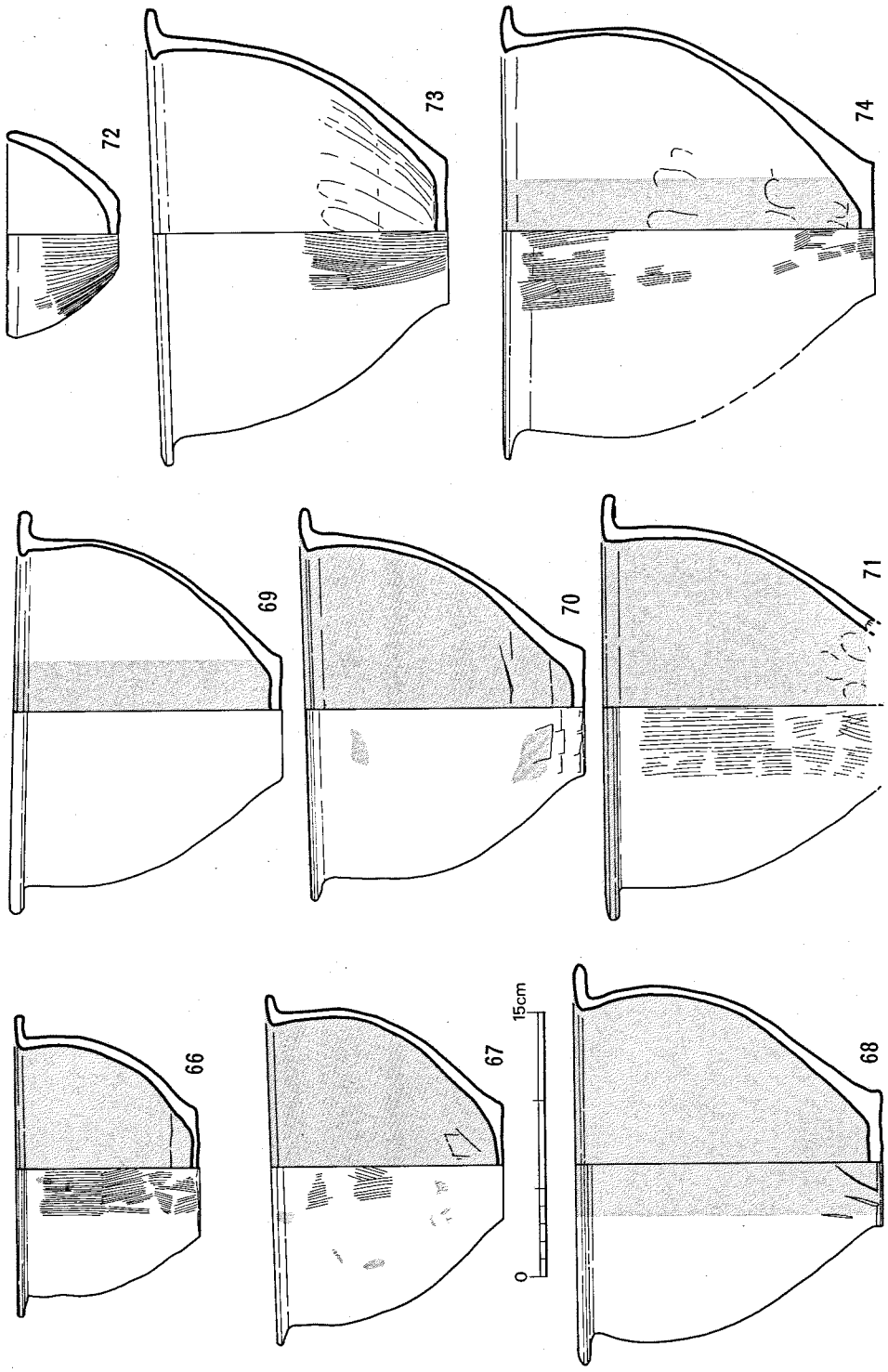
B　法量の大きい73に代表される。73は口縁部内径20.1cm・底径8.1cm・器高17.6cmを測る。大きめの砂粒を含む胎土で，褐色を呈する。68～70も同様であるが，71・74は器高が高く甕の形状に近い。

椀（図版80，第191図）

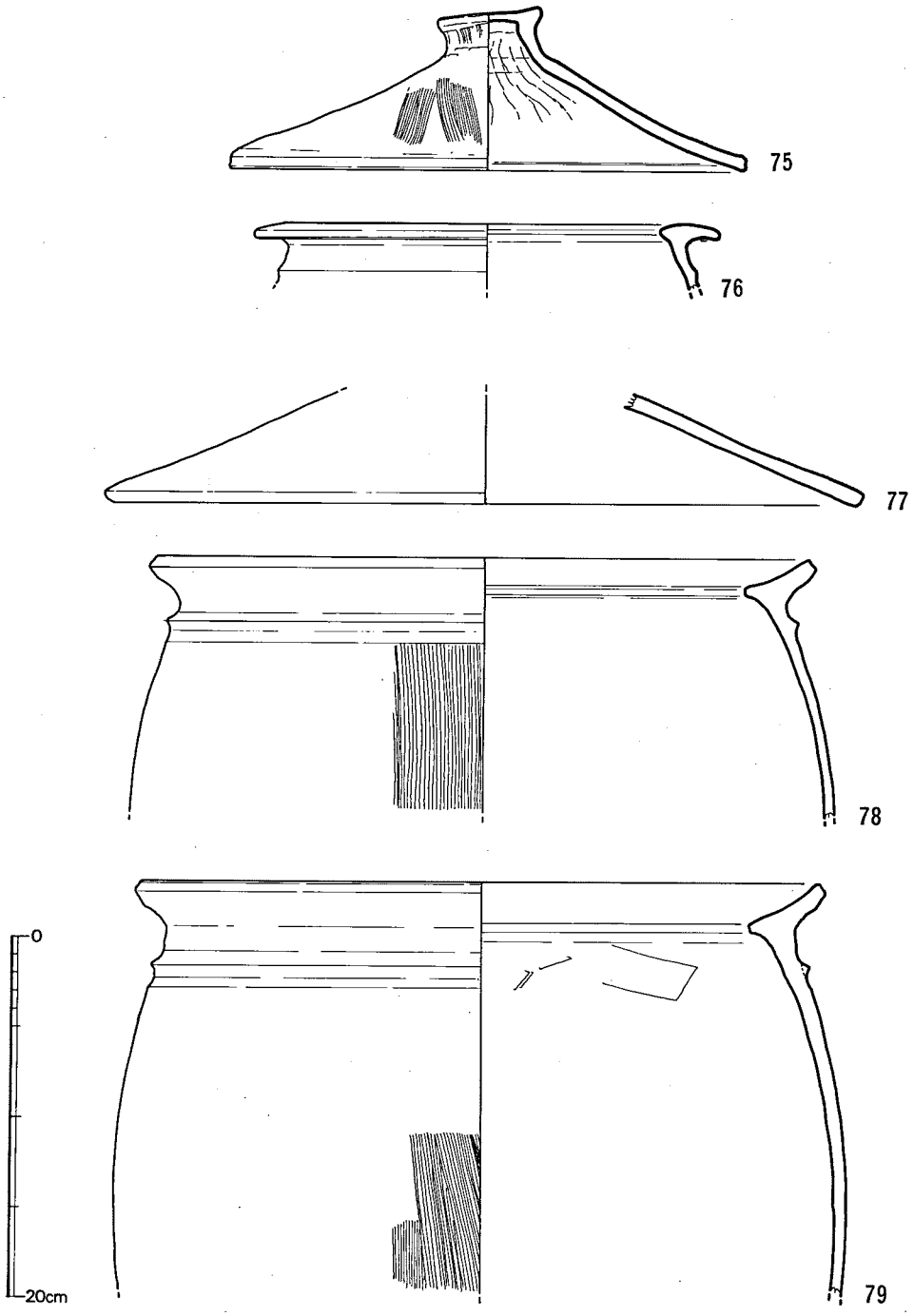
72は口径11.7cm・底径 3.7cm・器高 6.4cmを測る。細かい砂粒を含む胎土で，焼成は良く，



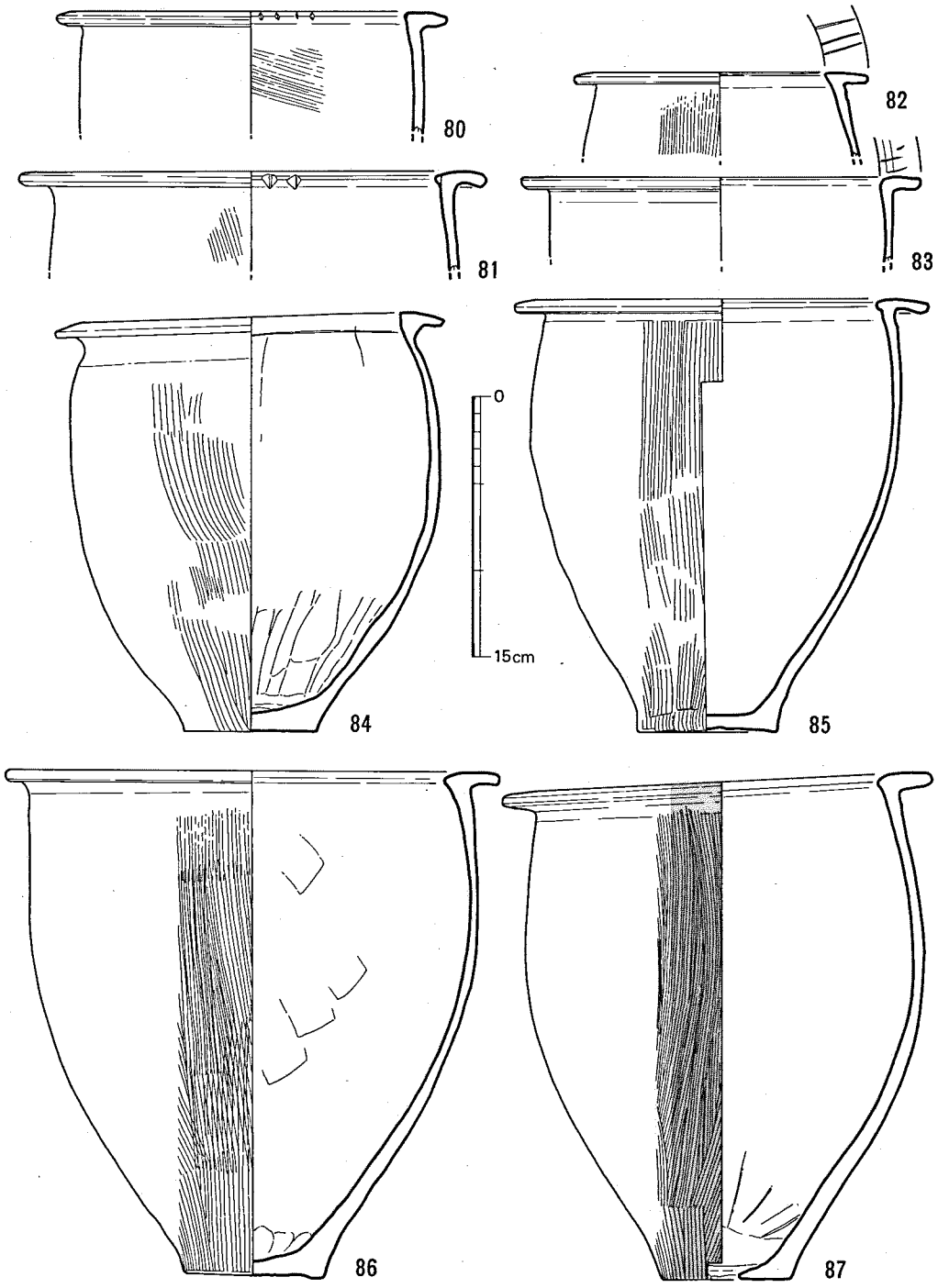
第 190 図　II—3 出土土器実測図⑪ (1/4)



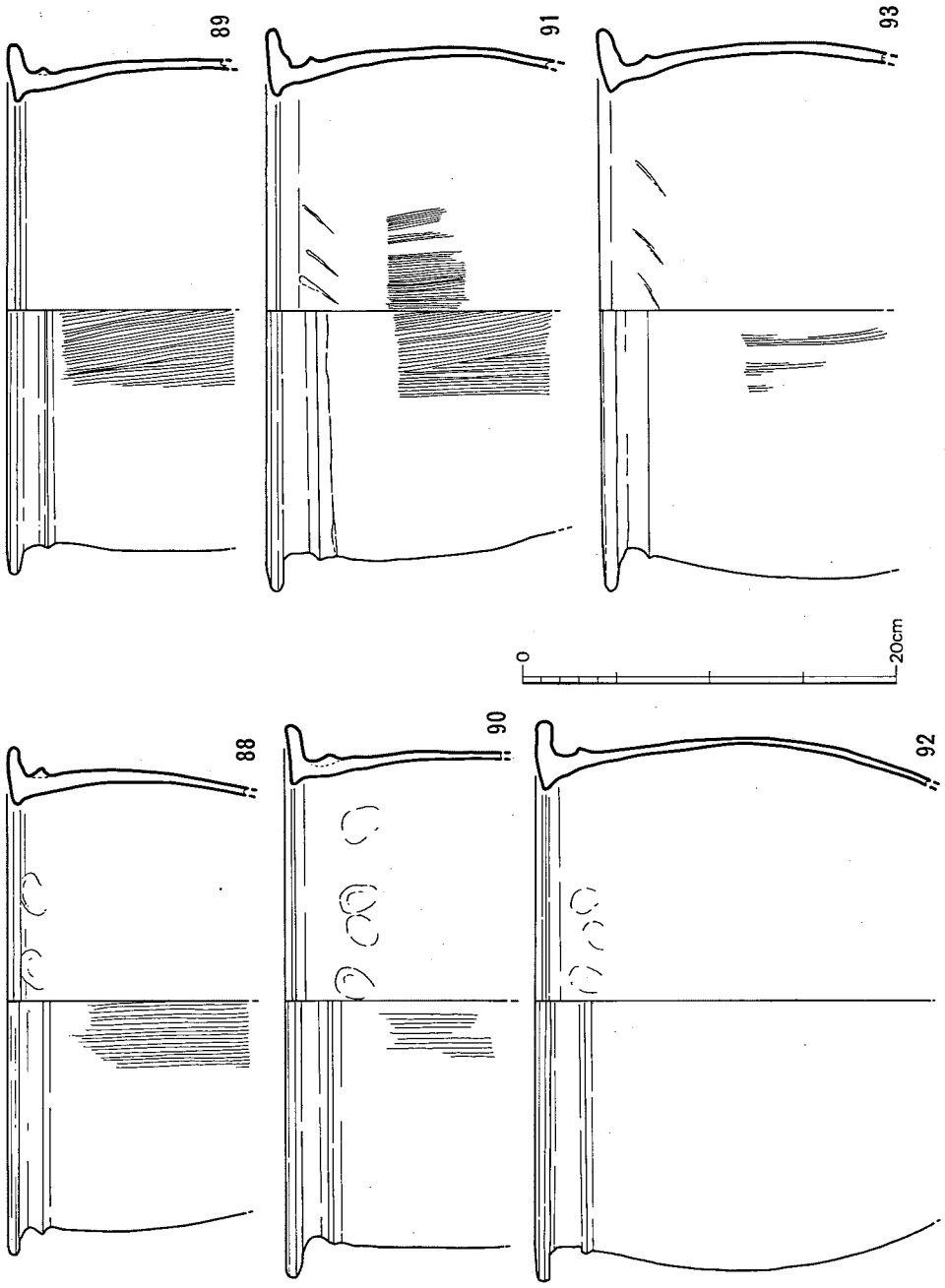
第 191 図　II－3 出土土器実測図⑫ (1/4)



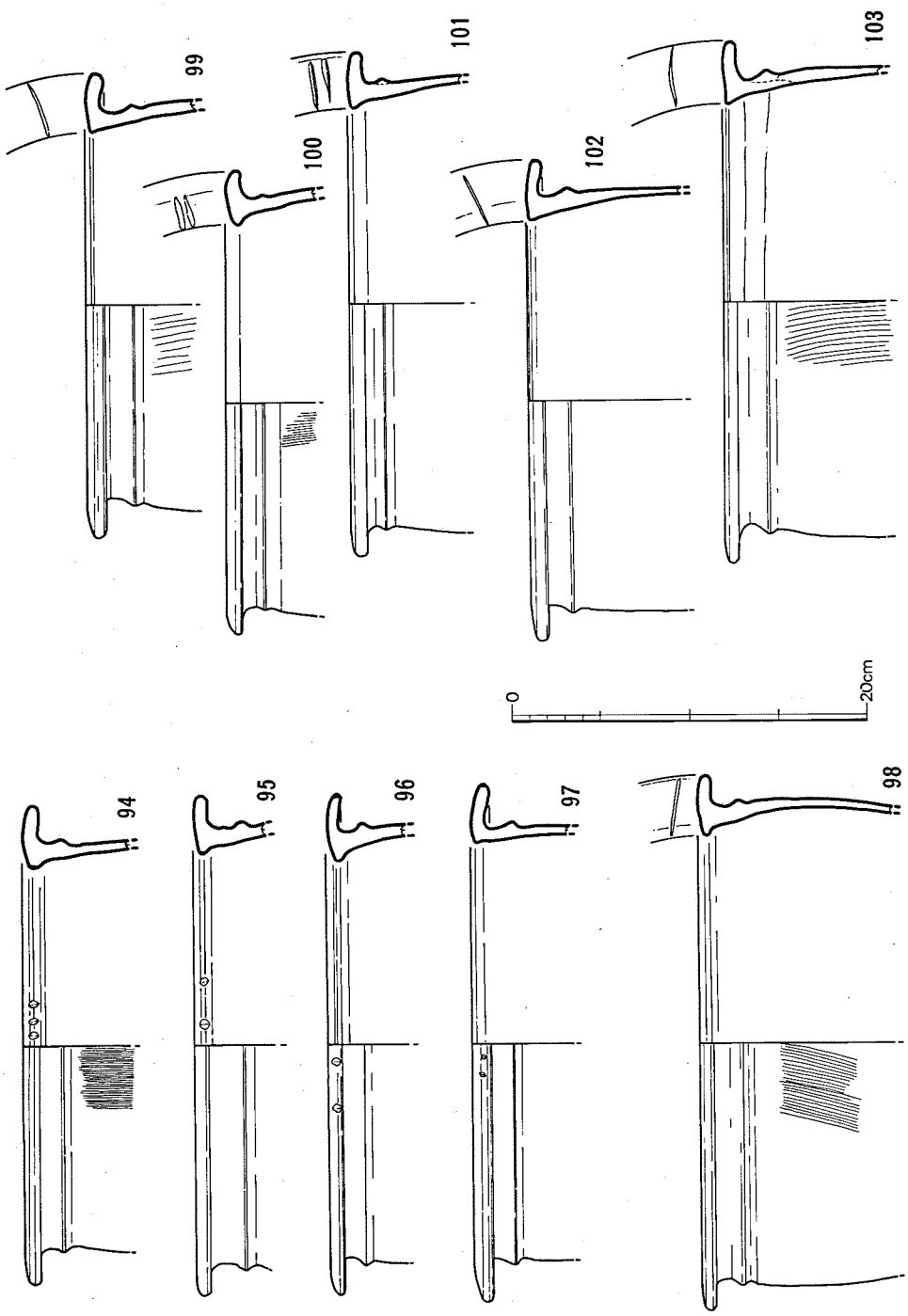
第 192 図 II－3 出 土 土 器 実 測 図 ⑬ (1/4)



第 193 図　II－3 出土土器実測図⑭ (1/4)



第194図　II－3 出土土器実測図⑮ (1/4)



第195図　II－3 出土土器実測図⑯ (1/4)

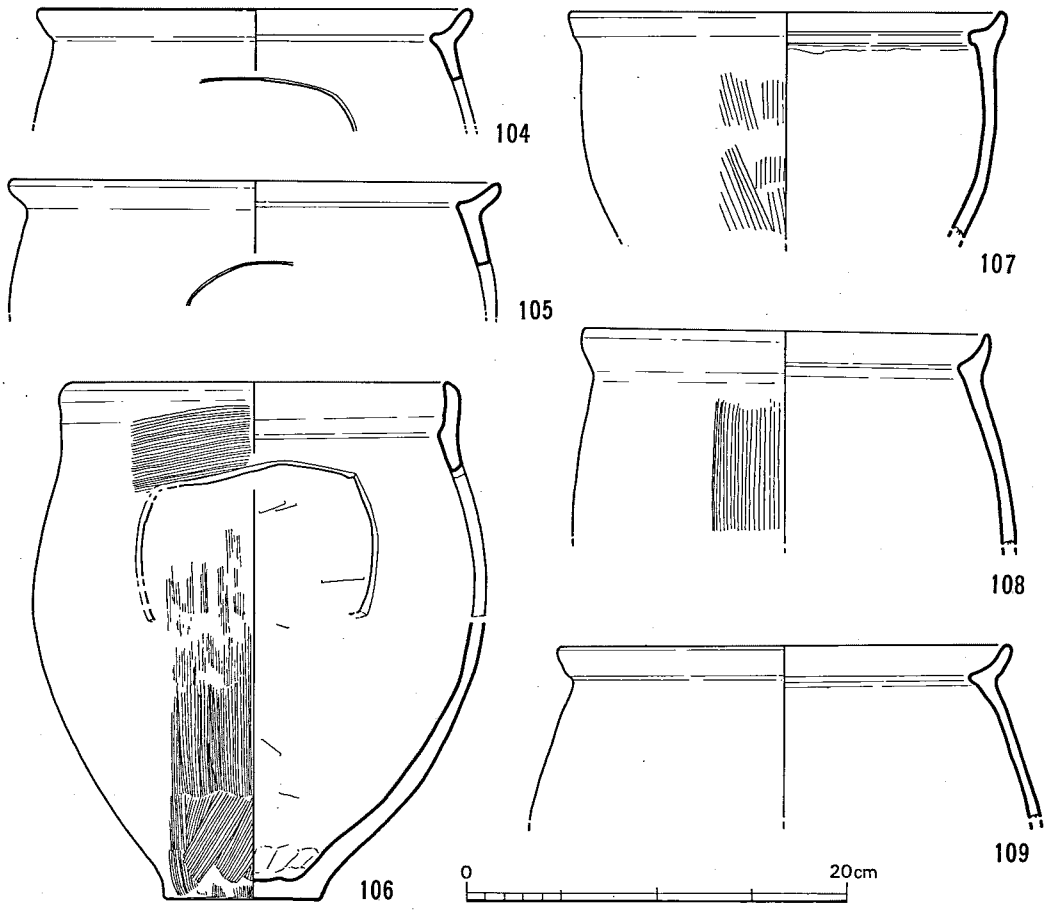
褐色を呈する。内面は口縁部と共にナデが丁寧で，外面にはハケ目を残す。

注口土器（図版79，第190図）　59は注口部の破片であるが，おそらく脚付椀の体部上位に付けられたものと思われる。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で，焼成は良く，褐色を呈す。赤茶褐色の薄手の丹が塗られ，放射状のヘラ磨研を施す。注口内径は先端部で4.5×5.5mm・中部では3㎜と小さい。

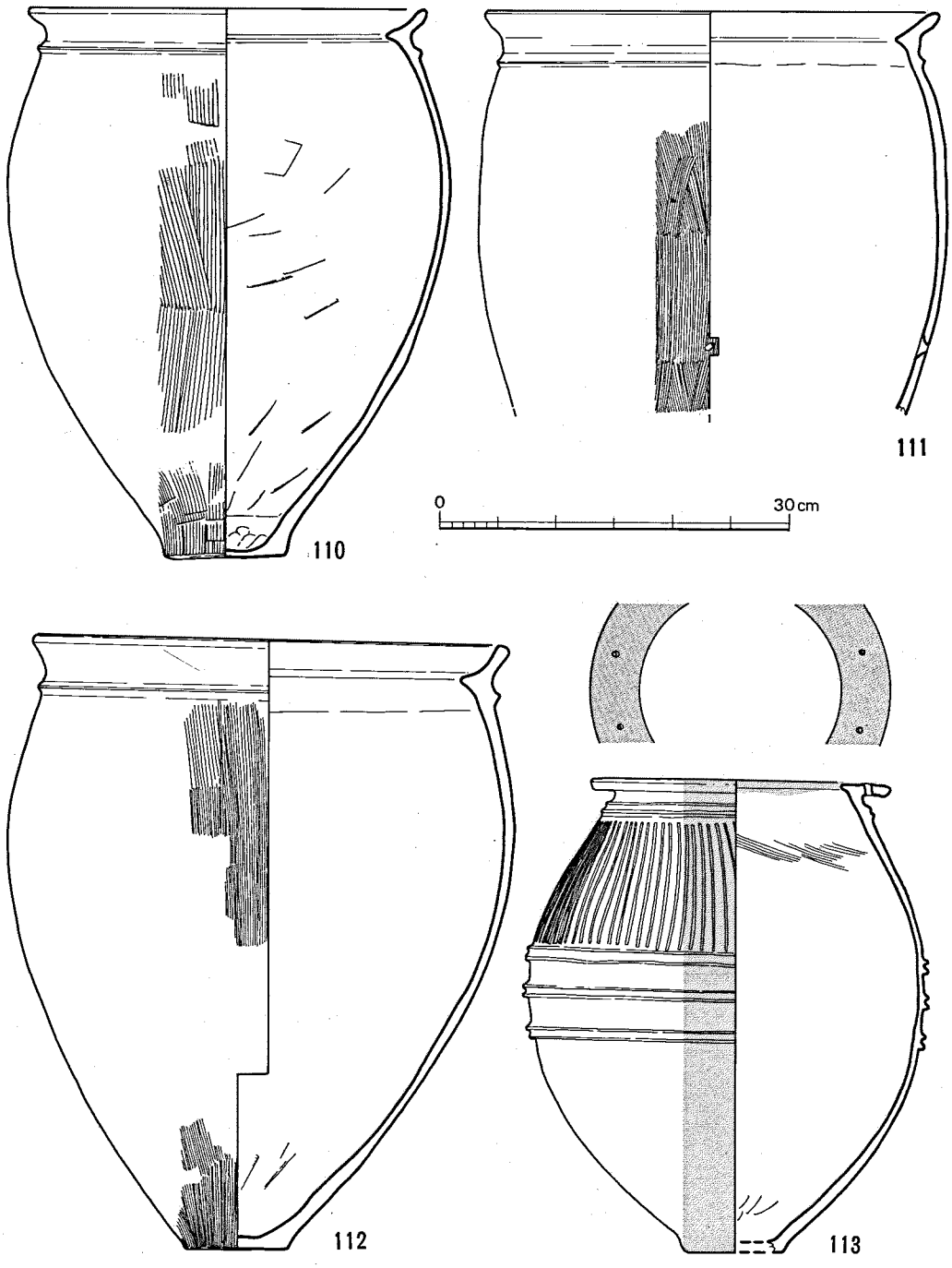
甕Ⅰ類　口縁部が逆L字状を呈するもので，法量は小型のAのみが出土し，後述するⅡ類Bと対応するような中型のBは検出されていない。

A　小型の法量を示すもので，口縁部の凸帯の有無によって，更にa・bに分けられる。

a　凸帯を有さないもの（図版81，第193図）口縁部内径17.8cm・胴部最大内径20.4cm・底径8.1cm・器高24.8cmの85に代表される。85は内面を丁寧にナデ，胴部外面にはハケ目を残す。



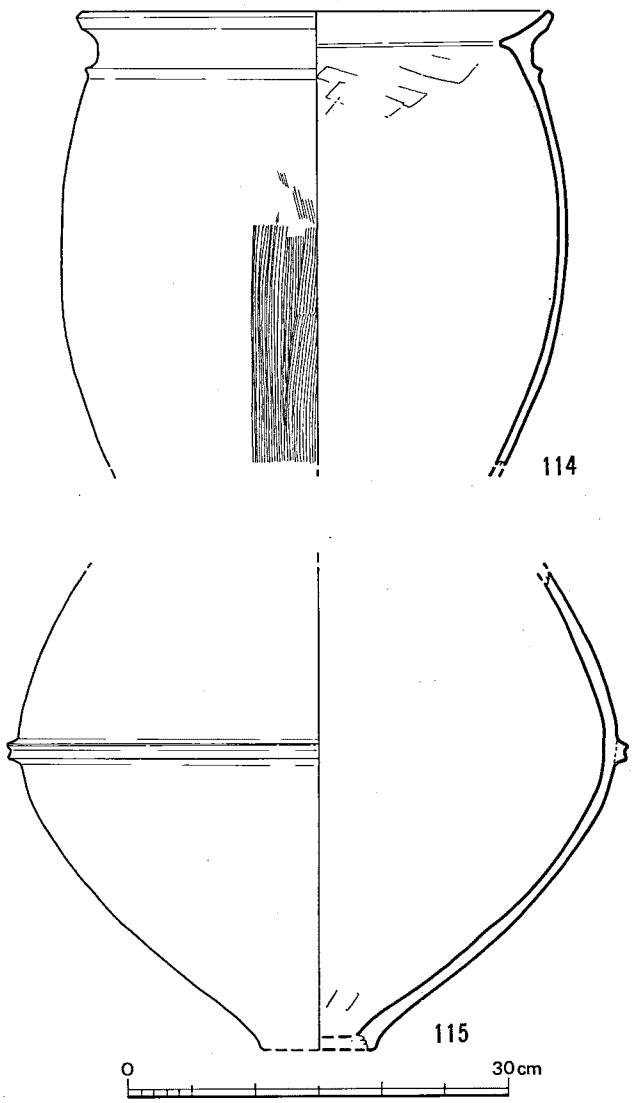
第196図　Ⅱ－3 出土土器実測図⑰（1/4）



第 197 図　II－3 出土土器実測図⑱ (1/6)

細砂粒を多く含む胎土で，焼成は良く，赤褐色を呈する。84～87も同様である。80～83は破片であるが，80・81は口縁部内側に刻み目文が，82・83では同上面に線引き文が施されている。これらの文様はヘラ様の工具でなされ，全周にわたって施す例はなく，意識的に一部位にのみ行われたものである。刻み目文は1～4個・線引き文は1～3条の遺存例が認められる。

b　凸帯を有するもの（図版81，第192・194・195図）口縁部内径23.0cm・胴部最大内径26.0cmの91に代表される。91は細砂粒を少し含む胎土で，焼成は普通で，淡褐色を呈する。胴部内面は最大径位は丁寧なナデ，その上位はハケ目痕を残し，口縁部近くにはヘラ様のナデ工具痕を認める。外面は口縁部から凸帯の下方までは横方向に丁寧にナデるが，胴部最大径位はハケ目を残す。76・88～93も同様である。94・95では口縁部内側に，96・97では外側に刻み目文を，98～103では口縁部上面にヘラ様工具による線引き文が認められる。全周せず，意識的に一部位にのみ施している。

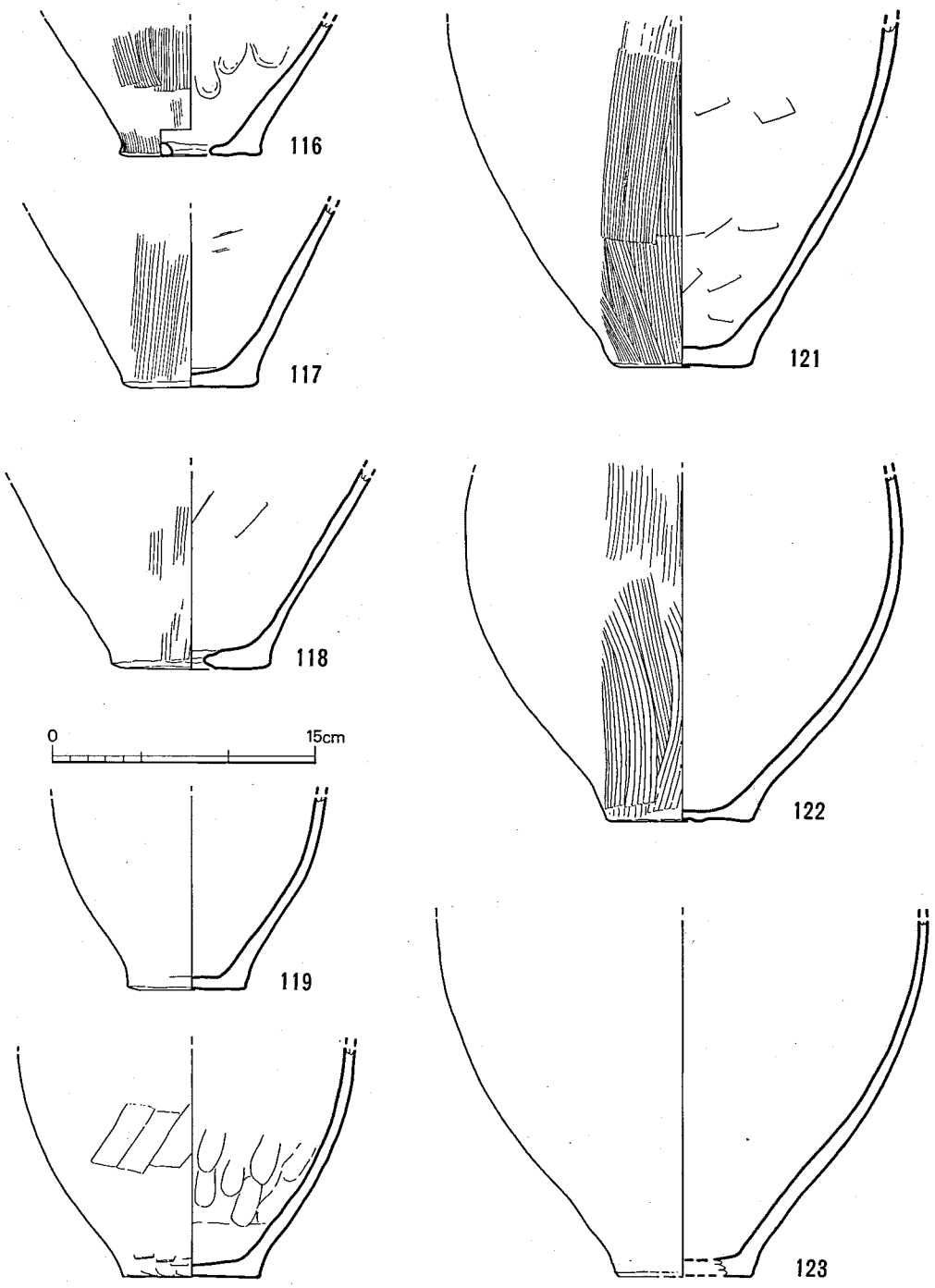


第198図　II－3出土土器実測図⑲（1/6）

甕II類　口縁部がくの字状を呈して若干内湾するものであるが，法量によってA・Bの二者がある。

A　小型の法量を示すもので胴部最上位に凸帯は認められないが，胴部の焼成前の窓の有無によって，更にa・bに分けられる。

b　窓を有さないもの（図版82，第196図）口縁部外径23.9cm・頸部最小内径20.3cm・胴部最小内径約26.0cmの109に代表される。109は胴部最大径がや



第 199 図　II－3 出 土 土 器 実 測 図 ⑳ (1/4).

や上位にあり，頸部外面の屈折はゆるいくの字状をなし，口縁端部は若干丸味をもつ。頸部内面の屈折は大きく内側に凸帯状に突出して稜を有し，口縁部は丁寧にヨコナデを施している。精良な胎土に細かめの砂粒を多く含み，焼成は良く，褐色を呈す。108は頸部内外面の屈折が小さい。107は器高が小さく，鉢に近い形状を示している。

a　窓を有するもの（図版82，第196図）口縁部径21.0cm・頸部最小内径18.5cm・胴部最大内径21.9cm・底径 8.2cm・器高27.1cmを測る 106に代表される。106は底部内面は指押え痕を，胴部内面にはヘラ様ナデ工具痕を一部に残す。口縁部は横方向のナデを丁寧に施し，胴部外面にはハケ目を残す。頸部下から胴部中位にかけて，高さ約8cm・幅12.6cmの若干カーブを呈して中央部がふくらんだ窓を，焼成前に造作している。精良な胎土にかなりの細かい砂粒を含み，焼成は良く，淡褐色を呈す。104も同様の窓と思われるが若干隅丸形に近く，105では円形に近いカーブをなしている。なお，b類として示した107～109は胴部が一周しない破片であるため，その欠損部に窓を造作しているものもある可能性も残っている。

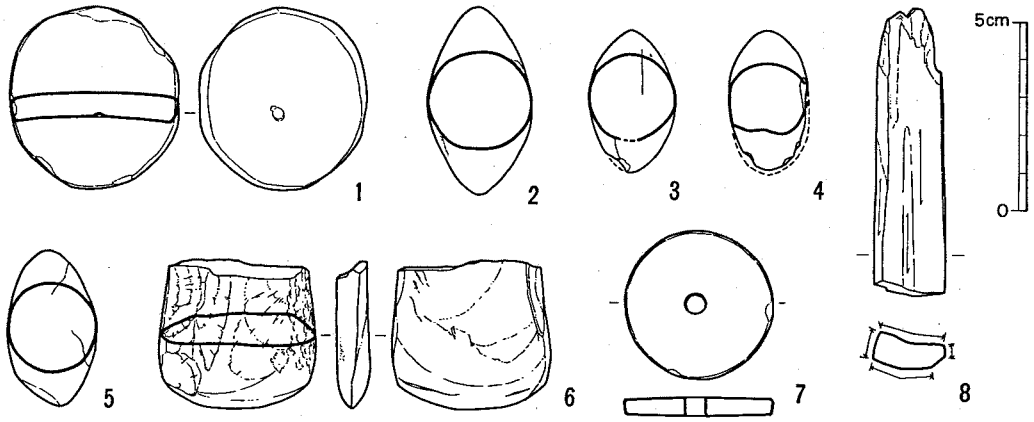
B（図版83，192・197・198図）中型の法量を示すもので，胴部最上位に三角状の凸帯を付すもので，112に代表される。112は口縁部径41.1cm・頸部最小内径32.7cm・胴部最大内径41.7cm・底径 9.1cm・器高52.1cmを測る。細砂粒を多く含む胎土で，焼成は良く，褐色を呈する。胴部内面は丁寧にナデるが一部にハケ目を残し，口縁部は横方向のナデを施し，胴部外面はハケ目を残す。110は胴部に最大径があり，口縁部の内湾度は小さくむしろ直線的である。111も同様であるが，胴部に焼成後の穿孔が認められる。78・79・114は口縁端部，頸部突出端部および凸帯はいずれもシャープに造作されている。

甕Ⅲ類（図版82，第197・198図）口縁部が鋤先状を呈する113は，口縁部外端に刻み目文・胴上半部に暗文を一周させ，口縁部から胴部外面にかけては丹塗りの痕跡が認められる。115は口縁部下に凸帯を付すと思われる，丸味を帯びた胴部片である。

甕Ⅳ類（図版82，第199図）いずれも胴下半部片であるが，116～118は胴下位が直線的なままで底部とシャープに屈折するものでⅠ類の，119・120は丸味のある胴部径が小さいものでⅡ類Aの，121～123は胴部径が大きいⅡ類Bの破片と思われる。（馬田）

土製品（図版84，第200図1～5）

5が上層出土である以外全て土器溜り下部から出土しており，1は紡錘車未製品・2～5は投弾形土製品である。1は内外面共ナデ調整の土器片を整形・周縁研磨し，長径 4.8cm・短径 4.4cmの楕円形になるが，内面側に穿孔中途の痕がある。この位置はやや偏っており，もし中心として円形に完成されたとすれば直径4cm前後になるであろう。投弾形土製品では，2・3・5が胎土に細砂粒と金雲母を含み長さと最大径，重量はそれぞれ49.4mm・27.3mm・28g，37.5mm・23.4mm・16.6gの現存値，41.1mm・23.5mm・19.1gを測る。4は端と胴の一部を欠失しているが現存値で36.7mm・20mm・ 9.7gを測り，平面形が長楕円形で端部が丸いことと粗雑な造

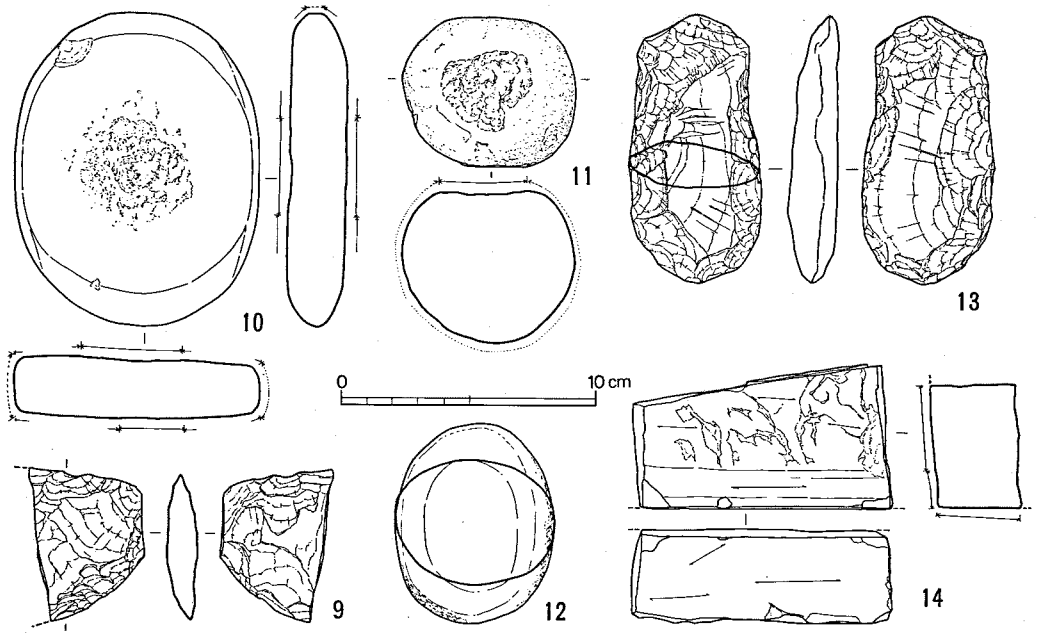


第 200 図　II－3 出土土製品・石器実測図 (1/2)

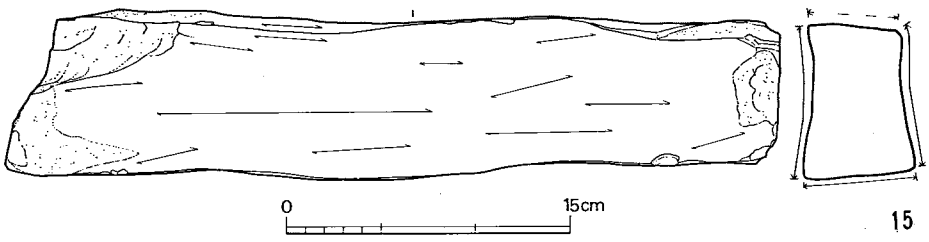
りである点が他の例と異る。投弾形土製品は，三雲遺跡番上II－6 地区，仲田 I －16地区でも中期後半に伴っており，当該地区の共伴例も矛盾はないといえる。

石　器（図版84，第 201 ・ 202 図）

6 はねずみ色の頁岩製扁平磨製石斧で土器溜下部出土。7 ・ 9 は上部から出土し，7 は結晶



第 201 図　II－3 出土石器実測図 (1/3)



第 202 図　住居跡出土砥石実測図（1/4）

片岩製紡錘車で重量15.2ｇ，９は緑泥片岩の石庖丁未製品。10～12は土器溜下部出土の敲石ですり石を兼ねている。（図の断面に示す矢印間が，繋がる部分は敲打面，繋がらない部分はすれた面，破線になる部分は敲打調整のあとすれた面を示す。）10・11は玄武岩，12は白雲母片岩製である。13は表採の玄武岩製打製石斧で重量 149ｇを測る。８は粘板岩の細い破片の砥石で，14・15は細粒砂岩の砥石。８は住居跡東側の包含層下層，15は住居跡ピット内出土の長さ40.7cm・重量 3,870ｇを測る大形品，14は表採資料。13は縄文晩期，７・８は弥生後期以降であろう。11の敲石は前期に伴うことが多い。15の砥石は住居跡埋土に集積した土器の中期後半を下降しないであろう。（小池）

(3)　まとめ

以上の出土遺物のなかで，土器の細部の時期的特徴と，遺構・遺物の性格について補足する。

壺

壺Ⅰ類　小型Ａ・中型Ｂ・大型Ｃの法量差が明確な例を第180図に示したが，それぞれの計測値は次のとおりである。

胴部と頸部との境は肩部凸帯下部までを頸部として計測した。器内面での屈折がほぼこの高さで認められるからである。壺本来の用途を，容器とすれば，法量の増減によって内容物の増

表５　八反田Ⅱ－３出土壺Ⅰ類法量表

法量大別	小型 A				中型 B						
計測部位＼土器番号	1	4	11	平均	2	5	6	7	8	12	平均
口縁部最小内径	13.8	16.9	19.3	16.7	18.5	19.3	18.8	18.7			18.8
頸部最小内径	9.6	10.3	12.1	10.7	13.6	15.2	13.1	13.5		15.3	14.1
胴部最大内径	23.2	25.3	28.1	25.5	30.8	28.4	29.0	31.5	31.7	31.0	30.4
口　縁～頸部高	10.6	11.3	13.0	11.6	14.6	14.5	13.6	10.7			13.4
胴　～底部高	19.9	21.4	23.8	21.7	28.5		30.3		約28.5		約29.1
器　　高	30.5	32.7	36.8	33.3	43.1		43.6				43.4

減は左右される。そして内容物を貯蔵ないし収納する機能を与えるとすれば，口縁部は内容物の外部への出入および開塞の際に，頸部は内容物個体の法量よりもは大きく，手を入れて出入させる場合には手の径よりもは大きく，内容物を握った全体の法量よりも，いずれも大きくなければならない。また，収納時を含めての器体の安定の為には重心が安定しなければならず，収納物は器高に比して低いほどよい。これらの機能を備えたものが壺Ⅰ類であり，内容物の増減を，胴部の径と高さの増減で造作された結果が，A・Bの特徴の差位として指摘される。すなわち，BはAより胴部最大径で 4.9cm，胴部から底部までの高さで 7.8cm大きいが，口縁部内径と口縁部から頸部までの高さはほぼ同じである。また，頸部最小内径に差位がほとんど認められないのは，片手ないし両手で内容物を出入させる際のその法量と収納物の保全の両者を考慮して最小限度に近い内径となしたためである。C類に関しては，より大きい収納法量を機能するものとして，また，器高が高くなる結果として腕までも出入可能なように頸部内径を大きく造作したものである。このように，A～C類は収納法量を考慮して，小・中・大型のⅠ類内でセット関係にあると言えよう。第183図10は，口縁内唇部の頸部からの立ち上がりが直立気味で，口縁部上面の幅にその厚さに比して他よりも若干長く，中期末に近い特徴を有している。しかし，他の壺Ⅰ類はいずれも中期後葉の特徴をよく示している。

壺Ⅱ類　bとした16は頸部がやや直立気味であるが，中期中葉の頸部と屈折することなく口縁部まで開口する特徴を残し，17・24では口縁部上位が若干内湾し，25では頸部は直立し，口縁部のみが胴部最大径とほぼ等しい径まで外反するなどの中期後葉の特徴をよく示している。

壺Ⅲ類　30は口縁部内側の屈折がシャープで，上面はほぼ水平に近いなど中期中葉の特徴が認められ，32では同内側がシャープな稜を呈さないで，また，上面が内傾するなど中期後葉の特徴を示している。

壺Ⅳ類　41は甕Ⅱ類のくの字状口縁の影響も考えられるが，口唇状の凸帯は他のそれと異なるところがない。扁平な胴部から，やや長頸で頸部径が小さく，口縁端部が頸部径とほぼ同じほどに内湾する中期末の袋状口縁の壺と異なり，Ⅳ類はいずれも中期後葉の特徴をよく示している。

（単位：cm）

大型C	（A平均）－（B平均）
3	
35.3	(16.7－18.8)＝－ 2.1
約27	(10.7－15.3)＝－ 3.6
	(25.5－30.4)＝－ 4.9
	(11.6－13.4)＝－ 1.8
	(21.7－29.1)＝－ 7.4
	(33.3－43.4)＝－10.1

高　杯

a類の口唇状凸帯を有したものは中期後半の特徴である。b類の口縁部が若干外傾し，断面厚が薄手で，下面端部が若干肥厚した52～55や，脚部上位から中位までが直立し，上半部の断面が厚手である65は中期後葉の特徴を示している。c類の57は後期には認められない器形で，口縁部の特徴も中期後半を示している。53～55の口縁部は中期中葉の特徴を残し，径の大きい57は中期末葉に近いものと思

われる。

甕

Ⅰ・Ⅱ類　小型A・中型Bの法量差が明確な例を第 192図に示したが，法量の大別を明らかにするために，第 192図以外に示した土器も含めて，小型Aでは胴部最大内径の大きい例を，また中型Bでは胴部最大内径の小さい例を代表的土器として計測値を示せば次のとおりである。

表6　八反田Ⅱ－3出土甕Ⅰ・Ⅱ類法量表

（単位：cm）

法量大別 / 土器番号 / 計測部位	小型A 86	91	106	109	平均	中型B 110	（A平均）－（B）
口縁部（頸部）最小内径	21.8	23.0	18.5	20.3	20.9	29.5	(20.9－29.5)＝－ 8.6
胴部最大内径	24.8	26.0	21.9	26.0	24.6	36.4	(24.6－36.4)＝－11.8
器高	29.0		27.1		28.1	47.1	(28.1－47.1)＝－19.0
逆L字状口縁	○	○					
くの字状口縁			○	○		○	
凸帯の有無	無	有	無	無		有	
窓の有無	無	無	有	無		無	

甕本来の用途を容器とすれば，壺Ⅰ類と同様に法量の増減によって内容物の増減は左右される。そして内容物を煮沸させ，あるいはコシキとしての（貯蔵・収納でもよいが）機能を与えるとすれば，口頸部内径と胴部最大内径を共に増減し，それに加えて支脚等を用いれば土器および内容物の安定は器高の増減にも左右されない。A・Bの法量の差が，各計測部位について指摘されることは，機能の差位が各計測部位のすべてを意識してより合理的に造作されたことを示している。Ⅰ類の逆L字状口縁を呈するものは凸帯・文様の有無に関係なく小型の法量を意識して造作されたもので，中期中葉の特徴を残すものもあるが，いずれも中期後葉の範疇で把えられるものである。Ⅱ類のくの字状口縁を呈するものは，有窓のaは容器としての機能を当初から否定するために窓を造作するという祭祀行為の特徴を示したもので，内容物の増減を止揚した土器であり，法量が小さくても祭祀土器としての機能を果すものである（註35）。小型のbは，中型のB類と機能的にセット関係を示すものである。なお，中型の出土量に比べて，小型のそれは少ないことが指摘されるが，このことはⅠ類小型の出土量が多いことから，Ⅰ類小型の土器で補完されたものと考えられる。これまで，このⅡ類は後期の範疇で述べられることが多かったが，所謂口縁平坦面が直線的に胴部から屈折するくの字口縁とは区別される，この内湾気味に屈折する当遺跡出土のようなくの字口縁は，Ⅰ類とセット関係で把えられる中期後葉に属するものとして把握すべきである。中型Ⅱ類の屈折部内面が凸帯状に強く突出する特徴は第193図の85や第195図の98等の小型A類と共通するものであり，他の器種に後期の特徴を示す土器が整理箱 110個以上出土した中に認められないことからも肯定されるものであると考

える。また，壺Ⅰ類で示した大型Cに対応する大型甕は出土していないが，このことは，壺Ⅰ類本来の機能が貯蔵にあり，大型壺Cは必要とすることもあるが，甕本来の煮沸用およびコシキ用としての機能からは，大型Cの甕を必要としなかったためであると考えられる。むしろ，中期後葉とするくの字状を呈する大型Cの甕は，甕棺専用成人棺体としての機能で以って製作・使用されている。福岡県内では，春日市門田遺跡辻田地区22号甕棺墓では上下甕にこの大型Cが使用されているのが好例である(註35)。また中型Bが甕棺として出土する例はより多く，筑紫野市道場山遺跡76号・100号甕棺墓では逆L字状を呈する下甕の大型専用館の上甕として使用され(註36)，福岡市諸岡遺跡11号甕棺墓では第192図に示した75と同様の器形の蓋で裾径が約47.5cmの大型のものを上甕とし，胴部最大内径約64cm・高さ約85cmのこの中型Bを下甕として使用し(註37)，福岡市蒲田遺跡D地区7号甕棺墓では逆L字状口縁を呈する下甕の樽形土器と組み合わされている（註38)。これらのことからも，分類してきた中型B類は中期後葉として位置付けられる。

遺構と遺物の関係

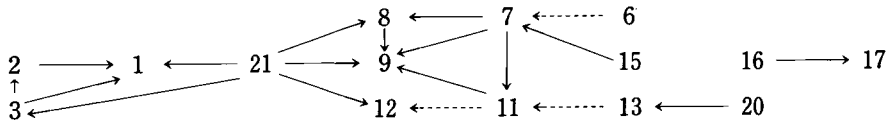
多量の土器は住居跡内から，自然に流入埋没した状態ではなく，意識的に遺棄された状態で出土したことは，既に(1)で説明されている。出土遺物に多くの丹塗り磨研土器や，焼成後の穿孔あるいは焼成前の有窓土器が含まれている。なかでも祭祀土器として祭祀遺構から検出されることの多い器種・器形である丹塗磨研の，高杯，壺Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ，甕Ⅲ類の出土が著しい。また，これらを含めて各種の機能を有する器種・器形が共伴している。以上のことから，住居の遺棄（当住居のみに限らない）等に伴う祭祀行為に使用した祭祀専用土器・および祭祀転用日常土器を時期差が土器の特徴に大きく示されない期間の中で意識的にとりまとめて遺棄したものであると考えられる（註39)。小型の逆L字状口縁を呈する甕の，口縁部の一部位のみに刻み文・線引き文を有するものの出土量が多いことからも，このことは指摘できよう。

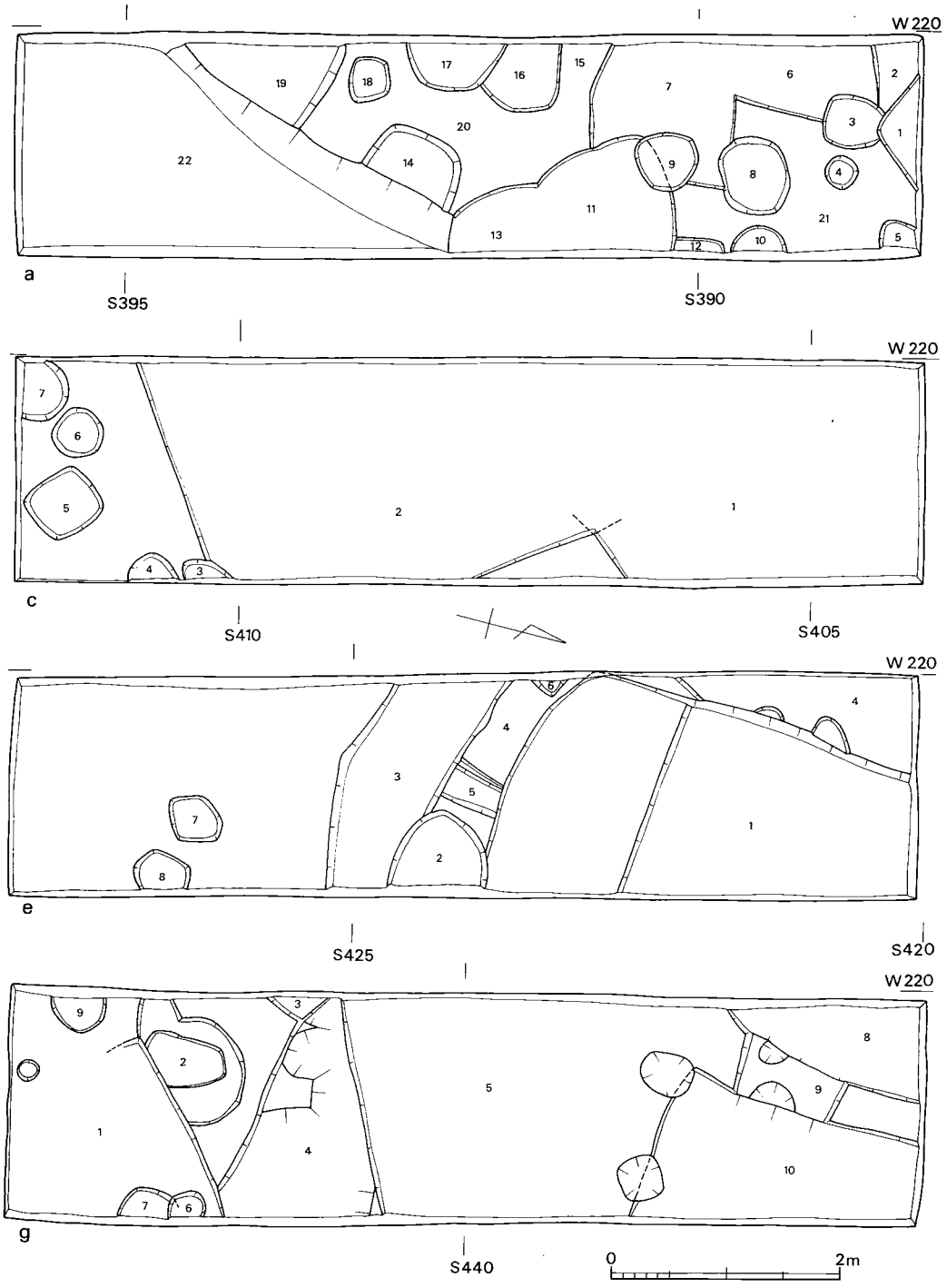
（馬田）

4　Ⅱ－6のトレンチ

S 388，W 220を起点とし，東に幅2m，南北に8m単位でa～gのトレンチを設定し，a・c・e・gの4区画を発掘した。

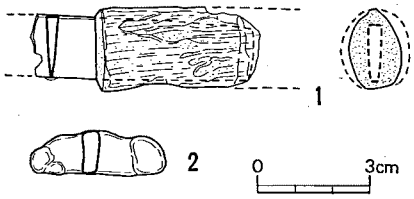
Ⅱ－6 aは第203図の如く遺構・柱穴等に番号を付したが，それらの新旧関係は下記のとおりである。いずれも写真・図面用に若干掘り下げたのみなので，時期は確定するほどの資料を得ていない。





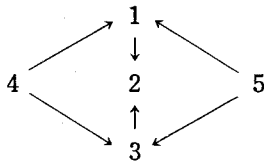
第 203 図　八反田II－6トレンチ実測図（1/60）

II－6 cは1・2は住居跡と思われるが新旧関係は不明である。この区画も写真・図面用に若干掘り下げたのみなので，それぞれの時期は確定できない。

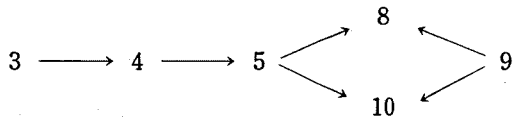


第 204 図 八反田 I －16，II－6 g 出土鉄器実測図（1/2）

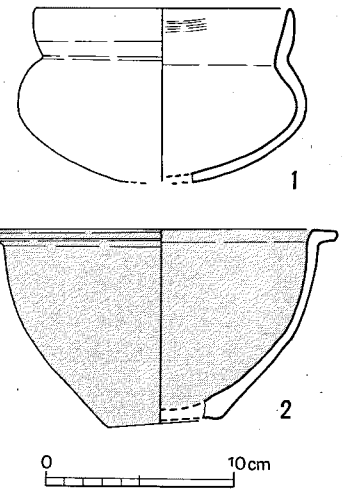
II－6 eは1はベッド状遺構付の方形住居跡，3・5は溝。新旧関係は下記のとおりであるが時期を確定するほどの資料はない。



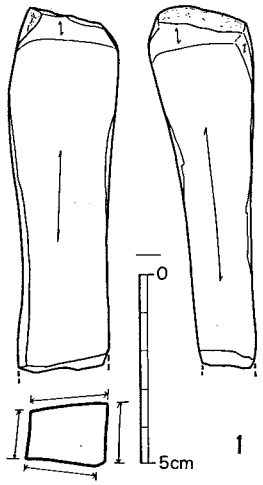
II－6 gは1・4・5・8・10は住居跡と思われる。新旧関係は下記のとおり。これらはいずれも写真・図面用に若干掘り下げたのみで遺構の時期は確定できないが，第205図に示す如く，弥生中期末頃の丹塗土器と弥生終末頃の土器が出土しているので，これらの両者の時期頃に属する可能性が強い。



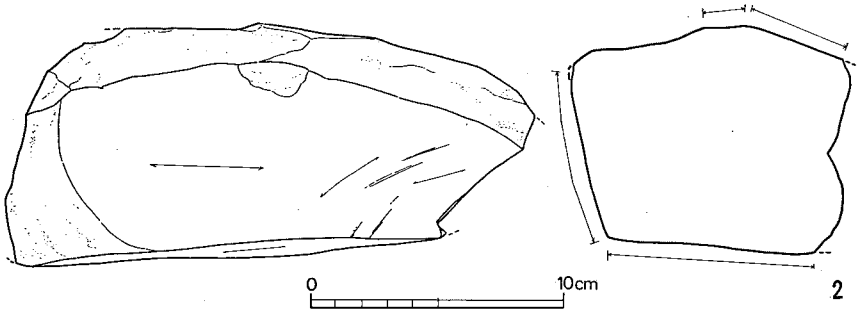
なお，I－1 bの3からは 3.8 gの小鉄塊が出土している。こ



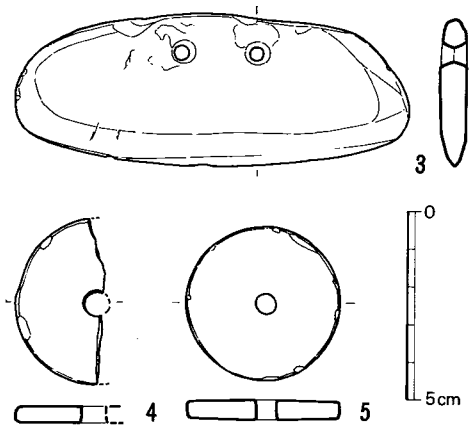
第 205 図 II－6 g 3層出土土器実測図（1/4）



第 206 図 II－6 g 出土砥石実測図①（1/2）



第 207 図 II－6 g 出土砥石実測図②（1/3）



第 208 図　八反田出土石器実測図（1/2）

れは鉄素材と思われる。II－6 gの第3層より鹿角装刀子片が出土しているが，さきの土器との関係でいうならば，終末頃に伴う可能性が強い。（橋口）

石　器（図版85－4，第206～208図）　2点共砥石だが，1はII－6 g区住居跡（5）出土の凝灰岩質砂岩製砥石で重量88.6gを測る。2はII－6 g区第3層出土の細粒砂岩製砥石で2,895 gを測る。

なお，3はII－5区表採のアズキ色輝緑凝灰岩製石庖丁で重量41.1g，4・5はII－5区・II－2区表採の白雲母片岩製紡錘車で重量はそれぞれ 8.7g・16.4gを測る。（小池）

5　小　　結

八反田地区の調査は，トレンチによる小面積の調査で，面としての遺構をとらえるものではなかった。しかも，I－1地区のa・bトレンチ以外は当方が希望する地区ではなく，空地だから調査できたものである。このような中で，工事中に発見されたII－3地区祭祀住居跡土器群は，弥生中期後葉の一括資料として重要な資料となった。この住居跡の性格は不明なところがあるが，結果的には一度にこれだけの量を破棄する行為を考える時，そこにはなんらかの祭祀行為以外には考えられない。住居跡の周囲の調査が進めば，周囲の遺構との関連で住居跡の性格も明らかとなろう。住居跡は大量の土器群を投入される以前に多少なりも一部埋没しかかっているために，住居跡は単なる投入場所に選ばれたものであろうが，住居跡と土器群の時期は同時と考えてよい。

I－1地区の成果は，bトレンチの二重口縁合口甕棺墓と中世の石垣大溝の発見である。甕棺については，端山古墳に関連して述べたが，古墳の周堤ともいうべき地点で古墳と同時期の甕棺墓が発見されたことは，大型古墳とそれに従属する墳墓についても今後解決せねばならない問題であろう。

中世の遺構は，三雲から井原にかけて大半の地区で発見されるが，八反田・下西・中川屋敷・八龍・堺地区などは，かならずといってよいほど発見され，遺物も豊富である。とくにI－1の大溝は，幅4 mで石垣を持つ点でこれまでのところ三雲地区で最大といえる。下西II－10の方形区画の周濠などと関連して，現在の集落の中心部には大規模な中世集落が存在したようだ。（柳田）

第7節　中川屋敷地区の調査

1　はじめに

中川屋敷地区は，現在の三雲集落のほぼ中央に位置するにもかかわらず，1軒の住宅も建てられていない。この地区は集落の中心地にあたるために，今回の圃場整備事業からは除外されているが，三雲遺跡としても遺跡の中心地となるところから，昭和49年度に試掘調査を実施した。試掘はⅠ地区のみに限り，Ⅰ－8～11地区に連続性のあるトレンチを8本設定した。試掘であることから原則として拡張しなかったが，Ⅰ－8 cでは焼失した住居跡が検出されたので拡張して1軒分を掘り，Ⅰ－11 oでは完形の白磁壺が出土したので，その木棺墓部分のみ拡張して調査したにすぎない。

Ⅰ－7地区は，宅地造成のための緊急的な調査で，昭和50年8月23日から8月29日までに約77㎡の遺構確認調査を実施した。調査の結果，弥生中期から終末と中世の遺構が検出されたが，実測できるような遺物はほとんどなかった。

2　Ⅰ－7の調査

この地区は中川屋敷地区の北東側にあたり，県道の新設によって東西に分断された畑地の東側。Ⅰ－6・7地区は近年に地下げをしたということで，東側のⅠ－3～5地区より1ｍ以上低くなっている。地元の古老によると，この付近に「三雲池」があったというが，その痕跡はない。Ⅰ－4・5には現在も中世から近世の墓地の名残をとどめた墓石が見られるので，今回報告している下西Ⅱ－10地区の遺構との関連が考えられる。

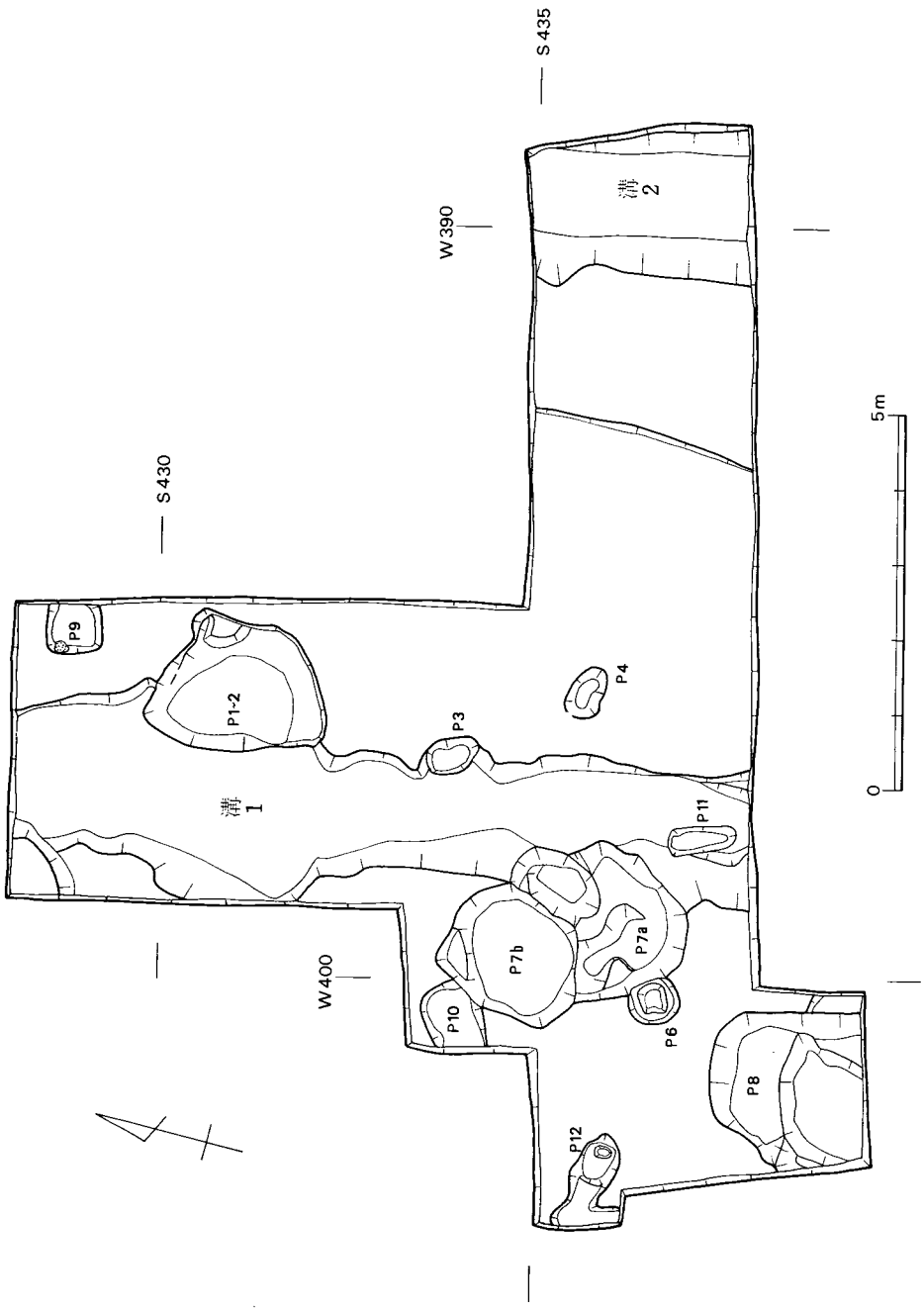
Ⅰ－7では，幅4ｍ，長さ10ｍの南北トレンチと幅3ｍ，長さ14ｍの東西トレンチをT字形に設定して調査を進めたところ，溝状遺構・竪穴状遺構・小ピットなどを検出したので，任意に小規模の拡張をした。

溝状遺構（図版86，第209図）

溝状遺構は，南北トレンチの中央にトレンチに沿ったもの（溝1）と東西トレンチ東端に南北方向のもの（溝2）を検出した。

溝　1　不規則な溝で，幅約 1.5～2ｍ，深さ20cm前後の規模。埋土から中世と思われる鉄滓小片・瓦質鉢片・白磁片・糸切底土師皿片が出土したが，いずれも細片である。

溝　2　トレンチ幅のみの調査で，上幅 1.1m，下幅60cm，深さ45cmのU字溝。この地区が



第209図 中川屋敷Ⅰ－7遺構配置図（1/100）

1ｍ前後削平されたことを考慮すると，かなり大きく深い溝であったろう。下層からは中世のものらしき陶器片も出土しているが，上層では江戸期のものらしい陶磁器細片も含まれている。

竪穴状遺構とピット（図版86－３，第209図）

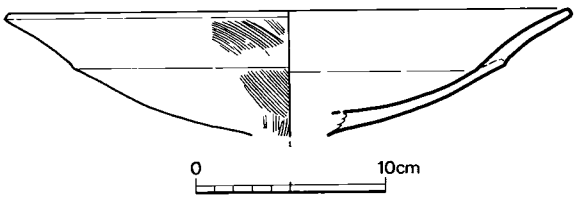
この地区の調査では，溝状遺構以外の遺構をピットとして番号の頭にＰを付して表わした。竪穴状遺構は，径と深さが１ｍ前後のものがあり，弥生時代の貯蔵穴を思わせるものがあるが，調査してみると中世の土師皿細片が含まれているものが多く，弥生土器片は摩滅していた。これらの中には弥生時代のものもあるが，土器片は細片が多く，図示できるのはＰ12の高杯片（第210図）のみであるから下記のとおり表とした。

表７　Ⅰ－７竪穴一覧表

（単位：cm）

番　号	径	深さ	出　土　品	時　期
Ｐ　1	205×170	32	糸切土師器杯片	中　世
Ｐ　2	205×170	32	〃	〃
Ｐ　3	65×45	18	摺鉢片	〃
Ｐ　4	70×50	25	甕片	弥生終末
Ｐ　6	60×65	20	碧玉片・甕片	〃
Ｐ　7	200×250 160×195	85	糸切土師器杯片	中　世
Ｐ　8	200×200＋α	65	甕片	弥生終末
Ｐ　9	65×70＋α	13	甕片・焼土	弥生中期
Ｐ　10	80×100＋α	16	糸切土師器杯片	中　世
Ｐ　11	90×40	19	ナシ	——
Ｐ　12	70×50	48	甕・高杯片	弥生終末

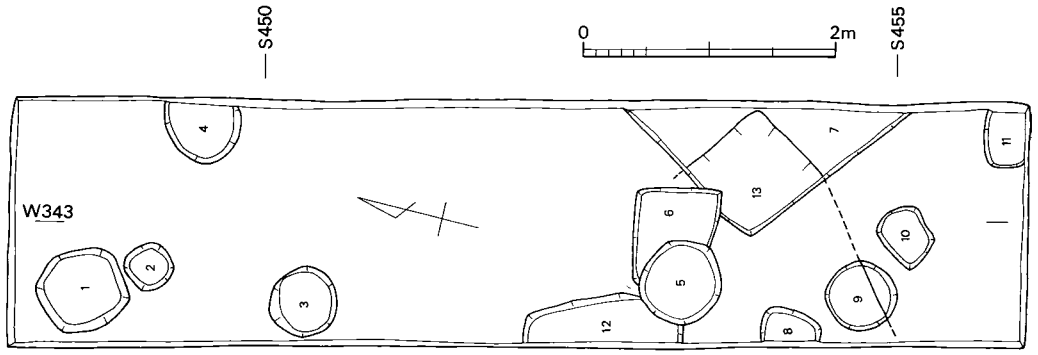
土　器（第210図）　Ｐ12から出土した破片資料。口径約30cm，杯部高さ6.5cmの大きさで，杯外反部の立上りは少なく短かい。弥生終末のもので他に甕の体部片や器種不明の粗いタタキ目が残っているものがある。　（柳田）



第210図　Ⅰ－７，Ｐ12 出土土器実測図（1/4）

３　Ⅰ－８・９・11の調査

Ｓ 448・Ｗ 340を起点にして東に幅２ｍ，南北８ｍ単位で，Ⅰ－８・９にａ～ｈの区画を，Ｓ 496・Ｗ 336を起点にして，南に幅２ｍ，東西８ｍ単位でⅠ－９・11にｉ～ｓの区画を設定



第 211 図　中川屋敷Ⅰ－8のトレンチ実測図（1/60）

し，Ⅰ－8a，Ⅰ－8c，Ⅰ－9e，Ⅰ－9g，Ⅰ－9j，Ⅰ－9l，Ⅰ－11o，Ⅰ－11qの8区画を発掘した。

Ⅰ－8aの7は方形住居跡で，その床面下にも住居跡らしきものが検出された。13としておく。1・3・5・9は一直線にならび掘立柱建物の可能性も考えられる。1・7は完掘したが時期を確定する程の資料はない。

Ⅰ－8cはベッド状遺構をもち，炭化物の多い住居跡がトレンチ中央部で検出されたので東西に拡張した。幸いに重複がなく，ほぼ全容をうかがい得る。東西に 5.5m弱，南北 4.3mの長方形住居跡で，西北隅にL字状のベッド状遺構を有する。炉は中央部のやや南よりに検出した。炭化材の出土状態はこの建物が火事にあったものと思われる。主柱穴はこの形の住居跡では長軸にそって2個あるのが普通であるが，住居跡の中では主柱穴らしきものは検出できなかった。

遺物は3が炭化材直下出土の甕，8が炭化材直下出土の椀，12が南西隅の床面より出土した椀，1・2・4・7・11が中央部のやや北側の炭化材の直上より出土したもの，14が南東隅でやや浮いた状態で出土したものである。他に覆土より，高杯・椀・台付椀の脚等が出土している。これらはこの住居跡に伴うものと考えられ，時期的には，弥生終末期以降のものであって，いわゆる土師器と呼んでもさしつかえなかろう。

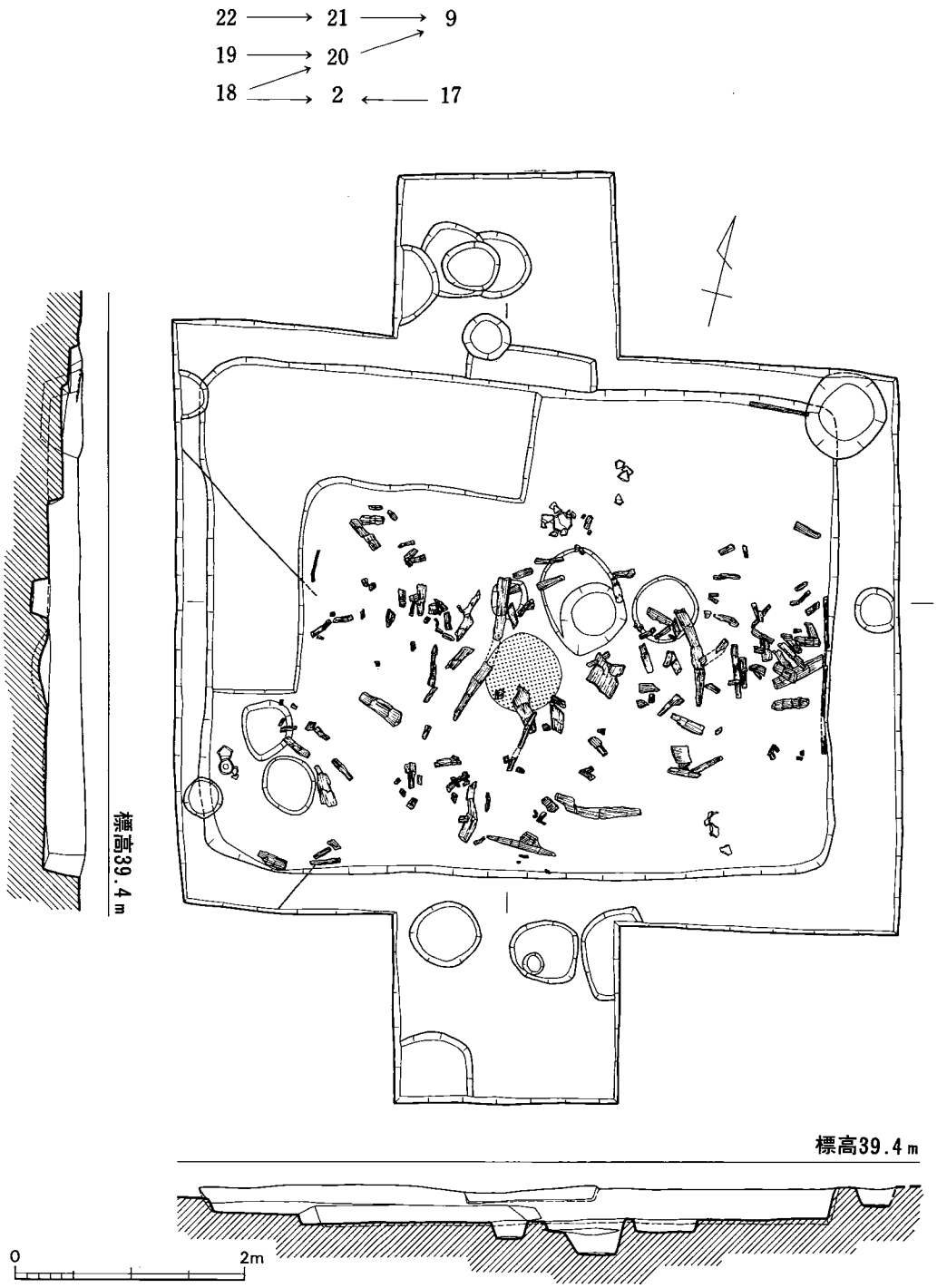
Ⅰ－9eは途中から礫層となり，柱穴1個をのぞいては何らみるべきものはない。

Ⅰ－9gは溝・柱穴等を多く検出した。切り合いは下記のとおりである。14・18・20・25・26・27は弥生時代のものであるが，他の溝・柱穴はすべて中世のものであった。

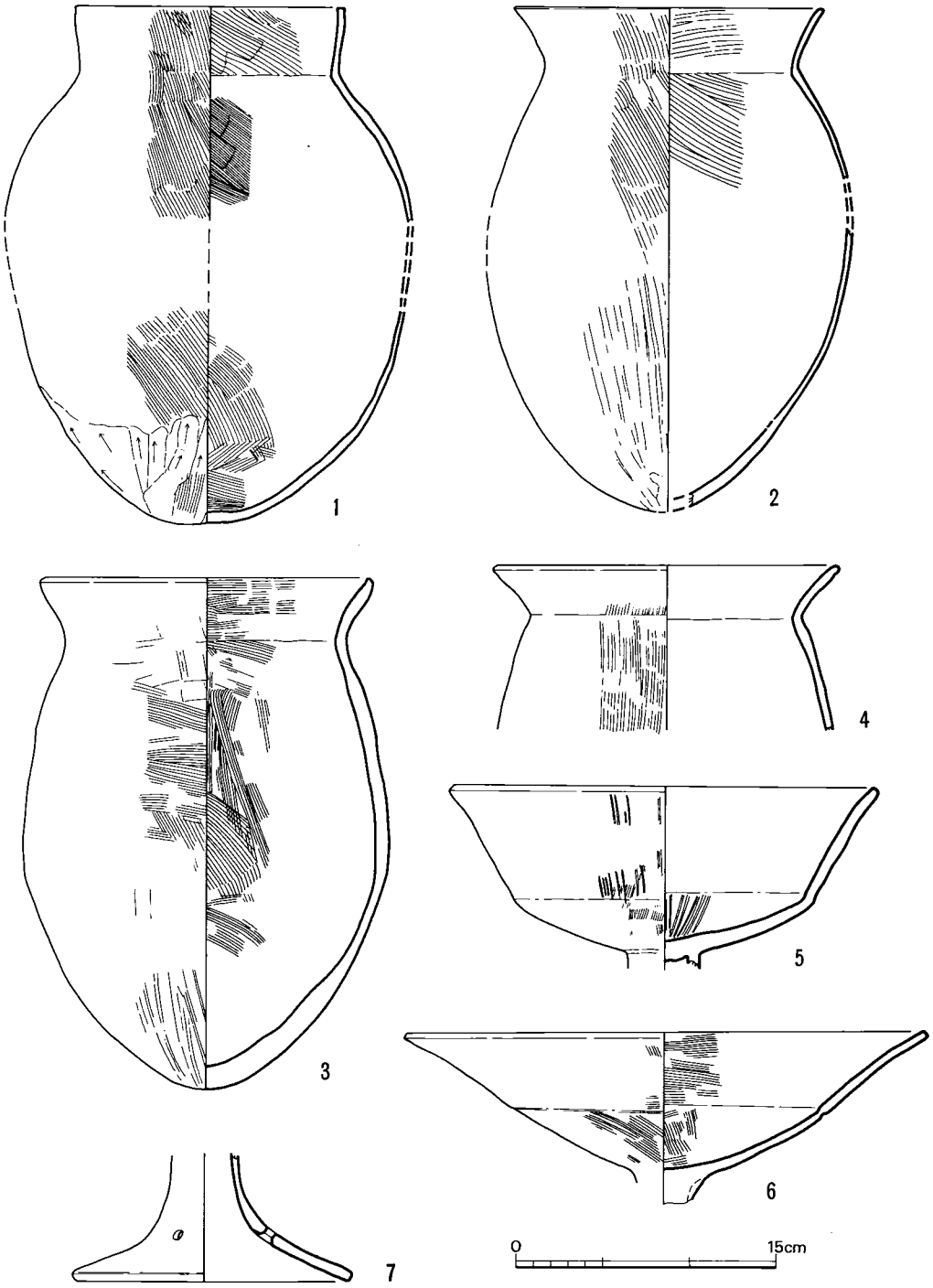
14 → 1

25 → 3
27 → 3

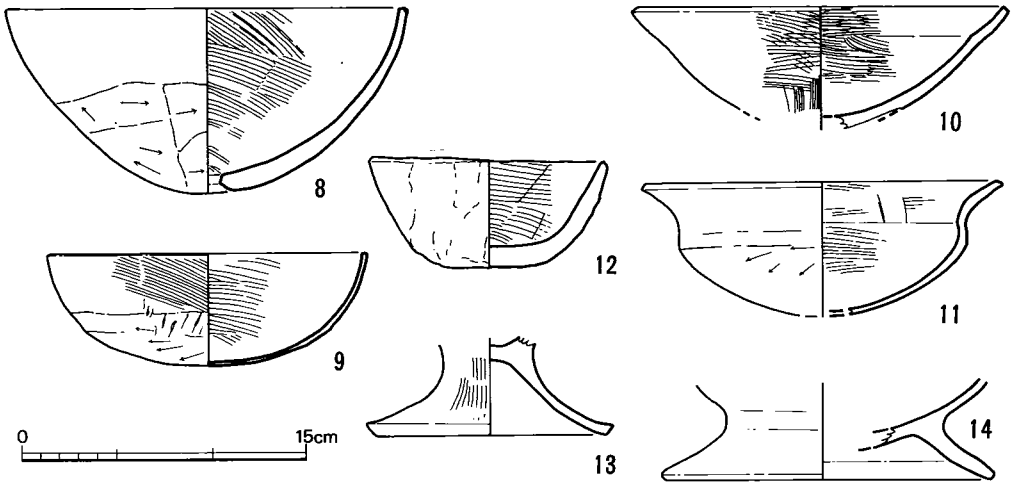
23 → 8
24 → 8



第 212 図　中川屋敷Ⅰ—8c 住居跡実測図（1/60）



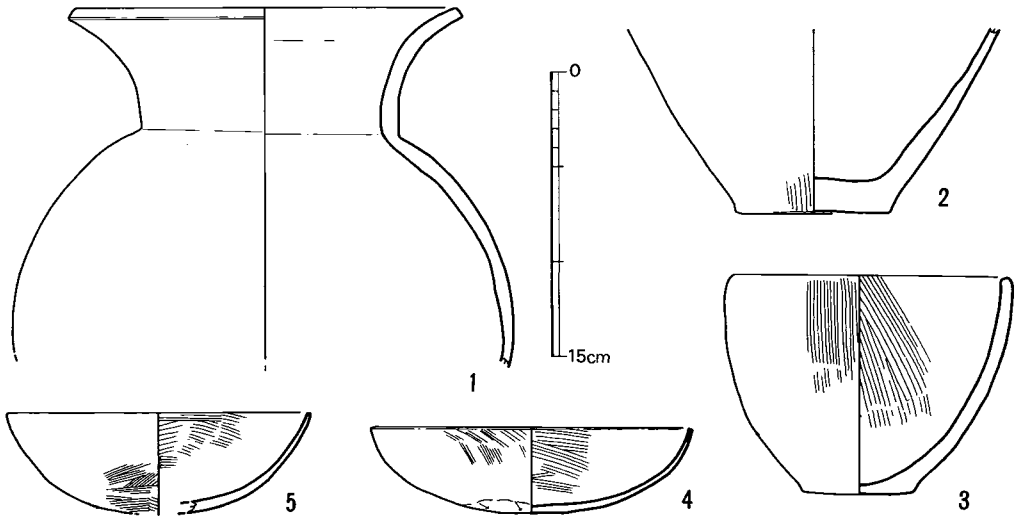
第 213 図　Ⅰ－8 c 住居跡出土土器実測図①（1/4）



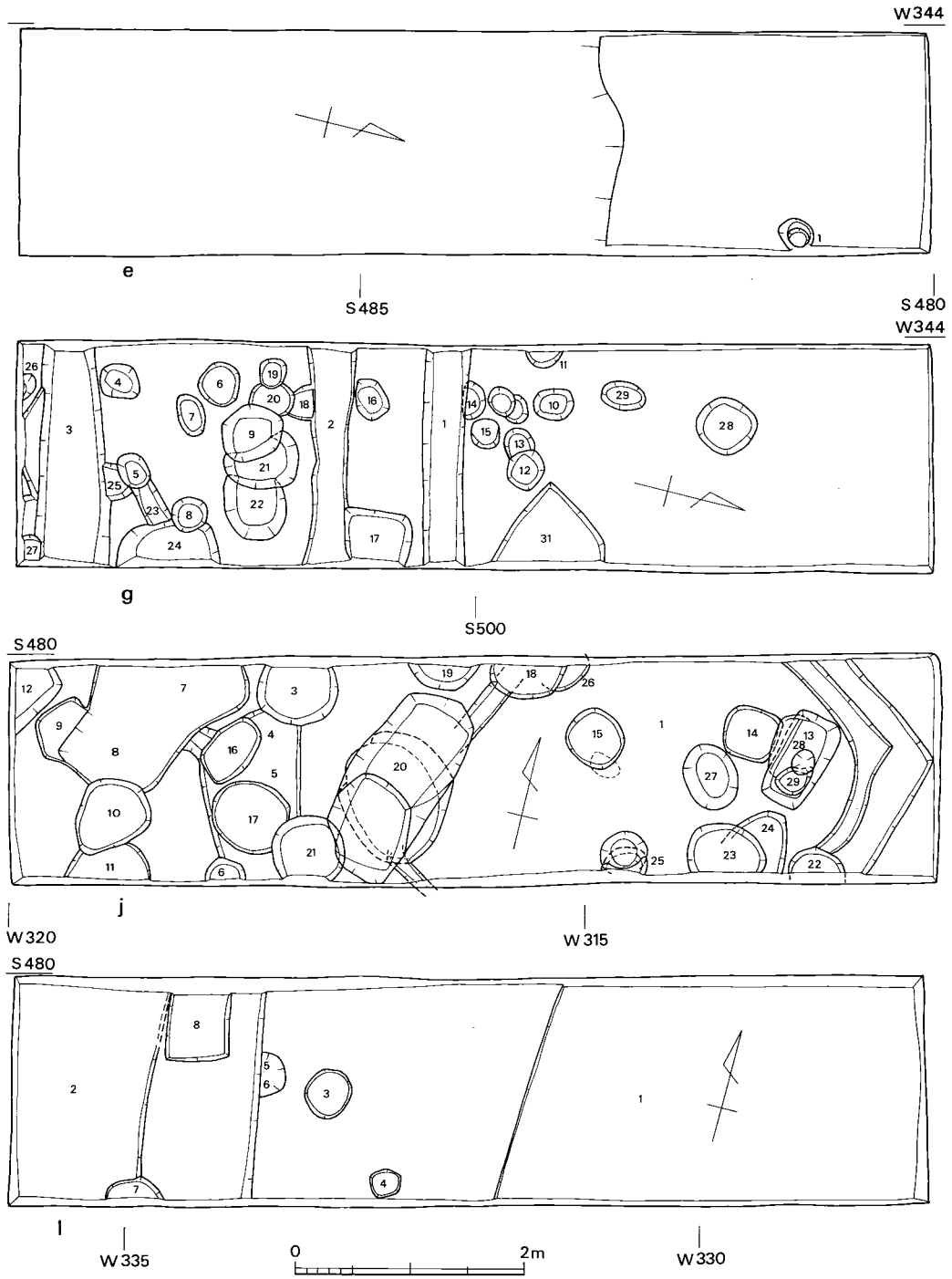
第 214 図　Ⅰ－8 c 住居跡出土土器実測図②（1/4）

Ⅰ－9 j は東側に3.5×4.0m程の長方形住居跡を検出し，床面まで掘り下げた。炉は中央部のやや一方に寄った位置にある。この住居跡を切って，P20の土壙があるが，この土壙より出土した土器はほぼ弥生終末頃のものであって（第215図－1），この住居跡の下限を決定できる。

Ⅰ－11 o は方形の住居跡と思われるもの3，中世の木棺墓1の他，柱穴多数を検出した。3・4・5・6・7・9・16・20・21・25は中世の穴で，21をのぞき完掘した。木棺墓は当初トレンチに白磁の完形品を検出したので，南壁の断面を観察し，これが中世の木棺墓であること



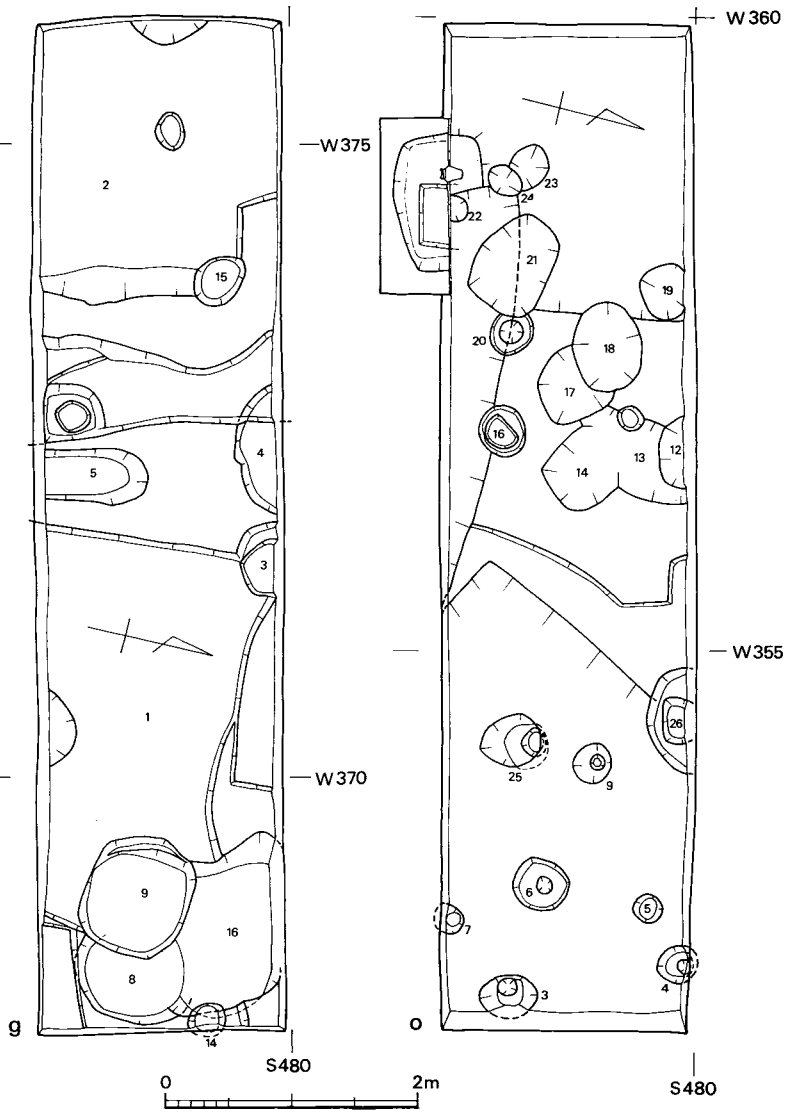
第 215 図　Ⅰ－9 j，Ⅰ－11 g トレンチ出土土器実測図（1/4）



第 216 図　中川屋敷Ⅰ－9トレンチ実測図（1/60）

を確認し拡張した。大半をトレンチによって掘りすぎたことは残念である。なお木棺墓については別記する。これら以外の遺構はすべて未掘である。

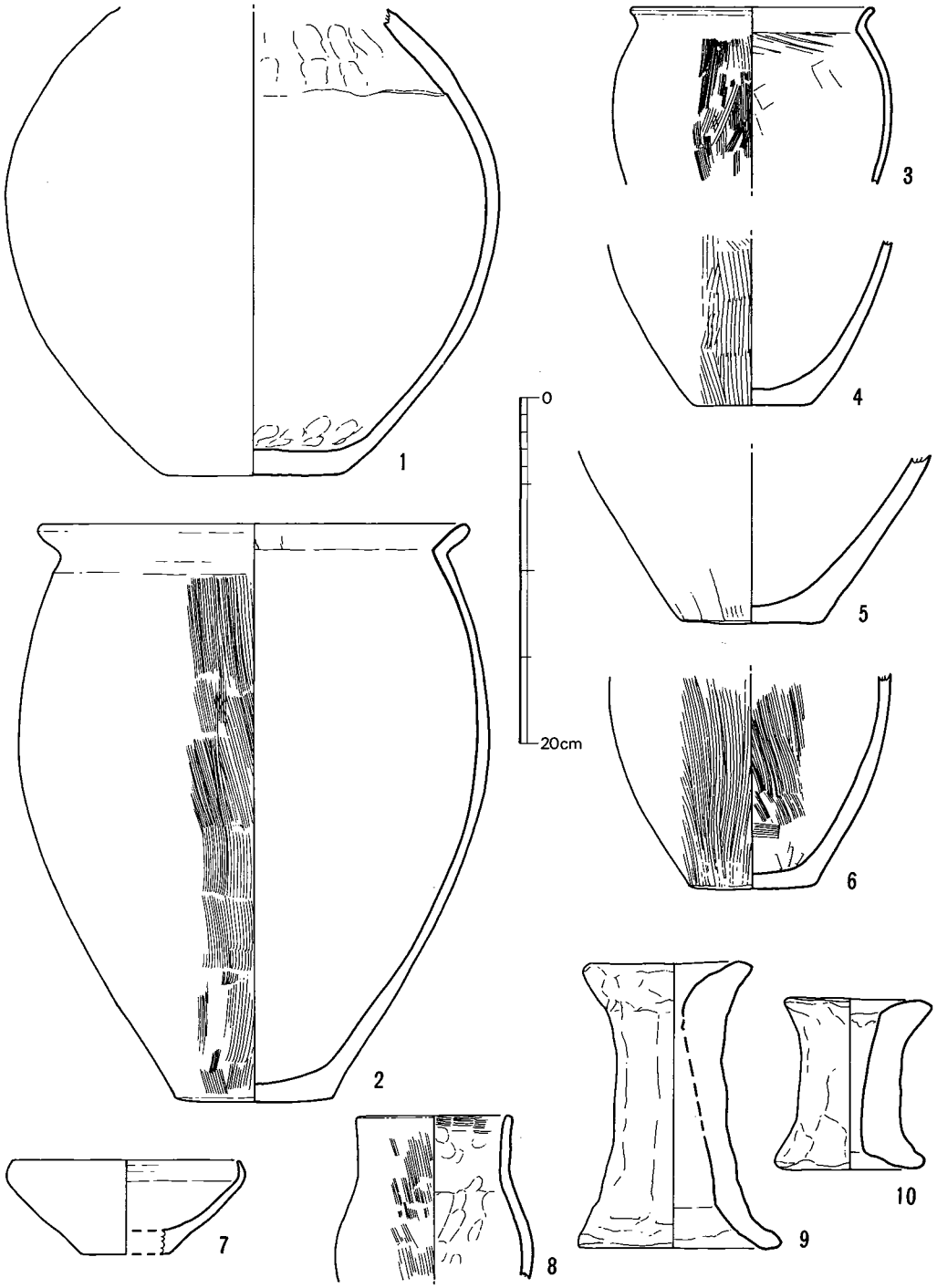
Ⅰ－11ｑは東西の西側に住居跡2を検出した。1号住居跡は北側と東側にベッド状遺構を，ほぼ中央部に炉をもつ。長方形になるものと思われる。出土土器は第218図に示すように底部のシャープさがなくなり，丸底化の傾向が生じつつある観を与える。器台の特徴等も考慮すると，弥生後期中頃に比定できよう。この住居跡の床面下に8・9・16の土壙を検出した。切合関係は8→16→9。8から甕の底部，9から鉢が出土しており，他の小片から考えて，中期末～後期初頭期のものと思われる。2号住居跡は北・東側にＬ字状のベッド状遺構をもち，トレンチ西端に炉跡を検出した。時期を確定するほどの資料はない。（橋口）



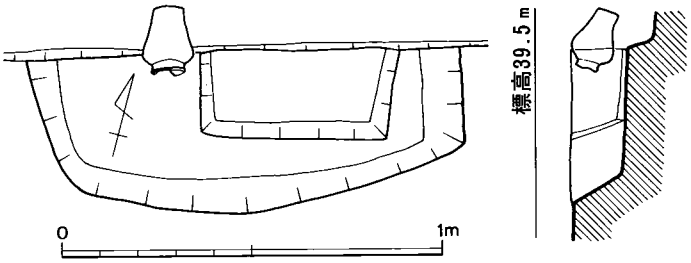
第 217 図　Ⅰ－11ｇ，Ⅰ－11ｏトレンチ実測図（1/60）

Ⅰ－11ｏ木棺墓（図版89－3，第219図）

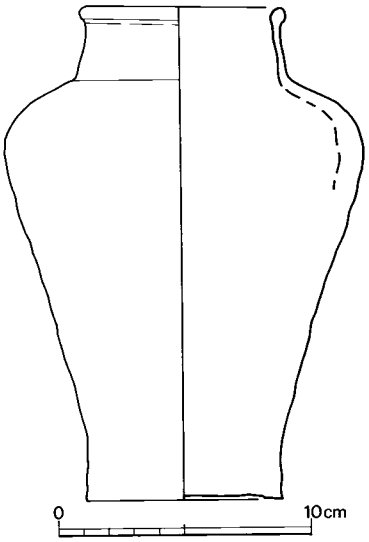
南端の一部を検出したにすぎず，長辺部分の大きさは知れない。114cm×？cmの掘り方の中に48cm×？cmの木棺を埋めている。釘は出土しなかったことから，恐らくは組み合わせ式のものと考えられる。墓壙中に白磁壺を副葬していた。



第 218 図　I—11g 住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 219 図　Ⅰ－11ｏ木棺墓実測図（1/20）

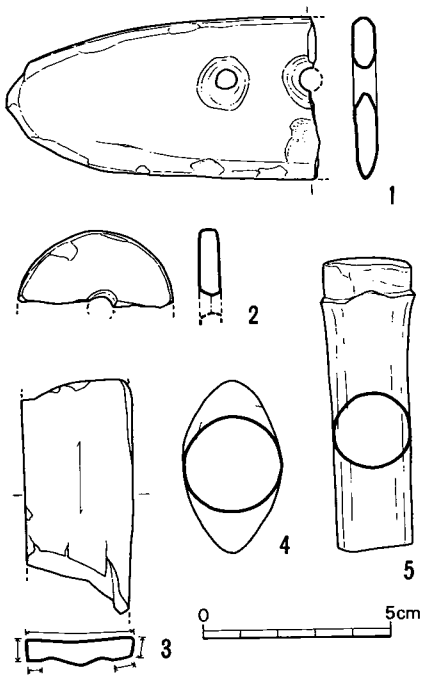


第 220 図　木棺墓出土白磁壺実測図（1/3）

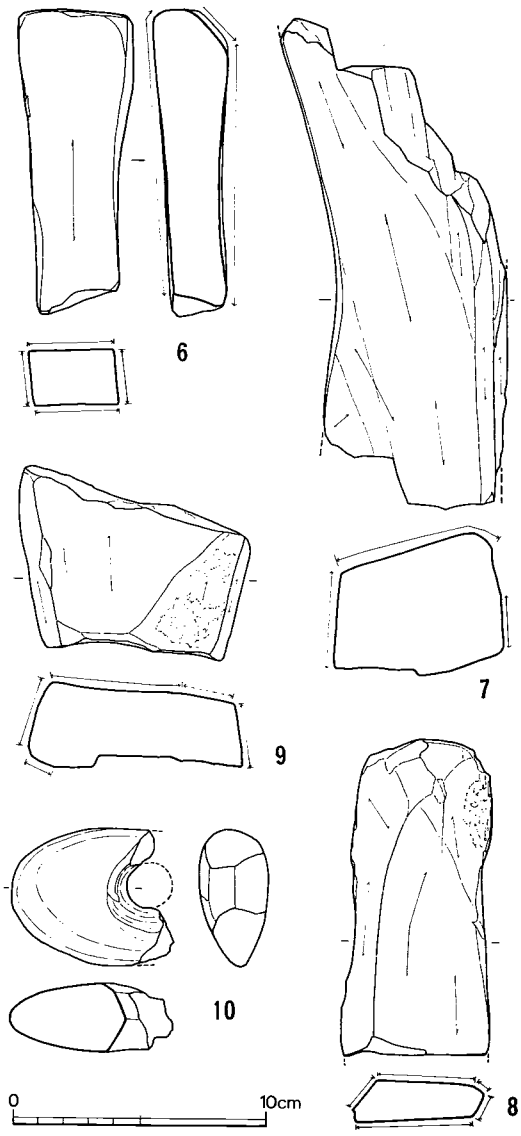
白磁壺（図版90－１，第 220図）　口径8.0cm,器高19.3cm，底径 7.7cm，胴部最大径13.9cmである。肩が大きく張り，底部付近を細くしている，いわゆる梅瓶形のものである。灰色を呈する胎土は粗く，砂粒が器表にまで浮き出ている。白化粧土は外底にまでかけられている。釉色は灰色の胎と白化粧土と相俟って，灰白色を呈する。内外面ともに細い貫入を伴う。外底に径 6.5cm程の焼台跡が融着している。李朝の白磁壺と考えられるが，その年代は決め難い。しかし，下西地区周濠との関連を考慮すれば，15世紀中頃までと考えられるが，16世紀とする意見もある。

石　器（図版90－２，第221・222図）　１はⅠ－９ｊ区第３層出土の石庖丁片で，緑泥片岩質の石材を利用している。重量の現存値30.6ｇを測る。２はⅠ－８ｃ区古墳時代前期の住居跡埋土より出土した白雲母片岩製紡錘車片で重量7.4ｇ。３・８はⅠ－９ｊ区１号住居跡埋土出土の粘板岩製砥石，６はⅠ－８ｃ東拡張区第３層出土の灰青色粘板岩製砥石，７はⅠ－８ｃ区住居跡床面出土の砂岩製砥石，９はⅠ－11ｑ区１号住居跡(弥生後期中頃)埋土出土の凝灰質砂岩製砥石で重量はそれぞれ17.3ｇ・256ｇ・213ｇ・1kg・265ｇの現存値を測る。10はⅠ－11ｏ区第３層出土の白雲母片岩製の石器で円孔をもつが用途については不明。

土製品（図版90－２，第 221 図４・５）　２点共Ⅰ－８ｃ区住居跡埋土出土。４は長さ45.2㎜,幅25.2㎜，重量25.5ｇの投弾形土製品で精良な胎土を用いて暗黄褐色に焼成されている。５は円柱状を呈し，



第 221 図　中川屋敷出土石器実測図①（1/2）



第 222 図　中川屋敷出土石器実測図②（1/3）

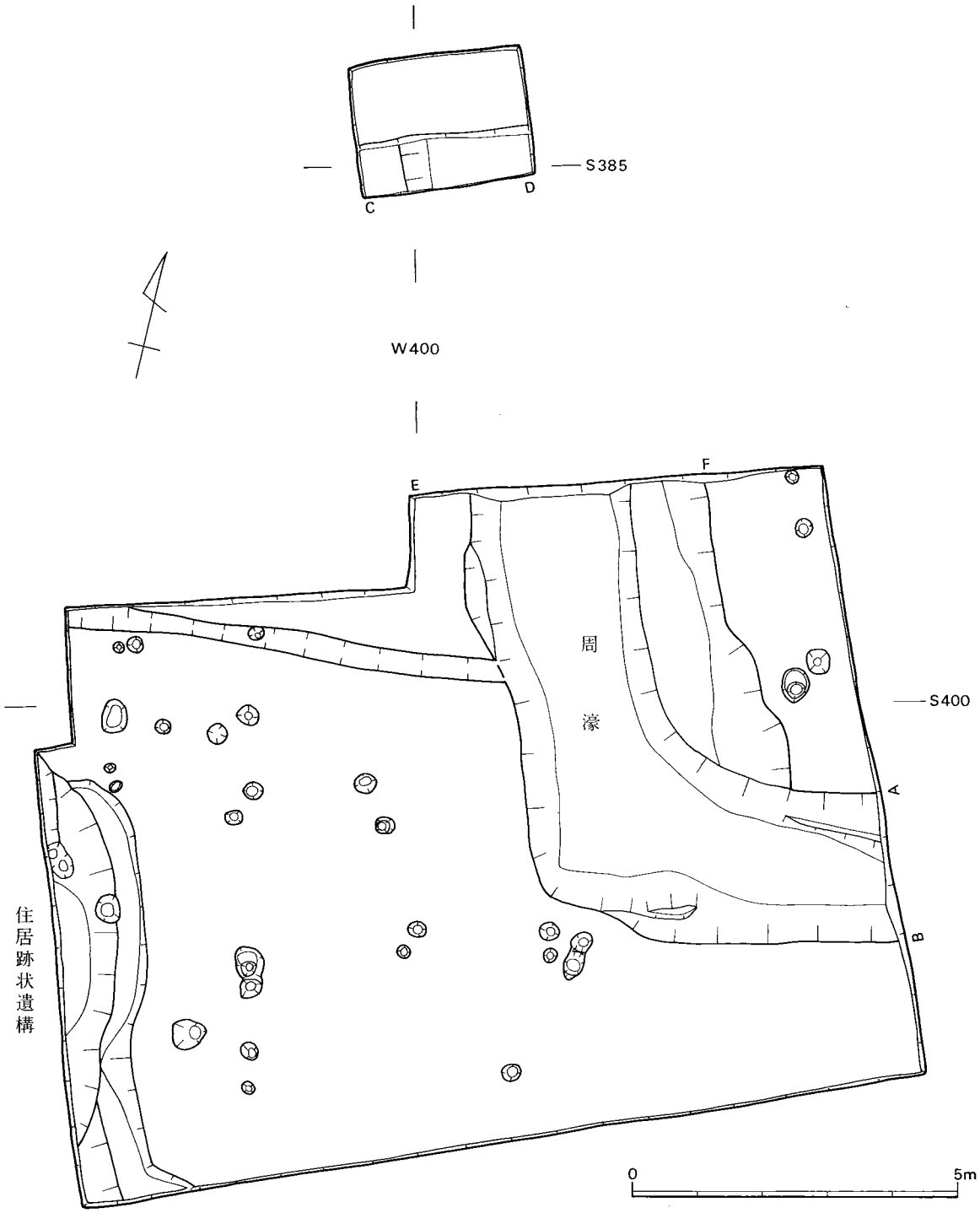
端部付近に脱離面を有すが，端部は中凹みの形状になるので高杯の杯部と柱状部との接合に似たものであろうか。精良な胎土で淡黄褐色に焼成されている。　（小池）

4　小　結

中川屋敷地区は，現在の三雲集落の中心的位置にありながら，1軒の住宅も建っていないことは述べたが，このあたりに中川屋敷地区の中世以後の性格がさぐれないだろうか。中川屋敷の地名を見ると，西側の屋敷，東側の楠木屋敷と合せて名のある大住宅があったようにも思える。しかも，中川屋敷は方1町半の輪郭内にあり，他の屋敷地区と違って整然としている。ほぼ同じ広さの屋敷地区は，北側と西側の輪郭が乱れている。東側にある楠木屋敷は，面積も狭いが，北東側に端山古墳，東側に築山古墳があって地区の輪郭も不整形を呈す。

中川屋敷地区の調査が小面積のトレンチ調査で，遺構の性格を明らかにできなかったが，地名に関してのみ推測すると，現在はⅠ－4・5地区に墓地らしきものが残り，Ⅰ－10で白磁壺を伴った木棺墓が発見されるなど，中世の墓地関連の遺構があるのも確実である。集落の中心地にあって現在1軒の住宅も建てられていないことも古くからの伝統であるかもしれない。

地元在住の古老に聞くと，中川屋敷Ⅰ－7付近に「池」があったともいい，これが貝原益軒の『筑前國續風土記』三雲の条の「此里を三雲と名付し事は，里民の説にいはく，此村に興雲庵と云寺あり。此寺むかしは大寺なりしか，其宅中に池有。其池より紫雲三條立し故，三雲といふなり。」と関連あるかと思えるが，Ⅰ－7の調査では「池」は発見することができなかった。「興雲庵」にかぎらず，寺院関係であれば墓地が伴うのは当然であろう。　（柳田）



第 223 図　下西 II—10 遺構配置図 (1/100)

第8節　下西地区の調査

1　はじめに

下西地区は，三雲遺跡群の西寄りにあり，東西を八反田地区と瑞梅寺川流路に挟まれているが，銅矛・銅戈溶笵出土地と伝えられる地蔵川原地区及び屋敷田と思われる屋敷地区に近い位置にある。下西地区の東半分は集落となっているが，西半分は可耕地が多い。今回調査したII－10は，圃場整備対象区域外で県道に面す至便さから，個人住宅が建築されることになり，これに先立って発掘調査した。

調査は55年5月1日に開始したが，既に1.5ｍ程度盛土されており，排土との関係で家屋予定分の11×8ｍ範囲のみ掘り下げることにした。調査の進行によって，東北側では「L」字形に曲がる溝に中世の遺物が多く発見されたので東北部を約1.5ｍ程度の幅で拡張すると共にその延長を確かめるトレンチを用地端に設定した。また，調査区の西側では弥生中期土器と古墳時代土師器を含む住居跡と思われる遺構が検出され，西側に主体があると思われたが，約1ｍを拡張するに留まった。（図版91，第223図）

調査は柳田康雄と小池史哲が担当し，新開誉之・樗木弘明の参加があった。

2　II－10の調査

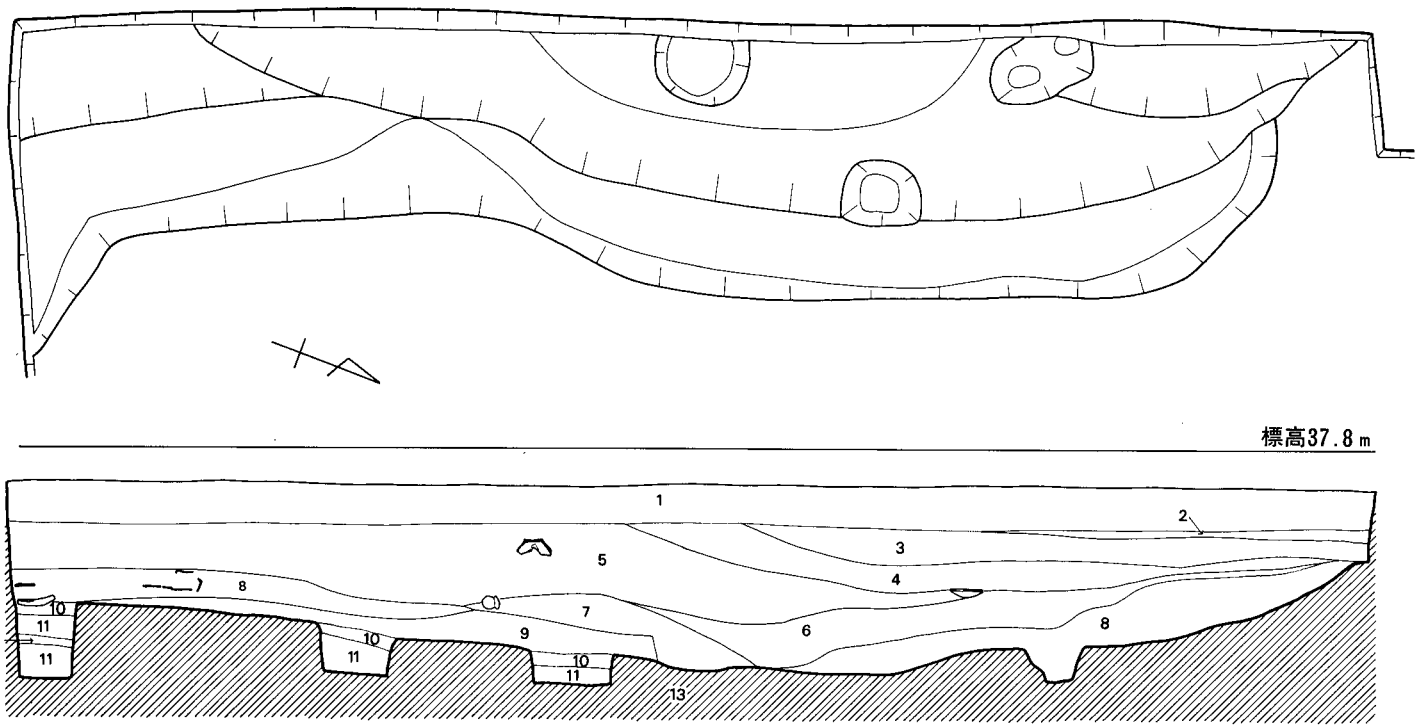
(1)　住居跡状遺構（図版92，第224図）

調査区西端に検出されたが，その大半は調査区域外に拡がる。東西1.4ｍ幅のみの調査となったが，南北7ｍ以上の規模のものである。

この遺構の埋土には多くの弥生中期土器片が重なる部分があり，土器溜りのような部分がみられたが，木炭・焼土等も含まれており，土器の多い部分の下位には古墳時代土師器が比較的良好な状況で発見された。

土師器の含まれる層を除くと木炭等の割合が極めて少なくなる暗黄褐色砂質粘性土で，弥生中期土器のみ含まれていた。

遺構の周壁は整っておらず，すり鉢状だが，南側は緩やかな落ち込みとなっている。当初は住居跡と判断していたが，このような形状のため性格がはっきりせず，南側で深層掘りのテストピットを空けたところ地山としている黄褐色砂質粘性土は漸移的に明るい色調になり，下層



土　層　名

1・2．耕作土		8．暗黄褐色砂質粘性土	下層
3．暗茶褐色土		9．淡めの暗茶褐色砂質粘性土	
4．黄色粘土混じり茶褐色土		10．暗灰黄褐色土	
5．茶褐色土		11．黄褐色土砂質粘性土	
6．木炭混じり暗茶褐色土	上層	12．砂利まじり黄褐色粘性土	
7．木炭混じり暗黄褐色土		13．黒灰色砂利	

0　2m

第 224 図　住 居 跡 状 遺 構 実 測 図 (1/40)

は黒灰色の砂利層になっていた。更にこの砂利層のレベルをみると南部の床の傾斜にほぼ平行することからみて本来自然形成的な落ち込みであった可能性もある。

中央部にみられる土師器を含む部分については，木炭を多く含みピットもみられることからして，住居に類する遺構であった可能性を残している。但し，一番北側のピットは木炭を含まず下層の堆積土と同様の埋土であったので先行する時期のものかも知れない。なお，この部分から鉄器も伴出した（図版92－３）。

下層出土の遺物（図版94－１，第225図）

土　器（第225図）１は広口壺で，器高30.7㎝，口径30.1㎝，胴部最大径31㎝，頸部径20.4㎝の大きさをもち，胴部は上位に最大径があり肩が張る。全体にナデ調整され，頸部にはヘラ先研磨による暗文が描かれる。精良な胎土で，淡茶褐色に焼成されるが，丹は塗布されていない。２～４は甕形土器で，２は口縁部内面がやや拡張される逆Ｌ字状口縁で，口縁下に１条の三角凸帯がめぐる。３例共胴部は外面縦位のハケ目，内面ナデ調整され，底部は細くしまる。５は器高 9.5㎝，復原口径16.9㎝，底径 9.2㎝の大きさの鉢形土器で，口縁部は内湾する。これらの土器は中期前半の新しい段階ないしは中頃の時期であろう。

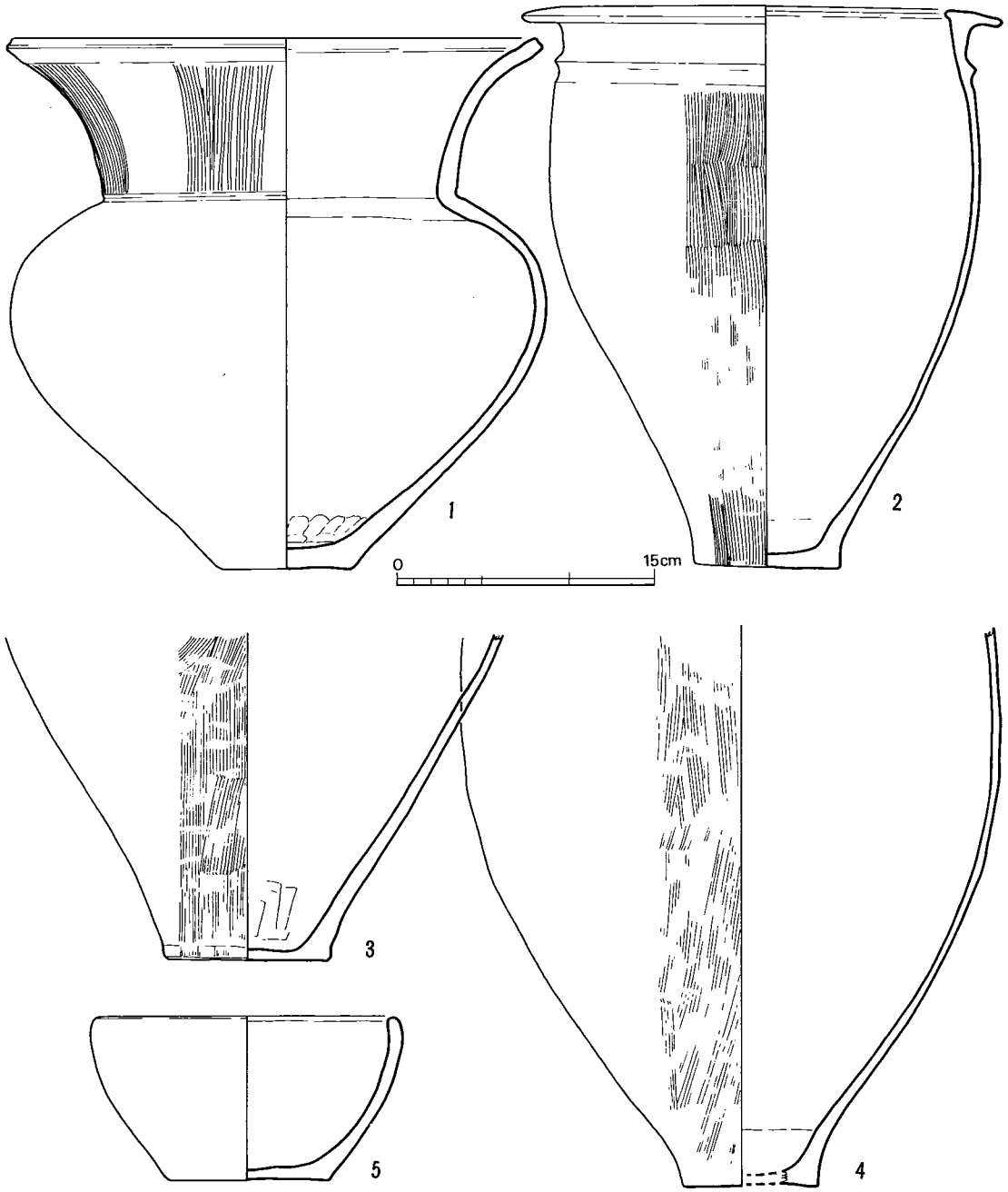
石　器（第228図１）黒曜石の縦長剝片の両側縁に抉りを入れて折断したつまみ形石器で，重量 1.7ｇを測る。

上層出土の遺物（図版94－２，95－１・２，第226～228図）

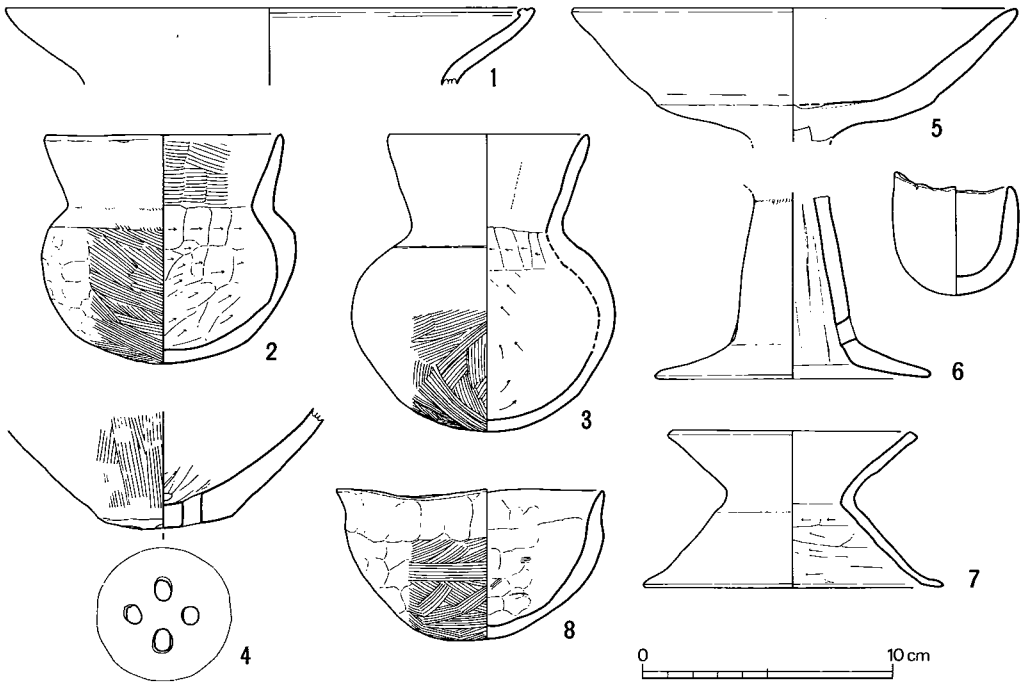
土　器（第226図）１は甕形土器の口縁部破片で，内湾気味の口縁部の上面内側が丸く突出する。２・３は小型丸底壺で，２の胴部外面は指頭圧痕の凹凸の上にハケ目調整・口縁部外面は雑なヨコナデ調整され，３の胴下半はハケ目調整，胴上半と口縁部はヨコナデ調整されるが，２の肩部はかすかな稜，３の肩上位には浅い沈線がめぐる。上部を欠失するが，胴外面ハケ目調整・内面ナデ調整されるが，ハケ目原体の押圧痕が残り，底外面はナデ調整され，レンズ状にふくらむ底部となっている。４は底面に４個の焼成前穿孔がある甑。５・６は高杯の杯部と脚部破片で別個体。５の杯部は口径17.7㎝，深さ 3.8㎝の大きさで，口縁部は杯底部から鈍く屈折して直線的に広がる。６の柱状部はエンタシスにふくらみ，脚裾は約60°と大きく開くが，屈折位の上に一対の穿孔がある。７は鼓形器台で受部に比して脚部が開き，更に裾部は広がる形状を呈し，外面及び受部内面はヨコナデ調整，脚部内面はヘラケズリされる。砂粒・金雲母・赤色粒を胎土に含み明るい淡褐色の焼成である。８は手捏による椀で，口縁部直下を指で強く押えて口縁部を引きあげるため，頸部をもった形状になっており，胴部にはハケ目調整が加わる。器高６㎝，口径は短径 9.3㎝，長径10.6㎝で上面観は楕円形を呈している。９は手捏土器で器高 4.8㎝，胴径５㎝の大きさだが，比較的丁寧なナデで手捏らしくない器面を有している。

石　器（第228図２・７・９～13）２は白雲母片岩製紡錘車片，７は玄武岩製石斧，９は

下　西



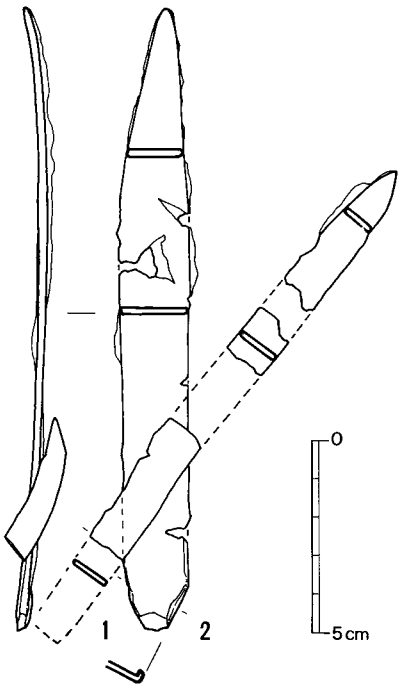
第 225 図　住居跡状遺構下層出土土器実測図（1/4）



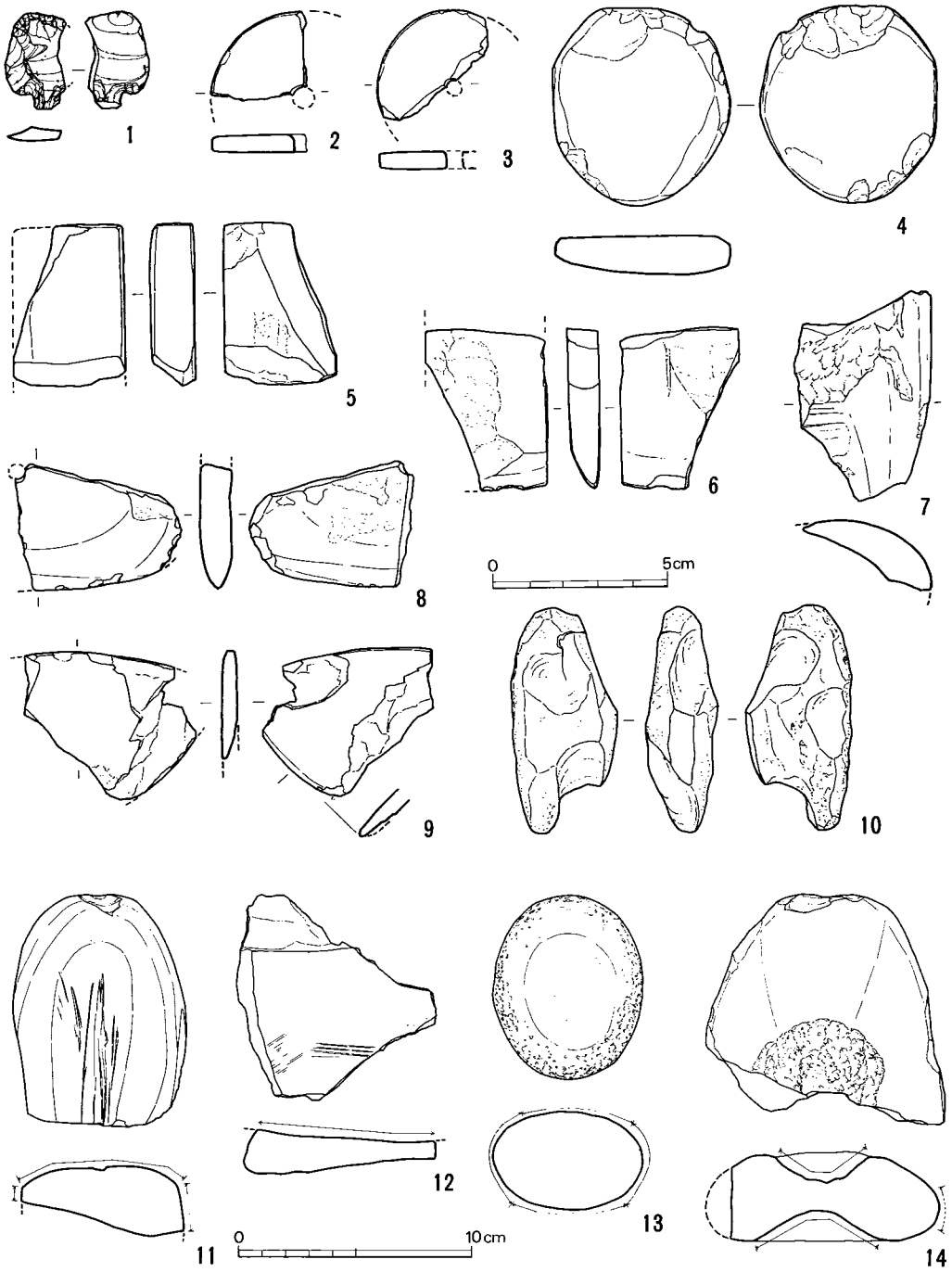
第 226 図　住居跡状遺構上層出土土器実測図（1/3）

縁泥片岩質の石庖丁片で，重量はそれぞれ 6.4ｇ・32.9ｇ・10.9ｇの現存値を測る。10は風化して細粒が手につくような砂岩製品で一ヵ所に折損面をもつが，指に挟み易いような凹凸を有す。11・12は砥石片で，11は粘板岩製，12は砂岩製，13は灰緑色雲母片岩製の敲石で重量 200ｇを測るが，上・下面はすり石としての機能を果たすため磨耗する。

鉄　器（図版 95－2，第 227 図）　2点の鉄器は鏃を束に向け約30°の角度に交差するように重なって出土した資料で錆着しているが，上側（1）は検出時及び収納時の不手際のため一部を紛失し完存しない。1は調査時の記録では略15cmの長さを有していた。全体に1.4～1.7mmの厚さで幅 1.1cmの扁平な板状を呈すが，鏃は両側縁が窄まって尖る。両側縁はほぼ同様の形状で刃や背を区別しえないので，鏃部を使用する刺突具的な用途を考えさせる。なお



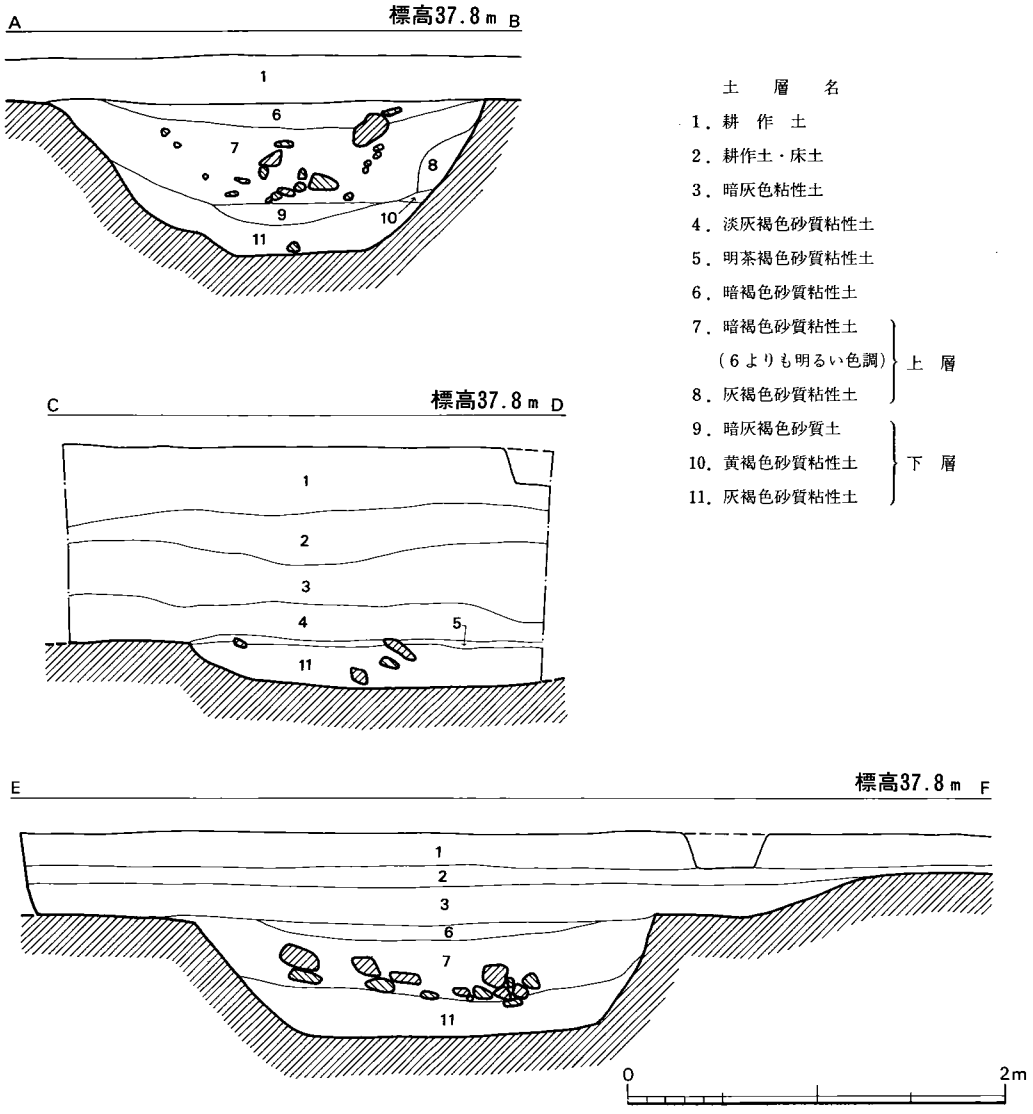
第 227 図　住居跡状遺構上層出土鉄器実測図（1/2）



第 228 図 II—10出土石器実測図 (1/2・1/3)

裏面に藁の付着したような痕跡がみとめられる。

2は基部端の一部を欠損しているが長さ16.2cmを有し，幅 1.8cm・厚さ1.5～1.8mm。鍔は左側縁が窄まって尖り，基部も左側縁が窄まり気味になるが右側縁端部が折れ曲っている。全体に右側縁が極わずかに薄めになるものの刃部といえる程でなく，1と同様，鍔部が尖ることに意味のある刺突具的なものであろう。



第 229 図　周濠断面土層図 (1/40)

(2) 周　濠（図版93，第229図）

調査区北東部に検出された遺構で，S 402・W 399の位置でL字形に屈折している。この遺構は，上縁幅約2.5m，深さ0.6～1mの断面U字形ないしは逆梯形の掘り込みで，調査区内では南辺約5m・西辺約6m以上になる溝状を呈す。この溝状の遺構内には中世の遺物が含まれており，中世の遺物の出土は遺構外の東北側にもやや多くみられ，西側に稀薄であることから，調査区内で確認はできないものの東北側の構造物を区画するような付属施設の可能性があるので，周濠と仮称することにした。

周濠は，黄褐色砂質粘土ないしは暗褐色系の色調になる砂利の地山，更には砂利下の暗灰褐色粘質砂の層を掘り込んでいる。濠内堆積土は，上部に黒褐色に近い暗褐色土，やや下がって暗灰色系の色調を帯びる暗褐色土があり，拳大から人頭大程度の礫がスコップもたたないほど埋まっている。この礫の集中する面より下部はかなり湿気を帯びるものの，上層に比して明るめの色調の灰褐色土である。

周濠の延長を求めてII－10地区北東隅に小トレンチを設定して掘り下げたところ，S 385・W 400の位置に，上部を削平されて浅くなっているものの周濠の下底面と立上がりを確認できた。東側の立上がりは，境界のブロック塀の下部あたりと推定できるが確認できていない。なお，第223図での調査区とトレンチの配置は図幅の都合で南北の距離を省略してあるが，周濠の西辺は約20mを超すであろうことが確認でき，西辺の軸方向は真北に対し約37°西偏している。

周濠屈曲部の内側は隅丸方形状を呈すが，外側は直角に近い形になる。この隅部では礫の埋没は少な目で，濠の肩に近い埋土上層から土師器小皿が集中して出土した。

周濠埋土からは土師器土鍋・摺鉢・茶釜・小皿・青磁・白磁・石鍋片・鉄滓などが出土した。下層よりも上層出土資料が多く，殊に石鍋片の大半と鉄滓は上層から出土した。（小池）

土　器（図版96・97，第230・231図）

周濠は遺構の項で述べたように上・下二層に分けられ，遺物もまた上層と下層とでは，埋没年代を異にしている。

土師器

上層出土（第230図1～12，第231図19～23）

小　皿（1～7）口径7.9cm～9.5cm，器高1.1cm～1.8cmである。1～3・5・6の外底には板状圧痕がある。

杯（8～12）口径11.4cm～12.8cm，器高2.3cm～2.7

表8　周濠出土小皿・杯法量表

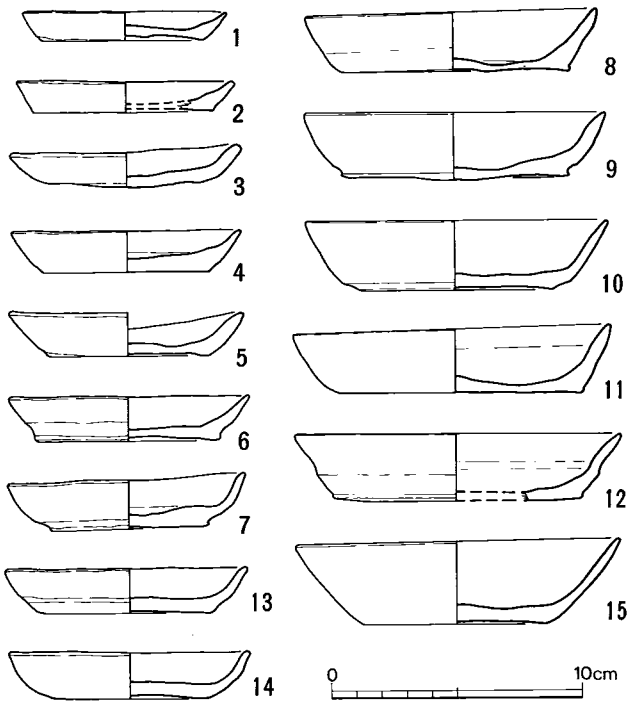
（単位：cm）

挿図番号	口径	器高	底径	内底ナデ	板状圧痕
1	7.9	1.1	6.3	○	○
2	8.4	1.2	7.0	○	○
3	8.8	1.4	5.9	○	○
4	9.0	1.7	6.4	○	
5	9.1	1.7	6.3	○	○
6	9.2	1.8	7.2	○	○
7	9.5	1.8	6.8	○	
8	11.4	2.3	9.1	○	?
9	11.8	2.6	9.0	○	○
10	12.0	2.7	7.5	○	
11	12.1	2.5	9.6	○	○
12	12.8	2.6	9.9	○	○
13	9.4	1.9	6.2	○	
14	9.6	1.9	6.0	○	
15	12.7	3.3	7.2	○	

cmである。9・11・12の外底に板状痕を伴う。

摺　鉢（19）片口の摺鉢で，6本単位の筋目を7ヵ所入れている。粘土紐を巻き上げて成形し，ヘラナデ調整をしている。内外面ともに火熱を受けている。特に，内面は焦げ付きが著しく，鍋として使用していることが判る。また筋目の摩滅も著しい。

土　鍋（20～22）20・21ともに体部中位に突帯状の段を有する。22は内耳を有するものである。小片からの復原であるので，口径は不正確である。20～22ともに胎土は非常に精良で，砂粒はほとんど含まない。



第 230 図　周濠出土土師器実測図①（1/3）

土　釜（23）粘土紐を巻き上げ，指押えで成形した後に体部は横方向に，口縁部外面は縦方向に刷毛目調整を行っている。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

下層出土（第230図13～15，第231図17・18）

小　皿（13・14）口径 9.4cm・9.6cm，器高 1.9cmである。

杯（15）口径12.7cm，器高 3.3cmである。1点だけの出土であるが，下層の埋没年代を考える上で重要な資料である。このような法量を有する例は，大宰府史跡第45次調査'S X1200新'出土杯にあり，共伴の木簡等から14世紀中頃に年代を求められている。

摺　鉢（17・18）小片からの復原図である。両者ともに5本単位の筋目を入れる。17の内面は焦げ付きがみられる。鍋としての用途が考えられる。

瓦質土器

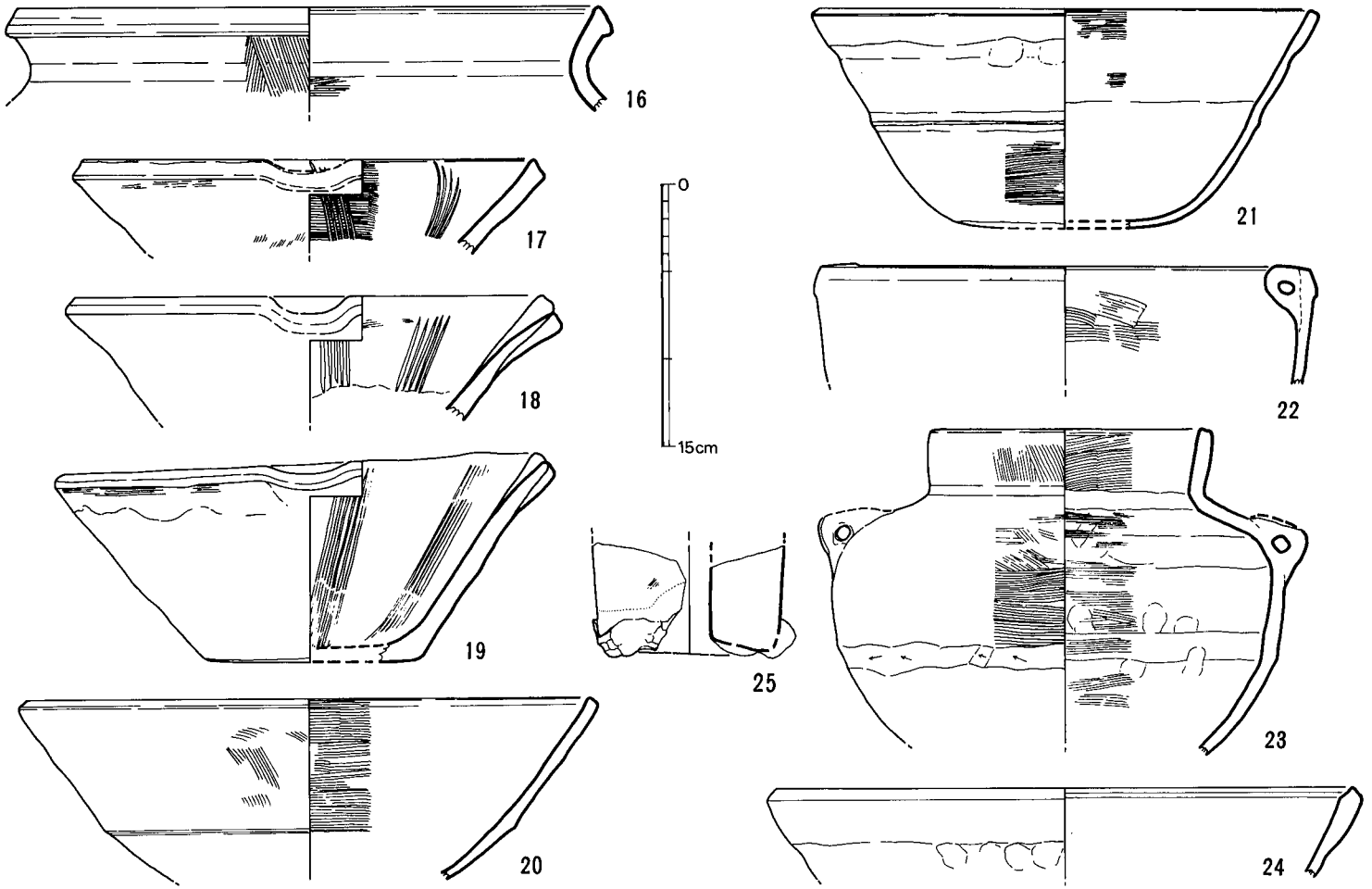
16は下層，24は上層からの出土。

甕（16）口縁端部が断面三角形を呈するもので，内外面ともに刷毛目調整を行っている。

摺　鉢（24）小片からの復原であるので，口径は不正確である。筋目は残存部分にはないが，同種の例から摺鉢になると考えられる。

フイゴの羽口

上層から2個出土している。25は先端部分で，鉄が融着している。胎土中に砂礫を多く含む。



第 231 図 周濠出土土師器実測図② (1/4)

陶磁器（図版96・97，第232図）

中国産・高麗産陶磁器，緑釉陶器が出土。

中国陶器

白　磁（1～4）

1・3・4は上層，2は下層から出土。

杯（1・3）1は口禿げを有するもので，この種のものは上・下両層から出土している。3は小杯で，淡黄白色の胎土に白化粧土を施し，淡黄色の釉をかけている。他に破片も出土しているが，上層からの出土である。

皿（4）　白色の胎に透明釉を施釉している。内外ともに小さな貫入を多く含む。外面残存部は回転ヘラ削り調整を行っている。焼成は非常に良好である。

椀（2）　灰白色の胎に透明釉をかけている。外底見込み部分には黄色の焦げ付きがある。11世紀末から12世紀代に多く見られるタイプのものである。

青　磁（5～12）

5～7は下層，他は上層からの出土。

皿（5）　暗灰色の胎に暗黄緑色の釉をかけている。内面見込み部分にヘラ状の工具と櫛状の工具で文様を描いている。体部外面は口縁部直下から回転ヘラ削りを行っている。外底は露胎で，淡黄色を呈する円形の焼台跡がある。

椀（6・9～12）　6は鏑蓮弁文を有するもので，灰白色の胎に緑色ガラス質の釉をかけている。内外ともに一面に貫入を伴う。9は小形の椀で，灰白色の胎に淡黄緑色の釉が厚くかけられている。内底見込み部分に花文のスタンプの一部が残っている。10は口縁部を外反させるタイプである。灰色の胎に淡黄緑色の釉を薄くかけている。内底見込み部分に花文のスタンプがある。高台内側は，手持ちにより横方向にヘラ削りをしている。体部外面は回転ヘラ削りをしている。11・12は口縁部を丸く肥厚させている。11は灰色の胎土，12は暗赤茶色の胎土である。釉は比較的薄い。両者とも口縁部直下から回転ヘラ削りを行っている。

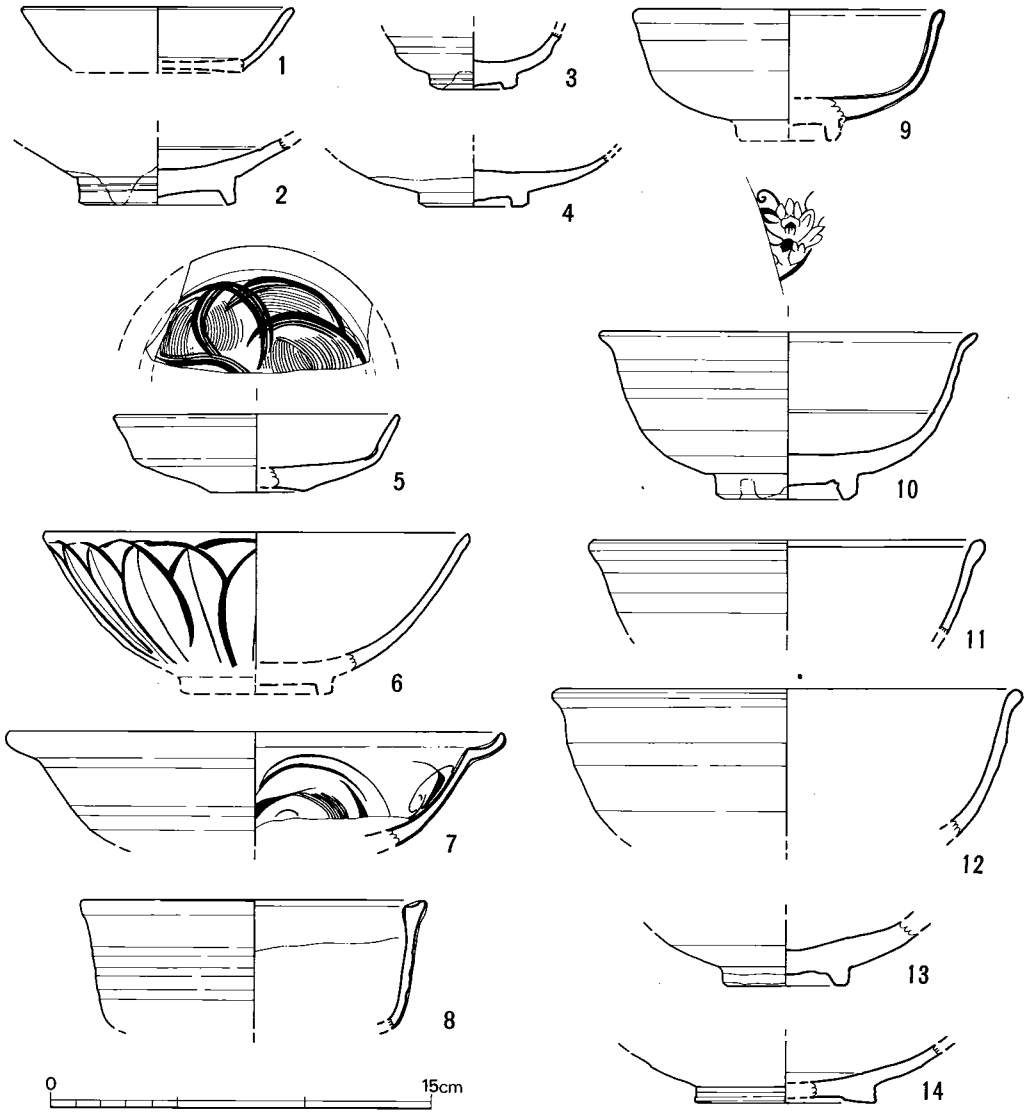
盤（7）　口径19.7cmを測る小形の盤である。灰白色の胎に淡黄緑色の釉がかけられている。内面に8本単位の櫛目と片切り彫りによる沈線により文様を描いている。

香　爐（8）　三足が付くタイプのものと考えられる。白色緻密な胎土に淡黄色の釉を厚くかけている。

高麗陶磁

椀の底部片が上層から1点出土。

椀（13）　暗灰色の胎土に淡青色ガラス質の釉を全面に施釉している。高台畳付部分の釉をカキ取り，白砂を敷いて焼成している。内底，外底には不明瞭であるが，指押えにより花文状の文様を描いている。高麗末期のものと考えられる。



第 232 図　周 濠 出 土 磁 器 実 測 図 (1/3)

緑釉陶器

椀の破片が1点上層から出土。

椀（14）　蛇ノ目高台を有する椀片である。暗灰色の胎に暗緑色の釉をかけている。内面に重ね焼きの跡がある。

以上が，周濠内から出土した土器，陶磁器である。上層から出土した陶磁器10・11・12は14世紀中頃を上限とするタイプのものであり，3・4は15世紀前後にその上限を求められること，また15世紀中頃以降と考えられるものは出土していないことから15世紀前半代に濠は埋没した

と考えられる。下層出土の陶磁器は12世紀から14世紀前半代までのものしか出土していない。前述した土師器の年代とうまく合致する。このことから下層は14世紀中頃に埋まったものと考えられる。（森田）

石　器（図版95－1・98－1，第228図4・5・14）

4は白雲母片岩を円盤状に打欠き周縁を研磨している。紡錘車製作中途の未製品であろう。重量は54.5ｇ。5は乳灰白色の頁岩製扁平磨製石斧頭部破片で重量27ｇ。14は白雲母片岩のやや扁平な礫を利用した敲石で，敲打による凹みが上下両面にある。半欠資料で重量47.8ｇを測る。これらの石器のうち4・5は時期的に先行するもので混入品であろう。

なお3・6・8は水田床土・床土下の包含層出土の石器で，3は床土から出土した厚さ 4.8㎜，重量 7.5 ｇの白雲母片岩紡錘車片，6は淡めの乳灰色を呈す頁岩製扁平片刃石斧片，8は北側トレンチ出土のアズキ色輝緑凝灰岩製石庖丁片。いずれも弥生時代のものであろう。

石　鍋（図版98－2）

破片資料ばかりで器形全体のわかる例はない。1点のみ（1）下層から出土した他は全て上層から出土した。1は滑石というよりむしろ白雲母片岩製の口縁部破片で約 3.5cmの器壁を有すが外面には幅1cm，長さ3cm程度の削り痕が明瞭に残り，内面にもはつった痕がみられる。

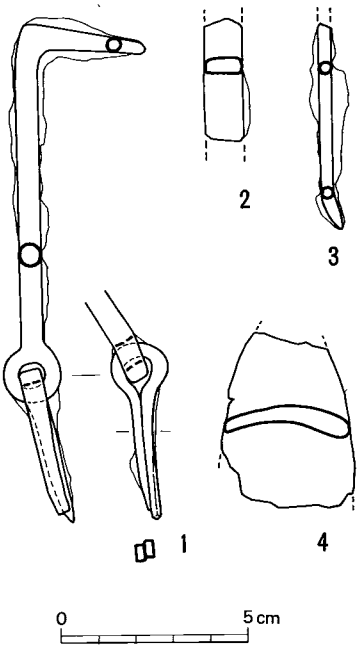
2は滑石製石鍋の口縁部破片だが破損面を研磨している。再生品としては完成していないようでもあり用途は不明。3～5は胴部・底部破片でいずれも滑石製。図版に掲載しなかった破片を含めても1の白雲母片岩製以外全て脂質感のある滑石製である。

鉄　器（図版95－3，第233図）

1は周濠底面，2が埋土下層，3・4は上層から出土した。1は輪に架ける鍵である。可動部は，断面略円形の棒状の材で，9cmの距離をもって基部は外径 1.5cmの輪，先端はＬ字形に3cm屈折した鍵となっている。基部の輪は固定部の輪によって連結されるが，固定部は幅4.5～ 5.5㎜，厚さ2～ 3.5㎜の板材の中程を輪にして折り曲げ，かしめて打ち込む形状になっている。

2～4は部分の破片のため用途は不明だが，2は幅1cm・厚さ 4.5㎜の板状，3は断面が一辺3㎜の隅丸方形になる棒状，4は厚さ4㎜前後の湾曲した板状のものである。3については尖る端部が折れ曲がる形状から釘かも知れない。

鉄　滓（図版98－3）



第 233 図　周濠出土鉄器実測図（1/2）

親指の先よりひとまわり大きくした位の大きさのものから拳大の大きさの鉄滓が約20点出土しているが，包含層出土資料2点の200ｇを除いた1,700ｇは全て周濠内上層からの出土資料である。

表面に気泡のめだたないものが若干あるもののほとんどが小さな気泡を生じているもので，比較的大きな塊になる例では藁の付着した痕跡が顕著にみとめられる。

3　小　　結

下西II－10地区の調査では，2つの主な成果を得た。ひとつは住居跡状遺構に木炭・焼土と共に発見された古墳時代土師器一括出土であり，もうひとつは周濠から14世紀中頃～15世紀前半のまとまった遺物が出土したことである。

住居跡状遺構の土師器は，第226図1の布留式甕と4の甑底部以外は破損度が少なく，完形の状態で出土した資料も多い。典型的な布留式の特徴を有した甕を含むものの，小型丸底壺・高杯杯部等の特徴は，三雲遺跡加賀石Ⅰ－23地区1号住居跡出土土器(註40)に対比するとかなり近いが，わずかに後出する要素も感じられる。一応4世紀末～5世紀初頭の年代幅におさまると考えるが，共伴する鼓形器台としては新しい例，底部に多孔を有す甑としては古い例になろう。

周濠内出土遺物では15世紀初頭前後の中国陶磁器の良好な資料を得たが，周濠下層出土遺物からみて，周濠の掘削は14世紀中頃を下降することはなく12世紀代まで溯りうる可能性もある。周濠を付帯施設とさせるような施設自体の確認はなしえなかったが，周濠の南辺・西辺を延長させると下西集落の南辺・西辺の外側に接しており，下西集落（下西Ⅰ－1～7・9～13・15～17）のうちの一部ないしは全部をとり囲んでいたとも推測される。

下西集落にはかって「安養寺」と称す施設があったと伝えられており，文久3年の青柳種信著『筑前國續風土記拾遺』では「安養寺址側に五輪塔有原田臣水崎加賀守と云し者の墓のよしいへり」と記されている。原田氏は，三雲の東約2kmの高祖城に居し13世紀後半の文永・弘安の役以降勢力を強め，建武中興以来は足利氏側に付いて怡土郡域を掌把する程の勢力を得るが，豊臣氏によって16世紀後半に滅される。原田氏と三雲が関わりを持つことは当然考えうることであり，下西集落の範囲もその一つとして組み込まれたことであろう(註41)。

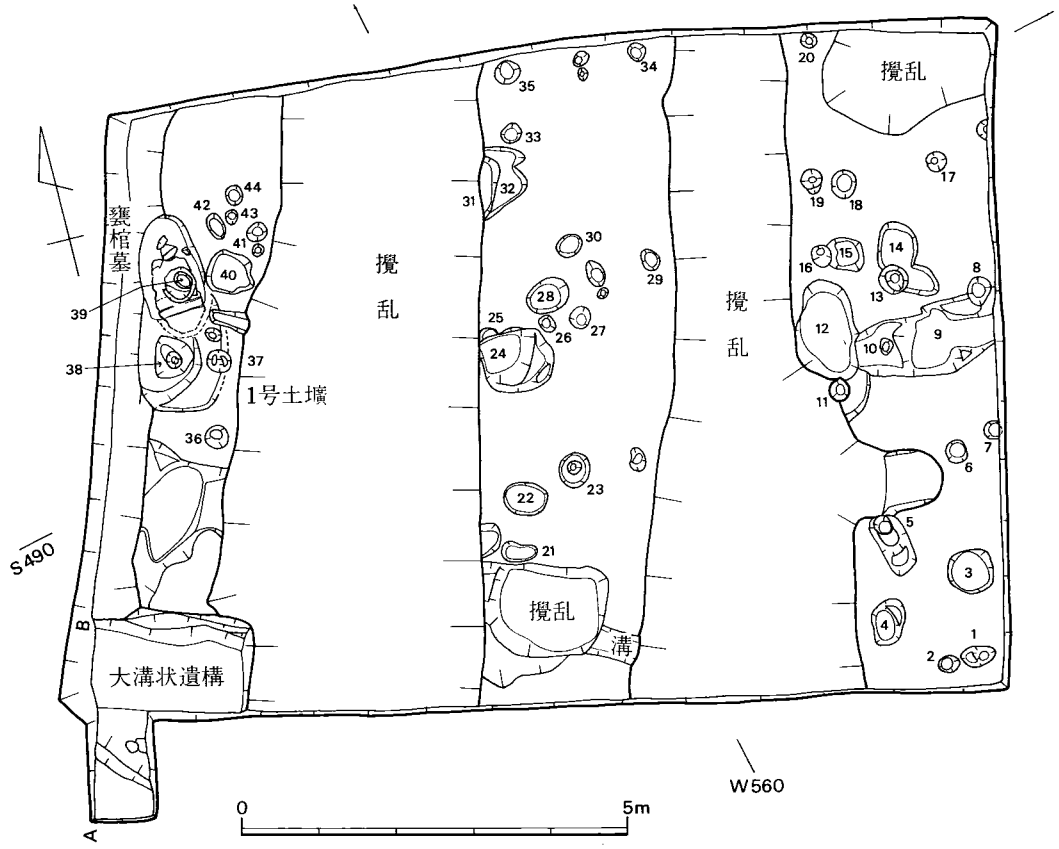
下西II－10の周濠内にみられる中国陶磁は，このような環境の中で将来されたものであり，濠内の礫層形成が建武中興前後，濠の埋没が応仁の乱に近い頃である点にも興味深いものがある。上層出土に集中する石鍋・鉄滓にも注目しなければなるまい。殊に鉄滓の多いこととフイゴの羽口の存在から至近の位置で鍛冶を行なっていたことが明らかである。中世の三雲遺跡の状況については，今後の資料の増加，周辺の調査の成果を俟ちたい。　　（小池）

第9節　屋敷地区の調査

1　はじめに

屋敷地区は，中川屋敷地区の西側，南小路地区の北側にあり，宅地が集中して三雲集落の一部を構成し，西端部に相当する。西側は瑞梅寺川氾濫原の井の川地区で屋敷地区とは高低差がある。この地区は，圃場整備対象区域も盛土設計であったので，道路用地等の立ち合い調査以外の文化財調査は実施していなかった。しかし，九州大学所蔵銅戈溶笵の出土地と伝えられる「屋敷田」が当該地区である可能性が高く，注意を要する地区でもある。

屋敷Ⅰ地区のほぼ中央にあたるⅠ－10は，宅地を畑として利用されていた部分に個人住宅が



第234図　屋敷Ⅰ—10遺構配置図(1/100)

屋　敷

建築されることになったため，1980年５月１日より事前発掘調査を実施した。

調査は柳田康雄と小池史哲が担当し，新開誉之が参加した。

2　Ⅰ－10の調査

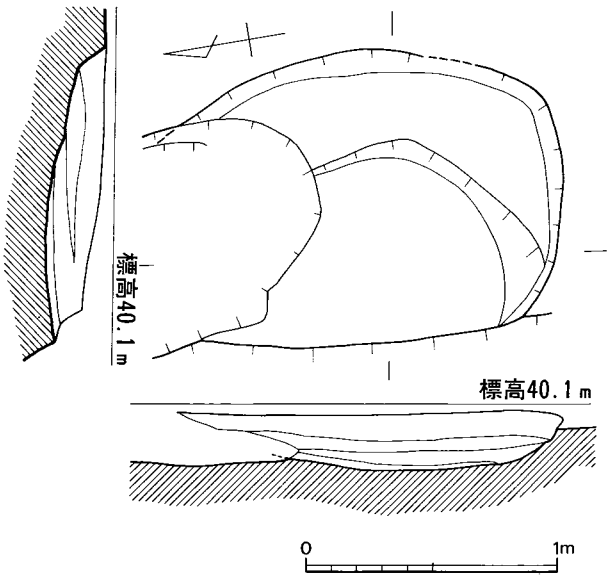
住宅予定部分にあたる北半分12×10ｍの範囲を調査区として発掘したが，近世迄家屋が建っており，また密橘栽培に利用されて深い条溝が掘削されていたので攪乱が激しく，排土を置いた南半分も同様と思われたので北半分の調査のみで終了した。

遺構としては，縄文時代の土壙，弥生時代の甕棺墓・大溝状遺構と，柱穴様ピットなどが検出された。（図版99－１・２）

(1)　縄文時代の遺構と遺物

１号土壙（図版99－３，第235図）

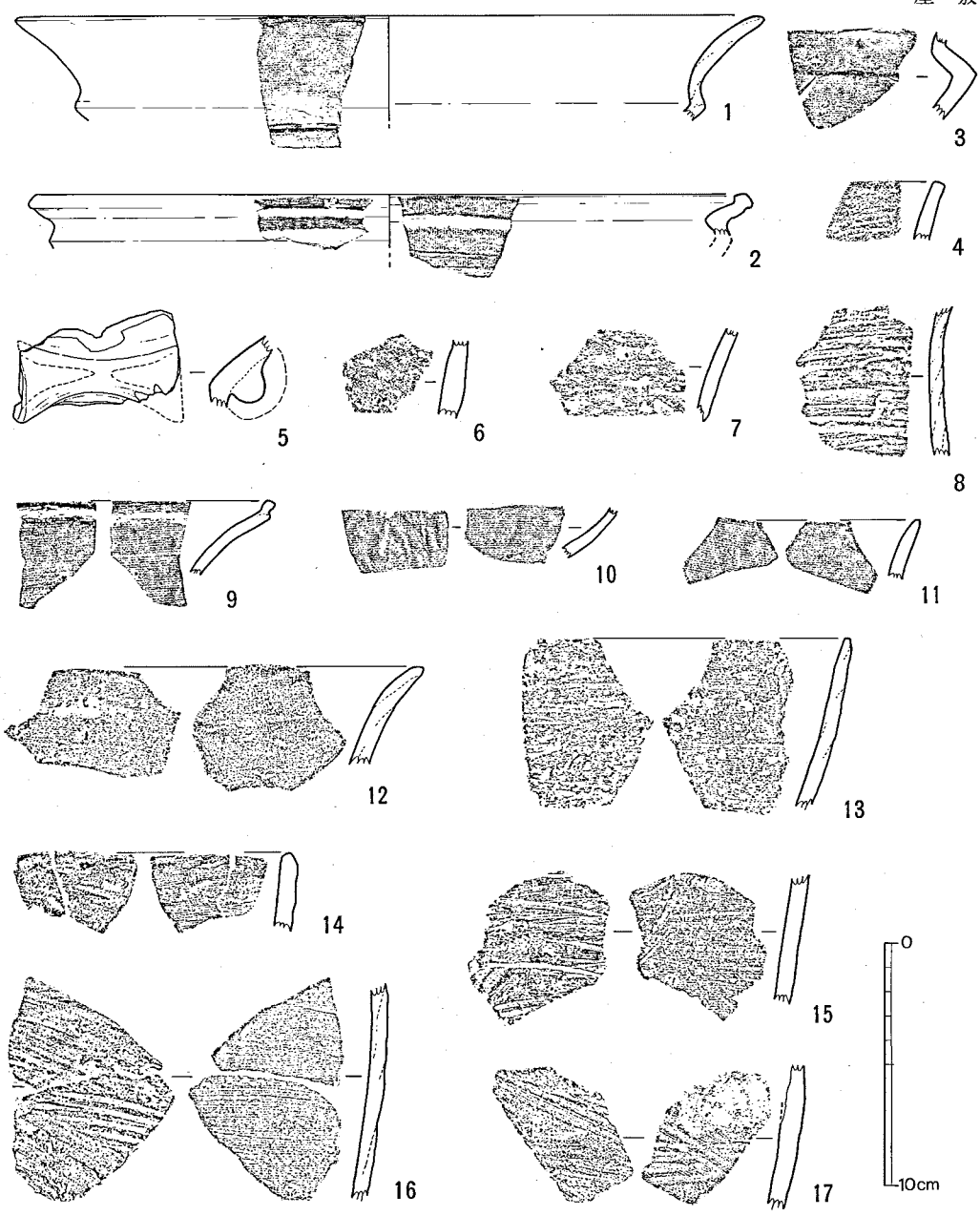
調査区西北部に位置し，甕棺墓墓壙と一部重複する。地山である黄褐色砂質粘性土より茶色っぽい色調の粘性土が埋土となっているが，北側を甕棺墓墓壙，西側を攪乱溝によって切られており，現存値では長径 1.5m，短径 1.1ｍの不整形プランを呈し，約20cmの深さを有すが土壙内の西側は約10cm浅くなっている。



第 235 図　１号土壙実測図（1/30）

遺　物（図版101－１・２，第236・237図）

縄文土器（第 236 図）　縄文土器片は，１号土壙内とそれを切る甕棺墓墓壙内及び攪乱溝などから出土している。このうち口縁部破片と調整手法のわかる破片を図示するが，１～５は攪乱溝，６～８は甕棺墓墓壙，９～17は１号土壙からの出土資料である。１～３・９～11は精製磨研の浅鉢形土器で，１は内湾した頸部が長めに開き，口縁部が屈折せずにおさまる器形，２は頸部・口縁部共に短く僅かに屈折する口縁部の外面に浅い沈線・内面に段状の凹線を形成する器形，９は外反した口縁端部が鈍く屈折し，外面に１条の沈線を有すもの。11は胴部から内湾してそのまま口縁部になるもの。３・10は胴部破片。４～８・12～17は粗製土器で，12の口縁部は外反するが13・14は直口縁である。５は頸部破片で蝶ネクタイ状の貼付けをもつ。４・

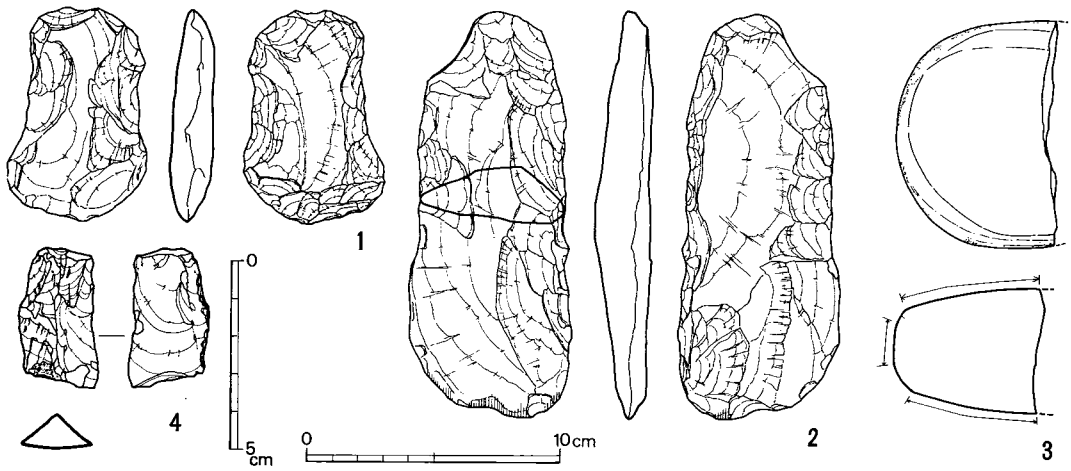


第 236 図 I — 10 出 土 縄 文 土 器 拓 影 (1/3)

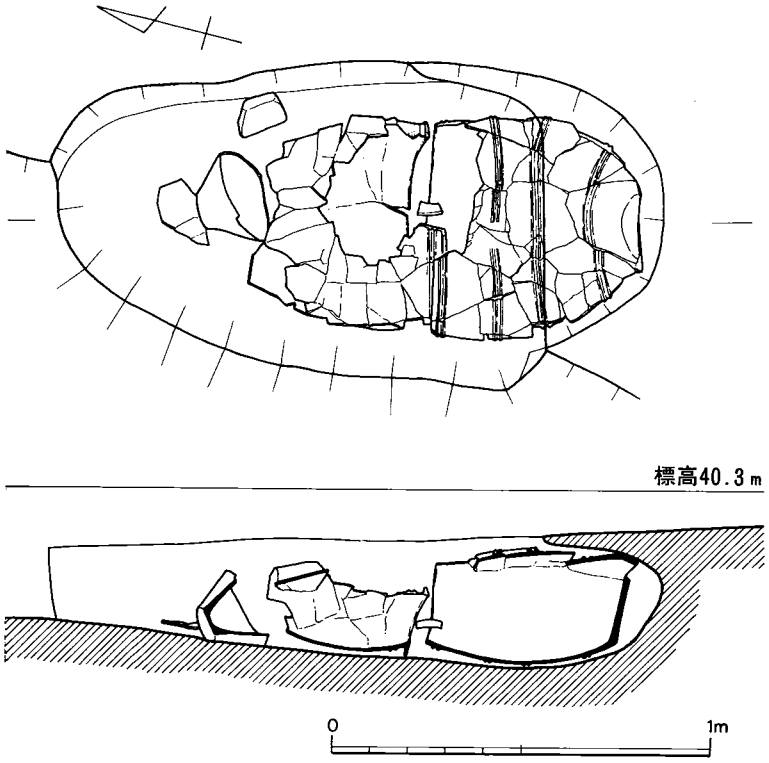
8・13・15は外面二枚貝条痕・内面ナデ，7・14は外面カキナデ・内面ナデ，16は外面二枚貝条痕とカキナデ・内面板ナデ，6・12は内外面共ナデ，17は内外面共ヘナタリ条痕である。粗製土器のほとんどは器壁に気泡が多くみられるものの，12・17は砂粒を多く含み，17では気泡はみられない。

これらの土器では，17が後期中葉頃である外は，１・11に新しい要素をもちながらも，おおむね晩期前半の新しい段階を考えうる。

石　器（第237図）　打製石斧（１・２）・すり石（３）・削器（４）がある。１は調査区の北東に隣接する畑の表採資料，２・４は上層，３は１号土壙を切って重複するP38から出土した。打製石斧は玄武岩製の横長剝片を利用した扁平打製石斧で，１ではみられないが，２の刃部には使用による擦痕がみとめられ，重量は103ｇ・271ｇを測る。すり石は半欠資料で現存値420ｇを測る花崗岩製。削器は不純物を多く含む黒曜石の縦長剝片の側縁を刃部



第 237 図　屋敷Ⅰ—10出土石器実測図（1/3，1/2）



第 238 図　甕棺墓実測図（1/20）

にしており，重量7.3ｇ。これらの石器には土器と同じ時期を与えてよいであろう。

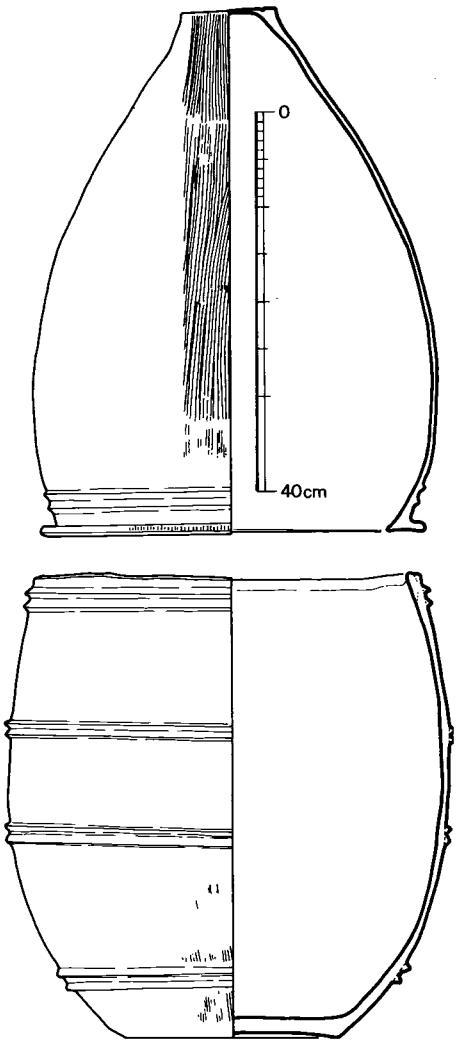
(2)　甕棺墓（図版100－1・2，第238図）

調査区西北部に1基のみ検出できたが，調査区の大半を占める攪乱溝内に大形土器片が混じっているので数基あった可能性もある。辛うじて残っていた甕棺墓は，現状で長径 1.3m・短径0.8m・深さ0.3mの不整楕円形の墓壙の南側に横壙を穿って甕棺を挿入している。主軸方向N14°20′Wを示し，土圧で天井部がかなり下って甕棺は拉げた形状になるため挿入角度もはっきりしないが，墓壙底の傾斜は約6°を有している。但し，挿入された甕を復原してみると約11°の傾斜角度を有していた可能性もある。甕棺は下甕の口縁部を打欠き，口径のやや下まわる上甕を接口させて蓋とするが，接口部は粘土を用いて目張りしていたようで墓壙底には粘土がよく残っている。

甕棺内では下甕の底部から約20cm手前の最も低くなる部分に歯冠が幾つか残り，骨片が若干みられたので，頭位は南側の下甕内にあったと考えられる。

甕　棺（図版101－3，第239図）　上甕は，器高55.2cm・口径40.8cm・口縁内径32.6cm・胴部最大径43cm・底径10.3cmの甕形土器で，口縁部は逆Ｌ字形を呈し，口縁下に2条の三角凸帯をめぐらしている。胴部のふくらみはやや上位で，底部は細くしまり薄い平底をなしている。器外面は縦位のハケ目調整だが，器内面は全体にナデられ，外面の口縁部及び口縁部下の凸帯の位置はヨコナデされている。また口縁部外面には4～5mm間隔に刻み目が施されている。胎土に花崗岩質の砂粒を含み，淡褐色～暗褐色の焼成である。

下甕は，口頸部を打欠かれているが，残存器高48.8cm・開口部径40.7cm・胴部最大径46.5cm



第 239 図　甕棺実測図（1/8）

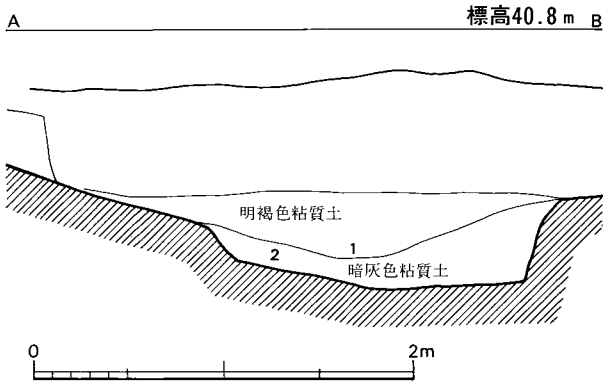
・底径22.4cmの樽形土器である。胴部最大径位を挟んで上下に約10cmの間隔をもって2条単位の三角凸帯がめぐらされて，両者の凸帯上の径は約47.3cmを測る。更に両者の凸帯から14～15cmの位置にそれぞれ2条単位の凸帯がめぐらされており，下位の凸帯は底部から約5cm上の位置，上位のそれは打欠かれた部分の直下にあたる。なお，打欠かれた部分は，胴部のふくらみの曲線から直線的に変化し，器壁が厚くなり，器内面では立ち上り気味になることからみて頸部であろう。底部は広くややあげ底になっている。器面調整は縦位のハケ目調整のあと凸帯が貼付けられ，凸帯間は丁寧なナデないしはヘラ磨研でハケ目を消しているが，胴下位ではやや雑でハケ目が痕跡として残るところもある。内面は全体にナデられる。胎土に花崗岩質の砂粒・金雲母を含み，やや良好な焼成で淡褐色を呈す。なお，外面には黒く塗った痕跡をみとめることができる。

この甕棺は，下甕の樽形土器が口縁部を打欠かれており明確な時期を決し難いが，上甕の凸帯と下甕の凸帯が似ており，上甕の甕形土器は中期前半におさまる。

(3)　大溝状遺構（図版100－3，第240図）

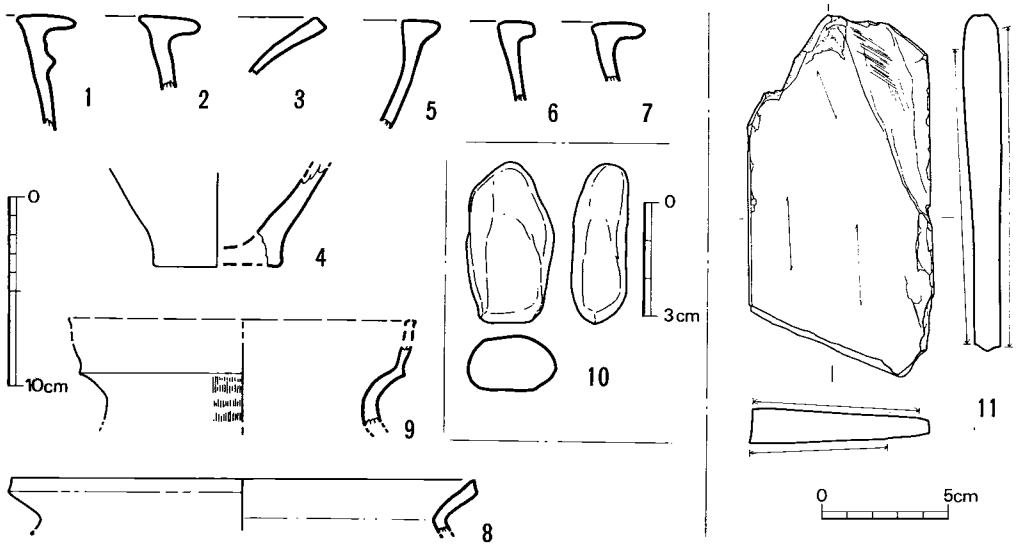
調査区西南隅に検出された遺構で，北壁と底面が確認でき，東西方向に流路をもつ溝と思われたので，全景写真撮影後，南側に幅1mのトレンチを設定して溝の幅を確認した。東西方向には約2mを検出したのみで，それより先は深い攪乱溝で礫が多量に填っているため完全に掘り下げていない。なお，約3m東の攪乱を被っていない部分では溝の肩が検出されなかったので南側調査区域外に肩があると思われる。

遺構の上縁では約2.5mの幅を有し，約0.5mの深さで底に達すが，北壁の急傾斜な形状に比し，南壁はゆるやかで，南壁では幅1.3mになる部分からやや傾斜が急になる程度である。埋土の上層には近世陶磁器片・ガラス片等を含むが，下層は弥生時代中期の土器片・柱状片刃石斧小片を含んでおり，底面の高さでは東から西へ流路をとっていたと考えられる。



第240図　大溝状遺構断面土層図（1/40）

土　器（第241図1～4）　下層出土土器の大半は胴部小破片で，僅かな口縁部破片では，逆L字状口縁（1）と，ややT字口縁に近い逆L字状口縁（2）の甕形土器，及び丹塗磨研土器の広口壺（3）がある。4は底部破片である。これらの土器は中期中葉頃ないしは一部後半にか



第 241 図　大溝状遺構等出土土器（1/4)・土製品（1/2)・石器（1/3）実測図

かる時期が考えられる。

(4)　その他の遺構と遺物

50余基の柱穴様ピットや土壙状の掘り込みがあるものの，スレート片やセルロイド片を含んでいたりするものを除いても，縄文土器～近世陶器を含んでいる。弥生中期後半を中心とした遺物を含むピットはＰ６～Ｐ８・Ｐ15・Ｐ18・Ｐ24・Ｐ28・Ｐ32～Ｐ34，弥生終末～古墳時代前期の遺物を含むピットはＰ１・Ｐ３～Ｐ５・Ｐ12・Ｐ14・Ｐ44，古墳時代後期～中世の遺物を含むピットはＰ２・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ21・Ｐ31・Ｐ35・Ｐ38がある。調査区東南部では弥生終末～古墳時代前期の包含層が僅かにあり，ピットもこの時期のものが集中し，南端部の小溝からもこの時期の土器片が出土している。これらの柱穴様ピットが掘立柱建物に伴うか否かについては攪乱部分が多いため判別し難い。

遺　物（第 241 図）　包含層・柱穴様ピット等から出土した遺物のうち図示しうる土器片・土製品・石器は極めて少ない。５は甕棺墓墓壙内出土の中期前半鉢形土器，６はＰ24出土，７はＰ15出土の逆Ｌ字状口縁丹塗り甕形土器で中期後半，８はＰ14出土の甕形土器口縁部破片で外反する口縁端部がつまみ上げたように上方に伸び，口唇部外面が浅く凹む。９は二重口縁壺形土器の破片で頸部をハケ目調整のあと全体にヨコナデ調整している。古墳時代初頭期のものであろう。10は長さ 4.2 cm・幅 2.3 cm・厚さ 1.5 cm・重量13.3 g を測る用途不明な土製品。11は包含層出土の粘板岩製砥石で両側面には切断した痕跡が残り，重量は 210 g を測る。

3　小　　結

屋敷地区は，三雲遺跡群でも西端部に位置するが，出土縄文土器は三雲遺跡東端部の仲田Ⅰ－14地区出土土器や石橋・サキゾノ地区出土土器の新しい段階の一群（註42）に対比しうるもので，同様に縄文時代晩期前半（註43）に生活の痕跡がみとめられることになる。当時から生活地として適当な条件が整っていたと解釈されよう。弥生中期前半には墓地としての利用も加わってくる。ただ，調査したⅠ－10地区では攪乱が激しいこともあり，弥生中期後半・終末～古墳時代前期にも痕跡をみとめるが，利用形態については詳らかではない。なお，伝屋敷田出土の銅戈溶笵は広形銅戈のものであり，溶笵に見合う後期後半の遺構・遺物がみられなかったので，その出自をⅠ－10地区に求めるには無理がある。　　（小池）

註1　西田弘・鈴木博司・金関恕「新開古墳」（『滋賀県史跡調査報告』12，1961）

2　森貞次郎「弥生文化の発展と地域性―九州―」（『日本の考古学』III，1966）

小田富士雄『狐塚遺跡』（筑後市教育委員会，1970）

小田富士雄「弥生土器―九州6―」（『考古学ジャーナル』84，1973）

3　下條信行『宮の前遺跡（A～D地点）』（福岡県労働者住宅生活協同組合，1971）

4　柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982）

5　武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」（『古文化談叢』5，1978）

6　井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』7，1978）

7　註4に同じ。また，福岡市教育委員会の折尾学氏と常松幹雄氏に出土品の御教示を受けた。

8　貝原益軒『筑前國續風土記』（「福岡県史資料」続四巻，1944）

9　註4に同じ。

10　中国科学院考古研究所洛陽発掘隊「洛陽西郊漢墓発掘報告」（『考古学報』第2期，1963）

11　註4に同じ。

12　註3に同じ。

13　高倉洋彰「鏡」（『三世紀の考古学』中巻，1981）

14　柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16，1977）
この土器については倉敷考古館藤田憲司氏より，直接御教示頂いた。

15　註14に同じ。

16　柳田純孝・柳沢一男「小笹遺跡第2次発掘調査報告」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』34，1975）

17　間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」（『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会，1974）

18　註14に同じ。

19　水野清一氏の表採資料で，京都大学岡内三眞氏の御厚意で実現する機会をえ，御教示頂いた。

20　現在，整理中であるが東京大学上野佳也氏の御厚意により，資料を実見させて頂き，資料実見に際しては安西正人氏に便宜をはかって頂いた。

21　橋口達也・西健一郎・佐田茂「浅茅湾西地区の調査」（『対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―』長崎県文化財調査報告書　17，1974）

22　原田大六監修『前原町文化財地名表』（昭和47年調査，前原町教育委員会）

23　末永雅雄『古墳の航空大観』（学生社，1975）

24　石野博信・関川尚功『纒向』（桜井市教育委員会，1976）

25　註24に同じ。

26　柳田康雄編『福岡県城山遺跡群（図版篇）』（夜須町教育委員会，1969）

27　甘木市教育委員会「神蔵古墳」（『甘木市文化財調査報告』3，1978）

柳田康雄「第二編 原始」（『甘木市史』上巻，1981）

28 大分県教育委員会「宇佐市・川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報」Ⅳ，1981）

29 註23に同じ。

30 中村春寿・上田宏範「桜井茶臼山古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』19，1961）

31 註4に同じ。

32 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」（『考古学雑誌』58－3，1972）

33 森貞次郎・小田富士雄他「福岡市老司古墳調査概報」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』5，1969）

34 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」（『考古学研究』51，1967）

35 井上裕弘編「春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡辻田地区墓地群の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9 福岡県教育委員会，1978）

36 川述昭人編「福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXV，福岡県教育委員会，1978）

37 横山邦継編「板付周辺遺跡調査報告Ⅰ」（『福岡市埋蔵文化財報告書』29，1974）

38 飛高憲雄他「蒲田遺跡」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』33，1975）

39 馬田弘稔「弥生時代の土器祭祀について」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982）

40 柳田康雄他「加賀石地区の調査」（『三雲遺跡』Ⅰ，福岡県文化財調査報告書58，1980）

41 南方約200ｍに細々禮石神社があり，『筑前國續風土記』等によると，祭神が高祖大明神の母と伝えられ，社の祭日に高祖社から神輿の御幸があったとされている例なども無関係ではあるまい。

42 小池史哲「石橋・サキゾノ地区の縄文時代遺構と遺物」（『三雲遺跡』Ⅱ，福岡県文化財調査報告書60，1981）

43 小池史哲「糸島の縄文文化」（『三雲遺跡』Ⅱ）では，夜臼式土器出土と紹介していたが，新しい要素をもつ土器片も晩期後半～末に下げるだけの根拠はないので晩期前半に訂正する。

図　　版

三雲遺跡中心部と端山古墳・築山古墳（1/4.000）（昭和38年撮影）

図版 2

1

2

1　サキゾノⅠ—1　1～4号住居跡　　2　1～5号住居跡（完掘後）

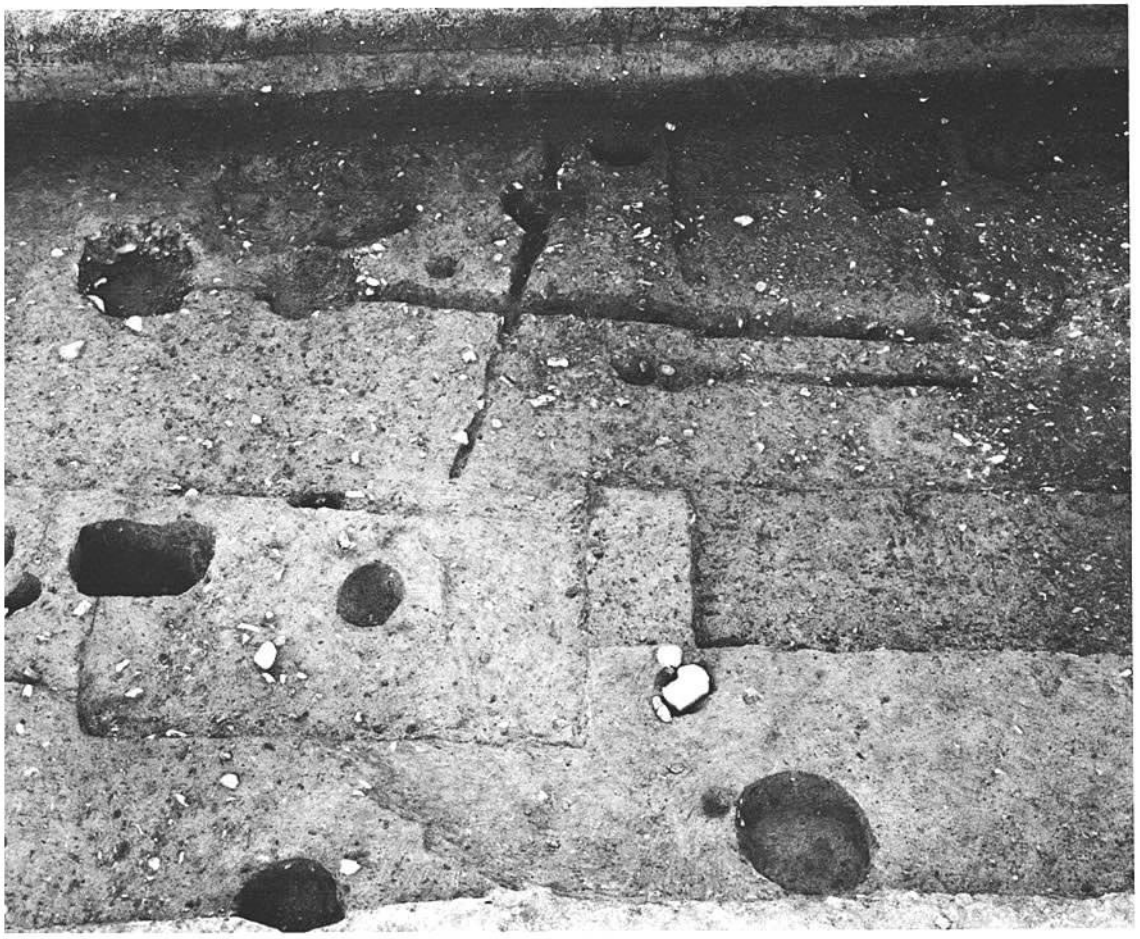
1

2

1　サキゾノⅠ－1　1号住居跡　　2　2・3号住居跡

図版 4

1



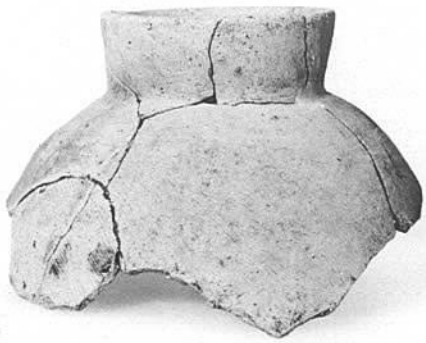
2

1　サキゾノⅠ－1　4号住居跡　　2　5号住居跡

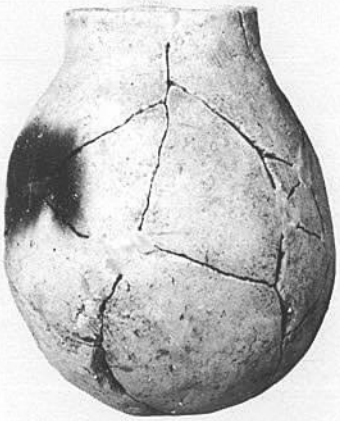
サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器

6

8

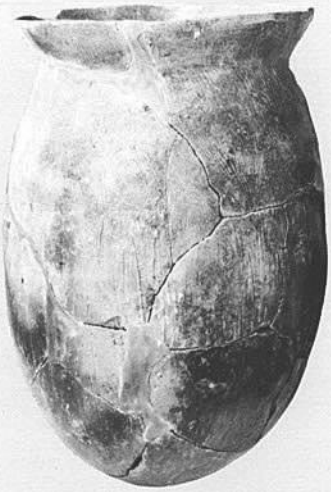


11



9

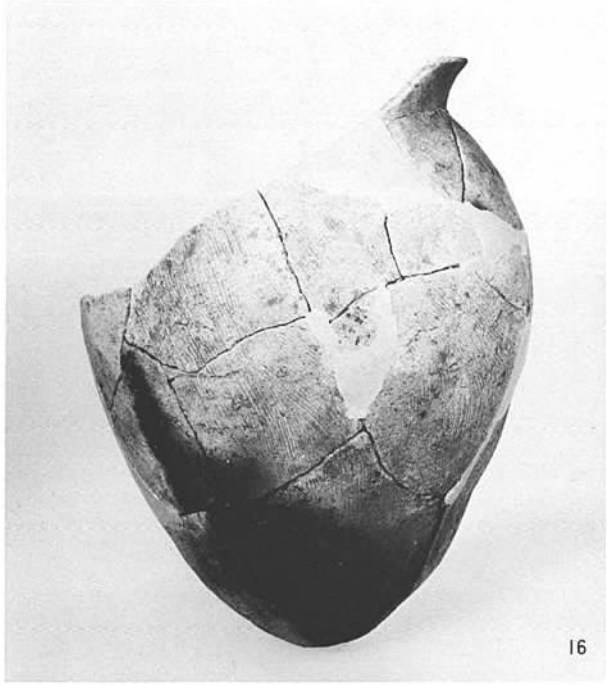
12



15

13

サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器


16

17

19

18

21

20

22

サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器

25

26

27

28

29

30

32

37

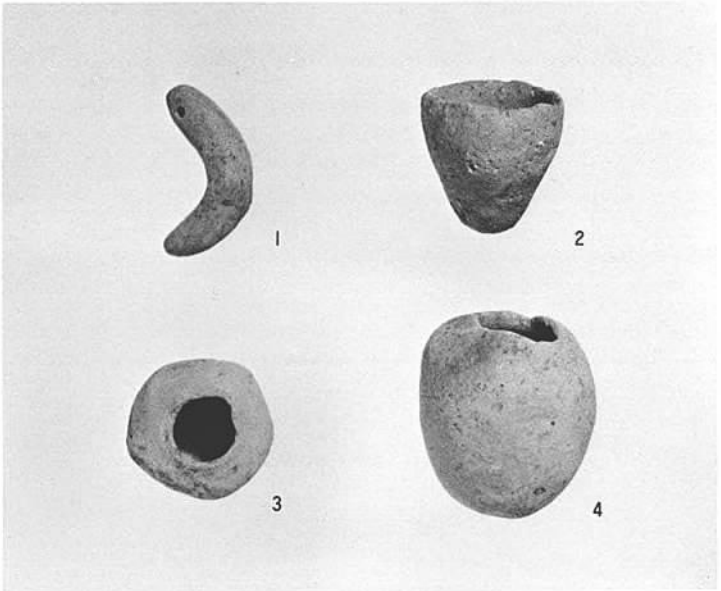
40

38

41

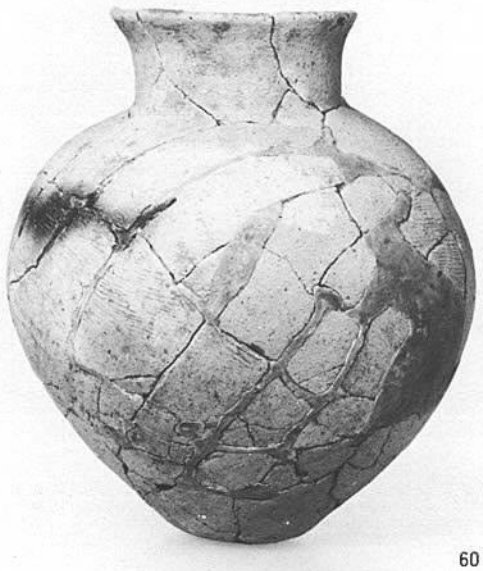
42

サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器



サキゾノⅠ－1　1号住居跡出土土器・土製品

58


60

62

61

65

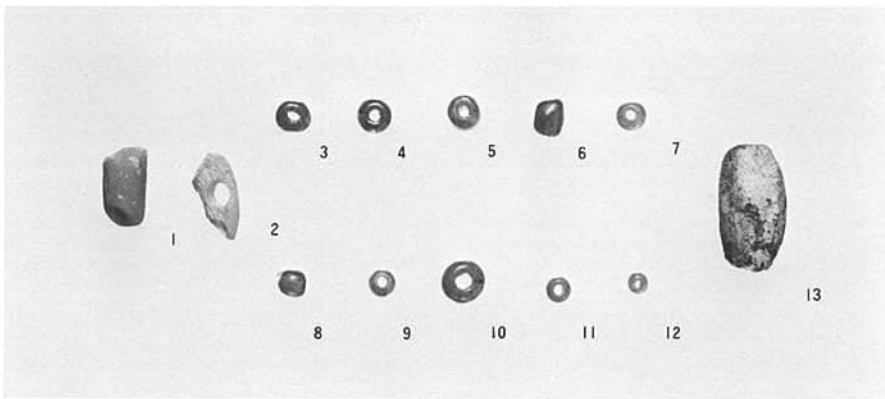
66

68

71

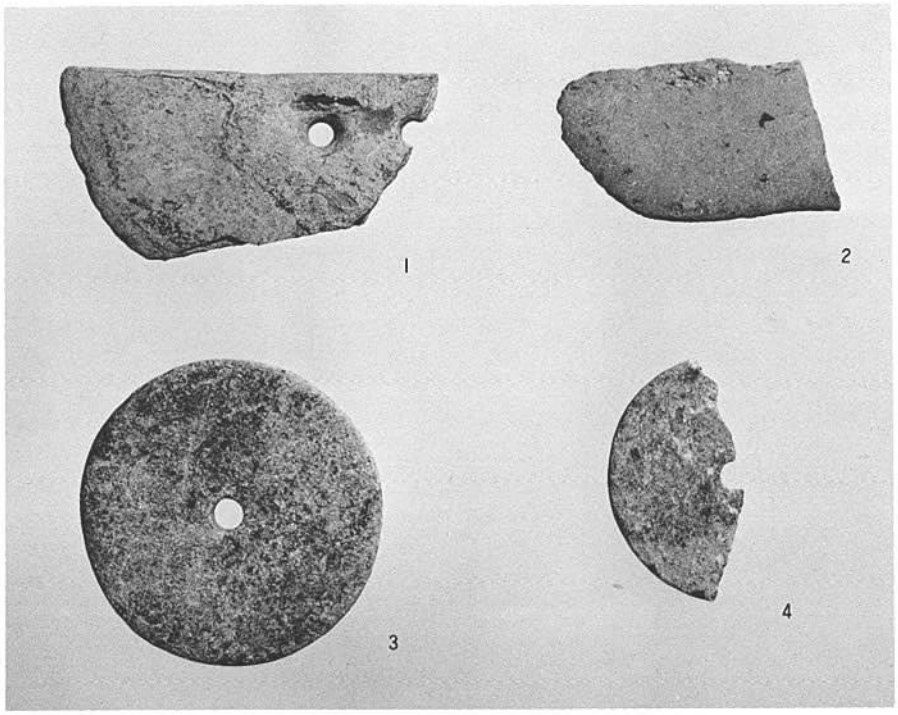
サキゾノⅠ－1　2号住居跡出土土器

1　サキゾノⅠ－1　2～5号住居跡・住居外出土土器



2　サキゾノⅠ－1・7　出土玉類

1



2

1　サキゾノⅠ－1　出土鉄器　　2　Ⅰ－1　出土石器

1　サキゾノⅠ－7　全景（東から）

2　1・2号住居跡

1

2

1　サキゾノⅠ－7　2号住居跡　　2　3号住居跡

1

2

3

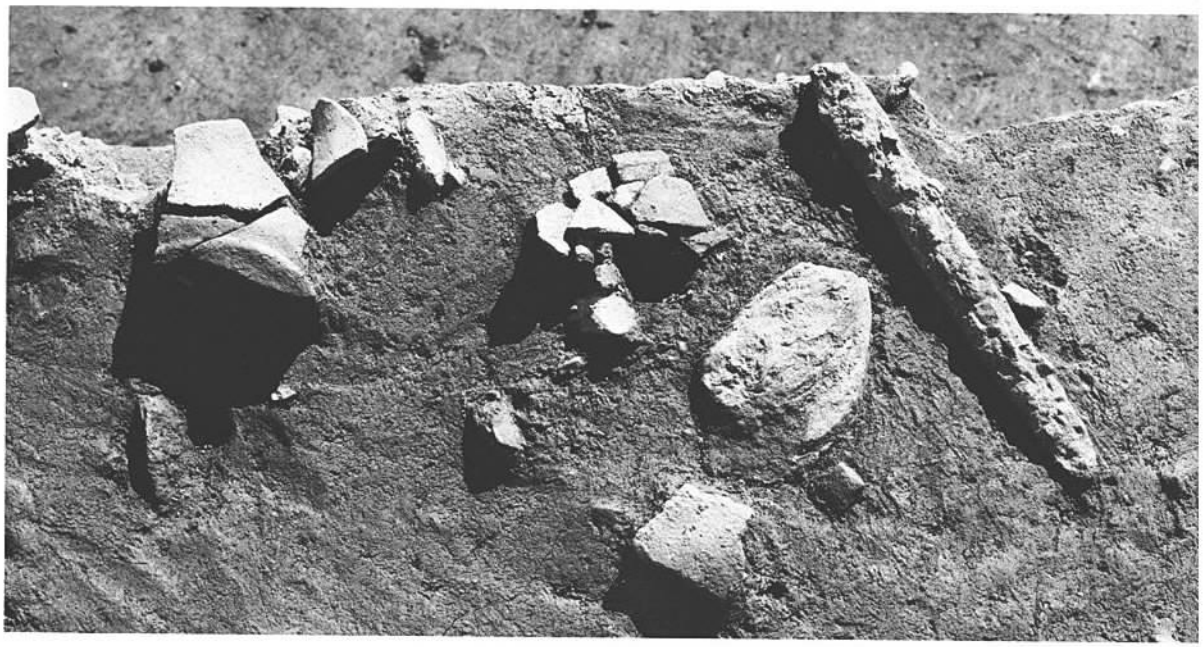
1　サキゾノⅠ－7
　　4～6号住居跡

2　7号住居跡

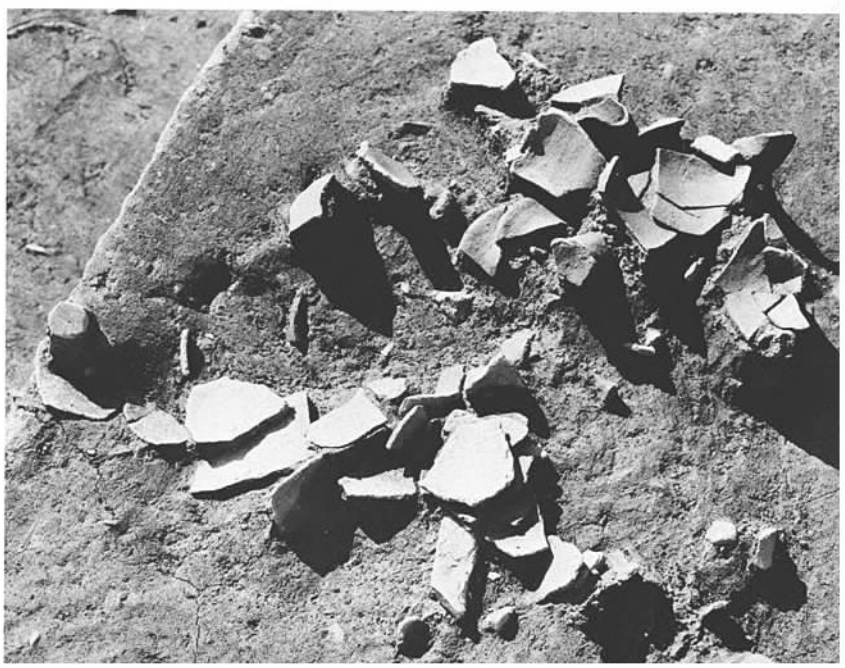
3　P10付近遺構

1　サキゾノⅠ－7　土器溜　　2　壺棺墓　　3　柱穴群（東から）

1



2



3

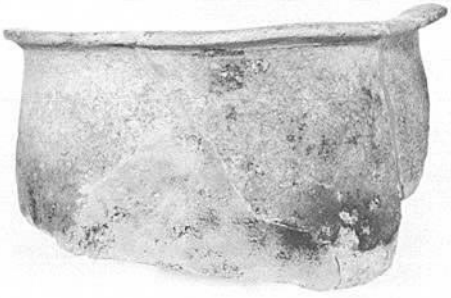
1　サキゾノⅠ－7
　　古墳時代祭祀

2　鉄剣出土状態

3　滑石製品と土器
　　出土状態

3

8


13

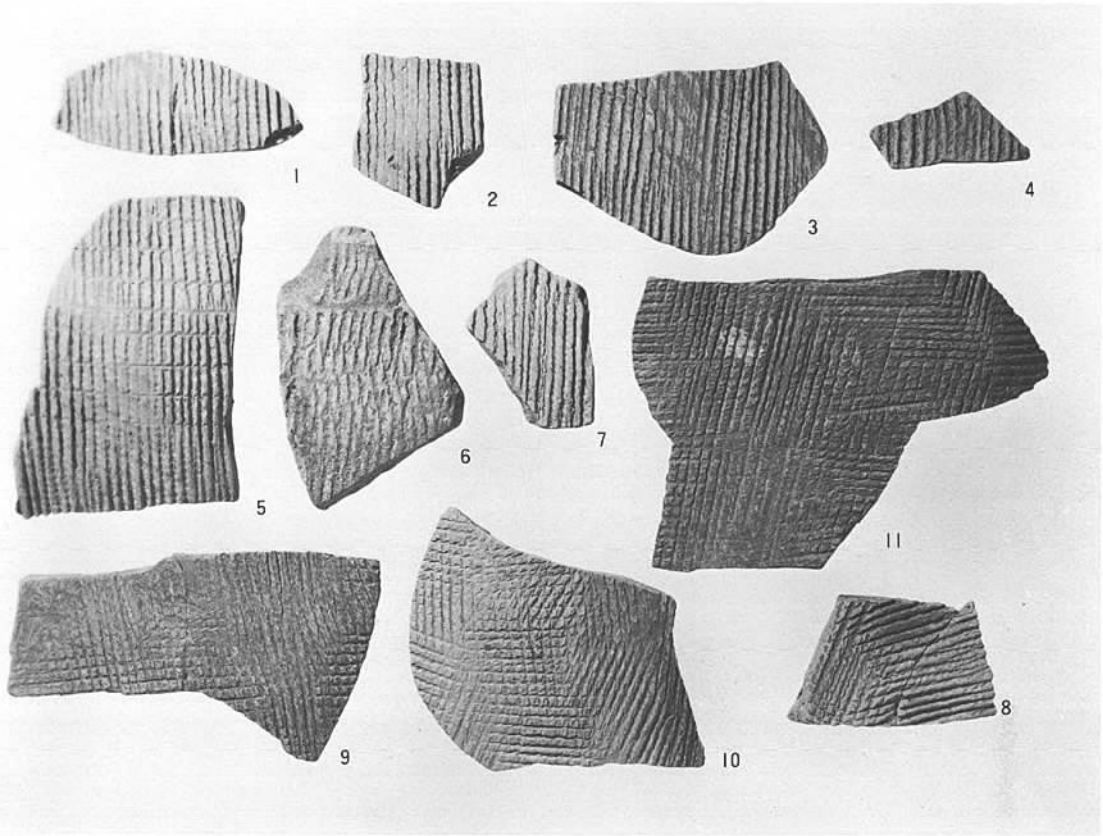
24

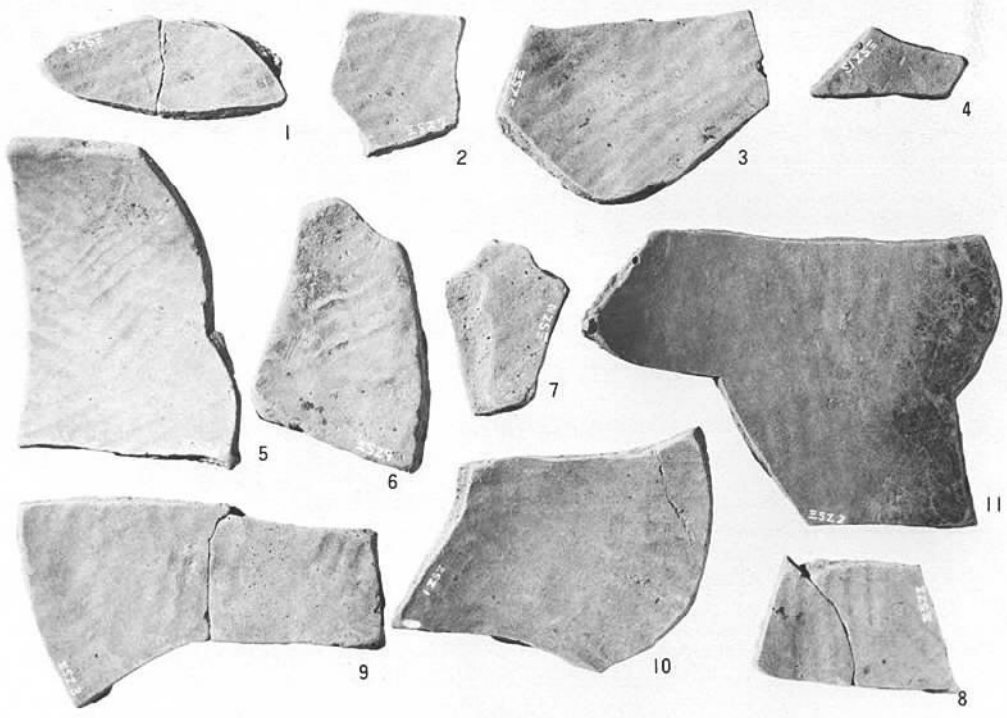
15

21

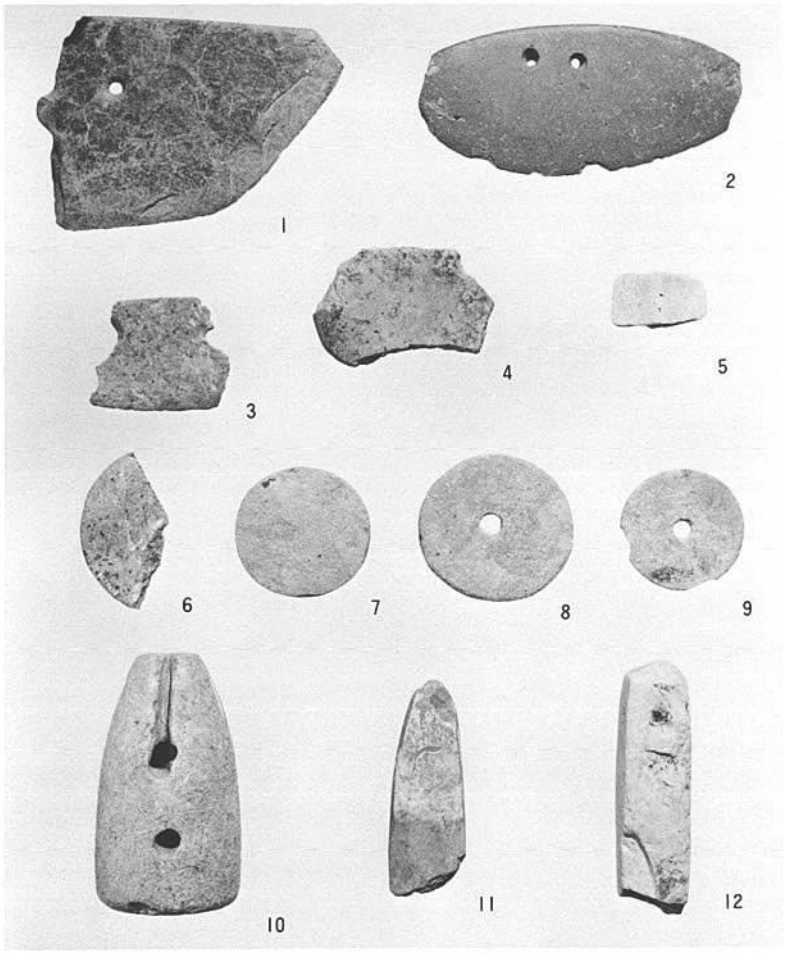
22

サキゾノⅠ－7　土器溜出土土器・壺棺

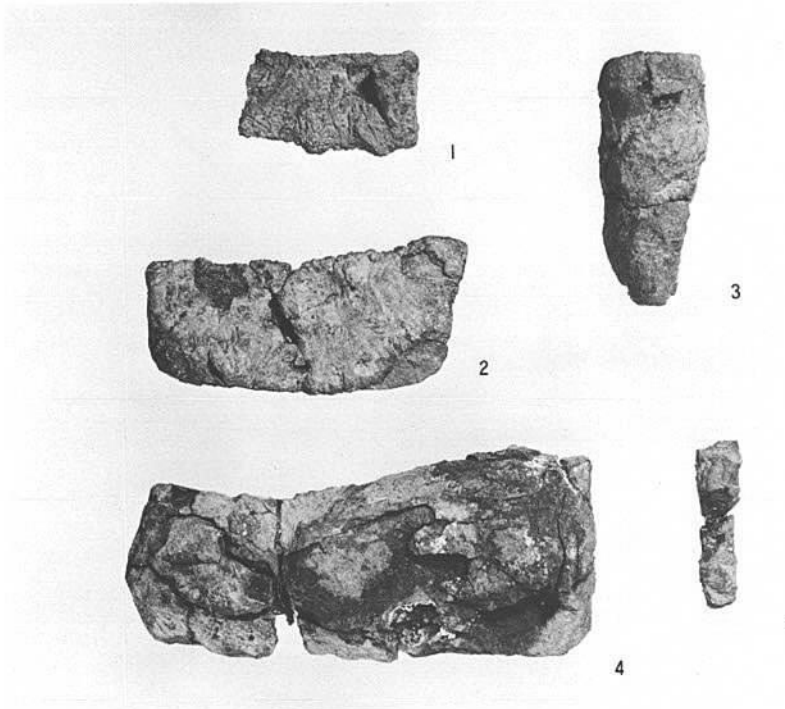




サキゾノⅠ－7　出土陶質土器（上　外面，下　内面）

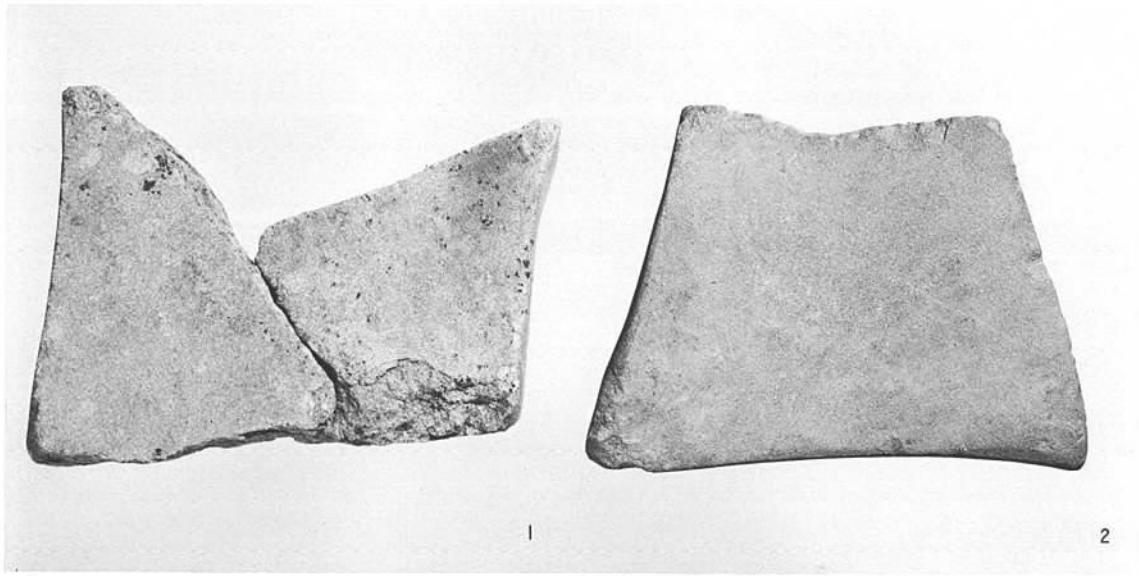


1

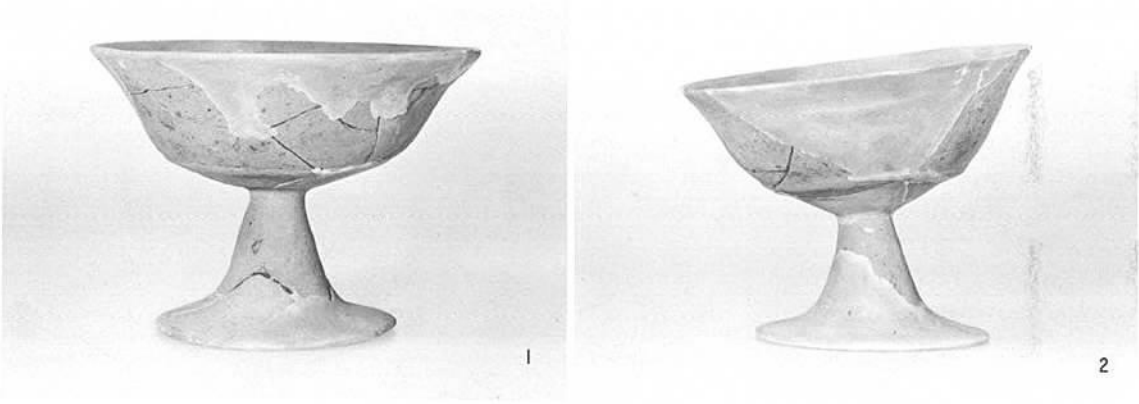


2

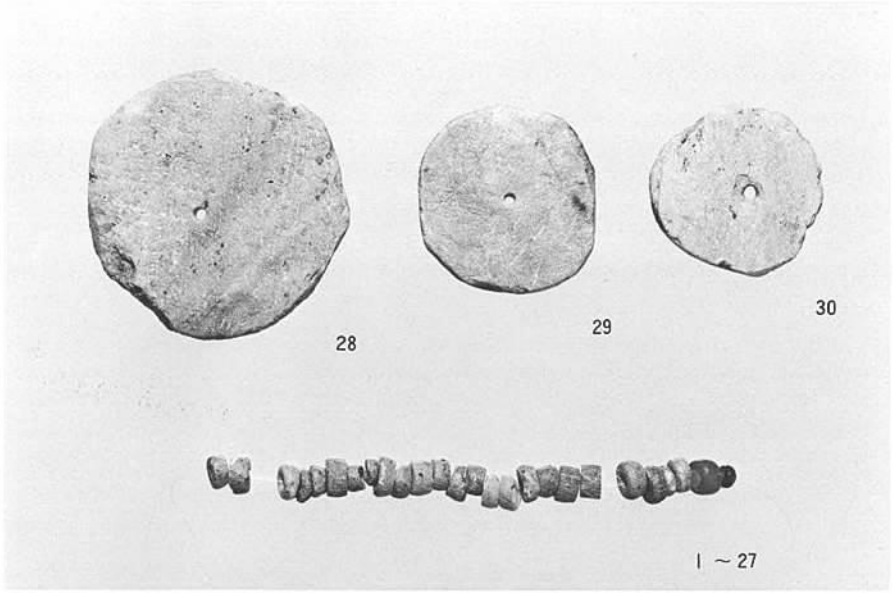
1　サキゾノⅠ－7・8　出土石器　　2　Ⅰ－7　出土鉄器



1



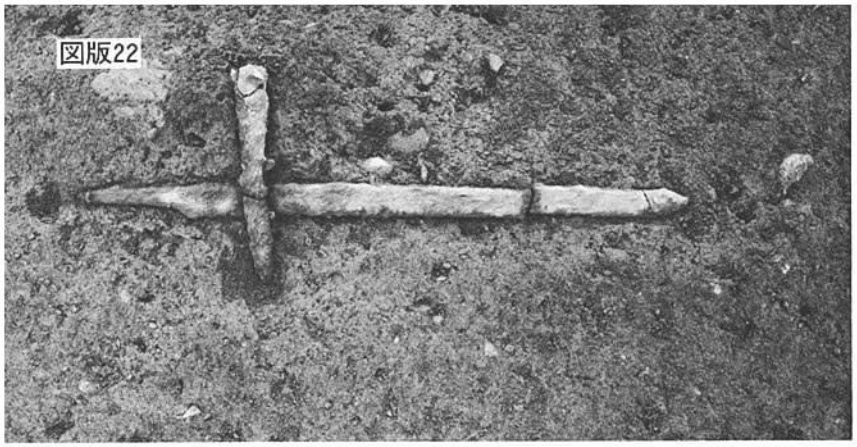
2



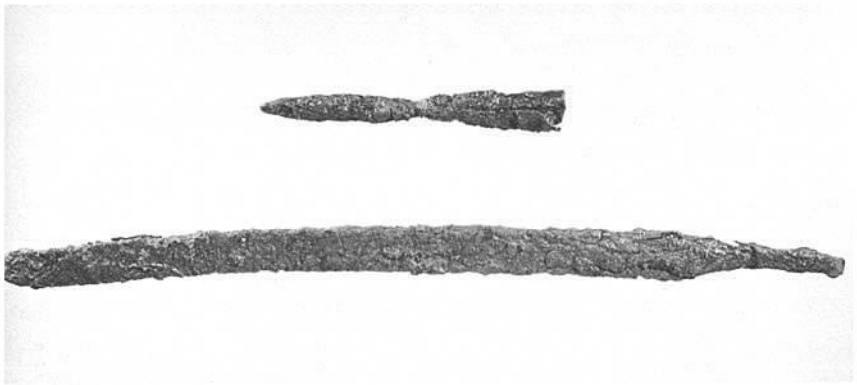
3

1　サキゾノⅠ－7　出土砥石　　2・3　古墳時代祭祀出土土器・滑石製品

図版22



1



2

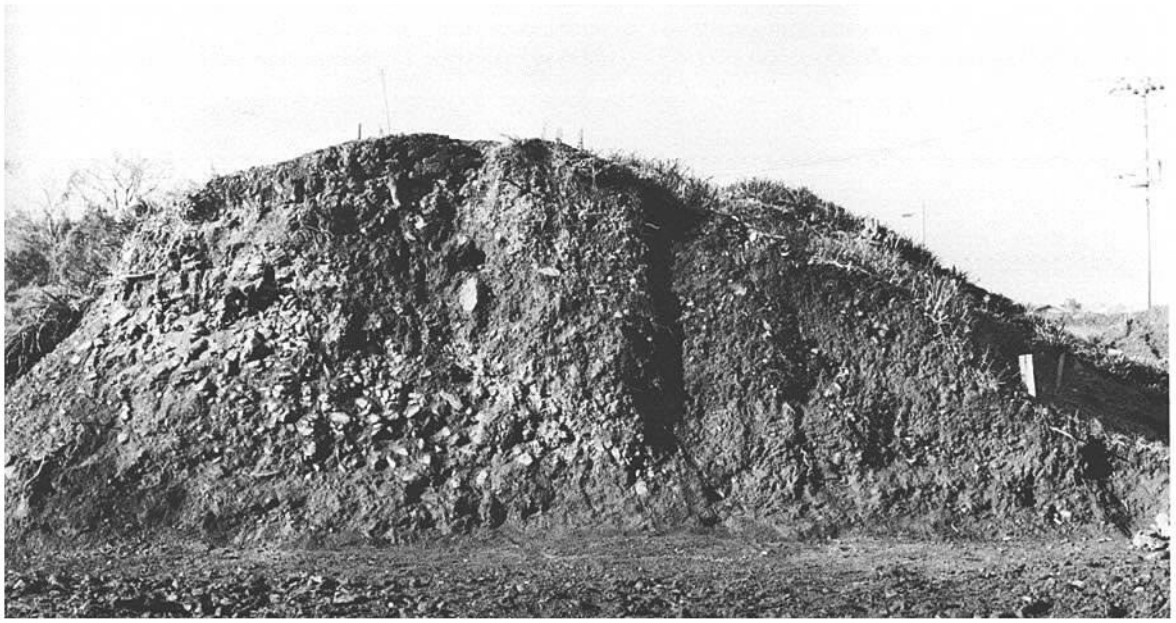
3

1　サキゾノⅠ－8
　　鉄刀・鉄矛出土状態

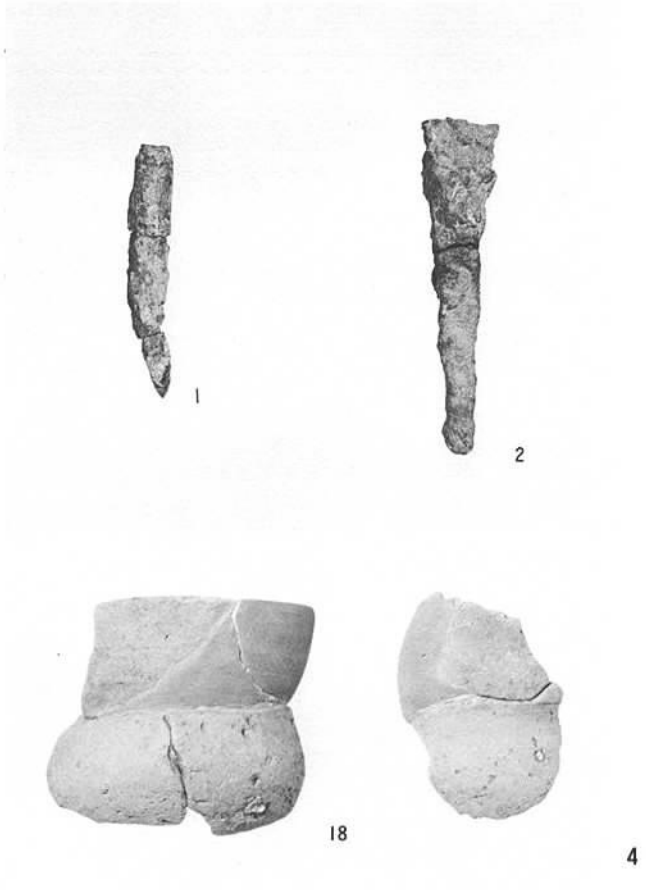
2　鉄刀・鉄矛

3　Ⅰ－8～15　遠景

4　Ⅰ－10　南北断面



4



1　サキゾノⅠ—15　トレンチ（西から）　　2　Ⅰ—15　トレンチ（東から）
4　Ⅰ—8・14 出土鉄器・土器　　3　Ⅰ—14　トレンチ（北から）

1

2

3

5

6

7

9

イフー7　大溝中層出土土器

13

15

14

12

10

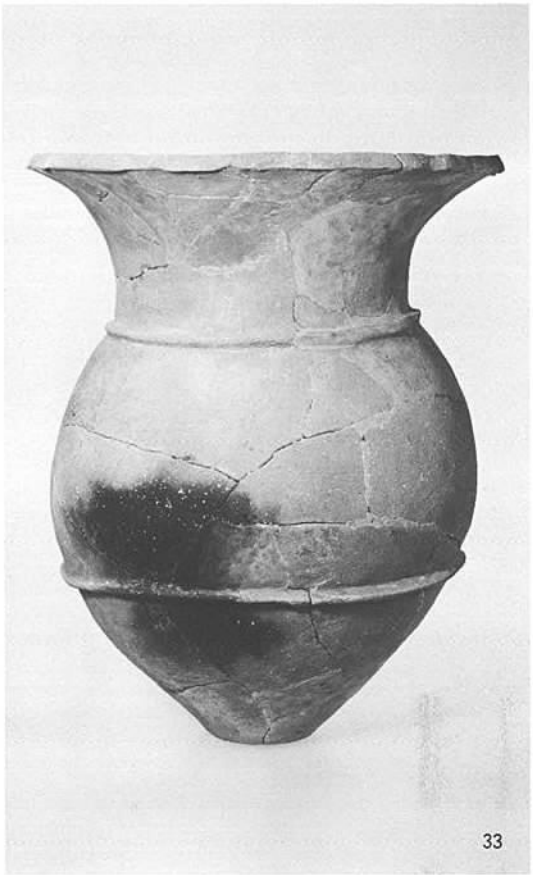
16

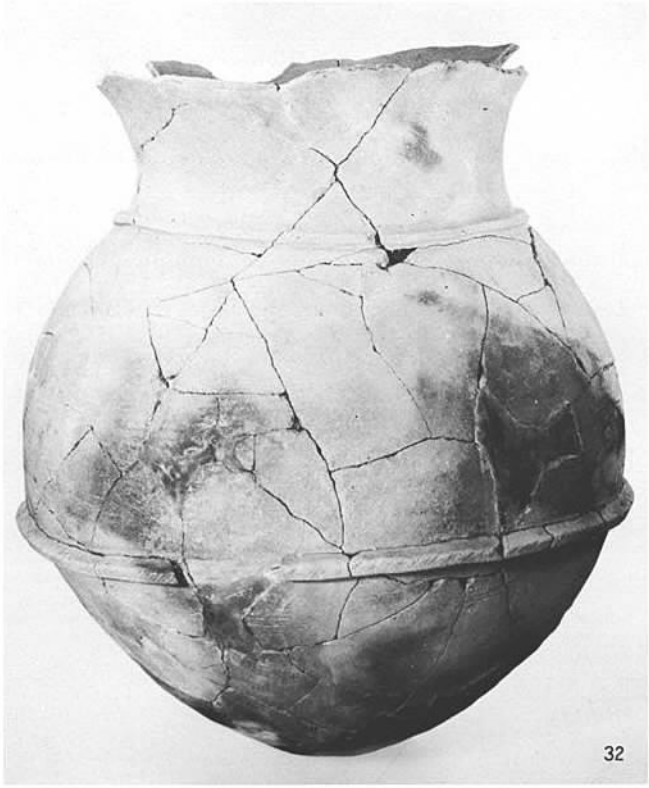
17

19

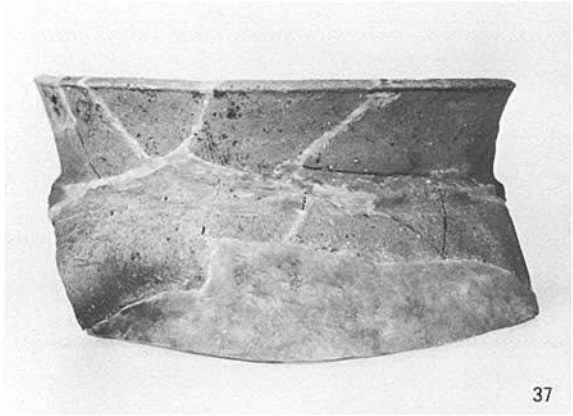
イフ—7　大溝上層出土土器

イフー7　大溝上層出土土器

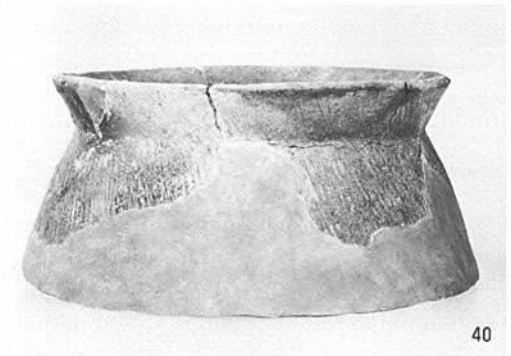




イフー7　大溝上層出土土器


37

42


40

38

39

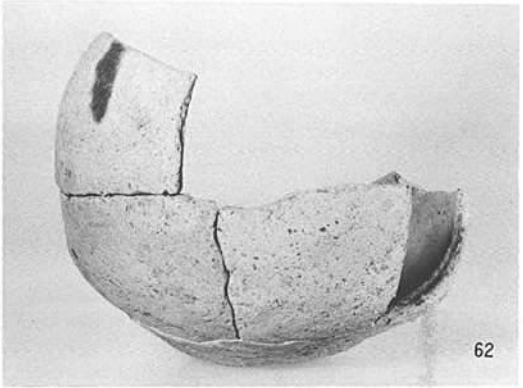
41

43

イフー7　大溝上層出土土器

44

54


62

57

58

64

66

68

69

70

イフー7　大溝上層・最上層出土土器

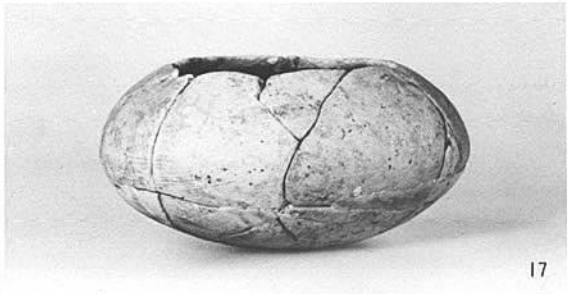
図版30

1

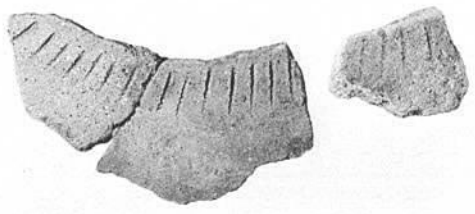
4

16

18

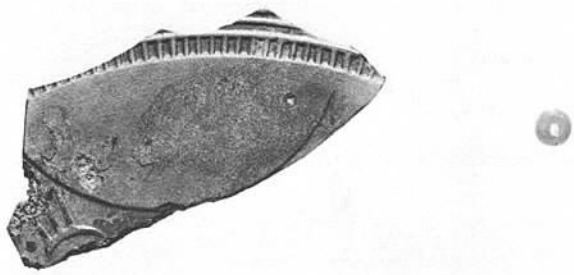


17

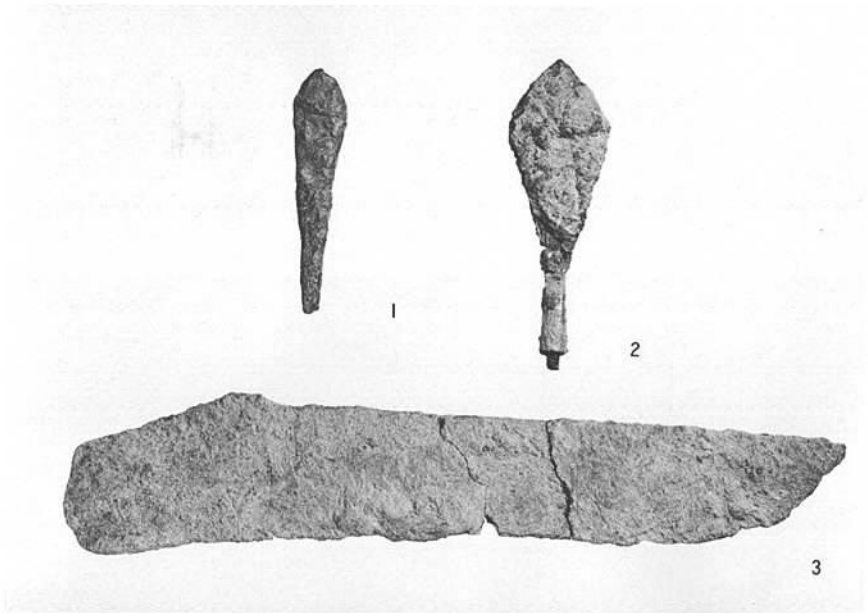


26

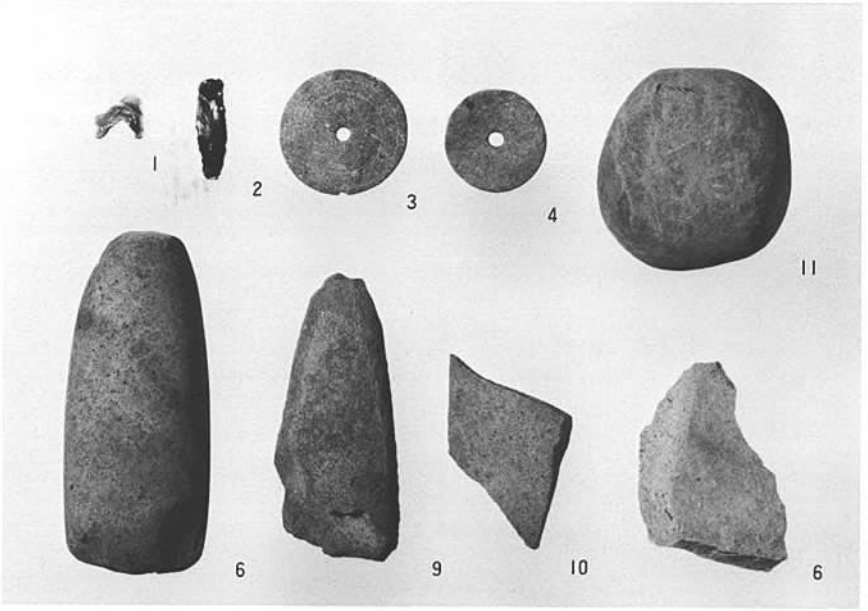
1　イフ－3　大溝　　2　大溝上層出土土器



1



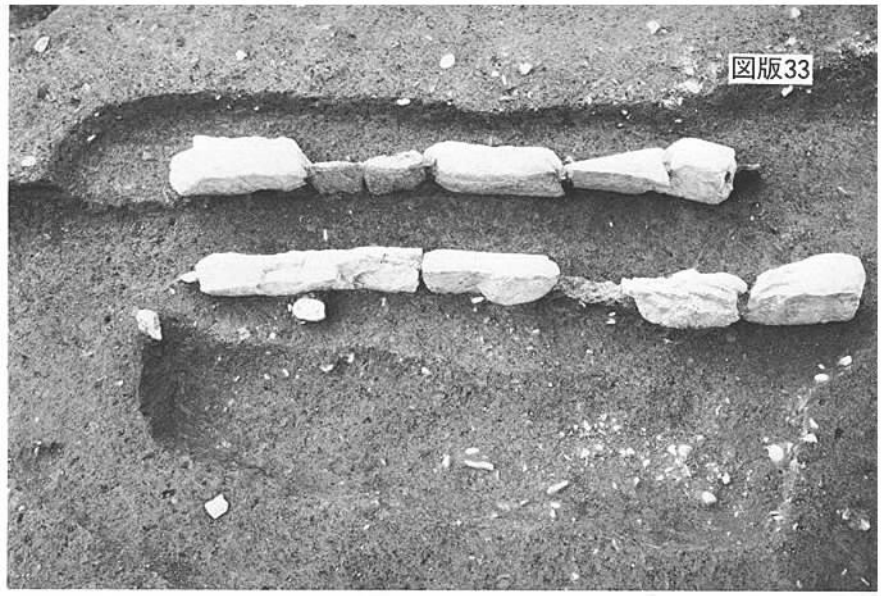
2



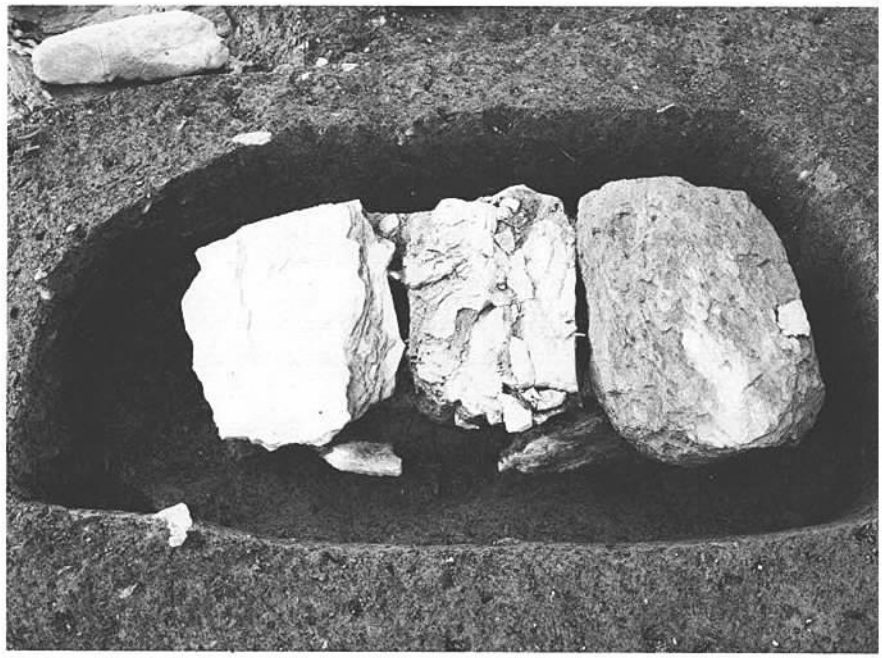
3

1　イフー3　大溝上層出土鏡片・小玉　　2　鉄器　　3　石器

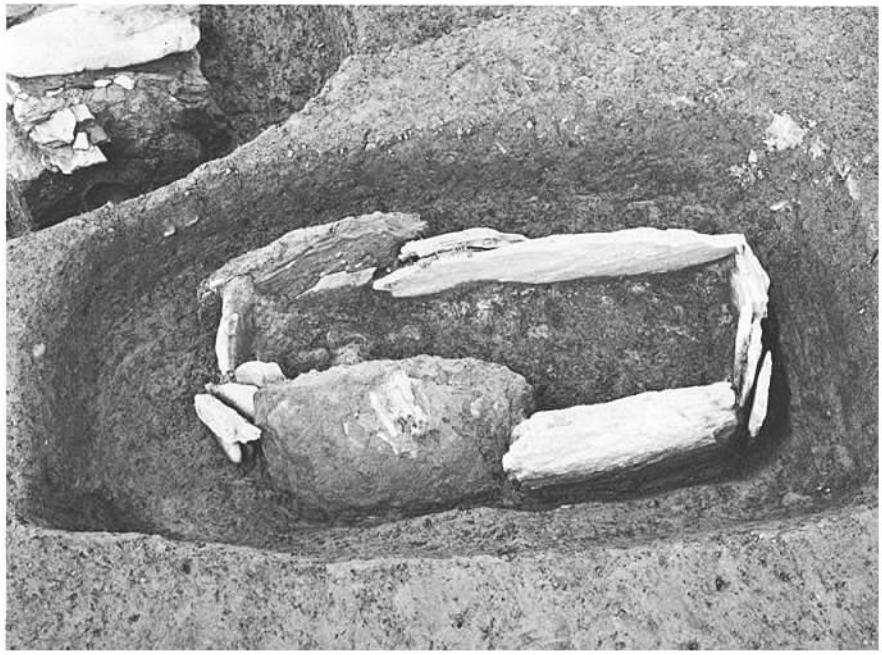
1　イフ－3　石棺墓群（南から）　　2　石棺群（東から）



1



2



3

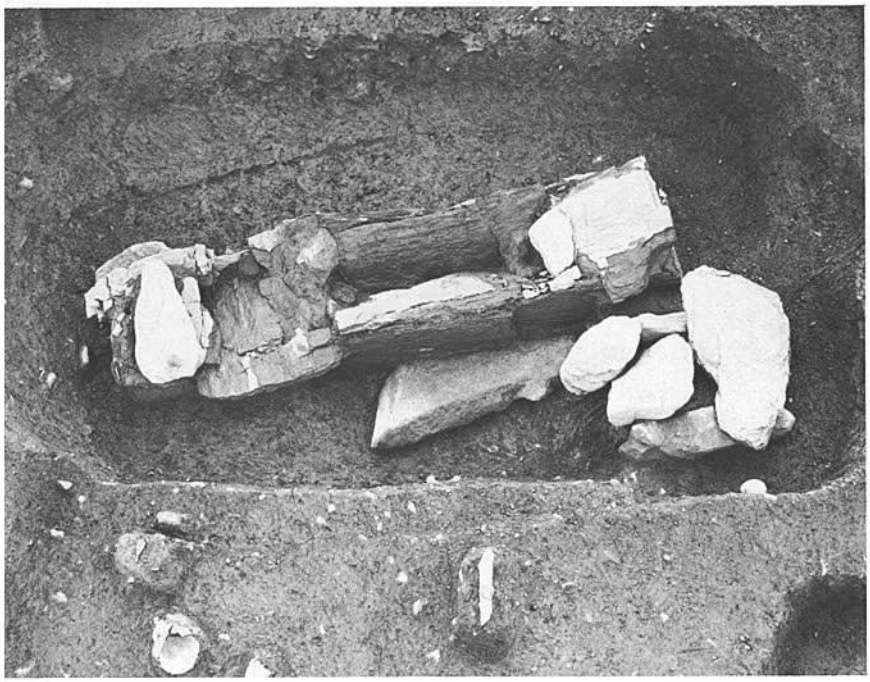
1　イフー3　1号石棺墓

2　2号石棺墓

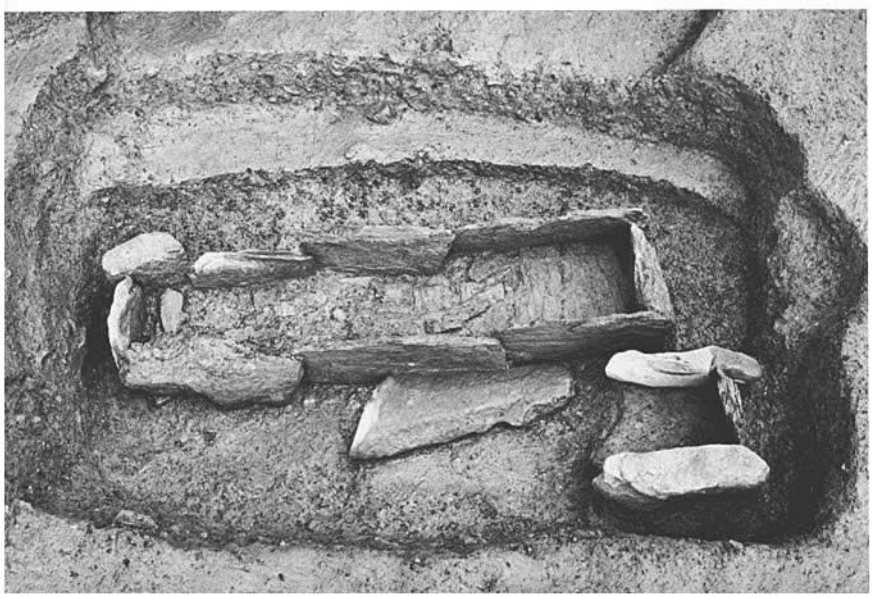
3　2号石棺墓

図版34

1



2

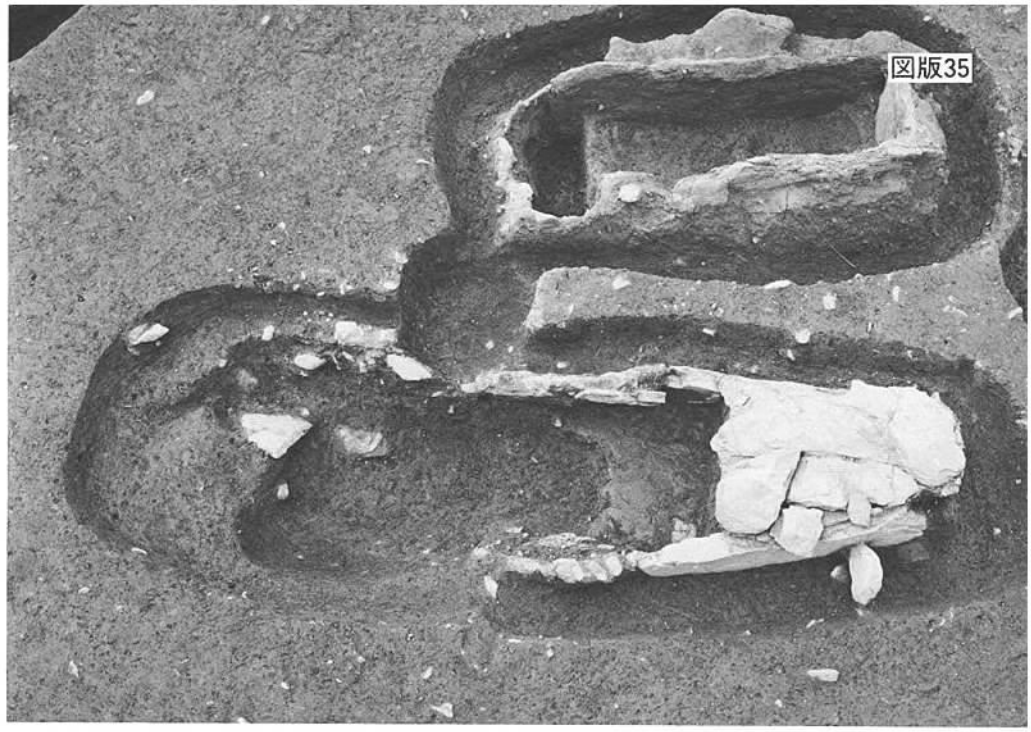


3

1　イフ－3
　　3・4号石棺墓

2　3・4号石棺墓

3　3・4号石棺墓
　　（蓋石除去）



1

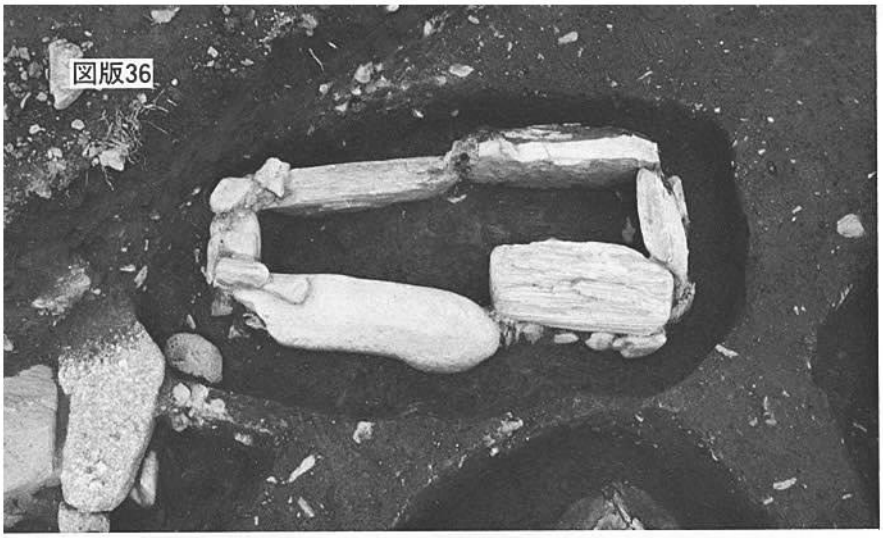
2

1　イフー3
　　5・6号石棺

2　5号石棺墓

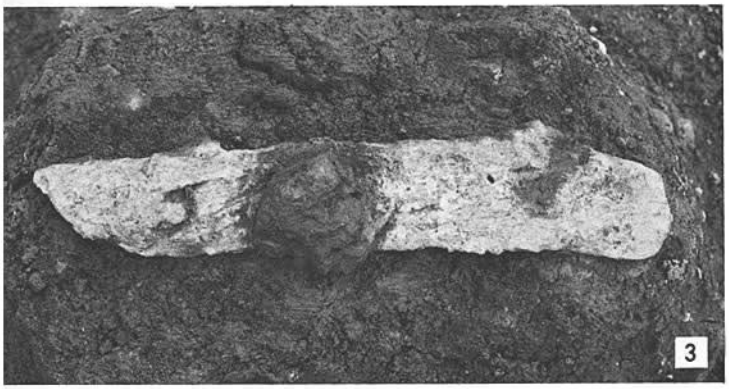
3　6号石棺墓

3



1

2



3

4

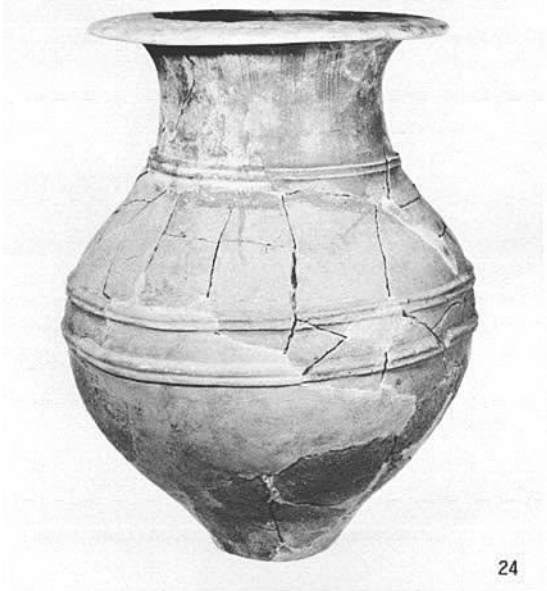
1　イフー3　7号石棺墓　　2～4　鏡片・鉄器・土器出土状態

2　中央部第3層土器出土状態（北から）

1　番上II—5　発掘区全景（東から）

15

18

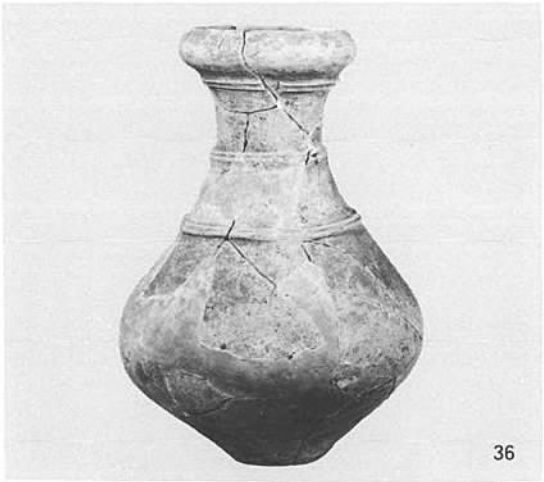

24

23

29

31

番上II－5　出土土器



番上II－5　出土土器

81

82

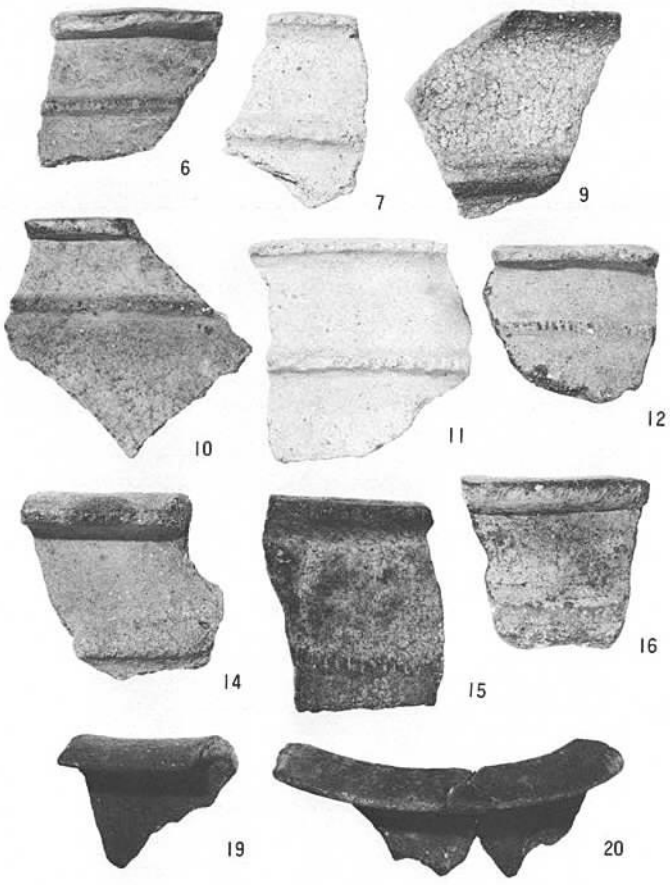
83

84

5

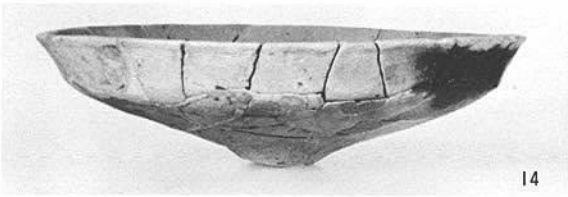
6

番上II－5　出土土器



番上II－5　出土土器

12


14

19

22

23

26

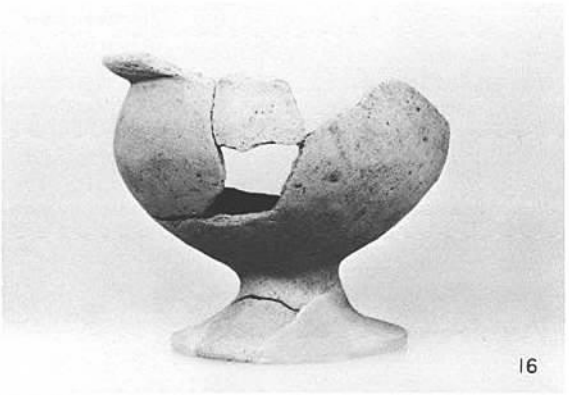
28

2

5

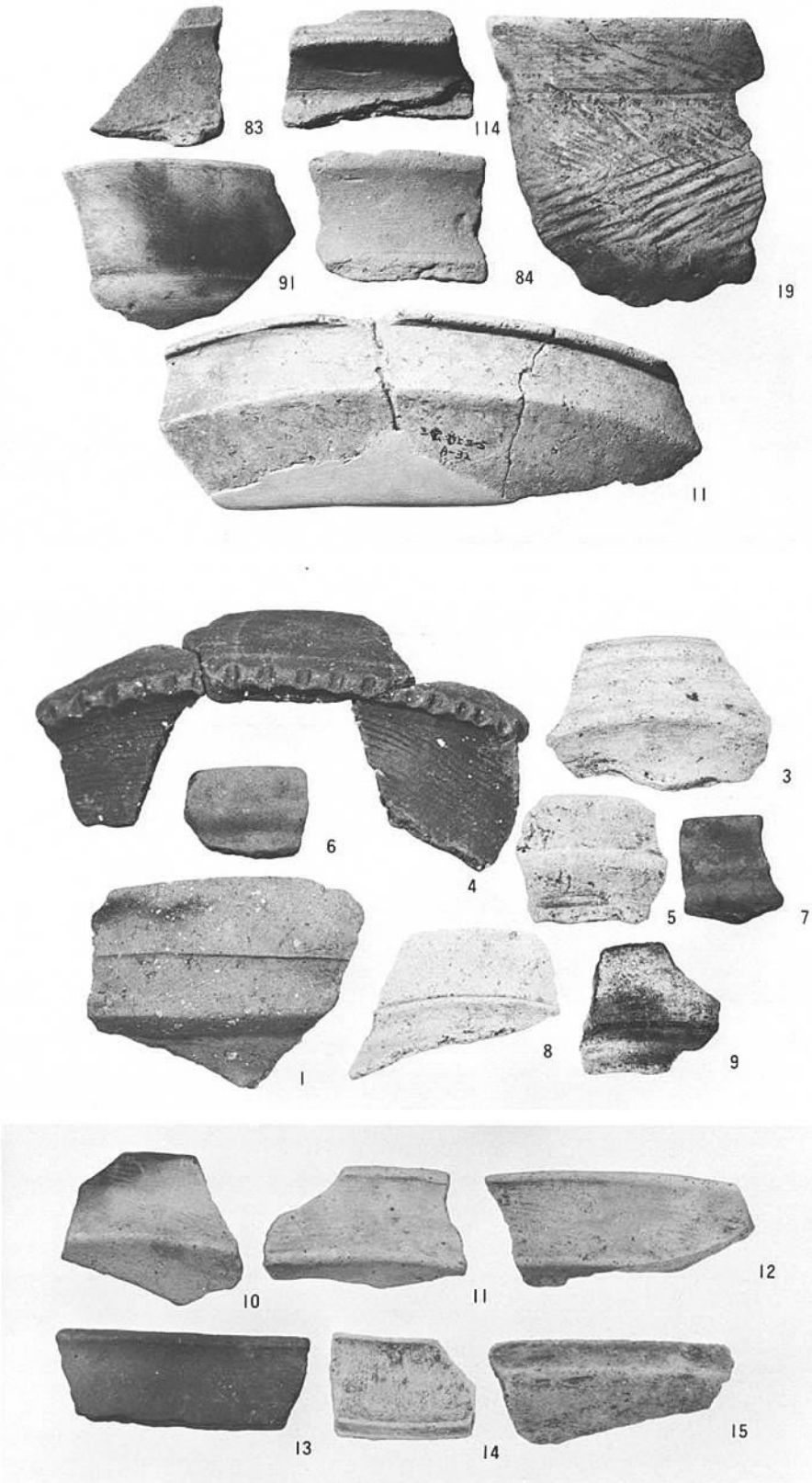
14

番上II－5　出土土器

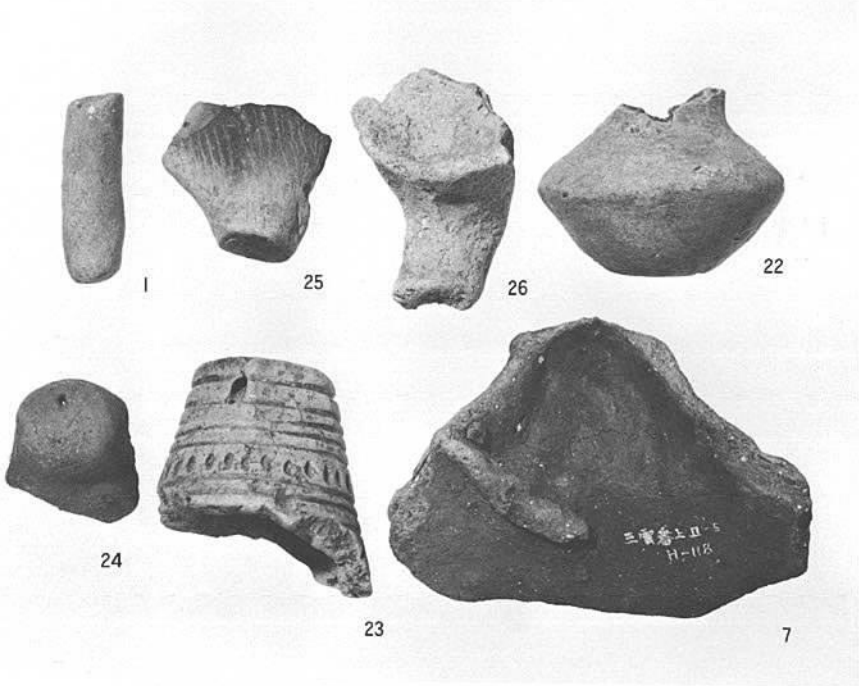


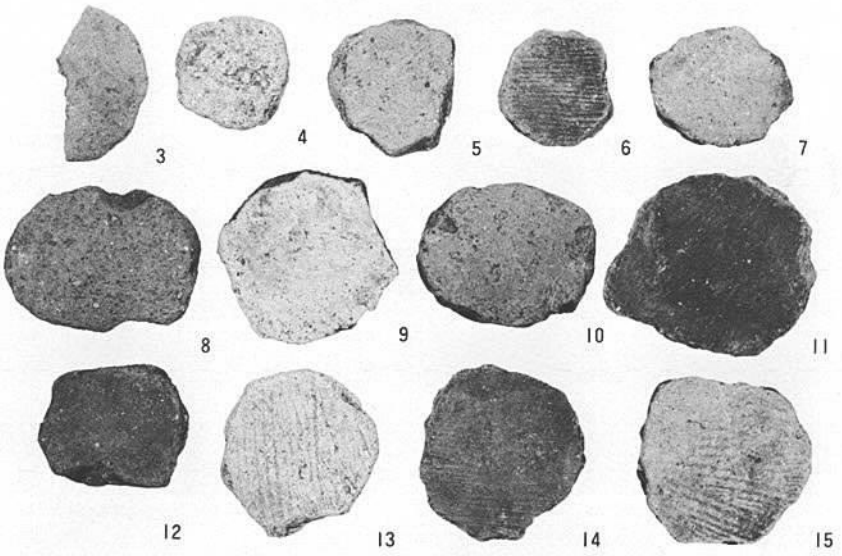
番上II－5　出土土器

番上II－5　出土土器

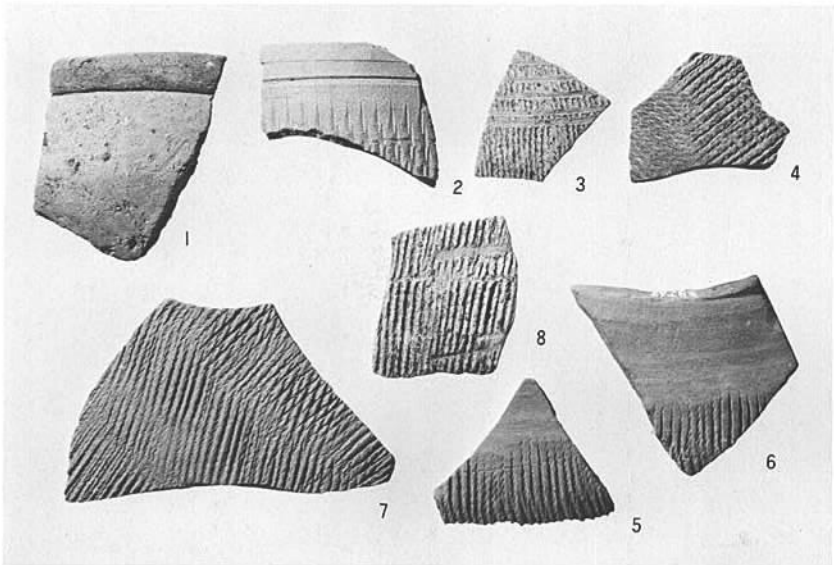


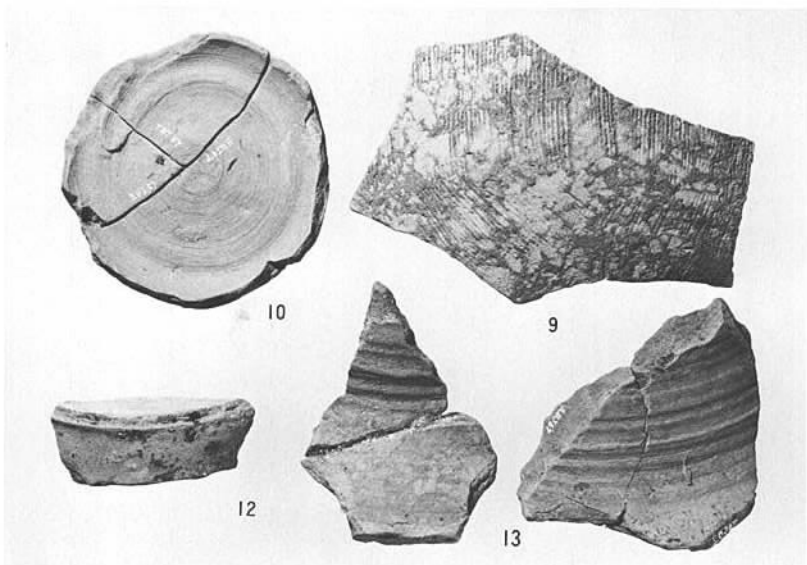
番上II－5　出土土器

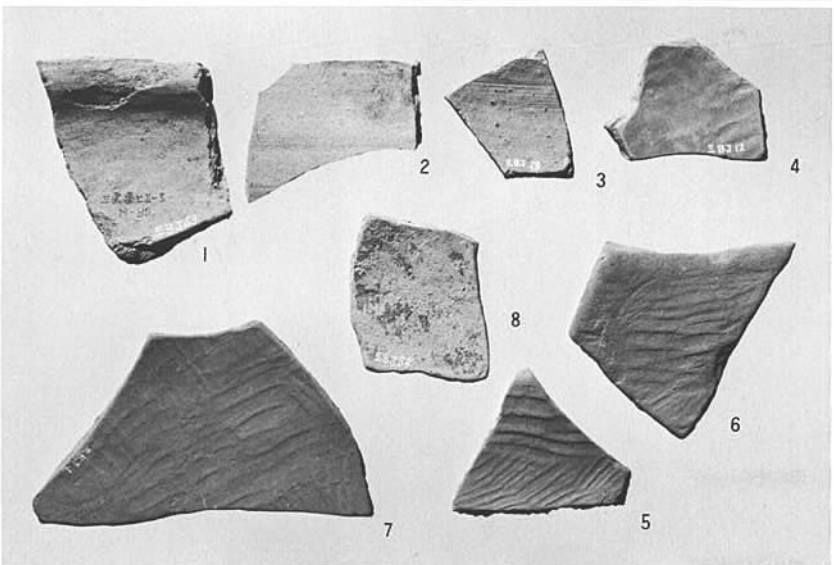


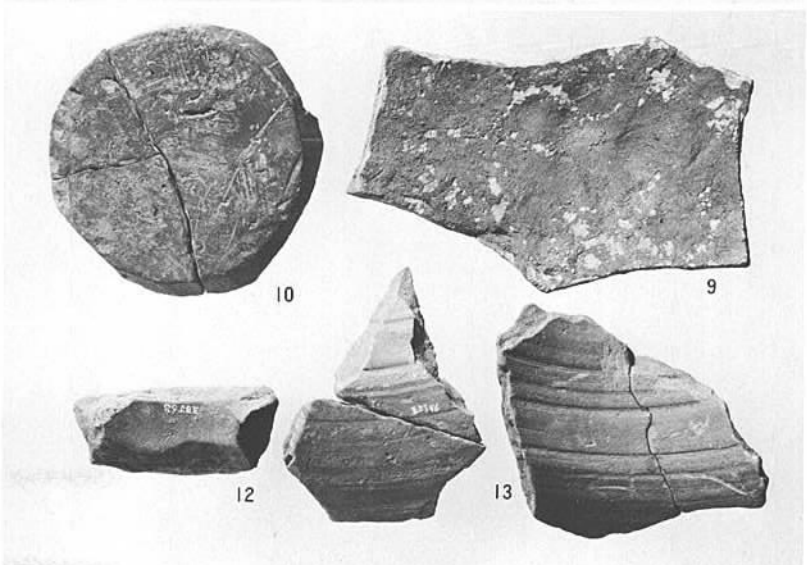


番上II－5　出土土器・土製品

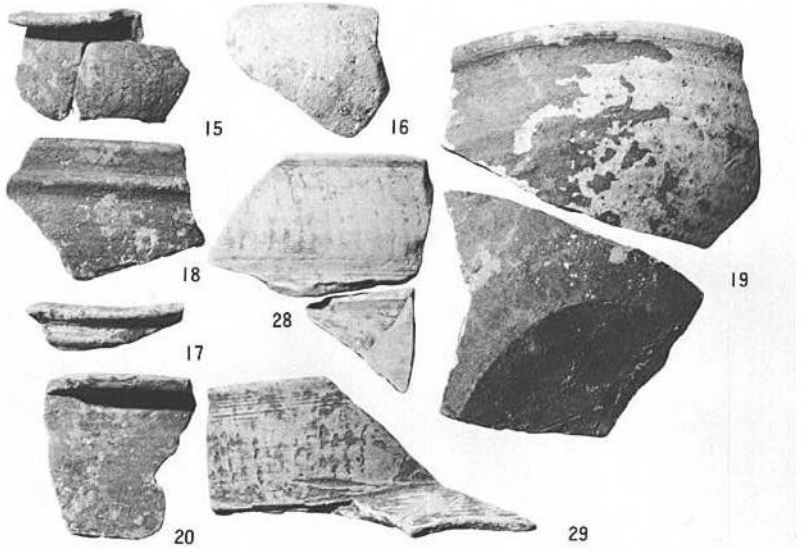


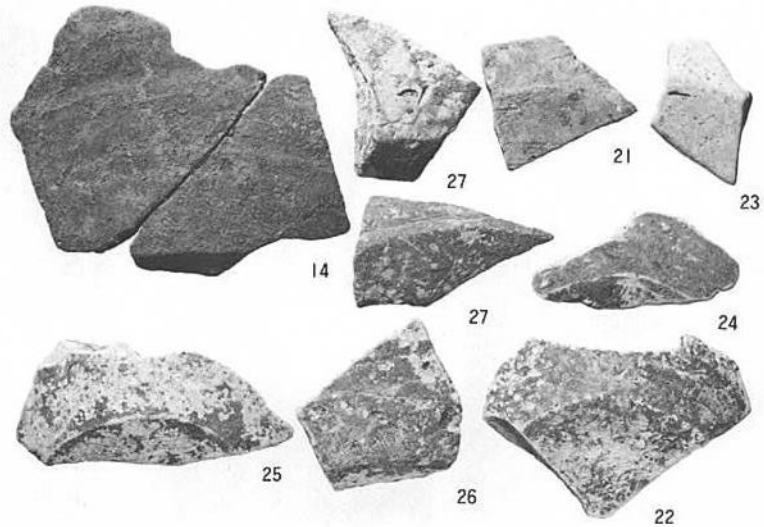


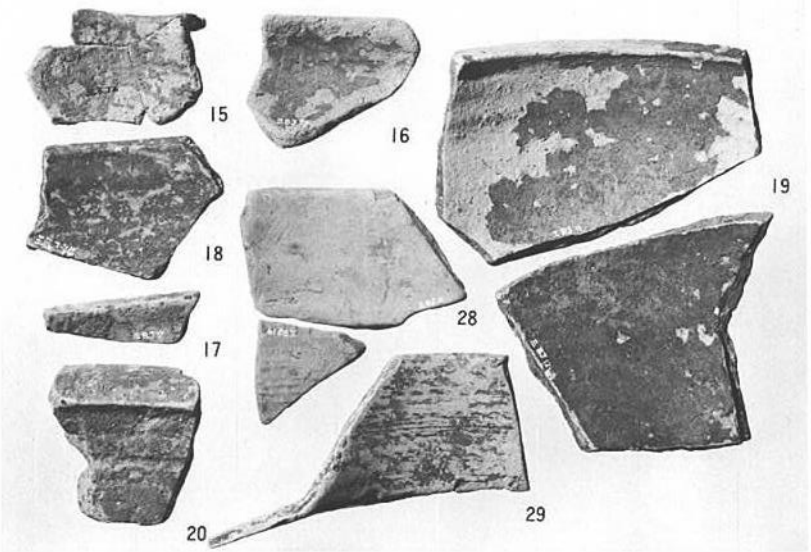


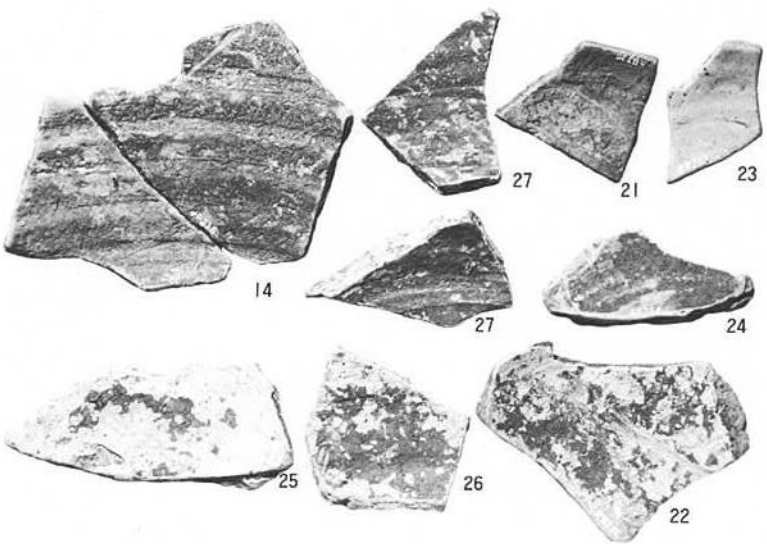


番上II－5　出土朝鮮系外来土器

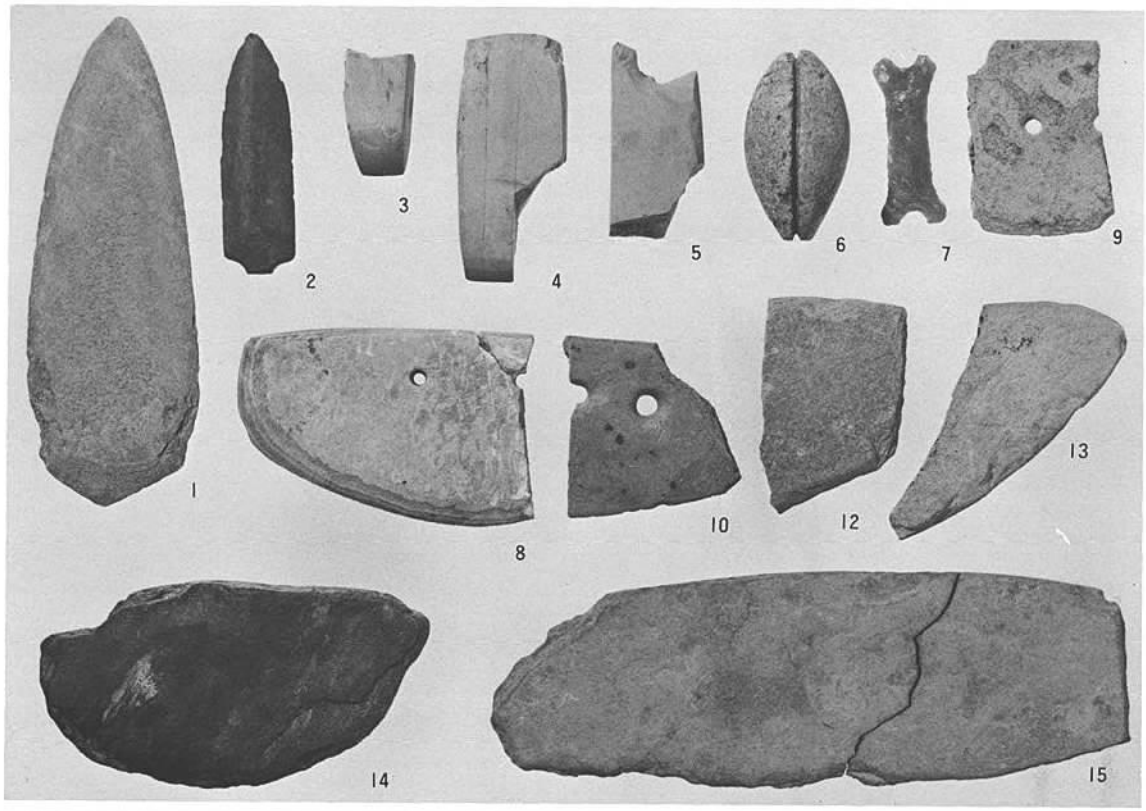


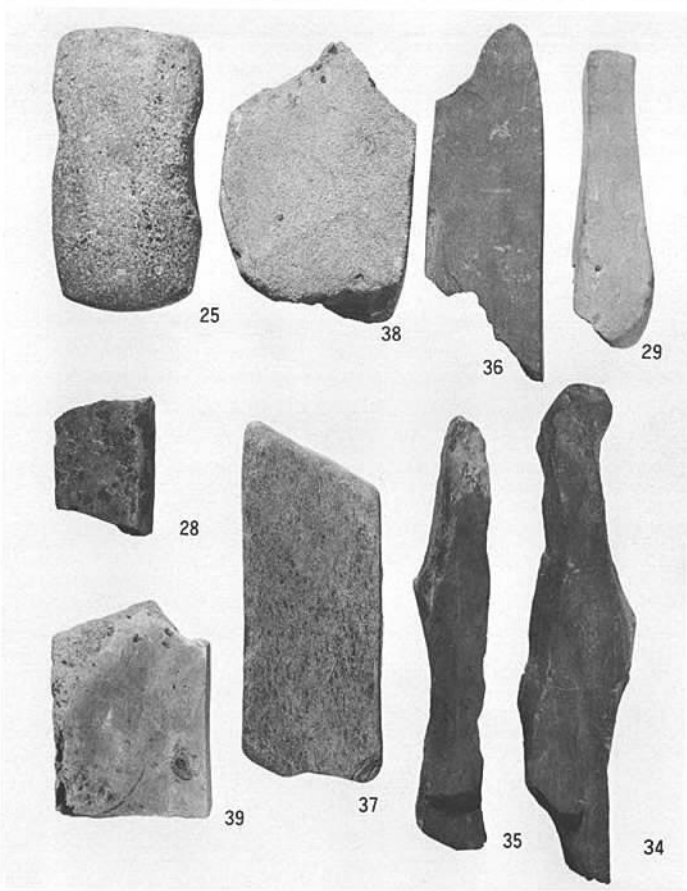


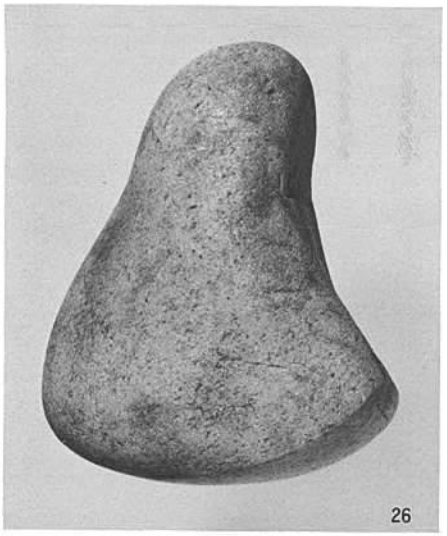




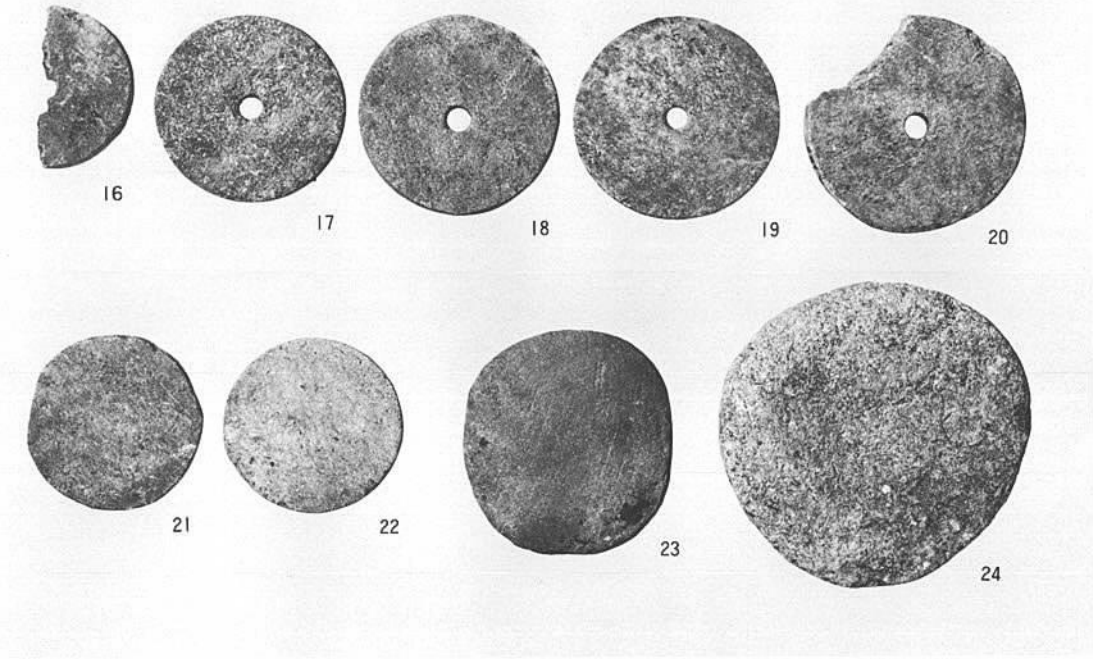
番上II－5　出土朝鮮系外来土器

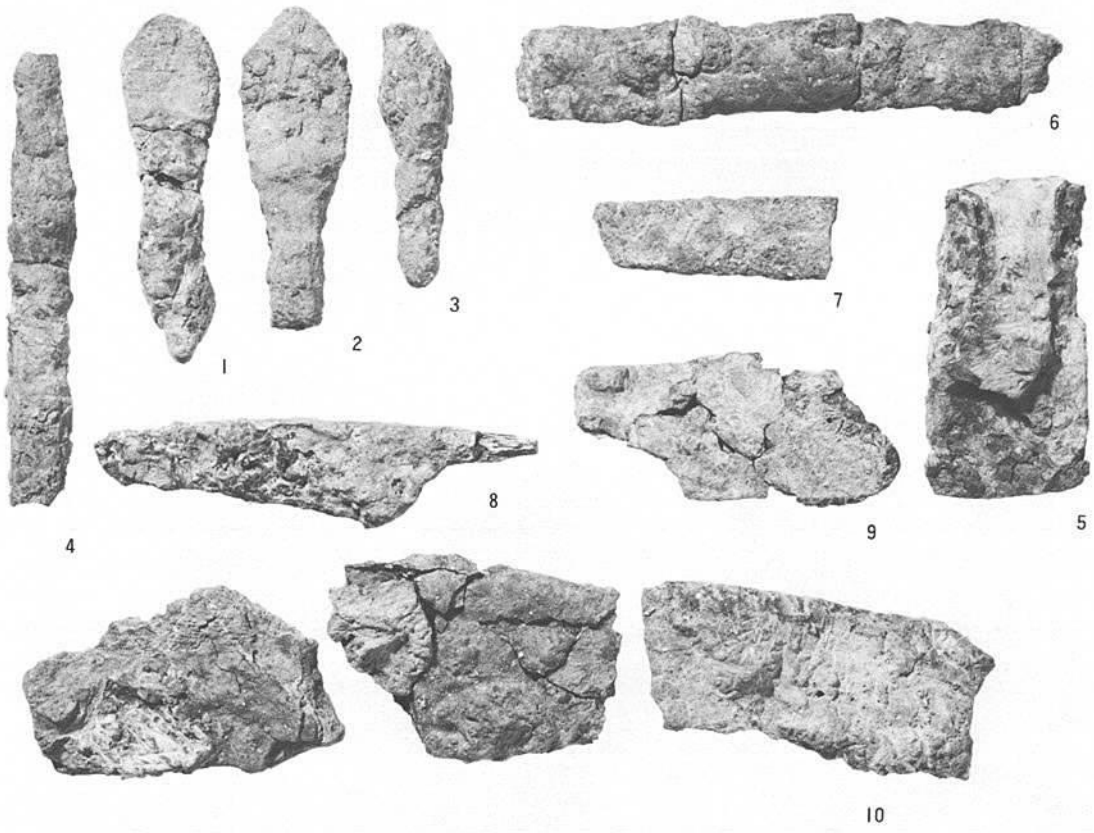




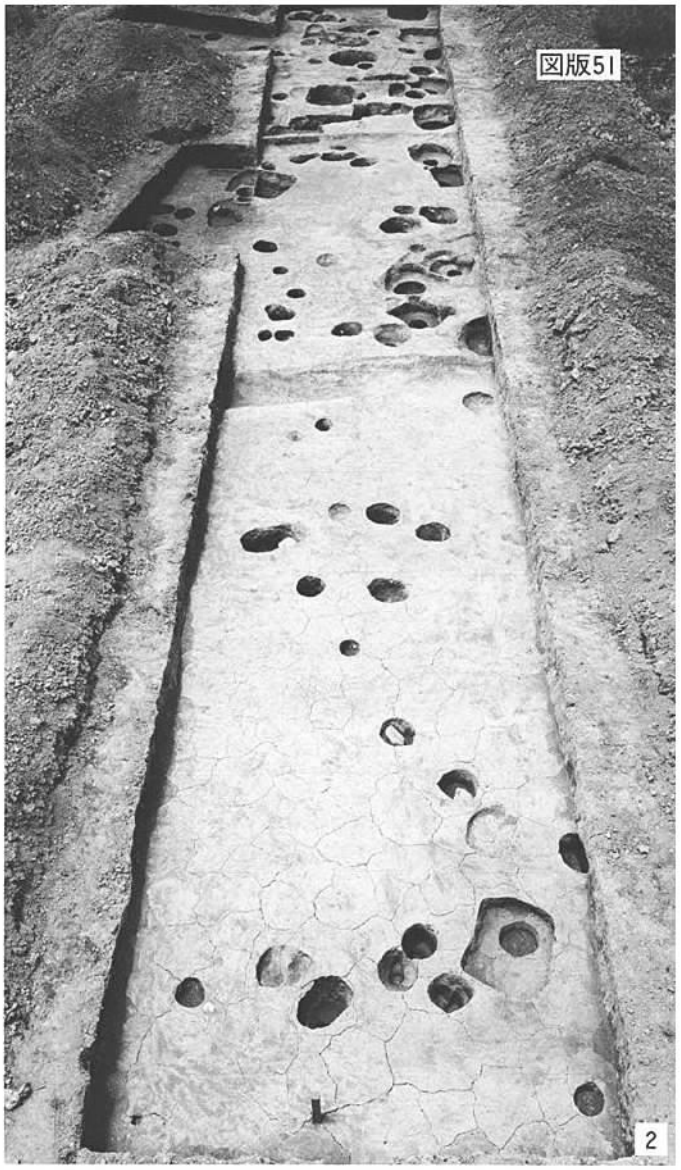


番上II－5　出土石器



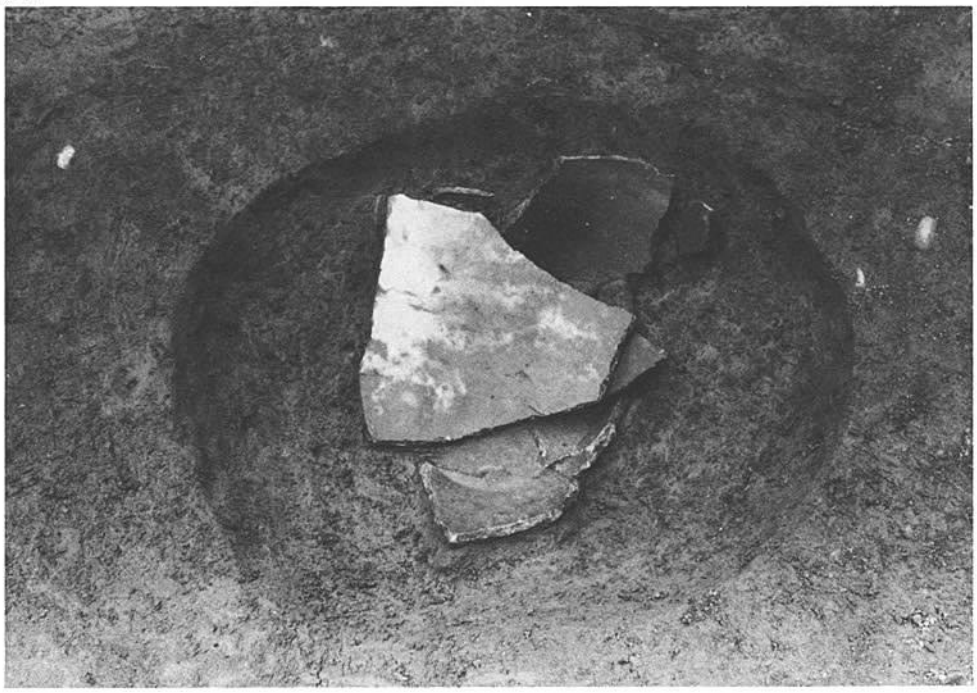


番上II－5　出土石器・鉄器

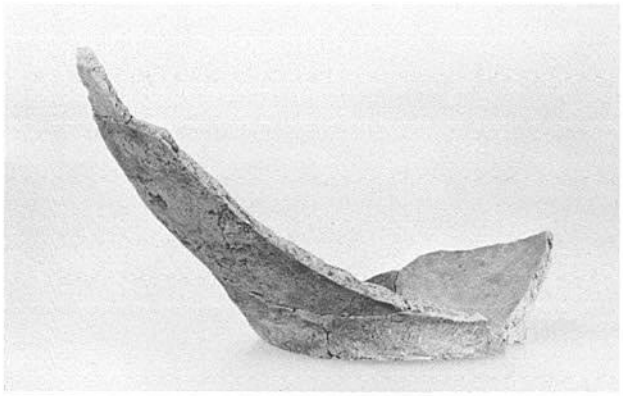


1　五反間Ⅲ—5　北トレンチ　　2　南トレンチ（東から）　　3　南トレンチ（南から）

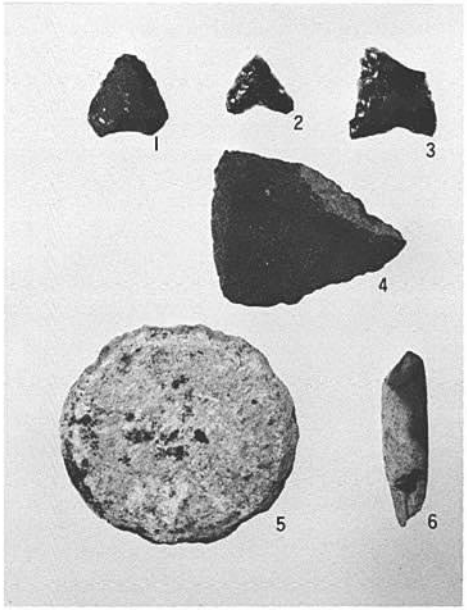
図版52



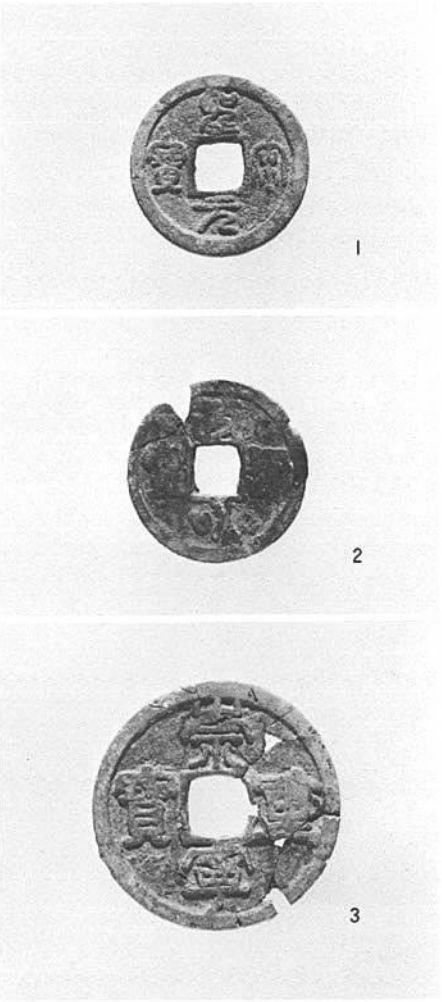
1



2



3

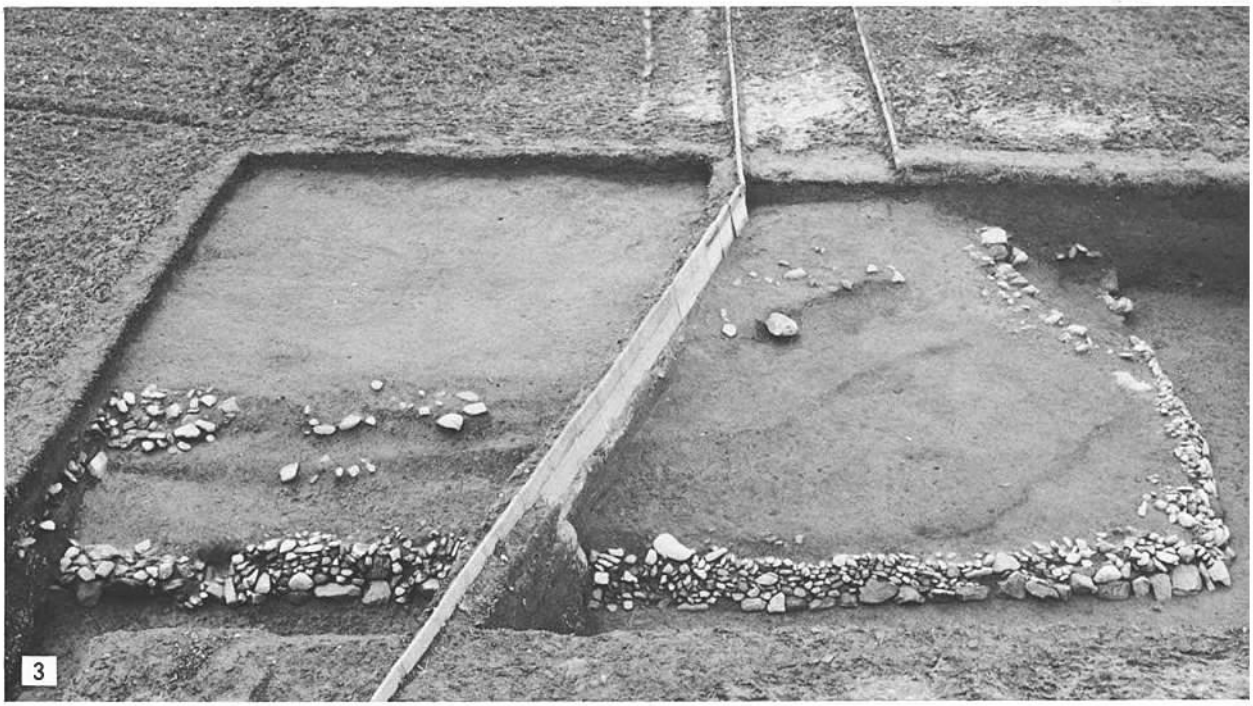


4

1　五反間Ⅲ－5　北トレンチ埋甕　　2　埋甕　　3　石器　　4　古銭（実大）

端山古墳・築山古墳・茶臼塚古墳周辺航空写真（1/2.000）（昭和38年撮影）

1　端山古墳と築山古墳（北上空から）　　2　端山古墳（東上空から）

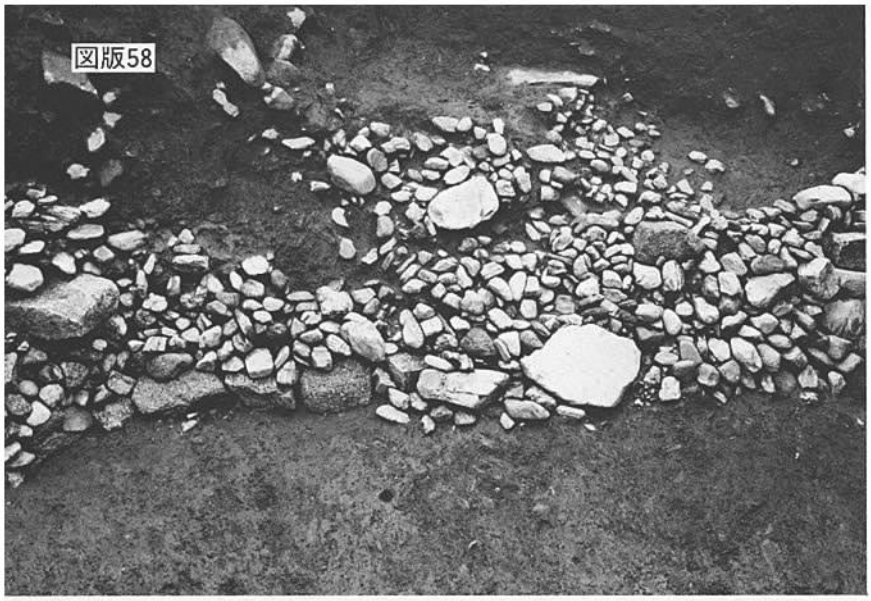


1　端山古墳の前方部（昭和40年撮影）　2　端山古墳遠景（北から）

3　端山古墳前方部葺石（北から）

1　端山古墳前方部1段目葺石　　2　前方部1段目葺石（西から）

1　端山古墳東くびれ部1段目葺石　　2　東くびれ部1段目葺石（北から）



1

2

3

1　東くびれ部葺石
2　東くびれ部葺石
3　西くびれ部葺石

1

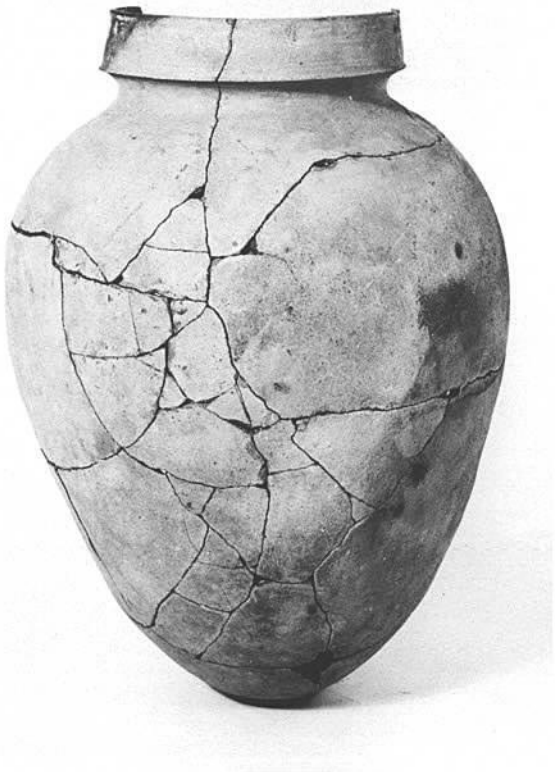
2

1　八反田Ⅰ－1ｂ
　　トレンチ

2　甕棺墓

3　甕棺口縁付近

3



1

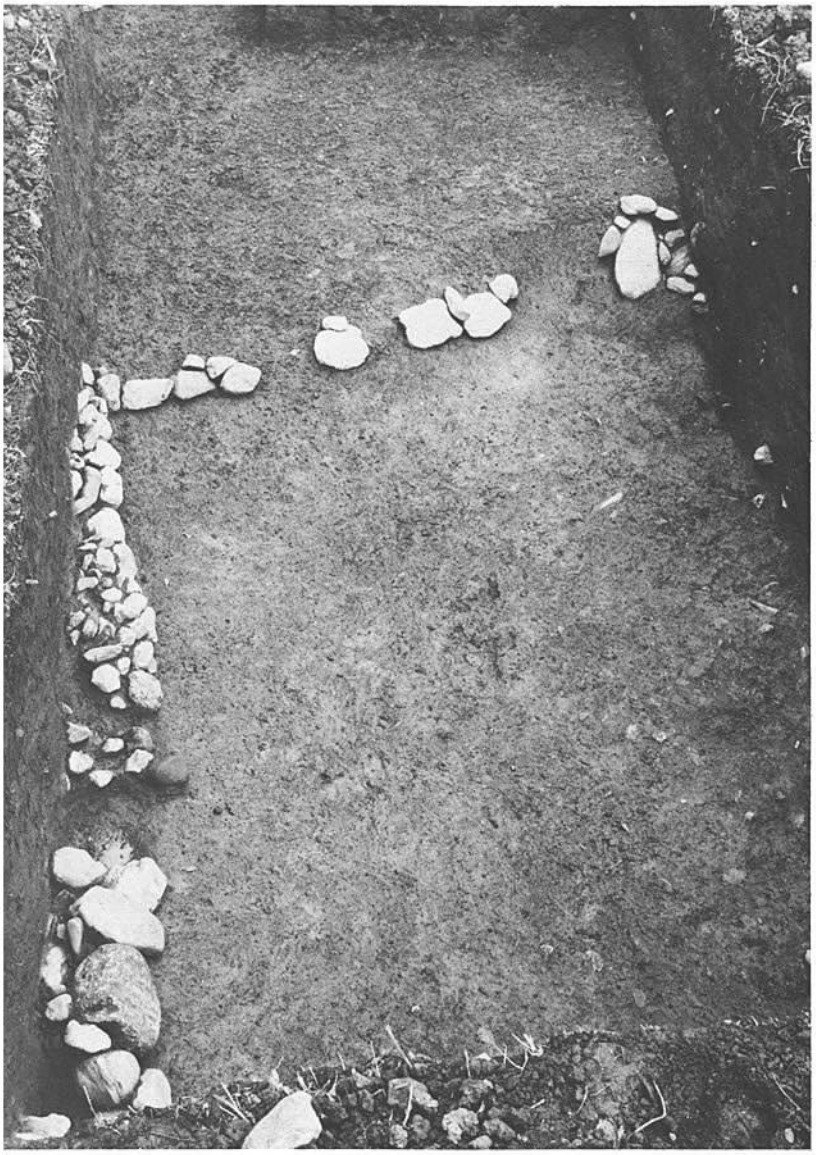
2

1　八反田Ⅰ－1ｂ　甕棺　　2　端山古墳周濠出土小形仿製鏡（実大）

築山古墳航空写真（1．北東上空から　2．西上空から）

図版62

1



2

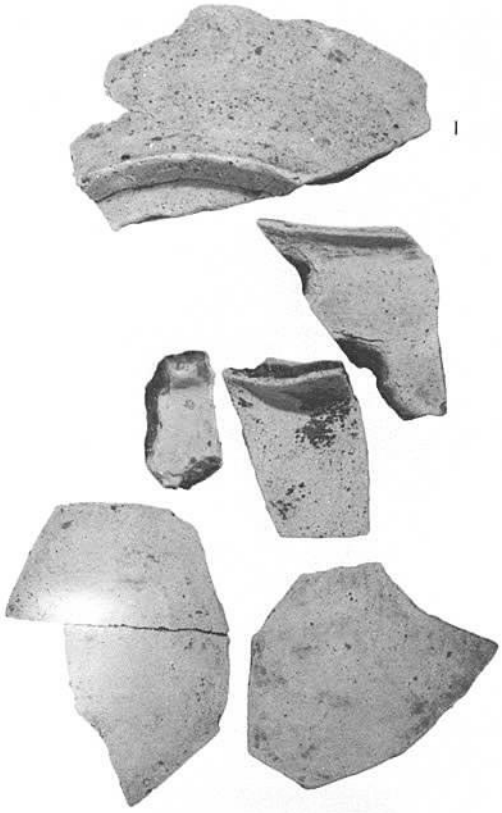
2　Dトレンチ東くびれ部（東から）

1　築山古墳全景（東から）

1　Mトレンチ西くびれ部（西から）

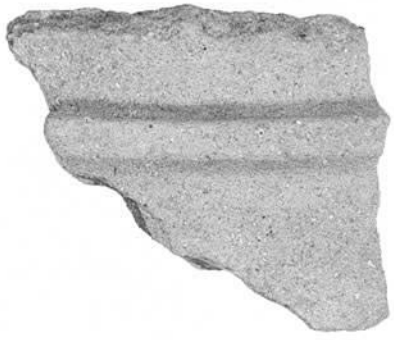
2　Iトレンチ石組遺構（南から）

3　Lトレンチ後円裾部（西から）



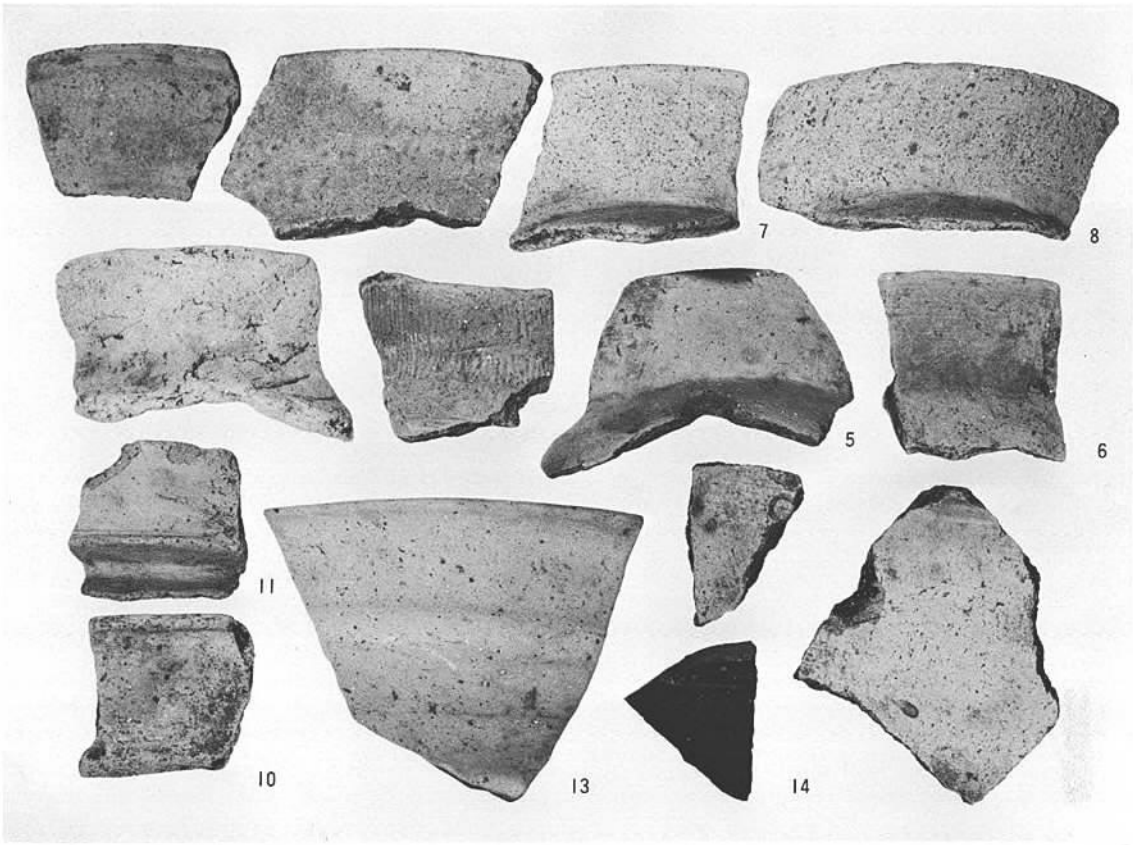
1

3

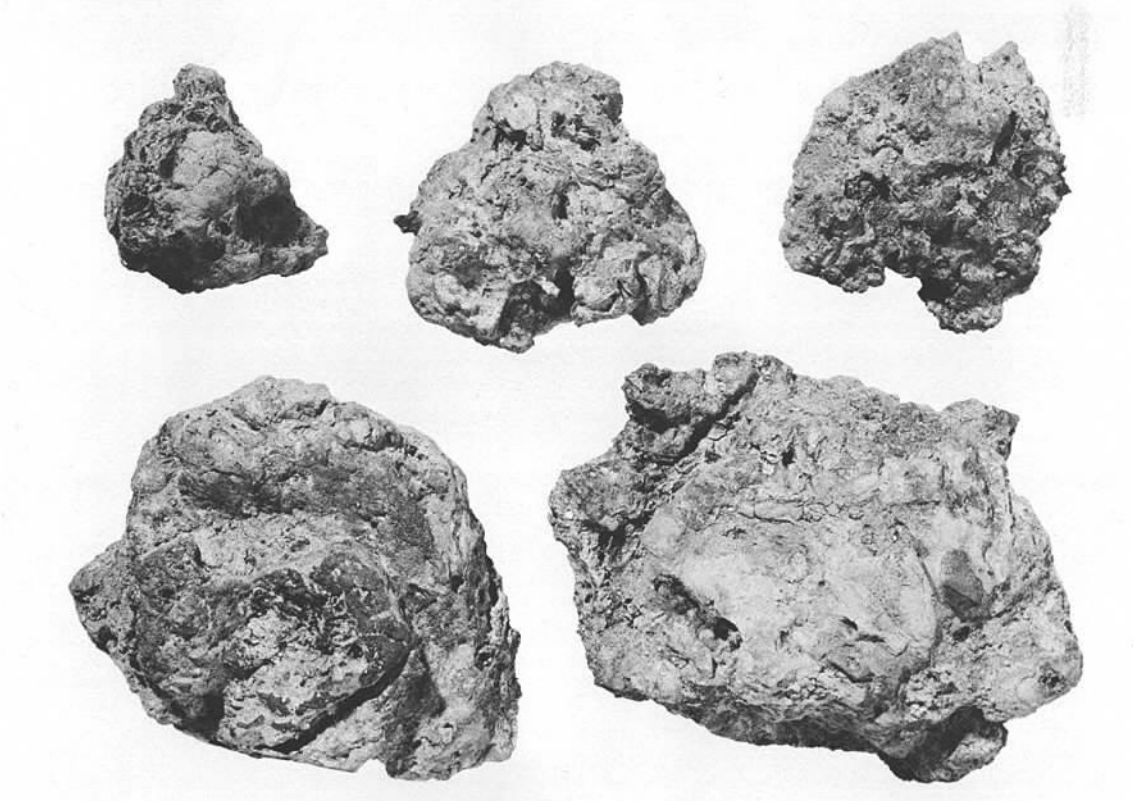


4

築山古墳出土埴輪・石器



1



2

1　周濠出土土器　　2　周濠出土鉄滓

1　塚廻りII－6
　北トレンチ（西から）

2　南トレンチ（西から）

3　1号住居跡（南から）

4　2号住居跡（南から）

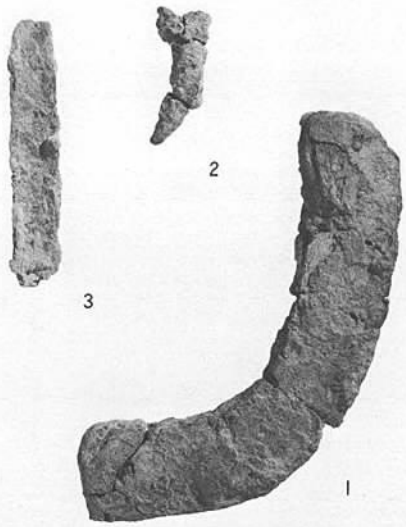
8

7

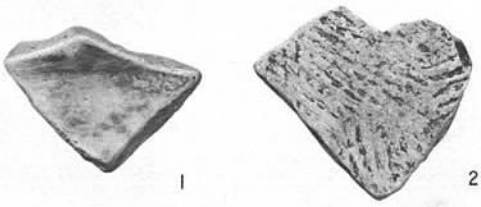
10

12

1



4



3

1

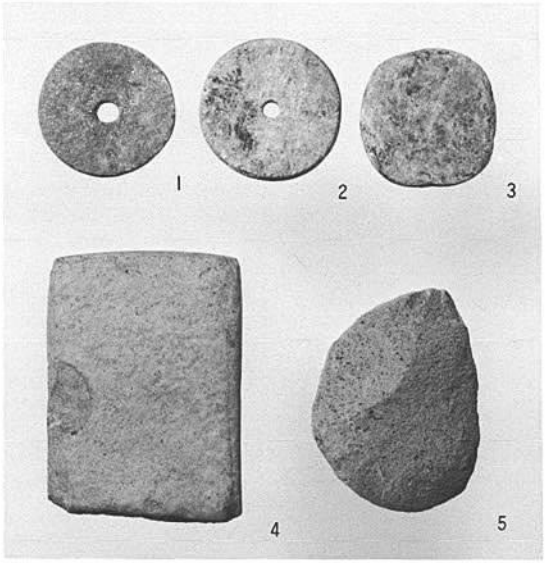
2

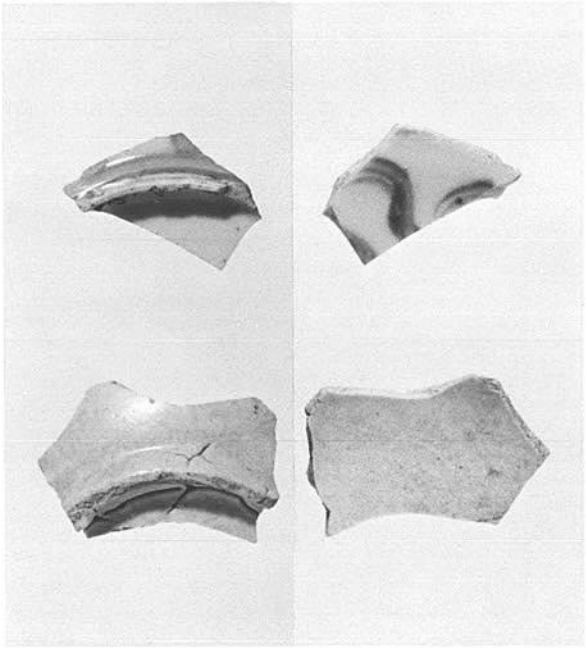
6

2

7

1　1号住居跡出土土器　　2　2号住居跡出土土器　　3　陶質土器　　4　鉄器





2

1

3

4

1　石器　　2　磁器　　3　石臼　　4　鉄滓

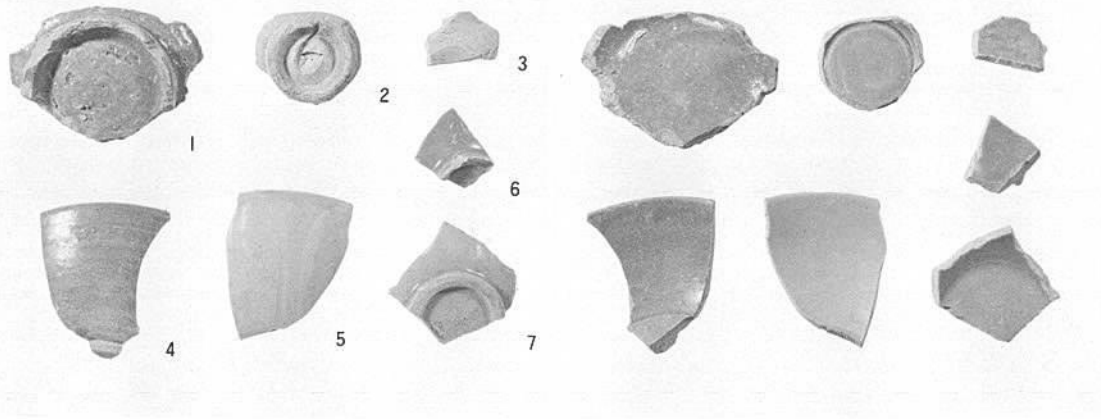
1

2

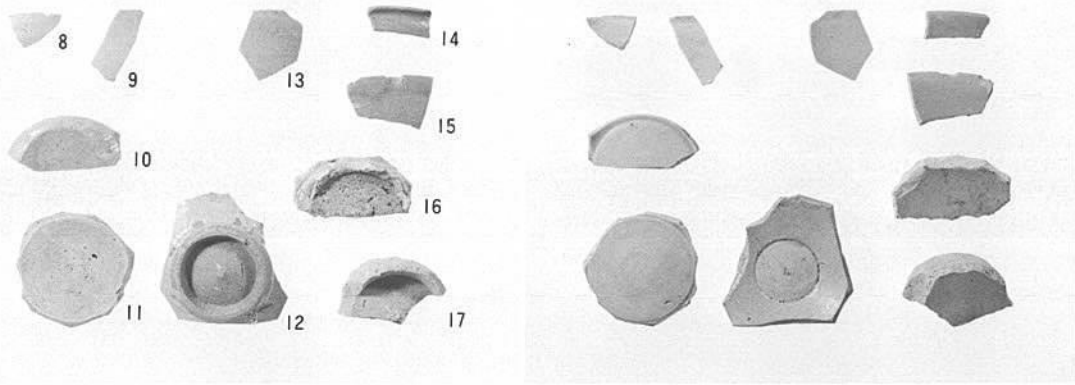
3

1　八反田Ⅰ－1a　大溝（南から）　　2　大溝（西から）　　3　大溝土層

図版70

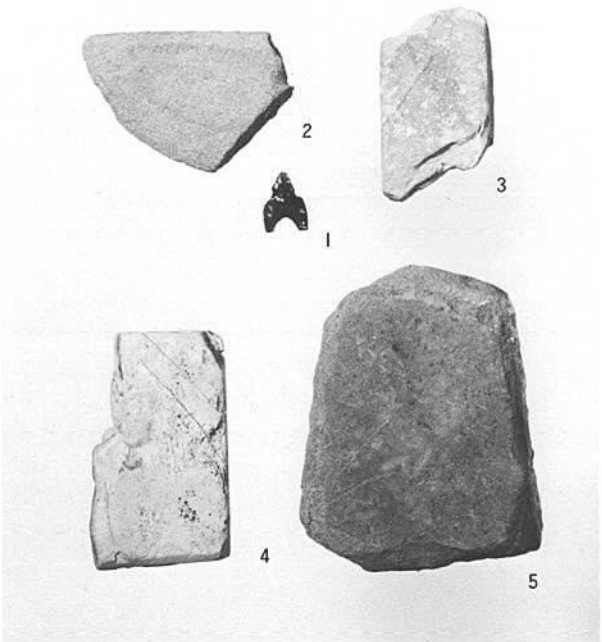


1



2

3



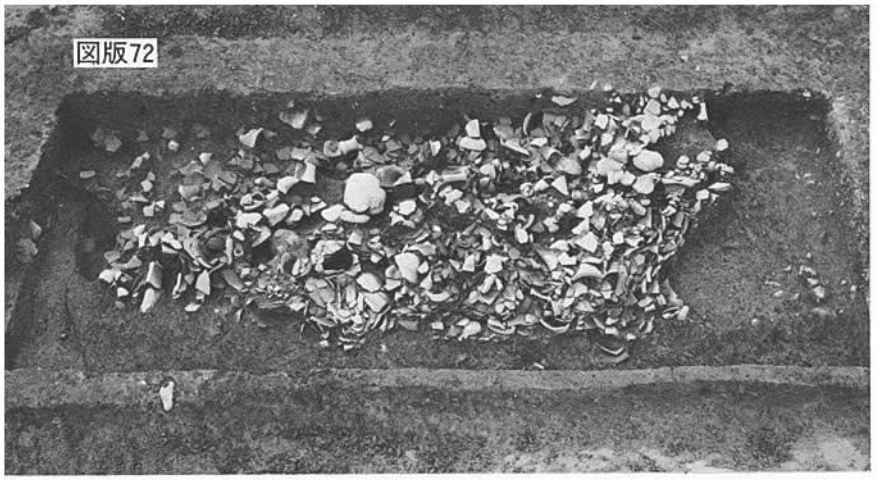
4

1　八反田Ⅰ－1ａ　大溝出土青磁　　2　大溝出土白磁

3　大溝出土小形仿製鏡（実大）　　4　大溝出土石器

1　八反田II－3　住居跡土器群　　2　住居跡内土器群部分

図版72



1

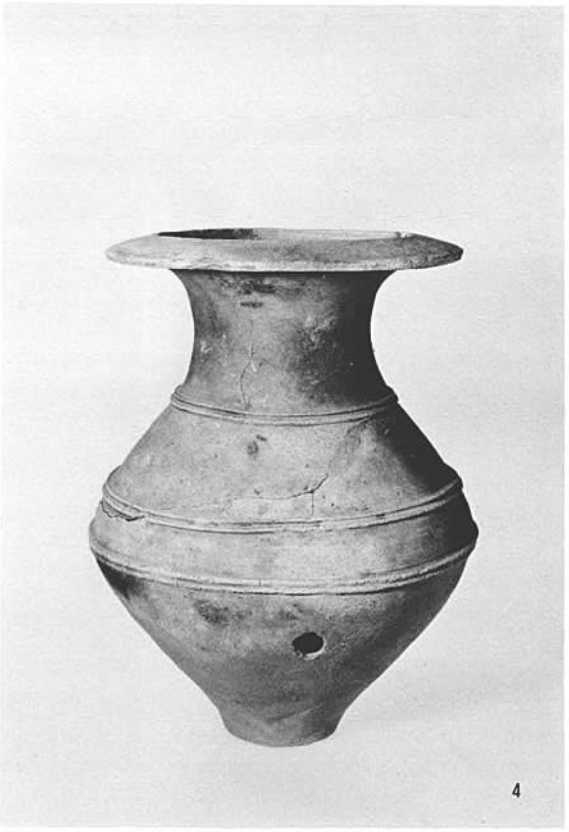
2

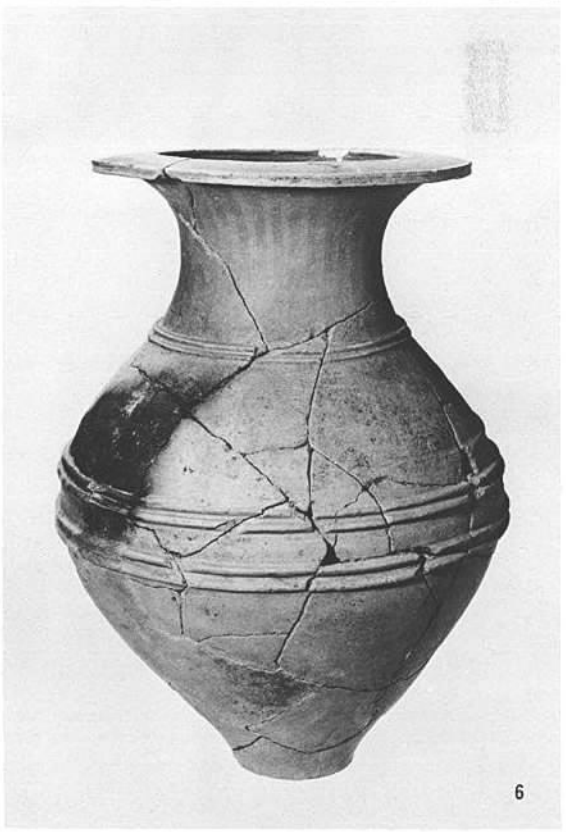
1　八反田II－3
　　住居跡内土器群(上層)

2　住居跡内土器群断面

3　住居跡

3





八反田II－3　住居跡出土土器〈壺ＩＡ類，同ＩＢ類〉

9

10

7

8

5

11

八反田II－3　住居跡出土土器〈壺Ⅰ類，壺ⅠB類〉

16

24

21

25

22

17

23

八反田II－3　住居跡出土土器〈壺II b 類，支脚〉

18

19

13

14

20

26

29

30

31

八反田Ⅱ－3　住居跡出土土器〈器台Ａ類，壺Ⅲ類〉

34

35

36

38

48

39

41

40

八反田II－3　住居跡出土土器〈壺II a 類，壺Ⅳ類〉

28

42

43

44

45

51

50

八反田II－3　住居跡出土土器〈蓋Ⅰ・ⅡA類，甕Ⅳ類他〉

59

60

53

66

55

62

63

65

57

八反田II－3　住居跡出土土器〈高杯A・C類，注口土器〉

66

72

67

68

69

70

73

74

八反田II－3　住居跡出土土器〈鉢・椀〉

84

81

86

89

90

87

91

八反田II－3　住居跡出土土器〈甕ＩＡａ類，同ＩＡｂ類〉

105

107

108

119

109

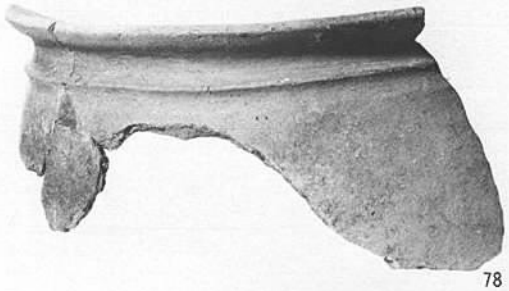
120

113

106

八反田II－3　住居跡出土土器〈甕II A類，甕III類〉

110



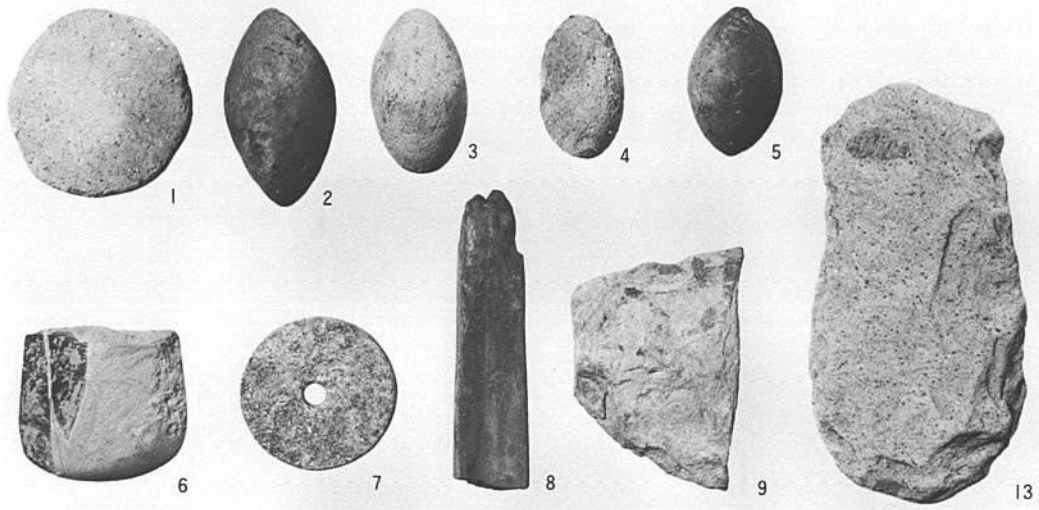
78

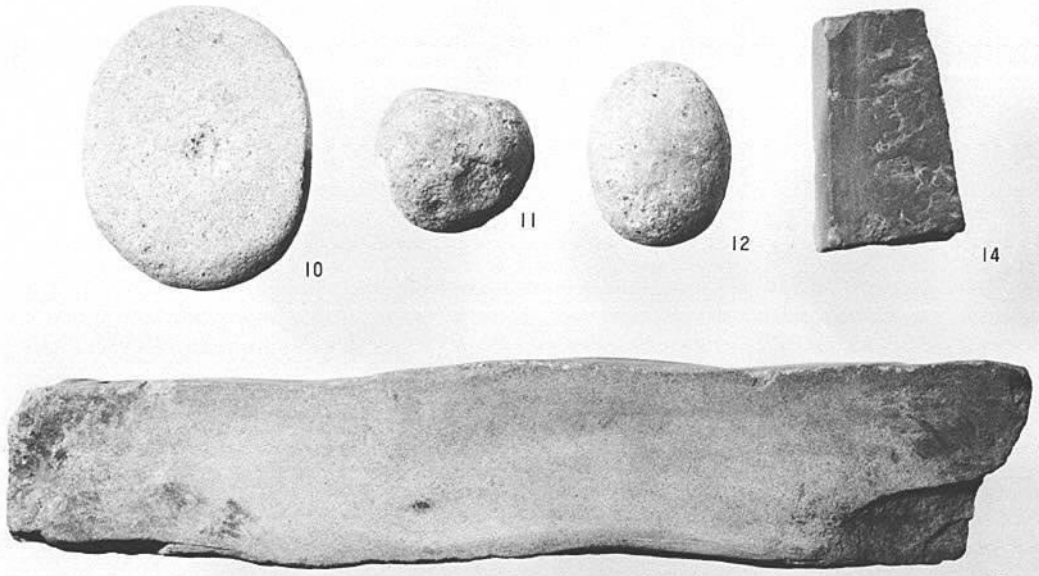
114

112

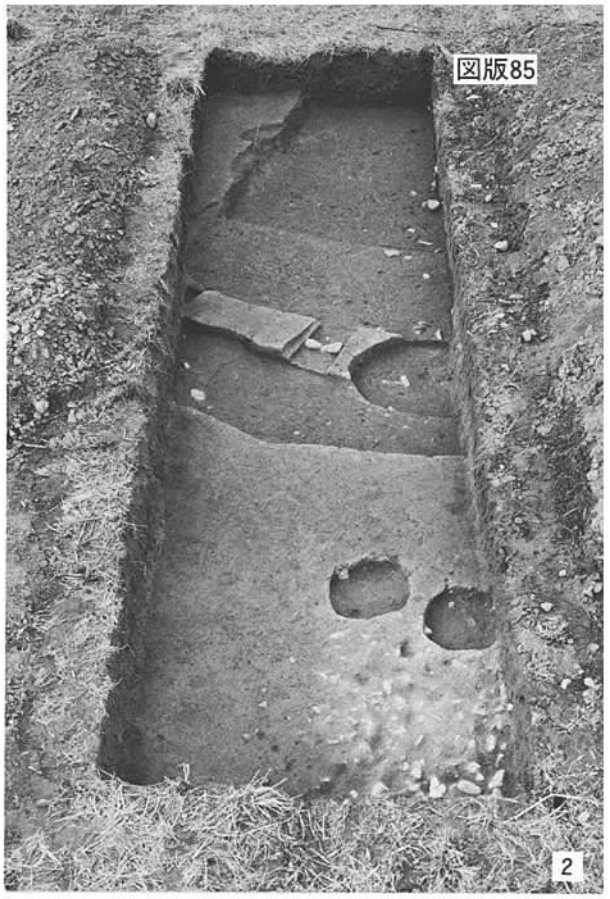
111

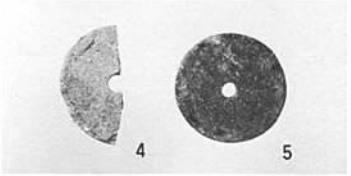
八反田II－3　住居跡出土土器〈甕II B類〉

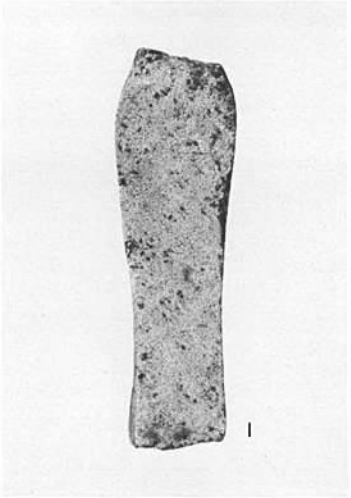




石　器・土　製　品







1　八反田II－6a トレンチ　　2　II－6e トレンチ　　3　II－6g トレンチ　　4　石器

図版86

1

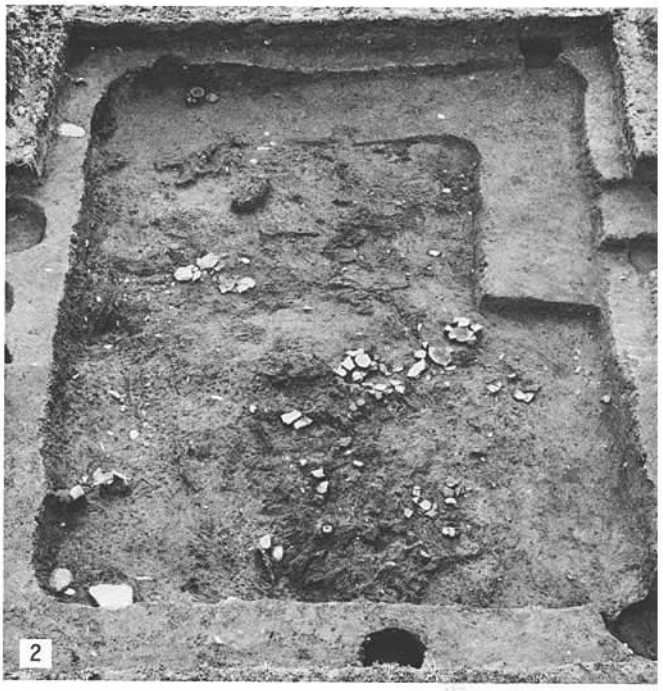
2

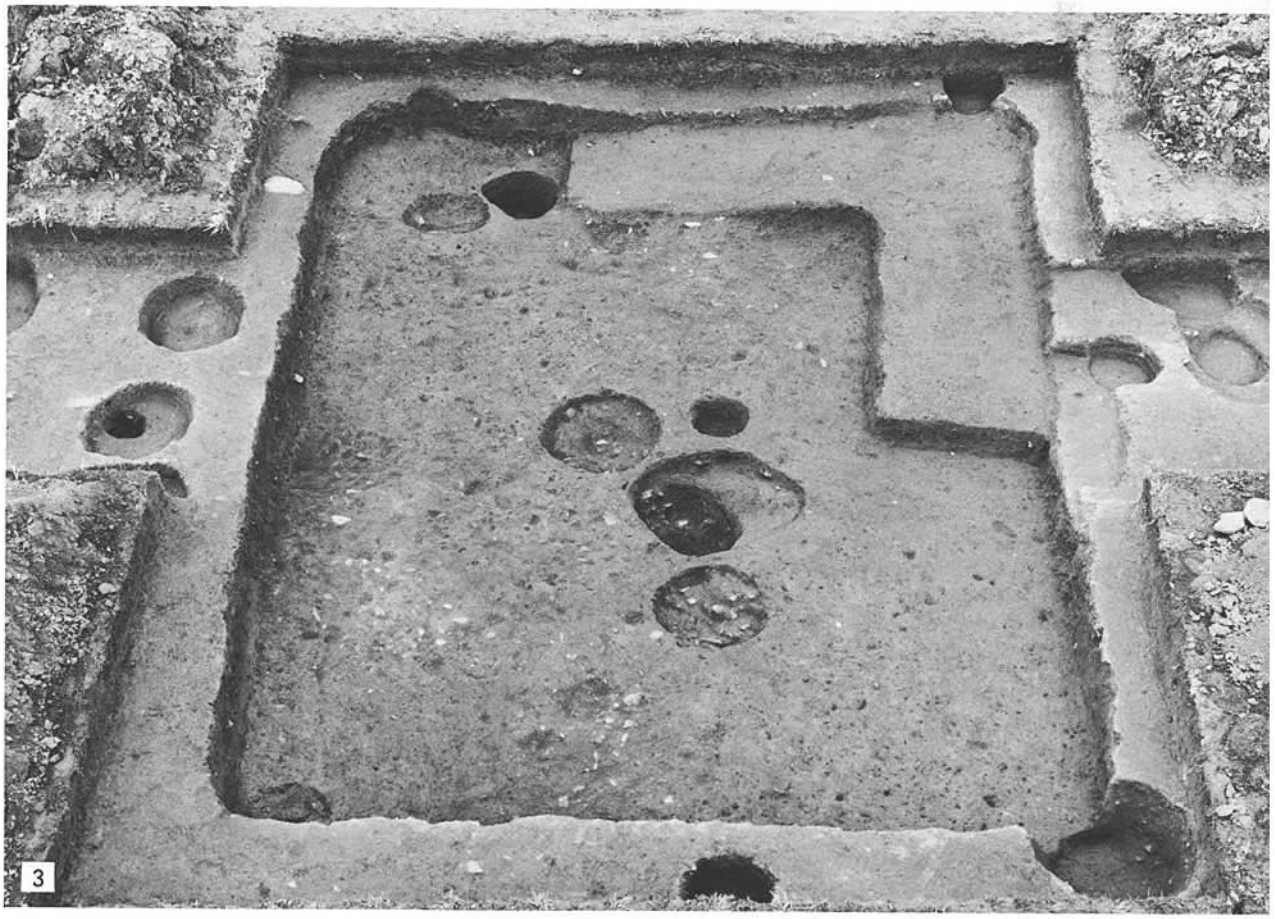
3

1　中川屋敷Ⅰ—7
　　東西トレンチ

2　南北トレンチ

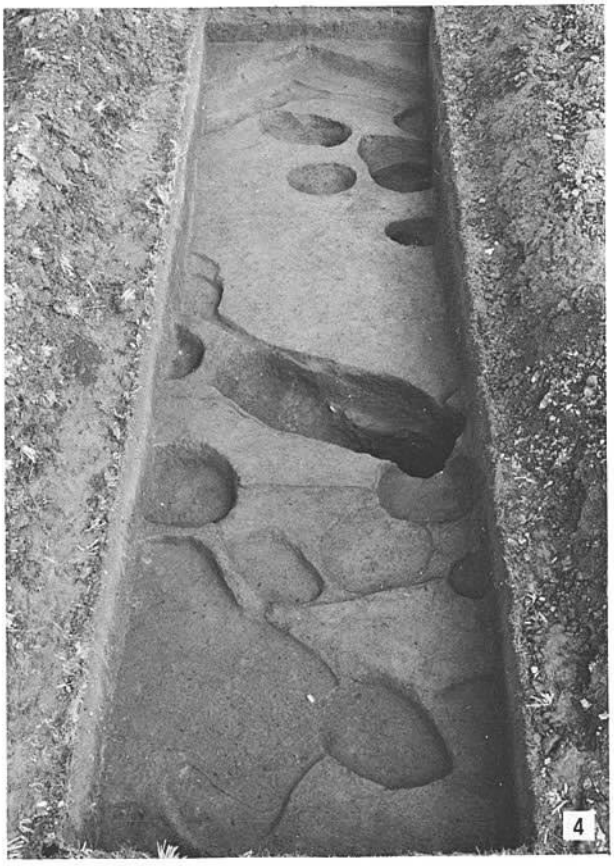
3　P6・P7a・P7b





1　中川屋敷Ⅰ－8a　トレンチ　　2　Ⅰ－8c　住居跡遺物出土状況

3　Ⅰ－8c　住居跡

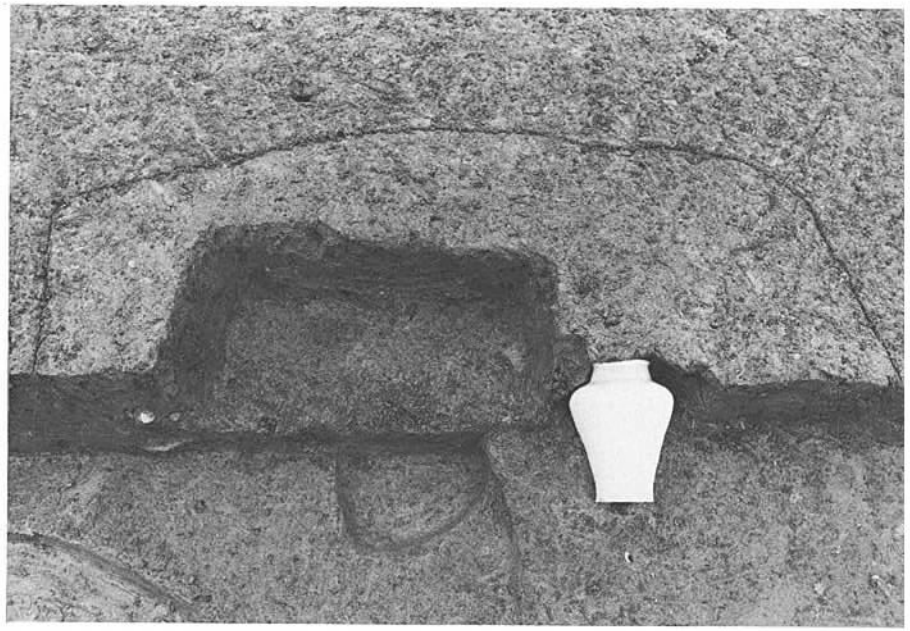


1　中川屋敷Ⅰ—9e　トレンチ　　2　Ⅰ—9g　トレンチ

3　Ⅰ—9j　トレンチ　　4　Ⅰ—9ℓ　トレンチ

1

2

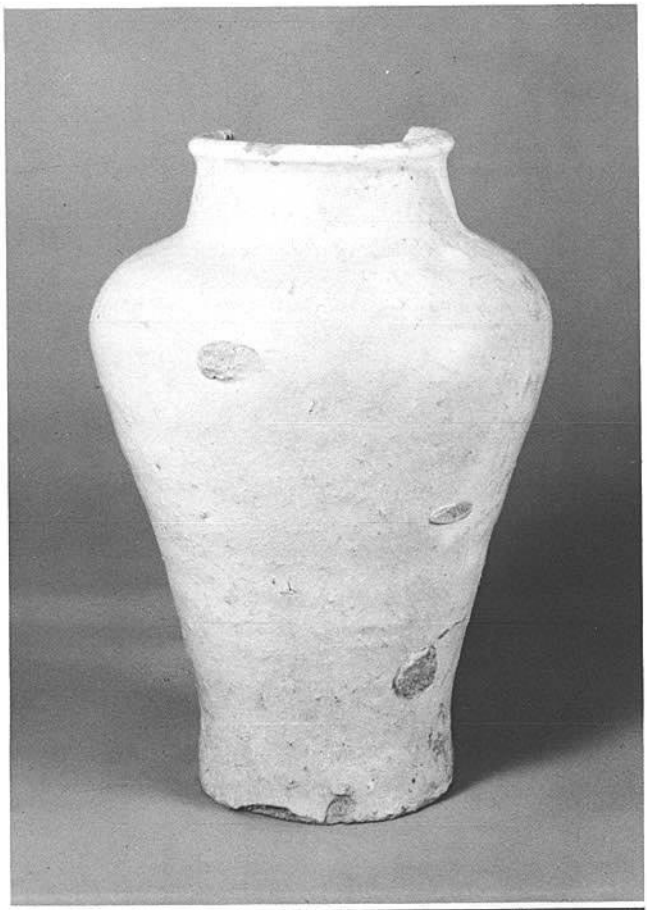


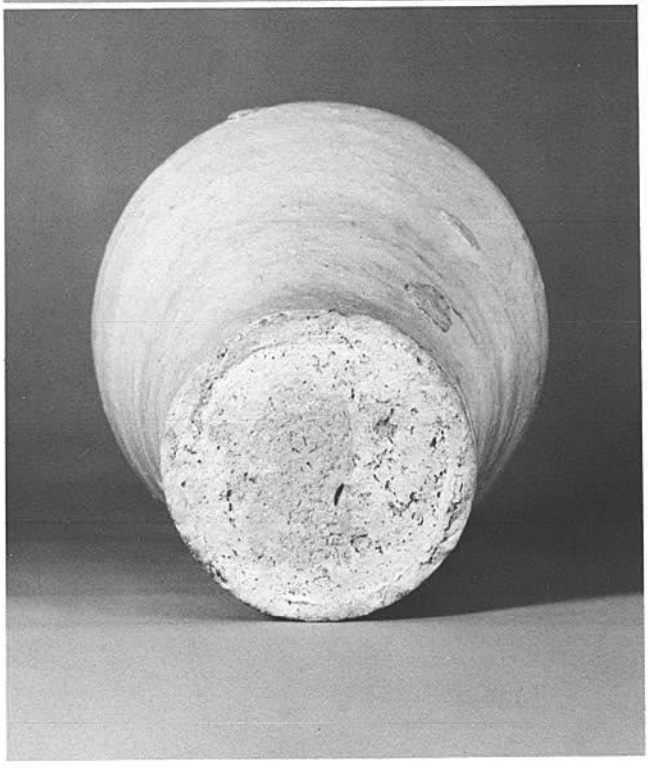
3

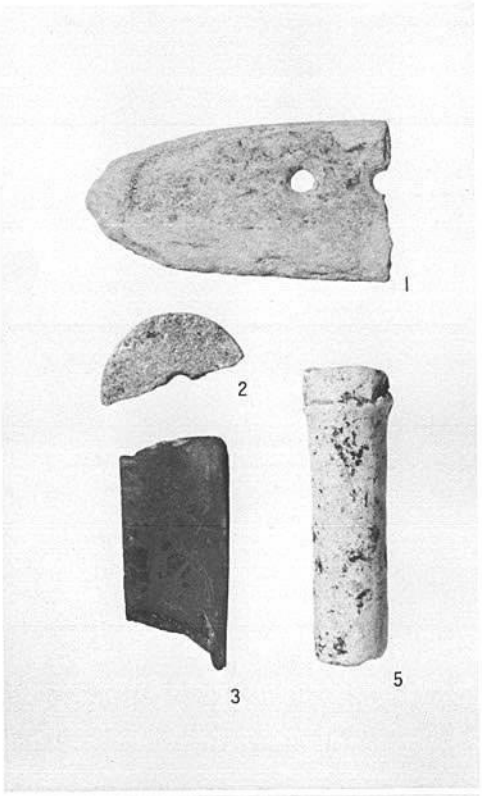
1　中川屋敷Ⅰ—11 q　トレンチ

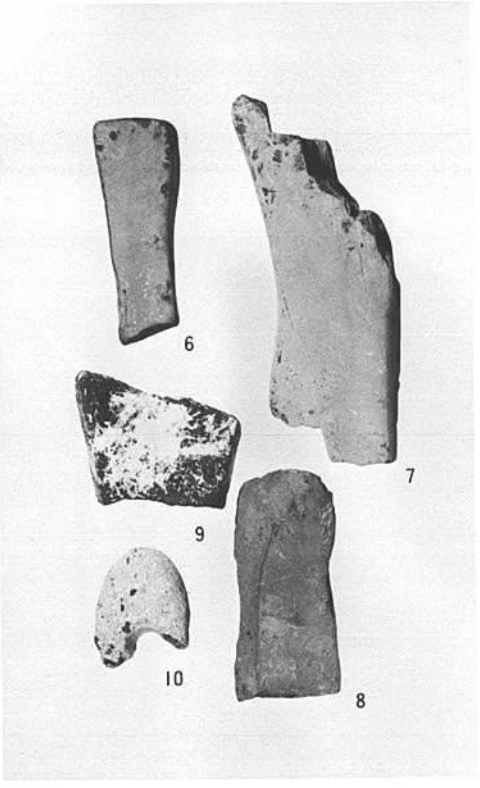
2　Ⅰ—11 o　トレンチ

3　Ⅰ—11 o　木棺墓（下は墓壙完掘後）





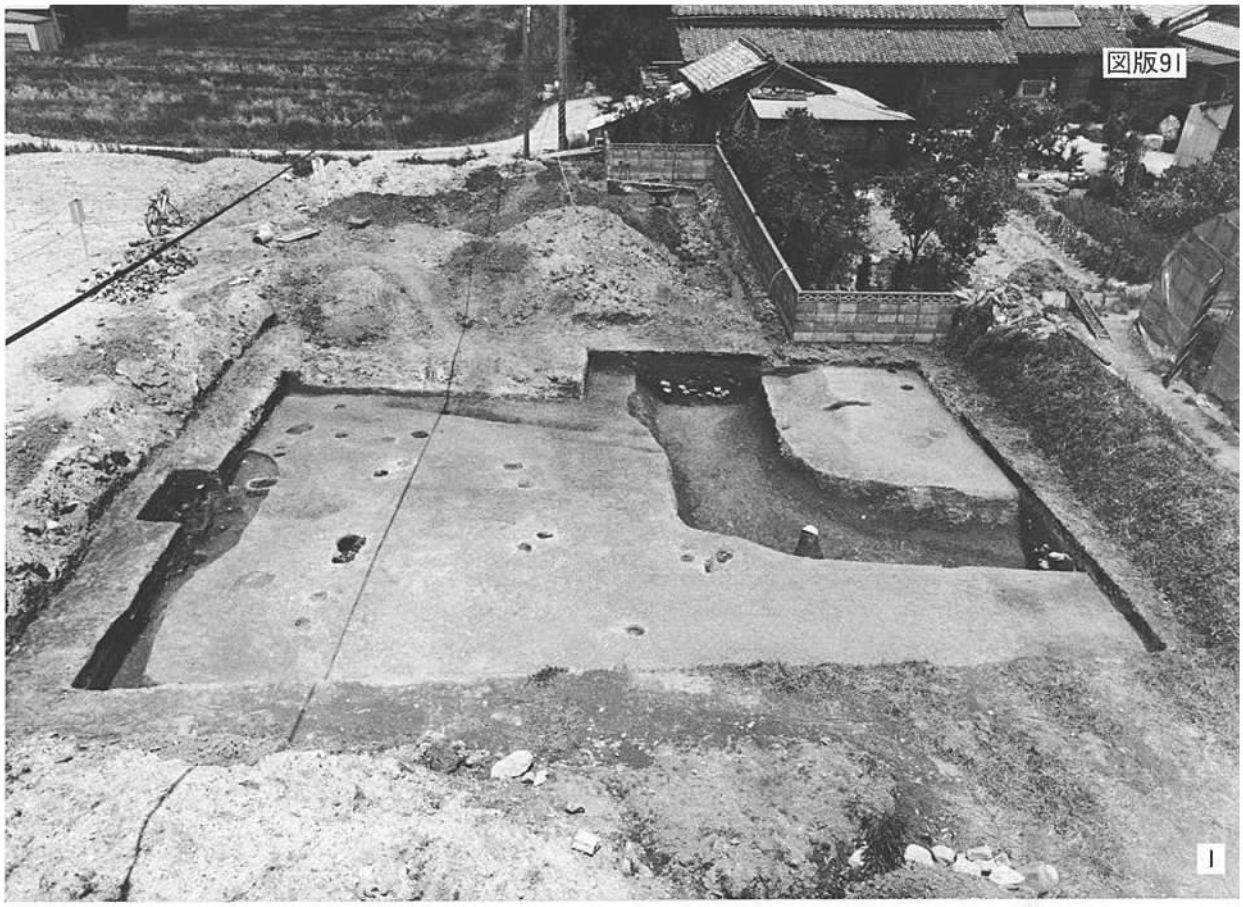


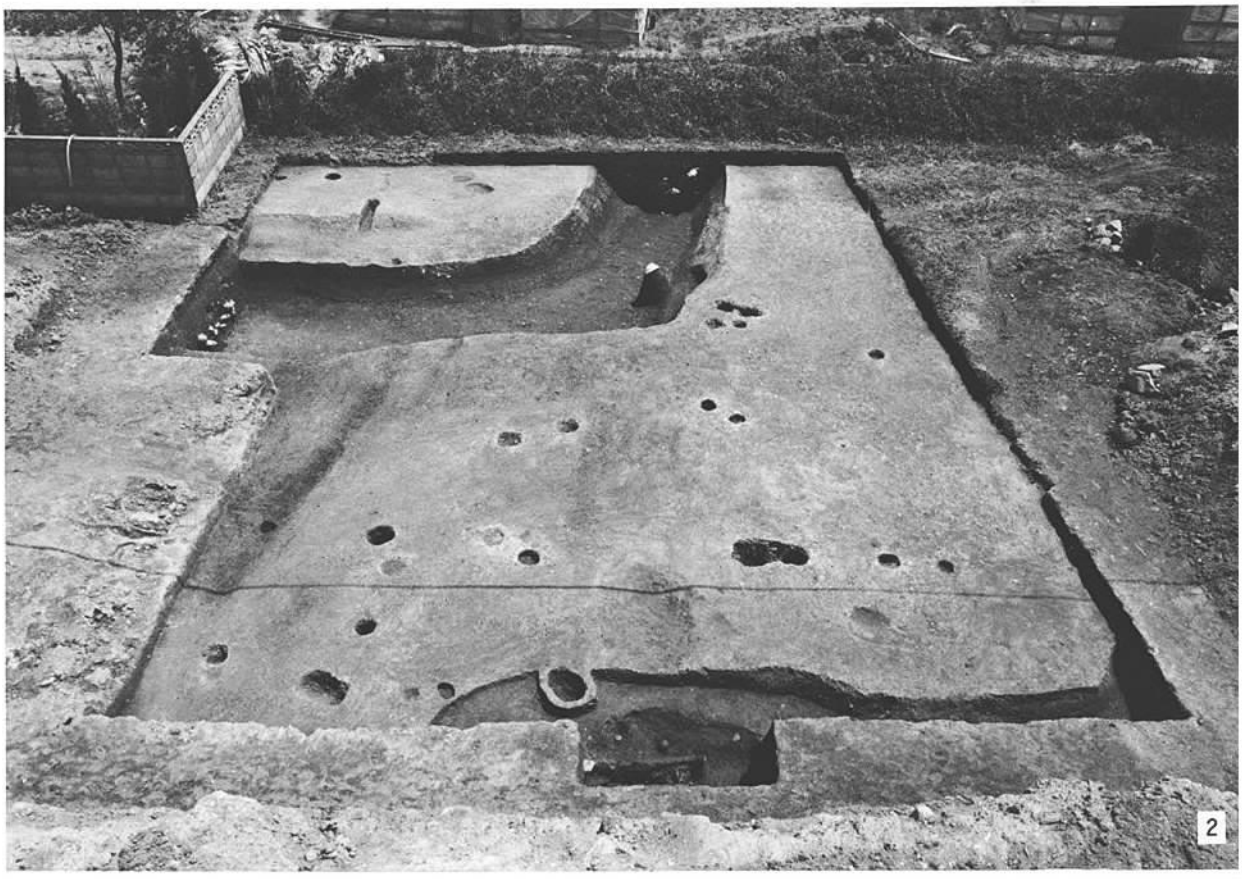


2

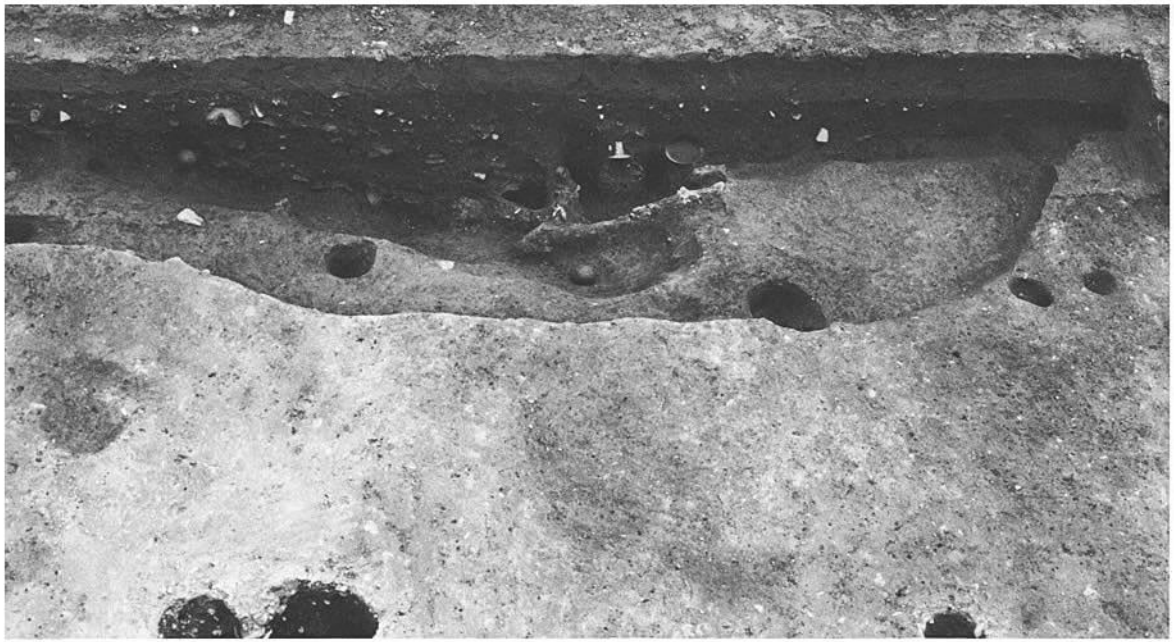
1

1　中川屋敷Ⅰ—11 *o*　木棺墓出土白磁壺　　2　中川屋敷出土石器





1　下西II—10　全景（南から）　　2　II—10　全景（西から）



1

3

2

4

1　住居跡状遺構上層　　2　遺物出土状況　　3　鉄器出土状況　　4　下層完掘後）

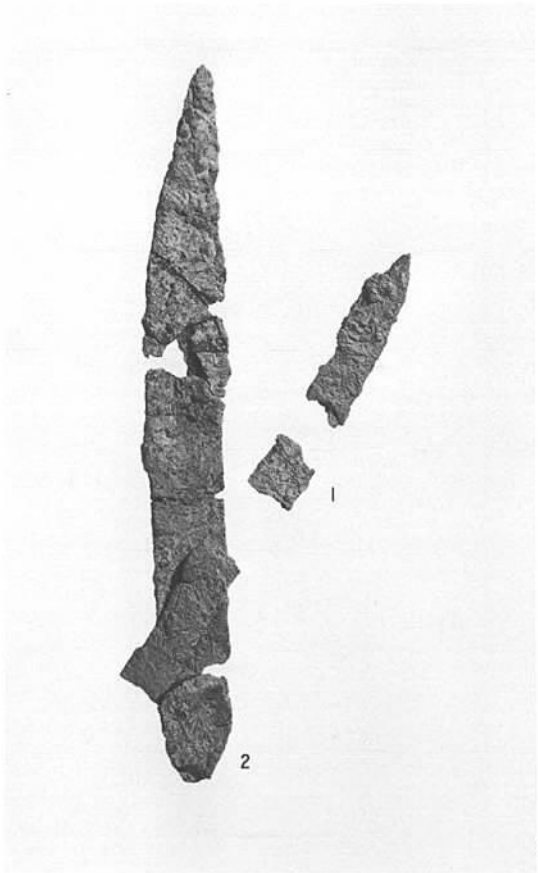
1　周濠（西から）　　2　周濠（南から）　　3　周濠土層断面（右から東壁，北壁，北トレンチ南壁）

1

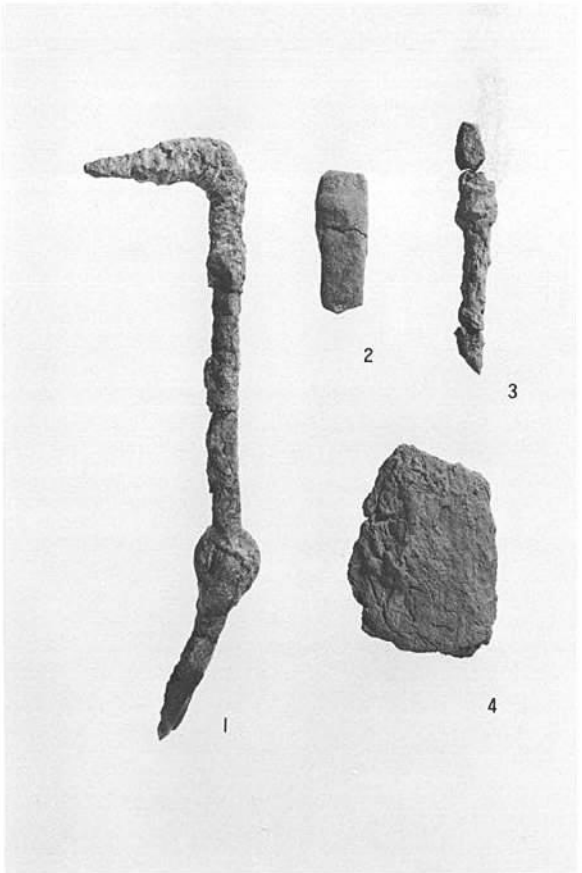
2

1　下西II—10　住居跡状遺構下層出土土器　　2　住居跡状遺構上層出土土器

1



2



3

1　下西II—10　出土石器①　　2　住居跡状遺構上層出土鉄器

3　周濠出土鉄器

19

21

23

9

10

11

1

12

2

13

3

15

4

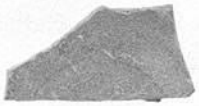
5

6

13

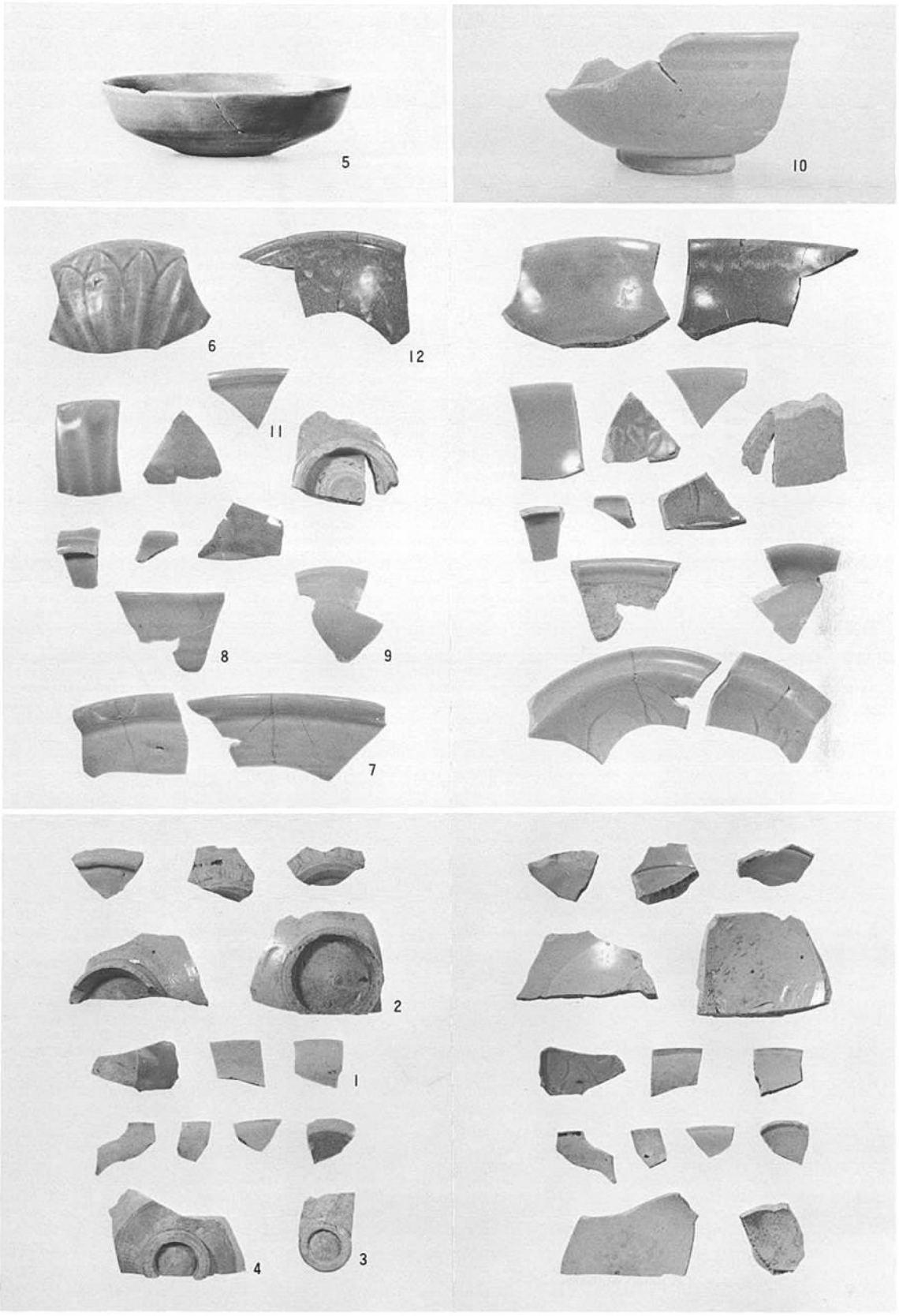
14

7

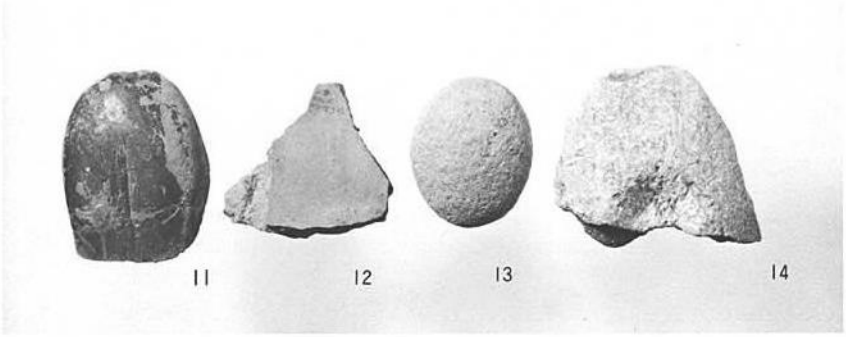


8

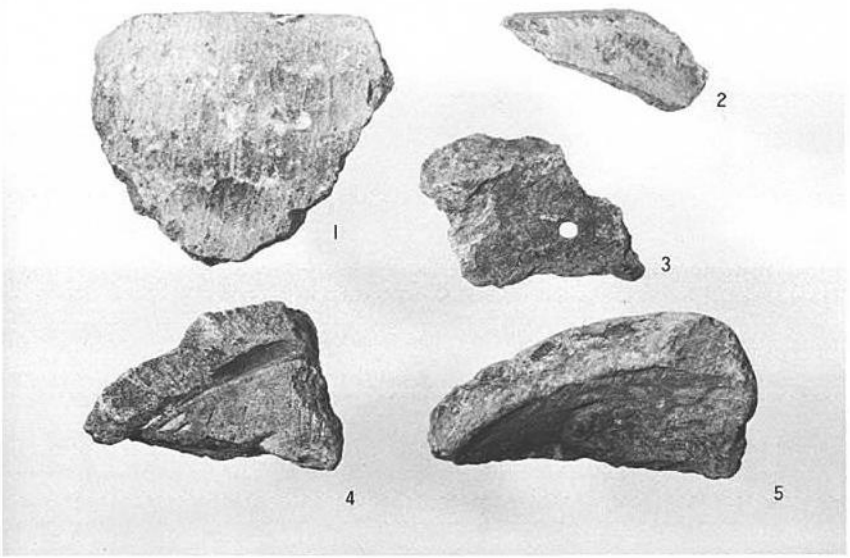
下西II—10　周濠出土土師器・磁器



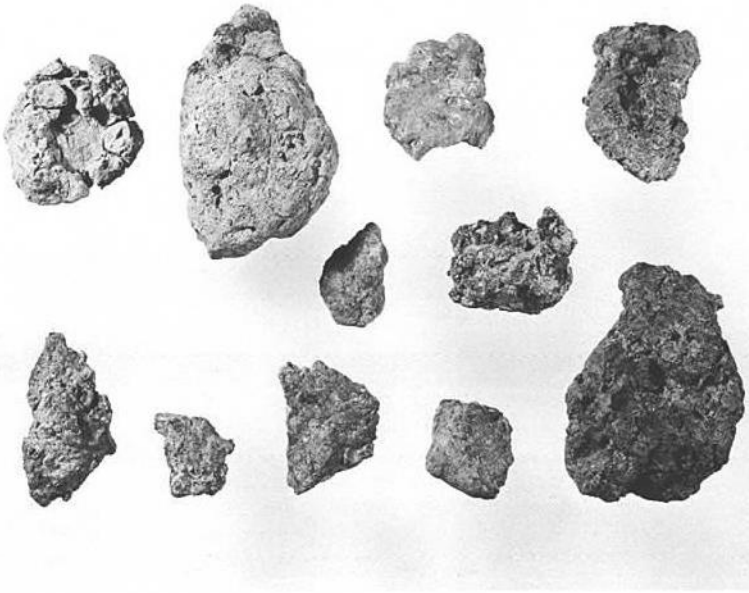
下西II—10　周濠出土磁器

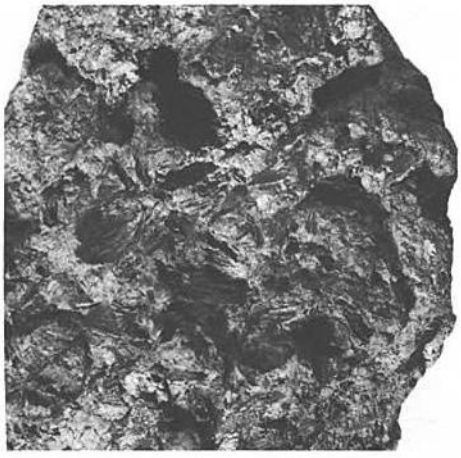


1　下西II—10　出土石器②



2　周濠出土石鍋



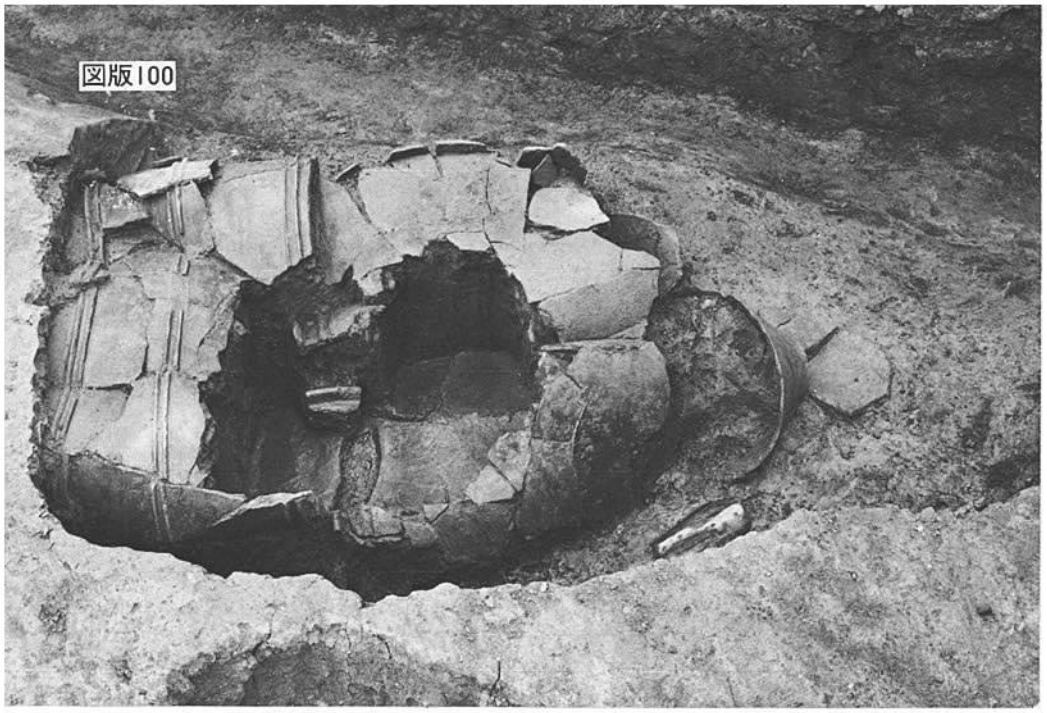


3　周濠出土鉄滓
（右下隅の細部拡大）

1　屋敷Ⅰ—10　全景（東から）

2　屋敷Ⅰ—10　全景（南から）

3　1号土壙（西から）



1

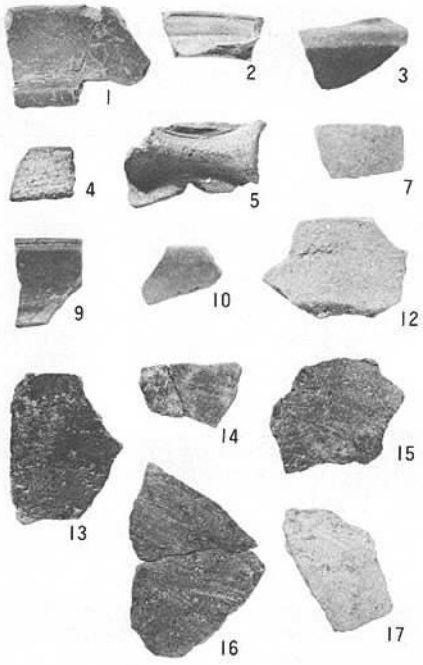
2

3

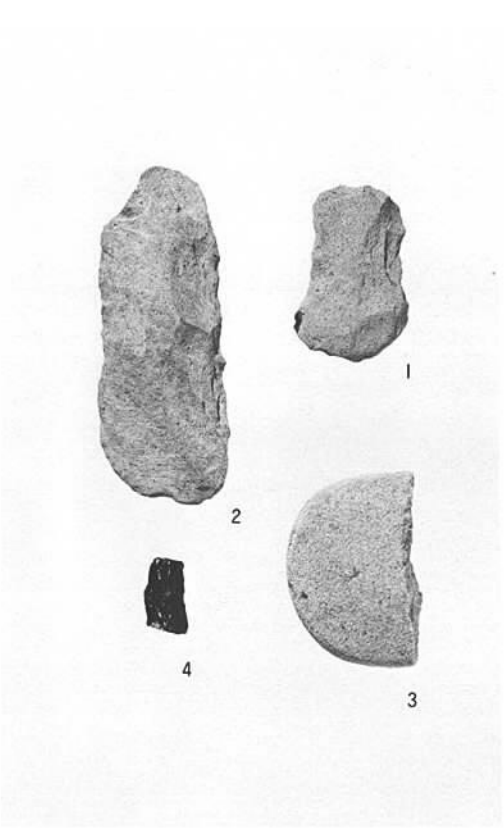
1　甕棺墓（東から）

2　甕棺墓（西から）

3　大溝状遺構（南から）



1



3

2

1　屋敷Ⅰ—10 出土縄文土器　　2　石器　　3　甕棺

福岡県文化財調査報告書

第６３集

昭和57年３月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７

印刷　正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂１丁目２－21